高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群

第3分冊

1986

高知県教育委員会

田 村 遺 跡 群

第３分冊

本文Ⅲ

例　言

1.　本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財－田村遺跡群－の発掘調査報告書15分冊の内、第３分冊である。

2.　調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年度に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、７年間にわたった。

3.　遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構、遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡群と呼ぶこととした。また、各調査区はLoc. 1～48と呼称した。

4.　本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。

5.　発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。

6.　図中の方位はすべて磁北であり、標高は海抜高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵列を1/80、その他の遺構、断面図及びセクション図を1/60とした。建物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を1/4、古墳時代以降を1/3、石器、金属器を1/2、木器を1/3とした。写真図版は約1/2～1/3であるが縮尺不同である。

7.　遺構の略号は、竪穴住居址－ＳＴ、掘立柱建物址－ＳＢ、土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、井戸－ＳＥ、柵列－ＳＡ、水溜り状遺構－ＳＰ、性格不明遺構－ＳＸ、ピット－Ｐ、自然流路－ＳＲとした。

8.　調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。

9.　出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

本 文 目 次

第Ⅴ章　弥生時代　〈前期２〉

1.　Loc.27 …… 1

2.　Loc.28 …… 7

3.　Loc.35A …… 19

4.　Loc.44 …… 93

5.　Loc.10B …… 299

6.　Loc.23・37 …… 433

7.　Loc.39 …… 447

8.　弥生時代前期小結 …… 455

9.　自然科学分析 …… 479

(1)　プラントオパール分析 …… 481

(2)　花粉分析 …… 493

(3)　^{14}C 年代測定 …… 517

(4)　リン分析 …… 518

挿　図　目　次

1.　Loc.27

第１図　調査区設定図

第２図　調査区セクション、ＳＫ1

第３図　ＳＫ１出土遺物

2.　Loc.28

第４図　調査区設定図

第５図　調査区セクション

第６図　ＳＢ1、ＳＫ１・２

第７図　第Ⅳ層出土遺物

第８図　第Ⅳ層、ＳＫ１・２、ＳＤ２出土遺物

3.　Loc.35Ａ

第９図　調査区設定図

第10図　Ａトレンチセクション

第11図　Ｂトレンチセクション

第12図　ＳＫ１～５

第13図　ＳＲ１・２

第14図　ＳＫ１～３出土遺物

第15図　ＳＫ３～５、ＳＲ１出土遺物

第16図　ＳＲ１出土遺物

第17図　〃

第18図　〃

第19図　ＳＲ１、Ｐ１出土遺物

第20図　ＳＲ２出土遺物

第21図　〃

第22図　〃

第23図　〃

第24図　〃

第25図　〃

第26図　〃

第27図　〃

第28図　〃

第29図　〃

第30図　ＳＲ２出土遺物

第31図　ＳＫ２～４、ＳＲ１・２出土遺物

第32図　ＳＲ１・２出土遺物

第33図　〃

第34図　ＳＫ３出土遺物

第35図　ＳＫ３、ＳＲ１出土遺物

第36図　ＳＲ１出土遺物

第37図　〃

第38図　〃

第39図　〃

第40図　ＳＲ１・２、ＳＫ１・３・４出土遺物

第41図　ＳＲ１・２出土遺物

第42図　ＳＫ２、ＳＲ１・２出土遺物

第43図　ＳＲ１、ＳＫ３出土遺物

4.　Loc.44

第44図　調査区設定図

第45図　ＳＤ１セクション

第46図　ＳＤ１・２セクション

第47図　ＳＤ１出土遺物

第48図　〃

第49図　〃

第50図　〃

第51図　〃

第52図　〃

第53図　〃

第54図　ＳＤ１・２出土遺物

第55図　ＳＤ１出土遺物

第56図　〃

第57図　〃

第58図　〃

第59図　〃

第60図　ＳＤ１出土遺物
第61図　〃
第62図　〃
第63図　〃
第64図　〃
第65図　〃
第66図　〃
第67図　ＳＫ１～６
第68図　ＳＫ７～12
第69図　ＳＫ13～18
第70図　ＳＫ19、ＳＤ２～４、ＳＸ２
第71図　ＳＤ１
第72図　Ｃ区北端Ｉ層土器出土状態
第73図　ＳＫ１・２・７・12・16出土遺物
第74図　ＳＫ18・19出土遺物
第75図　ＳＫ19出土遺物
第76図　ＳＫ19、ＳＤ１出土遺物
第77図　ＳＤ１出土遺物
第78図　〃
第79図　〃
第80図　〃
第81図　ＳＸ１出土遺物
第82図　〃
第83図　ＳＤ２、ＳＸ１・２出土遺物
第84図　ＳＤ１出土遺物
朝85図　〃
第86図　〃
第87図　ＳＤ１出土遺物
第88図　ＳＤ３、ＳＸ１出土遺物
第89図　ＳＤ１・４、ＳＸ１出土遺物
第90図　ＳＤ１・４出土遺物
第91図　ＳＤ１、ＳＸ１出土遺物
第92図　ＳＫ１、ＳＤ１、Ｐ２出土遺物
第93図　ＳＤ１出土遺物
第94図　ＳＤ１、ＳＸ１出土遺物
第95図　ＳＤ１・３、ＳＸ２出土遺物
第96図　ＳＫ14、ＳＤ１、ＳＸ２出土遺物
出土遺物
第97図　ＳＫ１・12・18、ＳＤ１出土遺物
第98図　ＳＫ19、ＳＤ１・３、ＳＸ１
出土遺物
第99図　ＳＫ18、ＳＤ１出土遺物
第100図　ＳＤ１出土遺物
第101図　ＳＤ１、ＳＸ１・２出土遺物
第102図　ＳＫ１、ＳＤ１、Ｐ１出土遺物
第103図　ＳＴ１、ＳＫ１～４
第104図　ＳＫ５～９
第105図　ＳＫ10～16
第106図　ＳＫ17～22、ＳＤ１
第107図　ＳＴ１出土遺物
第108図　ＳＫ１・２・４出土遺物
第109図　ＳＫ５～８出土遺物
第110図　ＳＫ８出土遺物
第111図　〃
第112図　〃
第113図　〃
第114図　〃
第115図　ＳＫ８・９・12・13出土遺物
第116図　ＳＫ13～15出土遺物
第117図　ＳＫ16出土遺物
第118図　ＳＫ19・20出土遺物
第119図　ＳＫ20出土遺物
第120図　〃
第121図　ＳＫ20、ＳＤ１出土遺物
第122図　ＳＤ１、Ｐ37出土遺物
第123図　田村川出土遺物
第124図　〃
第125図　ＳＫ８、田村川出土遺物

第126図　ＳＫ８、ＳＤ１、田村川出土遺物
第127図　〃
第128図　ＳＫ８・13、ＳＤ１、田村川出土遺物
第129図　ＳＴ１、ＳＫ８、田村川出土遺物
第130図　ＳＫ８、田村川出土遺物
第131図　ＳＫ７、田村川出土遺物
第132図　田村川出土遺物
第133図　ＳＴ１、ＳＫ８、田村川出土遺物
第134図　ＳＫ８、田村川出土遺物
第135図　ＳＫ16、田村川出土遺物
第136図　ＳＴ１、ＳＫ８・13、田村川出土遺物
第137図　ＳＫ８出土遺物
第138図　〃
第139図　ＳＫ１～４
第140図　ＳＫ５～８
第141図　ＳＫ４・６遺物出土状態
第142図　ＳＫ３－Ｐ１～３、ＳＤ１
第143図　ＳＫ４～６出土遺物
第144図　ＳＫ６・７出土遺物
第145図　ＳＤ１出土遺物
第146図　〃
第147図　〃
第148図　〃
第149図　〃
第150図　〃
第151図　ＳＫ３、ＳＤ１出土遺物
第152図　ＳＤ１、田村川出土遺物
第153図　田村川出土遺物
第154図　〃
第155図　ＳＤ１、田村川出土遺物
第156図　ＳＫ３、田村川出土遺物
第157図　〃
第158図　ＳＫ６、ＳＤ１出土遺物
第159図　ＳＤ１、田村川出土遺物
第160図　ＳＤ１、田村川出土遺物
第161図　ＳＤ１出土遺物
第162図　ＳＫ３、ＳＤ１出土遺物
第163図　ＳＤ１出土遺物
第164図　〃
第165図　ＳＫ５、ＳＤ１出土遺物
5.　Loc.10Ｂ
第166図　調査区設定図
第167図　調査区セクション
第168図　ＳＴ２・３
第169図　ＳＴ４
第170図　ＳＴ５・６
第171図　ＳＢ１・２
第172図　ＳＢ３
第173図　ＳＫ１・２・７～９・13
第174図　ＳＫ14～16・19～21
第175図　ＳＫ22～26・28
第176図　ＳＫ27・31～33・35
第177図　ＳＫ36～38・46
第178図　ＳＫ39～41
第179図　ＳＫ42・43、ＳＤ５～７
第180図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物
第181図　〃
第182図　〃
第183図　〃
第184図　〃
第185図　〃
第186図　第Ⅳ層出土遺物
第187図　第Ⅰ・Ⅳ層出土遺物
第188図　第Ⅳ層出土遺物
第189図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物
第190図　第Ⅰ・Ⅳ層出土遺物
第191図　第Ⅳ・Ⅴ.層出土遺物
第192図　ＳＴ２・４出土遺物

第193図　ＳＴ４出土遺物
第194図　〃
第195図　〃
第196図　〃
第197図　〃
第198図　〃
第199図　ＳＴ４～６出土遺物
第200図　ＳＴ３・６、ＳＫ２出土遺物
第201図　ＳＫ４・７・12・13・26出土遺物
第202図　ＳＫ26出土遺物
第203図　ＳＫ26・32出土遺物
第204図　ＳＫ38・39出土遺物
第205図　ＳＫ６・11・40～43出土遺物
第206図　ＳＫ21・27・30出土遺物
第207図　ＳＤ５出土遺物
第208図　ＳＤ５・６出土遺物
第209図　ＳＤ７出土遺物
第210図　〃
第211図　〃
第212図　〃
第213図　〃
第214図　〃
第215図　ＳＤ７、Ｐ１～10出土遺物
第216図　ＳＴ４・６、ＳＫ９・13、ＳＤ７出土遺物
第217図　ＳＴ４、ＳＫ39、ＳＤ７出土遺物
第218図　ＳＫ13・19出土遺物
第219図　ＳＫ43、ＳＤ７出土遺物
第220図　ＳＴ２・４・６出土遺物
第221図　ＳＴ６出土遺物
第222図　〃
第223図　〃
第224図　〃
第225図　ＳＫ39、ＳＤ５、Ｐ11出土遺物
第226図　ＳＫ８・26・39出土遺物
第227図　ＳＴ４・６、ＳＫ13、ＳＤ７出土遺物
第228図　ＳＴ３・４・６、ＳＫ32・39、ＳＤ７出土遺物
第229図　ＳＴ３・４・６、ＳＫ26・41、ＳＤ７出土遺物
6.　Loc.23・37
第230図　調査区設定図
第231図　調査区セクション
第232図　Loc.23・37・39（水田址）出土遺物
7.　Loc.39
第233図　調査区設定図
第234図　調査区セクション
9.　自然科学分析
第235図　Loc.23における土層柱状図
第236図　Loc.37における土層柱状図
第237図　Loc.23の分析結果
第238図　Loc.37の分析結果
第239図　古代水田址分布域の分析的推定法
第240図　Loc.39における試料採取地点
第241図　地点別分析結果（１）
第242図　〃　（２）
第243図　〃　（３）
第244図　〃　（４）
第245図　Loc.39における弥生水田の推定分布域
第246図　田村遺跡の位置
第247図　Loc.6試料採取地点における堆積物層序、試料採取点、および^{14}C年代値
第248図　主な木本花粉および草本花粉ダイアグラム
第249図　主な草本花粉およびシダ胞子・コケ胞子ダイアグラム

第250図　マツ属、スギ属、エノキ属、暖温帯林要素、およびモミ属＋ツガ属の変遷
第251図　各試料における木本花粉、草本花粉およびシダ胞子の出現状態
第252図　イネ花粉比率図
第253図　採取位置略図
第254図　分析値分布図

表　目　次

1.　Loc.27
第１表　土坑計測表
第２表　遺構出土遺物観察表
2.　Loc.28
第３表　掘立柱建物址計測表
第４表　土坑計測表
第５表　包含層出土土器観察表
第６表　包含層出土石器観察表
第７表　遺構出土土器観察表
3.　Loc.35A
第８表　土坑計測表
第９表　遺構出土土器観察表
第10表　遺構出土石器観察表
4.　Loc.44
第11表　D区竪穴住居址計測表
第12表　C区土坑計測表
第13表　D区土坑計測表
第14表　E区土坑計測表
第15表　A区遺構出土土器観察表
第16表　A区遺構出土石器観察表
第17表　C区遺構出土土器観察表
第18表　C区遺構出土石器観察表
第19表　D区遺構出土土器観察表
第20表　D区遺構出土石器観察表
第21表　E区遺構出土土器観察表
第22表　E区遺構出土石器観察表
5.　Loc.10B
第23表　竪穴住居址計測表
第24表　掘立柱建物址計測表
第25表　土坑計測表
第26表　包含層出土土器観察表
第27表　包含層出土石器観察表
第28表　遺構出土土器観察表
第29表　遺構出土石器観察表
6.　Loc.23・37
第30表　Ⅰ期水田址面積一覧表
第31表　遺構出土土器観察表
第32表　遺構出土石器観察表
7.　Loc.39
第33表　水田址面積一覧表
8.　弥生時代前期小詰
第34表　甕E類細分表
第35表　甕E類口唇部形態表
第36表　土器器種別構成比表
第37表　壺口頸部形態分類表
第38表　壺A類分類表
第39表　壺B類分類表
第40表　壺C類分類表
第41表　壺E類分類表
第42表　甕口縁部形態分類表
第43表　甕A類分類表
第44表　甕B類分類表
第45表　時期別土器出土数表
9.　自然科学分析
第46表　分析結果
第47表　統計処理数値表

写　真　図　版

Photo 1　花粉写真　Photo 2　花粉写真　Photo 3　花粉写真

1. Loc.27

Loc.27

1. 位置と調査経過

Loc.27は、空港拡張範囲の南部に位置し、田村川とその支流にはさまれている。字名は中州と呼ばれている。Loc.27の西にはLoc.28、東にはLoc.25が隣接している。調査は、4m幅のトレンチにより試掘を行ったが、遺構、遺物はあまり多く検出されず、拡張し、全面発掘をした範囲は狭い。調査期間は、昭和56年5月と11月に行われ、約1カ月間であり、調査面積は325㎡である。

2. 調査概要

調査区の西半部は、床土を除くと黄褐色粘質土の地山層がみられるが、東半部は、旧地形がLoc.25に向って下降している。この傾斜は、Loc.25でみられた、西半部の大きな窪地へと続くものであり、東半部の弥生時代前期の遺構検出面で再び上昇しているものと考えられる。したがって、Loc.27も南北に長い自然堤防上に立地していると推定される。

検出された遺構は、弥生前期IIの土坑と時期不明のピット数個である。西隣するLoc.28においても、同時期の掘立柱建物址及び土坑が検出されているので、Loc.27の土坑は、Loc.28の遺構と共に西方へ広がるところの前期IIの集落の一部と考えられる。

3. 層序と出土遺物

Loc.27の層序は、第I～IV層からなるが、遺物包含層はほとんど形成されず、地表下35cmの面が遺構検出面となっている。基本層序は次のとおりである。

第I層　耕作土

第II層　床　土

第III層　黒褐色粘質土層

第IV層　黄褐色シルト～粘質土層

第III層が弥生時代前期の遺物包含層であるが、出土遺物はまったくみられなかった。

4. 遺構と遺物

土坑

SK1

SK1は、南部約⅓が調査区外に出ており、長径推定2.40m、短径0.88m、深さ0.68mを測る。長軸はN－38°－Eを示す。壁は斜めに立ち上り、底は一部が段状をなす。埋土は、第I層黄褐色粘質土、第II層黒色粘質土の2層からなる。出土遺物は、図示した6点（1～6）以外にも

第１図　調査区設定図

約40点の土器片がみられる。すべて前期IIのものであり、貯蔵穴と考えられる。

5. まとめ

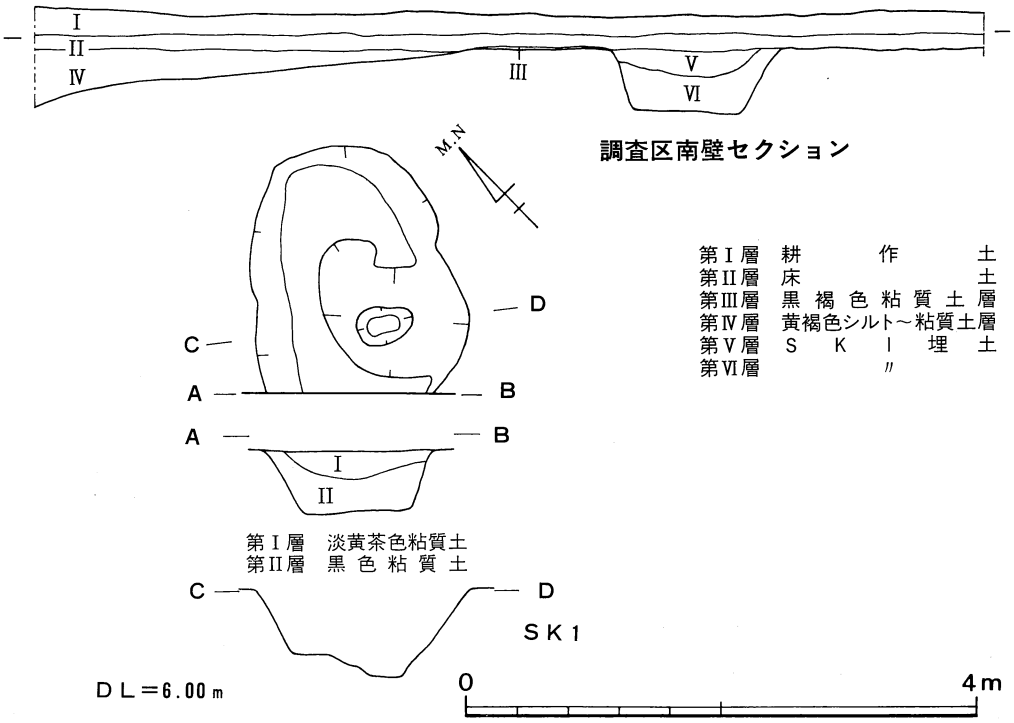
Loc.27では、弥生時代前期の土坑と、時期不明であるが近世と考えられるピットを検出した。近世と考えられるピットからの出土遺物はみられなかった。ＳＫ１は、前期IIの貯蔵穴と推定され、Loc.28の同時期の遺構と関連するものとして考えなければならない。すなわち、後述するように、Loc.28と共に前期II段階の集落の一部を構成するものと考えられる。

第１表　土坑計測表

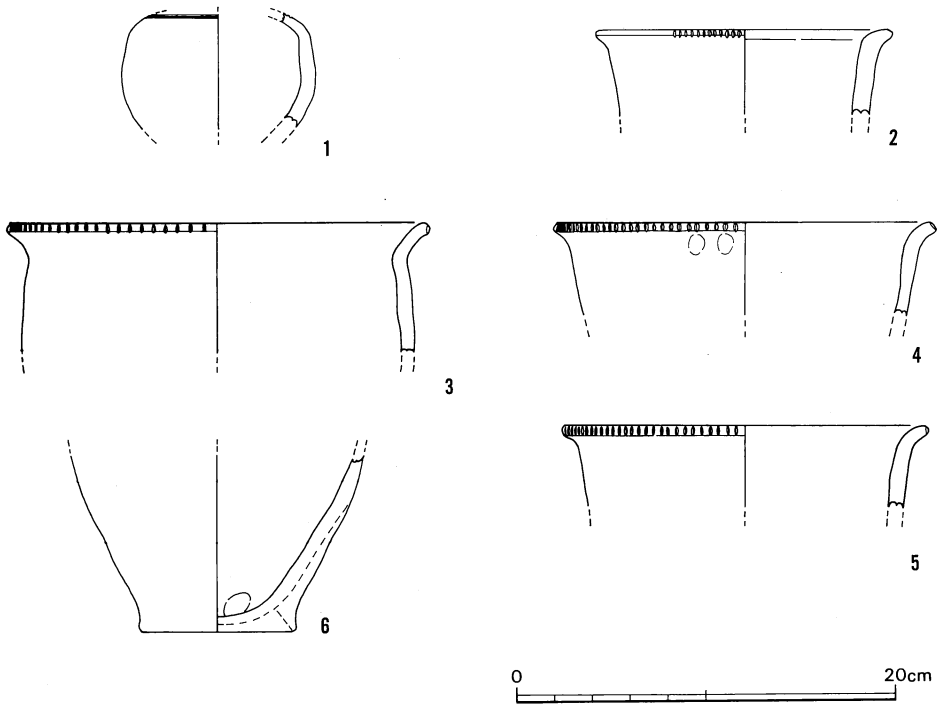
挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第２図	ＳＫ１	不定形	2.40	0.88	0.68	N－38°－E	逆台形	

第２表　遺構出土遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	ＳＫ１	壺	— (6.2) 10.4 —	胴部中位は直線的に立ち上がり、上胴部は強く内側に屈曲し、外面に２条のヘラ描き沈線を配す。	外面はヘラ磨き。	
2	〃	甕	13.6 (4.6) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、口唇部に刻目を施す。胴部は直線的に立ち上がる。	土器の大きさに比して器壁が厚い。	
3	〃	〃	22.4 (7.0) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。刻目はヘラ状工具による。	外面は全面ススけている。
4	〃	〃	20.0 (5.0) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。胴部は直線的に立ち上がる。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。	
5	〃	〃	19.4 (4.2) — —	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。胴部は直線的に立ち上がる。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。刻目はヘラ状工具による。	
6	〃	〃	— (9.2) — 8.0	しっかりとした平底である。	底部内面に指頭圧痕あり。断面に粘土帯の接合部を観察することができる。	



第２図　調査区セクション、ＳＫＩ



第３図　ＳＫ１出土遺物

2. Loc.28

Loc. 28

1. 位置と調査経過

Loc.28は、空港拡張範囲の西南部に位置しており、小字は裏柿ノ木と呼ばれている。当地点は昭和56年度に試堀調査をして中世のピット等の遺構や弥生時代の遺物包含層を確認したため、同年度に拡張して調査を実施した。調査期間は、昭和56年11月９日から12月17日までの約40日間を要し、調査面積は約1,670㎡であった。

2. 調査概要

Loc.28は、場周の道路工事の関係で南端部に短い試堀トレンチを設定した結果、中世のピット等の遺構や弥生時代の遺物包含層を確認した。

しかし、調査対象地がかなり広範囲にわたるため、不規則な試掘トレンチを延ばし、遺構の分布状況を把握することに努めた。その結果、Loc.28の西部と東部に遺構が集中していることが判明した。

以下、Loc.28の西部をＡ地点（Loc.28Ａ）とし、東部をＢ地点（Loc.28Ｂ）として記述することにする。最初にLoc.28の西部（Loc.28Ａ）の調査を終了させてから、東部（Loc.28Ｂ）の調査に移行した。

Loc.28Ａでは後期Ⅲの溝２条を検出し、Loc.28Ｂでは前期Ⅱの掘立柱建物址１棟の他、土坑２基を確認した。Loc.28Ａでは第Ⅳ層の黒褐色粘質土層が遺構検出面であり、Loc.28Ｂでは第Ⅴ層の淡茶灰色粘質土層が遺構検出面である。

3. 層序と出土遺物

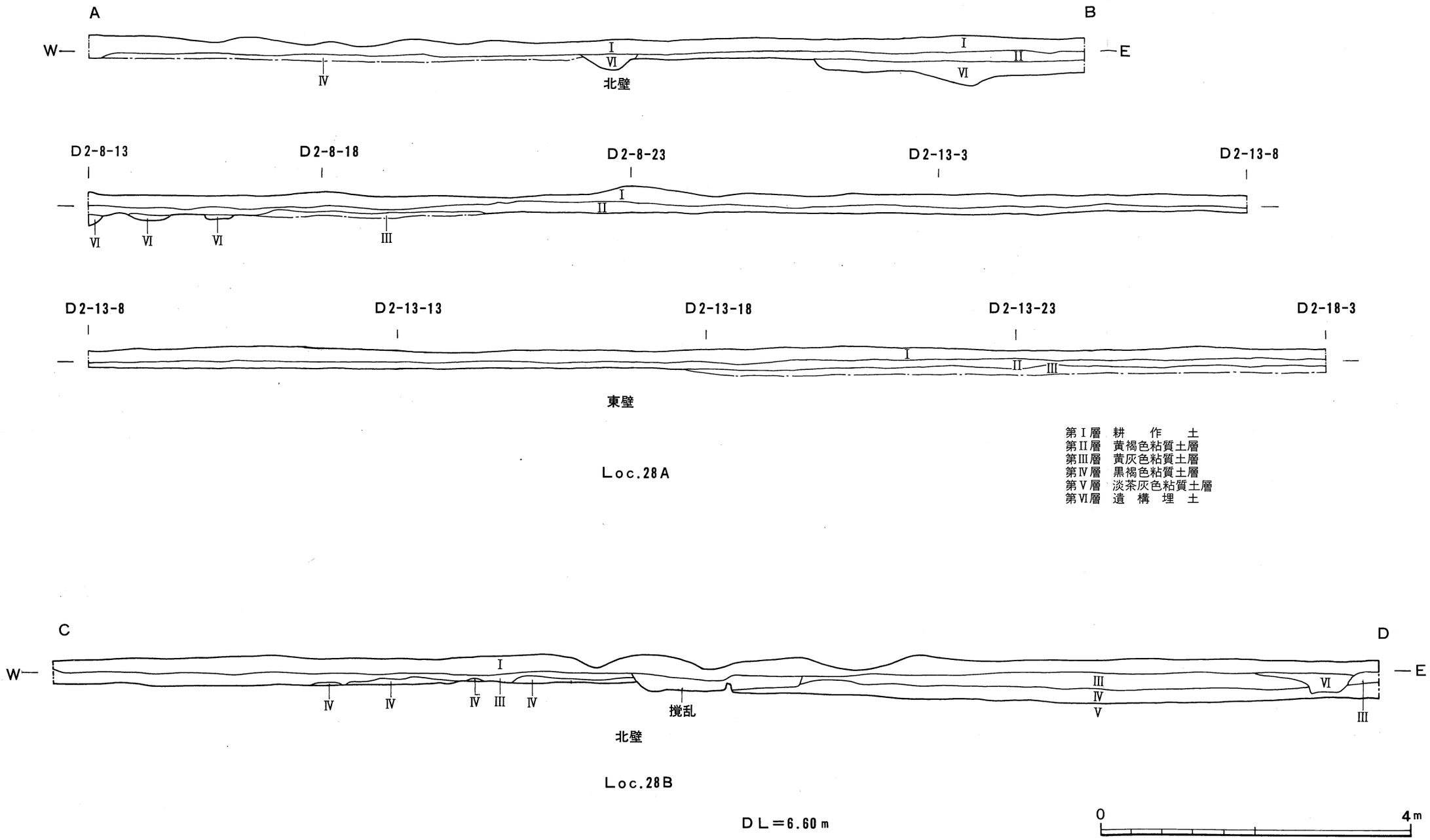
Loc.28の基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　黄褐色粘質土層
第Ⅲ層　黄灰色粘質土層
第Ⅳ層　黒褐色粘質土層
第Ⅴ層　淡茶灰色粘質土層

第Ⅱ層の黄褐色粘質土層は、中世及び近世の遺構検出面であり、無遺物層である。第Ⅲ層の黄灰色粘質土層は、無遺物層であるが、Loc.28Ａの西部には堆積していない。第Ⅳ層の黒褐色粘質土層は、Loc.28の全域に堆積しており、Loc.28Ａでは弥生時代から中世の遺構検出面である。しかし、Loc.28Ｂでは弥生時代の遺物を包含しているが、細片が多く、量的にも少ない。

Loc.28Ｂの第Ⅳ層の黒褐色粘質土層からは、弥生時代の遺物（１～23）が出土している。壺（１～３）、甕（４～13）、鉢（14～17）は前期Ⅱの遺物と考えられる。

第4図　調査区設定図



第Ⅰ層　耕　作　土
第Ⅱ層　黄褐色粘質土層
第Ⅲ層　黄灰色粘質土層
第Ⅳ層　黒褐色粘質土層
第Ⅴ層　淡茶灰色粘質土層
第Ⅵ層　遺　構　埋　土

第5図　調査区セクション

石器は、石斧（18）、石包丁（19、20）、磨製石鏃（21）、管玉（22、23）等が出土している。

第Ⅴ層の淡茶灰色粘質土層は、無遺物層であり、Loc.28Ｂでは弥生時代の遺構検出面である。

4. 遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、Loc.28Ｂの北東端部で検出された２×４間の東西棟の掘立柱建物址であるが、北東隅の柱穴は新しい溝(ＳＤ３)に切られている。梁間は2.60mを測り、柱間距離は1.28mである。桁行は6.08mを測り、柱間距離は0.84～1.72mである。ＳＢ１は、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層を除去して検出され、棟方向はＮ－52°－Ｗである。柱穴の直径は20cm前後、深さは12～24cmを測り、埋土は黒灰色粘質土である。ＳＢ１は、２×３間の母屋の西面に廂を有した掘立柱建物址かもしれない。

ＳＢ１の柱穴から出土した遺物は皆無であり、明確な時期等は不明である。しかし、ＳＢ１は、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層を除去して検出されているため、第Ⅳ層から出土した最古の遺物と同時期か、もしくはそれより古い時期の遺構である可能性が非常に強い。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、Loc.28Ｂの北東端部で検出された楕円形の小さな土坑で、北西部と南東部に小さな段部を有しており、ＳＢ１の北西部に近接している。長径0.76m、短径0.56m、深さ0.16mを測り、長軸方向はＮ－67°－Ｗを示す。埋土は黒灰色砂質土であり、甕（24、25）が出土している。

ＳＫ２

ＳＫ２は、Loc.28Ｂの北東端部で検出された隅丸長方形の土坑で、北西部にかなり大きな段部を有し、ＳＢ１の北部に非常に近接している。長径1.26m、短径0.74m、深さ約0.16mを測り、長軸方向はＮ－57°－を示す。埋土は黒灰色粘質土であり、甕（26～28）が出土している。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、Loc.28Ａで検出された溝で、北部から南西部に向かってＳ字状にゆるやかに屈曲

しながら南流する。残存長39.20ｍ、幅約0.80ｍ、深さ約0.17ｍを測り、断面形は浅いＵ字形を呈す。

ＳＤ１は、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層の上面で検出され、埋土は灰色砂質土であり、叩目の残った弥生土器の細片が出土している。

ＳＤ１は、後期Ⅲに廃絶した溝と考えられるが、南北の両端部が調査区外に延びているために全長及び性格等は不明である。

ＳＤ２

ＳＤ２は、Loc.28Ａで検出された溝で、北東部から南部に向かってＳ字状にゆるやかに屈曲しながら南流し、南半部では２条に分岐している。残存長46.80ｍ、幅約1.76ｍ、深さ約８㎝を測り、断面形は浅いＵ字形を呈す。

ＳＤ２は、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層の上面で検出され、埋土は灰色砂質土の部分と黄灰色砂質土の部分とがある。

ＳＤ２からは、甕（29～31）の他、実測不能な小破片が多数出土しており、後期Ⅲの時期に廃絶した溝と考えられる。

ＳＤ２も南北の両端部が調査区外に延びており、全長及び性格等は不明である。

5.　まとめ

Loc.28Ｂの北東端部では前期Ⅱの土坑２基（ＳＫ１・２）とその時期の可能性が非常に強い掘立柱建物址（ＳＢ１）を検出しており、この時期の集落が存在したことを物語っている。しかし、前期Ⅱの遺構が存在した部分の北部及び東部は最近の撹乱を非常に受けており、しかも、その西部及び南部でも、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層を除去したが、遺構を確認することはできなかった。Loc.28Ａで検出された溝跡（ＳＤ１・２）は、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層の上面で検出されており、後期Ⅲの時期に廃絶したと考えられるが、周辺部に同時期の遺構が全く存在しないため、性格等は不明である。

第 3 表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積(㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 6 図	ＳＢ１	2 × 4	2.60×6.08	0.84～1.72	N－52°－W	15.8	

第 4 表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 6 図	ＳＫ１	楕円形	0.76	0.56	0.16	N－67°－W	擂鉢形	
〃	ＳＫ２	隅丸長方形	1.26	0.74	0.16	N－57°－W	U字形	

第 5 表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅳ層	壺	12.8 (4.4) —— ——	直立気味にのびる頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はヨコナデのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
2	〃	〃	21.8 (10.4) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口唇部はヨコナデにより縁取りをしている。	口縁部はコヨナデで仕上げる。頸部はヘラ磨きで仕上げる。	
3	〃	〃	—— (6.2) —— 8.6	平底の底部で胴の張りは弱い。	下胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
4	〃	甕	19.0 (9.5) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部はナデで仕上げる。	
5	〃	〃	23.6 (7.3) —— ——	上胴部から口縁部は直線状にゆるく外反して立ち上がる。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。胴部はナデで仕上げる。	
6	〃	〃	17.6 (4.6) 15.6 ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。	
7	〃	〃	23.6 (3.9) 21.2 ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
8	〃	〃	17.7 (2.7) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。口唇部下端に刻目がある。	〃	

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
9	第Ⅳ層	甕	19.6 (3.4) — —	如意形に鋭く外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。口唇部に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部はナデで仕上げる。	
10	〃	〃	19.6 (2.7) — —	如意形に鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
11	〃	〃	24.2 (5.0) 23.4 —	如意形に鋭く外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。口唇部に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	
12	〃	〃	18.8 (8.2) 17.9 —	如意形にゆるく外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。	〃	
13	〃	〃	29.4 (5.9) 28.0 —	〃	口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はナデで仕上げる。	やや大型の甕である。
14	〃	鉢	18.2 (6.1) — —	如意形にゆるく外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。	口縁部はヨコナデのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げる。上胴部は横方向のヘラ磨きで仕上げる。	
15	〃	〃	20.9 (3.7) — —	如意形にゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	
16	〃	〃	15.9 (6.2) 16.1 —	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部で胴の張りは弱い。	〃	
17	〃	〃	22.6 (4.3) — —	直線状にゆるく外反して立ち上がる口縁部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	上胴部外面に黒斑がある。

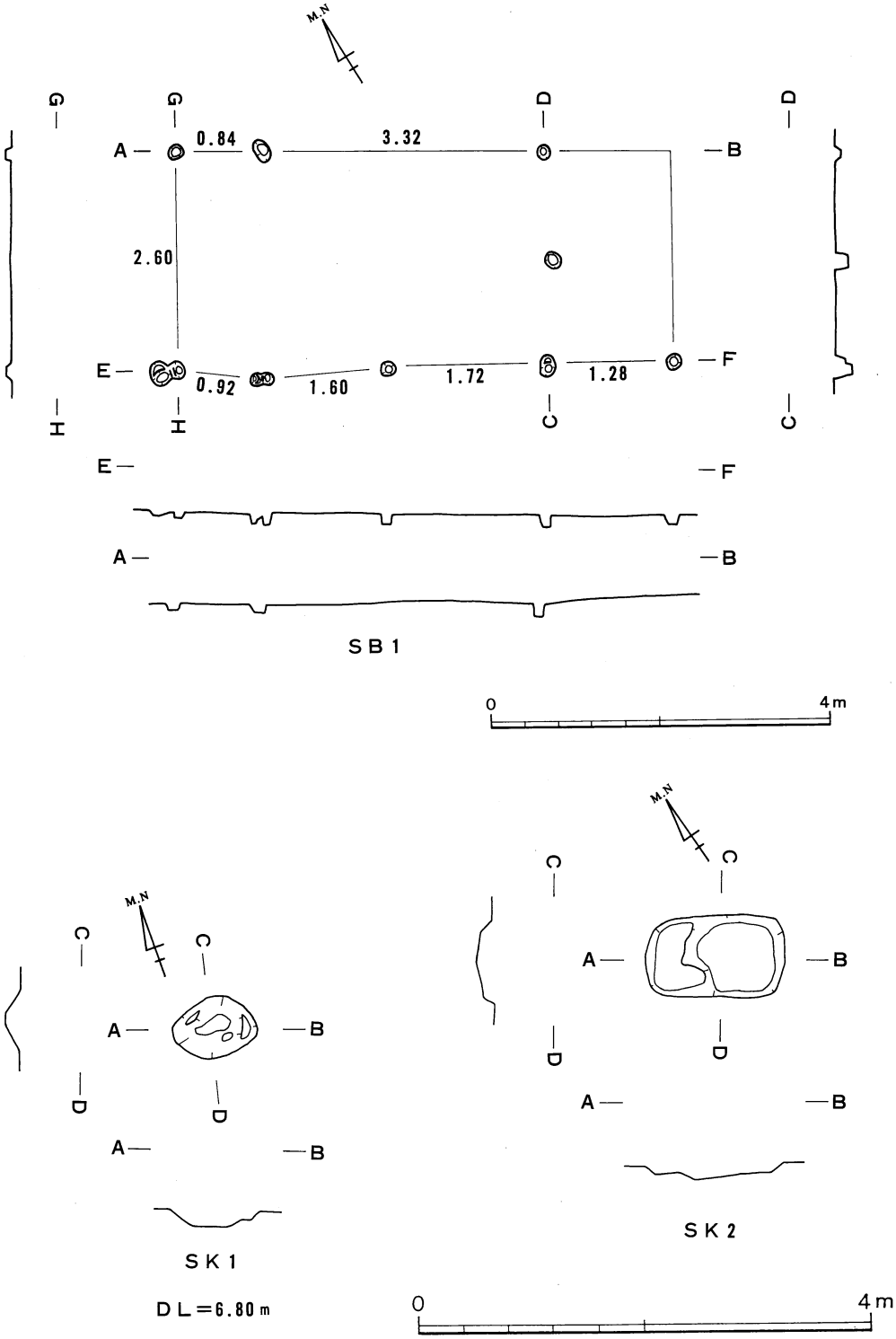
第 6 表　包含層出土石器観察表

挿図番号	層　位	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　　徴	備　考
18	第Ⅳ層	石　斧	10.0 2.2 0.9 20.9	頁　岩	片刃の石斧で両面に顕著な擦痕が残る。完形である。	
19	〃	石包丁	(6.9) 4.5 (0.7) 30.0	粘板岩	やや外湾する背部に直線状の刃部が続く形態の石包丁で両刃である。体部中央付近に 2 個の紐孔がある。表面に擦痕がわずかに残る。	両面共に磨滅する。磨製の石包丁で、一部欠損する。
20	〃	〃	8.4 5.0 1.2 68.3	〃	背部及び刃部は共に直線状を呈し、両側辺部には粗い抉りがある。表面には敲打痕が残る。磨製の石包丁で両面に擦痕が残る。	背部にも刃部を研ぎ出した痕跡が残る。完形である。

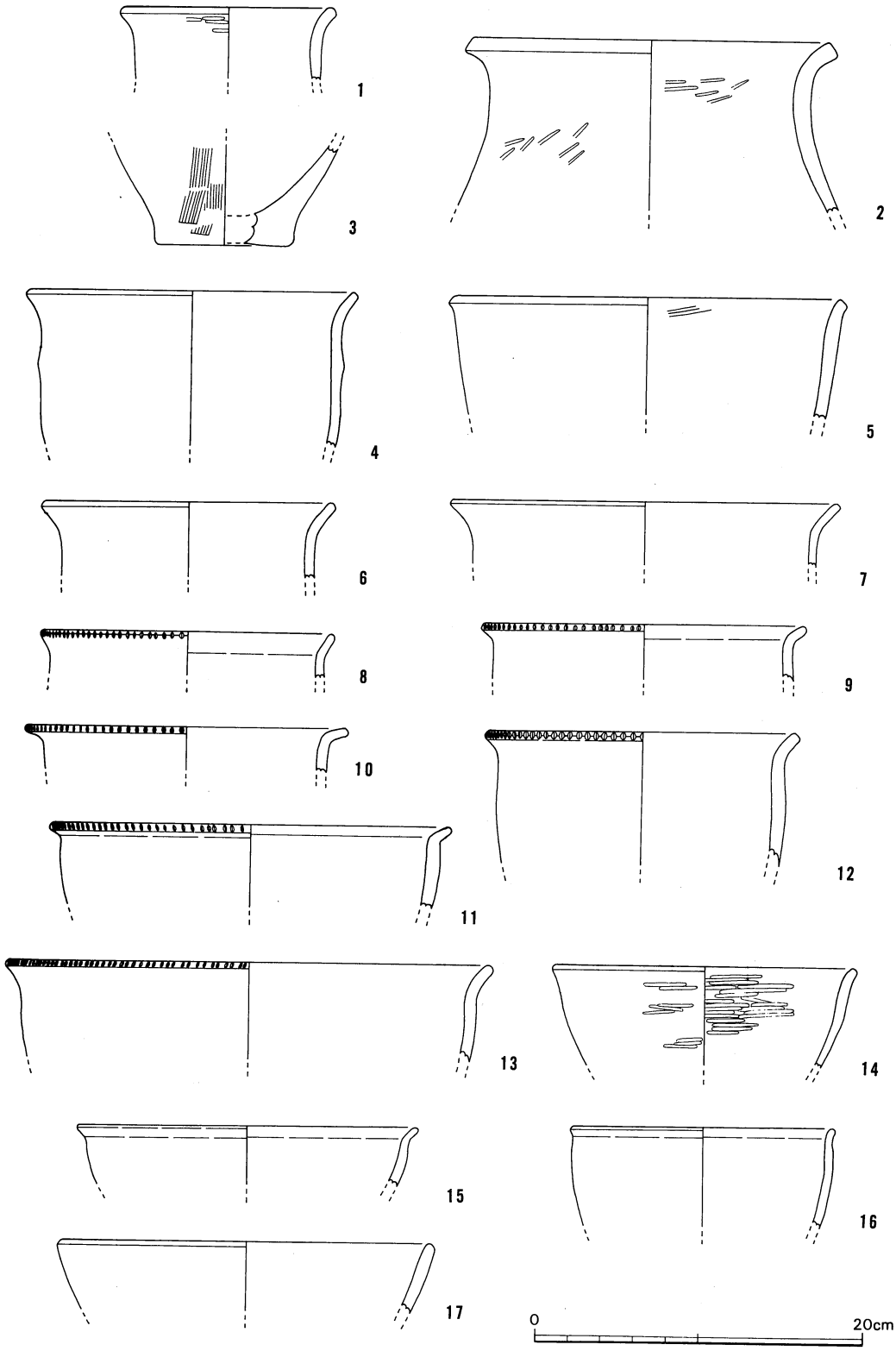
挿図番号	層　位	器　種	計測値 (cm g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　　徴	備　考
21	第Ⅳ層	石　鏃	5.6 1.1 0.3 2.6	頁　岩	磨製石鏃の未製品で両面に右下がり方向の擦痕が残る。凸基有茎式であるが、両側辺部は不定形である。	
22	〃	管　玉	3.0 0.7 0.7 2.4	硬　玉	管玉の未製品であるが外面に擦痕が残る。	
23	〃	〃	1.7 0.8 0.9 1.8	碧　玉	上端部がわずかに欠損するがほぼ完形である。	

第７表　遺構出土土器観察表

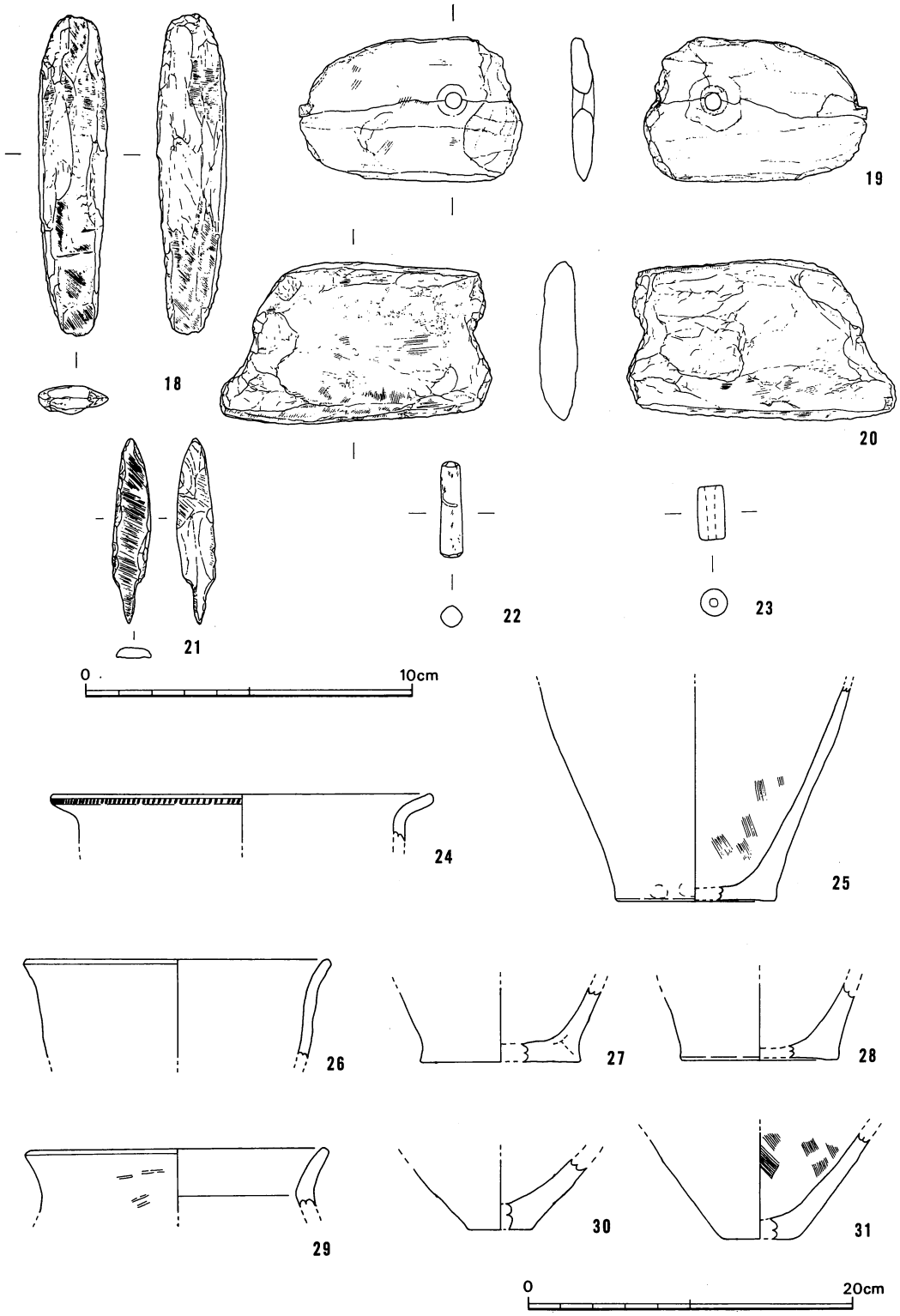
挿図番号	遺構番号	器　種	法量 (cm) 口　径 器　高 胴　径 底　径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
24	ＳＫ１	甕	23.3 (3.0) 20.1 ——	如意形に鋭く外反する口縁部で上胴部の張りは弱い。 口唇部下端に刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
25	〃	〃	—— (13.2) —— 9.2	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はナデで仕上げ、内面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	下胴部外面に煤状炭化物が付着する。
26	ＳＫ２	〃	18.6 (6.1) 17.4 ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	口縁部外面に黒斑がある。
27	〃	〃	—— (4.6) —— 10.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	両面共にナデで仕上げる。	
28	〃	〃	—— (4.8) —— 9.7	平底の底部であるが、わずかにくぼんでいる。 胴の張りも弱い。	〃	
29	ＳＤ２	〃	9.3 (3.9) —— ——	くの字状にゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面は叩き調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	叩き出し口縁である。
30	〃	〃	—— (4.3) —— 4.0	平底の小さな底部で胴の張りも弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
31	〃	壺	—— (6.6) —— 4.0	平底の小さな底部で、やや胴が張る。	外面はナデで仕上げ、内面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げる。	底部内外面に黒斑がある。


M.N
A
B
C
D
E
F
G
H
0.84
3.32
2.60
0.92
1.60
1.72
1.28
SB1
0
4m
SK1
DL=6.80m
SK2
0
4m

第6図　SBI、SK1・2



第７図　第Ⅳ層出土遺物



第８図　第Ⅳ層、ＳＫ１・２、ＳＤ２出土遺物

3. Loc.35A

Loc. 35A

1．位置と調査経過

Loc.35Aは、空港拡張範囲の北西端部に位置する。従来、西見当遺跡と呼ばれている範囲の一部である。本遺跡は既に3次にわたり調査がなされているが、既2次調査の南側部分にあたる。本調査は、高知空港拡張工事に伴う周辺整備事業の一環として行われた道路拡張工事に係るものである。そのため、道路北側拡張部分のみ、トレンチを設定し、調査を行った。

2．調査概要

Loc.35Aは、トレンチ調査であるため、便宜的に西端から、Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチと名称する。Aトレンチは、約幅5m、長さ34mである。トレンチの南側50cm程は、用水路工事の時に破壊されていた。検出遺構は、弥生時代の土坑5基、自然流路と近世の井戸、ピット群である。西側は、近代の撹乱が著しい。Bトレンチは、約幅5m、長さ41mである。検出遺構は、東隅に弥生時代の自然流路と、その他は、近世の土坑10基、溝3条である。その他の時期のものはまったく検出できなかった。Cトレンチは、東隅に位置し、幅2m、長さ7mである。検出遺構は近世の溝1条のみであり、調査区の拡張は行わなかった。調査期間は昭和56年12月から昭和57年1月の約2か月間であり、調査面積は222m²である。

3．層序と出土遺物

調査区において認められた基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　茶灰色粘質土層

第Ⅲ層　黄褐色粘質土層

Aトレンチは、第Ⅰ層を除去した段階で遺構を検出した。耕作土中より、近世陶磁器類が出土した。Bトレンチは、第Ⅱ・Ⅲ層を除去した段階で遺構を検出した。第Ⅰ・Ⅱ層中より、Aトレンチ同様近世陶磁器類が出土した。

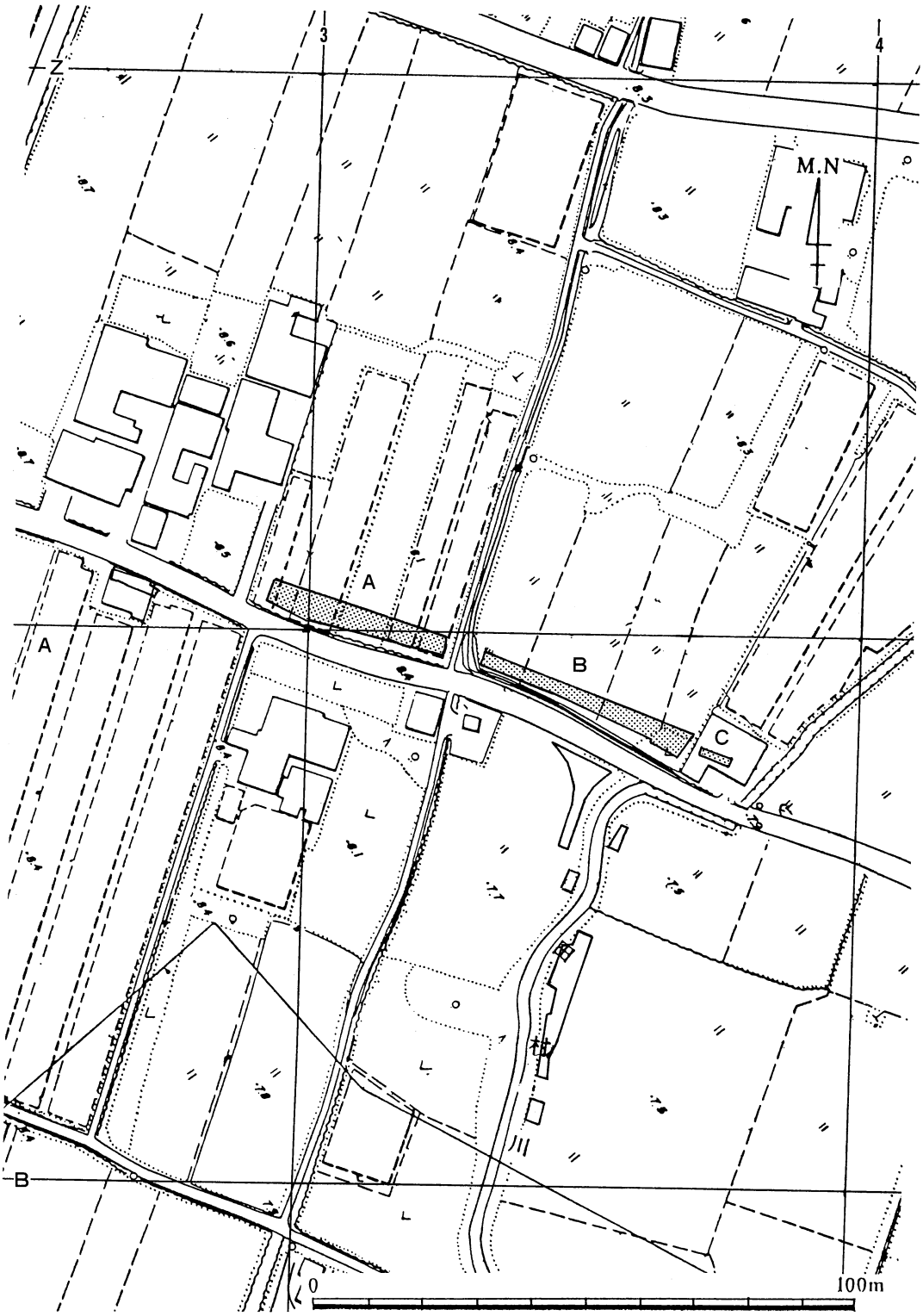
4．遺構と遺物

土坑

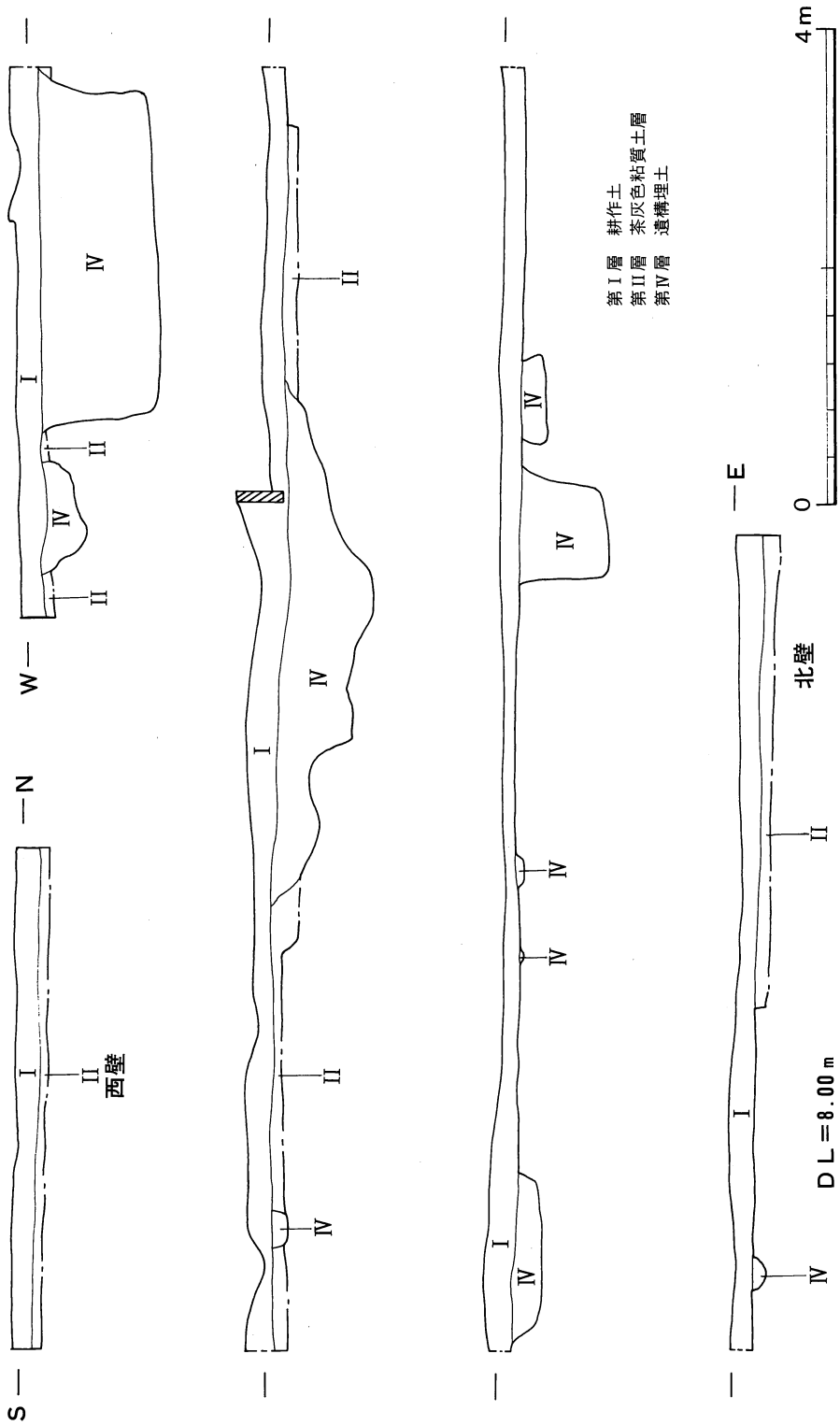
SK1

SK1は、Aトレンチの中央部北側に位置する。第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出した。

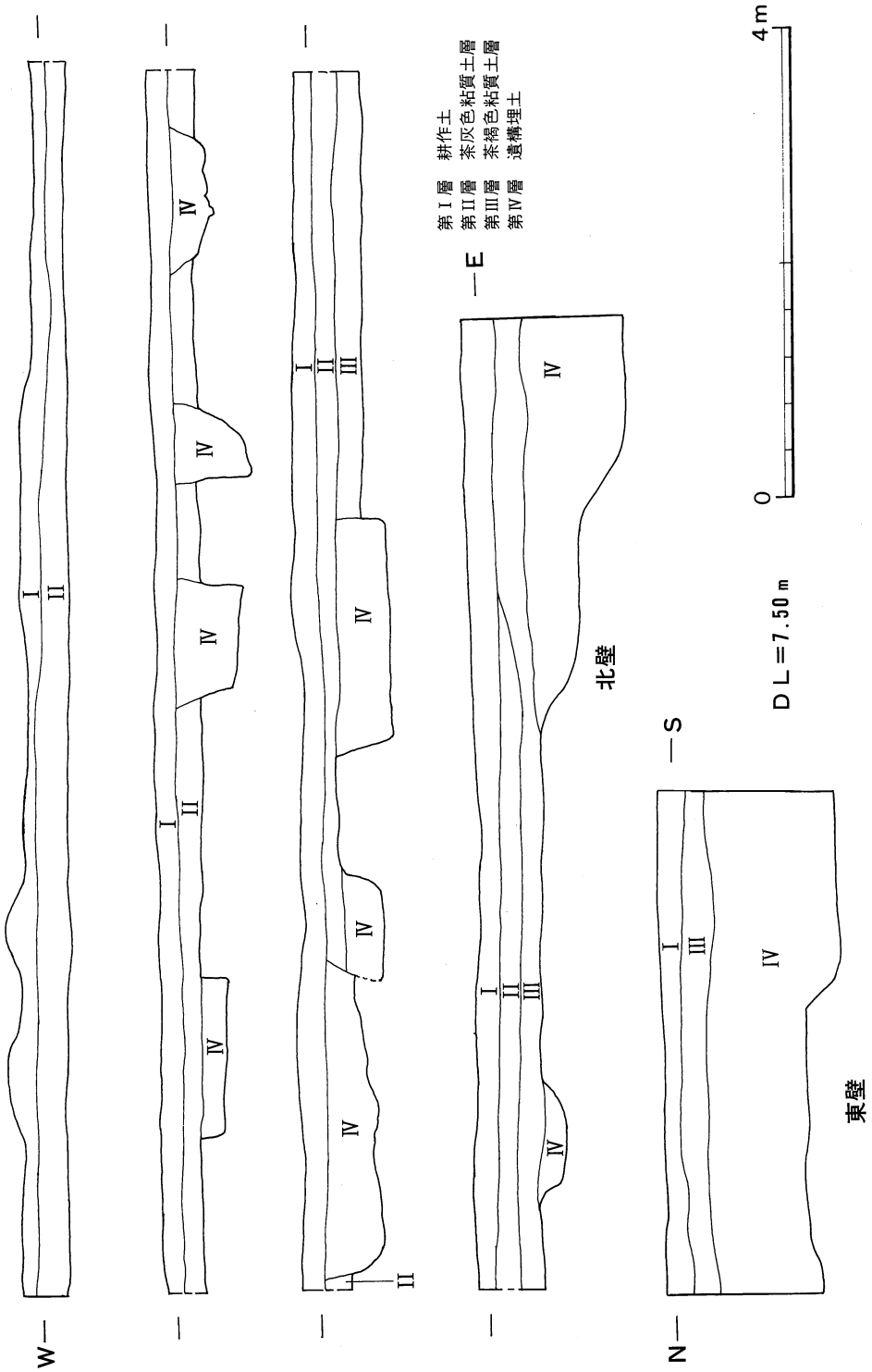
平面形は、北側の一部分が調査区外で不明確だが、楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径2.15m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN－36°－Wである。壁は東西両壁とも急傾斜で立



第 9 図　調査区設定図



第10図　Aトレンチセクション



第11図　Bトレンチセクション

ち上がる。底面は、ほぼ平坦であり、標高7.80mを測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

遺物は、中央部に比較的まとまって出土した。図示した遺物は、壺（１、２、４、５）、紡錘車(3)、石器では、石包丁２点(437、438)である。壺（１、４、５）の形態、文様の特徴から、中期Ｉと考えられる。

ＳＫ２

ＳＫ２は、Ａトレンチの中央部南側に位置する。第Ｉ層の耕作土を除去した段階で検出した。遺構の南側半分は、用水路工事の時に破壊されている。

平面形は、南半分が破壊されているが、ほぼ楕円形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.93m、深さ0.20mを測る。壁は東西両壁とも急傾斜で立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であり標高7.50mを測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

遺物は底面直上より出土した。磨製石鏃は、北側底面に密着して出土した。実測可能な遺物は、甕（６～８）と磨製石鏃(450)のみであった。出土遺物から、前期Ⅲと考えられる。

ＳＫ３

ＳＫ３は、Ａトレンチの中央よりやや東側北端に位置する。第Ｉ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は、北側の一部分が調査区外で不明確だが、方形を呈するものと思われる。規模は、残存部分で、長径1.50m、短径1.00m、深さ0.70mを測る。長軸方向はＮ－22°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.20mを測り、断面形は箱形を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

遺物は、底面直上より砂岩質の台石と、埋土中より壺（９～13）、甕(14～23)等の破片が出土した。その中でも壺(10)は、埋土中層より西壁に密着した状態で出土した。石器は、石斧(392)、叩石(411～416)、砥石(435)等が出土した。ＳＫ３は、大型の貯蔵穴とも考えられ、出土遺物から、時期的には前期Ⅲと考えられる。

ＳＫ４

ＳＫ４は、Ａトレンチの中央よりやや東側で、ＳＫ３の東側30mに位置する。第Ｉ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は、北側の一部が調査区外であるため不明確だが方形を呈するものと考えられる。規模は残存部で長径0.90m、短径0.55m、深さ0.25mを測る。長軸方向はＮ－30°－Ｅである。検出面より底面が広く壁面は内傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.40mを測る。埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。

遺物は、底面直上より石斧（393）、石包丁（439）が出土しており、その他に叩石等も出土し

ている。土器は、朝鮮系無文土器１点（24）と、その他埋土中より弥生前期から中期Ⅰ・Ⅱの時期と考えられる細片が出土している。

ＳＫ５

ＳＫ５は、Ａトレンチの西寄りで、ＳＫ４の東側30cmの所に位置する。第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－28°－Ｅである。壁は比較的緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.60ｍを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色の単純一層である。

遺物は非常に少なく、実測可能なものとしては、壺１点(25)のみで、埋土中より出土した。中期Ⅰのものである。

自然流路

ＳＲ１

ＳＲ１は、Ａトレンチの中央部よりやや西側に位置し、南北に縦走する流路である。第１層を除去した段階で検出した。東西の幅は確認できたが、一部西側の肩は近代の撹乱で破壊されている。

規模は、幅４～５ｍで、深さ0.70ｍを測る。東側の壁は、テラス状の浅い平坦面をもち緩やかに立ち上がる。西側は、近代の撹乱が著しいが、段部をもち緩やかに立ち上がる。底面は、水平でなく所どころ窪みをもち深くなっている。その部分のみに、埋土のⅧ層が堆積している。方向は、Ｎ－18°－Ｅで磁北からやや東側に振っている。埋土は、粘土と砂がレンズ状に堆積しており、８層に区別できた。第Ⅰ層は茶褐色粘土、第Ⅱ層は黄褐色シルト、第Ⅲ層は暗灰白色砂、第Ⅳ層は灰褐色砂質土、第Ⅴ層は茶褐色砂質土、第Ⅵ層は暗灰色砂、第Ⅶ層は褐色粘土、第Ⅷ層は黄白色粘土である。

遺物は、間層として堆積している砂層から多量に出土した。弥生土器は、壺（26～90、146）、甕（91～132）、高杯（123～140）、鉢（141～143）、蓋（144、145）等である。56の壺は底面直上より出土した。石器は、太型蛤刃石斧や、叩石、砥石、石鏃が比較的多く出土した。その他、石錘、石包丁等も出土している。前期から後期にかけての多量の遺物が出土したが、流路としての機能が消滅した時期は、後期と考えられる。

ＳＲ２

ＳＲ２は、Ｂトレンチの東端部に位置し、南北に縦走する流路である。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

西壁のみを確認し、全体の規模は不明である。深さは0.80ｍを側る。西壁は一部テラス状に

なり緩やかに立ち上がる。底面は段差がつき窪みとなっている部分もある。埋土は、6層に区別でき、第Ⅰ層は赤褐色シルト、第Ⅱ層は灰褐色粘土、第Ⅲ層は黄灰色粘土、第Ⅳ層は暗灰色砂質土、第Ⅴ層は黒褐色粘土、第Ⅵ層は黄橙色粘土である。

遺物は、埋土中及び底面直上より多量に出土した。弥生土器は、壺（147～325、327）、甕(328～383)、口縁部の破片ではあるが朝鮮系無文土器（327）、高杯（384～387）、蓋（388、389）、土錘（390）は中央部から折損したものである。その中で底面直上より（205、325）等が出土している。石器は石斧、石包丁等が出土した。

ピット

Ｐ１

Ｐ1 は、Ａトレンチの東側に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。平面形は円形を呈する。規模は、径0.4m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は、弥生土器鉢（142）が出土している。

５．まとめ

本調査区においては、弥生時代の遺構として、土坑５基、自然流路２条を検出した。ＳＲ２を除けばすべて西側のＡトレンチからである。全体的に近代の撹乱が多く、Ｂトレンチでは近世の遺構がほとんどである。西見当遺跡は、南四国における弥生時代前期の標準遺跡でもあり、弥生文化成立期を考える上でも重要な遺跡である。また本調査においても貴重な成果を得ることができた。Ａトレンチ中央より東側に位置するＳＫ４とＢトレンチの東端に位置するＳＲ２から、朝鮮系無文土器の口縁部破片が出土した。ＳＫ４から出土した朝鮮系無文土器は、主に中期Ⅰ・Ⅱに編年される土器細片と共に埋土中より出土しており、また前期の底部破片も若干出土していることから、これらと共に混入したものと考えられる。遺構も検出面より底面が広いなどの特徴をもっている。これらの事実から、弥生時代前期後半より中期にかけて、積極的な人間集団の交流が行われ、北九州からの文化伝播があったことを確認することができ、その九州を通した外来文化の搬入という点で貴重な資料である。次にＳＫ２・３から出土した一括資料について記述する。ＳＫ２からは、如意形を呈し口唇部に刻目をもつ甕や、またＳＫ３からは、壺が出土している。従来、西見当Ⅱ式と呼ばれていたもので、田村遺跡群の時期区分の前期Ⅲの段階である。これら一括資料が出土した遺構は、田村遺跡群の中で前期Ⅲの遺構が分布する南限にあたり、貴重な資料である。

第8表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第12図	SK1	楕円形	2.15	——	0.18	N－36°－W	逆台形	
〃	SK2	〃	1.93	——	0.20	——	〃	
〃	SK3	方形	1.50	1.00	0.70	N－22°－E	箱形	
〃	SK4	〃	0.90	0.55	0.25	N－30°－E	袋状	
〃	SK5	楕円形	0.90	0.78	0.13	N－28°－E	逆台形	

第9表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
1	ＳＫ１	壺	19.4 (14.7) —— ——	口縁部は外反し、貼付口縁。 口唇部上下端に刻目。胴上部に櫛描直線文、簾状文、5本単位の櫛描波状文が施される。	口唇部ナデ。口縁部から頸部にかけて外面縦のハケ目、胴部もハケ目調整である。	淡黄灰色。
2	〃	〃	—— (6.2) —— 5.4	底部は平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面不明。内面一部ハケ目が残る。	内面　黒茶褐色。 外面　赤茶褐色。 薄手土器。
3	〃	紡錘車	直径 4.1 厚さ 0.9 重量15.0 (g)	ほぼ完形品である。円形を呈する。	穿孔は両面からおこなわれている。周縁部は、磨滅して丸くなっている。	内面　黄灰色。 外面　黄赤褐色。 土器片転用。
4	〃	壺	15.0 (7.1) —— ——	頸部はほぼ直線的である。上から8本、5本、4本単位の櫛描直線の上に2条の刻目を付した貼付突帯。	内面に指頭圧痕が残る。	赤褐色。
5	〃	〃	—— (10.0) 32.0 ——	胴上部の破片である。上部から、刻目、櫛描直線文、波状文、簾状文、櫛描の山形文が施される。	内面はナデ調整、指頭圧痕が残る。	内面　灰黄褐色。 外面　黒茶褐色。
6	ＳＫ２	甕	17.6 (8.0) —— ——	如意形に外反する。口唇部に刻目が施される。	口縁部外面ヨコナデ。その他磨耗して不明。	黄白色。
7	〃	〃	19.2 (8.8) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部に刻目が施される。胴部がやや張る。	口縁部外面はヨコナデ。内面は指ナデ。	内面　灰黄褐色。 外面　灰褐色。
8	〃	〃	17.1 (6.7) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部に刻目が施される。 胴部がやや張る。	口縁部外面はヨコナデ。	
9	ＳＫ３	壺	12.5 (9.9) —— ——	口縁部は外反する。胴上部に4～6本単位で縦にヘラ描沈線が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。胴上部外面にヘラ磨きが施される。内面に指頭圧痕が残る。	
10	〃	〃	16.0 (8.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。胴上部に一本のヘラ描沈線が施される。	口縁部から頸部にかけて、外面ハケ目の後ヘラ磨き。内面ナデの後ヘラ磨き。胴部内面はナデ調整。	内面に黒斑。
11	〃	〃	—— (5.0) —— 8.6	底部は平底。胴部は大きく開いて立ち上がる。	外面は縦のハケ目、内面は不明だが指頭圧痕が残る。	
12	〃	〃	—— (4.3) —— 9.6	底部は平底。	外面ハケ目の後横方向の磨き。	
13	〃	〃	—— (6.6) —— 9.4	底部はほぼ平底。	外面は、縦のハケ目が一部確察できる。	外面に黒斑。
14	〃	甕	18.2 (6.2) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部に刻目が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ調整が施される。	
15	〃	〃	23.2 (2.0) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部に刻目が施される。	内外面ヨコナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
16	ＳＫ３	甕	25.5 (1.9) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部に刻目が施される。	内外面共不明。	磨耗が著しい。
17	〃	〃	19.2 (6.7) —— ——	〃	口縁部内面ナデ、外面ハケ目の後ナデ。胴部外面は縦位のハケ目調整が施される。	
18	〃	〃	—— (7.6) —— 5.6	底部は平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面は縦のハケ目調整。	
19	〃	〃	—— (6.4) —— 7.6	〃	外面は縦のハケ目。内面はヘラ削りが施される。	
20	〃	〃	—— (7.3) —— 11.0	〃	外面は縦位のハケ目。内面はナデ調整。	内外面に黒斑。
21	〃	〃	—— (5.1) —— 11.4	底部はやや上げ底。	外面は縦位のハケ目調整。	
22	〃	〃	—— —— —— ——	底部は上げ底。	不明。	
23	〃	〃	—— (4.4) —— 6.0	底部は平底。	外面縦のハケ目。	
24	ＳＫ４	〃	24.4 (6.0) —— ——	口縁部は折りまげて巻きこんでいる。朝鮮無文土器である。	内外面磨耗して不明。	内面　黄褐色。 外面　赤茶褐色。
25	ＳＫ５	壺	15.0 (1.7) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部に刻目を施す。貼付口縁。	口縁部貼付後ナデ。頸部にかけてハケ目調整が観察できる。	
26	ＳＲ１	〃	—— (15.5) 30.6 ——	胴部のみの破片である。胴上部に２本の沈線、区画中に６本単位のヘラ描山形文が施されている。	外面磨耗が著しいが、一部ヘラ磨きが観察できる。	
27	〃	〃	12.4 (4.6) —— ——	口縁部は大きく外反する。胴上部に浅い沈線と微隆起帯に刻目が施される。	内面はナデ調整。	
28	〃	〃	14.2 (3.0) —— ——	口縁部は外反する。口唇部下端に刻目。頸部にヘラ描沈線が施される。	不明。	磨耗が著しい。
29	〃	〃	17.8 (3.4) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口縁内面に３条の刻目を付した突帯を貼付。内側から穿孔が施される。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部に縦のハケ目。	
30	〃	〃	16.7 (4.1) —— ——	口縁部は緩やかに外反。口縁部貼付後刻目。	口縁部内面ヨコナデ、外面ハケ目。	内面　白褐色。 外面　黒褐色。 薄手土器。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	ＳＲ１	壺	14.8 (4.6) —— ——	口縁部は大きく外反。口唇部下端に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
32	〃	〃	19.0 (4.2) —— ——	口縁部は外反する。口唇部下端に刻目。	外面ハケ目。内面はナデ調整。	
33	〃	〃	20.0 (4.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。口縁部内面に２条の刻目を付した貼付突帯。頸部に棒状原体の刺突。	不明。	磨耗が著しい。胎土に雲母片を含む。
34	〃	〃	25.4 (3.2) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。内面に２条の刻目を付した微隆起帯。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部にはナデが施される。	
35	〃	〃	25.6 (3.5) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部上下端に刻目。頸部に隆起帯の後刻目。	不明。	磨耗が著しい。
36	〃	〃	18.8 (3.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。	暗茶褐色。薄手土器。
37	〃	〃	17.0 (2.0) —— ——	口縁部大きく外反。貼付口縁。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部外面ハケ目、内面はナデ調整。	
38	〃	〃	12.1 (5.0) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口縁部外面貼付後指頭圧痕、内面はハケ目。頸部外面ハケ目、内面はナデ調整。	
39	〃	〃	17.4 (7.0) —— ——	頸部からなめらかに立ち上がり、口縁部は外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。口縁部内面ハケ目の後ナデ調整。	
40	〃	〃	21.0 (4.8) —— ——	口縁部大きく外反。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。内面横位のハケ目、外面縦のハケ目。	薄手土器。
41	〃	〃	14.3 (4.3) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。口唇部ヨコナデ。頸部外面縦のハケ目。	
42	〃	〃	11.4 (7.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口縁部外面貼付後、ヘラ状工具による押圧が施される。内外面指頭圧痕がつく。	
43	〃	〃	14.8 (4.2) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口縁部に刺突による穿孔が施される。	貼付後指頭圧痕。	
44	〃	〃	20.4 (2.8) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部上端に貼付突帯後刻目。口縁部内面に貼付突帯と棒状工具による円孔が穿たれる。	内外面ナデ調整。	薄手土器。
45	〃	〃	13.8 (2.1) —— ——	口縁部は外反。貼付突帯後、口唇部に刻目。	貼付後外面に指頭圧痕。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
46	ＳＲ１	壺	18.2 (4.9) —— ——	口縁部外反、貼付口縁。口唇部にハケ状工具による刻目。	貼付後外面に指頭圧痕。頸部外面に縦位のハケ目、内面横位のハケ目調整。	
47	〃	〃	19.2 (4.3) —— ——	口縁部は外反する。口縁部を独立して貼付。口縁部内面と、口唇部に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
48	〃	〃	19.9 (2.2) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	口唇部中央は、強いヨコナデのため窪む。	
49	〃	〃	26.8 (4.4) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。	口唇部ナデのため窪む。口縁部内面はヘラ磨き。貼付後外面は指頭圧痕。	
50	〃	〃	17.0 (4.1) —— ——	直立した頸部から口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部に浅い沈線。口唇部下端に刻目。	貼付後外面に指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目、内面ナデ調整。	
51	〃	〃	18.8 (2.6) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口縁部内面と口唇部に刻目。	貼付後外面に指頭圧痕。内面にハケ目調整。	
52	〃	〃	18.4 (3.0) —— ——	口縁部は外反する。口縁部粘土帯貼付後、内面から円孔を穿つ。口唇部は肥厚し端に斜格子文。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。内面はナデ調整。	
53	〃	〃	22.2 (1.5) —— ——	口縁部の小破片である。口唇部端面に斜格子文。	不明。	
54	〃	〃	20.4 (1.8) —— ——	口縁部の小破片である。口唇部端面にハケ状工具による刻目、内面に刻目が施される。	外面に指頭圧痕。	
55	〃	〃	19.6 (8.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。端面に棒状工具による山形文。頸部に櫛描波状文と直線文。	口唇部ハケ目の後ナデ。貼付後指頭圧痕。口縁部内面ナデ調整。頸部外面ハケ目。	
56	〃	〃	20.2 (10.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁で口唇部下に刻目。口縁外面に櫛描直線文、頸部外面も櫛描による縦線と櫛描直線文。胴上部に円形浮文と微隆起帯。	口唇部ヨコナデにより窪む。内外面ナデ調整。	薄手土器。 口縁付近内面淡灰褐色、その他、淡黄茶褐色。
57	〃	〃	26.8 (3.0) —— ——	口縁部大きく外反する。貼付後口唇部に刻目。頸部にヘラによる沈線。	不明。	磨耗が著しい。 薄手土器 内面　黄褐色。 外面　白灰褐色。
58	〃	〃	44.7 (5.8) —— ——	口縁部大きく外反。貼付口縁。口唇部下端に刻目。外面に貼付の微隆起帯。胴上部に微隆起帯。	内外面ナデ調整。	薄手土器。
59	〃	〃	22.4 (1.5) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部下端に刻目。外面に浅い沈線と微隆起帯。	〃	〃
60	〃	〃	21.0 (2.8) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部に刻目。外面に微隆起帯。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
61	ＳＲ１	壺	19.3 (1.6) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付突帯。口唇部下端に刻目。外面に浅い沈線。	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ調整。	薄手土器。
62	〃	〃	16.0 (2.0) —— ——	口縁部大きく外反。貼付口縁。口唇部下端に刻目。２条の微隆起帯が貼付。	不明。	薄手土器。 磨耗が著しい。
63	〃	〃	15.4 (2.2) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。外面に縦のハケ目。	薄手土器。
64	〃	〃	12.8 (6.9) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。長く粘土帯を貼付する。口唇部やや肥厚。	口唇部ナデのためやや窪む。外面貼付後指頭圧痕。外面ナデ。内面磨耗しているが、横方向のハケ目。	
65	〃	〃	15.2 (3.0) —— ——	口縁部大きく外反。貼付口縁。	外面貼付後指頭圧痕と頸部にかけて縦のハケ目。内面横位のハケ目。	
66	〃	〃	15.2 (3.5) —— ——	口縁部は外反する。口唇部は肥厚する。	口唇部はナデのため窪む。外面ハケ目調整。	
67	〃	〃	18.2 (5.7) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。粘土帯を貼付し端部を拡張する。端面は２本の凹線文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面は縦のハケ目、内面はナデ調整。	
68	〃	〃	25.8 (5.0) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚し拡張する。端面に２本の凹線文。頸部に右上りの刻目。	口縁部外面指頭圧痕。	
69	〃	〃	21.6 (8.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口縁部貼付後指頭圧痕。内面横位のハケ目。頸部は磨耗しているが、縦のハケ目。	
70	〃	〃	19.8 (3.8) —— ——	口縁部は外反する。口縁端部は、肥厚して面をなす。端面は２本の凹線文。外面はハケ状原体による長い圧痕。貼付口縁で、口唇部下端に刻目。	口縁部内面ヨコナデ、外面指頭圧痕が残る。頸部内面横位のハケ目。	内面に黒斑。
71	〃	〃	14.0 (2.5) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。端部は肥厚して面をなす。端面の上下端に刻目、その間に３本の凹線文。	口縁部外面はヨコナデ、内面は不明。	
72	〃	〃	8.0 (7.6) —— ——	直立する頸部から、緩やかに外反する。	外面ハケ目、内面はナデ調整。	内面に黒斑。
73	〃	〃	12.8 (4.3) —— ——	口縁部は外反する。端部やや肥厚。	口唇部はヨコナデ。外面は縦のハケ目。	
74	〃	〃	14.7 (4.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。	外面一部ハケ目。	磨耗が著しい。
75	〃	〃	13.5 (6.9) —— ——	口縁部は大きく外反する。	口縁部内外面ナデ。口縁部から頸部にかけて内面横方向のナデ、外面縦のハケ目。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
76	ＳＲ１	壺	12.8 (10.6) —— ——	口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ナデ、外面は縦のハケ目調整。	
77	〃	〃	12.1 (7.0) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。	外面縦のハケ目。	全体的に磨耗が著しい。
78	〃	〃	10.0 (7.3) —— ——	〃	口縁部内外面ヨコナデ、外面は縦のハケ目、内面に指頭圧痕がつく。	
79	〃	〃	—— (7.5) —— 8.8	底部は平底で、胴部は大きく開く。	外面縦のハケ目。内面指頭によるナデあげ。	内面　黒灰色。 外面　黄褐色。
80	〃	〃	—— (4.7) —— 8.2	底部はやや上げ底。	外面ヘラ磨き。内面はナデ。	
81	〃	〃	—— (6.0) —— 10.0	底部は平底。胴部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面縦のハケ目。内面指頭圧痕が残る。	内面　灰黒色。 外面　灰褐色。
82	〃	〃	—— (4.8) —— 9.6	底部は平底。胴部は大きく開く。	外面縦のハケ目。内面はナデ調整。	内面樹脂状物塗布。磨耗が若干進む。 内面　黒褐色。 外面　赤褐色。
83	〃	〃	—— (5.8) —— 10.4	底部は平底。	外面縦のハケ目。内面指による強いナデあげ。	内面に黒斑。
84	〃	〃	—— (3.8) —— 10.2	〃	外面縦のハケ目。内面に指頭圧痕が残る。	外面の底部附近に黒斑有り。
85	〃	〃	—— (4.6) —— 10.0	〃	不明。	磨耗が著しい。
86	〃	〃	—— (4.1) —— 11.4	底部はやや上げ底。	〃	〃
87	〃	〃	—— (6.4) —— 11.4	〃	外面一部にヘラ磨き、内面ヘラ削り。指頭圧痕。	内面に黒斑。 外部に若干の煤状炭化物。
88	〃	〃	—— —— —— ——	〃	外面ヘラ磨き。内面ナデ調整。指頭圧痕が残る。	
89	〃	〃	6.0 (4.4) —— ——	底部は平底。	外面ハケの後ナデ。内面指頭圧痕。	薄手土器。外面底部に黒斑。 内面　白灰色。 外面　灰黄褐色。
90	〃	〃	—— (3.1) —— 7.0	〃	不明。	磨耗が著しい。 薄手土器。 下胴部に煤状炭化物。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
91	ＳＲ１	甕	26.6 (3.9) —— ——	如意形に外反する口縁部をもつ。口唇部下端に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
92	〃	〃	20.5 (4.4) —— ——	〃	〃	〃
93	〃	〃	18.4 (4.7) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部下端に刻目。胴上部に一条のヘラ描沈線が施される。	口縁部内外面ナデ。	
94	〃	〃	17.9 (6.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。	不明。	磨耗が著しい。
95	〃	〃	15.8 (2.6) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。口唇部上下端に刻目。外面にヘラ描沈線が施される。	口唇部はヨコナデのため窪む。	内面に黒斑。
96	〃	〃	15.4 (7.4) —— ——	口縁部は如意形に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面縦のハケ目、内面はナデ調整。	内面に黒斑。
97	〃	〃	19.1 (5.4) —— ——	口縁部くの字状に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。	内面　黒褐色。（二次焼成） 外面　黄褐色。 内面に炭化物付着。
98	〃	〃	11.0 (3.0) —— ——	口縁部くの字状に外反、端部やや肥厚する。	口唇部ナデのため窪む。口縁部内面横位のハケ目、外面ヨコナデの後ハケ目。胴上部縦のハケ目。	
99	〃	〃	16.6 (4.5) —— ——	口縁部くの字状に外反する。	口唇部ナデのため窪む。口縁部内外面ヨコナデ調整。	内面に黒斑。
100	〃	〃	14.0 (6.8) —— ——	口縁部は外反する。端部やや肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面は縦のハケ目。	
101	〃	〃	14.0 (5.8) —— ——	口縁部はくの字状に外反。端部は肥厚して面をなす。端面に凹線文が施されるが、はっきりしない。	口縁部外面ヨコナデ。頸部から胴部にかけて縦のハケ目。胴部内面ヘラ削り。	口縁付近に煤状炭化物付着。
102	〃	〃	15.0 (3.7) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。端部は肥厚し面をなす。端面に２本の凹線文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目、内面はナデ調整。	
103	〃	〃	15.4 (3.0) —— ——	口縁部は大きく外反し、口唇部は上方にやや突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。	
104	〃	〃	15.0 (5.0) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚し面をなす。２本の浅い凹線文が施される。	口縁部外面ヨコナデ。頸部から胴部にかけて縦のハケ目。内面に指頭圧痕が残る。	
105	〃	〃	16.2 (4.0) —— ——	口縁部は外反する。端部は貼付で拡張する。端面に２本の凹線文。	口縁部外面ヨコナデ。頸部から胴上部にかけて縦のハケ目。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
106	ＳＲ１	甕	22.8 (3.0) —— ——	口縁部くの字状に外反。端部は肥厚して面をなす。端面に３本の凹線文。２ヶ所に竹管刺突文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面にハケ目。	
107	〃	〃	15.2 (6.5) —— ——	口縁部はくの字状に外反。肩部がやや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り。	外面、口唇部近くに煤状炭化物。
108	〃	〃	12.8 (7.0) —— ——	口縁部は外反する。	不明。	磨耗が著しい。
109	〃	〃	17.8 (9.6) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。	口縁部から胴上部は縦のハケ目、胴部中程から横のハケ目。口縁部内面は横位のハケ目。胴部内面に指頭圧痕が残る。	
110	〃	〃	15.8 (7.4) —— ——	口縁部は外反する。肩部はやや張る。	口縁部外面横方向のナデ。胴部内面に指頭圧痕。	
111	〃	〃	19.0 (3.4) —— ——	口縁部はくの字状に外反。端部はやや肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面はナデ。	
112	〃	〃	17.4 (2.7) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。口縁部外面ヨコナデ。頸部から胴上部にかけて縦のハケ目。	
113	〃	〃	—— —— —— ——	口縁部はくの字状に外反。端部はやや肥厚。口唇部は擬凹線。	口縁部内外面ヨコナデ。外面の一部にハケ目が残る。胴部外面縦のハケ目、内面はヘラ削り。	
114	〃	〃	22.0 (3.0) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。さらに上方に拡張し面をなす。端面に２本の凹線文。	口縁部外面にヨコナデ調整。	
115	〃	〃	24.2 (4.0) —— ——	口縁部は外反し、さらに端部は上方に拡張し面をなす。端面に凹線文が施さるれが、磨耗ではっきりしない。	不明。	磨耗が著しい。
116	〃	〃	12.2 (4.7) —— ——	口縁部は外反する。	口縁部内面横位のハケ目。胴部内面は不定方向のナデ。	
117	〃	〃	—— (4.8) —— 6.2	底部は上げ底。	外面は縦位のハケ目。	内面に黒斑。
118	〃	〃	—— (3.9) —— 7.4	底部は平底。	外面は縦のハケ目。内面に指頭圧痕。	外面、樹脂状物塗布。
119	〃	〃	—— (4.1) —— 8.3	〃	不明。	磨耗が著しい。
120	〃	〃	—— (4.7) —— 5.6	〃	外面は縦のハケ目と指頭圧痕が残る。	底部近くに繊維痕。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
121	ＳＲ１	甕	—— (3.7) —— 8.0	底部は平底。	外面ハケ目。内面はナデ調整。	
122	〃	〃	—— (4.5) —— 7.4	〃	外面ナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。	
123	〃	〃	—— (4.5) —— 9.6	〃	〃	
124	〃	〃	—— (3.5) —— 7.2	底部はややあげ底。	内外面ナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。	
125	〃	〃	—— (4.1) —— 9.0	底部はややあげ底で、器壁が薄い。	内面は縦方向のヘラ削り。	外面に黒斑。 内面　灰黒色。 外面　暗赤褐色。
126	〃	〃	—— (5.5) —— 5.7	底部は平底。	不明。	外面に黒斑。 磨耗が著しい。
127	〃	〃	—— (3.9) —— 8.2	〃	内面に指頭圧痕が残る。	磨耗が著しい。
128	〃	〃	—— —— —— 7.0	底部は平底。器壁が厚い。	内面に指頭圧痕が残る。	
129	〃	〃	—— (8.3) —— 4.6	底部はやや上げ底。胴部へやや内湾気味に立ち上がる。	外面縦のハケ目。内面はヘラ削り。	外面に黒斑。
130	〃	〃	4.0 —— —— ——	底部は平底。胴部はやや内湾気味に立ち上がる。	内面はヘラ削り。	
131	〃	〃	—— (5.8) —— 6.6	底部は平底。胴部へ直線的に立ち上がる。	内面縦のハケ目。外面不明。	外面に黒斑。
132	〃	〃	—— (4.8) —— 6.2	底部は平底。	不明。	磨耗が著しい。 内面　黒褐色。 外面　淡赤褐色。
133	〃	高　杯	25.8 (3.1) —— ——	体部で屈曲し、口縁部は外傾する。端面は肥厚して面をなし、２本の凹線文、口縁部外面も４本の凹線文。	口縁部内面、体部外面はナデ調整。	内面　暗茶褐色。 外面　暗灰褐色。
134	〃	〃	25.4 (5.2) —— ——	体部で屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。	
135	〃	〃	25.8 (3.1) —— ——	〃	不明。	磨耗が著しい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
136	ＳＲ１	高　杯	21.8 (2.6) —— ——	体部で屈曲し、口縁部は外反する。	不明。	磨耗が著しい。
137	〃	〃	20.4 (3.3) —— ——	体部から内湾気味に外上方に立ち上がる。	口縁部内外面ヘラ磨き。体部外面にハケ目調整。	黒色。
138	〃	〃	—— (12.0) 7.0 ——	脚部はハの字状に開く。中央に穿孔が施される。	脚部外面縦位のハケ目。内面はしぼり痕が観察できる。	
139	〃	〃	—— (7.4) —— ——	杯部と裾部が欠損。脚部はハの字状に開く。	内面にしぼり痕。外面不明。	磨耗が著しい。
140	〃	〃	—— (7.6) —— ——	〃	〃	〃
141	〃	鉢	17.6 (4.0) —— ——	口縁部で外反し、端部が肥厚する。	口唇部外面ヨコナデのため、端面は窪む。外面は縦のハケ目、内面は横位のハケ目。	
142	Ｐ　１	〃	14.6 6.4 —— 5.6	底部は上げ底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	調整は不明だが、指頭圧痕が残る。	外面に黒斑。 転用の鉢か？
143	ＳＲ１	〃	12.1 7.0 —— ——	底部は平底。胴部は外傾して立ち上がる。	口縁部内外面ナデ。胴部は磨耗が著しいが、外面ヘラ磨き。	
144	〃	蓋	15.6 8.0 —— 5.7	天井部は窪む。口縁部は外下方に下る。端部は丸くおさめる。	外面横位の叩き。	内面　褐黒色。 外面　黄赤褐色。 煤状炭化物付着。
145	〃	〃	3.2 (4.5) —— ——	天井部は平坦。	内外面指頭圧痕が残る。	
146	〃	壺	—— (9.8) 9.1 2.2	小型の壺で、口縁部が欠損。	内面に指頭圧痕が残る。	外面に黒斑。 磨耗が著しい。 内面　灰褐色。 外面　赤茶褐色。
147	ＳＲ２	〃	(20.0) (4.0) —— ——	口縁部は外反する。頸部に有段部をもつ。	口縁部内外面ナデ調整。一部にハケ状原体の圧痕がつく。	
148	〃	〃	15.8 (3.3) —— ——	口縁部は外反する。頸部にヘラ描沈線文が施される。	口縁部外面にヘラ磨き。内面は不明。	
149	〃	〃	16.2 (3.2) —— ——	口縁部は外反する。外面に３条のヘラ描沈線が施される。	不明。	
150	〃	〃	18.6 (4.2) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。端部は肥厚して、上下端に刻目。頸部に一条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面ナデ調整。口唇部中央はナデのためやや窪む。	内面　灰茶褐色。 外面　白灰黄褐色。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
151	ＳＲ２	壺	15.8 (4.7) —— ——	口縁部は外反する。頸部に一条のヘラ描沈線文。	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	
152	〃	〃	14.6 (3.3) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。頸部に６本単位のヘラ描沈線が施される。	口縁部内面に横位のハケ目、外面にナデ調整が施される。	外面に樹脂状物塗布
153	〃	〃	11.3 (5.4) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口縁部内面に２条の貼付突帯と棒状刺突文。頸部外面にヘラ描沈線文とその後貼付突帯に刻目を付す。	口縁部内外面ナデ調整。	内面　暗灰褐茶色。 外面　淡赤黄茶色。
154	〃	〃	20.5 —— —— ——	口縁部はなめらかに外反する。端部はやや肥厚する。口縁部下端に刻目。頸部にヘラ描沈線と刻目を付した貼付突帯。	口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目調整。	
155	〃	〃	15.6 (8.6) —— ——	口縁部は緩やかに外反。口唇部下端に刻目。頸部に２条の沈線間に刻目。	口縁部と頸部外面は縦のハケ目。口縁部内面は横位のハケ目調整。内面に指頭圧痕が残る。	
156	〃	〃	19.0 (9.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。頸部にハケ目の後、12本のヘラ描沈線が施される。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部にはハケ目調整。内面には、全体的にナデと指頭圧痕が残る。	
157	〃	〃	19.0 (4.6) —— ——	口縁部は外反する。頸部にハケ目の後、５本のヘラ描沈線が確認できる。	口縁部内外面ナデ調整。内面に指頭圧痕が残る。	
158	〃	〃	16.6 (9.8) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。端部やや肥厚。口唇部下端に刻目。	口唇部にナデ調整。外面にハケ目調整。内面はナデ。	
159	〃	〃	14.2 (5.3) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。その他磨耗で不明。	内面に黒斑。 内面　灰白褐色。 外面　赤黄褐色。
160	〃	〃	20.1 (1.9) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。 口唇部上下端に刻目。	口唇部はナデのため窪む。口縁部内外面共ナデ調整。	
161	〃	〃	(17.6) (1.5) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。端部は肥厚する。口縁部内面に３条の刻目を付した貼付突帯。棒状の刺突文。	口唇部ナデ調整。	
162	〃	〃	27.8 (2.1) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。端部は肥厚する。口唇部上下端に刻目。口縁部内面に櫛描波状文。	口唇部中央はナデのため窪む。	
163	〃	〃	20.2 (1.9) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部上下端に刻目。口縁部内面に２条の刻目を付した突帯と、棒状刺突による円孔が穿たれる。	口縁部外面はナデ調整。	
164	〃	〃	25.0 (1.7) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付突帯の後、口唇部上下端に刻目。口縁部内面に、６本の櫛描直線文の後に長い刻目。	口縁部内外面ナデ調整。	内面に黒斑。
165	〃	〃	14.4 (6.3) —— ——	口縁部は外反する。口縁部内面に簾状文。頸部外面は櫛描直線文の間に簾状文。	口縁部内外面はナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
166	ＳＲ２	壺	24.8 (2.6) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部は上下端に刻目。口縁部内面に、刻目を付した３条の突帯。内面から刺突されているが完通してない。	口縁部外面ナデ調整。口唇部刻目の後ナデ。	
167	〃	〃	25.0 (2.0) —— ——	口縁部破片で、端部はやや肥厚する。口縁部内面に刻目を付した３条の突帯を貼付。口唇部上下端に刻目。	口唇部刻目の前にナデ調整で窪む。	内面　明茶灰色。 外面　茶灰色。
168	〃	〃	—— (4.2) —— ——	口縁部は外反する。口唇部上下端に刻目。	口縁部外面に指頭圧痕とナデ調整。	
169	〃	〃	20.6 (2.9) —— ——	口縁部は外反。口唇部上下端に刻目。	口唇部ナデの後刻目。	
170	〃	〃	19.4 (3.6) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	口縁部外面は指頭圧痕が残り、内面はナデと一部にハケ目。頸部外面にハケ目の後ナデ。	
171	〃	〃	(16.8) (4.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部は刻目口縁部外面に櫛描波状文と頸部に櫛描波状文の後、刻目を付した貼付突帯。	口縁部内面ナデ調整。	
172	〃	〃	—— —— —— ——	胴上部から頸部破片である。胴上部に４本単位で上から櫛描直線文、波状文、櫛描直線文、縦の沈線文が施される。	頸部外面に縦のハケ目、内面はナデ調整。胴部内面に指頭圧痕がつく。	外面に黒斑。
173	〃	〃	14.4 (3.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部上下端に刻目。頸部に櫛描直線線文と、刻目を付した貼付突帯。	不明。	磨滅が著しい。
174	〃	〃	13.7 (1.9) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。 端部はやや肥厚する。	口唇部はナデのため窪む。 口縁部外面縦のハケ目。	
175	〃	〃	(11.7) (3.9) —— ——	口縁部は大きく外反する。	口縁部外面に指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目、内面に指頭圧痕が残る。	
176	〃	〃	12.7 (4.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。	口唇部ナデ調整。口縁部貼付後指頭圧痕。頸部は横位と縦位のハケ目調整。	薄手土器。
177	〃	〃	15.8 (4.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面に貼付突帯。	口縁部外面はハケ目調整。内面はヘラ磨き。	薄手土器。
178	〃	〃	17.3 (2.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。	貼付後指頭圧痕。	内面に黒斑。
179	〃	〃	17.2 (3.8) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口縁部貼付後指頭圧痕。口縁部内面に横のハケ目。	
180	〃	〃	14.8 (3.6) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕、内面は横位のハケ目。頸部外面縦のハケ目。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
181	ＳＲ２	壺	16.0 (4.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。	口縁部貼付後指頭圧痕。内面は横位のハケ目。外面に縦のハケ目。	
182	〃	〃	15.0 (5.8) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕、内面も指頭圧痕が残る。	
183	〃	〃	14.6 (3.3) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。口唇部ナデのため窪む。内面横のハケ目。頸部外面は縦のハケ目。	
184	〃	〃	17.0 (4.5) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。	
185	〃	〃	15.0 (3.0) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。外面ハケ目の後ナデ。内面横のハケ目。	
186	〃	〃	11.6 (2.9) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。口縁部内面に横のハケ目。	内面　灰褐色。 外面　黄灰褐色。
187	〃	〃	15.8 (5.4) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。貼付後指頭圧痕。	
188	〃	〃	(18.6) (5.3) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。	
189	〃	〃	17.6 (3.0) —— ——	〃	〃	黄褐色。
190	〃	〃	13.6 (2.2) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。 貼付後指頭圧痕。	
191	〃	〃	17.2 (4.5) —— ——	〃	〃	
192	〃	〃	13.1 (3.3) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。頸部内面ナデ調整。	薄手土器。
193	〃	〃	15.3 (3.3) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。内面は横位のハケ目。	薄手土器。
194	〃	〃	13.8 (3.0) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。貼付後指頭圧痕。	内面　白茶色。 外面　赤灰色。
195	〃	〃	—— —— —— ——	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態・文　様	手　　法	備　　考
196	ＳＲ２	壺	14.8 —— —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口縁部内面はナデ調整。口縁部貼付後指頭圧痕。	内面に黒斑。薄手土器。
197	〃	〃	19.2 (7.2) —— ——	〃	口唇部はナデ。貼付後指頭圧痕。頸部から胴部にかけて内面に指頭圧痕。	白黄褐色。
198	〃	〃	19.2 (5.1) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。	
199	〃	〃	16.7 (5.8) —— ——	〃	口唇部はナデによる調整。 口縁部内面に一部磨き。	
200	〃	〃	16.9 (5.0) —— ——	〃	口唇部ナデのため窪む。貼付後指頭圧痕。頸部外面に縦のハケ目。口縁部内面横位のハケ目。	口縁部付近に黒斑。
201	〃	〃	17.8 (3.7) —— ——	〃	口唇部ナデのため窪む。貼付後指頭圧痕。頸部は縦のハケ目。内面は横位のハケ目。	
202	〃	〃	22.0 (10.9) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。口縁部から頸部にかけて横位のハケ目。外面に指頭圧痕が残る。	口縁部内面に黒斑。 内面　白灰褐色。 外面　赤茶褐色。
203	〃	〃	18.2 (4.5) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。貼付後指頭圧痕。頸部外面はナデと縦に浅いヘラ状工具による圧痕。	
204	〃	〃	18.2 (5.8) —— ——	〃	口唇部はナデのため窪む。薄く粘土帯貼付後指頭圧痕。口縁部内面ハケ目調整。	
205	〃	〃	28.5 (19.0) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。内面は横位のハケ目。頸部外面は縦のハケ目。胴部は横位と斜位のハケ目。内面は指頭圧痕。	
206	〃	〃	20.4 (7.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。頸部外面に８～９本の櫛描直線文。	口縁部貼付後指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目、内面横位のハケ目が施される。	
207	〃	〃	18.4 (7.2) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口唇部はナデ。貼付後指頭圧痕。外面縦のハケ目。	
208	〃	〃	15.4 (2.3) —— ——	口縁部は漏斗状に外反する。口縁部内面に２条の刻目を付した貼付突帯。	口唇部ナデのため窪む。口縁部外面に指頭圧痕がつく。	赤橙色。
209	〃	〃	13.0 (3.5) —— ——	口縁部は外反する。薄い貼付突帯。口縁部内面には櫛描波状文、棒状刺突文。	口縁部内面は縦のハケ目。貼付後指頭圧痕。	
210	〃	〃	—— —— —— ——	口縁部は漏斗状に外反する。貼付口縁。内面にハケ状原体による押圧。	口縁部貼付後指頭圧痕。頸部に縦のハケ目。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
211	ＳＲ２	壺	18.6 (7.5) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚する。口縁部内面から棒状刺突により円形に穿たれる。	口縁部内面横位のハケ目。口唇部に指頭圧痕。	内面に黒斑。
212	〃	〃	17.6 (7.9) —— ——	口縁部は外反し、貼付口縁。口縁部内面は斜格子の刻目。	口唇部はナデ。貼付後指頭圧痕。	内面　暗茶褐色。 外面　暗黄茶褐色。
213	〃	〃	16.8 (4.6) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面は長い刻目。頸部外面櫛描直線文。	口唇部ナデ調整。口縁部内面はナデ調整。	
214	〃	〃	22.1 (3.8) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚する。口唇部下端に刻目と口縁部に棒状刺突文が施される。	口縁部内外面ナデ調整。	内面　黒褐色。 外面　茶褐色。
215	〃	〃	12.4 —— —— ——	口縁部は外反し貼付口縁。口唇部下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部は縦のハケ目。	
216	〃	〃	17.0 (2.2) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口唇部に刻目。	貼付後指頭圧痕。内面はナデ調整。	
217	〃	〃	26.4 (1.9) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。内面に櫛描の扇形文。	口唇部ナデのためやや窪む。貼付後指頭圧痕。	内面に黒斑。
218	〃	〃	18.8 (2.1) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部上下端に刻目。口縁部外面に櫛描直線文。	口縁部内面は不明。	
219	〃	〃	18.8 (4.0) —— ——	口縁部は外反し、貼付口縁で端部上端に刻目。	頸部内外面ハケ目。	
220	〃	〃	19.0 (3.4) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁で、口唇部に刻目。	不明。	全体的に磨耗が著しい。
221	〃	〃	—— —— —— ——	口縁部は外反する。口唇部下端に刻目、外面に三角突帯を貼付、その下に櫛描直線文。	口縁部内外面ナデ調整。	
222	〃	〃	—— —— —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部外面は縦のハケ目、内面は横のハケ目。	
223	〃	〃	27.8 (4.4) —— ——	口縁部は外反する。口縁部をつぎたして貼付している。口唇部下端に刻目。	口唇部ナデで窪む。外面は指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目。	
224	〃	〃	22.8 (5.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部外面はナデ調整、内面は不明。	外面に樹脂状物塗布。
225	〃	〃	15.4 (4.0) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口唇部の上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部外面はハケ目調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
226	ＳＲ２	壺	24.0 (3.9) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	口唇部ナデ。貼付後指頭圧痕。	
227	〃	〃	21.4 (3.2) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。ナデの後口唇部上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部外面ハケ目。	
228	〃	〃	17.0 (2.6) —— ——	口縁部は外反する。口唇部ナデの後上下端に刻目。	口唇部ナデのため窪む。外面に指頭圧痕。	
229	〃	〃	11.9 (3.4) —— ——	口縁部はゆるやかに外反する。貼付口縁。口唇部は上下端に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
230	〃	〃	(14.8) (10.9) —— ——	頸部は直立して立ち上がり、口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部はナデの後上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。口頸部外面に縦のハケ目、内面は横位のハケ目。内外面指頭圧痕が残る。	
231	〃	〃	16.4 (4.0) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚する。口唇部上下端に刻目。	外面ハケ目だが磨滅で不明。内面は横位のハケ目。	
232	〃	〃	14.6 (3.6) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部の上下端に刻目。	口縁部内面にハケ目調整。	
233	〃	〃	13.6 (3.3) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁。口唇部上下端に刻目。	不明。	
234	〃	〃	11.4 (3.4) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は上下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。	
235	〃	〃	(19.4) (3.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁で、口唇部上下端にナデの後刻目。	貼付後指頭圧痕。	
236	〃	〃	24.0 (8.2) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付後上下端に刻目。口縁部に棒状刺突文が施される。	口唇部はナデのため窪む。頸部内外面ナデ調整。	
237	〃	〃	27.0 (2.1) —— ——	口縁部は大きく外反する。端部は肥厚して上下両端にナデの後刻目。	口縁部内面に横位のハケ目。外面には指頭圧痕が残る。	
238	〃	〃	20.0 (1.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。端部は肥厚する。端面は強いナデの後上下端に刻目。	口唇部は強いナデのため窪む。口縁部内面は横位のハケ目、外面には指頭圧痕が残る。	
239	〃	〃	24.8 (3.1) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口唇部には長く細い刻目がつく。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。	
240	〃	〃	22.2 (3.7) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。端部は肥厚し面をなす。端面は科格子の刻目。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目。	

挿図番号	遺構番号	器構	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
241	SR2	壺	21.6 (2.0) —— ——	口縁部は外反する。端部がやや肥厚する。端面に半截竹管状の刺突が施される。	口縁部内外面ナデ調整。	内面　赤黄褐色。 外面　赤褐色。
242	〃	〃	19.0 (1.7) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。端面には刻目。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。	
243	〃	〃	20.0 (3.7) —— ——	口縁部は外反する。端部はやや肥厚する。口唇部はナデの後上下端に刻目。	口唇部はナデ。内外面は不明。	磨滅が著しい。
244	〃	〃	20.0 (1.3) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口唇部はハケ状原体による圧痕。	口縁部貼付後指頭圧痕。	
245	〃	〃	20.0 (2.0) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部は斜位の刻目。口縁部内面にも刻目が施される。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。	
246	〃	〃	15.4 (2.6) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部は刻目。	〃	
247	〃	〃	17.4 (3.3) —— ——	〃	〃	
248	〃	〃	14.8 (1.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は刻目。口縁部内面にも刻目が施される。	〃	
249	〃	〃	15.4 (4.2) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は斜格子の刻目。口縁部内面は櫛描波状文。	〃	内面　黄茶褐色。 外面　〃
250	〃	〃	16.0 (2.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部に刻目。	〃	
251	〃	〃	16.3 (3.9) —— ——	〃	〃	
252	〃	〃	14.2 (10.8) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部に刻目を施す。	口縁部内面はヨコナデ。口縁部外面は貼付後指頭圧痕。頸部は外面ヨコナデ。	
253	〃	〃	16.0 (2.7) —— ——	口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。口唇部は斜格子の刻目が施される。	外面はナデ。内面は一部にハケ目。	
254	〃	〃	19.6 (1.7) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。内面にハケ状原体による刻目と棒状工具による刺突文。口唇部はハケ状原体による格子の刻目。	口縁部内面ナデ、外面はハケ目調整。	
255	〃	〃	22.4 (2.3) —— ——	口縁部は漏斗状に開くものと考えられる。端部は垂下し面をなす。端面はハケ状原体による刻目。内面は棒状工具による刺突文。	口縁部内面はナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
256	ＳＲ２	壺	19.2 (4.5) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部は斜格子の刻目。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部外面縦のハケ目、内面は横位のハケ目。	
257	〃	〃	28.0 (2.4) —— ——	〃	口縁部貼付後指頭圧痕。	
258	〃	〃	22.0 (7.5) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁で端部は広く拡張する。端面はヘラ描による斜格子の刻目。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。頸部は内外面ナデ調整。	
259	〃	〃	21.2 (4.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は斜格子の刻目。	口縁部外面貼付後指頭圧痕。内面は横位のハケ目。頸部は外面縦のハケ目、内面一部ヘラ磨き。	
260	〃	〃	18.0 (5.0) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は斜格子の刻目。口縁部には棒状工具による刺突文。	口縁部貼付後指頭圧痕。頸部は内外面ナデ調整。	
261	〃	〃	(12.5) (4.2) —— ——	口縁部は漏斗状に大きく開く。貼付口縁。内面に貼付突帯。口唇部に斜格子文。頸部に10本の櫛描直線文、一条の貼付突帯。	口縁部から頸部にかけて、内面は横位のハケ目。	
262	〃	〃	20.2 (1.4) —— ——	口縁部は漏斗状に開くものと思われる。貼付口縁で、口唇部にハケ状原体による刻目。内面も２段の刻目と棒状刺突文。		
263	〃	〃	22.9 (3.9) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。貼付口縁。口唇部にハケ状原体の刻目。内面に斜格子の圧痕。	口縁部外面貼付後指頭圧痕、内面は横位のハケ目。頸部外面はナデ調整。	
264	〃	〃	22.4 (9.6) —— ——	口縁部は外反する。口唇部は肥厚する。頸部に簾状文が施される。	口唇部と外面は指頭圧痕が施される。頸部にかけてはヨコナデ調整。	
265	〃	〃	21.2 (8.2) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部は刻目の後ナデ。胴上部に７～８本単位の櫛描直線と波状文が施される。	口縁部貼付後指頭圧痕。内面はナデ調整。頸部外面ナデ、内面は横位のハケ目。	
266	〃	〃	—— (7.1) 9.2 ——	胴上部から頸部の破片であるが、３段の櫛描波状文が施される。	頸部外面は縦のハケ目調整。	
267	〃	〃	8.6 (10.5) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面にハケ状原体による圧痕と円形浮文。頸部に凹線文と微隆起帯貼付と櫛描直線文。	口唇部はナデ調整。	薄手土器。 内面　灰色。 外面　白黄褐色。
268	〃	〃	20.1 (3.1) —— ——	口縁部は外反する。貼付突帯。	頸部内面ハケ目調整。	薄手土器。 内面　黄褐色。 外面　赤褐色。
269	〃	〃	23.6 (2.8) —— ——	口縁部は外反する。口唇部下に刻目と外面に櫛描直線文が施されるが明確でない。 貼付口縁。	口縁部内面ヨコナデ調整。	薄手土器。 内面　灰褐色。 外面　淡茶褐色。
270	〃	〃	13.8 (2.4) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部下端に刻目。外面に２条の微隆起帯。	口縁部内面はナデ調整。	薄手土器。 内面　淡黄茶褐色。 外面　暗灰褐色。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
271	ＳＲ２	壺	16.7 (1.6) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部下端に刻目。外面に２条の微隆起帯が貼付される。	不明。	薄手土器。
272	〃	〃	17.0 (4.7) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部下端に刻目。	〃	外面に煤状炭化物。
273	〃	〃	22.8 (2.4) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁か。外面に微隆起帯を貼付。横位と縦の櫛描直線文が施される。	〃	薄手土器。 内面　淡灰褐色。 外面　淡灰黄褐色。
274	〃	〃	20.2 (1.6) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。外面微隆起帯を貼付。	口縁部外面にヨコナデとハケ目か、内面はナデ調整。	薄手土器。
275	〃	〃	20.6 (1.7) —— ——	口縁部は漏斗状に開く。口唇部下端に刻目。外面に微隆起帯と櫛描の縦線。	口縁部内面にナデ調整。	〃
276	〃	〃	20.0 (1.3) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部下端に刻目。外面に突帯を貼付。外面に櫛描直線文。	不明。	〃
277	〃	〃	—— —— —— ——	胴部上位に２本の縦線と刻目。微隆起帯に円形浮文を貼付。	〃	〃
278	〃	〃	15.8 (6.6) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。外面に刻目。口縁部下にヘラ原体による圧痕。頸部に隆起帯。	内面はナデ調整。	薄手土器。 内外面ともに丹塗りのあと。
279	〃	〃	14.6 (4.3) —— ——	頸部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反。貼付口縁で外面に刻目。	内面に指頭圧痕が残る。	薄手土器。
280	〃	〃	17.2 (3.5) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。頸部外面に浅いヘラ描による縦線。	不明。	〃
281	〃	〃	19.4 (3.2) —— ——	口縁部は大きく外反。貼付口縁。口唇部下端に刻目。外面に横位の櫛描直線文。	口縁部内外面ナデ調整。	〃
282	〃	〃	17.2 (4.8) —— ——	口縁部はゆるやかに外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。口唇部はナデ。口縁部内外面ナデ調整。	
283	〃	〃	15.8 (5.0) —— ——	〃	口唇部はナデ、貼付後指頭圧痕。	全体的に磨滅が著しい。
284	〃	〃	15.7 (4.0) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。内外面ナデ調整。	
285	〃	〃	13.2 (6.4) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
286	ＳＲ２	壺	15.0 (5.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。外面不明。内面はナデ調整。	
287	〃	〃	16.8 (6.4) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁。	口縁部から頸部にかけて縦のハケ目。	
288	〃	〃	19.8 (5.5) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	貼付後指頭圧痕。外面ハケ目だが磨滅ではっきりしない。	
289	〃	〃	20.8 (3.6) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。内面横位のハケ目。	
290	〃	〃	21.3 (4.0) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。	
291	〃	〃	24.6 (5.8) —— ——	〃	貼付後指頭圧痕。内面横位のハケ目。	磨耗が著しい。
292	〃	〃	24.8 (6.0) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部内面に横位のハケ目。	
293	〃	〃	15.5 (8.6) —— ——	口縁部は外反する。貼付口縁。	口唇部ナデ調整。貼付後指頭圧痕。口縁部内面横のハケ目。頸部は縦のハケ目。内面に指頭圧痕が残る。	
294	〃	〃	(19.8) (3.4) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁。口唇部下端に刻目。	貼付後指頭圧痕。頸部外面は縦のハケ目調整。	
295	〃	〃	17.8 (3.9) —— ——	口縁部は緩やかに外反。長い貼付口縁、その下端に圧痕がつく。	口唇部ナデ。口縁部内面ナデ調整。	内面　黄黒灰色。 外面　灰黒色。
296	〃	〃	12.9 (4.2) —— ——	口縁部は大きく外反する。貼付口縁で、口唇部下端に刻目。	口縁部内面に横位のハケ目、外面に縦のハケ目調整。	
297	〃	〃	19.8 (3.4) —— ——	口縁部は大きく外反。厚い粘土帯を貼付し面を作る。口唇部下端に刻目。	口唇部はハケ目。口縁部内面横位のハケ目、外面は貼付後指頭圧痕。外面は縦のハケ目。	
298	〃	〃	22.2 (2.7) —— ——	口縁部は漏斗状に大きく開く。口唇部に３条の凹線文。	内外面不明。	
299	〃	〃	8.0 (5.5) —— ——	口縁部は外反する。口唇部下端に刻目。	口唇部はナデのため窪む。口縁部内面ヨコナデ、外面貼付後指頭圧痕。頸部外面縦位のハケ目の後ナデ、内面は剝落。	
300	〃	〃	18.4 (3.1) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚して面をなす。３条の凹線文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
301	ＳＲ２	壺	— (1.6) — 5.8	底部は平底。	不明。	薄手土器。
302	〃	〃	— (3.2) — 6.4	〃	外面縦のハケ目。内面指頭圧痕が残る。	〃
303	〃	〃	— (3.3) — 6.2	底部は上げ底。	外面縦のハケ目。内面はナデ調整。	〃
304	〃	〃	— (5.1) — 4.8	底部は平底。	外面指によるナデ。	〃
305	〃	〃	— (4.6) — 6.8	底部は平底で、胴部は大きく開く。	外面ナデ調整。内面ヘラナデ。	
306	〃	〃	— (3.8) — 10.8	底部は上げ底。	不明。	磨耗が著しい。外面に黒斑。
307	〃	〃	— (3.7) — 10.0	底部は平底と考えられる。胴部は大きく開いて立ち上がる。	外面ナデ。内面ナデ調整。	
308	〃	〃	— (4.7) — 9.4	底部はやや上げ底。	外面ハケ目。内面強いナデ。	外面に黒斑。
309	〃	〃	— (5.7) — 7.6	底部は上げ底。	外面ヘラナデ。内面はナデ。	
310	〃	〃	— (5.8) — 5.4	底部はやや上げ底。胴部へ大きく開いて立ち上がる。	外面ヘラ磨き。内面は指頭圧痕及びヘラナデ調整。	
311	〃	〃	— (4.9) — 9.0	底部はやや上げ底気味。	外面に縦のハケ目調整。	外面に黒斑。
312	〃	〃	— (4.6) — 7.6	底部は平底。胴部は大きく開いて立ち上がる。	外面丁寧なナデと縦のハケ目。内面はナデ調整。	
313	〃	〃	— (5.2) — 13.2	底部はほぼ平底。	不明。	
314	〃	〃	— (4.7) — 9.7	底部は上げ底。	外面は縦位のハケ目調整。	
315	〃	〃	— (5.4) — 9.8	底部は平底。	外面縦のハケ目。内面ナデあげと指頭圧痕がつく。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
316	SR2	壺	— (5.4) — 9.0	底部は平底。	内面に指頭圧痕が残る。	
317	〃	〃	— (5.8) — 10.6	底部は上げ底。	外面ハケ目。内面ヘラ削りされているが磨耗ではっきりしない。	内面　灰黒色。 外面　淡赤褐色。
318	〃	〃	— (9.8) — 6.4	平坦な底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。	胴部中位外面横位のハケ目、下位は斜位のハケ目。内面は強い指ナデ。	内面　暗黒灰色。 外面　黄茶黒灰褐色。
319	〃	〃	— (4.5) — 8.7	底部は上げ底。	外面不明。内面はハケ目調整。	
320	〃	〃	— (6.8) — 11.4	底部は平底。胴部へ直線的に立ち上がる。	外面は縦のハケ目と底部はヘラ磨き。内面はヘラナデだが磨滅して不明。	外面に黒斑。
321	〃	〃	— (6.8) — 10.4	底部は平底。	外面ハケ目の後一部ヘラ磨き。内面はナデ。	
322	〃	〃	— (11.8) — 6.8	底部は上げ底。胴部へ直線的に立ち上がる。	外面ヘラナデ。	外面に黒斑。
323	〃	〃	— (11.8) — 9.2	底部は平底。	胴部はヘラ描による縦線、ハケ目の後ナデ。内面はナデで指頭圧痕が残る。	
324	〃	〃	— (9.1) — 6.7	〃	内面に指頭圧痕が残る。	
325	〃	〃	— (24.6) 16.4 8.5	底部は平底。口縁部のみ欠損する。頸部にヘラ描沈線が施される。	外面はハケ目調整。内面に指頭圧痕が残る。粘土帯接合痕が観察できる。	外面に黒斑。 内面　黒橙色。 外面　黒色。 (いぶしたかのように全面)
326	〃	甕	27.6 (3.2) — —	口縁部は如意形に外反する。頸部に有段部をもつ。口唇部に刻目をもつ。	口縁部外面はナデ調整。内面はハケ目の後ナデ。頸部外面ハケ目。	
327	〃	〃	19.3 (2.0) — —	口縁部は巻き込み口縁。	不明。	朝鮮系無文土器。 内面　淡黄橙色。 外面　灰橙色。
328	〃	〃	23.4 (7.8) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。	〃	磨耗が著しい。
329	〃	〃	23.6 (11.0) — —	口縁部は如意形に外反する。胴部がやや張る。口唇部に刻目。胴上部に9本単位のヘラ描沈線。	口縁部内外面ヨコナデ、外面に一部ハケ目。胴部外面にヘラ描沈線の前にハケ目調整。内面は指頭圧痕が残る。	内面　橙灰色。 外面　茶灰色。
330	〃	〃	— (9.8) 11.4 —	口縁部は好意形に外反する。頸部にヘラ描沈線文。	外面にハケ目調整。内面ナデ調整で一部にハケ目。	内面　黒褐色。 外面　黄灰茶褐色。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
331	ＳＲ２	甕	15.7 (3.9) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部に刻目。外面にヘラ描沈線が施される。	不明。	
332	〃	〃	22.0 (5.5) —— ——	口縁部は外反する。口唇部に刻目。頸部にクシ描直線文。	内面に一部ハケ目。	
333	〃	〃	23.3 (8.2) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部ナデの後上下端に刻目。胴上部に４本単位の簾状文。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部ハケの後ナデ、内面はナデ調整。	
334	〃	〃	16.4 (6.5) —— ——	口縁部は外反する。	口縁部は内外面ヨコナデ。外面縦のハケ目。内面横位のハケ目。	
335	〃	〃	12.3 (13.3) —— ——	口縁部は外反する。口縁部はつぎたして貼付している。	貼付後指頭圧痕。頸部に縦のハケ目。胴上部に横位のハケ目。胴部は斜位のハケ目。内面はヘラ磨きが施される。	
336	〃	〃	(9.3) (7.2) —— ——	口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	外面はナデ調整。内面は指頭圧痕がつく。	
337	〃	〃	16.0 (7.9) —— ——	口縁部は外反する。端部は肥厚する。	口唇部はナデ調整。口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部中位はヘラ削り。	
338	〃	〃	(18.4) (4.5) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。端部は肥厚する。端面に３条の凹線文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	外面に黒斑。
339	〃	〃	13.6 (3.6) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚する。	口唇部はナデのため窪む。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面はハケ目調整。	
340	〃	〃	17.0 (5.9) —— ——	口縁部は水平に屈曲し、端部は上方に立ち上がり面をなす。	胴部外面は縦のハケ目。	内面　黄褐色。 外面　白灰色。 口縁部内外面に黒斑。
341	〃	〃	12.9 (1.5) —— ——	口縁部は水平に屈曲し、端部は上方に立ち上がり面をなす。端面は３条の凹線文が施される。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	
342	〃	〃	13.2 (3.1) —— ——	口縁部はくの字状に外反し、端部は肥厚する。	口唇部はナデのため窪む。口縁部内面ヨコナデ、外面はナデ調整。	内面　赤褐色。 外面　黒褐色。 樹脂状物塗布。
343	〃	〃	23.8 (4.1) —— ——	口縁部はくの字状に外反し、端部は肥厚する。端面は２条の凹線文が施される。	胴部外面は縦のハケ目。	煤状炭化物付着。
344	〃	〃	(22.2) (5.4) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。端部は肥厚する。端面に凹線文か？	外面はナデ調整。	
345	〃	〃	12.9 (2.5) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。端部は肥厚し、３条の凹線文が施される。	内外面ヨコナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　構	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
346	ＳＲ２	甕	14.8 (2.7) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。端部は肥厚し面をなす。端面に３条の凹線文。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	内面　赤茶褐色。 外面　暗褐色。
347	〃	〃	15.8 (3.5) —— ——	〃	口縁部内外面ヨコナデ調整。胴部外面ハケ目。	暗赤茶褐色。
348	〃	〃	12.8 (2.1) —— ——	口縁部は外反し、端部は肥厚する。端面に３条の凹線文。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	
349	〃	〃	17.0 (4.0) —— ——	口縁部はくの字状に外反する。肩部がやや張る。	口唇部ナデ。口縁部内外面ヨコナデ調整。内面はナデと指頭圧痕。	
350	〃	〃	13.2 (6.3) —— ——	口縁部は外反する。	口唇部はナデのため窪む。内面ヘラ削りだが、磨耗のためはっきりしない。	
351	〃	〃	12.0 (19.9) —— ——	〃	内外面ヨコナデ調整。胴部は外面荒いハケ目、内面ヘラ削り。	
352	〃	〃	16.5 (6.0) —— ——	〃	口縁部内外面ナデ調整。胴部内面ヘラ削り。	
353	〃	〃	10.6 (6.8) —— ——	〃	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目。頸部内面ハケ目調整。	口縁付近に黒斑。
354	〃	〃	—— (3.9) —— 7.0	底部は上げ底。	外面ハケ目。内面ヘラ削り調整。	外面に黒斑。
355	〃	〃	—— (3.7) —— 5.6	底部は平底。	外面縦のハケ目。	
356	〃	〃	—— (3.2) —— 5.6	〃	外面縦のハケ目。内面は指頭圧痕。	
357	〃	〃	—— (8.7) —— 6.4	底部はやや上げ底。	内面に指頭圧痕が残る。	
358	〃	〃	—— (3.1) —— 5.8	底部は平底。	外面ハケ目だが磨耗して不明。内面ヘラナデ調整。	薄手土器。 内面に黒斑。
359	〃	〃	—— (4.1) —— 5.6	底部は上げ底。	不明。	磨耗が著しい。 内面　白灰色。 外面　白黄褐色。
360	〃	〃	—— (4.0) —— 6.0	底部は平底。	外面不明。内面はヘラ削り。	内面に樹脂状物塗布。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
361	ＳＲ２	甕	— (3.6) — 6.0	底部は平底。	外面はハケ目調整。	
362	〃	〃	— (3.3) — 8.0	底部は上げ底。	不明。	磨耗が著しい。
363	〃	〃	— (4.2) — 8.2	底部は平底。	外面はハケ目。内面に指頭圧痕が残る。	外面に黒斑。 内面 灰黒色。 外面 白黄褐色。 内断面に鉄分付着。
364	〃	〃	— (6.5) — 6.0	〃	外面はハケ目調整、内面はヘラ削り。	
365	〃	〃	— (4.6) — 5.6	〃	外面はハケ目調整。	
366	〃	〃	— (5.7) — 6.0	底部は上げ底。	不明。	磨耗が著しい。
367	〃	〃	— (6.2) — 7.6	〃	〃	〃
368	〃	〃	— (5.2) — 4.8	底部は平底。	〃	〃
369	〃	〃	— (4.1) — 5.0	底部はやや上げ底。	外面ハケ目調整。内面はナデで指頭圧痕が残る。	
370	〃	〃	— (5.8) — 9.8	〃	外面はハケ目調整。内面は指ナデ。	
371	〃	〃	— (5.8) — 3.5	〃	内面は指ナデ。	黒斑有り。
372	〃	〃	— (5.1) — 5.8	底部は平底。	外面は縦のハケ目調整。内面ナデ調整。	内面に黒斑。
373	〃	〃	— (3.5) — 7.4	〃	〃	内面 黒褐色。 外面 暗茶褐色。 内外面とも樹脂状物塗布。
374	〃	〃	— (3.0) — 6.6	底部はやや上げ底。	外面縦のハケ目。内面ナデ調整で指頭圧痕が残る。	外面に黒斑。
375	〃	〃	— (6.7) — 3.1	底部は平底。	外面縦位のハケ目。底部外面はナデ。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
376	ＳＲ２	甕	— (4.8) — 5.9	底部は上げ底。	外面は縦のハケ目。内面指ナデ。	
377	〃	〃	— (4.2) — 7.6	底部は平底。	外面ハケ目調整。内面はナデ。	
378	〃	〃	— (5.6) — 5.4	底部はやや上げ底。	不明。	磨耗が著しい。
379	〃	〃	— (5.8) — 8.6	〃	〃	〃
380	〃	〃	— (8.5) — 9.4	底部は平底。	外面はナデ。内面はヘラ削り調整。	外面に黒斑。
381	〃	〃	— (3.1) — 9.5	〃	内面ナデ調整で指頭圧痕が残る。 外面ハケ目。	
382	〃	〃	— (3.6) — 7.0	〃	外面縦のハケ目。内面はナデ調整。	内面　灰黒色。 外面　灰褐色。
383	〃	〃	— (4.8) — 8.6	底部は上げ底。	外面ハケ目調整。	外面に樹脂状物塗布。
384	〃	高　杯	17.0 (2.6) — —	体部は内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚する。端面にハケ目の後ヘラ描による斜格子文、２か所に棒状刺突文。	内外面ナデ調整。	
385	〃	〃	22.2 (5.0) — —	体部で屈曲し口縁部は外傾する。	口縁部外面ヨコナデの後ハケ目、内面は一部にヘラ磨きが施される。	外面に樹脂状物塗布。
386	〃	〃	— (5.7) — 24.2	裾部はハの字に開き、端部は肥厚する。外面はヘラ描による鋸歯文。２段に刺突文で完通していない。	端面はヨコナデで窪む。外面はハケ目が観察できる。内面は横方向のヘラ削り。	
387	〃	〃	— (5.6) — 8.0	杯部が欠損し、脚部はハの字状に開く。	外面ナデ調整。	
388	〃	蓋	6.2 (7.1) — —	天井部から口縁部は外下方に下る。天井部の端部は面取りされる。	外面ハケ目調整。内面はナデの後、ヘラ磨き。	内外面ともに樹脂状物塗布。
389	〃	〃	— (6.4) — 4.4	天井部は窪む。直線的に口縁部に下る。	外面ハケ目調整。内面はナデ調整。	
390	〃	土　錘	全長　4.1 直径　4.0 重量　35.0 (g)			黒斑有り。

第10表　遺構出土石器観察表

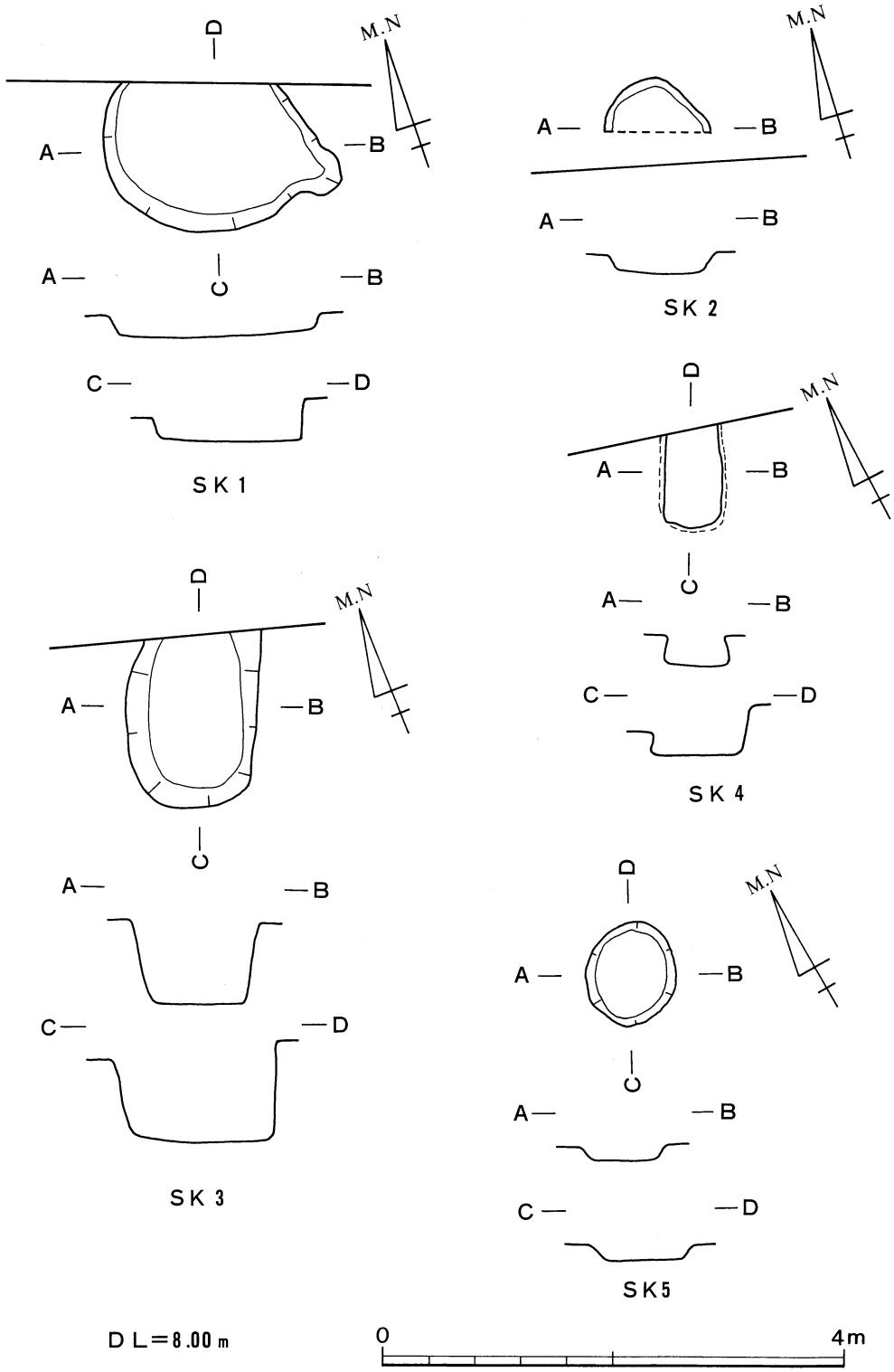
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm、g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
391	ＳＲ１	石　斧	(6.0) 5.7 3.5 182.5	斑 糲 岩	太型蛤刃石斧の刃部破片である。刃部は、両面から丁寧に研磨され作り出している。	
392	ＳＫ３	〃	(6.5) (4.9) (2.7) 102.5	〃	刃部のみ残存している。全面に研磨されており、刃部は両面から丁寧に研磨して作り出されている。	
393	ＳＫ４	〃	(13.4) 5.8 2.5 215.0	砂　　岩	刃部と裏面が欠損しているため不明な点が多いが、河原石で刃部のみ研磨している石斧と考えられる。	
394	ＳＲ２	〃	11.0 5.2 3.0 352.5	斑 糲 岩	太型蛤刃石斧である。刃部は部分的に欠損しているが、両面から研磨して作り出している。全体的によく研磨している。両側縁に敲打痕がみられる。	
395	ＳＲ１	〃	(13.7) 6.6 4.8 642.0	緑 泥 岩 （斑 糲 岩）	太型蛤刃石斧である。刃部と基部が欠損しているがよく研磨している。断面楕円形を呈している。	
396	ＳＲ２	〃	12.1 4.8 2.0 226.0	斑 糲 岩	太型蛤刃石斧である。断面は楕円形を呈し、刃部は両面から研磨し作り出している。刃部は刃にこぼれが見られる。表裏面と両側面に敲打痕がみられる。	
397	〃	〃	19.0 7.0 4.6 1120.0	緑色片岩 （斑 糲 岩）	太型蛤刃石斧の未製品で、研磨前の段階で欠損したものである。	
398	ＳＲ１	〃	18.9 6.8 4.1 1075.0	斑 糲 岩	太型蛤刃石斧で刃部が欠損している。最大幅を刃部に持つものである。全面に敲打痕が見られる。全体的に研磨されている。	
399	〃	〃	(98.0) 60.0 28.0 334.0	〃	自然面と剥離面からなる太型蛤刃石斧の基部である。刃部は欠損している。縁辺部に敲打痕がみられる。	
400	ＳＲ２	〃	16.0 5.6 4.0 595.0	緑 色 岩 （玄武岩質）	刃部の一部が欠損しているが全体的によく研磨されており、刃部は両面から丁寧に研磨され作り出されている。	
401	〃	〃	13.2 5.4 3.0 425.0	緑色片岩 （斑 糲 岩）	刃部が欠損している。自然石を利用し、刃部のみ研磨し作り出している。断面は楕円形を呈する。	
402	ＳＲ１	〃	15.0 6.5 1.7 330.0	斑 糲 岩	自然面からなる。刃部縁部に敲打痕がみられる。	
403	ＳＲ２	〃	(17.2) 7.0 4.7 1014.0	〃	自然の礫をそのまま利用した太型蛤刃石斧である。刃部は欠損しているが、両面から刃部を作り出している。刃部は丁寧に研磨している。	
404	ＳＲ１	〃	(3.1) (3.1) (1.1) 15.0	蛇 紋 岩	刃部のみ残存している。両面からよく研磨し、刃部を作り出している。	
405	〃	〃	9.7 3.5 1.4 108.0	玄武岩質	河原石を利用し刃部以外に自然面を残し、刃部のみ研磨して作り出している局部磨製石斧である。刃部は使用により刃こぼれがある。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm、g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
406	ＳＲ２	石　斧	7.4 3.7 (1.3) 52.5	頁　　岩	偏平な両刃石斧と考えられる。$\frac{1}{3}$が欠損しているが、残存部はよく研磨している。	
407	〃	〃	6.0 4.0 1.0 52.5	粘 板 岩	全体的によく研磨されている。偏平片刃石斧である。刃部が一部欠損している。刃部はさらに丁寧な研磨で作り出している。	
408	〃	〃	5.3 2.2 0.8 17.5	砂　　岩	小型の偏平な磨製石斧である。刃部は両面から研磨して作り出している。	
409	〃	〃	(5.5) 3.3 1.0 47.5	緑色片岩	刃部が欠損している。全体的によく研磨している。	
410	〃	〃	6.8 2.2 0.6 22.0	玄 武 岩	局部磨製石斧で刃部のみ両面から研磨されており、偏平で小型である。	
411	ＳＫ３	叩　石	10.2 5.0 3.1 26.5	砂　　岩	断面楕円形を呈する。河原石をそのまま利用する。縁辺部に敲打痕が認められる。	
412	〃	〃	7.8 7.1 2.2 162.5	〃	自然面と剥離面からなる。縁辺部と自然面の中央部に敲打痕がみられる。	
413	〃	〃	8.9 6.1 2.0 111.0	〃	自然面と剥離面からなり、縁辺部に敲打痕が観察できる。	
414	〃	〃	7.1 4.9 1.8 72.5	〃	〃	
415	〃	〃	7.4 5.7 1.7 136.0	〃	偏平な河原石をそのまま利用している。表面中央部と縁辺部に敲打痕がみられる。	
416	〃	〃	13.9 6.5 2.5 299.0	〃	自然面と剥離面からなる。縁辺部に敲打痕が認められる。自然面も一部剥離している。	
417	ＳＲ１	〃	11.0 11.1 2.8 770.0	〃	河原石をそのまま利用したものである。表面は叩打によってくぼんでいる。	
418	〃	〃	6.9 6.7 1.1 61.0	〃	自然面と剥離面からなり、敲打痕が観察できる。	
419	〃	〃	8.8 6.4 2.1 197.5	〃	偏平な河原石をそのまま利用している。表裏面中央部と縁辺部に敲打痕が認められる。	
420	〃	〃	8.5 8.9 2.4 235.0	〃	自然面と剥離面からなる。偏平な叩石である。縁辺部に敲打痕が認められる。	

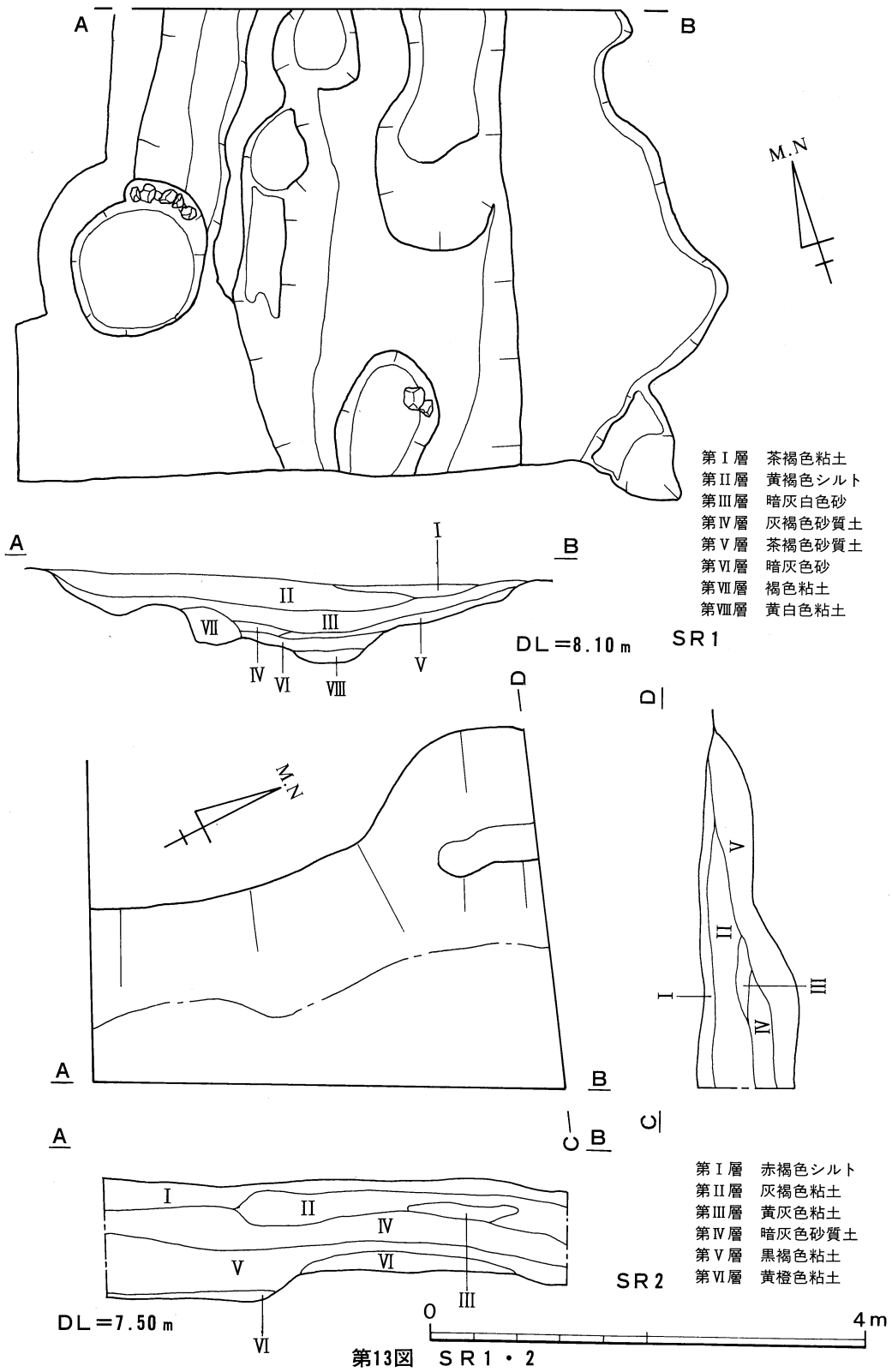
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm、g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
421	ＳＲ１	叩　石	13.9 9.1 1.4 256.0	頁　岩	河原石を縦に割っており、自然面と剝離面からなる。縁部に敲打痕がみられる。	
422	〃	〃	10.7 7.2 1.8 150.0	砂　岩	自然面と剝離面からなり、縁辺部に敲打痕がみられる。	
423	〃	〃	10.3 7.1 3.4 388.0	泥　岩	河原石をそのまま利用している。両端側縁部と表裏中央部に敲打痕がみられる。	
424	〃	〃	11.2 6.0 3.0 256.0	緑泥岩 （斑糲岩）	河原石を利用している。両端側縁に浅い敲打痕が見られる。	
425	〃	〃	13.5 8.9 2.2 270.0	砂　岩	自然面と剝離面からなり、縁辺部に敲打痕が認められる。	
426	〃	〃	7.3 (5.2) 2.9 166.0	〃	河原石をそのまま利用している。縁辺部に敲打痕がみられる。	
427	〃	〃	(8.9) 5.9 2.9 235.0	〃	断面楕円形を呈する河原石をそのまま利用している。一面のみに敲打痕がみられる。	
428	〃	〃	11.2 6.1 2.9 26.5	〃	断面は楕円形を呈し河原石をそのまま利用している。表裏両面中央部に敲打痕が認められる。	
429	〃	〃	9.2 7.7 4.8 425.0	〃	河原石をそのまま利用している。表裏両面の中央部に敲打痕が認められる。	
430	〃	砥　石	27.3 7.8 6.6 5200.0	〃	断面は長方形を呈す。３面を使用している。	
431	〃	〃	23.0 6.5 (7.6) 161.5	〃	½が欠損しているものと思われる。１面のみ使用していることが確認できる。	
432	〃	〃	(8.8) (7.7) 3.4 255.0	〃	欠損部分が多いが表裏２面使用している。	
433	〃	〃	9.0 3.8 2.3 117.5	〃	断面台形を呈している。使用面は上端部のみで一面である。	
434	〃	〃	(5.6) 2.8 1.4 56.0	砂　岩 （細粒砂岩）	断面方形を呈す。３面を使用している。	
435	ＳＫ３	〃	(6.3) 8.0 2.1 164.0	砂　岩	上下両端が欠損している。２面使用している。やや偏平である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm、g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
436	ＳＲ２	砥　石	(5.0) (8.8) 2.5 145.0	砂　岩	欠損部分が多いが、断面方形の表裏２面使用している砥石である。	
437	ＳＫ１	石包丁	(5.8) (2.7) 0.4 10.0	粘板岩	$\frac{1}{3}$の破片でよく研磨されているが、刃部中の形状ははっきりしないが直刃と考えられる。２個円孔が確認できる。両側から穿孔している。	
438	〃	〃	(3.9) 3.5 0.3 10.0	〃	直刃で丁寧に研磨され片刃を作りだしている。１個の円孔を確認することができる。両側より穿孔している。	
439	ＳＫ４	〃	(3.0) 3.7 (0.4) 6.0	〃	直刃片刃の石包丁と考えられる。大部分が欠損しており裏面は剝落している。中央に２個の円孔が穿たれている。	
440	ＳＲ１	〃	(5.3) 5.2 1.1 45.0	千枚岩	$\frac{1}{3}$未満の破片である。刃部の形状は不明であるが外湾刃と考えられる。１個の円孔を確認することができ、穿孔の際に打痕を残す。	
441	〃	〃	11.1 6.8 1.4 130.0	〃	自然面と剝離面からなり、両側縁にえぐりが見られる。外湾刃で敲打痕がみられる。	
442	〃	〃	(3.6) 3.5 0.5 12.5	粘板岩	直刃片刃の石包丁で丁寧に研磨され刃部が作りだされている。中央に円孔が一個確認される。	
443	〃	〃	(6.6) 2.8 0.6 16.0	〃	$\frac{1}{3}$未満の破片で、直刃両刃である。丁寧に研磨されている。中央部に円孔が１個確認できる。	
444	ＳＲ２	〃	(4.8) 4.0 0.5 15.0	〃	直刃片刃の石包丁である。全体的に研磨されており、刃部はさらに丁寧に研磨されている。円孔が１個確認できる。	
445	ＳＲ１	〃	(7.2) (2.3) 1.0 17.5	頁　岩	大部分が欠損しており刃部の一部のみ残存している。全体的によく研磨しており、両面から刃部を形成している外湾両刃の石包丁である。	
446	〃	〃	(7.5) (3.0) 1.0 28.0	粘板岩	直刃でよく研磨されており片刃である。背部が欠損しているが、円孔が１個確認できる。	
447	〃	〃	(3.1) (3.9) (0.7) 10.0	〃	欠損分が多くて形態は不明だが、表面はよく研磨しており裏面は剝落している。円孔が１個確認できる。	
448	ＳＲ２	〃	(6.1) 4.2 0.6 27.5	緑色片岩	直刃片刃の石包丁である。刃部は丁寧に研磨し作り出されている。中央部に２個の円孔が両面から穿たれている。	
449	〃	〃	(4.7) 3.4 0.5 19.0	粘板岩	刃部が欠損している。両面研磨されているが、部分的に剝落している。１個の円孔を確認することができる。	
450	ＳＫ２	石　鏃	6.7 1.7 0.5 7.0	〃	有茎の磨製石鏃で、刃部は鋭く研ぎ出され両面中央部に陵線を有す。全面的によく研磨されている。断面菱形を呈する。	

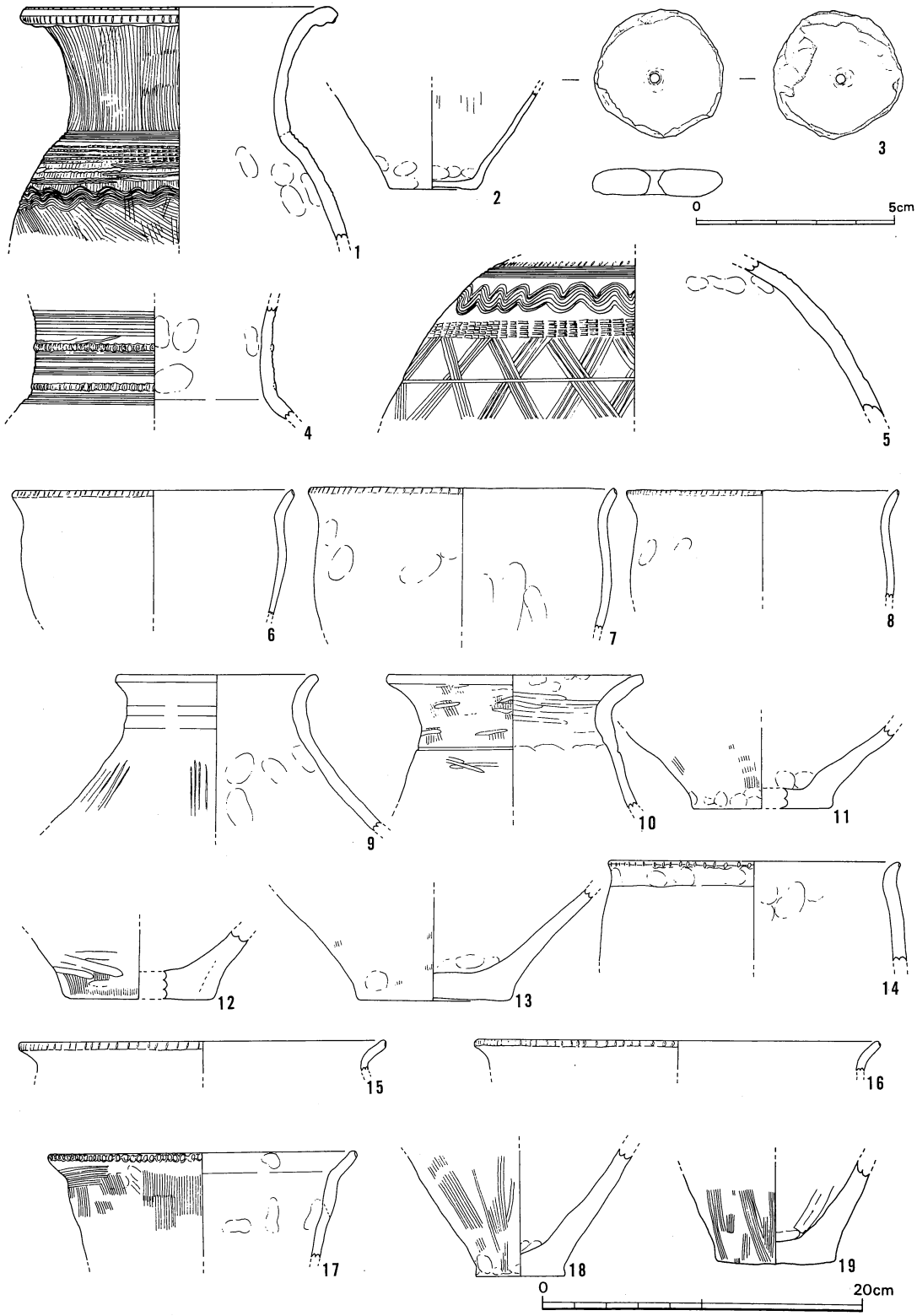
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm、g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
451	ＳＲ１	石　鏃	2.2 1.4 0.4 0.4	サヌカイト	凹基式打製石鏃である。 基部のえぐりは浅い。両面から押圧剥離をして刃部を作り出している。	
452	〃	〃	1.7 1.1 0.3 2.0	〃	凹基式の打製石鏃である。 両面から押圧剥離をして刃部を作り出している。	
453	〃	〃	1.7 1.2 0.3 2.0	〃	〃	
454	〃	〃	2.8 0.9 0.4 2.0	〃	刃部はするどく研ぎ出されている。 断面は菱形である。	
455	〃	〃	4.3 1.6 0.6 5.0	〃	木葉型の打製石鏃である。 両側縁丁寧に押圧剥離で調整している。	
456	〃	〃	(2.6) 1.2 0.3 3.0	〃	基部の片方が欠損している。 凹基式打製石鏃である。両面丁寧に押圧剥離が施されている。	
457	〃	〃	2.3 1.5 0.2 2.5	〃	凹基式打製石鏃である。 両面押圧剥離により丁寧に調整されている。 先端部が欠損している。	
458	ＳＲ２	〃	2.2 1.0 0.3 2.5	〃	凹基式打製石鏃であるが、基部のえぐりは浅い。両面から押圧剥離による調整であるが、片面に主剥離面が残る。	
459	ＳＲ１	石　槍	(6.7) 1.9 0.5 13.0	〃	刃部と基部が欠損している。 両側縁は押圧剥離で調整されている。	
460	〃	石　錘	3.8 3.0 3.5 64.0	砂　岩	楕円形の河原石に十字に有溝をもつ。	
461	ＳＫ３	叩　石	33.8 27.0 11.6 1550.0	〃	偏平で大型の河原石を利用している。両面中央部に敲打痕がみられる。台石に利用したものと考えられる。	



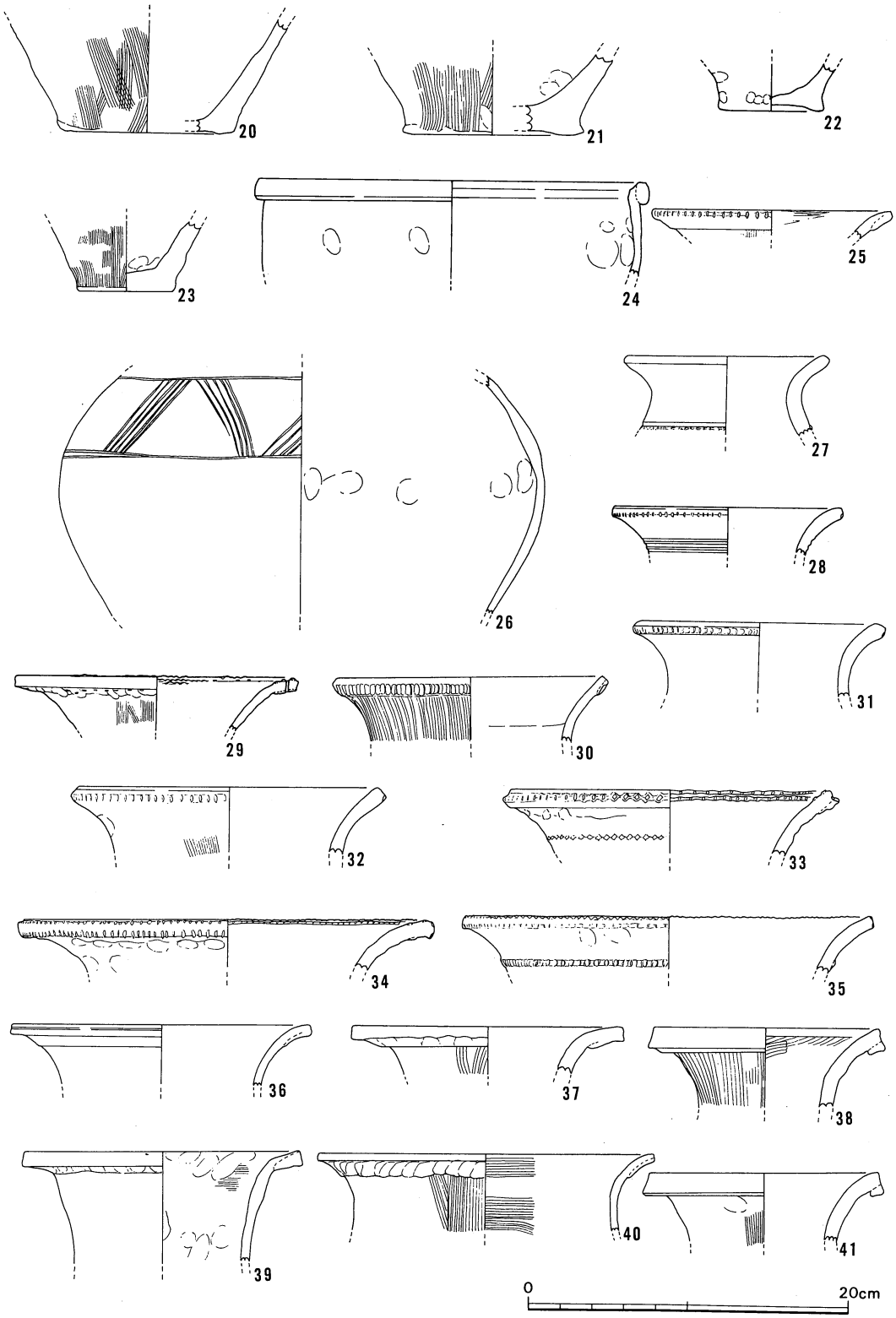
第12図　ＳＫ１～５


A
B
M.N
第Ⅰ層　茶褐色粘土
第Ⅱ層　黄褐色シルト
第Ⅲ層　暗灰白色砂
第Ⅳ層　灰褐色砂質土
第Ⅴ層　茶褐色砂質土
第Ⅵ層　暗灰色砂
第Ⅶ層　褐色粘土
第Ⅷ層　黄白色粘土
DL＝8.10ｍ
SR1
D
C
第Ⅰ層　赤褐色シルト
第Ⅱ層　灰褐色粘土
第Ⅲ層　黄灰色粘土
第Ⅳ層　暗灰色砂質土
第Ⅴ層　黒褐色粘土
第Ⅵ層　黄橙色粘土
SR2
DL＝7.50ｍ
0
4ｍ

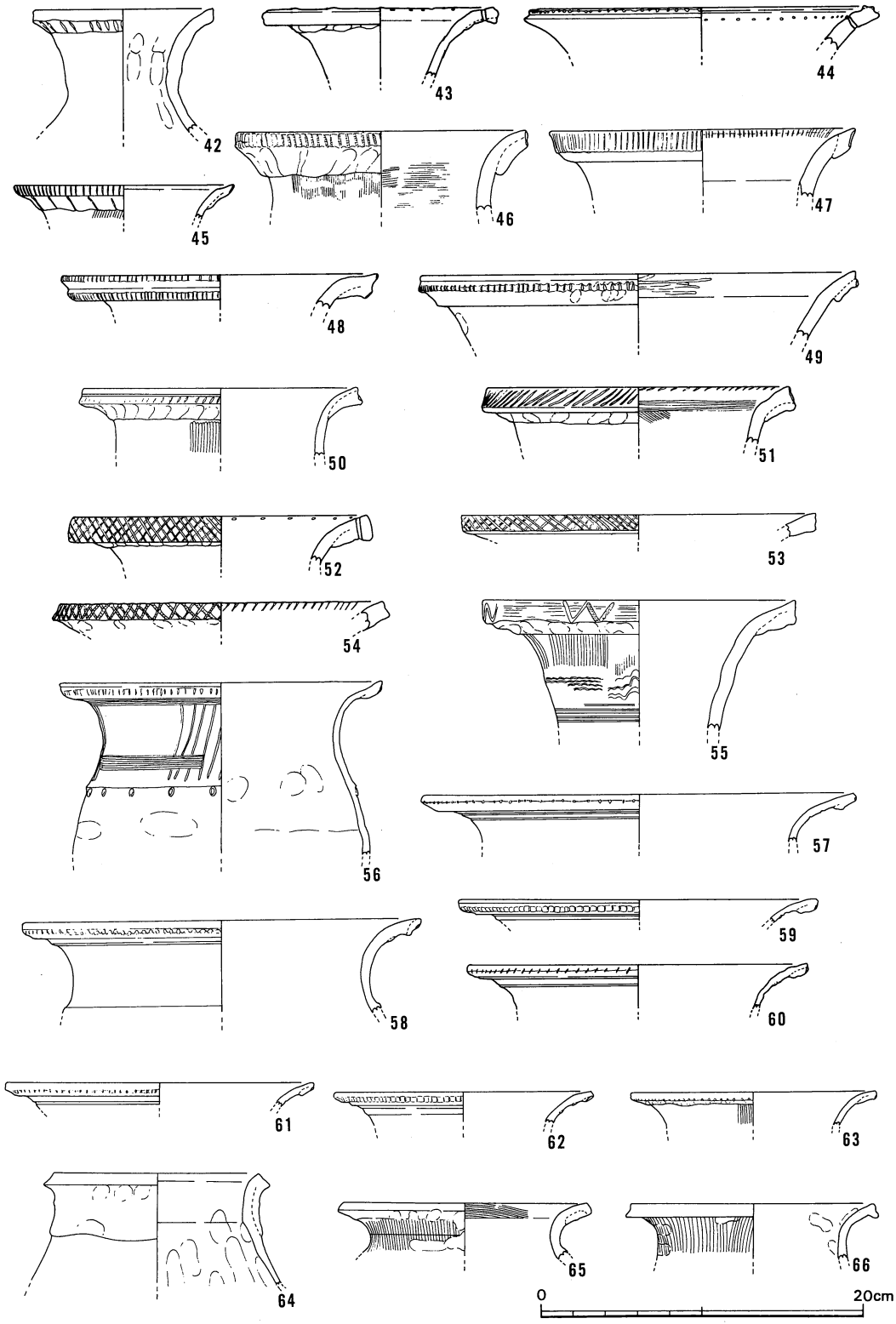
第13図　ＳＲ１・２



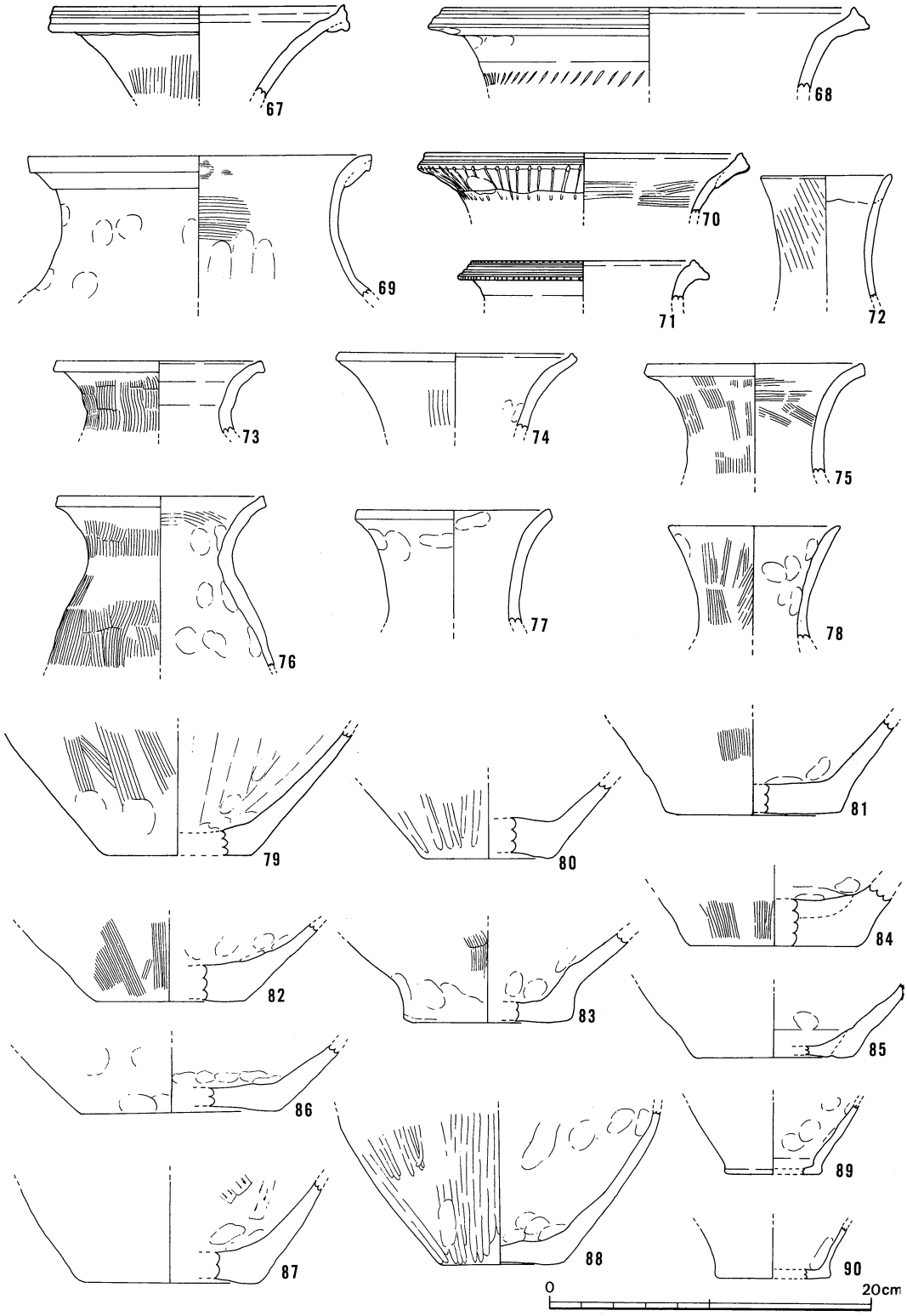
第14図　ＳＫ１～３出土遺物



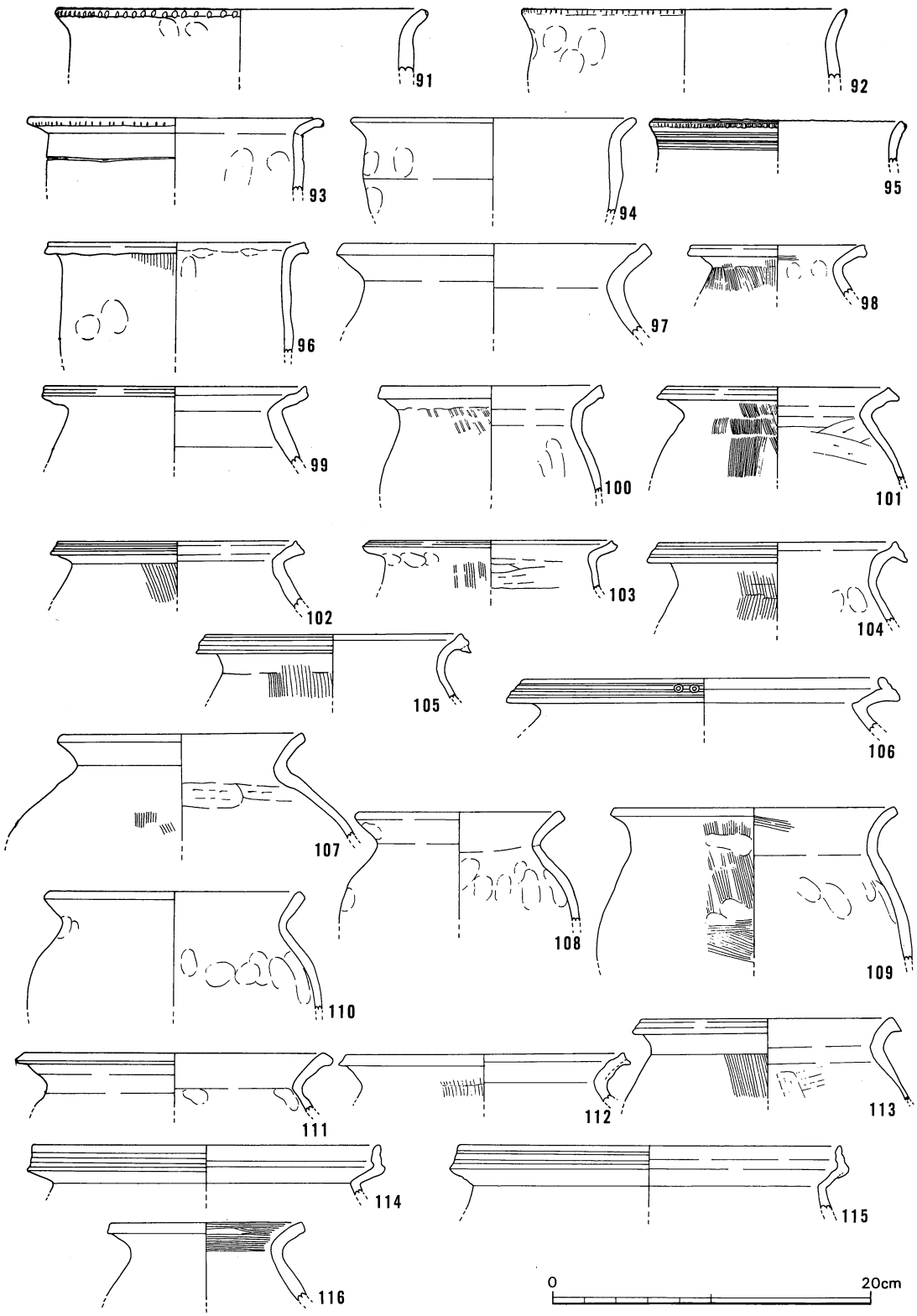
第15図　ＳＫ３～５、ＳＲ１出土遺物



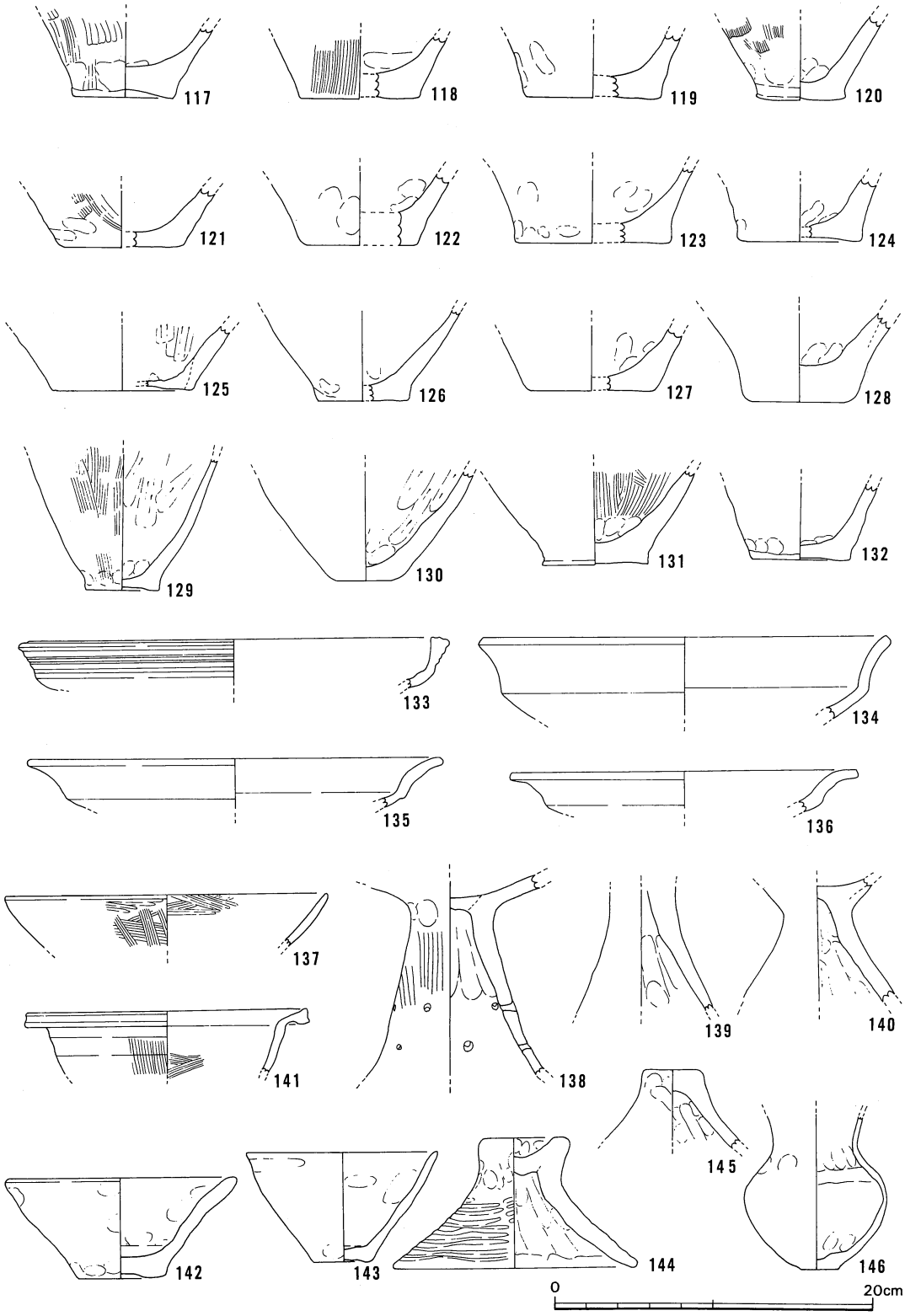
第16図　ＳＲ１出土遺物



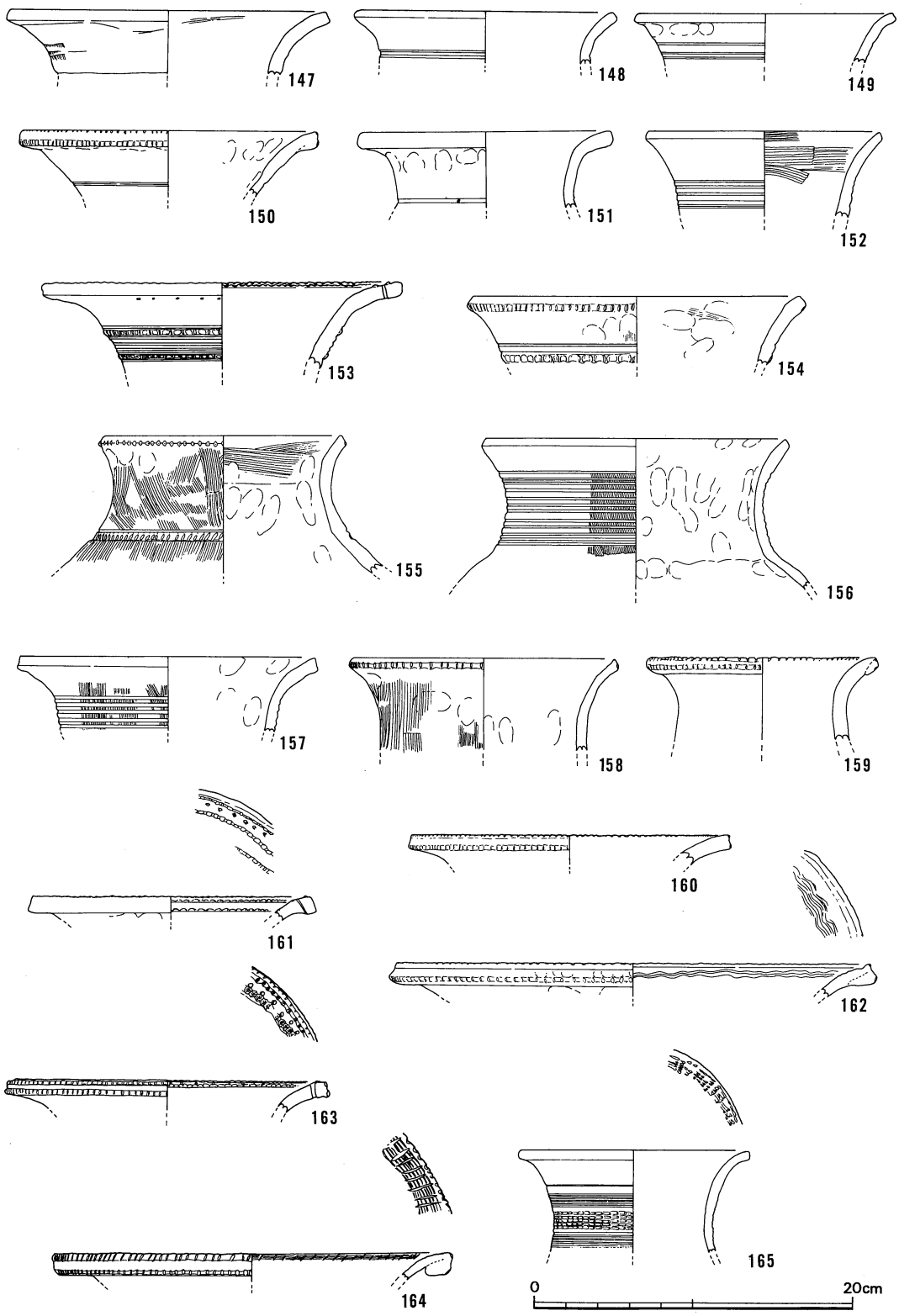
第17図　ＳＲ１出土遺物



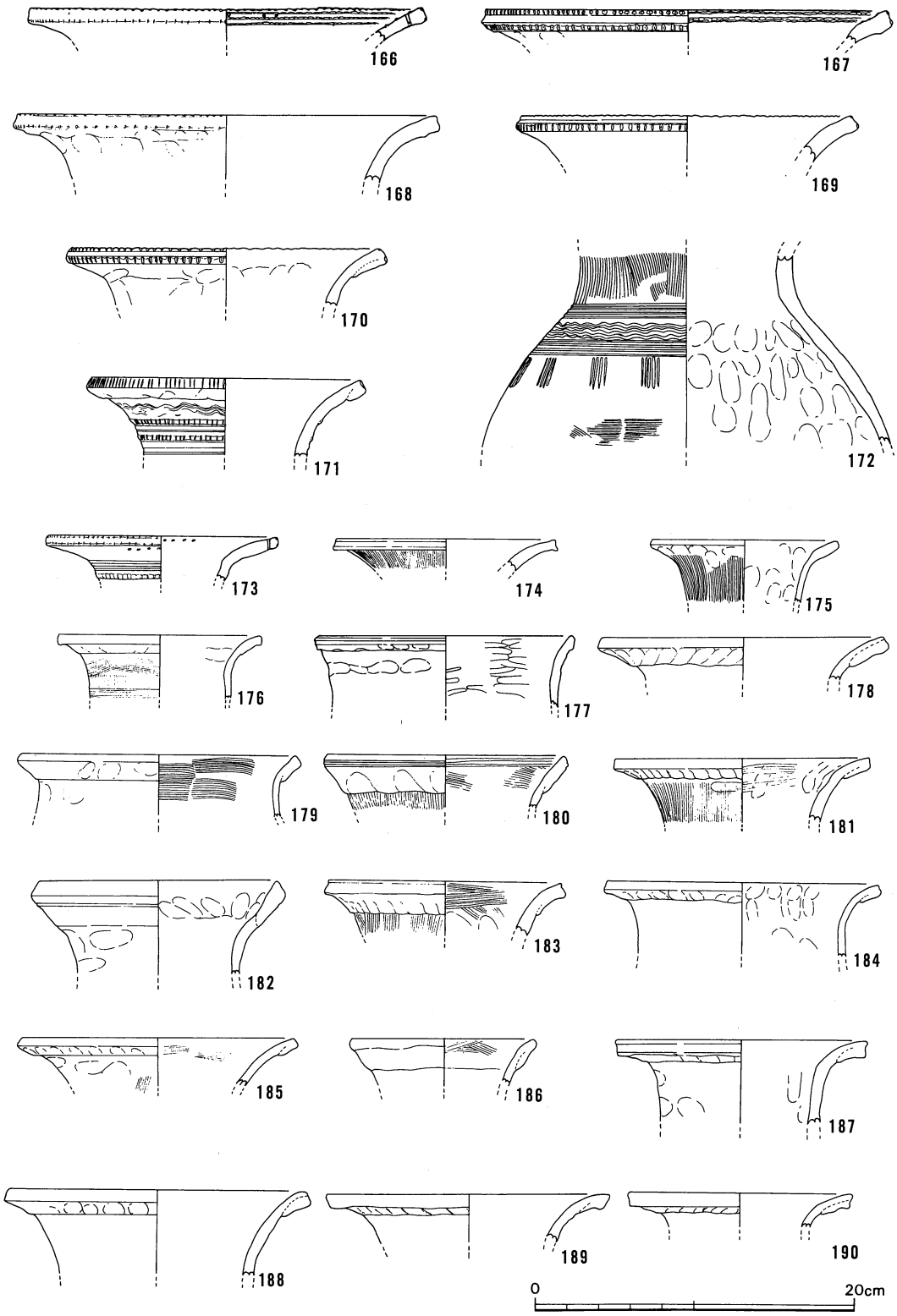
第18図　ＳＲ１出土遺物



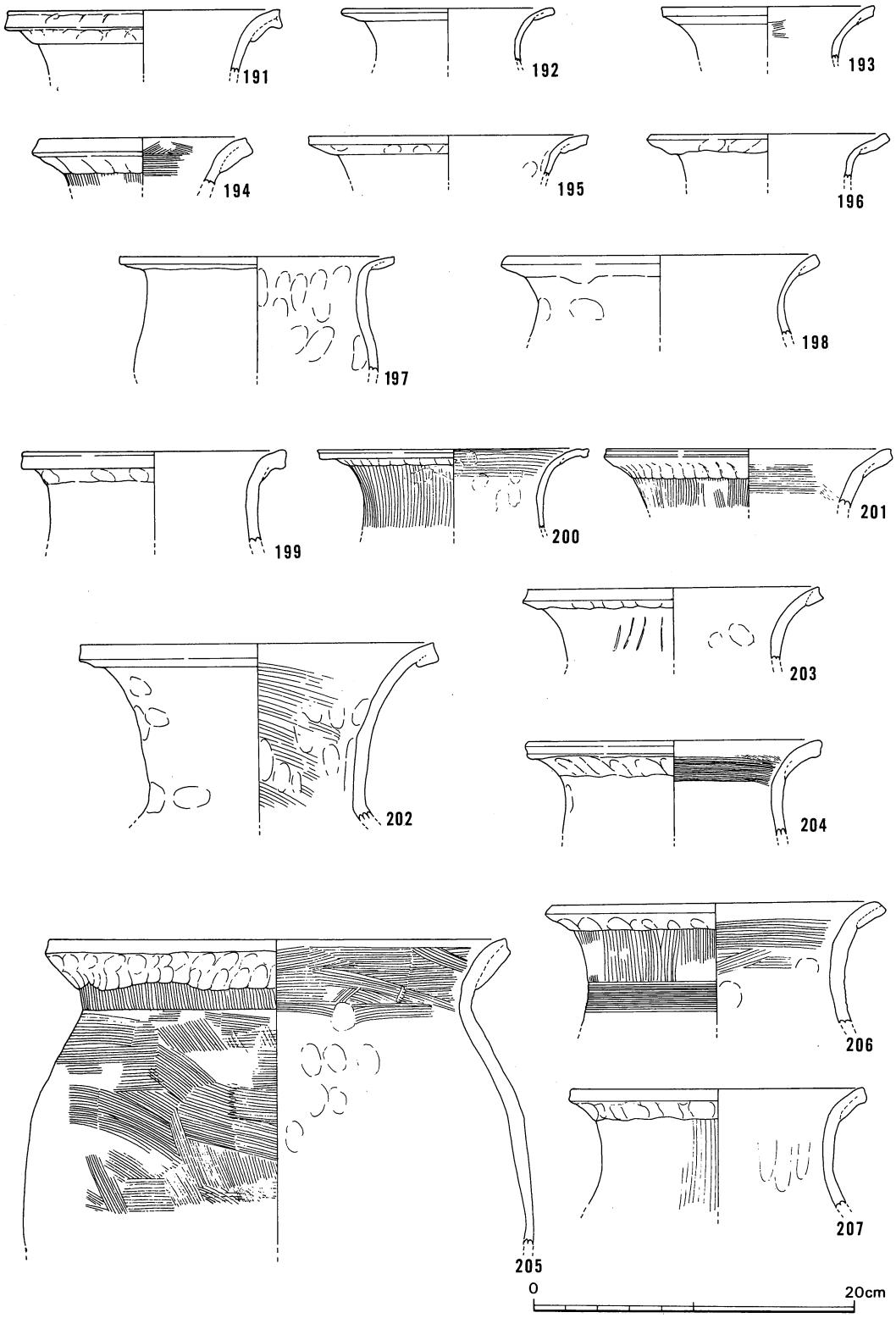
第19図　ＳＲ１、Ｐ１出土遺物



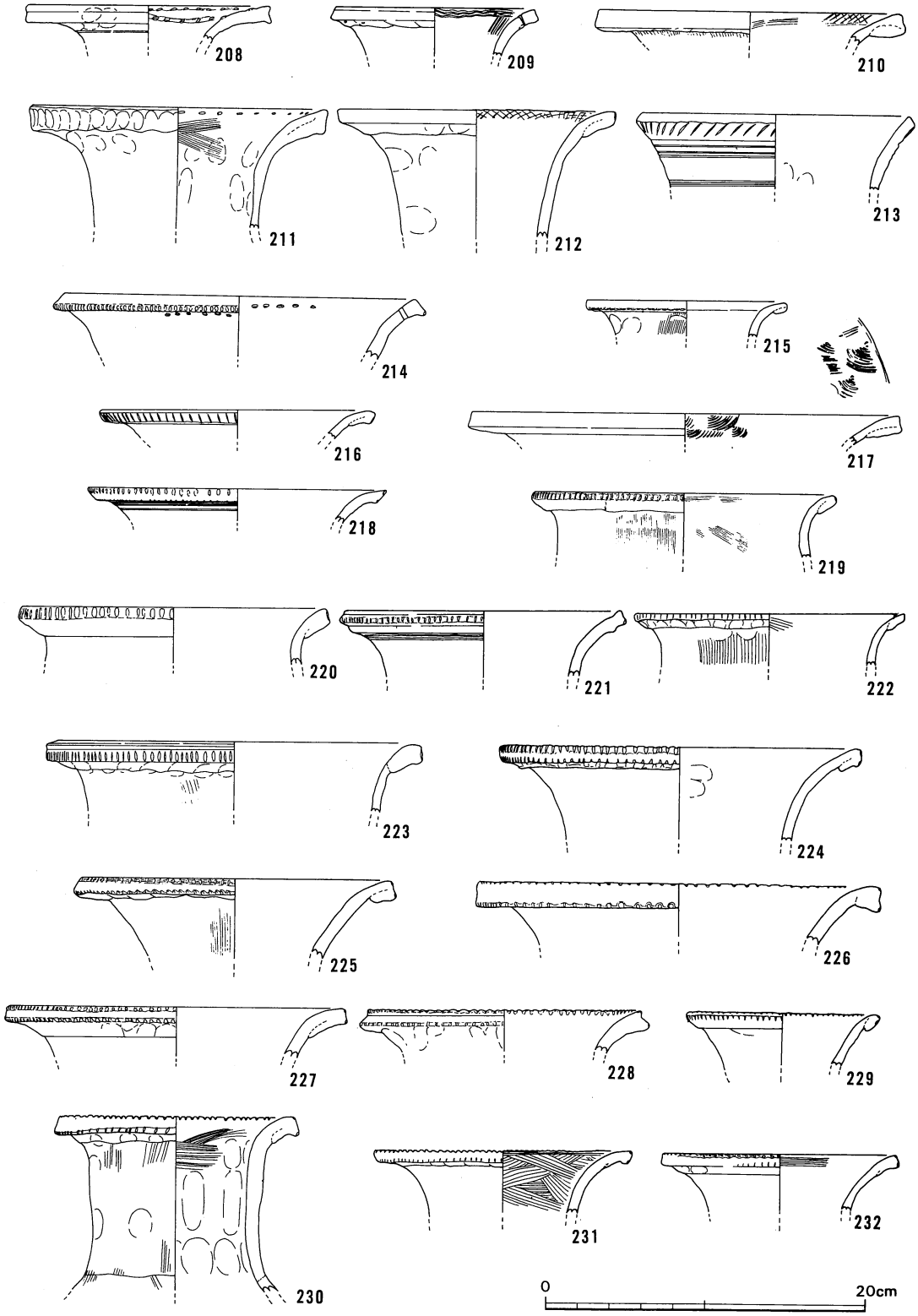
第20図　ＳＲ２出土遺物



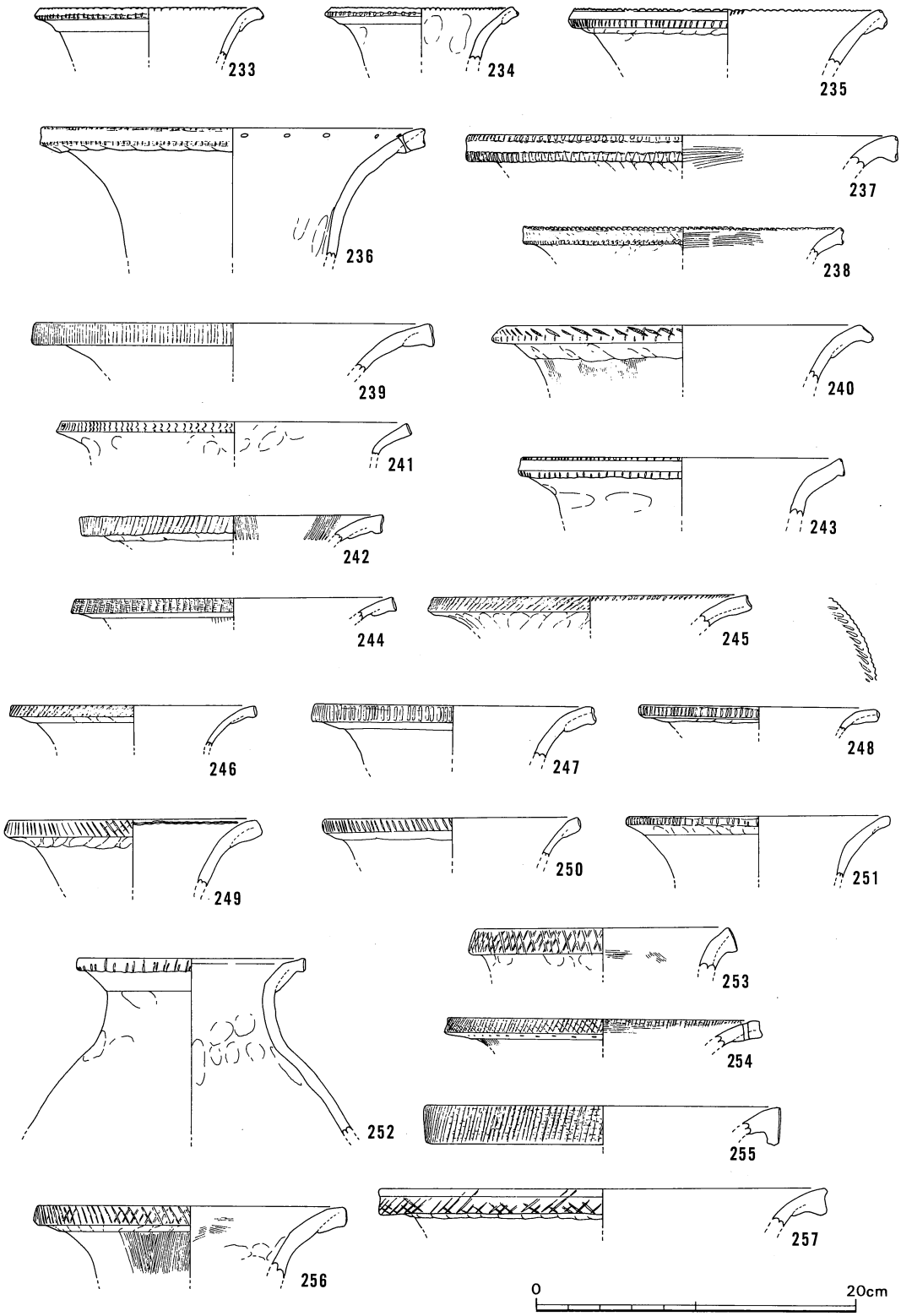
第21図　ＳＲ２出土遺物



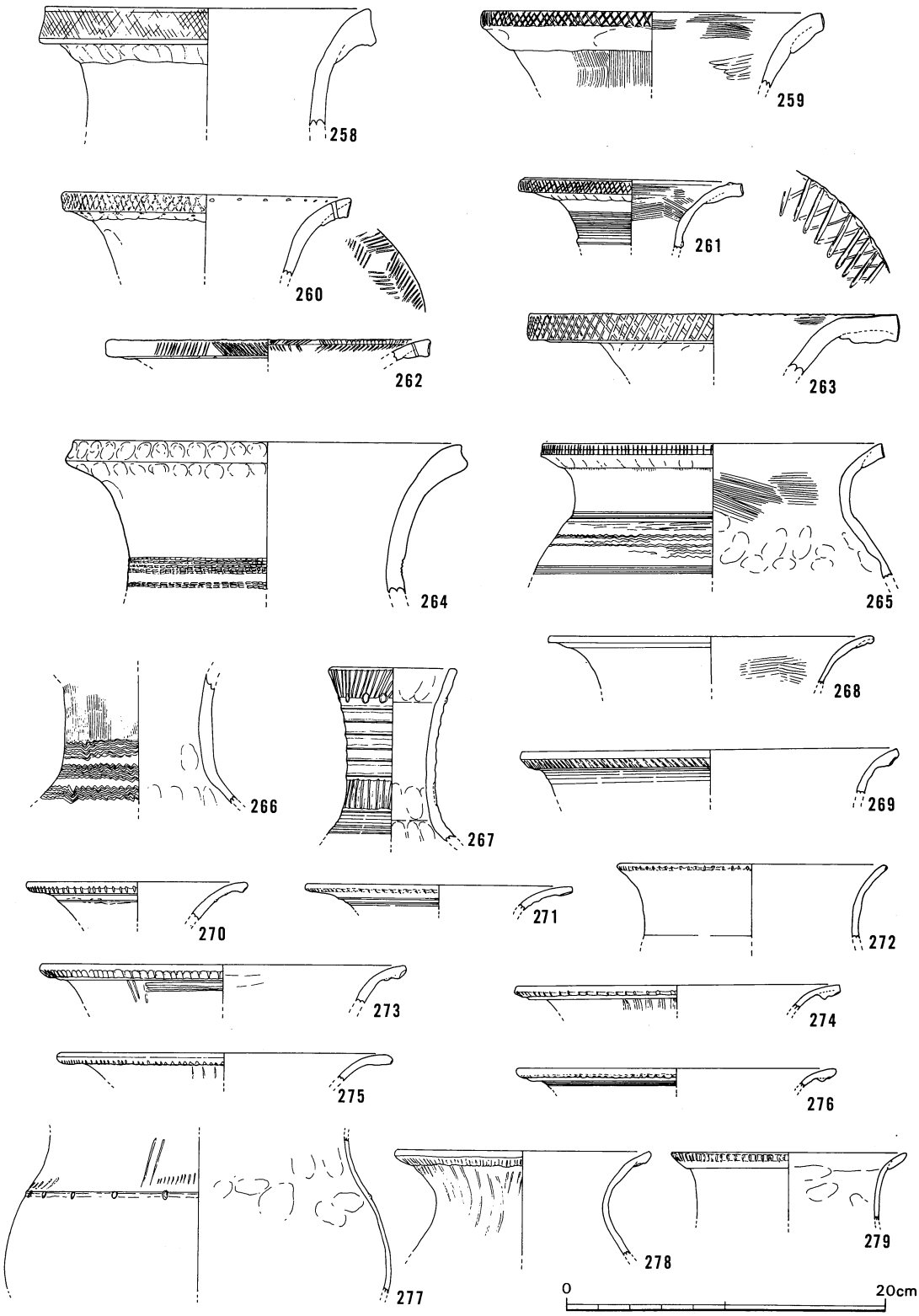
第22図　ＳＲ２出土遺物



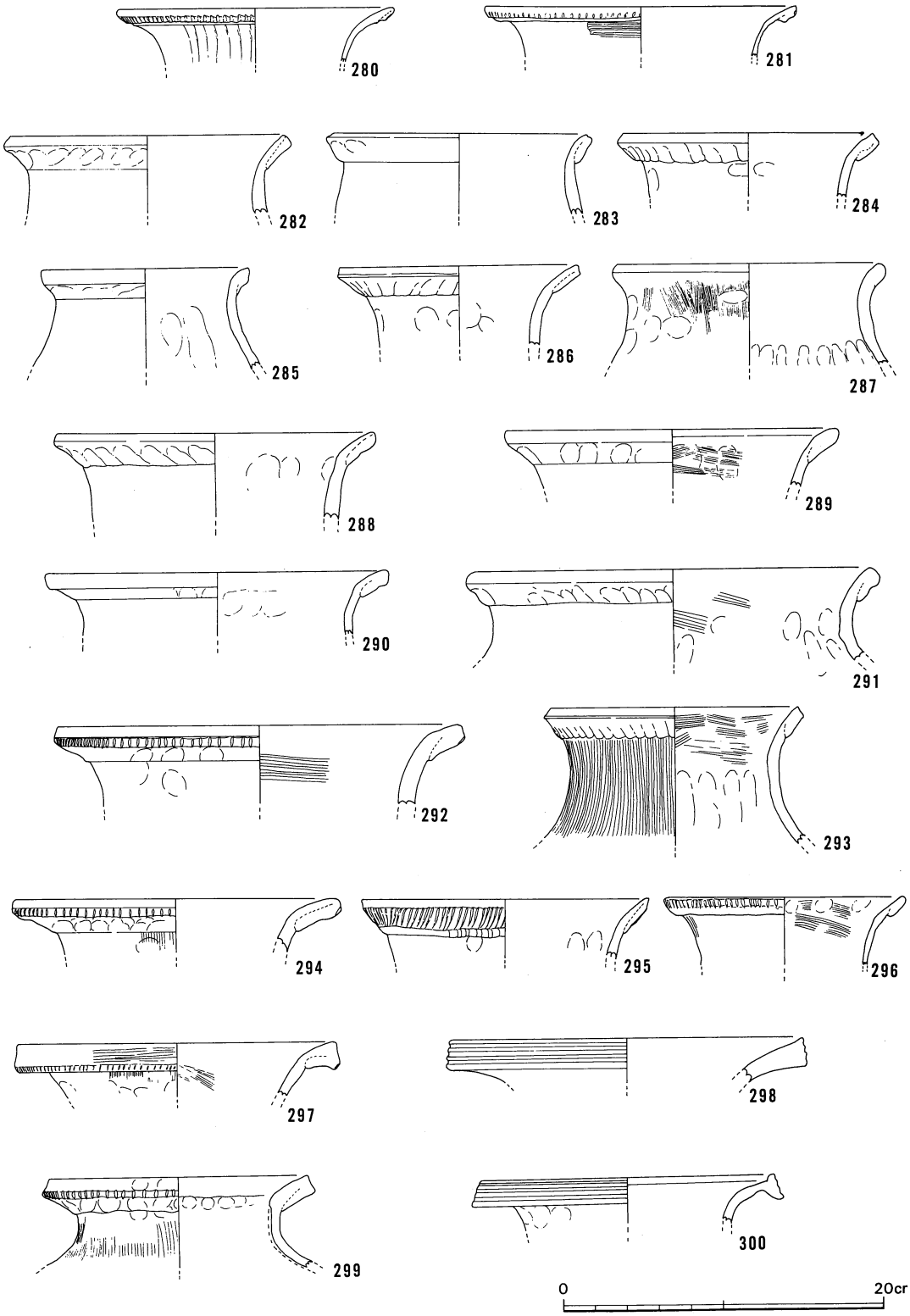
第23図　ＳＲ２出土遺物



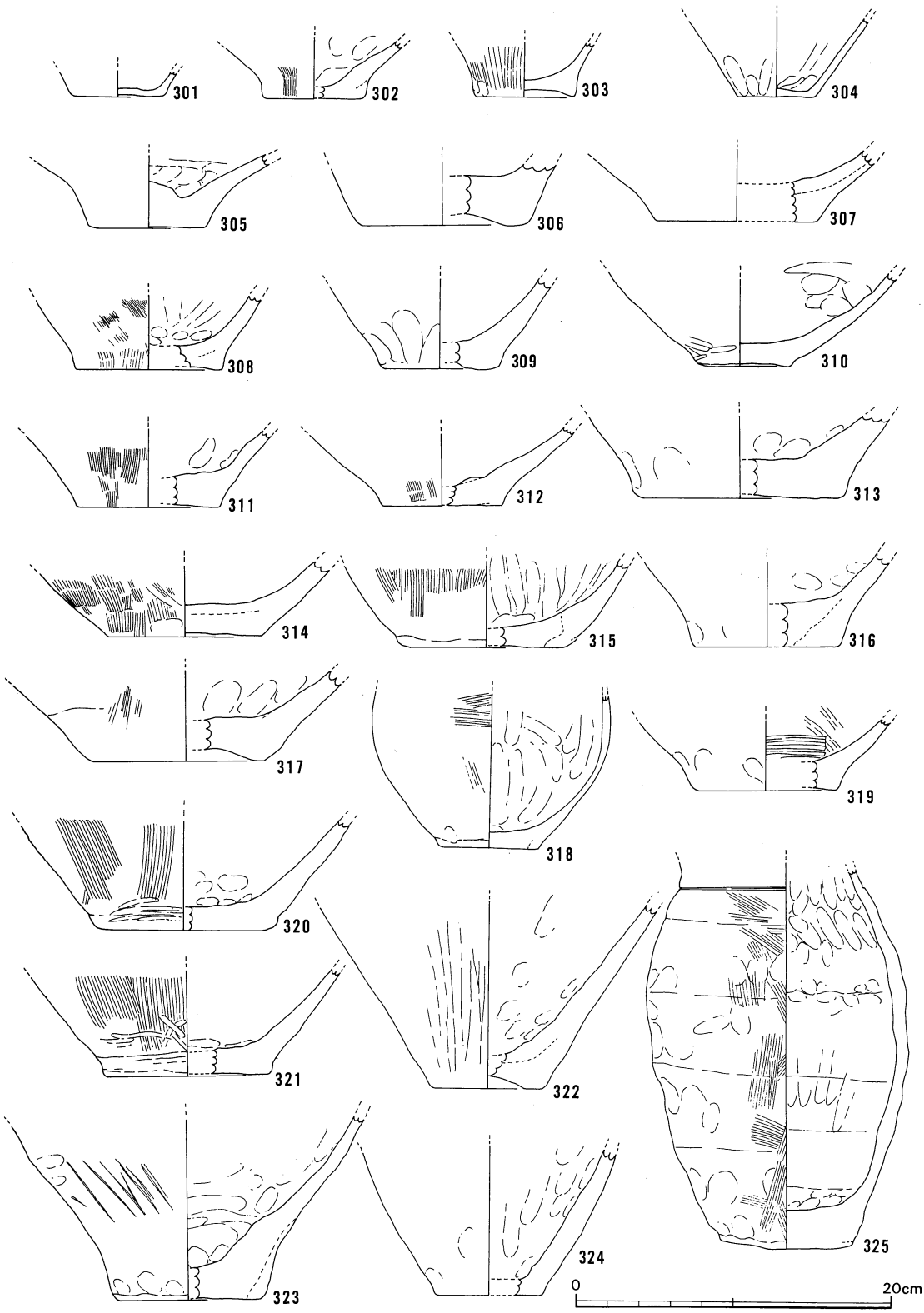
第24図　ＳＲ２出土遺物



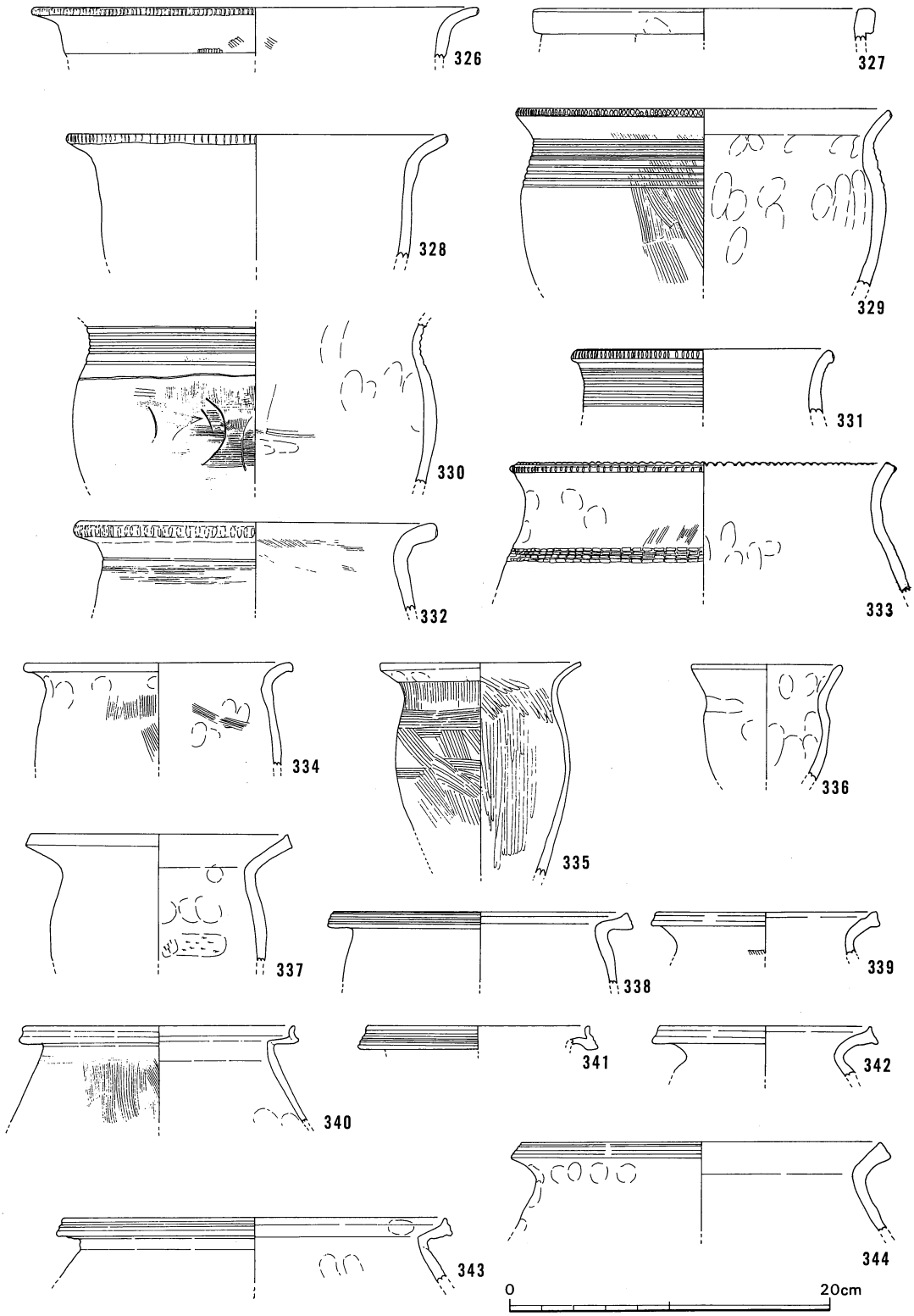
第25図　ＳＲ２出土遺物



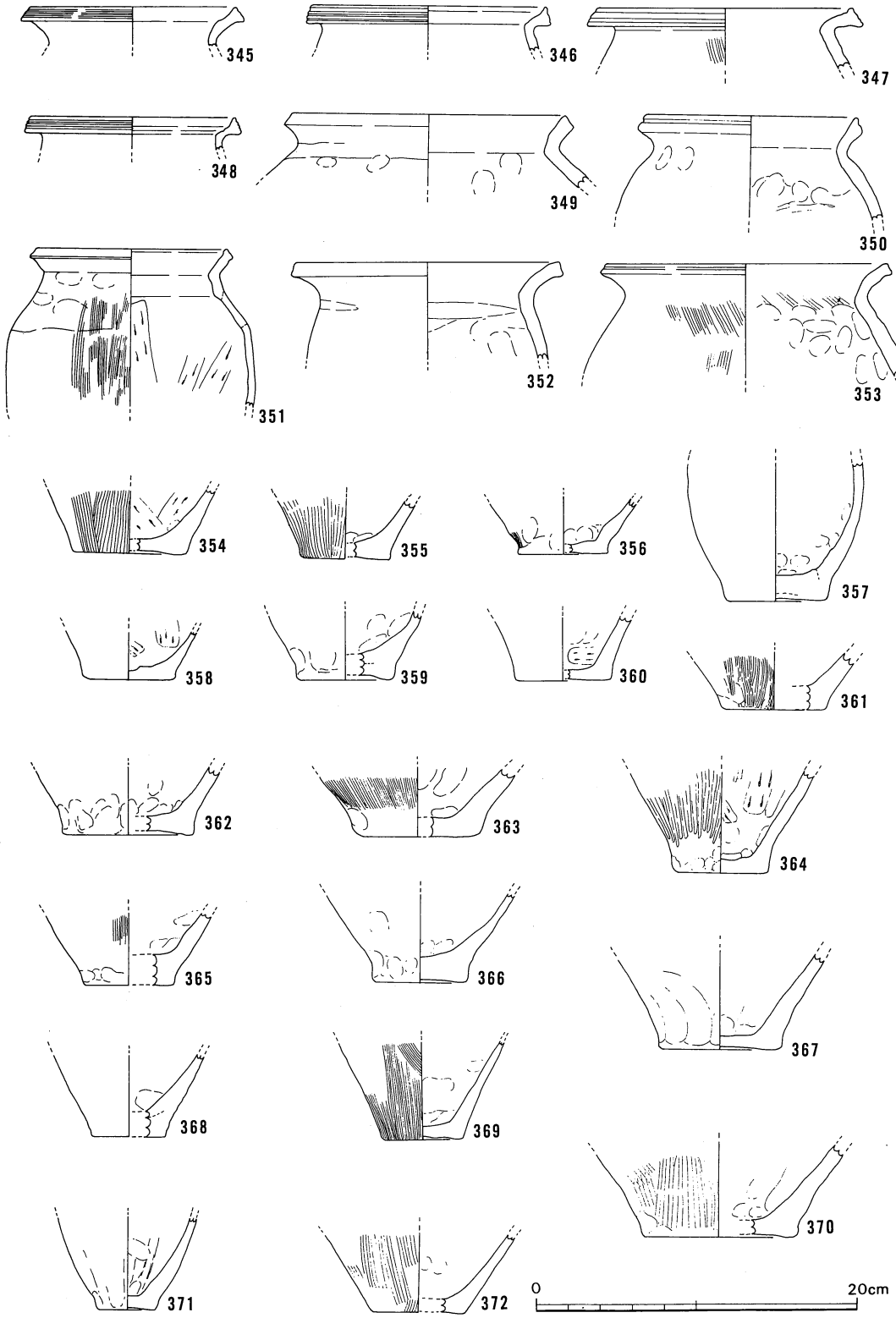
第26図　ＳＲ２出土遺物



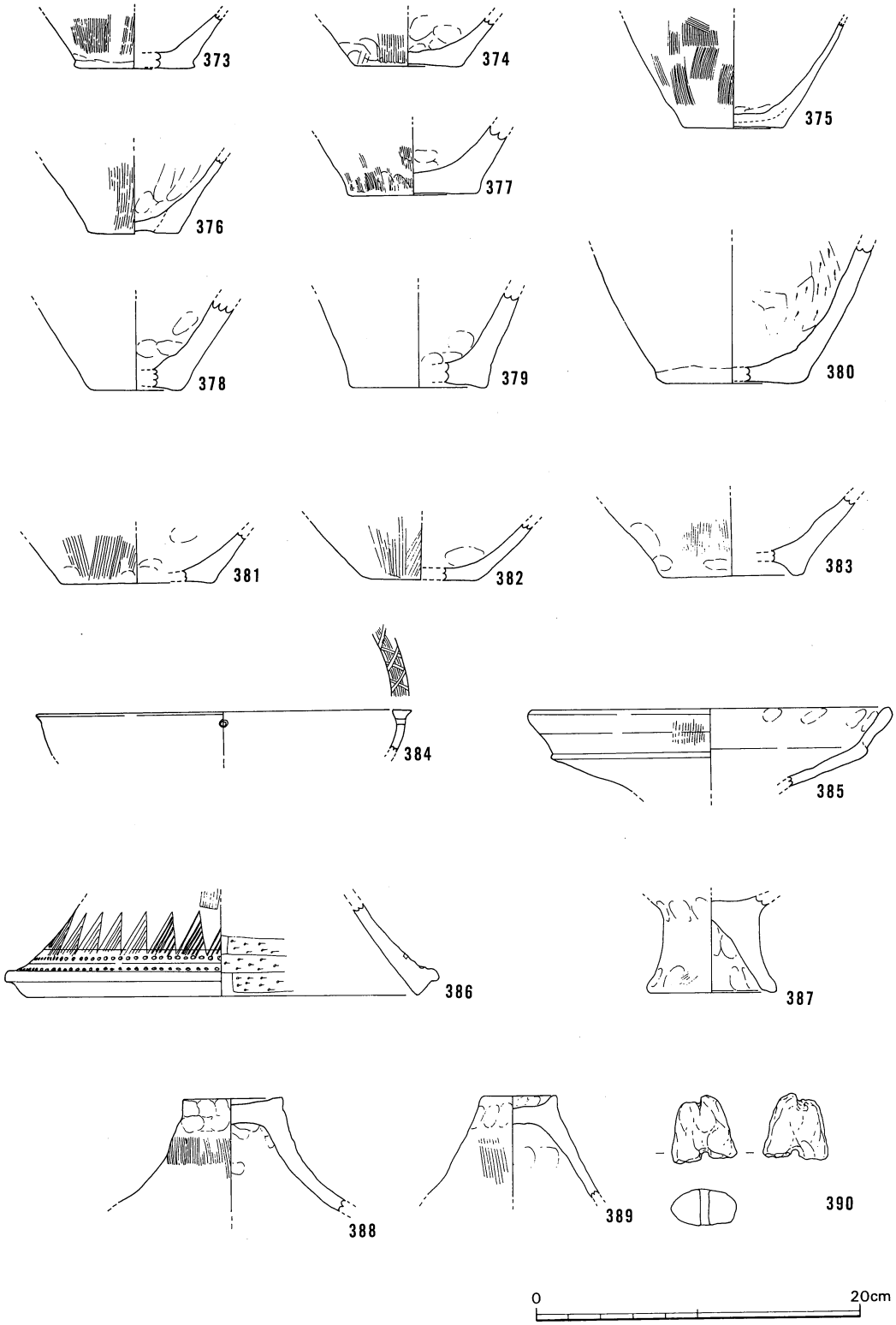
第27図　ＳＲ２出土遺物



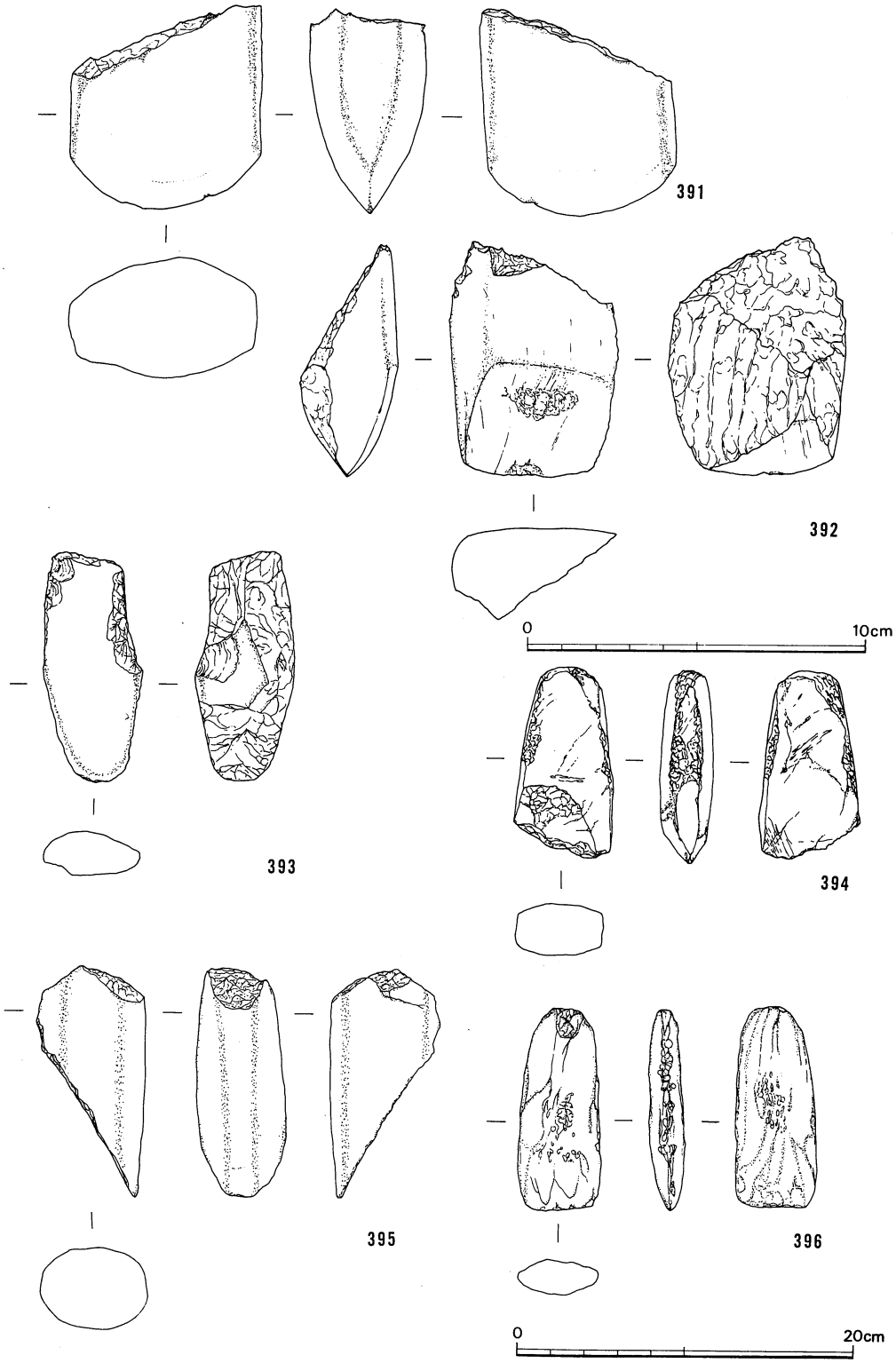
第28図　ＳＲ２出土遺物



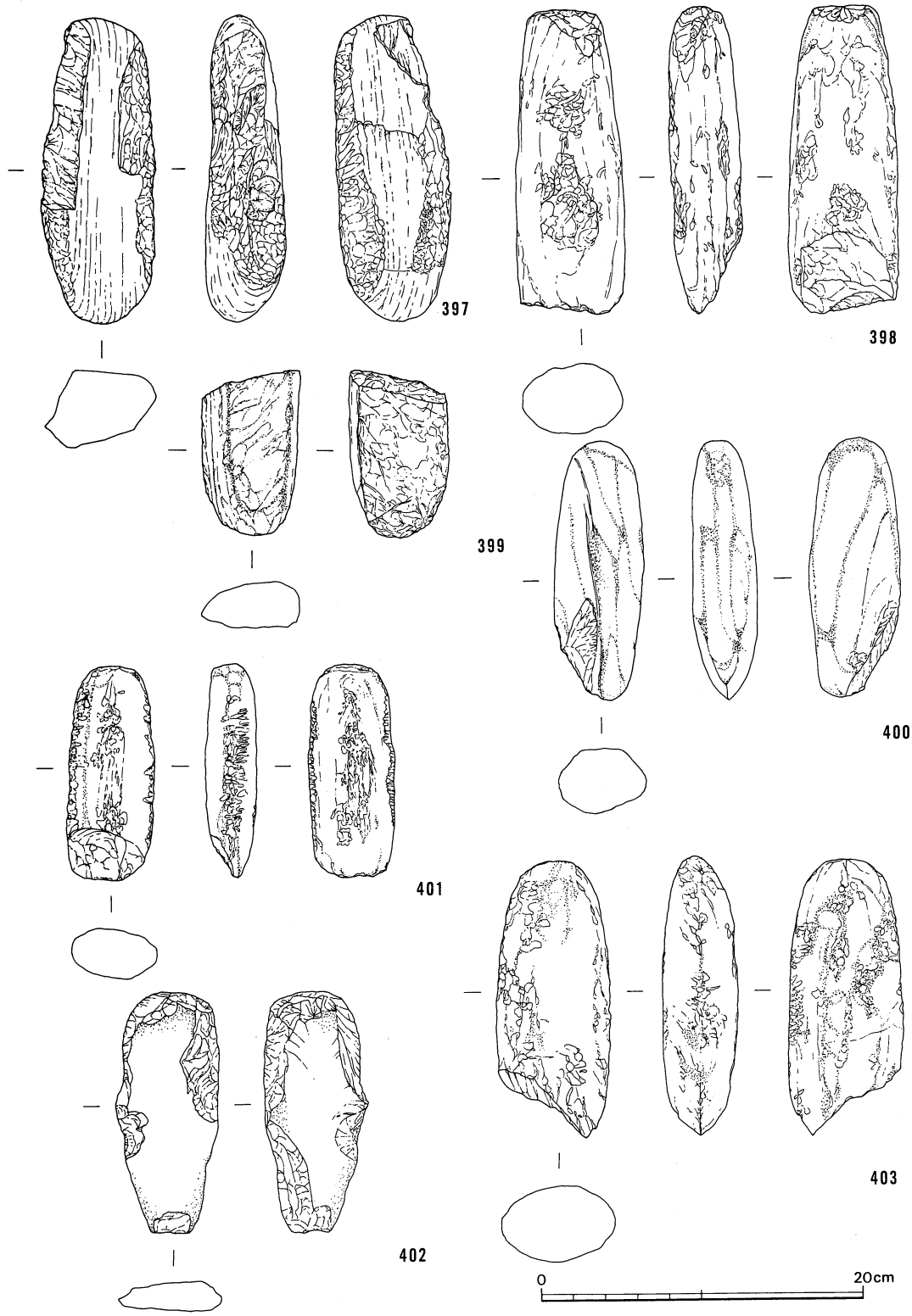
第29図　ＳＲ２出土遺物



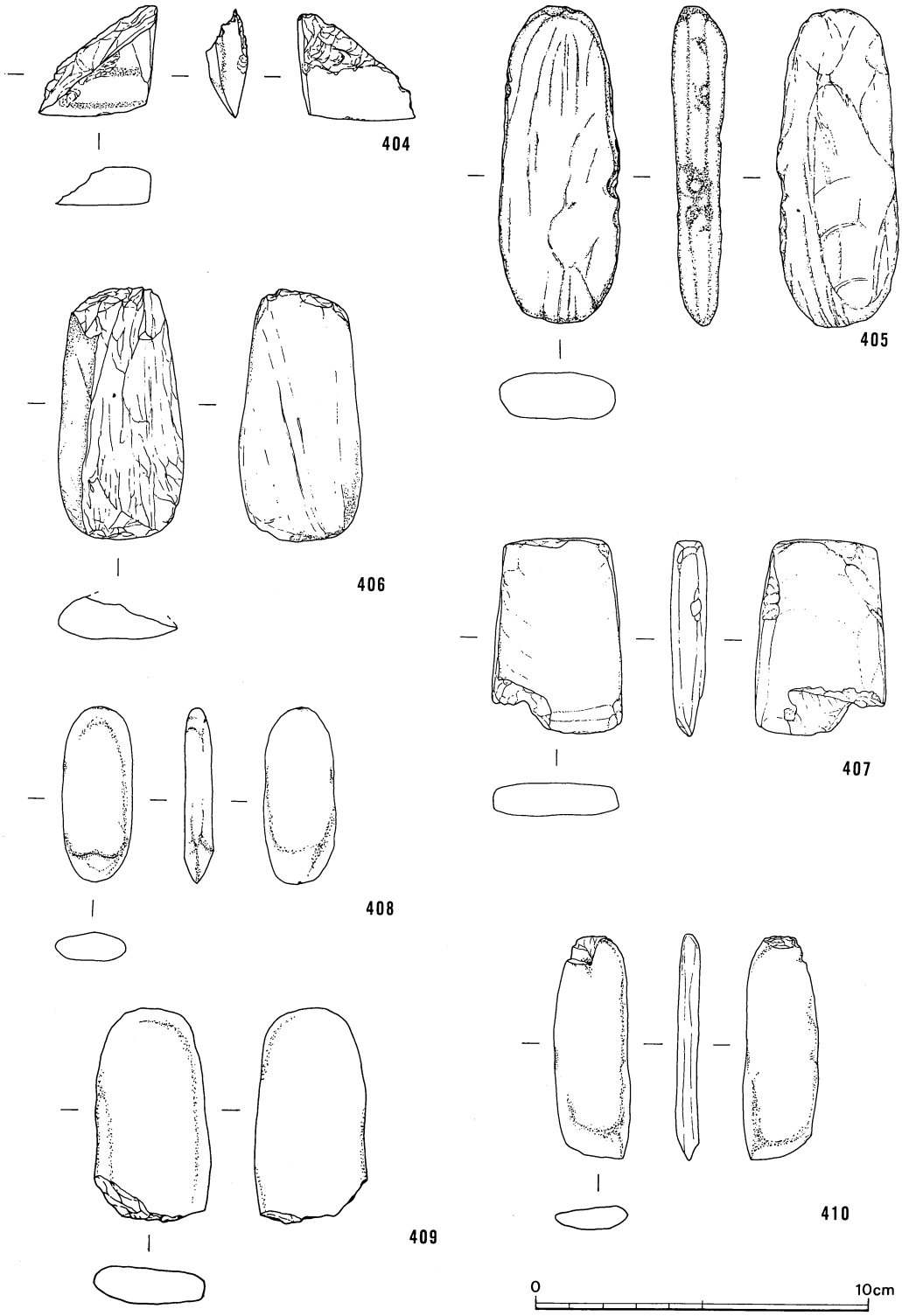
第30図　ＳＲ２出土遺物



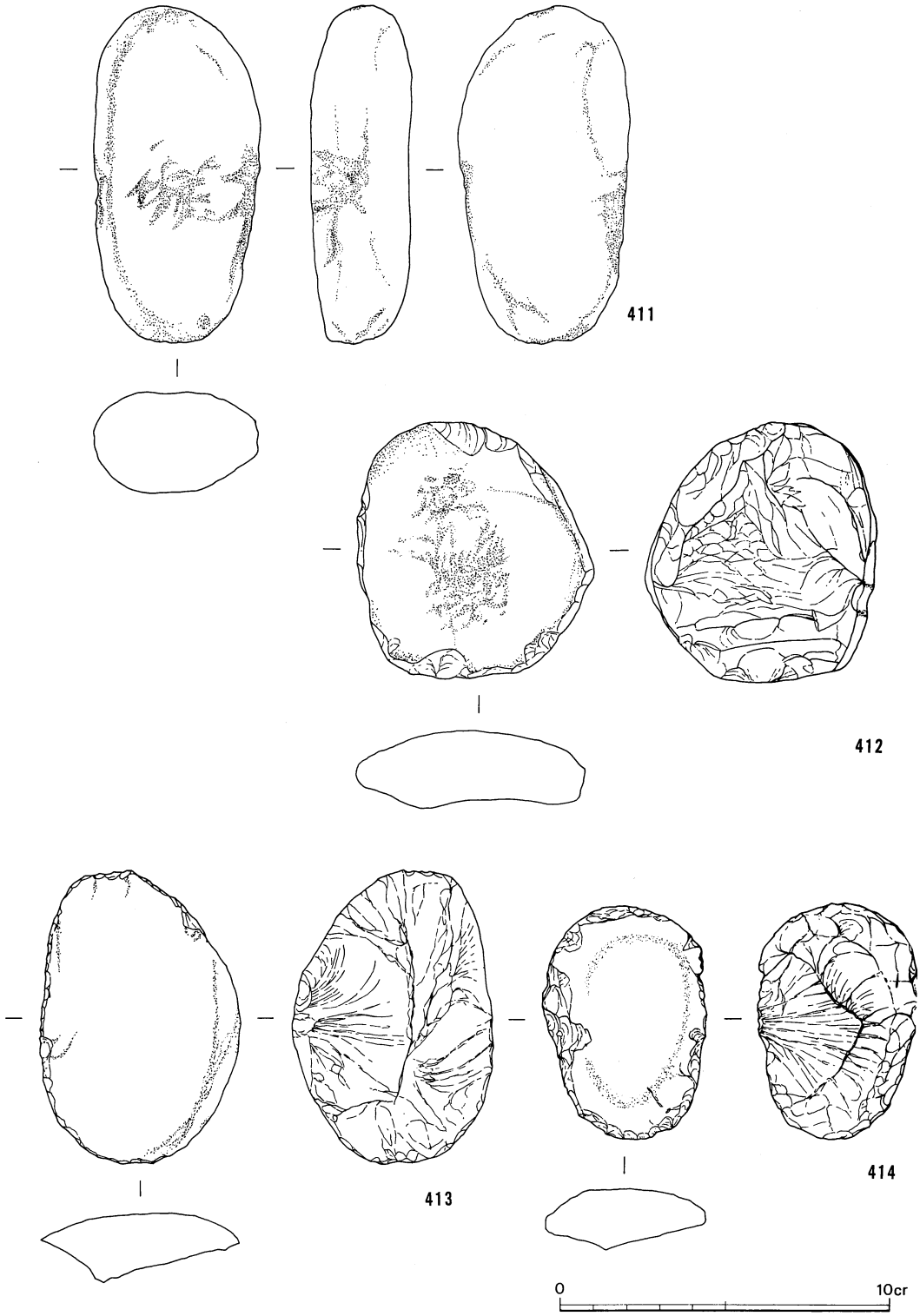
第31図　ＳＫ２～４、ＳＲ１・２出土遺物



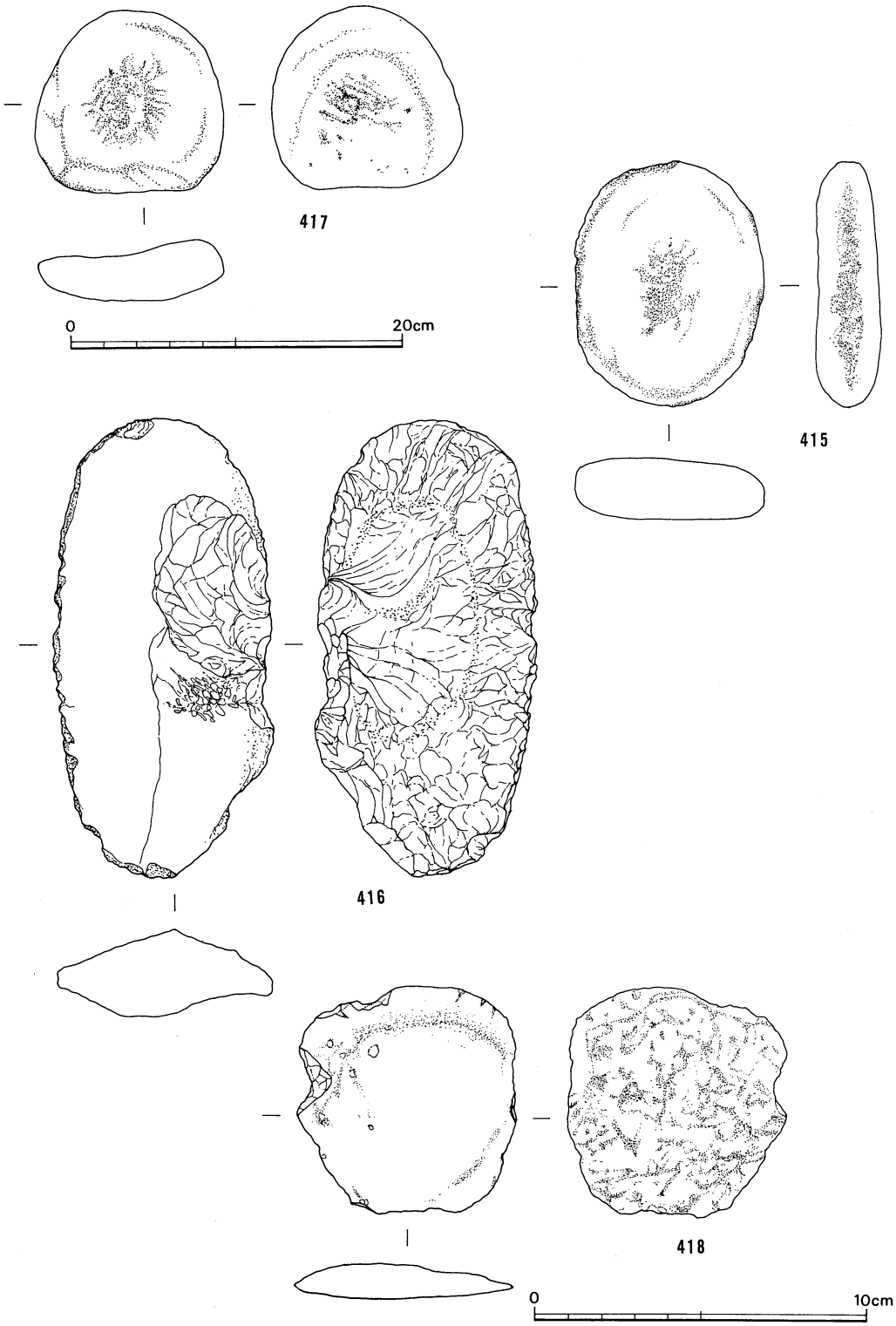
第32図　ＳＲ１・２出土遺物



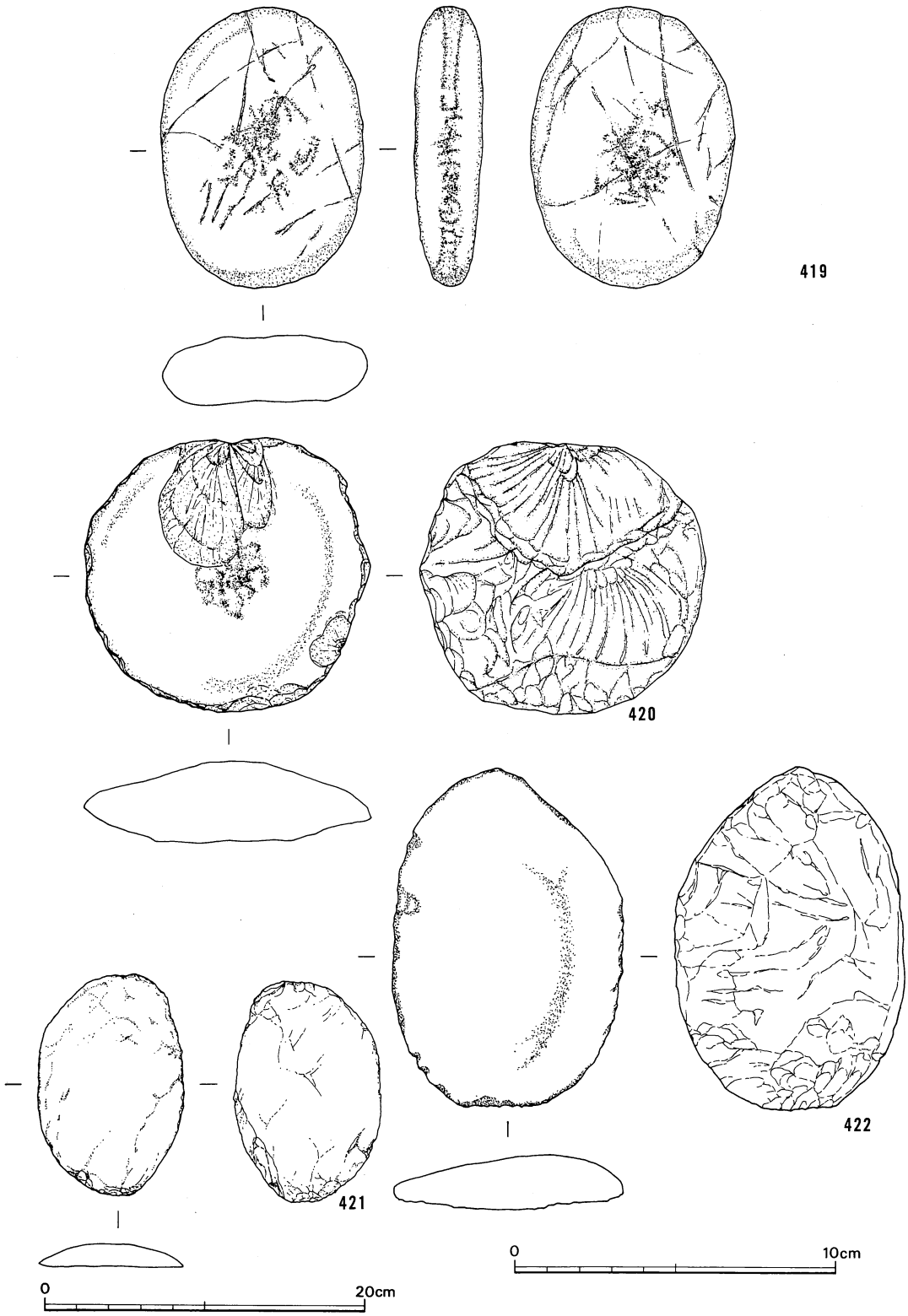
第33図　ＳＲ１・２出土遺物



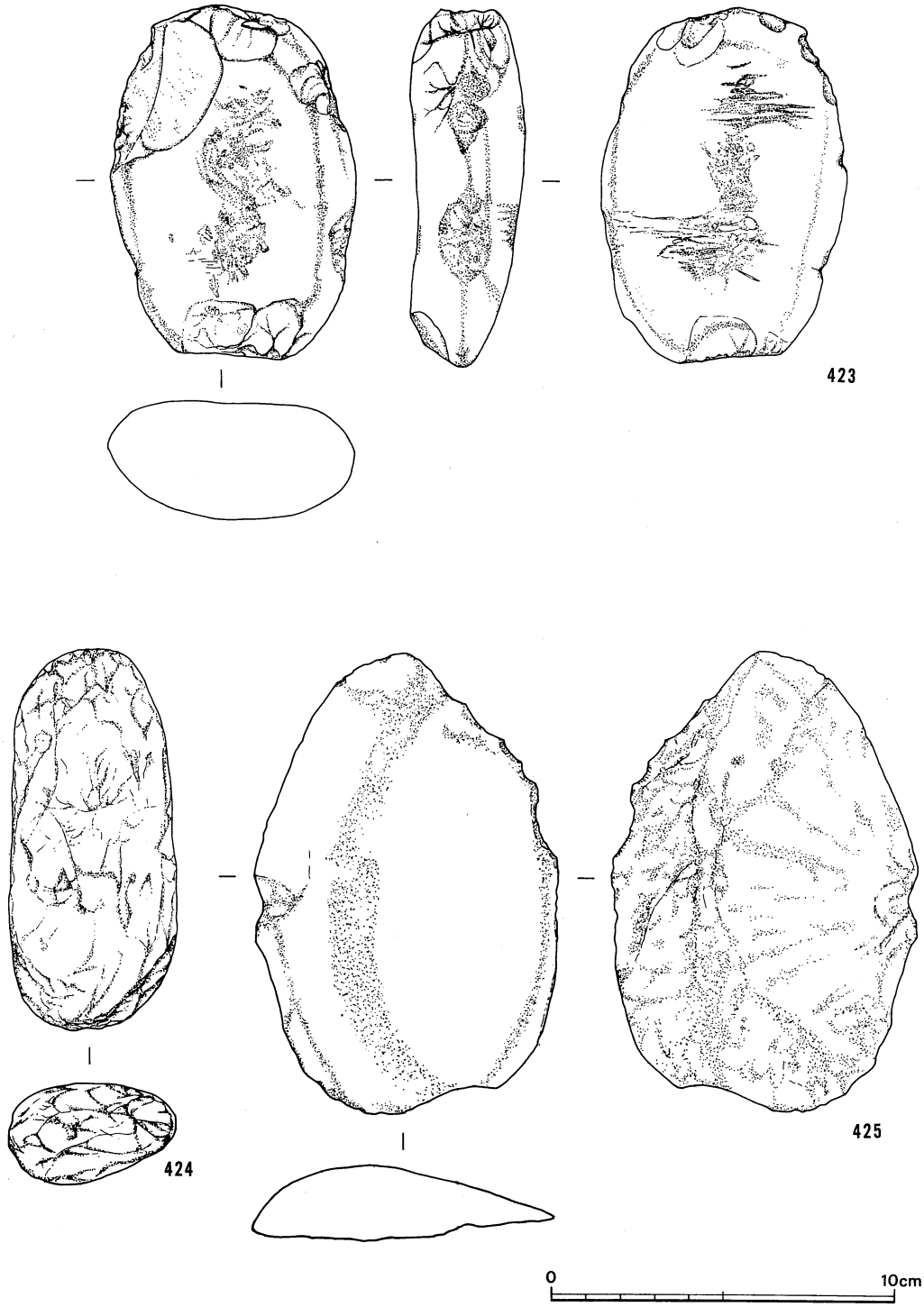
第34図　ＳＫ３出土遺物



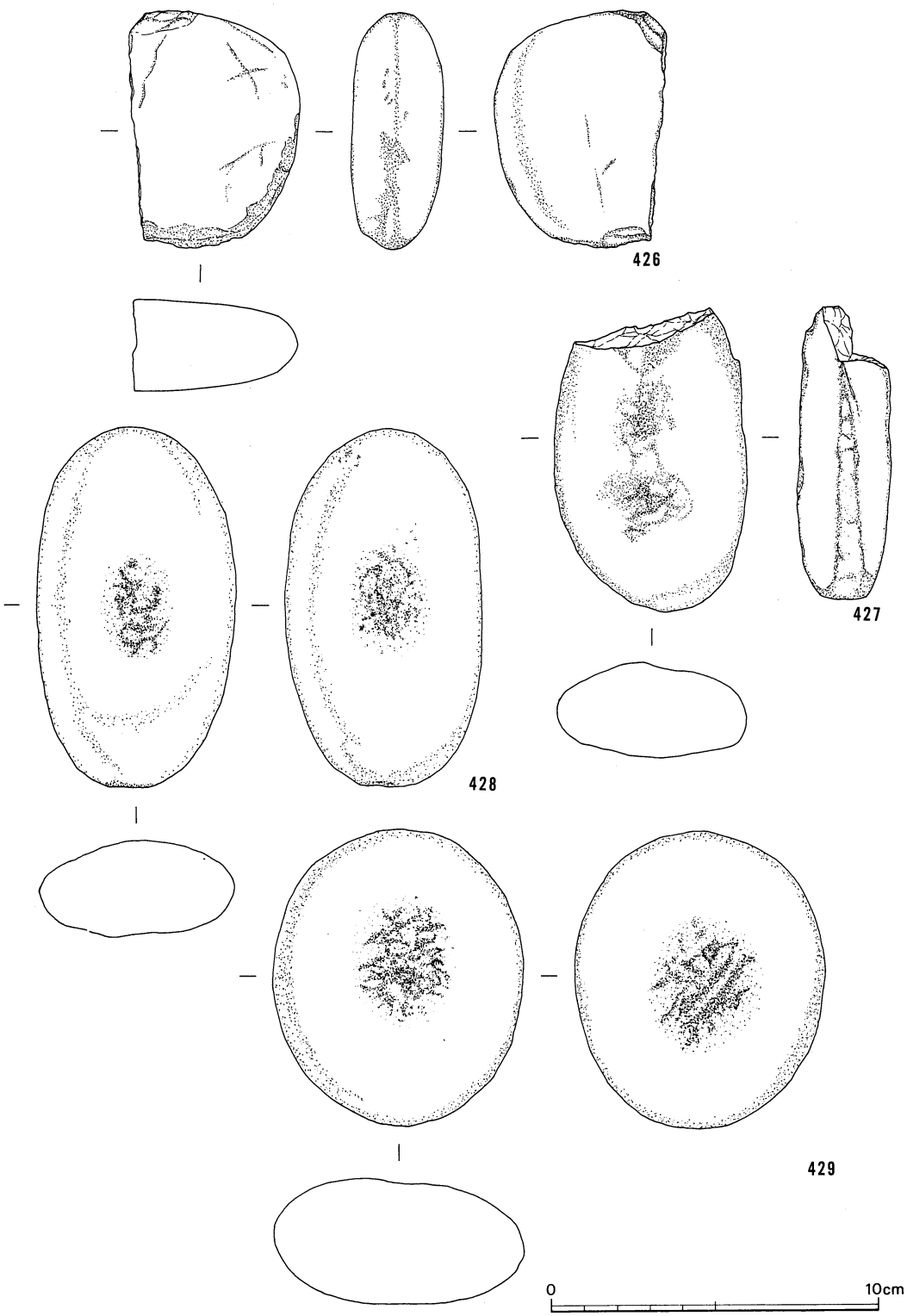
第35図　ＳＫ３、ＳＲ１出土遺物



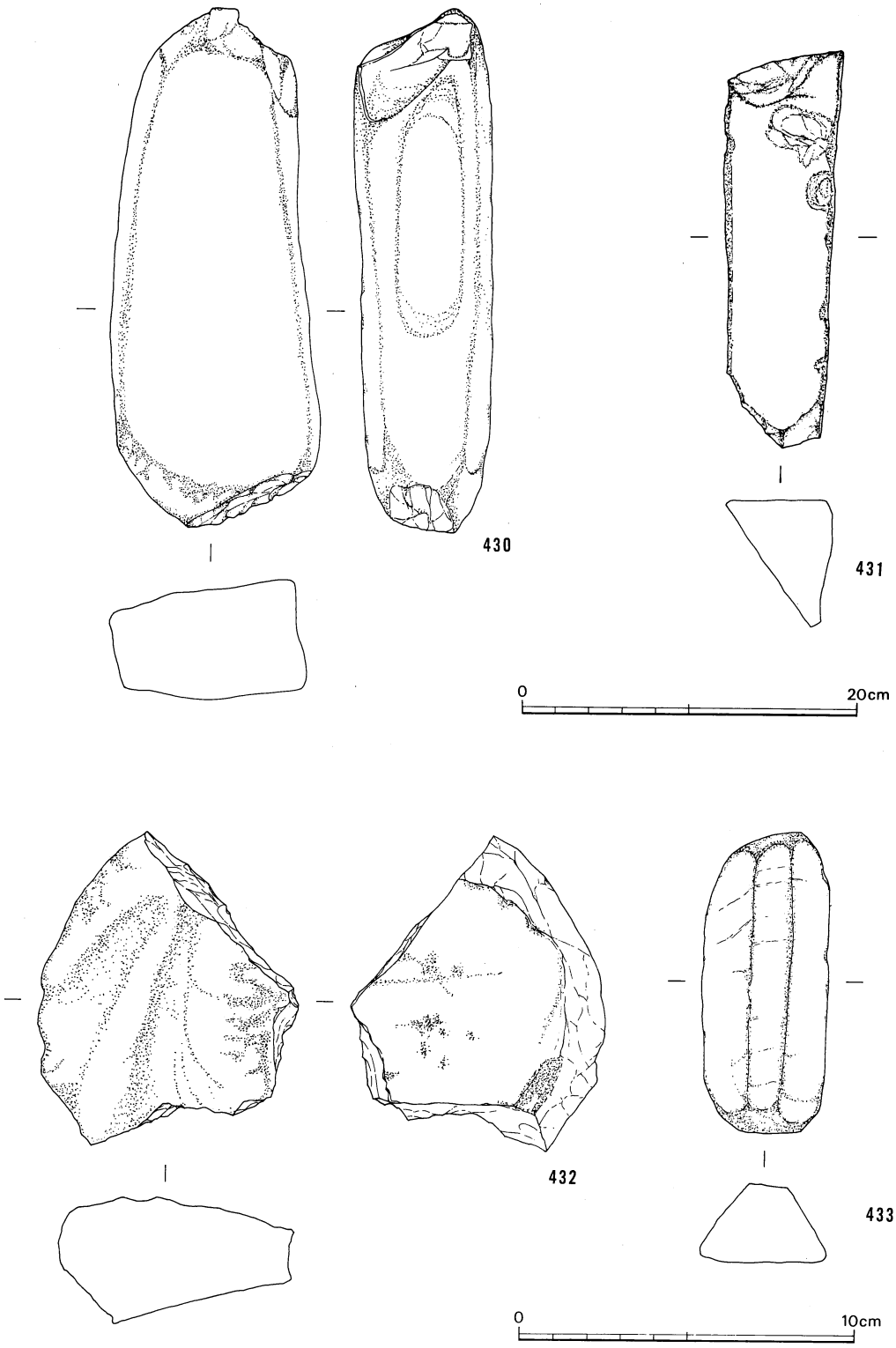
第36図　ＳＲ１出土遺物



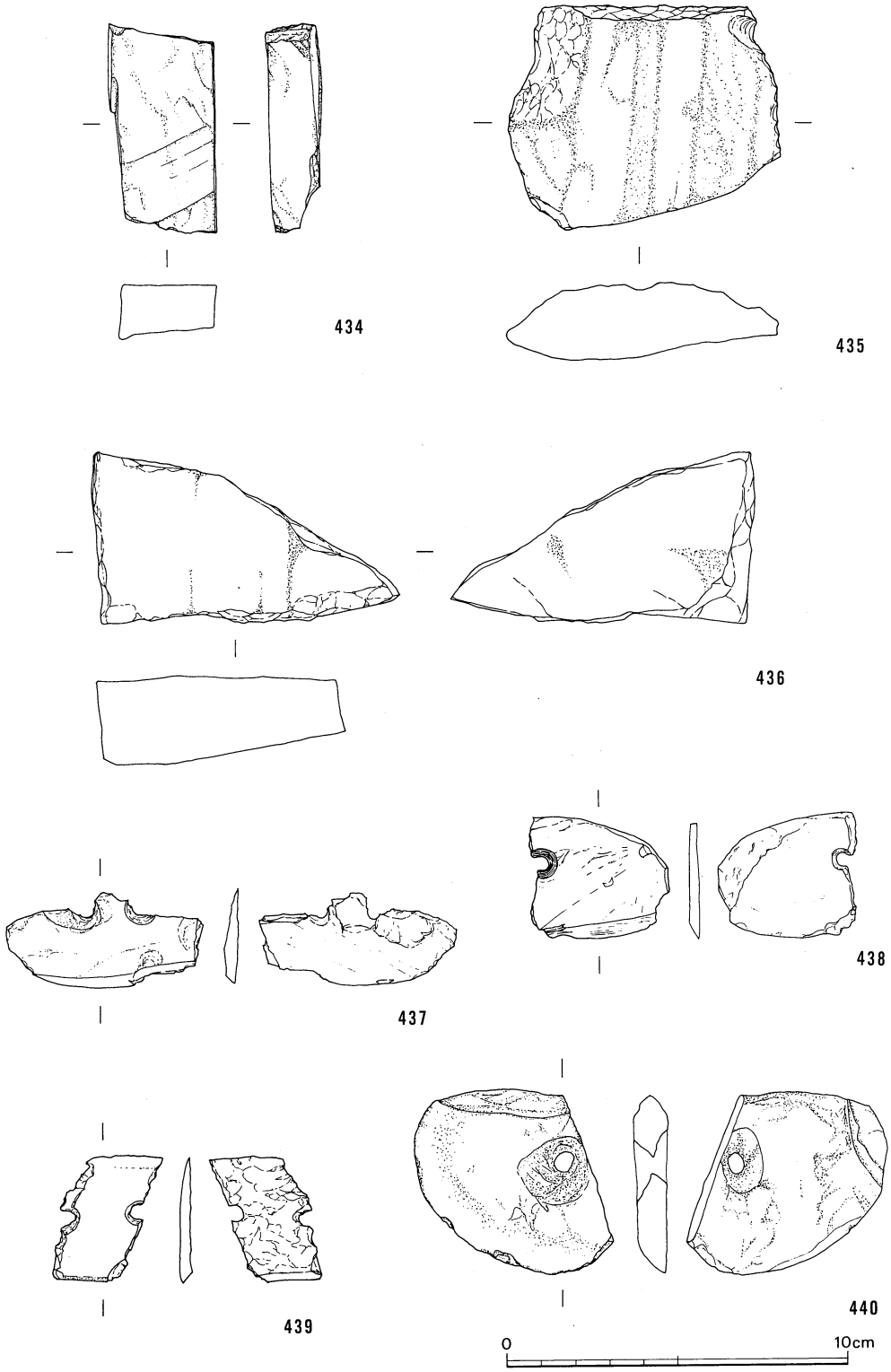
第37図　ＳＲ１出土遺物



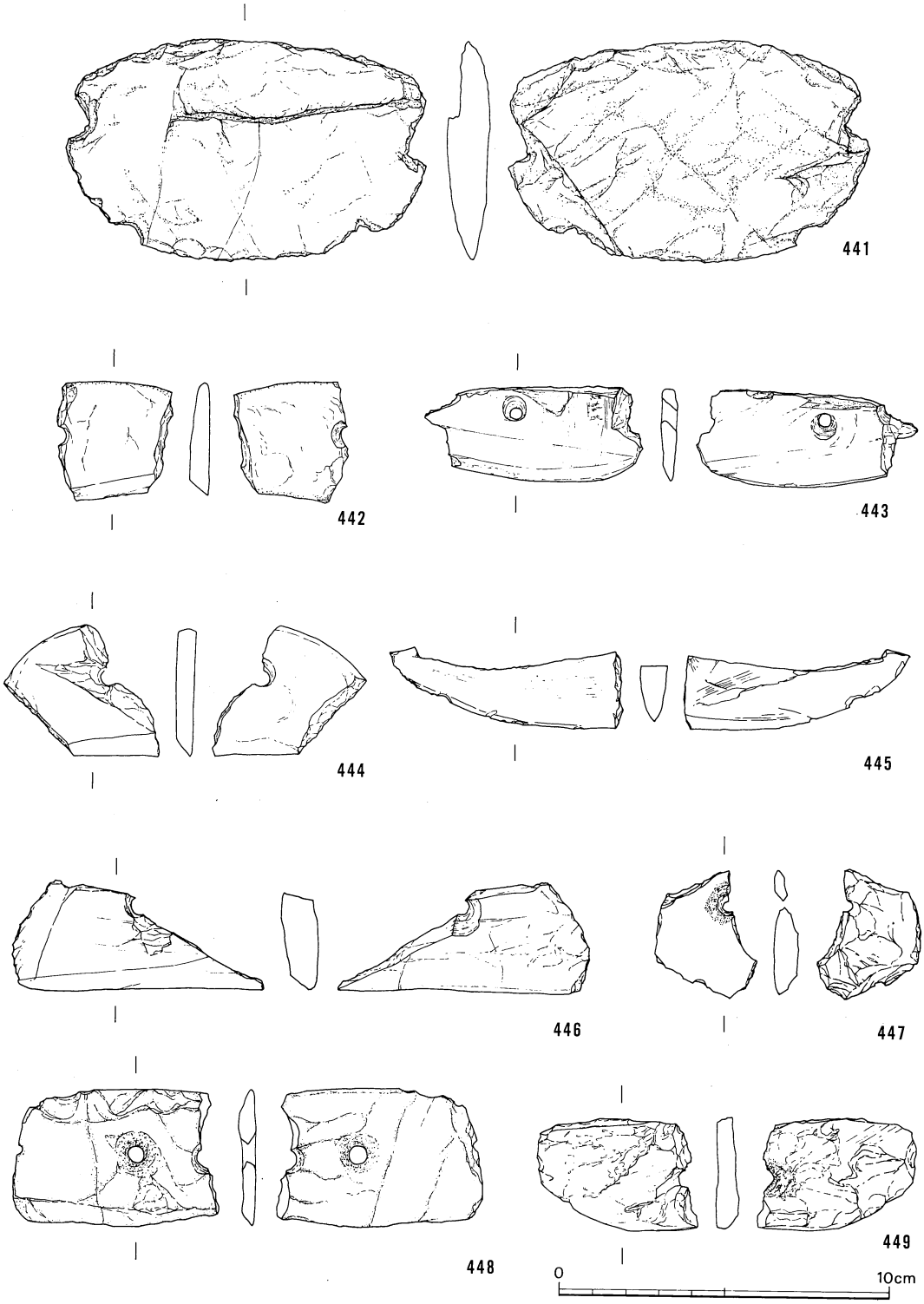
第38図　ＳＲ１出土遺物



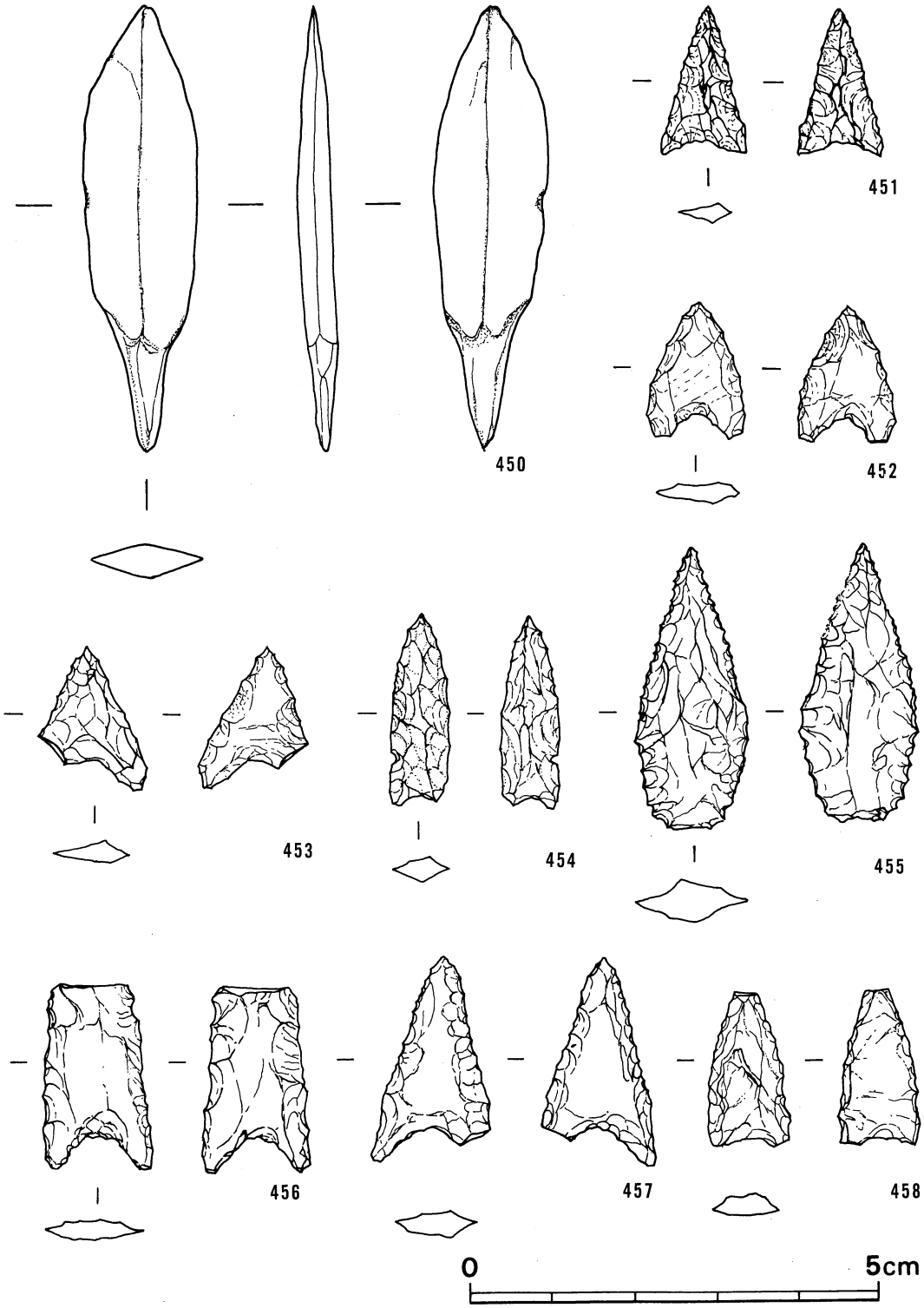
第39図　ＳＲ１出土遺物



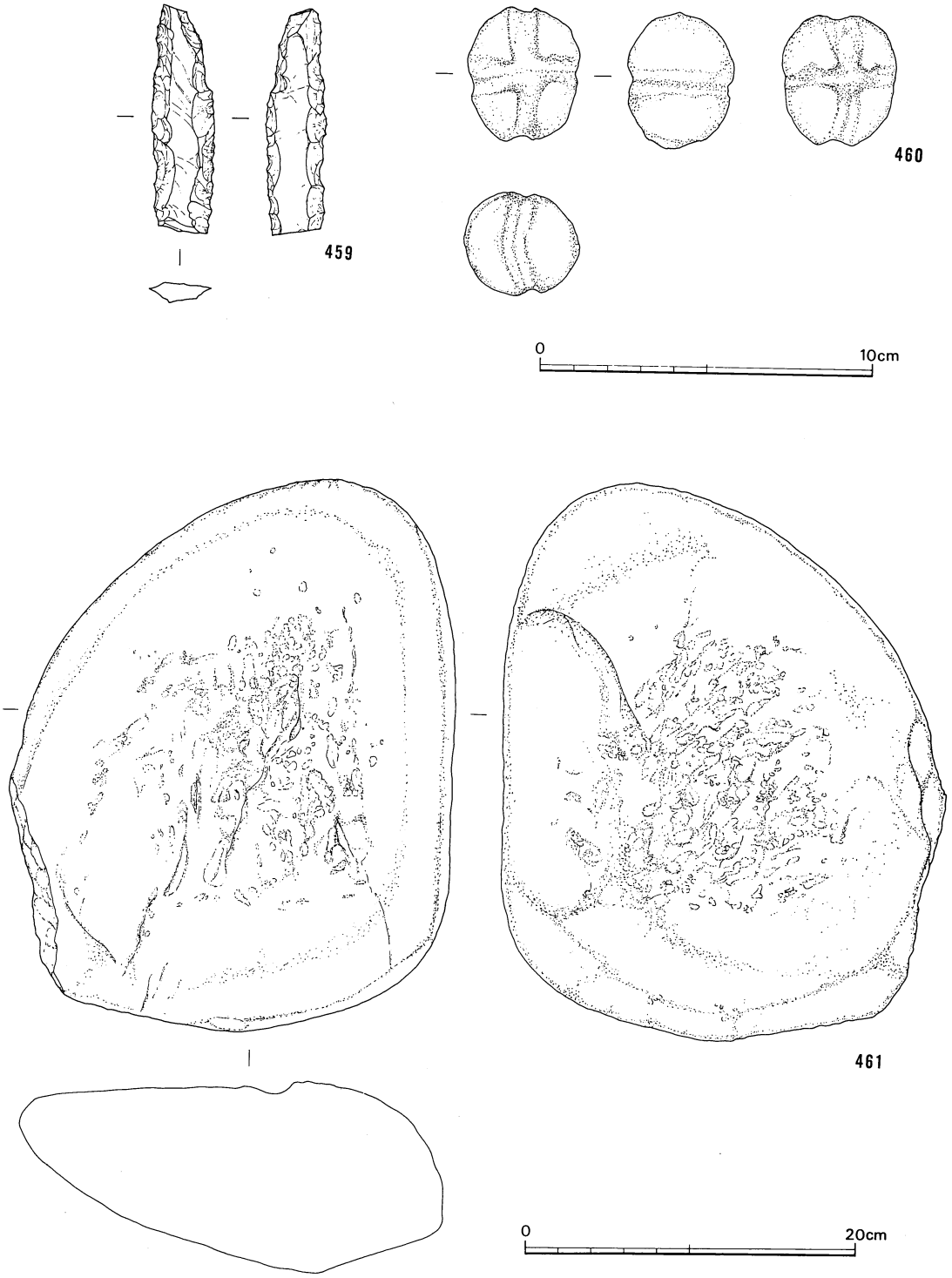
第40図　ＳＲ１・２、ＳＫ１・３・４出土遺物



第41図　ＳＲ１・２出土遺物



第42図　ＳＫ２、ＳＲ１・２出土遺物



第43図　ＳＲ１、ＳＫ３出土遺物

4. Loc.44

Loc.44

1．位置と調査経過

Loc.44は、空港拡張範囲の北端に位置し、海抜高も調査範囲全体の中で最も高いところである。また、Loc.44は、従来西見当遺跡と呼ばれてきたところで、南四国の弥生時代前期前半に始まる集落遺跡として著名な遺跡である。昭和30年、郷土史家浜田春水氏によって発見され、昭和50年には地元中学生によって銅鐸の舌が発見されて注目を集めた。

昭和30年以来、今日までに4次にわたる調査がなされ、西見当Ⅰ式（前期Ⅱ）、西見当Ⅱ式（前期Ⅲ）の型式が設定され、大篠式土器（前期Ⅳ）とともに弥生前期土器の編年が確立し、南四国における弥生時代研究の基礎がつくられた。D・E調査区の東で実施された第3次調査は研究史上画期的な調査であった。すなわち、数基の貯蔵用土坑や工房址とともに西方向に伸びる環濠と考えられる溝が確認され、調査にあたった岡本健児氏は環濠出土遺物を詳細に分析し、西見当遺跡を前期前半（西見当Ⅰ式の段階）に成立する環濠集落として位置づけられた。次いで行われた第4次調査では、西見当遺跡が立地する自然堤防の旧地形の一部を復元する成果をあげ、集落の中心地は第1～4次の調査地点よりも西に偏って存在することが判明した。

今次の調査は、西見当遺跡の立地する南北に長い自然堤防上を縦断する伊勢田溝（通称田村川）改修工事に伴うものである。

2．調査概要

今次の調査は、上述のように「西見当遺跡」を縦断する田村川の改修工事に伴うもので、幅約7m、延長約310m、調査面積2041㎡である。従来の調査は対象面積も狭く、点と線的なものであり、遺跡の明確な範囲や遺構の配置等は不明な点が多かったが、今次調査は南北に長いトレンチを入れる結果となり、遺跡の南限や北限、及び3次の調査で確認し得た環濠の範囲を把握でき得る可能性を充分持つものである。標高は、調査区南端で8.1m、北進に併行して徐々に高度を上げ北端では8.7mを測る。

調査にあたっては、現水田の畦や道路を境にして北からA～E区の5つの地区に分けた。遺構はA・C～E区より溝、土坑等が多数確認されたが、B区は旧地形が急激に下降し、自然流路の如き状況を呈しているために遺構の存在を全く確認することができなかった。

A区は調査区に沿って南北に走る弥生時代中期から後期の溝と前期の溝を検出することができた。C区では北端で調査区を横切る溝を確認することができた。この溝は、形状、出土遺物等から考えてE区及び第3次調査で確認した環濠の一部分をなすものと考えられる。その他弥生時代前期と中期の土坑、歴史時代の溝及び近世墓等が確認された。D・E区でも弥生時代前期の土坑が数多く確認され、特にE区北端では第3次調査の環濠の延長を確認することができた。

第44図　調査区設定図

３．層序と遺物

各調査区共に現水田耕作土と床土を除けば弥生時代の遺構検出面であり、現地表下20cm内外で検出面に達するという状態である。したがって遺物包含層は皆無に近い状況であり、遺構の保存状況も良くない。

４．遺構と遺物

Ａ区

溝

ＳＤ１

調査区を南北に走る溝で、南端でＳＤ２を切っており、Ｇ―Ｈ、Ｉ―Ｊ付近では肩の部分を田村川に切られている。長さ48.00ｍ、幅は南端で3.10ｍ、北端で1.50ｍ、深さは南端で0.44ｍ、北端で0.32ｍを測る。検出状況から見て全体に相当削平を受けている。セクションベルトをＡ―Ｂ～Ｓ―Ｔまで10か所に設けて埋土の観察を行った。各セクションベルトの層序は下層の粘質土と上層の砂質～砂礫層に分けることができる。セクションベルトＡ―Ｂ～Ｇ―Ｈ、Ｋ―Ｌ～Ｏ―Ｐ間には、程度の差はあるが東壁に粘質土が堆積している。この粘質土はＱ―Ｒ以北には見られない。砂質～砂礫層は粘質土がＳＤ１の埋土として堆積した後に、これを抉るようなかたちで流れ込んだ二次堆積である。

ＳＤ１からはコンテナケース約20箱分の弥生土器、石器が出土している。そのうち70％が粘質土出土で、圧倒的多数が中期IIに属し、溝に土器を敷詰めたような出土状況を呈している。砂質～砂礫層には、前期から後期の弥生土器及び少量の古式土師器、須恵器が含まれている。粘質土出土の壺は（９、12、14、17、18、20、22、26、28、30、32、33、36～45、48～51、53、54、56、60、61、68、70）であり、このうち(68、70)は中期IIIに属するが、他はすべて中期IIのものである。また粘質土出土の甕は（62、63、65）で、すべて中期IIに属する。

石器は太型蛤刃石斧11点（102～112）、扁平片刃石斧４点（113～116）、打製石斧２点（117、118）、叩石30点（119～127他）、砥石５点（128～132）、磨製石包丁６点（133～138）、打製石包丁４点（139～142）、打製石鏃３点（143～145）、磨製石鏃１点（146）、石剣１点（147)が出土している。これらの石器のうち（110、119、120、136、142)は砂質～砂礫層出土であるが、他はすべて粘質土出土である。

以上のことから、ＳＤ１は中期IIの段階に埋没した溝で、埋没後は６世紀後半頃まで幾度かの氾濫に見舞われ、粘質土を削り砂礫層が流れ込んだものと考えられる。

ＳＤ２

ＳＤ２は調査区南端に位置し、北東から南西に向って走る溝である。北端は田村川に切られ、南はＳＤ１に切られている。長さ7.20ｍ、幅0.88ｍ、深さ0.30ｍ前後を測り、断面形は箱形を呈する。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は前期IIの壺（101)が出土している。ＳＤ２は前期IIの溝である。

Ｃ区

土坑

ＳＫ１

隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ－53°－Ｗを示す。西側をＳＤ２に切られているが、長径1.20ｍ、短径0.80ｍで、底は２段に掘り込まれており、深さは20cmと５cmを測る。壁は斜めに立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は底面より甕（１）が、埋土中より方柱状片刃石斧（212)、石鏃（250)が出土し、他に弥生土器片76点、チャートのフレーク７点、叩石、砥石が出土した。土器はすべて前期Ⅳのものである。また底面には大小の河原石が多量に入っていた。

ＳＫ２

大部分を田村川に切られ、さらにＳＸ２によって切られているために平面形を推定することすらできないが、長軸方向はＮ－24°－Ｅを示し、現存長径1.89ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.13～0.21ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、遺物は鉢（２)、甕（３)、土製円盤（４)の他160点の土器片が出土した。90％以上が前期Ⅲ段階の土器であり、少量の中期土器を含んでいるが、ＳＸ２からの流れ込みと考えられる。前期Ⅲの土坑とみられる。

ＳＫ３

遺構の大半が調査区外であり、さらに東をＳＤ２に切られているが、東隅角はＳＤ２の東に残っている。残存部から推定すると平行四辺形の平面形を有するものと考えられる。長軸方向はＮ－25°－Ｅを示し、長径5.12ｍ、残存短径1.64ｍ、深さ1.90ｍを測る。底面は北半分が６cmほど高くなっており全体的にゆるい凹凸がみられ、また２つの小ピットが存在する。Ｐ１は直径24cm、深さ10cm、Ｐ2 は40×30cm、深さ15cmを測る。埋土は赤茶褐色粘質土の単純一層で、遺物は図示できない弥生土器細片が100点程度出土している。

ＳＫ４

大部分を田村川に切られており全体の形状は不明である。壁は斜めに立ち上がっている。底

面は平坦で西壁側に30×40cmのピットが見られる。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は全く認められないが、埋土及び残存部から推定して前期Ⅲの貯蔵用土坑とみられる。

ＳＫ５

遺構の半分以上が調査区外に出ているが、隅丸方形の平面形を有し、長軸方向はＮ－30°－Ｅを示す。南東壁1.00ｍ、北東壁0.66ｍ、深さ0.14～0.15ｍを測り、底面は平坦である。埋土は茶褐色粘質土で遺物は全く見られない。ＳＫ４と同様の性格を有するものと考えられる。

ＳＫ６

遺構の上部は田村川に大きく削られており、北東隅はＰ41と切り合っているが新旧関係は不明である。鉤形の平面形を有し、長軸方向はＮ－57°－Ｗを示す。東西長径0.90ｍ、南北長径0.90ｍ、深さ0.30ｍを測る。埋土は赤茶褐色粘質土単純一層で、前～中期の弥生土器細片77点、須恵器細片６点、チャートフレーク６点が出土している。後世の撹乱を受けているものと考えられる。

ＳＫ７

西側の大部分をＳＤ２に切られている。不定形の平面形を有し、長軸方向はＮ－66°－Ｗを示す。残存長径1.00ｍ、短径1.54ｍ、深さ0.20ｍを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。また北東隅には50×32cm、深さ14cmを測るピット状の落ち込みがある。埋土は茶灰色砂質土単純一層で、遺物は有文紡錘車（５）の他弥生土器細片数点、チャートのフレーク10点、須恵器細片１点が出土している。ＳＫ７は弥生時代の土坑と考えられ、須恵器はＳＤ２からの混入と考えられる。

ＳＫ８

西側の大半がＳＤ２に切られており、さらに南西端も撹乱坑に切られている。隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。長径1.36ｍ、残存短径0.83ｍ、深さ0.22ｍ前後を測り、底面は平坦で壁は斜めに立ち上がる。埋土は黄茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生前期土器細片を中心に400余点が出土しているが、図示できるものはなかった。他にチャートのフレーク40点、須恵器細片５点が出土している。須恵器はＳＤ２からの混入である。

ＳＫ９

西側をＳＤ２に、東側を田村川によって切られ、さらに南肩の西半部が10cm程近代に撹乱されている。長軸方向はＮ－55°－Ｗを示し、不定形の平面形を有するものと考えられる。残存長径1.50ｍ、短径1.67ｍ、深さは最も残りの良いところで0.43ｍを測る。底面は平坦で壁は斜めに立ち上がるが、南壁東部においては検出面よりも底面の方が広くなっている。埋土は暗茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生前期土器細片が多量に出土しているが、図示可能なものはない。

他にチャートのフレークが１点出土している。前期Ⅲの貯蔵用土坑であると考える。

ＳＫ10

楕円形の平面形を有し、長軸方向はＮ－26°－Ｗを示す。長径1.14ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.24ｍ前後を測る。底面は段状をなし南半分が0.10ｍ前後高くなっている。埋土は暗茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生時代前期Ⅲ・Ⅳのものに少量の中～後期の土器が含まれている。すべて細片で、図示できるものはない。他にチャートのフレークが数点出土している。詳細な時期決定はでき難い。

ＳＫ11

西側が調査区外にでているが、長軸方向はＮ－84°－Ｗを示し、楕円形の平面形を有する小型の土坑であろう。残存長径0.45ｍ、短径0.42ｍ、深さ0.20ｍを測る。底面には２個のピットがあり、ピットに挟まれた底面は東に傾斜している。Ｐ１は直径20cm、深さ20cm、Ｐ２は10×19cmの楕円形で深さは12cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生時代前期の土器細片15点、チャートのフレーク７点が出土している。

ＳＫ12

大半が調査区外に出ており、さらにＳＤ３に切られているために平面形は不明である。長軸方向はＮ－８°－Ｅを示し、長径1.46ｍ、短径0.54ｍ、深さ0.44ｍを測る。埋土は茶褐色粘質土単純一層である。遺物は、壺（６、７）、甕（８、９）の他50数点、石器は叩石(229)の他のチャートのフレーク１点が出土している。時期は前期Ⅲである。

ＳＫ13

不整楕円形の平面形を有し、長軸はほぼ南北方向を示す。長径は0.82ｍ、短径は0.50ｍ、深さ0.24ｍを測る。北側に接してピットが２個存在するが、ＳＫ13との関係は不明である。埋土は暗茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生前期土器細片25点が出土している。前期の土坑である。

ＳＫ14

不整形の平面形で北東隅に小ピットを有する。長軸方向はＮ－53°－Ｗを示し、長径0.69ｍ、短径0.52ｍ、深さ0.19ｍを測る。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。小ピットは直径14cm、深さ４cmを測る。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は全く見られない。埋土から考えて弥生時代前期の土坑である。

ＳＫ15

東側の壁を田村川によって切られ、西壁の一部をピットに切られているが、ほぼ全体形を把握することができる。長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ－38°－Ｅを示す。長径2.04ｍ、短径1.07ｍ、深さ0.25ｍ前後を測る。底面は平坦で、中央部よりやや東に直径20cm、深さ６cmの小ピットを有する。壁は斜めに立ち上がる。埋土は黄灰茶色粘質土で、遺物は弥生時代前期土器細片約100点と埋土上部より須恵器細片が数点出土している。埋土上部は撹乱を受けていると考えられるが、中層以下は撹乱はみられない。前期Ⅲの貯蔵穴である。

ＳＫ16

西側をＳＤ３に切られており全体の形は不明であるが、長軸方向はＮ－37°－Ｅを示し、不整楕円形の平面形を有するものであろう。長径1.95ｍ、短径0.82ｍ、深さ0.28ｍを測る。底面は平坦で中央部に直径18cm、深さ10cmの小ピットを有し、壁は斜めに立ち上がる。埋土は灰茶褐色粘質土単純一層である。遺物は、壺（12）、甕（10、11）の他、叩石、チャートの石核、砥石等が出土している。前期Ⅳの土坑である。

ＳＫ17

東側の大部分を田村川に切られているが、長軸方向はＮ－41°－Ｅを示し、隅丸方形の平面形を有する土坑である。長径2.04ｍ、残存短径1.22ｍ、深さ0.35ｍを測る。底はほぼ平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土及びシルトである。遺物は弥生時代前期土器30数点の他、中期の土器細片が数点混入している。ともに図示できるものはない。その他粘土塊２点、チャートのフレーク１点が含まれる。また、南壁に倒れかかるような状況で20cm大の河原石が１個出土している。前期Ⅲのものである。

ＳＫ18

土坑の約半分が調査区外に出ているが、隅丸長方形の平面形を有するものであると考えられる。長軸方向はＮ—57°—Ｗを示し、残存長径1.29ｍ、短径1.54ｍ、深さ0.45ｍを測る。東壁辺に直径15cm、深さ25cmの小ピットがある。底は平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単純一層である。遺物は壺（13～17）、甕（18～20）が出土しており、（15）が埋土中より出土している以外はすべて底面からの出土である。他に140点の細片が出土しているが、すべて弥生時代前期である。石器は叩石(227)、砥石（236)が出土している。前期Ⅲに属する。

ＳＫ19

東側半分近くを田村川によって切られている。楕円形の平面形を呈し、長軸方向はＮ—30°—Ｅを示す。長径1.15ｍ、残存短径0.86ｍ、深さは最も残りの良いところで約0.10ｍを測る。埋土は黝黒

色粘質土単純一層である。遺物は、壺（21～25）、甕（26～34）、鉢（35）が出土している。(21、23、25～27）が埋土中よりの出土で、他はすべて底面出土である。(27)は擬朝鮮系無文土器である。他の遺物としては、チャートのフレーク４点、叩石１点、粘土塊３点が出土している。前期Ⅲの遺構である。

溝

ＳＤ１

調査区の北端に位置し、調査区を南西から北東に向って走っている。長さ13.20ｍ、幅約1.60～1.90ｍ、深さ0.40～0.50ｍを測る。Ａ—Ｂ、Ｃ—Ｄの断面を見れば解るように、ＳＤ１埋土上層には砂礫及びシルトが厚く堆積している。この砂礫～シルト層は北のＢ区に流れ込んでいる砂礫層と同様のものである。それによってＳＤ１の北壁は削り取られており、同時に埋土上層及び南壁側も一部抉り取られている。Ｃ—Ｄ断面の南壁側が２段になっているのはその結果によるものである。ＳＤ１埋土（第Ⅵ～Ⅶ層）からは多量の遺物が出土している。前期Ⅲのものが圧倒的に多いが、第Ⅳ層上層からは少量の弥生中～後期土器が出土している。これらは上層からの混入であると考えられる。壺（36、39）は前期Ⅰ～Ⅱのもので、(37、38、40～48、50）は前期Ⅲ、(51～57）は前期Ⅳ、(58～60）は中期のものである。甕は、前期Ⅰのものとして(70、71)、前期Ⅲのものは（72～93、95、96)、鉢及び蓋（102、103、105～110）は前期Ⅲのものである。石器は石斧（203)、叩石（226、228)、石包丁（248）が出土している。(248）の石包丁は中期のものである。

ＳＤ１は北東に伸びてＢ区東の自然堤防末端まで伸びていると考えられ、なお後述するＥ区のＳＤ１につながる環濠の一部と考えられる。

次にＳＤ１上層についてみておくと、前述の北方からの流れ込みは大きく２時期にわたってあったものと考えられる。最初に砂や大小の礫を含む第Ⅲ・Ⅳ層が流れ込み、次に第Ⅴ層のシルトが堆積したものである。両者ともに弥生時代前～後期の土器、石器が多量に含まれている。代表的なものを挙げると、前期の壺（152～157)、甕（158、159)、鉢（160)、中期の壺(161～172)、甕（173)、高杯（174～176)、後期の壺（177～188)、甕（189～192)、高杯(193～195)、鉢（196～198)、石器は石斧（199、200、206、209～211)、叩石（214～218、220、231、233)、石包丁（239～241、243、246～248)、磨製石鏃（253)、打製石鏃（249、251）などを挙げることができる。また第Ⅰ層シルトからは、第72図に示したように、壺(181、183)、甕(192)、高杯（195)などがまとまって出土している。これらは流れ込みによるものではなく置かれたものである。したがって第Ⅰ層は後期後半の一時期において生活面であったことを示している。

ＳＤ２

調査区の南寄りで確認した溝である。長さ8.80ｍ、幅0.90ｍ、深さ0.22ｍを測る。断面形は逆

台形で底面は南に向って下っている。埋土は２層よりなり、遺物は弥生時代前・中・後期の細片が多量に出土しているが、各土器片とも磨耗を受けている。後期の溝である。

ＳＤ３

弥生前期の溝(ＳＤ１)の南に位置し、調査区を東西に切る溝であり、東は田村川によって切られている。長さ3.40ｍ、幅は東で0.40ｍ、西で1.08ｍ、深さ0.20ｍを測る。埋土は茶灰色砂層で、弥生土器細片に少量の須恵器が入っている。出土した須恵器から、古代の溝と考えられる。

ＳＤ４

調査区の西壁側に沿って走る溝である。長さ28.80ｍ、幅0.50～0.70ｍ、深さ７～25cmを測り、南が深くなっている。断面形は逆台形を呈し、埋土は褐灰色粘質土である。遺物は弥生土器、須恵器の細片に混じって石斧（205、207）が出土している。

性格不明遺構

ＳＸ１

ＳＫ１の南の破線部分である。掘り込みは見られないが、(111～145）のように前期Ⅳの完形土器及び大きな土器破片が集中して出土している。石器は太型蛤刃石斧（201)、叩石（219）などが出土している。これらの遺物は、地山である黄褐色粘質土層に密着し、時に粘質土層直上から出土している。ＳＸ１は何らかの遺構により壁が削平されており、底面の遺物のみが残ったものと考えられる。

ＳＸ２

東側を田村川によって切られており、またＳＫ２を切っている。規模は長軸4.00ｍ、短軸2.20ｍ、深さ0.12ｍを測る。平面形は北側が丸くカーブし、南は隅丸方形を呈す。底面は中央部がわずかに高まっており、南・北端が低くなっている。また底面には大小のピットが11個存在する。埋土は赤茶色粘質土で、遺物は弥生前・中期土器（146～149）及び石包丁(245)、叩石(223)等が出土している。

ピット

Ｐ１

ＳＫ７の東隣に位置する。直径50×40cm、深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、石鏃（252）が出土している。

Ｐ２

ＳＫ１の北西に位置する。直径36×24cm、深さ８cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、石斧(213)が出土している。

Ｄ区

竪穴住居址

ＳＴ１

調査区の南端に位置し、西側半分が調査区外に在る。径3.94ｍ、深さ約0.30ｍ、面積は約12.2㎡を測る円形住居址である。床は平坦面をなし、中央ピットは楕円形の平面形を有し、長軸は東西方向を示す。推定長径90cm、短径76cm、深さ30cmを測り、南側の壁が段状をなしている。４個のピットが認められるが、Ｐ３とＰ５が主柱穴である。南壁の一部に幅６～７cm、深さ７cmの壁溝が見られる。

ＳＴ１ピット計測表

No.	径 (cm)	深さ(cm)	備　考
1	110×76	30	中央ピット
2	22	5	
3	24	20	主　柱　穴
4	10×16	12	
5	23	51	主　柱　穴

第Ｉ層は赤味を帯びた灰濃茶褐色粘質土、第II層は暗灰茶色粘質土である。中央ピット下層には灰と炭化物が混った黒灰茶色粘質土が厚く堆積し、その上に淡紅色の焼土が流れ込んでいる。住居址床面にはほぼ全面に焼土、炭化物が見られ、焼失した住居であることがわかる。

遺物は第Ｉ・II層より多量の土器（１～17）が出土している。(４)は、第Ｉ層出土の前期Ⅳの壺で混入と考えられる。他の遺物は中期Ⅲのものと考えられる。これらのうち、壺と甕の口縁部からみた構成比は４：５である。石器は扁平叩石（247)、砥石（269)が出土している。中央ピットからは14点、Ｐ２・３からも数点の土器片が出土している。床面出土の遺物は見られないが、中期Ⅲの住居址としてよいであろう。

土坑

ＳＫ１

調査区の最北部で検出した土坑である。田村川底で検出したため、上部は大きく削られているものと考えられる。東側が一部調査区外に出ているが、長軸は東西方向を示す楕円形の平面形を有する土坑である。長径1.25ｍ、短径0.99ｍ、深さ0.24ｍを測る。底面は南に向ってやや下っており、壁は斜めに立ち上がる。埋土は黒黝色粘質土である。遺物は、壺（18～21）、甕（24～27)、鉢（28）の他、100余点の細片が出土している。前期IIのものである。

ＳＫ２

田村川床下での検出であるため、遺構上部は大きく削られている。不整楕円形の平面形を有し、長軸はほぼ南北方向を示す。長径1.44m、短径0.85m、深さ0.20～0.30mを測り、底面は東側が深くなっている。埋土は黝黒色粘質土で、遺物は壺（29）が1点出土している。ＳＫ２は後述するＳＤ１の一部分である可能性が強い。

ＳＫ３

西側の一部が調査区外に出ているが、ほぼ全体の形を知ることができる。不整楕円形の平面形を有し、長軸方向はN—73°—Eを示す。残存長径0.85m（推定1.00m）、短径0.80m、深さ７～８cmを測る。底面中央部に直径18cm、深さ20cmの小ピットがある。埋土は濃茶色粘質土で炭化物が多く含まれており、遺物は前期Ⅲの細片とチャートのフレーク１点が出土している。

ＳＫ４

隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はN—5°—Eを示す。長径2.30m、短径1.61m、深さ0.25mを測る。底は平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は第Ⅰ～Ⅲ層からなり、第Ⅰ層にのみ炭化物が多く含まれている。遺物は、壺（30～33）、甕（34～36）で、(31)が第Ⅰ層、(30、32～35）が第Ⅲ層、(36)が第Ⅱ層より出土している。その他第Ⅰ層より22点、第Ⅱ層より52点の細片が出土しており、壺が多い。前期Ⅱである。

ＳＫ５

大部分を田村川によって切られている。隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はN—66°—Eを示す。残存長径0.94m、短径0.82m、深さ９～14cmを測り、底面は一部が段状をなしており、壁は斜めに立ち上がる。埋土は淡灰茶色粘質土で、遺物は壺（37）が底面より出土している。中期Ⅲである。

ＳＫ６

隅丸方形の平面形を有し、長軸方向はN—10°—Eを示す小型の土坑である。長径0.90m、短径0.67m、深さ0.24mを測る。底は平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は甕（38）の他、粘土塊が２点出土している。前期Ⅲである。

ＳＫ７

西側が調査区外に出ているが、長軸方向はN—71°—Wを示し、隅丸長方形の平面形を有する土坑で、残存長径1.66m(推定2.00m)、短径1.46m、深さ８cmを測る。底は平坦面をなすが、４個の小ピットを有する。壁は斜めに立ち上がり、埋土は黒褐色粘質土単純一層である。遺物は、壺（39～46）、甕（47、48）の他に甕底部３個、大型壺底部２個等36点の土器片が出土している。

石器は棒状叩石（255）が出土している。前期IIである。

ＳＫ８

遺構の東部の一部が田村川に切られており、西の一部は調査区外に出ている。複雑な平面形をなしているので、南西から北東に長軸を有する土坑と、北西から南東方向に長軸を有する土坑との切り合いが考えられるが、平面、断面ともに切り合い関係をつかむことはできなかった。前者は長径4.00ｍ、短径1.76～1.33ｍ、深さ0.93ｍを測り、断面形は逆台形、底は船底状を呈す。後者は長径3.22ｍ、短径1.25ｍ、深さ0.38ｍを測る。埋土は第Ｉ～Ⅵ層からなり、多量の土器、石器計1500点が出土している。第Ⅵ層は灰黒色砂層の無遺物層、第Ⅳ層は炭化物、第Ⅲ層は焼土である。

出土土器を層位別にみてみると、第Ｉ層は細片のみで約400点が出土、第II層からは壺（49、50、53、55、58、60～62、66）、甕（69～72、75～77、79～83、104、107、108）、鉢(109、111)、石器は石斧（227、229）、叩石（246、249、262、264）が出土している。このうち（58、69、70）は明らかに中期のものであり、北西から南東方向に長軸を有する土坑に関連した遺物とみられる。それ以外の土器はすべて前期IIのものである。第Ⅲ層からは壺(54、57)、甕（84、93、95、102）、石器は砥石(268)が出土している。すべて前期IIのものである。第Ⅳ・Ⅴ層からは最も多くの遺物が出土している。壺（51、56、64、68）、甕（94、96～101、103、105）、鉢（110）、石器は石斧（223、229、232）、叩石（242、245）、石包丁未製品(270、271)、磨製石鏃（272、273）、打製石鏃（274）、石製円盤（275～277）を挙げることができる。土器は第Ⅲ層同様すべて前期IIのものである。石器のうち石包丁未製品や石製円盤（未製品）が含まれていることは、ＳＫ８の性格を考える上で重要である。ＳＫ８出土の前期IIの土器組成は、壺11、甕43、鉢７である。

以上のことからＳＫ８は前期IIの貯蔵用土坑と考えられる。そして機能している時に火災に遭い、その際第Ⅳ層が堆積し、その後焼土が流れ落ちて第Ⅲ層となったと考えられる。層序、遺物の出土状況から考えて、火災後に復旧した形跡はみられない。

ＳＫ９

東は田村川によって切られている。隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ―79°―Ｗを示す。残存長径1.00ｍ、短径0.84ｍ、深さ0.50ｍを測る。北東隅が一段高くなっており、底面は東から西に下っており、西壁側には直径12×８cm、深さ４cmのピットがある。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は壺（112）、甕（113～115）、鉢（115）、石器はチャトのフレーク９点が出土している。弥生前期Ⅲの土坑である。

ＳＫ10

北端がやや突出気味の楕円形の平面形を有し、長軸方向はＮ―22°―Ｅを示す。長径1.06ｍ、短径

0.84m、深さ0.24mを測る。底面は階段状をなしている。埋土は黒褐色粘質土で、100点近い弥生土器が出土しているが図示できるものはない。時期は不明である。

ＳＫ11

大部分が調査区外に存るために全形を知ることはできないが、隅丸長方形の平面形を有するものであろう。長軸方向はＮ—21°—Ｅを示す。現存長径0.80m、短径0.42m、深さ0.30mを測り、底面は南部で段をなす。埋土は淡茶褐色粘質土で、遺物は弥生時代前期土器細片が24点出土しているが、実測可能なものはない。

ＳＫ12・13

２つの土坑は切り合い関係にあるが、平面、断面ともに精査したが、前後関係をつかむことはできなかった。ＳＫ13は隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ—62°—Ｗを示す。残存長径1.57m、短径1.23m、深さ0.22mで、底は平坦面をなす。埋土はともに黒褐色粘質土で、ＳＫ12の平面形を推定することは困難である。遺物は、壺（116、118、121、130）、甕（117、122～128）、鉢（129）、石器は打製石斧（233）、砥石（267）が出土している。（121、124、128）は底面出土であり、（130）はピット状の浅い落ち込みから出土している。これらの土器は、前期II・IIIのものである。

ＳＫ14

不定形の平面形を有し、長軸方向はＮ—56°—Ｗを示す。長径は1.24m、短径は1.00m、深さ0.18mを測る。底面は東側がわずかに深くなっており、壁は斜めに立ち上がる。また壁より突出するような形でピットが３個付随している。埋土は黄茶褐色粘質土で、遺物は弥生前・中期土器細片が多く出土した。

ＳＫ15

隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ—29°—Ｅを示す。長径2.72m、短径1.08m、深さ0.30m前後を測る。中央よりやや北寄りで段状に低くなっている。北側半分は上層がかなり撹乱されており、したがって北の壁はかなり削平されている。底面中央部に２個の小ピットを有し、壁は斜めに立ち上がる。埋土は第II層が厚く、第Ｉ層は薄く堆積し、ともに多量の土器を含んでいる。遺物は、壺（132）が底面より、（138、139）が第II層より、中期の土器（131、133～137）は第Ｉ層から出土している。ＳＫ15は前期IIIの土坑と考えられる。

ＳＫ16

長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ—40°—Ｅを示す。長径2.40m、短径2.05m、深さ0.42mを

測る。底はほぼ平坦面をなし、南隅に直径70cm、深さ８～10cmの窪みがある。壁はかなり急角度で立ち上がっている。埋土第Ⅰ層は茶灰褐色粘質土で、土器片と共に多量の炭化物を含んでおり、第Ⅱ層は黄茶色シルトで土器片を多量に含んでいる。第Ⅰ層より、壺（146、147、149～153）、甕（154～161、163、164）、鉢（165）、第Ⅱ層より、壺（144、145、148）、甕（162）、石器は、第Ⅰ層より砥石（265）、底面より石斧未製品（237）が出土している。図示したもの以外に前期Ⅳの細片が４点含まれるが、混入とみられる。他はすべて前期Ⅲのものである。これらの土器組成を口縁部からみると、壺４、甕16、鉢２である。ＳＫ16は前期Ⅲの土坑である。

ＳＫ17

大半が調査区外にあり、かつ南をＳＫ18に切られているため形状を推定することはできない。長軸方向はＮ―70°―Ｗを示す。残存長径0.62ｍ、短径0.66ｍ、深さ８cmを測り、底は平坦面で壁は斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土で、弥生前期土器細片が１点出土している。

ＳＫ18

大半が調査区外にある。長軸方向はＮ―20°―Ｅを示し、 楕円形の平面形を有する土坑である。残存長径1.05ｍ、短径0.60ｍ、深さ４cmを測り、底面は平坦であるが北半には大きな落ち込みがある。これはＳＫ18に伴う柱穴と考えられる。埋土はＳＫ17とほとんど同じ黒褐色粘質土で、埋土中より前期の土器細片８点が出土している。前期Ⅱの土坑である。

ＳＫ19

東端を田村川に切られ、西端をＳＴ１に切られている。隅丸長方形に近い楕円形の平面形を有し、長軸方向はＮ―60°―Ｅを示す。推定長径2.45ｍ、短径1.50ｍ、深さ0.30ｍを測る。北壁側が棚状をなし、底面東部は不定形に窪んでおり、またＰ１～３の小ピットがある。埋土は第Ⅰ～Ⅳ層からなり、第Ⅰ・Ⅲ層から多くの弥生土器片が出土している。第Ⅱ層は炭化物の層である。遺物は壺（166）、甕（167～169）が出土している。前期Ⅱの土坑である。

ＳＫ20

東半分が調査区外に出ているが、長軸は南北方向を示す楕円形の平面形を有する土坑である。長径1.32ｍ、短径0.54ｍ、深さ0.50ｍを測る。断面形は箱形で底面は南が下っている。埋土は第Ⅱ～Ⅴ層からなり、各層ともに炭化物、土器を多く含んでいる。中でも土器は第Ⅳ層に集中している。出土遺物は、壺（171～178、189、190）、甕（181～185、191～199）、鉢（186、187、200）であり、（181）は第Ⅱ層出土で混入と考えられる。他はすべて前期Ⅱのものである。他に図示していないが、蓋２点、土製円盤１点が出土している。出土土器の組成は、壺15、甕17、鉢５、蓋２、土製円盤１である。ＳＫ20は前期Ⅱの土坑である。

ＳＫ21

東側の一部が調査区外に出ているが、長軸方向はＮ―88°―Ｗを示す楕円形の土坑である。残存長径0.54ｍ、短径0.46ｍ、深さ５㎝前後を測る。底面は東端が落ち込んでいる。埋土は茶褐色粘質土単純一層で、遺物は弥生前期土器細片が数点出土している。

ＳＫ22

大半が調査区外に出ており全体の形を推定することは困難である。長軸はほぼ南北方向を示す。残存長径3.82ｍ、短径0.32ｍ、深さ0.14ｍを測る。北端に小ピットが１個ある。埋土は赤茶褐色粘質土であるが、上層はかなり撹乱をうけている。遺物は弥生前期土器の細片が数点出土しているが、実測可能なものはない。

溝

ＳＤ１

調査区の中央よりやや北で西壁断面に大きな溝状の落ち込みを２連検出した。この付近はほとんど田村川によって切られており、広がりを検出することはできないが、ＳＤ１の底のわずかな残存部から南東に伸びる溝であることが認められる。断面を観察すると２連の溝が存在し、濃灰茶色粘質土が北側の濃茶褐色粘質土を切っているようにみえるが、底面の立ち上がりやその他の埋土などから考えて二重の状を呈する一条の溝であると判断した。断面にみられるＳＤ１の規模は、幅が約4.00ｍ、深さは0.40～0.70ｍを測る。

遺物は弥生土器壺（202～209）・甕（210～217）、石斧（225、231、234）が出土している。

ピット

Ｄ区からは北部を中心に大小41個のピットが検出されたが、そのうち23個から弥生土器、フレーク等が出土している。出土遺物中で図示できるものはＰ37出土の鉢（218)のみである。前期II～IIIのものである。

Ｅ区

土坑

ＳＫ１

調査区の北端に位置する。楕円形の平面形を有し、長軸方向はＮ―62°―Ｅを示す。長径0.96ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.12～0.22ｍを測り、底面は段状をなす。埋土は黒褐色粘質土で、出土遺物は見られない。

ＳＫ２

長楕円形の平面形を有し、長軸方向はＮ―42°―Ｗを示し、長径1.16ｍ、短径0.42ｍ、深さ0.28ｍを測る。底面は北西部が段状に掘り込まれ、さらに底面中央部にわずかな窪みがみられる。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＫ３

東側を田村川に、北を現代の撹乱によって切られており、土坑の形状を把握することはできないが、不定形の平面形を有するものと考えられる。残存長径1.58ｍ、短径1.21ｍ、深さは南壁近くで0.16ｍ、北で0.25ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は弥生土器細片と叩石（168)が出土している。また底面より多くのピットを検出した。そのうちＰ１～３の底部からは根締めのためと思われる礫が出土しているが、その中からＰ１では叩石(150)、Ｐ３では石斧（137)、叩石（149）が出土している。ＳＫ３より西に向けて溝状のものが出ているが、ＳＫ３との関係は不明である。

ＳＫ４

東側を田村川によって切られているが、ほぼ全形をつかむことができる。隅丸長方形の平面形を有し、長軸方向はＮ―45°―Ｅを示す。長径2.48ｍ、短径1.46ｍ、深さ0.32ｍを測る。南壁及び西壁は垂直近く立ち上がるが、北壁は斜めに立ち上がっている。また西壁南端が外方に突出し、一部段状に掘り込まれている。底はほぼ平坦面をなし、南寄りに小ピットＰ１～３がみられる。Ｐ１は直径20cm、深さ８cm、Ｐ２は20×12cm、深さ25cm、Ｐ３は直径24cm、深さ25cmを測る。これらのピットはＳＫ４に伴う柱穴と考えられ、Ｐ１とＰ３は主柱穴的なものであろう。埋土は第Ⅱ～Ⅴ層からなり、第Ⅲ層の黄褐色粘質土は壁の地山が一部崩れ落ちたものである。また埋土中には遺物はほとんど見られない。埋土で今一つ注意すべきことは、他の前期の遺構の埋土が黒～茶褐色粘質土であるのに対して、本例は黄茶色シルト層であることである。これは明らかに他の多くの遺構とは埋没状況に違いがあることを示している。

遺物は、底面から甕（１)、蓋（２)が出土している。この出土状況は上から投げ込まれたような状態ではなく、置いてあったものが押しつぶされたものと考えられる。また（２）の蓋は甕に使われていたものであろう。埋土と遺物出土状況からみて、ＳＫ４は貯蔵用小竪穴として機能していた時に大水等によりシルトが流れ込んだものと考えられる。(１、２)共に前期Ⅲのものである。

ＳＫ５

西は調査区外に存し、東は田村川によって切られている。長軸方向はＮ―60°―Ｗを示す長い土坑で、溝になる可能性もある。残存長径1.90ｍ、短径0.70ｍ、深さは最も深いところで約0.20ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土で、出土遺物は見られない。

ＳＫ６

約半分近くが調査区外に存するが、長軸方向はＮ―67°―Ｗを示す隅丸長方形の平面形を有する土坑である。北壁の一部と南壁の上層部を現代の撹乱によって切られているが、残存規模は長径1.17m（推定1.60m）、短径1.14m、深さ0.26～0.36mを測る。底面は中央部が最も深くなっている。埋土は第Ⅱ～Ⅴ層からなり、第Ⅴ層の黄茶褐色シルトは壁の地山が崩れ落ちたものである。

遺物は、底面及びⅣ層からが最も多く、壺（４～９）、甕（10、11）、鉢（12）、蓋(13）などが出土している。壺(８)は第Ⅱ層出土であり、第Ⅱ～Ⅲ層は弥生前期土器とともに弥生中期土器、中世の備前なども出土している。第Ⅱ～Ⅲ層は中世に撹乱を受けていると考えられる。底面及び第Ⅳ層の土器出土状況は、第141図のように土坑の北部に集中している。出土状況を詳細に観察すると、土器の重なり具合、蓋や底部が倒立していることなどからして、置かれていたものではなく北の方向から投げ込まれたものと考えられる。ＳＫ６は出土遺物、土坑の平面形、規模から考えて前期Ⅲの貯蔵用土坑と考えられる。そして貯蔵用土坑としての機能が停止した後に廃棄坑として利用されたものである。ＳＫ６出土の前期Ⅲの土器組成は、壺４、甕４、鉢１、蓋１である。

ＳＫ７・８

ＳＫ７は大部分が調査区外に出ており、ＳＫ８を切っている。残存部から長軸方向はＮ―20°―Ｅを示す隅丸長方形の平面形を呈する土坑で、長径2.00m、推定短径1.00m、深さは南で0.15m、北で0.30mを測る。底面は２段になっており、北端に10×12cm、深さ５cmの小ピットがある。埋土は第Ⅱ～Ⅲ層からなる。遺物は、壺（14～18)、甕（19～22）の他700点余りの土器細片が出土している。底面及び第Ⅲ層出土のものはほとんど前期Ⅲであるが、(14)は古くなる可能性がある。第Ⅱ層は中世の時期に撹乱を受けており、備前等が出土している。また第Ⅲ層よりチャートのチップ、フレークが100点以上出土している。土器組成は壺２、甕３である。

ＳＫ８は大部分が田村川に切られており全形は不明であるが、南西角の形状から隅丸長方形の平面形を有するものと考えられる。底面から前期Ⅲの土器細片が出土している。

溝

ＳＤ１

調査区北端に位置し、調査区の南東から北東方向に伸びている。長さ5.60m、幅1.80～2.10m、深さ0.90～1.00mを測り、断面形はＵ字形を呈す。埋土は基本的には東壁にみられるように3層(Ⅱ～Ⅳ）からなり、部分的には層位の乱れた所もある。埋土各層より多量の土器、石器が出土している。土器の層位別出土状況（セクション５―６）は、第Ⅱ層が最も多く約4500点を数えるが、細片が多い。第Ⅲ層は第Ⅱ層に次いで多く約1500点であり、第Ⅱ層に比べて大きな破片が多く見られる。壺（23、29、41、43、45、47～50、52、56～59、61～68)、甕（71、81、83、85

～94、96～116)、高杯（117)、鉢（119)、蓋（124～127、130)、紡錘車（132、133）が出土している。このうち壺（43、48）が前期Ⅳに属する以外は、すべて前期Ⅲのものである。最下層第Ⅳ層からは壺（46）の他、約400点の細片が出土している。底面からは細片のみ30数点を数える。

石器は、第Ⅱ層より石包丁（181、182、189)、石鏃（183～187)、石錐（188)、打製石斧(147)、未製品（138)、第Ⅲ層からは打製石斧（146）が出土しており、その他叩石、砥石が第Ⅱ～Ⅲ層より出土している。

遺物の出土状況からみると、第Ⅲ層と第Ⅳ層との間に１つの画期があることがわかる。すなわち、底面及び第Ⅳ層は遺物の出土量が少なく、第Ⅱ～Ⅲ層は極端に多くなっている。この現象はＳＤ１の機能していた時期に関係するとみられる。

５．まとめ

以上、Loc.44の検出遺構について詳述した。前述のようにLoc.44（西見当遺跡、北カリヤ遺跡）は昭和30年以来数度にわたる調査がなされており、調査、研究の蓄積がある。今一度研究史を整理し、成果と問題点を確認した上で、今次調査の成果を位置づけなければならない。

今次調査までに解明されていることを列挙すれば、①当遺跡は前期Ⅱ（西見当Ⅰ式）の段階に成立した環濠を有する集落遺跡である。②自然堤防上に立地している。③１～４次にわたって調査されたＤ・Ｅ区の東部つまり旧Ａ・旧Ｂ・旧Ｃ区では土坑、工房址、溝などが多く確認されているが、住居址は確認されていない。④これらの遺構のほとんどは前期Ⅲ段階（西見当Ⅱ式）の時期をもって終わり、したがって土器型式にして２時期という短命な遺跡である。⑤前期Ⅱと前期Ⅲの段階では土坑の平面形に変化がある。以上となる。

次に今次調査の成果について述べる。まず南北に長いトレンチ調査[註1]によって、Loc.44の旧地形は南北２つの自然堤防からなっていることが判明した。すなわちＢ区の窪地（自然流路）をはさんでＡ区とＣ～Ｅ区に分けることができる。Ａ区では南北に走る弥生中期のＳＤ１と前期Ⅱ段階の溝ＳＤ２を検出した。Ｃ～Ｅ区で検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居址１棟(Ｄ区)、土坑50基（Ｃ区―20基、Ｄ区―22基、Ｅ区―８基)、溝３条（Ｃ区―１条、Ｄ区―１条、Ｅ区―１条）である。これらの遺構を時期別にみると、中期に属するものはＤ区のＳＴ１、ＳＫ５、Ｃ区のＳＸ２、前期Ⅳ段階のものはＣ区のＳＫ１、前期Ⅲ段階のものはＣ区８基（ＳＫ２・４・９・12・15・17～19)、Ｄ区５基（ＳＫ３・６・９・15・16)、Ｅ区４基（ＳＫ４・６～８)、前期Ⅱ段階のものはＡ区７基（ＳＫ１・４・７・８・18～20）であり、時期不明のものが合計12基を数える。３条の溝はすべて前期Ⅲ段階に属すると考えられる。

まず最も多く検出された土坑から分析を行いたい。時期の判明した27基の土坑の中で中期に属するものは１基（Ｄ区―ＳＫ５）のみで、他はすべて前期のものであり、中でも前期Ⅲ段階のものが最も多く17基を数え、前期Ⅱ段階のものが７基である。次に分布状況をみると、前期Ⅱ段階のものはＤ区のみに分布しているのに対して、前期Ⅲ段階のものは分布範囲をＣ・Ｅ

区へと広げると同時に遺物の量的増加はみるものがある。しかし前期Ⅳ段階になると激減する。これは先述の④の見解を今次調査でも実証し、追認するものである。

土坑の形態についてみると大小さまざまではあるが、前期Ⅱと前期Ⅲ段階の間には平面形、断面形に変化のあることが理解できる。すなわち前期Ⅱ段階のものはＳＫ７を例外にすると長楕円形の平面形を有し、断面形は船底状を呈するものが多く、また前期Ⅲ段階のものよりも深いものが多い。これに対して前期Ⅲ段階のものは総じて隅丸長方形の平面形を有し、底面は平坦面をなし、中には小ピットを有するものがある。前者の典型をＤ区のＳＫ19・20に、後者の典型をＥ区のＳＫ４、Ｃ区のＳＫ15、Ｄ区のＳＫ15にみることができる。これらの土坑の性格は遺物の出土状況などから考えて、貯蔵用の倉庫的なものを想定することができる。貯蔵穴は同時期に北部九州、関門地方に広く分布のみられる円形、楕円形、方形の平面形をした所謂袋状ピットが知られているが、それらと区別するために貯蔵用小竪穴と呼称したい。貯蔵用小竪穴は部分的、例外的にＣ区ＳＫ９のようにオーバーハングするものもあるが、基本的にはオーバーハングするものは存在しない。北部九州、関門地方のものとは際立った差違がうかがえる。しかしながら、北部九州においても上述の貯蔵穴と共に当遺跡の貯蔵用小竪穴に類似するものが多く確認されており、「貯蔵穴との間には底間の深さに大きな相違がみられる。しかしながらこれらのいくつかは貯蔵穴群の中に設けられ……その用途は判定しかねているところであるが貯蔵穴と同様の機能をはたしていたことも考えられる。」[註2]という見解もある。したがって、当地方には所謂袋状ピットといわれる貯蔵穴は伝わらず、貯蔵用小竪穴のみが存在していると言えよう。畿内においても同様のことが言える。

次に今次調査によって規模、形態が明らかになった環濠について触れなければならない。環濠の存在が明らかになったのは第３次調査旧Ｃ地区においてである。この段階では環濠の東端と思われる部分、長さ5.00ｍ、幅1.85ｍ、深さ0.50ｍを測るものであり、岡本氏の表現を借りれば「(東に向って）濠は徐々に地表面に向って、その底を上げている。結局、濠は墓地に接する部分から５ｍ以上は延びていなかったと考えてよかろう。この５ｍより先は、弥生時代には田村川の氾濫原であり、低湿地であったとみられ、それに向って環濠の末端は開口していたとみられる」[註3]とある。今次Ｅ区で確認したＳＤ１は、３次調査で墓地の為に調査できなかった地点から西20ｍに位置しており、３次調査の「濠」と同一のものであることは間違いない。そして調査区を南東から北西方向に向って延びており、この地点から140ｍ北のＣ区北端において検出したＳＤ１に続いていると考えられる。Ｃ区ＳＤ１は、先述したように北東方向に延び、自然流路（旧地形は窪地）に向って開口している。この環濠（Ｅ区―ＳＤ１、Ｃ区―ＳＤ１）は極めて部分的にしか調査できていないが、以上のことから環濠の形態は、板付、池上遺跡にみられるようなドーナツ状に集落を囲い込むものではなく、集落の南、北、西を囲い込み、東側は開口する、いわば馬蹄形を呈する環濠であると考えられる。そして環濠の南端と北端との距離は140ｍ余りを測る。

次に、この環濠の掘られた時期、機能した時期、廃棄された時期について、他の遺構の消長とともに考えなければならない。３次調査においては「環濠の底部から弥生前期前半の西見当Ｉ式土器片が出土」[註4]したことから「弥生前期前半に掘られた」とされている。今次調査のＳＤ１（Ｃ・Ｅ区共）では、底部から前期II（西見当Ｉ式）の出土はみられない。しかしながら、土器の堆積状況が埋土中層（Ｅ区―第III層）に前期III段階の遺物が集中的にみられることや、環濠内の遺構が前期IIの段階から始まっていることから、この環濠は前期IIの段階に設けられたものであると思われる。また埋土中層にみられる前期IIIの土器の集中出土から、前期III段階のある時期にはほとんど環濠としての機能を果たしていなかったと考えなければならない。この現象は、３・４次調査においても共通してみられることであり、これはまた各遺構の同時的廃棄を示すものでもあろう。

以上のことから次のような結果と問題点を引き出すことができる。すなわち、当遺跡は前期III段階に最盛期を迎え、貯蔵用小竪穴は環濠内のＣ・Ｄ区において増大するのみならず、環濠外のＥ区にも分布の広がりがみられる。そして環濠への土器集中廃棄とＥ区貯蔵用小竪穴（ＳＫ５・６）の廃棄は同時と考えてよかろう。このことは、両者の成立時期とは無関係に両者が同時に機能した時間帯のあったことを示している。環濠は一般的に住居址や貯蔵穴等集落を構成する諸施設を「外敵」から防衛するための施設と考えられているが、貯蔵用小竪穴が環濠外に存在する事実は、南四国の場合、環濠＝軍事施設説と矛盾する側面をも有することを申し添えておかねばならない。

１～４次調査と追求し続けてきた住居址は今次調査においても検出することはできなかった。しかしながら前期II・III段階に多量に見られる貯蔵用小竪穴群の存在は、同時期の住居址群の存在を裏づけるものである。したがって従来の見解同様に、住居址群は今次トレンチよりも西方に存在し、おそらく前期の集落遺跡例から考えて環濠に並行して存在しているのではなかろうか。

Loc.44Ｃ～Ｅ区は前期II段階に成立し、前期III段階には廃棄され、前期VI段階には土坑わずか２基が存在するにすぎない。その後は中期後半に至るまで全く遺構を認めることはできない。当遺跡は極めて短命な遺跡であるが、この短期間の中に重要性が濃縮されている。すなわち質的転換ともいうべき陶汰がなされているのである。なお、このことについては後述するつもりである。

註１　岡本健児「弥生前期時代」『南国市史』上巻　南国市他　1979
註２　福岡県教育委員会『冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』　1982
註３　註１に同じ。
註４　同上

第11表　D区竪穴住居址計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)	主軸方向	柱穴	面積 (m²)	施設	備考
第103図	ST1	円形	3.94	—	4	12.2		

第12表　C区 土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第67図	SK1	隅丸長方形	1.20	0.80	0.20	N－53°－W	逆台形	
〃	SK2	――――	1.89	(0.68)	0.21	N－24°－E	〃	
〃	SK3	平行四辺形	5.12	(1.64)	1.90	N－25°－E	浅い皿形	
〃	SK4	隅丸長方形	――	――	1.60	――――	逆台形	
〃	SK5	隅丸方形	1.22	(0.55)	0.14	N－30°－E	〃	
〃	SK6	鉤形	0.90	0.90	0.30	N－57°－W	〃	
第68図	SK7	不定形	(1.00)	1.54	0.20	N－66°－W	〃	
〃	SK8	隅丸長方形	1.36	(0.83)	0.22	N－24°－E	〃	
〃	SK9	長方形	(1.50)	1.67	0.43	N－55°－W	〃	
〃	SK10	楕円形	1.14	0.85	0.24	N－26°－W	段状	
〃	SK11	〃	(0.45)	0.42	0.20	N－84°－W	逆台形	
〃	SK12	――――	(1.46)	(0.54)	0.44	N－8 °－E	〃	
第69図	SK13	不整楕円形	0.82	0.50	0.24	N	〃	
〃	SK14	不整形	0.69	0.52	0.19	N－53°－W	〃	
〃	SK15	長方形	2.04	1.07	0.25	N－38°－E	〃	
〃	SK16	方形	1.95	0.82	0.28	N－37°－E	〃	
〃	SK17	隅丸方形	2.04	(1.22)	0.35	N－41°－E	〃	
〃	SK18	隅丸長方形	1.29	1.54	0.45	N－57°－W	〃	
第70図	SK19	楕円形	1.15	(0.86)	0.10	N－30°－E	浅い逆台形	

第13表　D 区 土 坑 計 測 表

挿図番号	遺構番号	平　面　形	規　　模（m）			長軸方向	断 面 形	備　考
			長　径	短　径	深　さ			
第 103 図	ＳＫ 1	楕円形	1.20	0.99	0.24	Ｎ－89°－Ｅ	Ｕ字形	
〃	ＳＫ 2	不整楕円形	1.44	0.85	0.30	Ｎ－５°－Ｗ	逆台形	
〃	ＳＫ 3	〃	(0.85)	0.80	0.08	Ｎ－73°－Ｅ	皿　形	
〃	ＳＫ 4	隅丸長方形	2.30	1.61	0.25	Ｎ－５°－Ｅ	逆台形	
第 104 図	ＳＫ 5	〃	(0.94)	0.82	0.14	Ｎ－66°－Ｅ	段　状	
〃	ＳＫ 6	隅丸方形	0.90	0.67	0.24	Ｎ－10°－Ｅ	逆台形	
〃	ＳＫ 7	隅丸長方形	(1.66)	1.46	0.08	Ｎ－71°－Ｗ	〃	
〃	ＳＫ 8	――――	4.00	1.76	0.93	――――	〃	
〃	ＳＫ 9	隅丸長方形	(1.00)	0.84	0.50	Ｎ－79°－Ｗ	〃	
第 105 図	ＳＫ10	楕円形	1.06	0.84	0.24	Ｎ－22°－Ｅ	階段状	
〃	ＳＫ11	隅丸長方形	0.80	0.42	0.30	Ｎ－21°－Ｅ	段　状	
〃	ＳＫ13	〃	(1.57)	1.23	0.22	Ｎ－62°－Ｗ	逆台形	
〃	ＳＫ14	不定形	1.24	1.00	0.18	Ｎ－56°－Ｗ	〃	
〃	ＳＫ15	隅丸長方形	2.72	1.08	0.30	Ｎ－29°－Ｅ	〃	
〃	ＳＫ16	長方形	2.40	2.05	0.42	Ｎ－40°－Ｅ	箱　形	
第 106 図	ＳＫ17	――――	(0.62)	(0.66)	0.08	Ｎ－70°－Ｗ	逆台形	
〃	ＳＫ18	楕円形	(1.05)	(0.60)	0.04	Ｎ－20°－Ｅ	浅い皿形	
〃	ＳＫ19	〃	(2.45)	1.50	0.30	Ｎ－60°－Ｅ	逆台形	
〃	ＳＫ20	〃	1.32	0.54	0.50	Ｎ－３°－Ｅ	箱　形	
〃	ＳＫ21	〃	(0.54)	0.46	0.05	Ｎ－88°－Ｗ	浅い皿形	
〃	ＳＫ22	――――	(3.82)	0.32	0.14	Ｎ－１°－Ｅ	逆台形	

第14表　E 区 土 坑 計 測 表

挿図番号	遺構番号	平　面　形	規　　模（m）			長軸方向	断 面 形	備　考
			長　径	短　径	深　さ			
第 139 図	ＳＫ 1	楕円形	0.96	0.68	0.22	Ｎ－62°－Ｅ	段　状	
〃	ＳＫ 2	長楕円形	1.16	0.42	0.28	Ｎ－42°－Ｗ	階段状	
〃	ＳＫ 3	隅丸方形	(1.58)	1.21	0.25	Ｎ－71°－Ｗ	逆台形	
〃	ＳＫ 4	隅丸長方形	2.48	1.46	0.32	Ｎ－45°－Ｅ	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第140図	ＳＫ５	不定形	(1.90)	1.70	0.20	Ｎ－60°－Ｗ	逆台形	
〃	ＳＫ６	隅丸長方形	(1.17)	1.14	0.36	Ｎ－67°－Ｗ	舟底状	
〃	ＳＫ７	〃	2.00	(0.75)	0.25	Ｎ－20°－Ｅ	段状	
〃	ＳＫ８	〃	——	——	0.39	——	——	

第15表　A区遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
1	ＳＤ１	壺	12.3 (5.2) —— ——	肩の張った上胴部からなめらかに外反する口縁部である。口唇部は凹状をなし下端に刻目を施す。上胴部に２条の突帯を貼付し、刻目を施す。	口唇部は横方向の強いナデ調整。口頸部内面ハケ調整を行う。刻目はハケ状原体による。	
2	〃	〃	16.0 (6.9) —— ——	直立気味の頸部からなめらかに外反する口縁部を有し、口唇部は丸くおさめる。頸部外面に10条のヘラ描沈線と３条の刻目突帯を有する。	突帯の胎土と土器本体の胎土は異なる。	
3	〃	甕	23.0 (12.7) 21.9 ——	口縁部は上胴部からわずかに外反しつつ立ち上がる。口唇部は凹状をなす。上胴部外面に３条のヘラ描沈線を有する。	内面には指頭圧痕が認められる。口縁部内外面横方向のハケ調整。	
4	〃	壺	16.3 (4.5) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は凹状をなし上下に刻目を施す。頸部に櫛描直線文と刻目突帯文を有する。口縁部には貫通する刺突文を配する。	口縁部内面横方向、外面縦方向のハケ調整。	
5	〃	〃	—— (9.3) —— ——	頸部外面に４帯の櫛描直線文を配し、その間に刻目突帯を４条配する。刻目突帯は太いヘラ描沈線の中にうめ込んでいる。	外面は左上りのハケ調整。	
6	〃	〃	—— (2.8) —— ——	大きく外反する口縁部で外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなし上下に刻目を施す。口縁部内面は櫛描扇形文を配する。	口唇部は横方向の強いナデ調整。	
7	〃	甕	25.2 (9.2) —— ——	上胴部からなめらかに外反する口頸部を有する。口縁部外面には２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は丸くおさめ下端に刻目を施す。頸部外面に2条の櫛描直線文を配する。	口縁部内外面とも横方向のナデ調整。刻目はハケ状原体による。	
8	〃	壺	22.3 (5.2) —— ——	口縁部は大きく外反し外面に1.8cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなす。頸部外面には櫛描直線文と刻目突帯を一条認める。口縁部内部は一条の突帯を配し、その上から櫛原体によって列点文を施す。	口唇部は横方向の強いナデ調整。突帯の胎土と本体の胎土とは異なる。	
9	〃	〃	16.9 (1.9) —— ——	ラッパ状に外反する口縁部で外面に2.2cm幅の粘土帯を貼付する。端部は大きく下垂させる。		
10	〃	〃	19.0 (3.9) —— ——	直線的に外反する口縁部を有し、外面に２cm幅の粘土帯を貼付する。端部はわずかに下方に拡張する。口唇部は広い面をなす。口縁部内面に２条の櫛描波状文を有する。	頸部外面に縦方向のハケ調整。	
11	〃	〃	20.2 (8.8) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に２cm幅の粘土帯を貼付し、端部を下垂させる。口唇部は広い面をなす。	頸部外面縦方向のハケ調整。	
12	〃	〃	20.6 (9.7) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に２cm幅の粘土帯を貼付し端部は下垂させる。口唇部は幅広い面をなす。	頸部外面に縦方向のハケ調整を施す。	
13	〃	〃	25.8 (8.2) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に２cm幅の粘土帯を貼付し端部は下垂させる。口唇部は広い面をなし、右上りの刻目を施す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
14	〃	〃	26.4 (5.2) —— ——	口縁部は大きく外反し、外面に2.3cm幅の粘土帯を貼付し端部は下垂させる。また貫通する円孔をめぐらす。		
15	〃	〃	27.0 (2.2) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に1.7cm幅の粘土帯を貼付し端部は下垂する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
16	ＳＤ１	壺	16.6 (5.2) —— ——	なめらかに外反する口頸部で口縁部外面には2.5cm幅の粘土帯を貼付し、端部は下方に肥厚させる。口唇部は刻目を施す。	頸部外面に左上り、口頸部内面に横方向のハケ調整を施す。	
17	〃	〃	22.0 (3.8) —— ——	ラッパ状に大きく外反する口縁部である。外面には２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は丸みを帯びた広い面をなし斜格子文を配する。また貫通する円孔をめぐらす。		
18	〃	〃	16.6 (1.3) —— ——	大きく外反する口縁部で口唇部には右上りの刻目を施す。内面には櫛原体による弧文を配する。		
19	〃	〃	23.2 (6.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し外面に2.6cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなし下端に刻目を施す。頸部外面は櫛描直線文と波状文を配する。	頸部内面に指頭圧痕を認める。	
20	〃	〃	23.4 (7.3) —— ——	なめらかに外反する口頸部を有し端部は大きく下垂する。口唇部には斜格子文を配する。頸部外面に３条の突帯を貼付し更に櫛描波状文を配する。		
21	〃	甕	24.3 (5.6) —— ——	口縁部はなめらかに外反し２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなし下端に刻目を配する。頸部外面は櫛描直線文と簾状文を配する。		
22	〃	壺	12.2 (7.2) —— ——	大きく張った胴部からなめらかに外反する口頸部を有し口縁部外面には１cm幅の粘土帯を貼付する。胴部上端に円形浮文を配する。		
23	〃	〃	25.2 (13.6) —— ——	なめらかに外反する口縁部を有し、外面に２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。上胴部に円形浮文を配する。	胴部内面に指頭圧痕を認める。	
24	〃	〃	24.2 (4.3) —— ——	直線的に外反する口縁部を有し端部は内外面に肥厚する。水平に近い面をなす口唇部には斜絡子文が認められる。また断面三角のしっかりした刻目突帯を２条貼付する。	全体的に横方向のナデ調整。	
25	〃	甕	23.0 (14.3) 22.9 ——	口縁部はなめらかに外反し外面には２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部には刻目を配する。上胴部に楕円形浮文を配する。	内面に指頭圧痕を認める。	
26	〃	壺	16.4 (4.3) —— ——	口縁部はなめらかに外反し外面に2.2cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部には１条の沈線を配し上下に刻目を施す。口縁部内面に櫛原体による弧文を配する。	頸部外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整。	
27	〃	〃	19.2 (10.9) —— ——	長身の頸部から口縁部は直線的に外反する。頸部外面に３条の突帯を貼付しその間に櫛描波状文を配する。		
28	〃	〃	15.0 (11.7) —— ——	長身の頸部からなめらかに外反する口縁部を有し口縁部外面には２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は刻目を施す。頸部外面２条の櫛描簾状文を配し、その下に２条の突帯を貼付する。	内外面ともに縦方向のハケ調整を施す。	
29	〃	〃	16.2 (9.7) —— ——	長身の頸部からなめらかに外反する口縁部を有する。外面には2.1cm幅の粘土帯を貼付しわずかに下垂させる。頸部外面に櫛描直線文を配する。	頸部外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整。	
30	〃	〃	—— (7.8) —— ——	半球形の上胴部である。断面三角の突帯と櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描波状文を配する。	内面に指頭圧痕あり。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	ＳＤ１	壺	17.5 (6.7) —— ——	直線的に立ち上がる口縁部である。外面に３条の突帯を配する。	全体的に横方向のナデ調整。	
32	〃	〃	—— (9.5) —— ——	肩の張らない胴部に垂直に立ち上がる頸部がつく。上から櫛描直線文、波状文、更に２条の櫛描直線文を配する。また各施文の終点では、原体を下方に転回し、擬流水文状を呈する。		
33	〃	〃	15.0 (14.4) —— ——	長頸壺でなめらかに外反する口縁部を有する。外面に７条の突帯と櫛描直線文を有する。口縁端部は下方に拡張し幅広い口唇部を有する。		
34	〃	〃	—— (7.7) —— ——	肩の少し張った上胴部に、垂直に立ち上がる頸部がつく。２条の櫛描直線文とその下に櫛描連廉文を配する。また各施文の終点では、原体を下方に転回し、擬流水文状を呈する。		
35	〃	〃	18.2 (7.3) —— ——	なめらかに外反する口頸部である。口縁部外面に３条の突帯を有する。	全体的に横方向のナデ調整を行う。	
36	〃	〃	—— (7.3) —— ——	直線的に立ち上がる頸部に櫛描廉状文と櫛描波状文を有する。胴部には３条の櫛描波状文と１条の櫛描廉状文を有する。	内外面にナデ調整。	
37	〃	〃	—— (9.0) —— ——	長頸壺の頸胴部である。外面に４条の櫛描直線文を有し、頸胴部間に刻目突帯を貼付する。	内面に指頭圧痕あり。	
38	〃	〃	12.0 23.3 16.3 6.4	胴部中位に最大径を有す。口縁部は大きく外反する。外面に２cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし刻目を施す。頸部に２条の突帯を貼付する。	頸部外面縦方向のハケ調整。	
39	〃	〃	15.0 (13.5) 18.0 ——	胴部中位に最大径を有する。口縁部は大きく外反する。口縁部外面に２cm幅の粘土帯を貼付。頸胴間に１条の突帯を貼付しその下に櫛描波状文を配する。	頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。	
40	〃	〃	17.2 (22.2) 24.0 ——	直線的に立ち上がる頸部から口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面に3.2cm幅の粘土帯を貼付し、端部は上下に肥厚させる。頸部外面に一条の櫛描直線文を配し、その下に２条の突帯を貼付する。更に櫛描波状文を配する。	内外面ハケ調整。	
41	〃	〃	—— (23.1) —— 6.6	やや長胴を呈し最大径を胴部中位に有する。上胴部に櫛描波状文と廉状文を有する。	内面に指頭圧痕が多く残る。	
42	〃	〃	16.7 22.3 15.0 3.2	わずかに肩の張った上胴部からなめらかに外反する口頸部を有する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部は面をなす。		
43	〃	〃	18.2 (14.6) —— ——	直線的に内傾して立ち上がる上胴部になめらかに外反する口縁部を有する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部は面をなす。頸胴間にわずかな段部を有する。また頸部に貫通する円孔を有する。	頸部外面に縦方向、胴部外面は横方向のハケ調整を施す。	
44	〃	〃	16.7 22.3 15.0 3.2	肩の張った上胴部から大きく外反する口頸部を有する。口縁部外面には粘土帯を貼付する。胴部上端に双線をめぐらし、その上をハケ状原体で刺突する。	口頸部内面は横方向のハケ調整を行う。	胴部以下外面は全面ススけている。
45	〃	〃	19.0 (28.2) 22.6 ——	長胴で最大径を胴部下位に有する。口縁部はなめらかに外反し、外面に粘土帯を貼付する。頸部下端には弱い段部を有する。	外面は右下りのハケ調整を施す。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
46	ＳＤ１	壺	15.0 (4.6) —— ——	口縁部はラッパ状に外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし刻目を施す。口縁部内面に列点文を配する。		
47	〃	〃	14.7 (6.1) —— ——	直線的に立ち上がる頸部から口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に列点文を配する。		
48	〃	〃	20.4 (7.0) —— ——	口縁部は水平に近く大きく外反する。外面には幅３cmの粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。		
49	〃	〃	11.3 (6.5) —— ——	口頸部はなめらかに外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、口唇部は面をなす。	口縁部外面に指頭圧痕。	
50	〃	〃	14.8 (9.4) —— ——	長い頸部から口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し口唇部は面をなす。	口縁部外面に指頭圧痕を認める。	
51	〃	〃	17.6 (12.5) —— ——	長い頸部から口縁部は大きく外反する。外面に粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなす。	口縁部外面は指頭圧による圧痕、頸部外面縦方向のハケ調整を施す。口唇部は横方向の強いナデ調整。	
52	〃	〃	13.5 (9.9) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。		
53	〃	〃	20.6 (8.4) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、外面には粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし刻目を施す。	口縁部外面に指頭圧痕あり。	
54	〃	〃	17.6 (7.5) —— ——	口縁部は強く外反し、外面には粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。	口縁部外面に指頭圧痕あり。頸部外面に縦方向内面は横方向のハケ調整を施す。	
55	〃	〃	21.4 (2.1) —— ——	口縁部は大きく外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし下端に刻目を施す。		薄手式土器である。
56	〃	〃	17.3 (5.5) —— ——	口縁部は強く外反し、外面に断面三角の粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし下端に刻目を施す。口縁部外面に櫛描直線文を配し頸部外面には縦方向のヘラ描沈線を配する。		〃
57	〃	〃	8.0 (3.8) —— ——	口縁部は強く外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし下端に刻目を施す。頸部外面に櫛描直線文を施す。		〃
58	〃	〃	21.6 (4.5) —— ——	強く外反する口縁部である。外面に微隆起帯を貼付する。頸部外面に縦方向の沈線を配する。		〃
59	〃	〃	16.8 (6.9) —— ——	口縁部は強く外反し、外面には粘土帯を貼付する。口唇部には刻目を施す。頸部外面には櫛描直線文と縦方向のヘラ描沈線を配する。また上胴部に円形浮文を貼付する。		〃
60	〃	〃	—— (6.6) —— ——	頸部外面にヘラ描沈線を配し上胴部には微隆起帯を貼付する。また微隆起帯上には円形浮文を貼付する。		〃

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
61	ＳＤ１	壺	21.6 (7.4) —— ——	口縁部は強く外反し、外面に微隆起帯を貼付する。口唇部下端に刻目を施す。頸部外面には縦方向のヘラ描沈線を配する。上胴部には櫛描直線文を配し、更に円形浮文を貼付する。		薄手式土器である。
62	〃	甕	20.8 (4.3) —— ——	口縁部は外方に強く屈曲し、屈曲部内面は稜をなす。	内外面ともにナデ調整。	
63	〃	〃	15.1 (4.5) —— ——	口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめる。	内面上胴部に指頭圧痕あり。	
64	〃	〃	21.0 (6.5) —— ——	口縁部は外方に強く屈曲し、屈曲部内面は稜をなす。口唇部は丸くおさめる。	胴部内面右上りのハケ調整、口縁部内外面ともに横方向のナデ調整。	
65	〃	〃	20.7 (4.8) —— ——	口縁部は水平に近く屈曲し、内面は稜をなす。	外面縦方向、内面は横方向のハケ調整を行う。	
66	〃	壺	20.8 (6.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部には一条の沈線を配し、また下端に刻目を施す。	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	
67	〃	〃	17.6 (10.2) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし下端に刻目を施す。		
68	〃	〃	18.3 (7.9) —— ——	肩の張った胴部からなめらかに外反する口頸部である。口縁部外面には粘土帯を貼付する。口唇部は面をなし下端に刻目を施す。	頸部外面ハケ調整、口縁部外面は指頭圧痕が残る。	
69	〃	〃	20.3 (6.8) —— ——	内傾気味に立ち上がる頸部から口縁部はなめらかに外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。		
70	〃	〃	18.8 (9.0) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面には粘土帯を貼付する。	内面左上りのハケ調整。	
71	〃	〃	18.1 (6.0) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。	口縁部外面には指頭圧痕が顕著に残る。	
72	〃	〃	22.2 (34.6) 33.2 ——	長胴で最大径を中位に有する。頸部は一旦内傾して直線的に立ち上がり、外方に屈曲し口縁部に続く。頸胴間に刻目突帯を有する。口縁部外面には粘土帯を貼付し、口唇部には刻目を施す。	外面はハケ調整。	
73	〃	〃	16.6 (6.0) —— ——	なめらかに外反する口縁部で外面に粘土帯を貼付する。口唇部は面をなす。		
74	〃	〃	20.2 (2.4) —— ——	なめらかに外反する口縁部で、端部を上下に拡張し口唇部には４条の凹線文を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
75	〃	〃	16.8 (4.2) —— ——	口縁部はラッパ状に外反し、端部は上方に拡張する。口唇部に２条の凹線文を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
76	ＳＤ１	甕	12.2 (5.2) —— ——	口縁部は強く外反し、端部は上下にわずかに拡張する。口唇部には２条の凹線文を配する。	口縁部内外面に横方向の強いナデ調整を行う。胴部外面縦方向のハケ調整あり。	
77	〃	高　杯	17.0 (4.8) —— ——	杯部は皿状を呈し、口縁部はゆるやかに立ち上がる。口縁部は外面に２条の凹線文を配する。		
78	〃	鉢	19.9 (4.0) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は内傾する面をなす。口縁部外面には刻目を施し、それより下には４条の微隆起帯を貼付する。	内面横方向のナデ調整。	
79	〃	甕	18.0 (13.9) —— ——	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整を行う。内面は頸部直下より右から左方向のヘラ削り。	
80	〃	〃	16.6 (4.4) —— ——	口縁部は直線的に外反し、口唇部は面をなす。	口縁部内面横方向、外面左上りのハケ調整を施す。	
81	〃	〃	17.1 (6.1) —— ——	口縁部は強く外反し、口唇部はわずかに凹状をなす。	胴部外面横方向のハケ調整。	
82	〃	〃	13.0 (4.9) —— ——	肩の張った上胴部から口縁部は丸く外反する。	口縁部内面横方向、外面は左上りのハケ調整。胴部外面は不定方向のハケ調整を施す。胴部内面は横方向のヘラ削り。	
83	〃	〃	26.8 10.2 —— ——	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は面をなす。	口縁部及び胴部外面は左上りのハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整を施す。	
84	〃	〃	15.1 (6.0) —— ——	やや張った上胴部から、口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
85	〃	高　杯	28.3 (8.2) —— ——	口縁部は稜をなして立ち上がり強く外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面に横方向のヘラ磨き、杯部内面は縦方向のハケ調整後、縦方向のヘラ磨きを施す。	
86	〃	〃	28.4 (3.6) —— ——	口縁部は直線的に立ち上がり口唇部は丸くおさめる。	内外面とも横方向の丁寧なナデ調整。	
87	〃	〃	26.6 (4.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面ともナデ調整を施す。	
88	〃	〃	27.0 (2.1) —— ——	杯部下半の稜線から口縁部は強く外反する。口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向のヘラ磨き。	
89	〃	〃	26.8 (6.9) —— ——	浅い杯部から口縁部は強く外反する。口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面横方向のヘラ磨き。杯部内外面はハケ調整後、縦方向のヘラ磨きを施す。	
90	〃	〃	33.4 (4.3) —— ——	外面の稜線から口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面、横方向のヘラ磨きを施す。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
91	ＳＤ１	高　杯	—— (9.1) —— ——	「ハ」の字状に開く脚部である。0.5cm大の貫通する円孔を有する。	外面縦方向のヘラ磨き、内面にはしぼり目がみられる。	
92	〃	〃	—— (7.1) —— ——	なめらかに外反する脚部である。杯底部外面に小孔を穿つ。	脚部外面縦方向、内面横方向のハケ調整あり。	
93	〃	〃	—— (7.7) —— ——	なめらかに外反する脚部であり、0.9cm大の円孔を有する。	脚部外面縦方向のヘラ磨き、内面にはしぼり目がみられる。	接合部ないし未杯がない程度あり。工作上の重大な欠陥。製品として貫通する。
94	〃	〃	—— (4.3) —— 16.8	「ハ」の字状に開く脚部で0.7cm大の円孔を有する。端部は丸くおさめる。		
95	〃	〃	—— (7.4) —— 19.4	なめらかに外反する脚部で中位に0.9cm大の円孔を有する。	外面縦方向のヘラ磨きを施す。	
96	〃	鉢	22.5 (4.7) —— ——	浅い鉢で内湾気味に立ち上がり口唇部は水平な面をなす。	外面左上りのハケ調整を施す。	
97	〃	〃	24.4 (5.0) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	内面横方向のハケ調整。	
98	〃	〃	26.7 (7.2) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は面をなす。	内面縦方向のヘラ磨き、外面は左上りのハケ調整後ヘラ磨きを施す。	
99	〃	〃	17.8 (6.0) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。		胴部内面中位がススけている。
100	〃	杯　蓋	12.5 4.1 —— ——	天井部は平端面をなす。端部は丸くおさめる。	全面横方向のナデ調整。	
101	ＳＤ２	壺	14.6 (9.3) —— ——	口頸間にしっかりした段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。頸胴間に断面三角形の突帯を貼付する。		

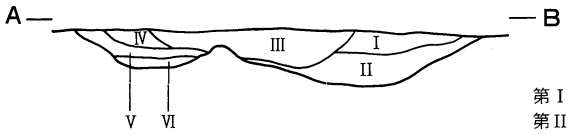
第16表　Ａ区遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
102	ＳＤ１	石　斧	(10.4) 7.3 3.8 307.0	緑色岩	基部は欠損している。 刃部には研磨のときの擦痕が著しく残っている。他の部分は研磨されていない。	
103	〃	〃	(16.4) 7.0 (4.5) 780.0	〃	刃部は欠損している。基端部は丸い。丁寧な研磨は見られない。	

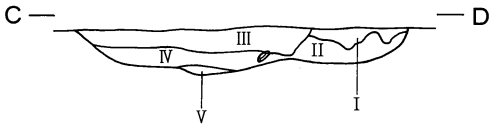
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
104	ＳＤ１	石　斧	(8.8) 6.2 3.9 274.0	緑 色 岩	基部は欠損している。刃部は使用による磨消に片寄りが見られる。すなわち、左主面の刃部は後側縁に向って大きく傾く。	
105	〃	〃	(15.5) 8.2 5.0 1200.0	〃	刃部が欠損している。基端部は丸い。全体に丁寧な研磨はされておらず、成形時の打痕を多く残す。	
106	〃	〃	(10.3) 7.3 3.9 426.0	〃	太形蛤刃石斧の未製品である。成形の段階で破損したものであろう。	
107	〃	〃	(14.7) 7.1 4.3 596.0	結晶片岩	刃部は欠損している。基端部から刃部にかけて、わずかに幅を広げていく。	
108	〃	〃	(12.9) 6.3 4.2 590.0	緑 色 岩	刃部は欠損している。基端部は尖り気味で、基端部以外は全面丁寧に研磨されている。	
109	〃	〃	(15.1) 7.0 4.2 830.0	〃	刃部は欠損している。基端部は丸くカーブしている。 基端部は成形時の打痕を残すが、他は丁寧に研磨されている。	
110	〃	〃	(13.9) 6.8 4.4 674.0	〃	刃部、基端部を欠損している。 全面丁寧に研磨している。	
111	〃	〃	12.8 (4.8) (3.5) 280.0	〃	縦に欠損している。刃部は鋭く研ぎ出され、全面丁寧に研磨されている。	
112	〃	〃	(5.0) (6.6) (4.2) 40.0	〃	太形蛤刃石斧の基端部である。 丁寧に研磨されている。	
113	〃	〃	7.6 2.6 1.0 33.0	〃	扁平な長楕円形の河原石の一端を加工して刃部をつくり出している。 両刃であり、刃部に研磨擦痕が残る。	
114	〃	〃	5.8 3.2 1.3 37.0	〃	基端部に対して約２倍の刃部幅を有する。全面丁寧に研磨されているが刃部の半分は意識的に刃をすりつぶしている。	
115	〃	〃	3.1 2.6 0.7 10.0	蛇 紋 岩	小型の扁平片刃石斧である。 全面を丁寧に研磨している。	
116	〃	〃	5.1 2.1 1.1 18.0	頁　　岩	基端部から刃部に向って幅が狭くなっている。刃部の一部は欠損している。 全面丁寧に研磨されている。	
117	〃	〃	10.8 5.7 1.8 140.0	砂　　岩	調整によって柄部をつくり出している。	
118	〃	〃	(6.4) 5.3 1.3 60.0	頁　　岩	自然面と剥離面とからなり、基端部は欠損。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
119	ＳＤ１	叩　石	13.3 4.2 3.4 300.0	砂　　岩	断面円形を呈する棒状の河原石を使用。両端に著しい潰痕が見られる。	
120	〃	〃	13.1 5.3 2.7 330.0	〃	断面楕円形を呈する棒状の河原石を使用。両端に著しい潰痕が見られる。また両面にもアバタ状の潰痕が見られる。	
121	〃	〃	11.4 6.2 2.1 240.0	〃	河原石をそのまま使用。両端及び両主面に潰痕が見られる。	
122	〃	〃	10.4 4.9 1.9 144.0	〃	河原石を縦に割ったもので、自然面と剝離面とからなる。短側縁部に潰痕がみられる。	
123	〃	〃	12.5 6.8 3.2 468.0	緑 色 岩	河原石をそのまま利用している。 短側縁に潰痕が見られる。	
124	〃	〃	12.1 7.7 3.3 445.0	砂　　岩	河原石をそのまま利用している。 両長側縁は潰痕による凹凸が激しい。	
125	〃	〃	6.7 5.9 1.5 71.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剝離面とからなる。全縁部に潰痕が見られる。	
126	〃	〃	9.9 7.6 1.7 230.0	緑 色 岩	扁平な河原石をそのまま利用している。全縁部に潰痕あり。	
127	〃	〃	11.1 9.4 2.8 496.0	砂　　岩	扁平な河原石をそのまま利用している。 両面中央部に潰痕が見られる。	
128	〃	砥　石	11.6 9.4 3.6 571.0	〃	使用面は一面で凹状をなしている。	
129	〃	〃	7.8 3.9 5.9 250.0	〃	使用面は一面である。	
130	〃	〃	9.1 6.3 4.8 428.0	〃	使用面は四面で、内一面は、断面三角形の溝が走る。	
131	〃	〃	11.1 (3.5) 2.4 150.0	頁　　岩	剝離面の一面を使用しており使用面には擦痕が見られる。	
132	〃	〃	8.0 4.0 2.9 111.0	砂　　岩	使用面は二面である。	
133	〃	石包丁	(5.4) (2.6) 0.6 11.0	頁　　岩	刃部片である。両刃でわずかに外湾気味を呈する。全面丁寧に研磨されている。	

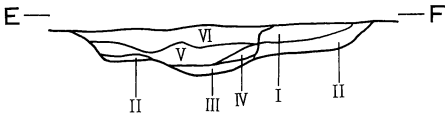
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
134	ＳＤ１	石包丁	(4.5) 3.7 0.7 16.0	粘板岩	直線刃片刃の石包丁である。２孔を有するが、穿孔は両面からなされ、穿孔に際して打痕は全く見られない。	
135	〃	〃	(5.2) (2.5) 0.8 10.0	〃	背部破片である。２孔を有し、両孔共に片面のみから穿たれている。 穿孔に際して打痕は全く見られない。丁寧に研磨されている。	
136	〃	〃	(6.3) 4.8 0.6 20.0	〃	直線刃片刃の石包丁で、２孔を有するが、２孔は近接しており、穿孔部位は刃部側左に片寄っている。丁寧に研磨されている。	
137	〃	〃	(7.1) 3.6 0.6 33.0	千枚岩	直線刃片刃の石包丁で背部は外湾する。中央部に２孔を穿つが、穿孔に際しては打痕を全く認めない。	
138	〃	〃	(6.4) 4.6 0.9 35.0	頁　岩	直線刃片刃の石包丁である。穿孔は両面からなされ、穿孔に際して打痕は認められない。刃部の一部に打痕が見られる。	
139	〃	〃	8.0 (4.5) 0.7 40.0	千枚岩	打製石包丁である。自然面と剥離面とからなる。両短側縁に紐かけ用の抉りを入れている。	
140	〃	〃	7.1 4.4 1.1 46.0	〃	打製石包丁である。両面に剥離面が残る。両短側縁に紐かけ用の抉りを入れる。	
141	〃	〃	9.6 7.3 1.3 110.0	砂　岩	自然面と剥離面とからなる。 短側縁に２ヶ所紐かけ用の抉りを入れる。	石錘か。
142	〃	〃	11.2 6.7 2.0 184.0	千枚岩	自然面と剥離面とからなる。 両短側縁に紐かけ用の抉りを入れる。	〃
143	〃	石　鏃	(2.6) 1.3 0.3 1.4	サヌカイト	基部が欠損している。刃部は両面から押圧剥離によってつくり出す。 断面は六角形をなす。	
144	〃	〃	3.6 1.6 0.4 2.0	〃	凹基式である。両面に剥離面を残し刃部は両面から押圧剥離によってつくり出す。	
145	〃	〃	(4.5) (2.0) 0.4 2.9	〃	長身の鏃で、基部は大きく二又に開くが、両端共に欠損している。	
146	〃	〃	5.0 1.0 0.4 2.8	千枚岩	磨製石鏃で、断面は菱形をなす。全面に研磨擦痕が見られる。	
147	〃	石　剣	3.4 2.4 0.7 11.0	結晶片岩	小破片であるが、関部が認められる。またわずかに稜が見られる。 鉄剣形石剣である。	



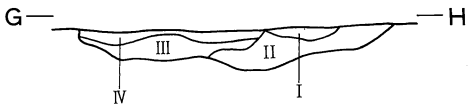
第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　黒灰褐色粘質土
第Ⅲ層　灰黄色細砂
第Ⅳ層　黄灰色砂
第Ⅴ層　黄灰色砂
第Ⅵ層　灰色砂



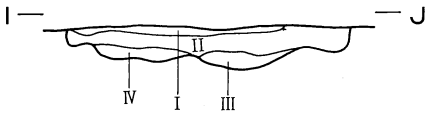
第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　黒灰褐色粘質土
第Ⅲ層　灰黄色細砂
第Ⅳ層　灰色～黄灰色砂
第Ⅴ層　黒灰褐色砂質～砂質土



第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　黒灰褐色砂質土
第Ⅲ層　黒灰褐色砂質～粘質土
第Ⅳ層　暗灰茶色砂質～粘質土
第Ⅴ層　暗灰茶色砂
第Ⅵ層　灰黄色砂



第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　黒灰褐色粘質土
第Ⅲ層　灰黄色砂
第Ⅳ層　灰褐色砂

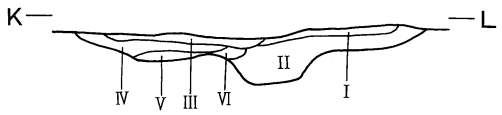


第Ⅰ層　灰黄褐色荒砂
第Ⅱ層　暗灰色砂礫
第Ⅲ層　灰濃茶色粘質～砂質土

ＳＤ１

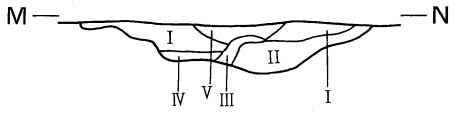
ＤＬ＝8.50ｍ

第45図　ＳＤ１セクション



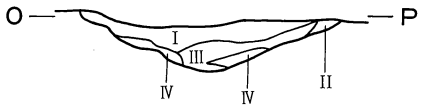
SD1

第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　黒灰褐色粘質土
第Ⅲ層　灰色砂
第Ⅳ層　茶灰色砂礫
第Ⅴ層　茶灰色砂質土
第Ⅵ層　暗茶色砂



SD1

第Ⅰ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅱ層　濃茶灰色粘質土
第Ⅲ層　黄茶色砂質土
第Ⅳ層　灰褐色荒砂
第Ⅴ層　黄灰色砂

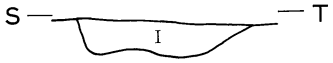


SD1

第Ⅰ層　灰黄色砂
第Ⅱ層　灰茶褐色粘質土
第Ⅲ層　暗灰色砂

SD1

第Ⅰ層　灰黄色砂

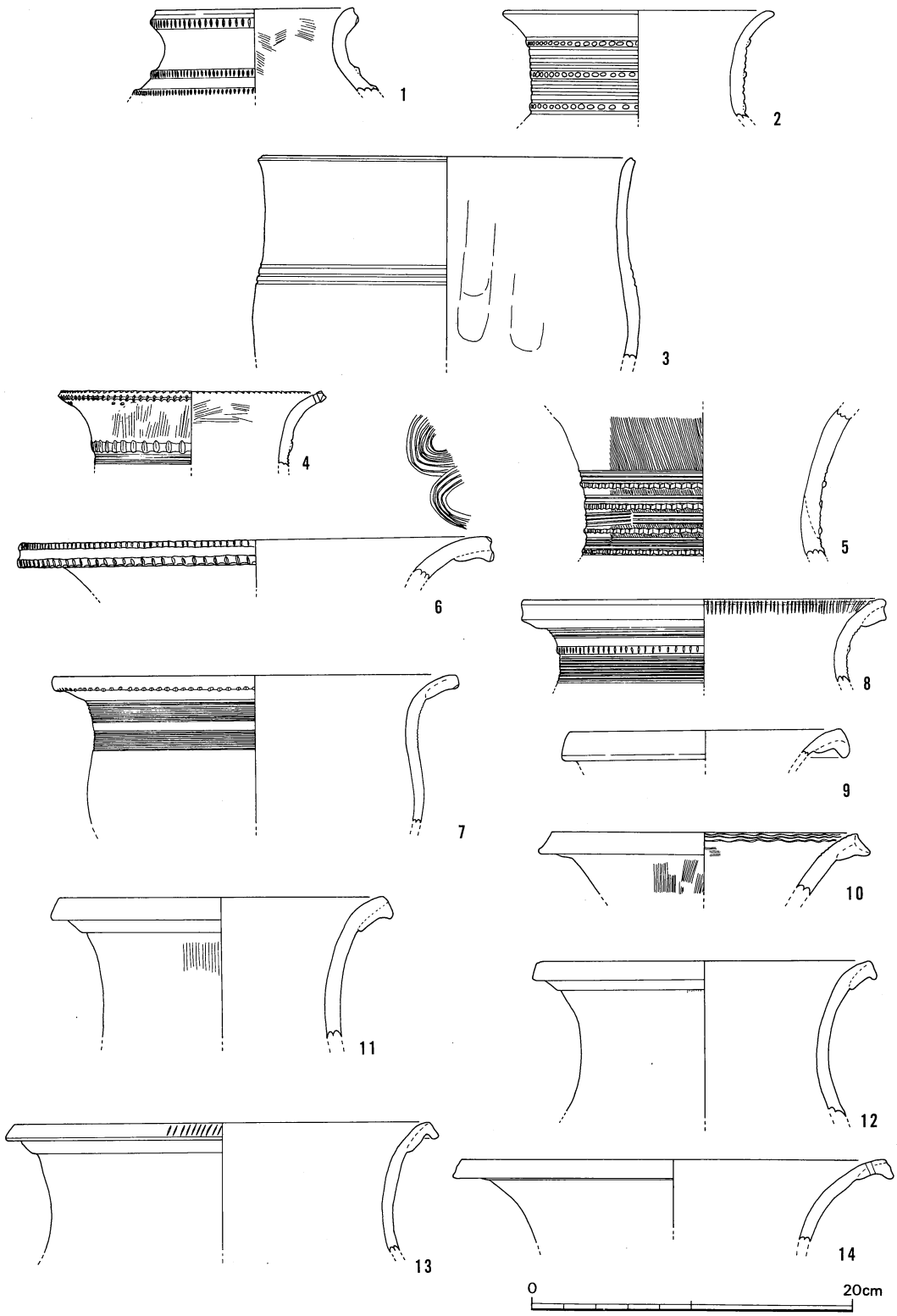


SD1

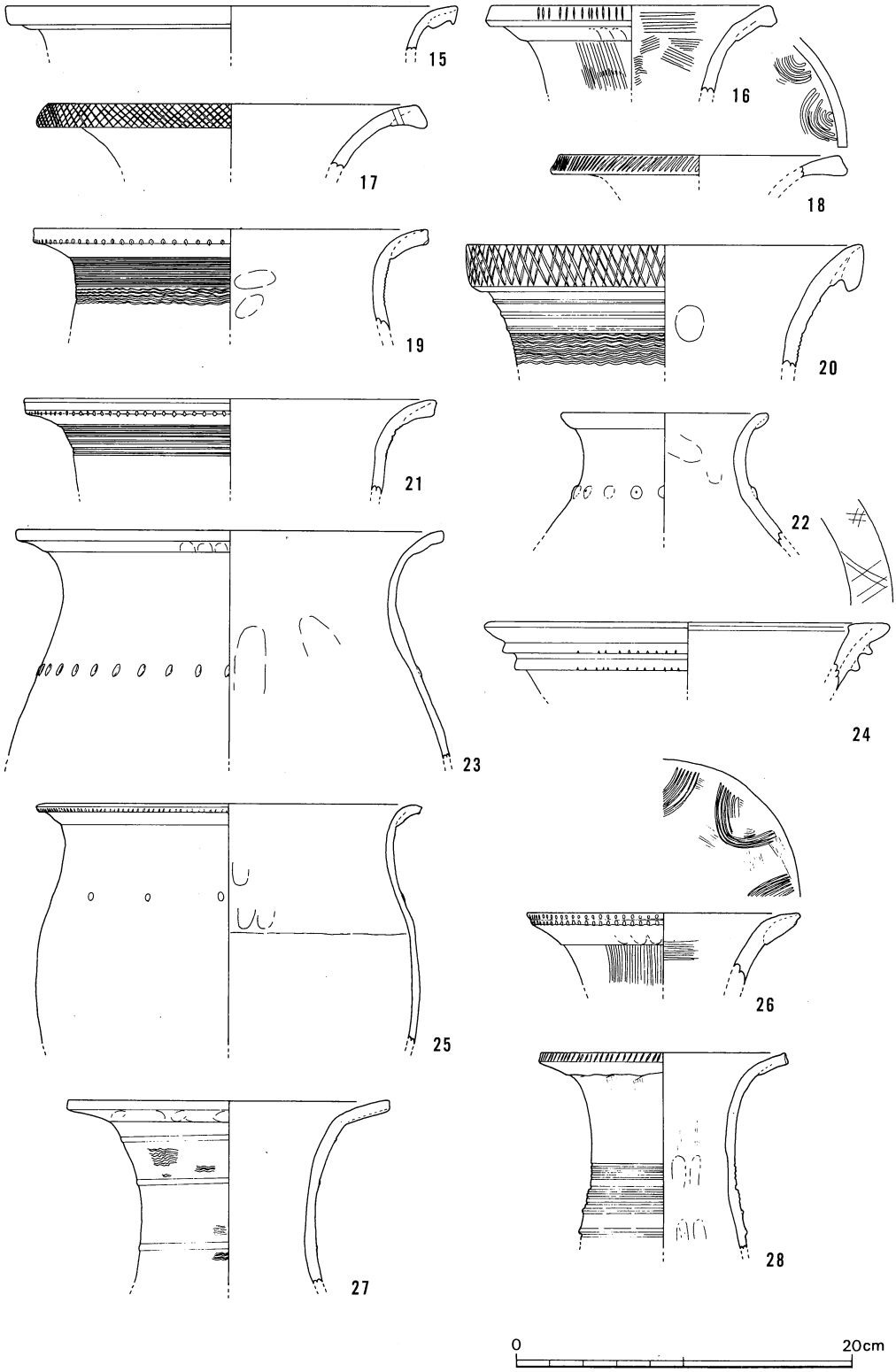
SD2

DL＝8.50m

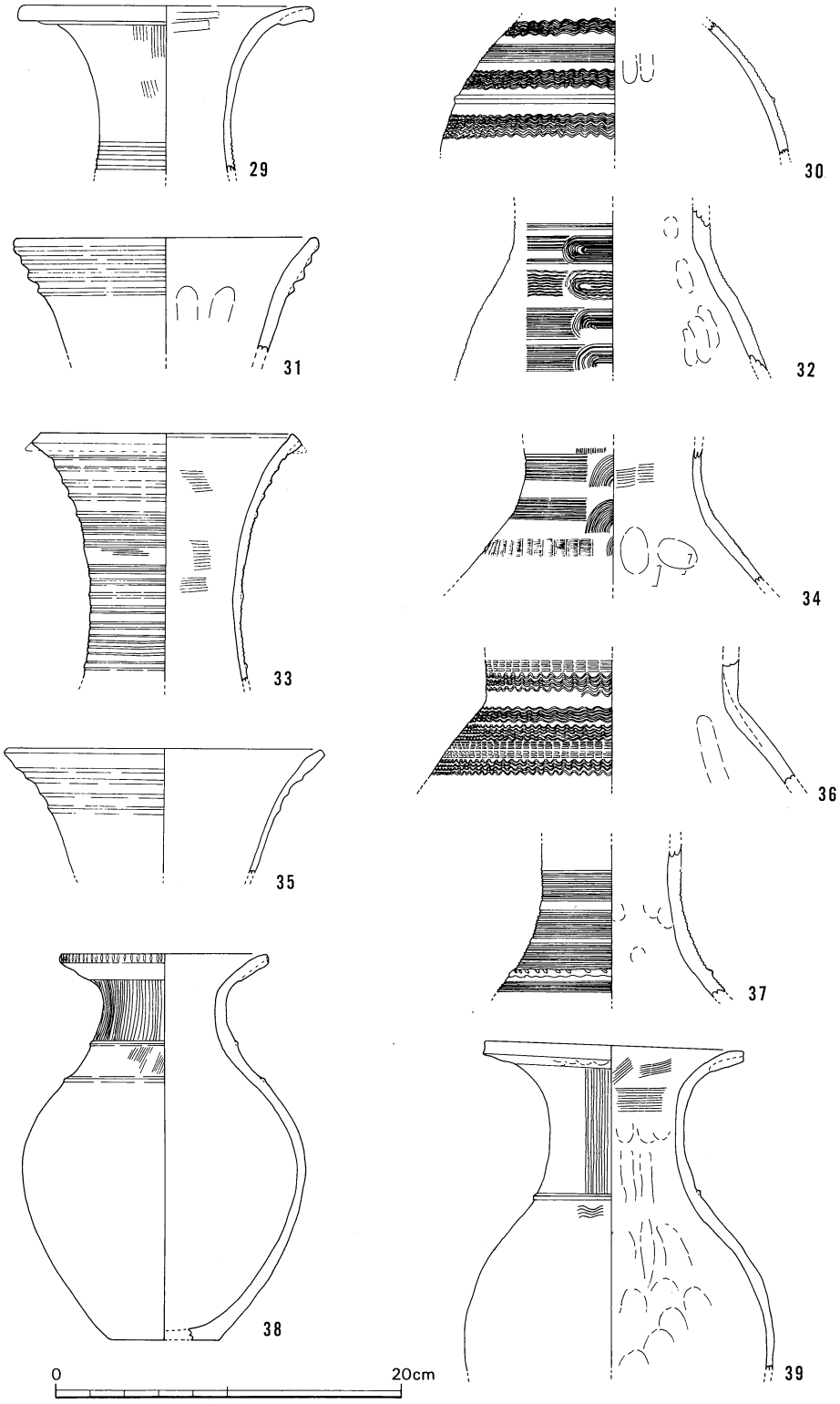
第46図　SD1・2セクション



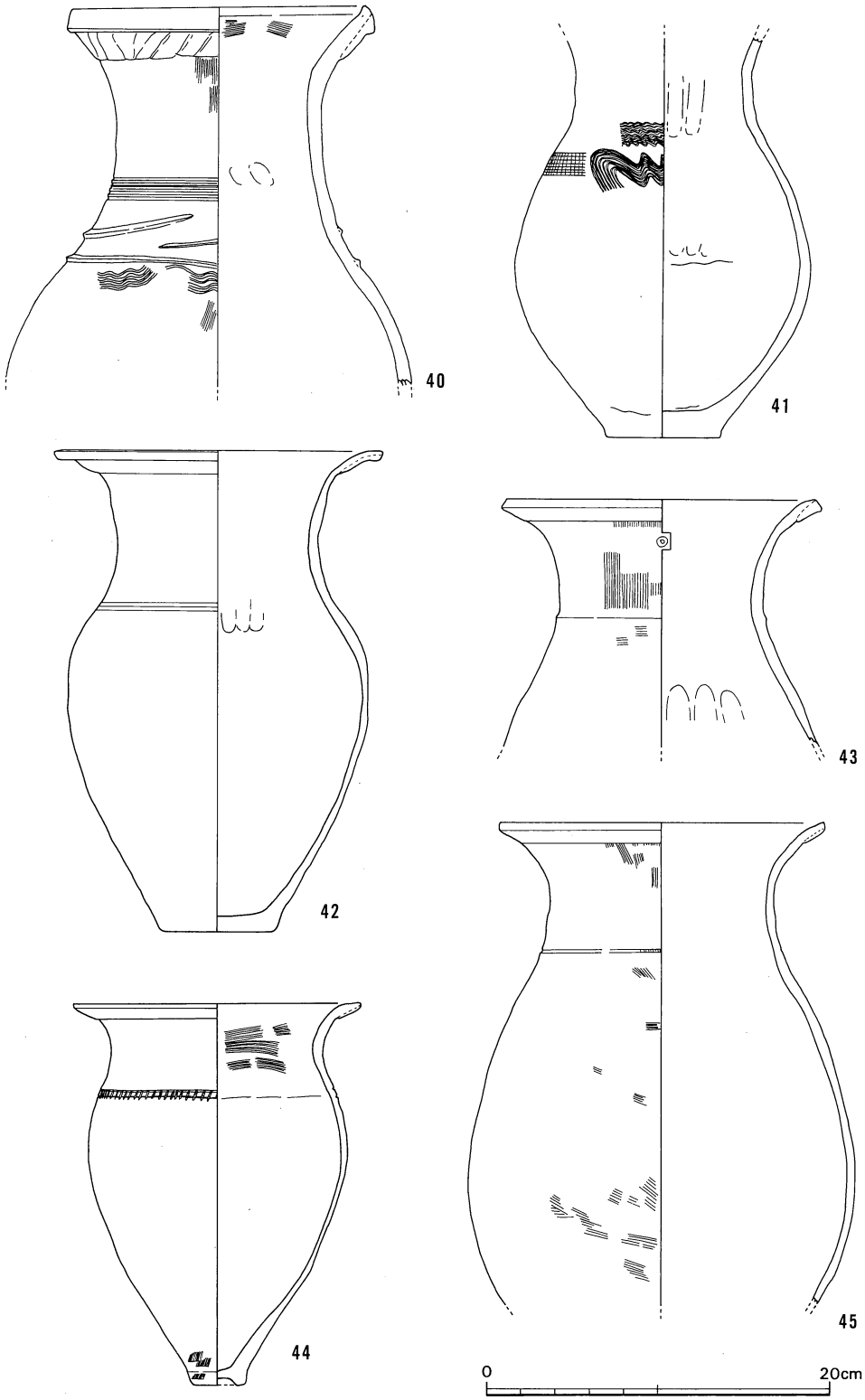
第47図　ＳＤ１出土遺物



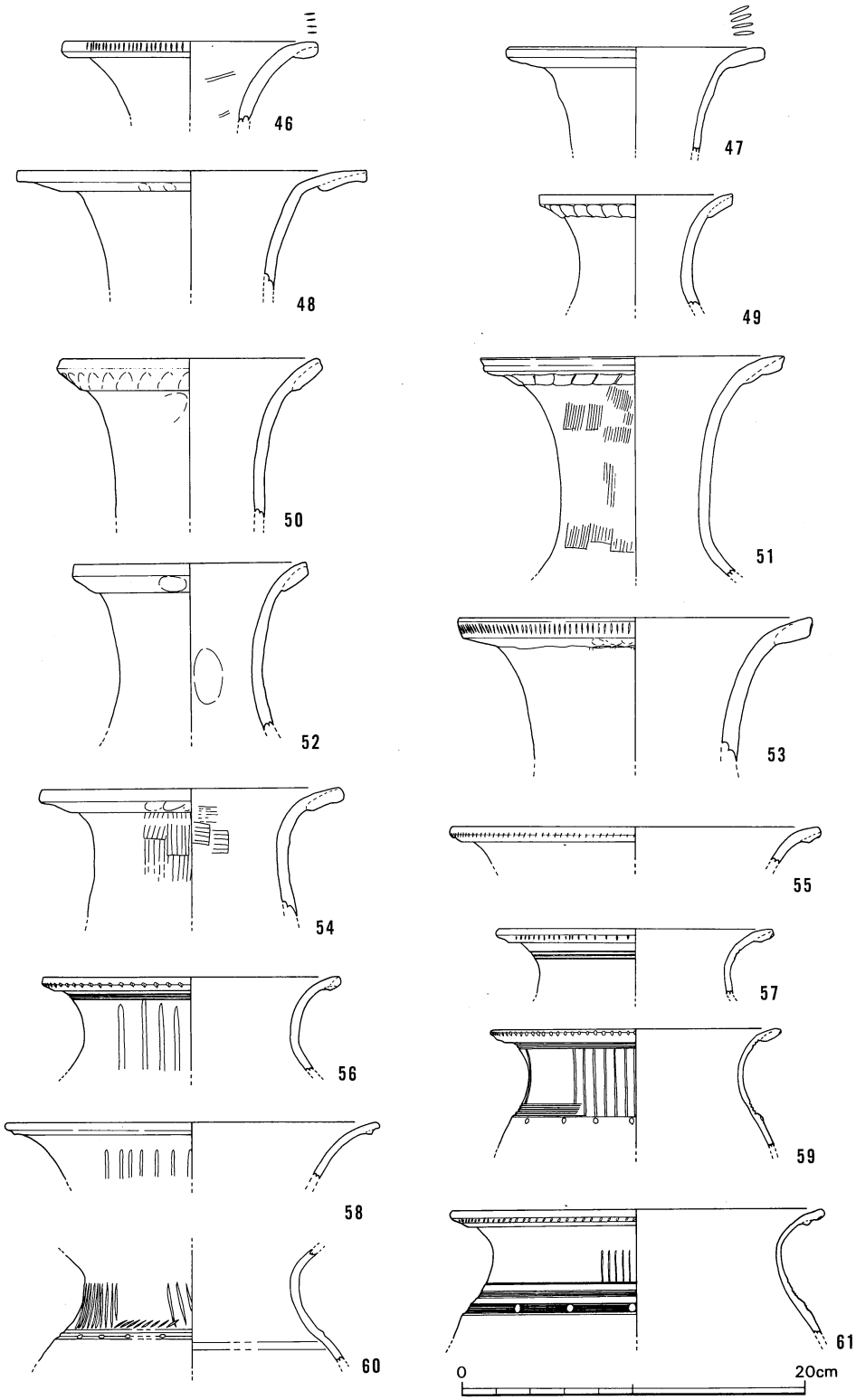
第48図　ＳＤ１出土遺物



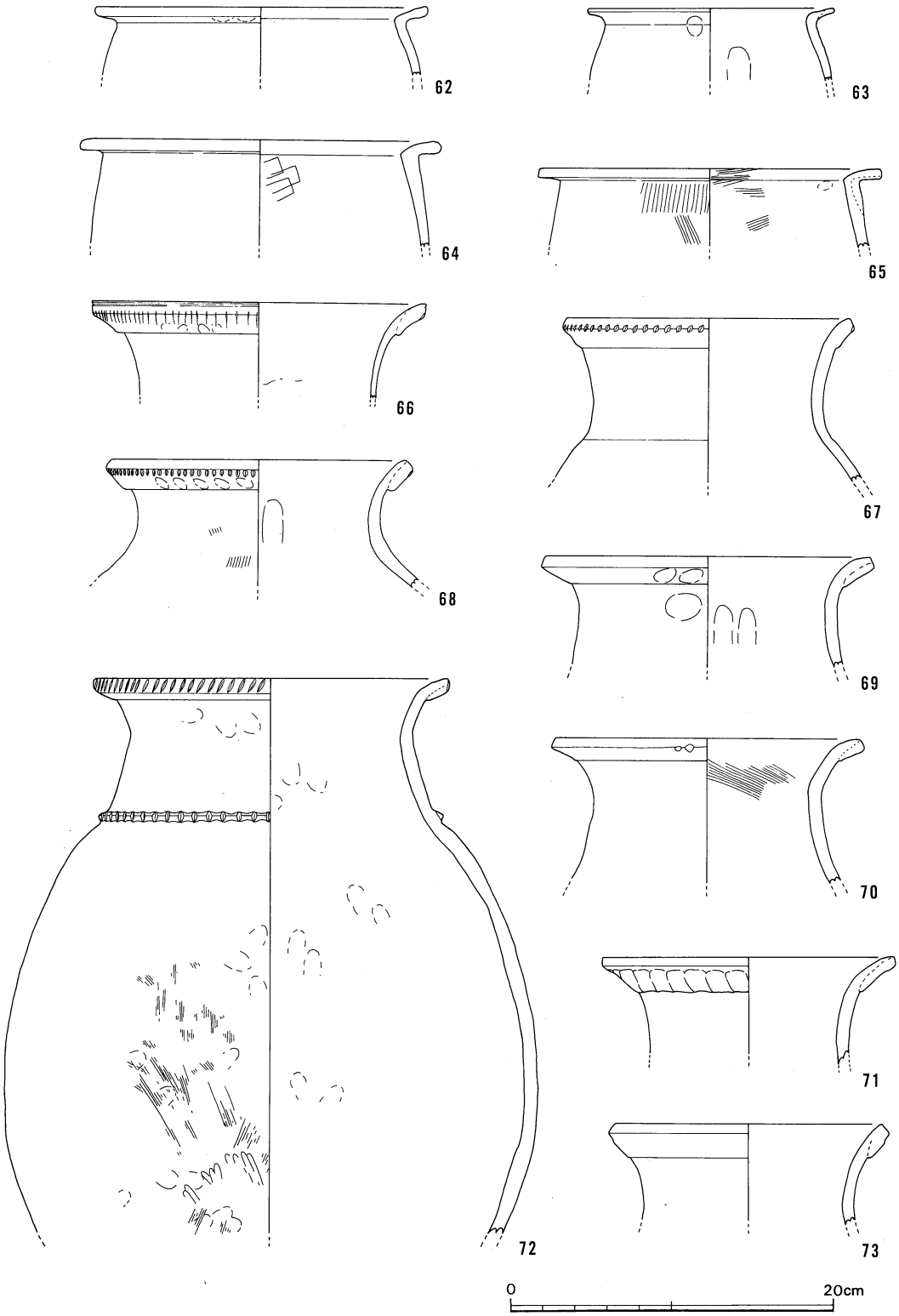
第49図　ＳＤ１出土遺物



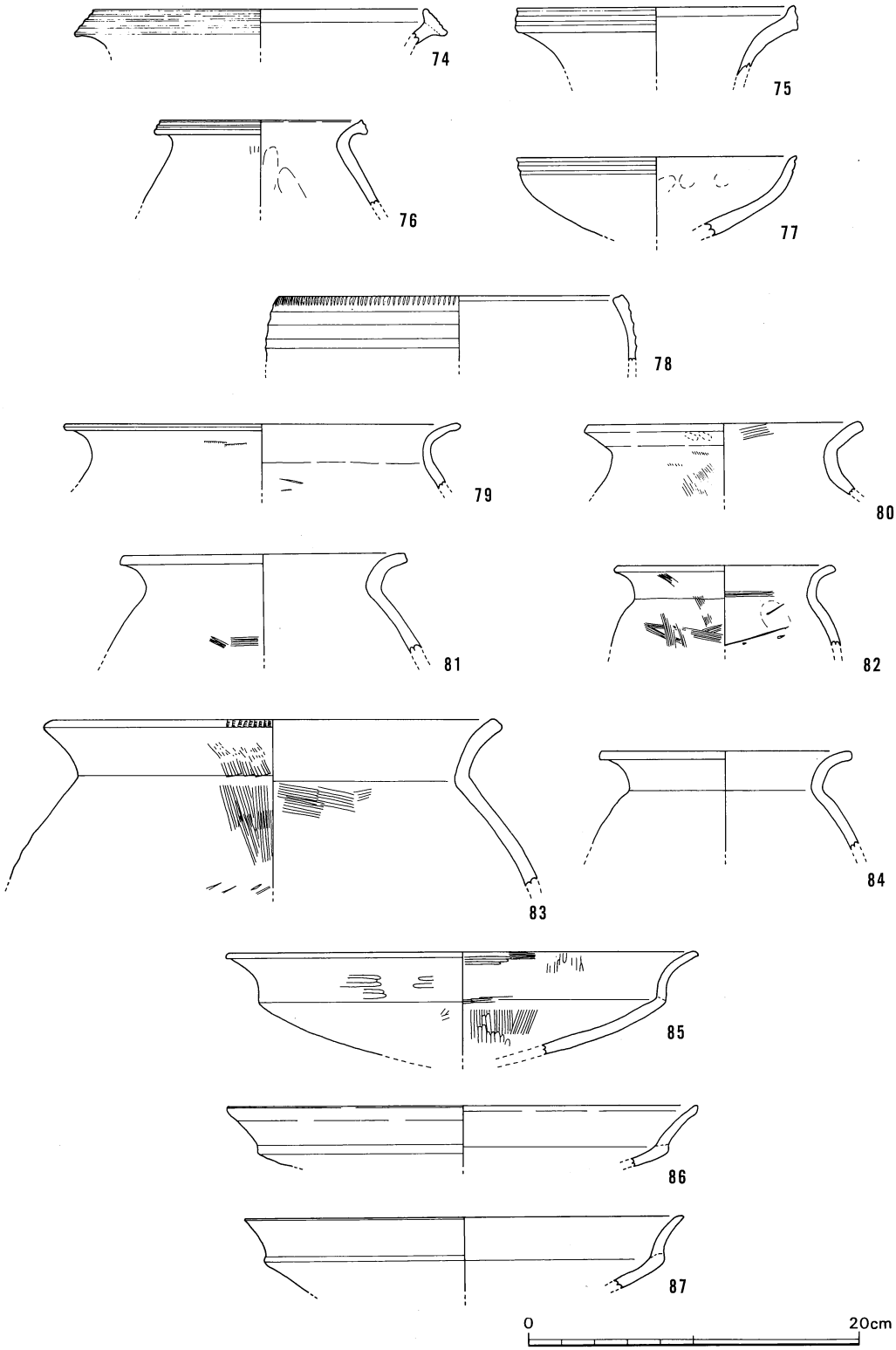
第50図　ＳＤ１出土遺物



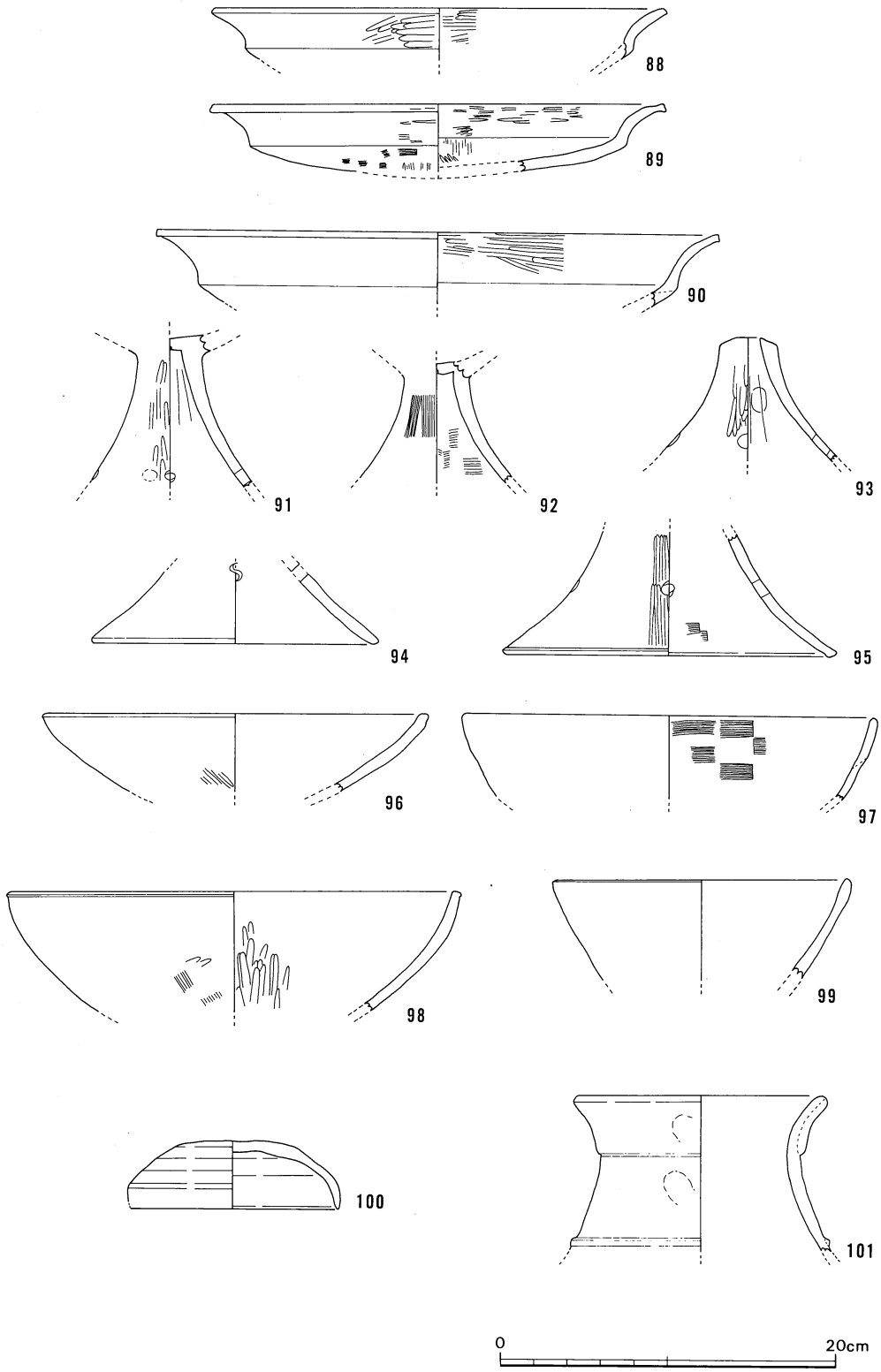
第51図　ＳＤ１出土遺物



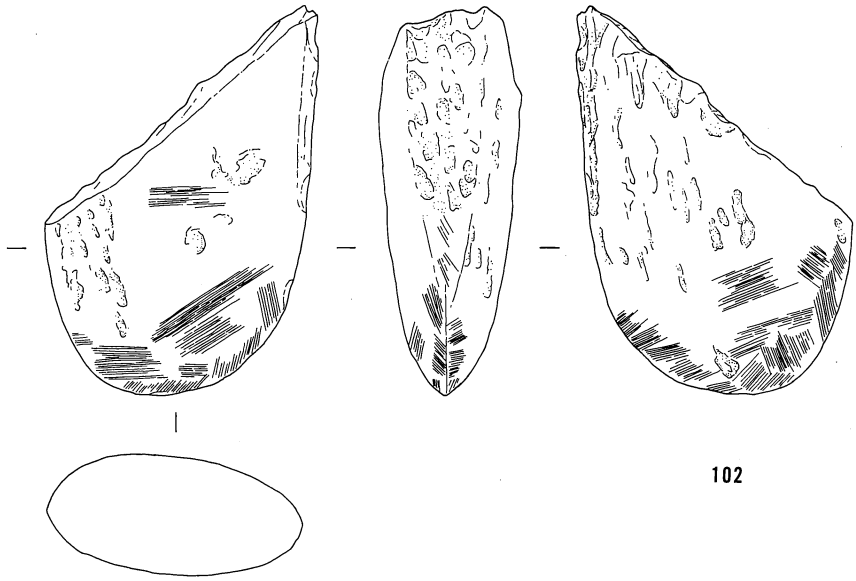
第52図　ＳＤ１出土遺物



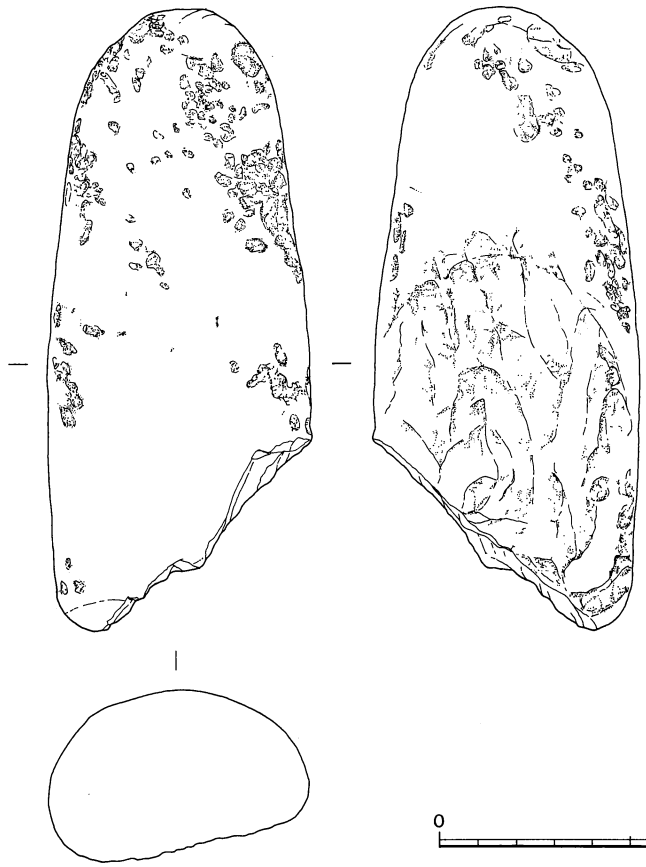
第53図　ＳＤ１出土遺物



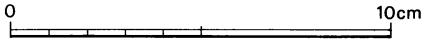
第54図　ＳＤ１・２出土遺物



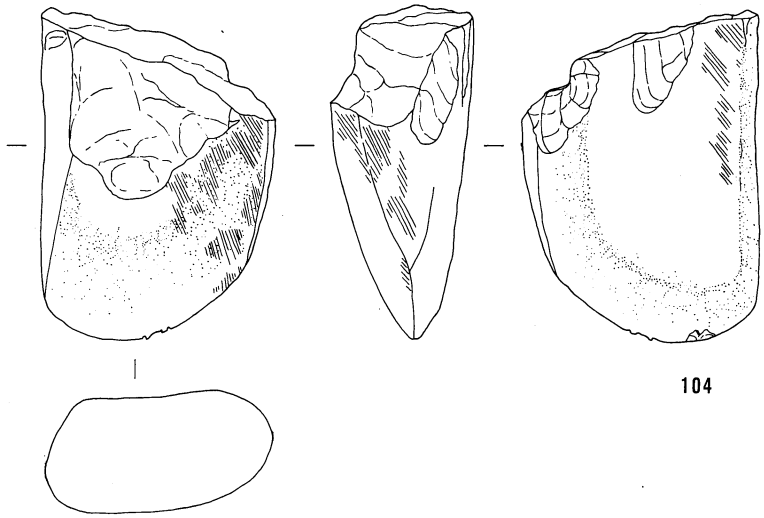
102

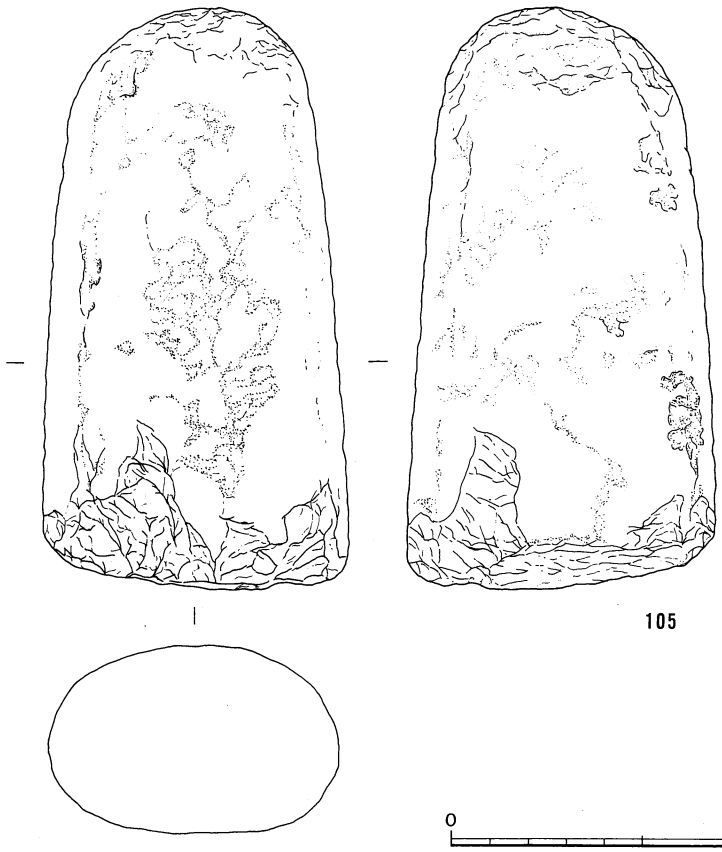


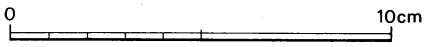
103



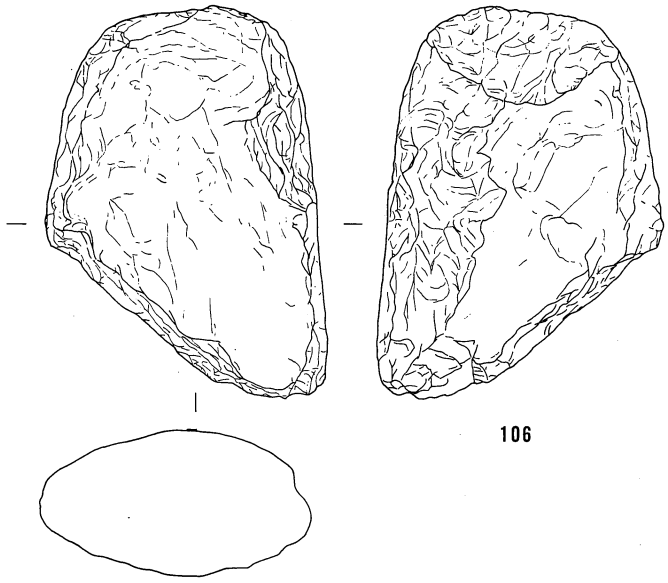
第55図　ＳＤ１出土遺物



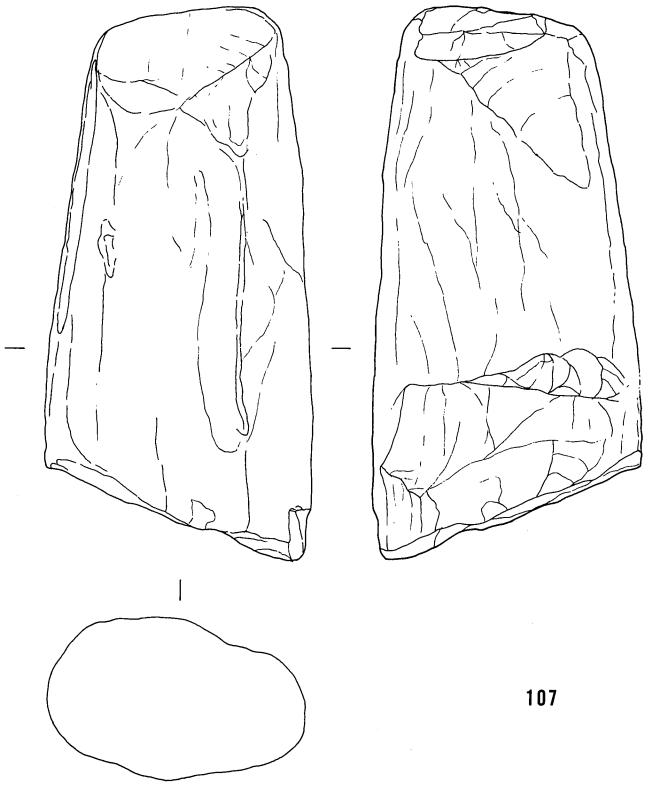




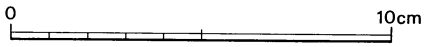
第56図　ＳＤ１出土遺物



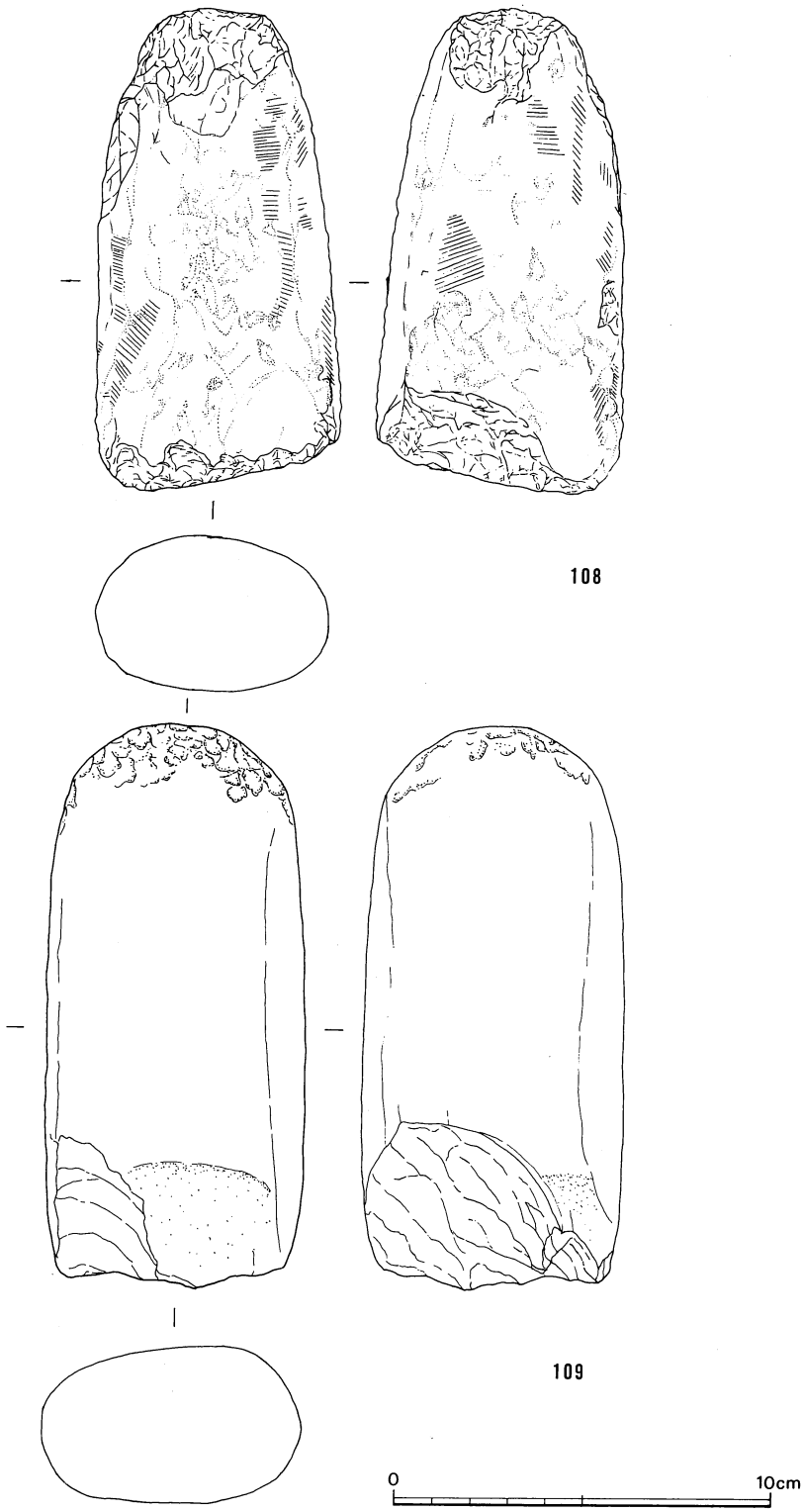
106



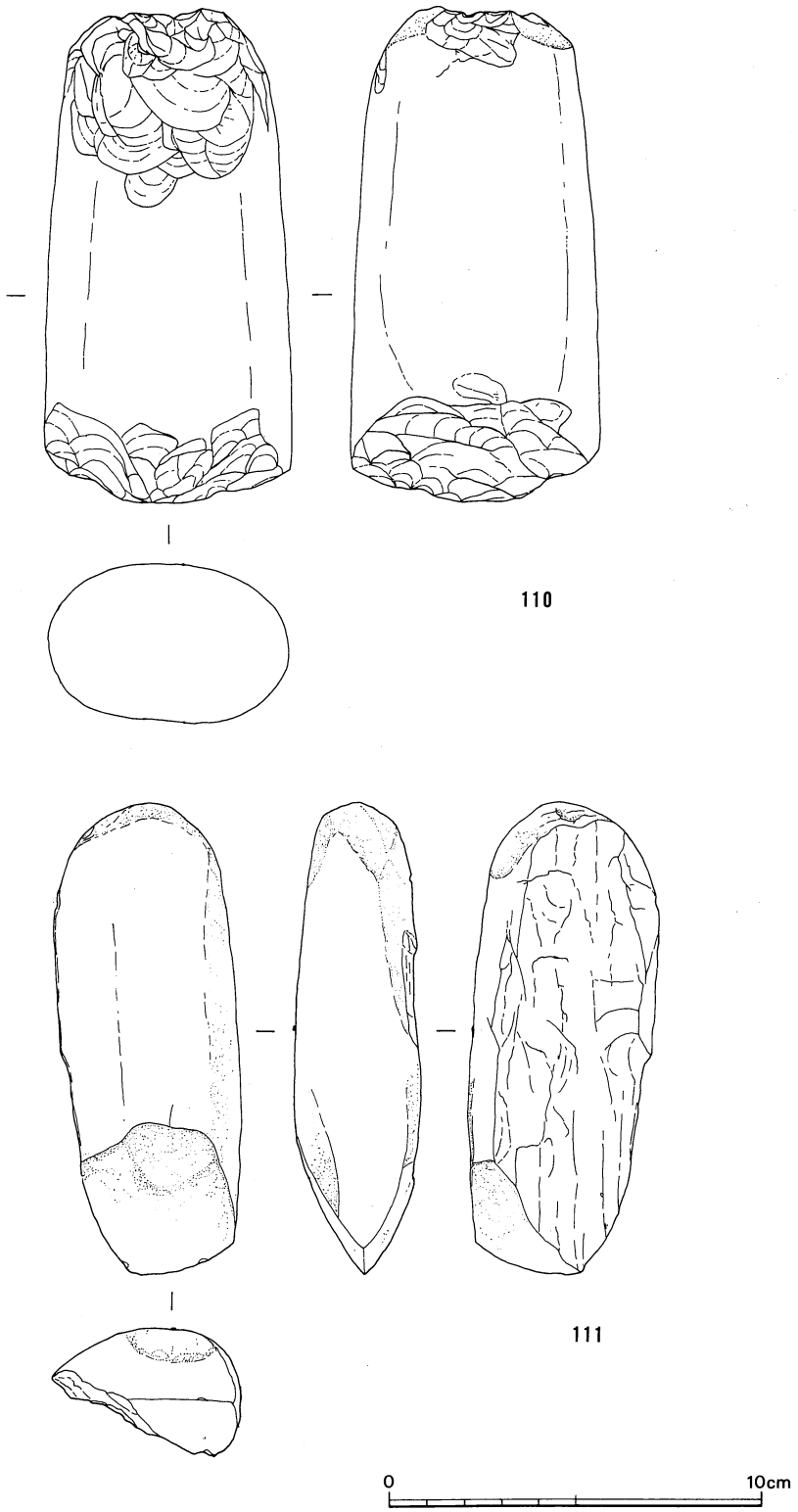
107



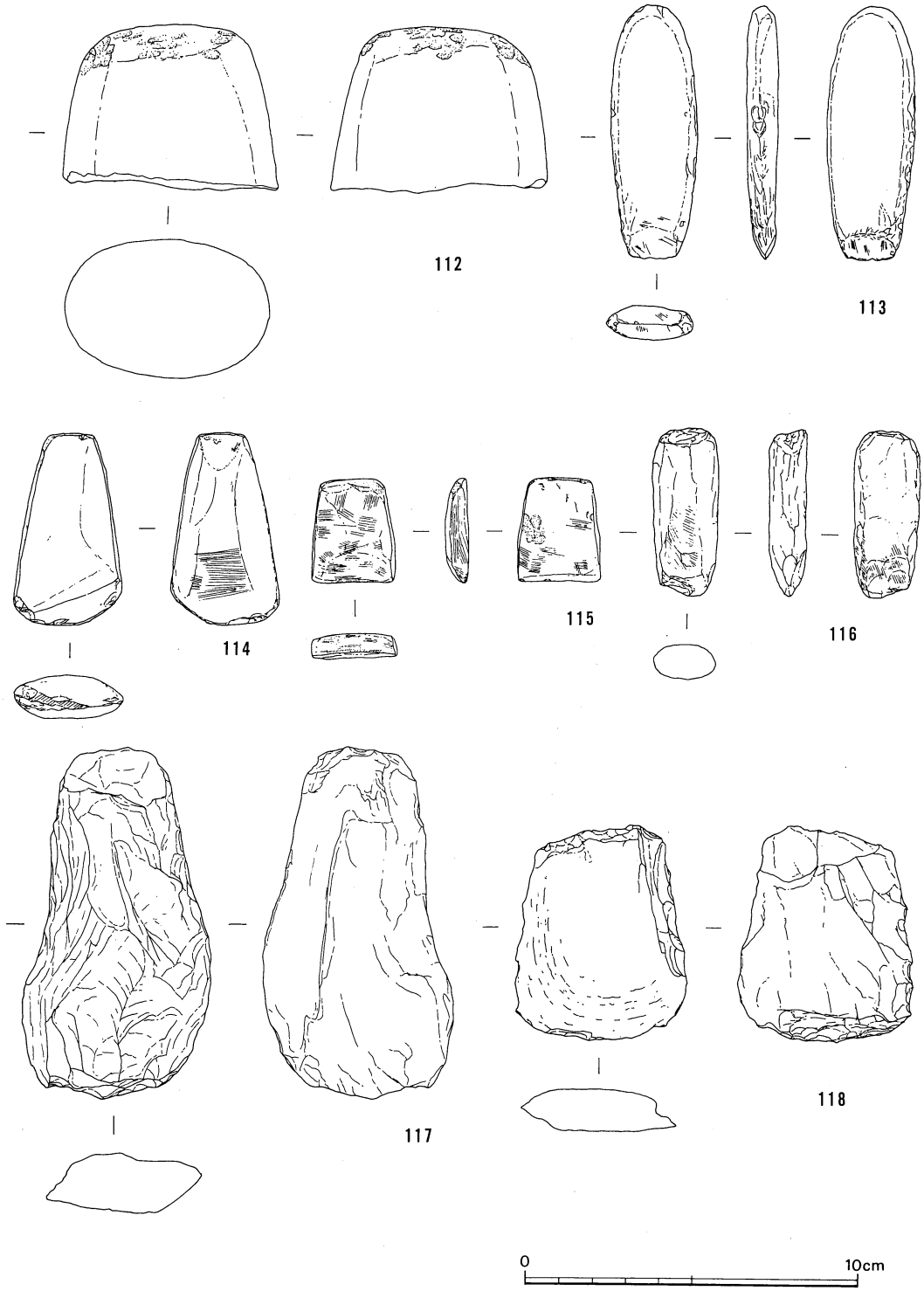
第57図　ＳＤ１出土遺物



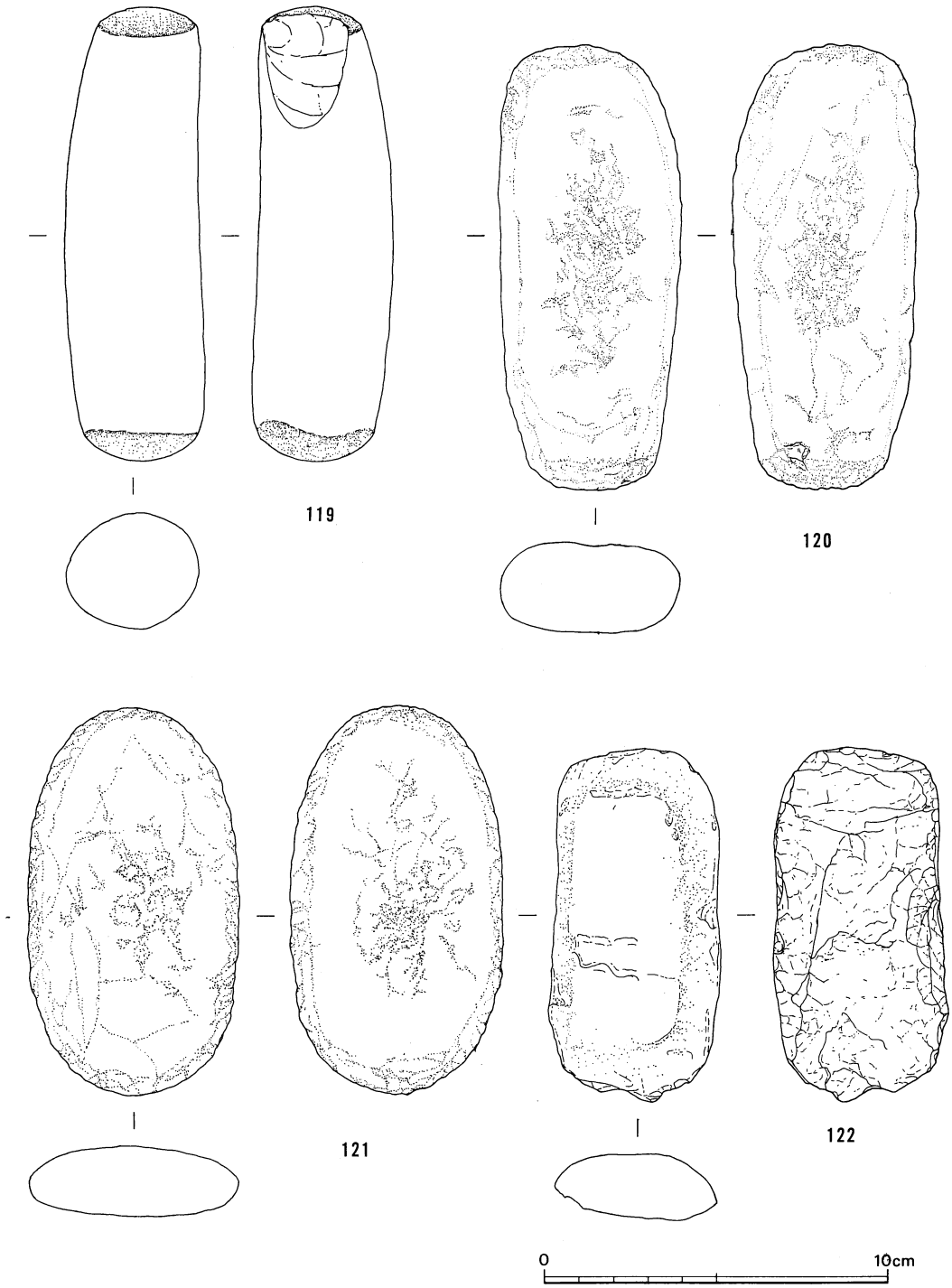
第58図　ＳＤ１出土遺物



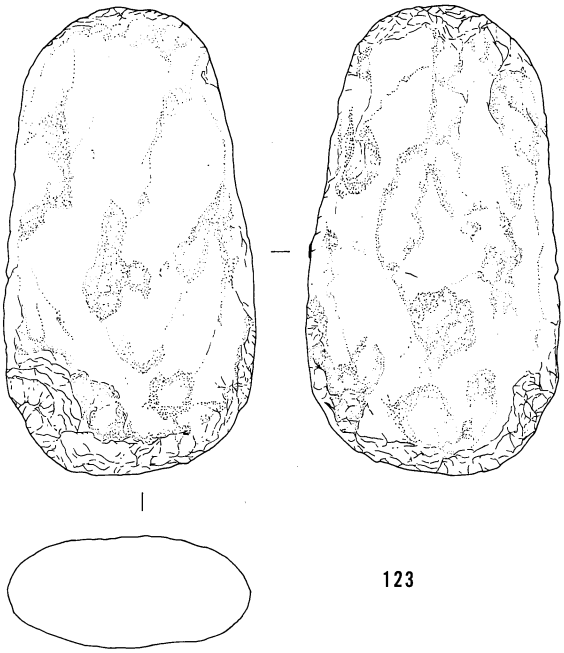
第59図　ＳＤ１出土遺物

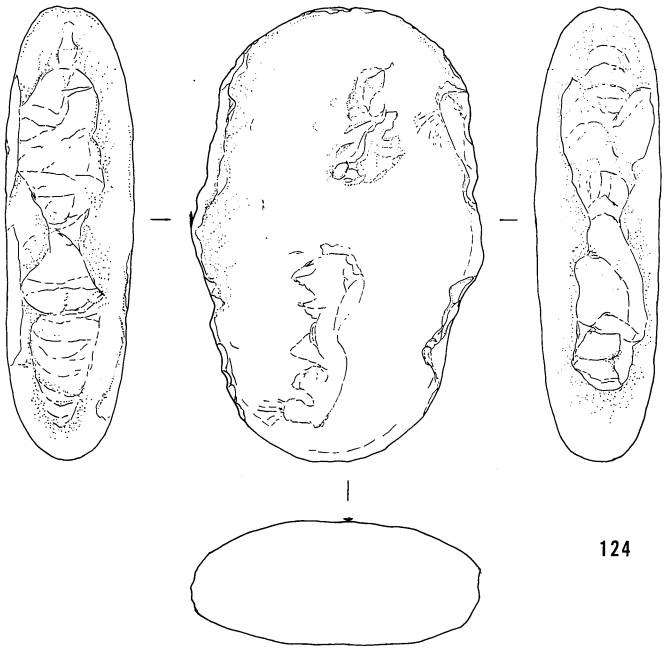


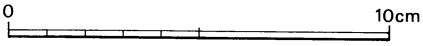
第60図　ＳＤ１出土遺物



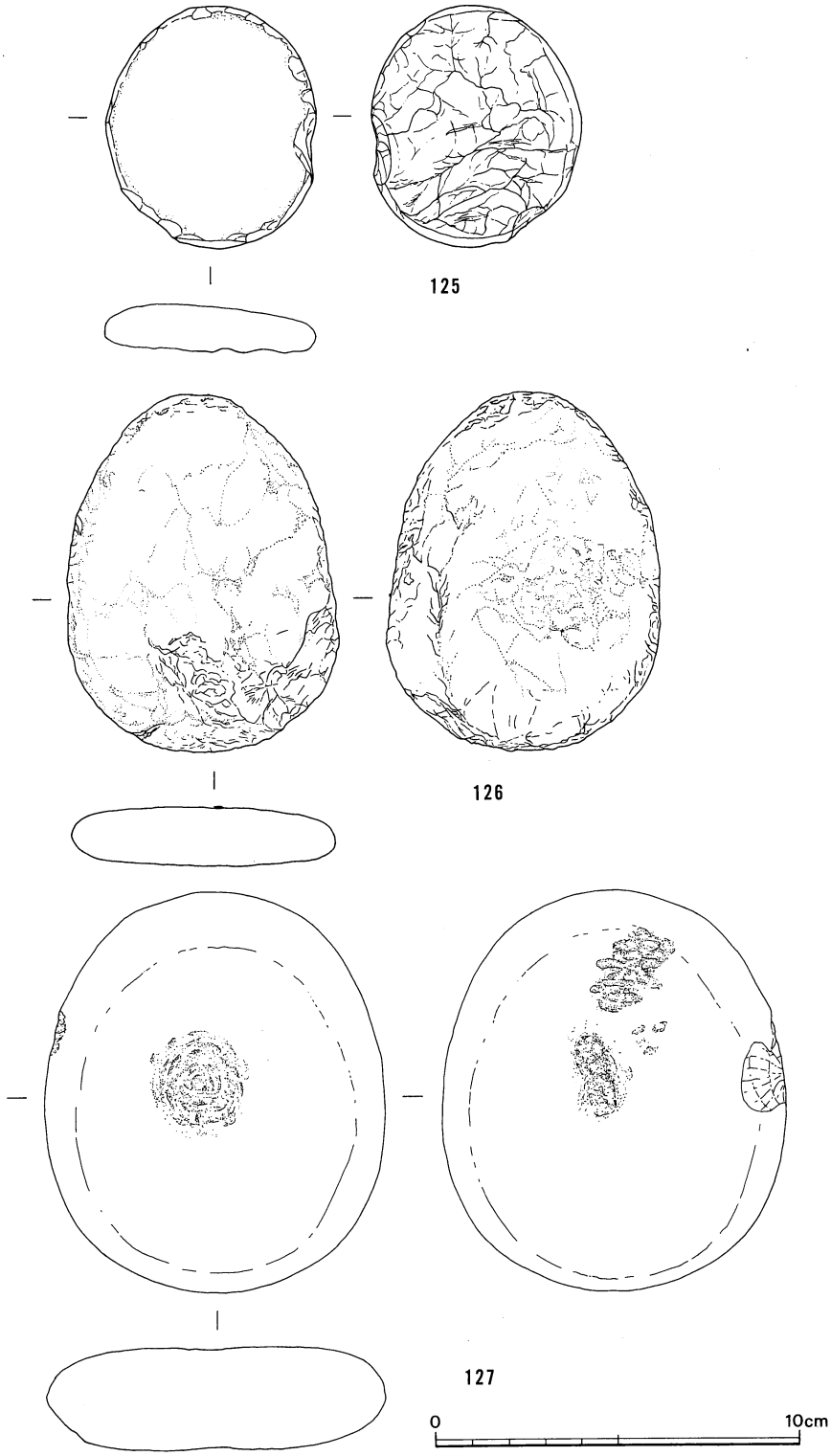
第61図　ＳＤ１出土遺物



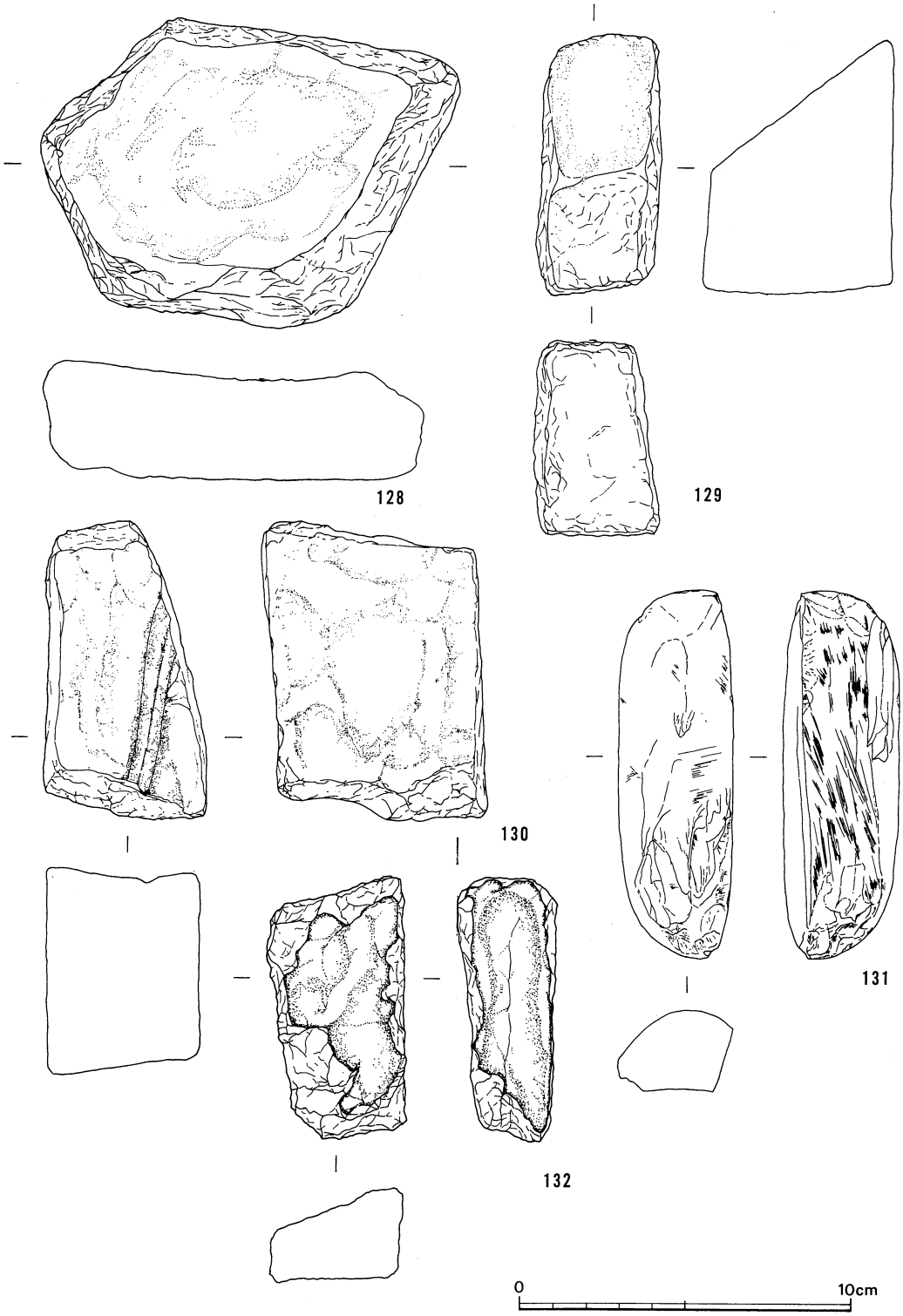




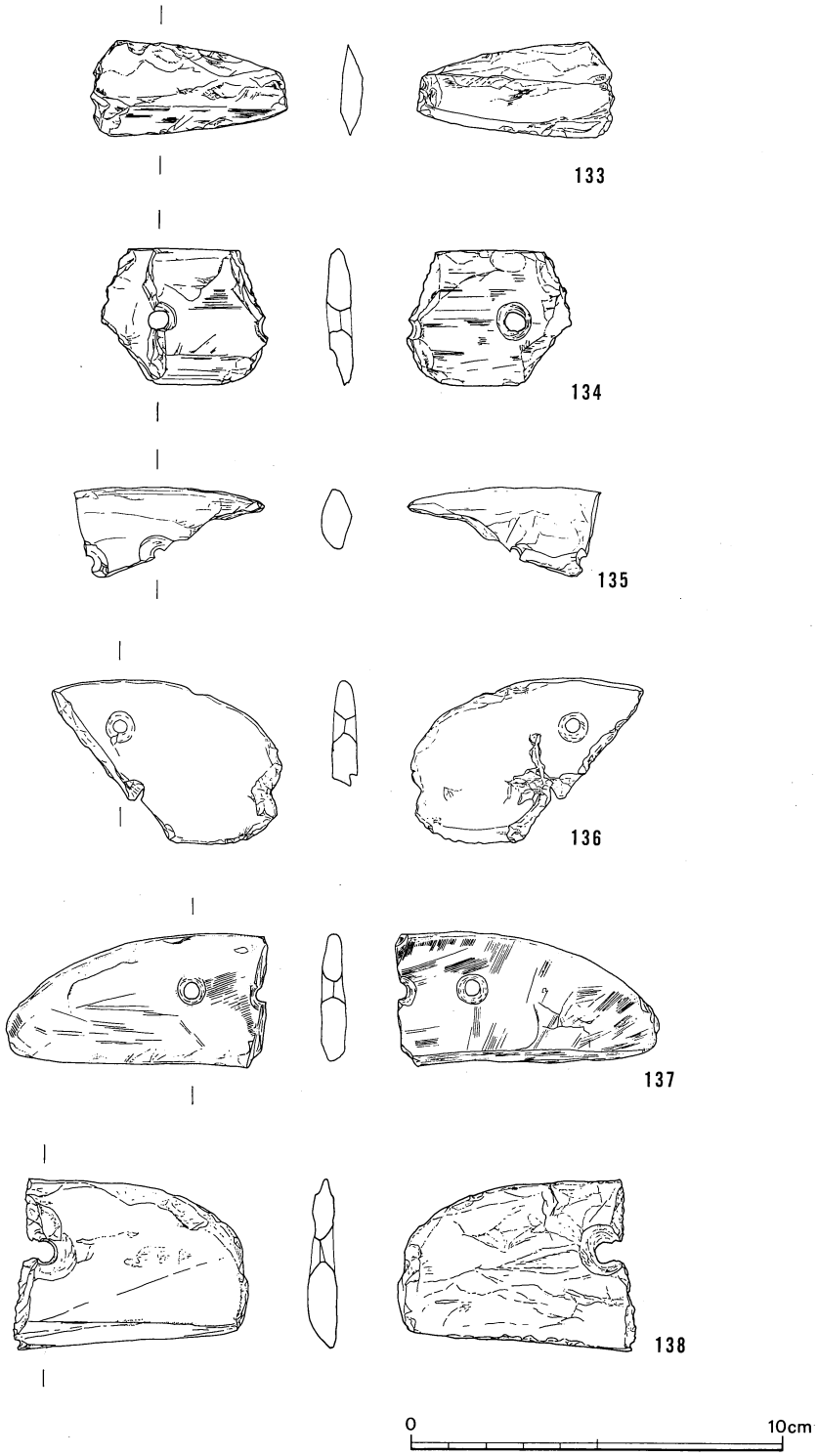
第62図　ＳＤ１出土遺物



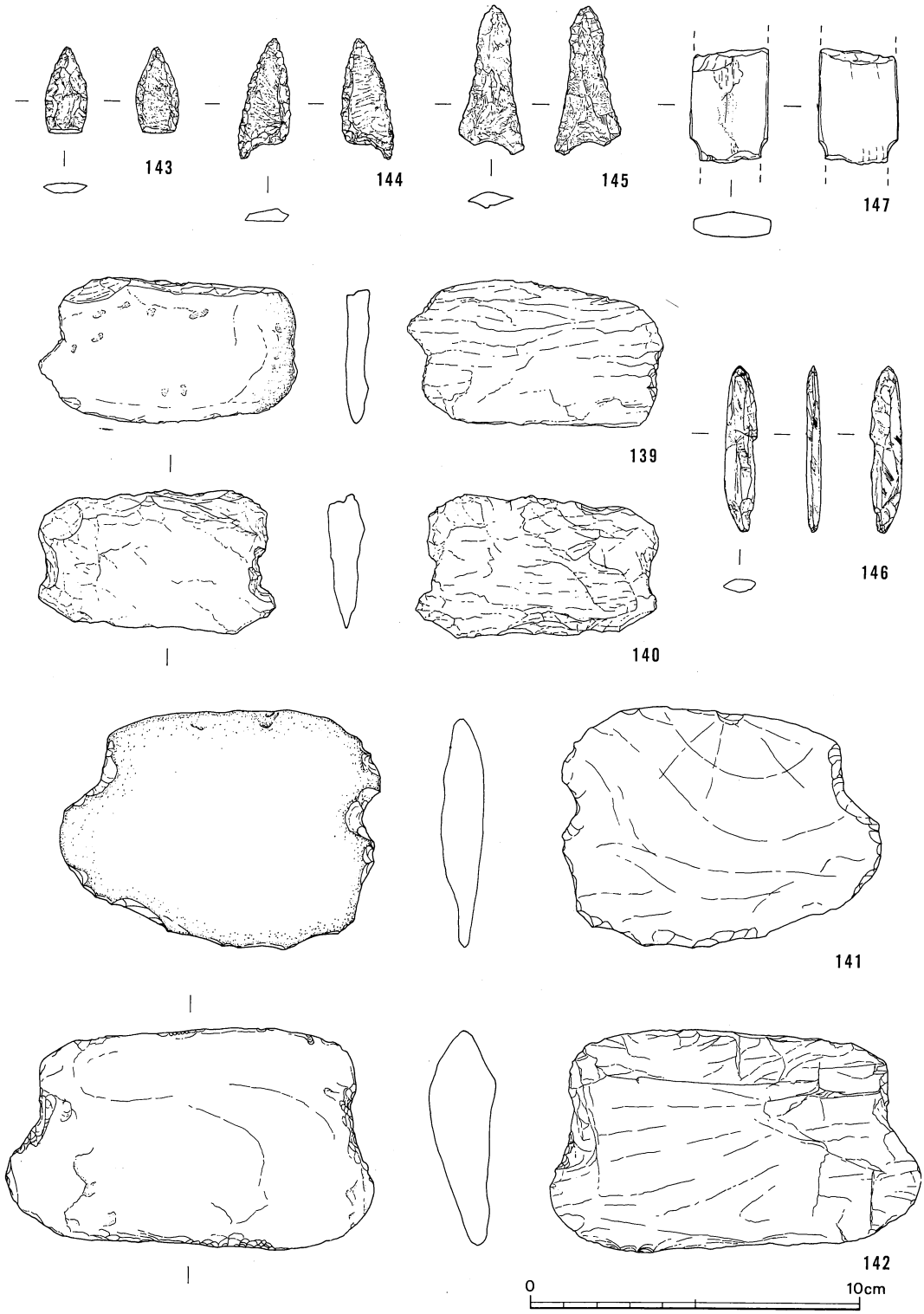
第63図　ＳＤ１出土遺物



第64図　ＳＤ１出土遺物



第65図　ＳＤ１出土遺物



第66図　ＳＤ１出土遺物

第17表　C区遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
1	ＳＫ１	甕	26.4 (6.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	口唇部は横方向のナデ調整。	外面はススけている。
2	ＳＫ２	鉢	16.5 (8.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	外面は右下り、内面は右上りの丁寧なハケ調整。	
3	〃	甕	27.0 (16.5) 26.7 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配し、沈線間に刺突文を配する。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整、沈線以下胴部上半は左上りのハケ調整、胴部中位でハケの方向が不規則になる。	ハケ調整の変化点が粘土帯接合部である。
4	〃	土製円盤	4.0 0.8 —— ——	隅丸方形。		土器転用円盤。
5	ＳＫ７	紡錘車	5.0 1.2 —— ——	断面は凸レンズ状をなし、一面に３条のヘラ描沈線あり。		
6	ＳＫ12	壺	16.8 (10.5) —— ——	口縁部は丸く外反し、端部近くがわずかに肥厚する。口唇部は丸くおさめる。頸部に２条のヘラ描沈線を施し、その間に刺突文を配する。	内外面共に丁寧なヘラ磨き、頸部外面に下地のハケ調整がわずかに認められる。	頸部に粘土帯接合部を認める。
7	〃	〃	28.5 (3.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反。口唇部は丸くおさめやや肥厚する。頸部に２条のヘラ描沈線あり。		
8	〃	甕	23.2 (7.0) 22.0 ——	口縁部は短く外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。内面に指頭圧痕が見られる。刻目は棒状工具による。	
9	〃	〃	17.5 (9.5) 16.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。胴部外面沈線以下ハケ調整。	
10	ＳＫ16	〃	24.0 (18.0) 25.4 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は木理の荒いハケ調整。	
11	〃	〃	29.0 (22.0) 13.5 ——	口縁部は強く外方に屈曲する。口唇部は面をなし、刻目を施す。頸部に４条のヘラ描沈線があり、その下に双線による重弧文を配する。	外面は縦方向のハケ調整。刻目はハケ状施文原体による。	外面はススけている。
12	〃	壺	—— (2.3) —— 4.8	上げ底の底部。	底部内面に指頭圧痕あり。	
13	ＳＫ18	〃	—— (6.0) 7.2 ——	胴部上端に１条のヘラ描沈線を配する。胴部外面には３～４条単位の下弦の重弧文を配す。	重弧文は鋭利な工具で施文している。	
14	〃	〃	12.8 (3.0) —— ——	口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。口頸間に１条のヘラ描沈線を配する。	内外面ヘラ磨きを施す。口頸間に外傾接合部を認める。	
15	〃	〃	15.0 (5.7) —— ——	頸部は直線的に立ち上がり、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。頸部下端にヘラ描沈線とその下に断面長方形の貼付突帯を配し、刻目を施す。	内外面ヘラ磨きを施す。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
16	ＳＫ18	壺	—— (16.4) 36.0 ——	胴部中位に最大径を有する。口頸間に３条の沈線を施し、沈線間に１条の貼付突帯を配する。沈線間と突帯上には棒状工具による刺突文あり。上胴部にも３条のヘラ描沈線を配し、沈線間にヘラ、竹管、棒状の３種類の刺突文を配する。	ハケ調整の下地の上をヘラ磨き。	
17	〃	〃	29.8 (16.0) —— ——	胴部中位に最大径を有する。頸胴間に２条のヘラ描沈線を有する。	胴部外面は横方向のヘラ磨き。内面は指頭圧痕あり。断面に２ヶ所外傾接合痕を認める。	
18	〃	甕	22.0 (14.5) 19.3 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部はやや丸味をおびた面をなし、全面に刻目を施す。	口唇部、口縁部外面は横方向の強いナデ調整。外面は縦方向のハケ調整。刻目は棒状工具による。	
19	〃	〃	—— (7.5) —— 7.5	上げ底状の底部。	底部周縁部は横方向の強いナデ調整。	外面は変色し、ススけている。焼成後穿孔。
20	〃	〃	—— (6.0) —— 7.8	平底の底部。	外面縦方向のハケ調整。	外面ススけている。
21	ＳＫ19	壺	14.5 (13.2) 29.6 ——	胴部中位に最大径を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。口頸間及び頸胴間に１条のヘラ描沈線。	外面はハケ調整の後ヘラ磨きを施す。	
22	〃	〃	—— (8.5) 25.5 ——	頸胴間に削り出し突帯あり。	突帯は上下をハケ状原体で強くナデることによってできたもの。ハケ調整後全面横方向のヘラ磨きを施す。	
23	〃	〃	13.4 (6.7) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなし、わずかに下方に肥厚する。	外面横方向のヘラ磨き。	
24	〃	〃	—— (14.0) 38.8 ——	胴部中位に最大径を有する。上端と上胴部に３条のヘラ描沈線を配する。	上胴部縦方向、中位左上りのハケ調整。	
25	〃	〃	—— (7.0) —— 8.0	平底の底部で、内湾気味に立ち上がる。	縦方向のハケ調整後、横方向のヘラ磨きを施す。	
26	〃	甕	18.5 (5.5) 16.8 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配し、その間に竹管を刺突する。	刻目はヘラ状原体による。外面は右下り、内面は横方向のハケ調整。	
27	〃	〃	24.2 (11.5) 23.5 ——	内湾気味に立ち上がる。口縁部外面に断面方形の粘土帯を粘付する。	外面左上りのハケ調整あり。口縁部内面に指頭圧痕あり。	擬朝鮮系無文土器。
28	〃	〃	23.4 (7.0) 21.1 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。	外面は左上り、口縁部内面は横方向のハケ調整。胴部内面ナデ調整。	外面ススけている。
29	〃	〃	25.6 (6.0) 26.0 ——	口縁部は如意形に外反し胴部が張り出している。口唇部は面をなし、全面に刻目。頸部に２条のヘラ描沈線を施す。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。沈線以下は左上りのハケ調整。	外面施文部以外はススけている。
30	〃	〃	26.0 (15.0) 24.5 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。	外面は左上りのハケ調整。口縁部内面横方向のハケ調整(右まわり。)刻目は棒状工具による。	胴部下半は、火をうけて変色し、剥離が著しい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	ＳＫ19	甕	23.0 (16.0) 22.2 ——	口縁部は如意形に外反し、胴部がやや張り出している。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。胴部外面は左上りのハケ調整。刻目はヘラ状原体による。	胴部外面は全面がススけており、下位は火をうけて変色している。
32	〃	〃	—— (15.0) —— 8.5	平底の底部。	外面は縦及び左上りのハケ調整。	外面は全体が赤く変色し、ススけている。
33	〃	〃	—— (7.0) —— 8.2	わずかに上げ底の底部。	内外面剥離が著しく、調整観察不能。	〃
34	〃	〃	—— (12.0) —— 7.5	平底の底部。	左上りのハケ調整で、１度に５cm以上をナデておいて、右まわりで、上→下へ反復している。	外面全面ススけている。内面は底部より２cm上からススけている。
35	〃	鉢	18.0 12.5 —— 8.5	内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。底部はわずかに外方に出る。	体部外面右下りのヘラ磨き。下部は縦方向のハケ調整のみである。内面はナデ調整。	
36	ＳＤ１	壺	18.0 (14.0) 25.4 ——	発達した胴部から頸部に向ってしまり、口縁部は丸く外反する。口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
37	〃	〃	16.5 (4.0) —— ——	口頸間にしっかりした段を有し、その下に１条のヘラ描沈線を配する。口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向のハケ調整後弱いヘラ磨きをかけたと思われる。内面横方向のヘラ磨き。	
38	〃	〃	25.5 (3.5) —— ——	口頸間に弱い段を有する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	
39	〃	〃	14.5 (5.0) —— ——	直線的に立ち上がる頸部から口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。頸部外面右下りのハケ調整。	
40	〃	〃	5.5 8.7 8.5 4.3	最大径は胴部中位にある。頸胴間にヘラ描沈線を配する。口縁部は近く外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面ヘラ磨き。胴部内面に指頭圧痕が残る。	
41	〃	〃	24.3 (3.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	外面は右下りのヘラ磨き。内面は横方向のハケ調整。	
42	〃	〃	16.8 (5.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	頸部内外面に指頭圧痕がみられる。口縁部内外面は横方向のヘラ磨き。	
43	〃	〃	14.0 (3.5) —— ——	〃	内外面横方向のナデ調整。	
44	〃	〃	16.3 (4.8) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部はヘラで面取っている。	内外面ナデ調整。	
45	〃	〃	34.8 (6.5) —— ——	口頸間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	口縁部外面は横方向のヘラ磨き。段部は、粘土帯接合時に生じたもの。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
46	ＳＤ１	壺	—— (16.5) 32.0 ——	最大径を上胴部に有する。	外面はハケ調整の後に、横方向のヘラ磨き。	
47	〃	〃	—— (9.5) —— ——	胴部上端に段を有する。段の下と、胴部中位にヘラ描沈線を施し、沈線間に斜格子文を配する。	外面はヘラ磨き。	
48	〃	〃	—— (8.0) 29.0 ——	上胴部に１条のヘラ描沈線。	上半は、横方向のヘラ磨き。下半は右下りのハケ調整。内面に指頭圧痕あり。	外面下半はススけている。
49	〃	〃	17.0 (10.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部に１条のヘラ描沈線を引き、刻目を配する。頸胴間に削り出し突帯を有し、沈線、刻目を配する。	口縁部外面右下りのヘラ磨きを施す。	
50	〃	〃	—— (4.5) 31.4 ——	胴部外面に0.7㎝幅の削り出し突帯を有する。	外面はヘラ磨きが施されていたと考えられるが、器表が荒れており、下地のハケがわずかに残っている。	
51	〃	〃	32.8 (4.5) —— ——	直線的に立ち上がる頸部から、なめらかに外反する口縁部。口唇部は面をなし、わずかに下に肥厚する。頸部に１条のヘラ描沈線と、刺突文を配する。	外面は縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施す。	内面に粍痕あり。
52	〃	〃	12.8 (7.5) —— ——	口縁部は頸部からなめらかに外反する。口唇部は面をなす。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は縦方向のハケ調整。口縁部内外面横方向のナデ調整。	
53	〃	〃	17.0 (7.5) —— ——	口縁部は直線的に外反し、端部は面をなす。頸部外面に削り出し突帯を有し、４条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面横方向のヘラ磨きを施す。	
54	〃	〃	15.3 (6.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。頸部に扁平な貼付突帯を有し、１条のヘラ描沈線を配する。	〃	
55	〃	〃	14.5 (5.0) —— ——	直線気味に立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反する。頸部に２条のヘラ描沈線を配し、沈線間に刻目を配する。	〃	
56	〃	〃	15.4 (4.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部外面に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面は、木理の粗いハケ調整。	
57	〃	〃	17.0 (5.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部には１条のヘラ描沈線を配し、その上に６～７個単位の刻目を間隔をおいて繰返す。	不　　明。	
58	〃	〃	22.4 (2.2) —— ——	口唇部は、わずかに上方に拡張され、櫛描簾状文を配する。	口唇部は上端をつまみ上げて横方向に強くなでる。	
59	〃	〃	19.0 (4.5) —— ——	口縁部は強く外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。頸部外面は指頭圧により、ヒダ状となす。その下に３条のヘラ描沈線を配する。	内面に指頭圧痕あり。	
60	〃	〃	20.6 (6.0) —— ——	なめらかに外反する頸部から口縁部は強く屈曲する。口縁部外面に2.5㎝幅の扁平な粘土帯を貼付。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。	頸部外面はススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
61	ＳＤ１	壺	—— (7.0) —— 9.0	円盤状の底部を有する。	横及び右下りのヘラ磨きあり。	
62	〃	〃	—— (7.0) —— 9.4	〃	内外面ナデ調整。内面には、指頭圧痕が残る。	
63	〃	〃	—— (6.5) —— 14.0	きわめて厚い底部である。	外面は、縦方向のハケ調整を施す。	
64	〃	〃	—— (5.0) —— 6.5	平底の底部。	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削りを施す。	外面、外底がススけている。
65	〃	〃	—— (7.0) —— 10.0	わずかに上げ底状の底部を有する。	外面は、縦及び右下りのハケ調整。	内面に有機物の付着がみられる。
66	〃	〃	—— (5.4) —— 8.0	平底の底部。	縦方向のハケ調整後に横方向のヘラ磨きを施す。底部側面は横方向のナデ調整。	
67	〃	〃	—— (5.5) —— 8.5	厚いつくりの底部である。	外面は右下りのハケ調整。内面に指頭圧痕がみられる。	外面がススけている。外底、が環状にススけている。
68	〃	〃	—— (5.3) —— 9.3	〃	外面はハケ調整後にヘラ磨きを施している。	外面がススけている。
69	〃	〃	—— (4.5) —— 9.5	平底の底部。	底部側面を横方向に強くナデる。	
70	〃	甕	—— (2.8) —— ——	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は面取っている。端部より下に断面三角形の刻目突帯を有する。	突帯の上下をナデ調整。	
71	〃	〃	—— (2.0) —— ——	口縁部はわずかに外反し、口唇部外面端部にのみ刻目を施す。	刻目はヘラ状工具による。	
72	〃	〃	30.6 (4.0) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
73	〃	〃	21.0 (13.0) 19.5 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整がわずかに観察できる。	
74	〃	〃	22.4 (13.5) 21.0 ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は面をなし、部分的に下に肥厚する。	口縁部外面横方向のナデ調整。	外面は頸部以下全面がススけている。
75	〃	〃	18.0 (9.0) 16.8 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	外面は、胴部中位以下が全面にススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
76	ＳＤ１	甕	21.6 (4.5) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部には全面刻目を施す。	外面は全面右下りのハケ調整を施す。口縁部外面横方向のナデ調整。	外面は上胴部以外がススけている。
77	〃	〃	22.6 (6.0) 21.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸味をおびており、下端にのみ刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下り、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。	
78	〃	〃	22.4 (5.5) 23.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸味をおびており、下方に肥厚する。口唇部全面に刻目を施す。最大径が上胴部にある。頸部に双線を施す。	頸部外面縦方向、上胴部外面横方向のハケ調整。	
79	〃	〃	23.0 (8.0) 22.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は縦方向のハケ調整。	外面は沈線以下が全面ススけている。
80	〃	〃	22.0 (10.0) 21.8 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下りのハケ調整。	
81	〃	〃	20.0 (7.0) 18.0 ——	口縁部は強く外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部外面に２条のヘラ描沈線を配する。	〃	
82	〃	〃	14.5 (5.0) 13.2 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に双線を施す。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
83	〃	〃	21.4 (4.0) 20.1 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。頸部に双線を施す。	外面は右下りのハケ調整。口縁部内面横方向のハケ調整。	
84	〃	〃	18.0 (5.0) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ下方に肥厚する。頸部に３条のヘラ描沈線を有する。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。	
85	〃	〃	20.6 (8.0) 20.4 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし全面に刻目を刻す。頸部に双線を有する。	外面は右下り、口縁部内面は横方向のハケ調整。	
86	〃	〃	19.5 (12.5) 17.9 ——	口縁部は強く屈曲する。口唇部は面をなし、下半に刻目を配す。頸部外面に２条の沈線を有する。	口縁部外面横方向のナデ調整。上胴部は横方向、中位以下は右下りのハケ調整。	
87	〃	〃	24.0 (5.5) —— ——	直線的に立ち上がり、口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、下半に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内面は横方向、胴部外面は右下りのハケ調整を施す。	
88	〃	〃	20.0 (9.5) 18.5 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。頸部外面に１条のヘラ描沈線を配する。	外面右下りのハケ調整。	外面胴部中位以下が全面ススけている。
89	〃	〃	25.0 (7.5) 24.2 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内面横方向、胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
90	〃	〃	24.4 (7.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部は、細まっているが、全面に刻目を施す。頸部外面に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面は横方向のナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
91	ＳＤ１	甕	20.2 (9.5) 21.0 ——	最大径を胴部に有する。口縁部は直線的に外方に伸びる。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面は横方向、胴部外面は右下りのハケ調整を施す。	
92	〃	〃	—— (15.0) 24.0 ——	頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下りのハケ調整を施す。	
93	〃	〃	25.0 (16.0) 26.4 ——	最大径を胴部に有する。口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	胴部外面に右下りのハケ調整を施す。	
94	〃	〃	31.0 (4.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に双線を２帯配する。	口縁部外面は、横方向のナデ調整。	
95	〃	〃	25.0 (19.3) 29.4 ——	口径に対して、胴径が、極端に大きい。口縁部は如意形に外反し、口唇部は凹状をなす。頸部に１条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下りのハケ調整。内面には指頭圧痕が顕著。口唇部は下端をつまみ出して横方向に強くナデている。	
96	〃	〃	—— (5.5) —— 8.0	平底の底部。	外面は縦方向のハケ調整。	外面は全面ススける。底部外面周縁部が環状にススける。
97	〃	〃	—— (3.5) —— 7.5	〃	外面は縦方向のハケ調整、内面に指頭圧痕あり。	
98	〃	〃	—— (5.0) —— 7.5	〃	〃	
99	〃	〃	26.4 (8.5) 25.8 ——	口縁部は直線的に外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に双線を配する。	双線以下は、縦及び右下りのハケ調整後にナデている。口縁部折り曲げの際の指頭圧痕が内外に残る。	
100	〃	高杯	25.0 (3.0) —— ——	口縁部は、杯底部よりなめらかに立ち上がり、口縁部下端に１条の凹線を配する。口縁端部は内側に肥厚する。	不　　明。	搬入品である。
101	〃	〃	24.6 (4.0) —— ——	口縁部は杯底部より稜をなして屈曲し、直線的に外反する。口唇部は面をなす。	〃	
102	〃	鉢	16.0 (4.0) —— ——	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は面をなす。	〃	
103	〃	〃	16.6 (3.5) —— ——	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	〃	
104	〃	〃	16.0 (3.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口縁部外面に２条の凹線を配する。端部は丸くおさめる。	〃	
105	〃	蓋	22.8 (2.3) —— ——	わずかに外反した「ハ」の字状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。	外面は、縦及び右下りのハケ調整。口縁部内外面は横方向のナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
106	ＳＤ１	蓋	22.0 (2.3) —— ——	「ハ」の字状を呈し、端部付近でわずかに外方に屈曲する。口唇部は丸くおさめる。		
107	〃	〃	22.0 (5.4) —— ——	「ハ」の字状を呈する。 口唇部は面をなす。	内外面横方向のヘラ磨きを施す。	
108	〃	〃	22.3 (4.0) —— ——	〃	〃	口縁部内面が1.5cm幅でススけている。
109	〃	〃	—— (9.5) —— 5.4	頂部は凹状をなし、笠部は「ハ」の字状に下降する。	笠部上半に縦方向のハケ調整を認める。	
110	〃	〃	—— (6.8) —— 6.4	頂部はほぼ平担な面をなす。笠部は「ハ」の字状に下降。	内面に横方向の丁寧なヘラ磨きが見られる。	
111	ＳＸ１	壺	14.3 (7.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面にわずかに縦方向のハケ調整を認める。	
112	〃	〃	10.6 (11.5) —— ——	大きくふくらむ胴部で、口頸部は小さい。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。頸部外面に５条のヘラ描沈線を配する。	外面縦方向のハケ調整。	
113	〃	〃	14.0 (2.0) —— ——	なめらかに外反する口縁部で、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面に横方向のナデ調整。ナデより下は縦方向のハケ調整を施す。	
114	〃	〃	—— (4.8) —— ——	頸部外面に６条のヘラ描沈線と３条の刻目貼付突帯を有する。	外面は縦方向のハケ調整。	
115	〃	〃	—— (11.0) 13.0 ——	頸部に４条、胴部に５条のヘラ描沈線を有する。	外面は縦方向のハケ調整。	
116	〃	〃	17.1 (3.5) —— ——	口縁部はなめらかに大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。	
117	〃	〃	13.8 (7.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。頸部には３条のヘラ描沈線がみられる。	内面は左まわりにハケ調整を不定方向に施す。外面は、縦方向のハケ調整。	
118	〃	〃	—— (5.0) —— 9.0	底部の円盤が剥離している。	不　　明。	
119	〃	〃	—— (6.5) —— 8.0	平底の底部。	外面は縦方向のハケ調整。外面は指頭圧痕あり。	外面は、火を受けて変色し、ススけている。
120	〃	〃	—— (7.5) —— 9.5	〃	外面は木理の粗い縦方向のハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
121	ＳＸ１	壺	15.4 31.8 22.5 8.0	口縁部はなめらかに外反し、胴長である。口唇部は丸くおさめる。頸部に５条、胴部に４条のヘラ描沈線を配する。	底部から頸部下端まで、５段成形である。粘土帯の接合部で外面のハケ調整の方向が変わっている。口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
122	〃	甕	21.0 (3.5) —— ——	口縁部はなめらかに大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
123	〃	〃	23.0 (4.0) —— ——	口縁部は外方に強く屈曲する。口唇部に刻目があったと思われるが、残りが悪い。	〃	
124	〃	〃	16.5 (17.5) 14.0 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に棒状工具による１条の沈線あり。	内外面に指頭圧痕が多く残る。	
125	〃	〃	22.0 (3.5) —— ——	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	内外面ナデ調整。	
126	〃	〃	—— (5.2) 17.0 ——	口縁部は如意形に外反する。頸部外面に３条のヘラ描沈線を配する。	内面に指頭圧痕あり。	
127	〃	〃	20.2 (8.5) 18.1 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に３条のヘラ描沈線。	口縁部内外面横方向のナデ調整。外面は沈線以下に不定方向の木理の粗いハケ調整。	外面は全面にススが付着。
128	〃	〃	21.5 (7.0) 22.0 ——	口縁部は、わずかに外反する。口唇部は丸くおさめ細い刻目を配する。頸部に３条のヘラ描沈線を有する。	外面は右下りのハケ調整を施す。内面は横方向のナデ調整。	
129	〃	〃	22.0 (14.0) 21.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし全面に刻目を施す。頸部に４条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。胴部外面は上部が右上り、中位以下は右下りのハケ調整。	外面の沈線部以外は全面ススけている。
130	〃	〃	20.7 (8.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に太いヘラ描沈線を４条配する。	胴部外面は右下りのハケ調整を施す。	
131	〃	〃	20.2 (7.2) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を配する。頸部に５条の沈線を配する。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
132	〃	〃	28.9 (18.0) —— ——	口縁部はなめらかに大きく外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線あり。	外面は沈線以下縦方向のハケ調整。	
133	〃	〃	21.3 (7.0) 20.5 ——	口縁部は直線的に強く外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に４条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。	
134	〃	〃	18.7 (4.5) —— ——	内湾して立ち上がり、口縁部に太い突帯を貼付し、逆Ｌ字口縁を呈する。頸部に５条のヘラ描沈線を配する。	外面にわずかに縦方向のハケ調整を施す。	
135	〃	〃	17.5 (7.5) 16.6 ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に２条１帯の双線を２帯配する。	口縁部外面及び、胴部内面に指頭圧痕あり。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
136	ＳＸ１	甕	18.0 (11.0) 16.4 ――	口縁部はなめらかに大きく外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。頸部に双線を２帯配する。	双線間の断面はカマボコ状をなしていない。	
137	〃	〃	26.0 (6.3) 24.0 ――	逆Ｌ字口縁で、端部はやや尖り気味。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下りのハケ調整を施す。	外面は全面ススけている。
138	〃	〃	20.3 (12.0) ―― ――	内湾気味に立ち上がり、口縁部外面には断面三角の太い突帯を配する。頸部には、６条ずつのヘラ描沈線を施文し、その間に２～３列の列点文を配する。	内面は横方向外面は縦方向のハケ調整。	〃
139	〃	鉢	8.5 4.5 ―― 6.5	底部からわずかに内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	底部内面に指頭圧痕あり。	
140	〃	〃	21.0 (7.5) 19.8 ――	内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。口縁部に把手を有する。	不　　明。	
141	〃	〃	8.7 12.3 11.2 7.0	上胴部で「く」の字状に屈曲する。底部は台形状を呈する。	屈曲部より上は、横方向のナデ調整。内面には指頭圧痕が顕著に残る。底部は上底になっているが、充填していた粘土が剥離したものと考えられる。	
142	〃	蓋	―― (5.0) ―― 5.6	頂部は平担面をなす。笠部はなめらかに外反しながら下降する。	外面は縦方向のハケ調整を施す。	
143	〃	〃	―― (6.5) ―― 7.0	頂部は環状にくぼんでいる。笠部は内湾気味に下降する。	〃	
144	〃	〃	21.5 (3.5) ―― ――	「ハ」の字状を呈する笠部である。口唇部は丸くおさめる。	〃	
145	〃	〃	24.0 9.9 ―― 7.0	頂部は大きく凹状をなす。笠部は一旦、「ハ」の字状を呈するが、下半で大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。	外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。	口縁部内面がススけている。
146	ＳＸ２	壺	17.5 (33.5) 32.0 ――	長い大きな胴部から、直線的に頸部が立ち上がり、口縁部はなめらかに外反する。口唇部には２条の凹線を配する。	外面は縦方向のハケ調整。内面は指頭によるナデ調整。	
147	〃	甕	20.0 (1.2) ―― ――	口唇部は丸くおさめ刻目を配する。	外面ハケ調整。	
148	〃	壺	18.2 (1.2) ―― ――	口縁部は大きく外反し、端部をやや肥厚させる。口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
149	〃	〃	15.0 (2.0) ―― ――	口縁部はなめらかに外反する。口唇部は幅広い面をなし右上りの刻目を配する。やや下って、１条の微隆起帯を貼付する。		
150	ＳＤ２	杯	15.4 4.7 ―― 10.2	底部から強く屈曲して、わずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。外方にふんばった高台がつく。	底部外面にヘラ削り（左方向）。内底にシッタ痕あり。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
151	ＳＤ２	高杯	—— (9.8) —— 11.4	杯部は椀状を呈する。脚部はなめらかに外方に広がり、端部は折り曲げている。	外面は横ナデ調整。杯底部内面は不定方向の指ナデ調整。	
152	ＳＤ１	壺	7.0 10.4 8.5 4.8	最大径を胴部中位に有する。口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に２条、胴部に１条の沈線を配する。		
153	〃	〃	15.3 (9.0) —— ——	口頸間に段部を有し、且つ１条のヘラ描沈線を配する。口縁部は一旦直線的に立ち上がった後に外反する。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。外面は右下りのハケ調整後ヘラ磨き。内面には指頭圧痕が顕著である。	
154	〃	〃	15.4 (6.0) —— ——	口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさめ、１条のヘラ描沈線を配する。口頸間に断面三角形の突帯を貼付し、上下から刺突文を施す。	突帯下に有軸羽状文を縦に配する。内外面横方向のナデ調整。	
155	〃	〃	16.7 (5.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。頸部に６条の沈線を配する。	口唇部は横方向のナデ調整。口縁部外面に指頭圧痕あり。	
156	〃	〃	17.0 (5.0) —— ——	口縁部は強く外反し、口唇部は面をなす。口頸間に３条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
157	〃	〃	12.5 (7.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。頸部に３条のヘラ描沈線。	口唇部及び口縁端部外面は横方向のナデ調整。それ以下は縦方向のハケ調整。	
158	〃	甕	19.5 (19.0) 20.0 ——	口縁部は如意形に外反し、端部が下方に肥厚する。口唇部は丸くおさめる。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面は横方向のナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整。	外面は全面ススけている。
159	〃	〃	19.7 (6.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、逆Ｌ字口縁を有する。頸部に１条の棒描沈線を配する。口縁部に数ヶ所わずかに刻目を認める。	外面は縦方向のハケ調整。口縁部内面に指頭圧痕あり。	外面はススけている。
160	〃	鉢	21.0 (6.5) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面横方向のヘラ磨き。	
161	〃	壺	27.5 (9.5) —— ——	口縁部は大きく外反し、厚くつくられた口唇部は凹状をなし、上・下に刻目を配する。頸部外面に４条１帯の櫛描直線文を５帯配する。	口縁部内面は上から刺突文、ヘラ描状線、刺突文、櫛描直線文、櫛描波状文を配する。	
162	〃	〃	18.7 (1.8) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は凹状をなし、下方にわずかに肥厚する。また斜格子文を配する。	口縁部内外面ナデ調整。	
163	〃	〃	16.7 (4.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、外面に幅1.2cmの粘土帯を貼付する。	口縁部外面に強い指頭圧痕あり。	
164	〃	〃	—— (22.5) 6.5 ——	肩のはる器形である。頸部下端に円形浮文を貼付し、刺突する。肩部に単位不明瞭な櫛描直線文を引き、下にヘラ状工具によると思われるもので、縦長の圧痕を配列する。		
165	〃	〃	18.0 (4.0) —— ——	口縁部は直線的に立ち上がり、外面に2.7cm幅の粘土帯を貼付する。口唇部は広い面をなす。	口縁部外面に指頭圧痕がある。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
166	ＳＤ１	壺	9.6 (5.3) 12.6 ――	球形を呈する胴部から口縁部は、強く近く外反し、口唇部は凹状をなす。	口唇部及び口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
167	〃	〃	15.1 (6.0) ―― ――	口縁部は近く外反する。口唇部には３条の凹線文を施し、部分的に列点文を配する。頸部には太い凹線文を配し、その上にヘラ状工具による長い列点文を施す。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。	
168	〃	〃	18.4 (4.0) ―― ――	口縁部は大きく外反し、口辰部は上下に拡張し、３条の凹線文を配する。	内外面横方向の強いナデ調整。	
169	〃	〃	22.0 (3.5) ―― ――	口縁部は大きく外反する。外面に粘土帯を貼付し、口唇部を下方に拡張する。口唇部に２条の凹線文を配する。	口縁部内外面横方向に強くナデる。	
170	〃	〃	26.4 (3.0) ―― ――	口縁部は大きく外反し、口唇部を上下に拡張し、４条の凹線文を配する。	内外面横方向のナデ調整。	
171	〃	〃	23.0 (2.5) ―― ――	口縁部は大きく外反し、外面に粘土帯を貼付して、口唇部を上下に拡張し、３条の凹線文を配する。	〃	
172	〃	〃	―― (7.0) 28.9 ――	無頸壺と考えられる。胴部で「く」の字に屈曲する。外面に、櫛描直線文と波状文を２帯ずつ配する。	内面は指頭による横方向のナデ調整。	搬入品である。
173	〃	甕	13.2 (3.5) ―― ――	口縁部は「く」の字に屈曲し、口唇部は上方に拡張し、２条の凹線文を配する。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。	
174	〃	高杯	23.2 (3.5) ―― ――	口縁部は垂直に立ち上がり、端部は平坦面をなす。外面には４条の凹線文を配する。	口縁部内面は横方向のナデ調整。杯部内面はヘラ磨きを施す。	
175	〃	〃	29.0 (8.0) ―― ――	口縁部は垂直に立ち上がり、端部は内外に肥厚し凹状を呈する。外面に２条の凹線文を配する。	杯底部外面は、交互に方向を違えたヘラ磨き。内面はハケ調整後部分的に横方向のヘラ磨き。	
176	〃	〃	10.5 (3.5) ―― ――	「ハ」の字状を呈する脚部で端部に２条の凹線文を配し、上下にわずかに肥厚する。	端部内面は横方向の強いナデ調整を施す。それより上はヘラ削り（右→左）。	
177	〃	壺	21.0 (3.0) ―― ――	口縁部は大きく下垂する。外面に５条の凹線文を配し、２コ１対の竹管刺突の円形浮文を配する。		搬入品である。
178	〃	〃	17.5 (7.0) ―― ――	口縁部はなめらかに外反し口唇部は面をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。外面頸部以下縦方向のハケ調整。	
179	〃	〃	17.7 (8.0) ―― ――	丸く張った上胴部から、短く直線的に立ち上がる頸部がつき、口縁部は直線的に外反する。口唇部は凹状をなす。	外面は全面横方向のナデ調整を施す。	
180	〃	〃	14.0 (7.5) ―― ――	丸く張った上胴部から、口縁部は強く外反する。口唇部は上下に拡張する。	口縁部内外面及び口唇部は横方向の強いナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
181	ＳＤ１	壺	16.6 (16.0) 27.0 ——	丸く張った上胴部から、なめらかに外反する口頸部を有する。口縁部外面には扁平な粘土帯を貼付しており、下端に列点文を配する。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
182	〃	〃	11.2 (23.0) 17.8 ——	最大径を胴部中位に有する。口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は面をなす。	外面は頸部付近が縦方向、上胴部は横方向、胴部下半は縦方向のハケ調整。内面は横方向のハケ調整。	胴部内面に３ヶ所成形痕を認める。
183	〃	〃	15.4 (11.5) 24.0 ——	球形の上胴部から、垂直に立ち上がる頸部がつき、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。	胴部外面は横方向の平行叩きを施し、その上を縦方向にハケ調整。内面は頸部付近が横方向のハケ調整。それ以下は指頭による縦方向のナデ調整。	
184	〃	〃	13.8 (4.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、端部でやや肥厚する。口唇部は面をなす。	内外面横方向のナデ調整。	
185	〃	〃	12.5 (7.0) —— ——	直線的に外反する口縁部である。口唇部は面をなす。	口唇部及び端部外面は横方向の強いナデ調整。それより下は縦方向のハケ調整。	
186	〃	〃	10.8 (4.6) —— ——	口縁部は頸部からなめらかに外反する。端部はやや下方に肥厚させ、口唇部はわずかに凹状をなす。	〃	
187	〃	〃	15.6 (8.4) —— ——	近く直線的に立ち上がる。頸部から、口縁部はなめらかに外反する。端部は欠損している。	極めて厚いつくりである。外面は縦方向のハケ調整。	
188	〃	〃	15.7 (6.5) —— ——	直線的に外反する口縁部で、端部は下方に拡張され、口唇部は面をなす。	口縁端部内外面及び口唇部は横方向のナデ調整。外面ナデ以下は縦方向のハケ調整。	
189	〃	甕	14.0 (9.0) —— ——	口縁部は丸味をおびて「く」の字状に外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面頸部以下は横方向の平行叩き。	
190	〃	〃	19.0 (16.5) 19.0 ——	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は面をなす。	口唇部及び口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。胴部外面は叩きを施すが、上位は縦方向のハケ調整により消えている。内面は横方向のハケ調整。	
191	〃	〃	—— (6.5) —— 7.7	底部は厚いつくりである。	外面は右上りのハケ調整。	内面は、底部から少し上ったところからススけている。
192	〃	〃	12.8 24.8 19.3 5.0	口縁部は丸味をもって「く」の字状に外反する。最大径を上胴部に有する。	胴部外面は全面叩きをほどこす。下半は横方向、中位より上は右上りの叩きである。頸部下と底部付近は縦方向のハケ調整により、叩目を消している。内面は横方向のハケ調整。	また８帯の粘土によって成形。
193	〃	高杯	35.0 (3.5) —— ——	口縁部の立ち上がりは低く、口唇部は内外に肥厚し、２条の凹線文を配する。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
194	〃	〃	—— (9.5) —— 16.0	なめらかに外反する脚部で、端部は面をなす。裾部は４つの円孔の穿つ。	脚部内面上位にしぼり目あり。外面はヘラ磨き。	
195	〃	〃	21.3 15.7 —— 14.5	杯部は椀状を呈し、円盤充填である。脚部は筒状から「ハ」の字状に開く。裾部に４つの円孔を穿つ。	杯部口縁部は横方向の強いナデ調整。その他外面はヘラ磨き。筒状部内面にしぼり目あり。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
196	ＳＤ１	鉢	—— (4.0) —— 4.5	底部は指頭で外方につまみ出している。	外面は右上りの叩目あり。	製塩土器の可能性あり。
197	〃	〃	22.5 (9.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口縁部外面は凹状をなし、端部は尖る。	外面上半分は横位の、下半は横位及び右上りの叩きを施す。	断面より内傾接合であることが解る。
198	〃	〃	—— (10.2) —— 4.4	底部は台形状をなし、わずかに上げ底状である。胴部は直線的に外方に立ち上がる。	内外面に指頭圧痕が多く残る。	製塩土器の可能性あり。

第18表　Ｃ区遺構出土石器観察表

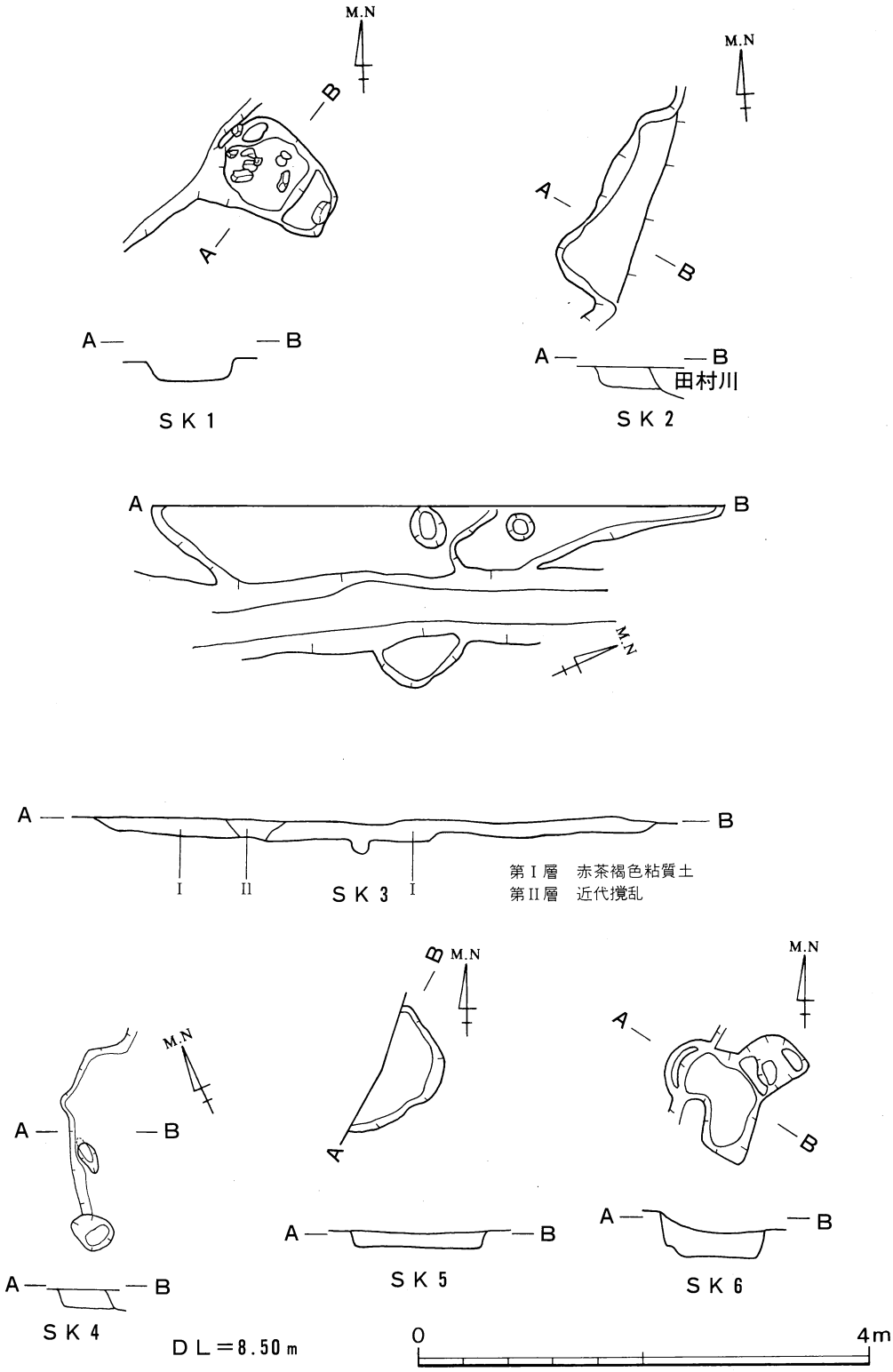
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
199	ＳＤ１	石斧	14.5 7.5 4.2 680.0	緑色岩	刃部から基端部にかけて大きく欠損している。基端部付近には調整時の潰痕が残るが、他は研磨され、擦痕が残る。	
200	〃	〃	13.8 6.3 4.4 595.0	〃	基端部は丸くおさめ、刃部に向ってわずかに広がっている。全面を丁寧に研磨している。	
201	ＳＸ１	〃	21.3 7.2 5.4 1190.0	〃	基端部は尖状をなし、刃部に向って幅を広げていく。比較的長身の石斧である。刃部は丁寧に研磨されているが、他はやや雑に仕上げている。	２つに割れ別々に出土したものが、接合できた。
202	ＳＤ３	〃	(9.3) 7.2 4.0 490.0	〃	太型蛤刃石斧の基部である。刃部と基端部を欠く。一方の主面は全く研磨されていない。	
203	ＳＤ１	〃	11.7 5.8 2.9 358.0	〃	基端部から刃部に向って幅を広げていく。刃部以外の研磨は雑であり、基端部は全く磨かれていない。刃部はかなり刃こぼれが見られる。	
204	ＳＸ１	〃	(10.3) 6.4 3.9 445.0	〃	基部の上半分が欠損している。基部よりも刃部幅がかなりせまい。刃部を敲打に利用しており、潰痕が見られる。	
205	ＳＤ４	〃	4.9 2.3 0.8 19.0	頁　岩	扁平片刃石斧である。刃部の一部が欠損しているのみでほぼ完形を保つ。全面丁寧に研磨されている。	
206	ＳＤ１	〃	22.9 10.1 5.7 2000.0	緑色岩	太型蛤刃石斧の未製品である。粗調整の段階で廃棄されたものと考えられる。	未製品。
207	ＳＤ４	〃	(4.5) 7.0 2.0 81.0	頁　岩	扁平片刃石斧の刃部である。全面を丁寧に研磨している。	
208	ＳＸ１	〃	12.5 6.8 2.2 158.0	結晶片岩	自然面と剥離面とからなる。刃部は外湾状をなす。基部は両側縁から柄部をつくり出している。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
209	ＳＤ１	石斧	14.1 6.2 1.3 186.0	結晶片岩	基端部は尖状をなし、刃部に向って広がり、刃部は外湾状をなす。一方の側縁部は、両面から階段状剥離を行う。	
210	〃	〃	3.3 (　1.7) 0.8 6.0	頁　岩	ノミ状の石斧で、両刃である。全面を丁寧に研磨している。	
211	〃	〃	9.2 (　1.9) 1.1 25.5	千枚岩	縦に欠損しており、全幅は不明である。扁平片刃石斧で刃部のみ研磨している。	
212	ＳＫ１	〃	(8.4) 1.6 1.5 44.0	泥　岩	方柱状片刃石斧であると考えられる。刃部は欠損している。基端部から刃部にかけてほとんど同じ幅である。全面丁寧に研磨されている。	
213	Ｐ２	〃	8.4 6.4 1.4 185.0	頁　岩	扁平長方形の打製石斧である。両長側縁共に叩石としても使用している。	
214	ＳＤ１	叩石	14.1 5.8 2.7 395.0	砂　岩	棒状の河原石を利用。全面に使用による潰痕がみられる。	
215	〃	〃	10.0 4.9 11.6 135.0	〃	自然面と剥離面とからなる。縁部及び自然面に使用による潰痕がみられる。	
216	〃	〃	11.6 7.6 2.4 340.0	〃	一方の長側縁以外の全縁部に使用による潰痕がみられる。	
217	〃	〃	10.0 8.2 3.7 445.0	〃	河原石をそのまま利用。中央部に使用による潰痕がみられる。	
218	〃	〃	10.4 10.4 3.6 590.0	〃	河原石をそのまま利用。両面中央部及び全縁部に使用による潰痕がみられる。	
219	ＳＸ１	〃	13.7 9.2 4.4 745.0	〃	両主面の中央部に敲打による凹みがある。側縁部の２ヶ所にも使用による潰痕がみられる。	
220	ＳＤ１	〃	9.8 7.5 2.2 205.0	〃	河原石を縦に割ったもので、自然面と剥離面とからなる。全縁部に使用による潰痕がある。	
221	ＳＤ３	〃	10.5 7.4 2.4 215.0	〃	〃	
222	ＳＸ２	〃	12.3 9.2 3.1 385.0	〃	河原石を縦に割ったものである。自然面と剥離面とからなり、一側縁以外の全縁部と、自然面中央部に使用による潰痕がある。	
223	〃	〃	12.0 9.7 1.9 390.0	〃	河原石を縦に割ったもので自然面と剥離面とからなる。全縁部に使用による潰痕が見られる。	

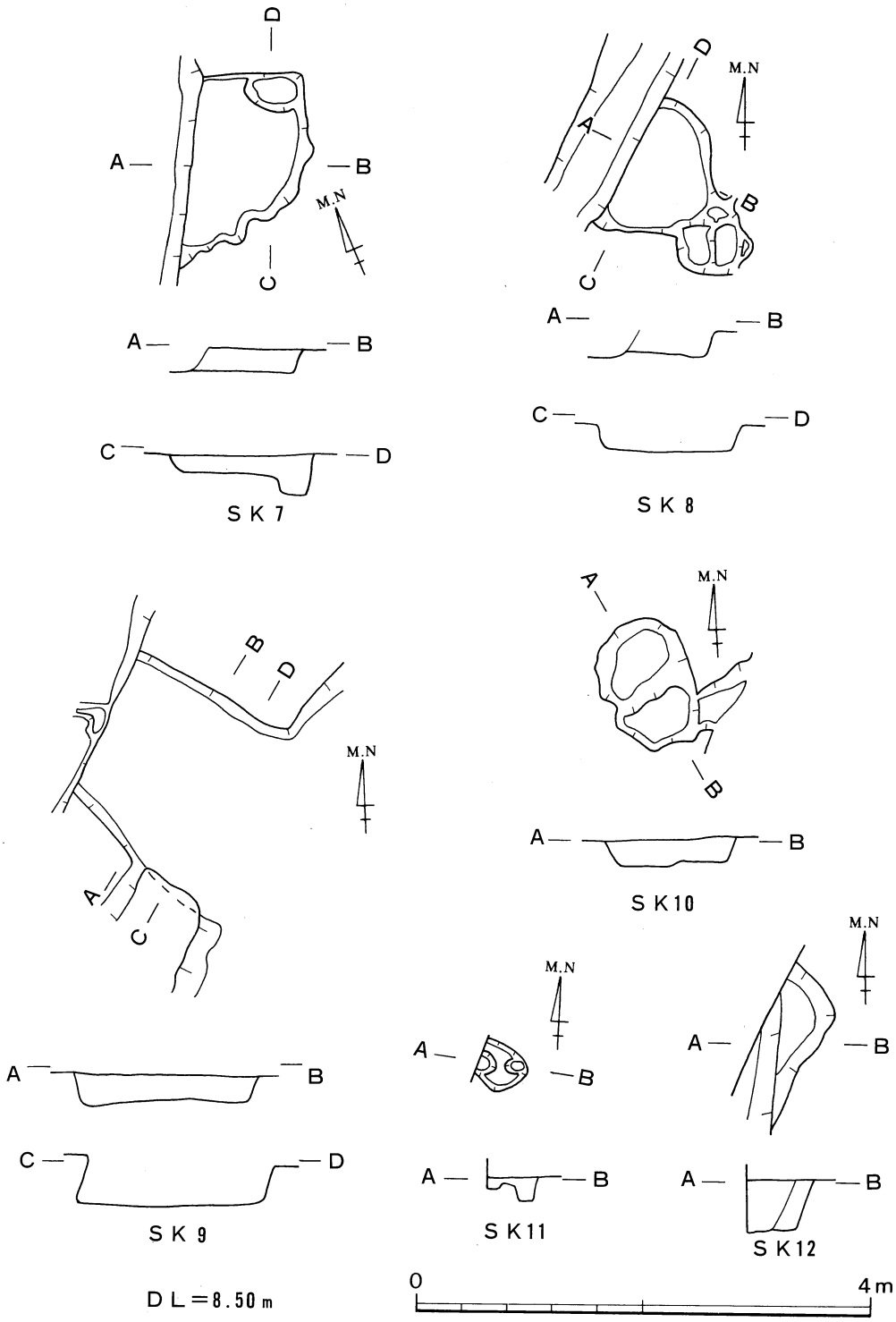
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
224	ＳＸ２	叩石	11.1 7.7 3.0 490.0	砂　岩	自然の河原石をそのまま利用している。両面の中央部に比較的弱い潰痕がみられる。	
225	ＳＫ14	〃	12.3 12.7 6.0 931.0	〃	一方の主面が大きく剝離しているが、もとは自然の河原石をそのまま利用していたことが、縁部の使用痕からうかがえる。自然面の中央部にも使用による潰痕が見られる。	剝離に際しては幅約１cmのクサビが使用されたものと考えられる。
226	ＳＤ１	〃	7.9 8.8 3.0 313.0	〃	約半分が欠損している。一方の長側縁に著しい潰痕が残る。	
227	ＳＫ18	〃	7.3 7.6 2.0 137.0	〃	自然面と剝離面とからなる。全縁部に使用による潰痕が見られる。	
228	ＳＤ１	〃	10.8 7.2 2.6 248.0	〃	〃	
229	ＳＫ12	〃	13.7 9.0 2.0 356.0	〃	自然面と剝離面とからなり、全縁部に使用による潰痕がみられる。また、自然面の中央部に弱い潰痕が見られる。	打割に際し長側縁にクサビを打ち込んだ痕跡あり。
230	ＳＫ１	〃	10.1 7.6 2.5 225.0	〃	自然面と剝離面とからなる。一部が欠損しているが、欠損部以外は全縁部に使用による潰痕が見られる。	
231	ＳＤ１	〃	13.4 9.7 2.7 400.0	〃	自然面と剝離面とからなる。長側縁の一部に使用による潰痕が見られる。	長側縁にクサビ状のものを打ち込んだ痕跡あり。
232	ＳＸ１	〃	10.5 7.4 2.5 225.0	〃	自然面と剝離面とからなる。縁部に使用による潰痕が見られる。	
233	ＳＤ１	〃	9.4 7.0 2.0 170.0	〃	自然面と剝離面とからなる。全縁部に使用による潰痕が見られる。自然面の中央部にも弱い潰痕がある。	
234	ＳＫ19	砥石	8.4 5.6 2.1 156.0	〃	使用面は１面である。	火を受けて赤く変色している。
235	ＳＤ３	〃	5.0 4.3 1.4 39.0	〃	小破片であり、使用面は２面である。	
236	ＳＫ18	〃	13.0 12.8 4.8 1020.0	〃	使用面は３面である。砥石として使用した後に、台石として利用したらしく、多くの打痕が見られる。	
237	ＳＤ１	〃	6.9 9.5 3.1 204.0	〃	小破片であり、使用面は１面である。	
238	〃	〃	14.4 9.7 2.2 515.0	〃	使用面は２面である。１面は磨製石斧用で、他の一面は磨製石鏃用である。	火を受けて赤く変色している。

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
239	ＳＤ１	石包丁	(　3.1) (　5.2) 0.6 15.0	千枚岩	刃部破片である。直線刃片刃である。刃部側の主面は丁寧に研磨されているが、他の面はほとんど研磨されていない。	
240	〃	〃	8.3 (　2.1) 0.7 15.0	〃	半月形直線刃石包丁の背部破片である。両面から２孔を穿っている。穿孔に際し打痕は全く見られない。丁寧に研磨されている。	
241	〃	〃	6.5 (　3.8) 0.7 25.5	粘板岩	直線刃片刃石包丁で、３分の２程が欠損している。穿孔に際しては全く打痕は見られない。全面丁寧に研磨されている。刃部には横方向の擦痕がみられる。	
242	〃	〃	(　7.4) 3.9 0.8 26.0	〃	長方形を呈し、直線刃片刃の石包丁である。２孔を両面から穿ち、穿孔に際して打痕は全く見られない。全面丁寧に研磨されている。	
243	〃	〃	8.4 4.6 0.8 55.0	〃	直線刃片刃石包丁である。扁平片刃石斧を石包丁に転用したものか、その逆かは不明であるが、刃部側の右側縁には片刃石斧の刃部がつくられている。穿孔は１つで両面からなされるが、穿孔に際して打痕が見られる。	
244	ＳＸ１	〃	(　9.6) (　4.0) 0.7 30.0	結晶片岩	直線刃両刃の石包丁である。平面形は台形状を呈するものと考えられる。平面から２孔を穿ち、穿孔に際しては全く打痕は見られない。	
245	ＳＸ２	〃	(　6.0) 3.8 0.7 24.0	粘板岩	約半分が欠損している。平面形は長方形を呈する。刃部は片刃で直線刃であるが、端部より2.5cmのところでやや内湾する。使用による磨耗から生じたものであろう。背部及び側縁部に敲打による潰痕が見られる。	
246	ＳＤ１	〃	(　3.6) (　4.2) 1.0 16.0	頁　岩	打製石包丁の側縁部破片である。側縁部上部に紐かけ用のくぼみがある。	
247	〃	〃	8.3 5.1 1.2 66.0	結晶片岩	両側縁部に紐かけ用のくぼみがみられる。刃部は明瞭でない。	石錘の可能性がある。
248	〃	〃	4.4 9.8 0.9 72.0	〃	平面形は長方形を呈する。刃部は片刃でわずかに内湾する。刃部のみ研磨されている。	
249	〃	石鏃	(　1.7) 1.4 0.2 0.4	サヌカイト	凹基式で、先端は欠損しているが二等辺三角形で、断面は極めて扁平である。	
250	ＳＫ１	〃	1.8 1.5 0.2 0.5	〃	凹基式で両面に剥離面が残る。刃部は両面から押圧剥離をする。断面は扁平で六角形を呈する。	
251	ＳＤ１	〃	2.3 1.6 0.5 1.4	〃	凹基式で、基端部は左右対象とならない。断面は平行四辺形を呈する。刃部は両面から押圧剥離をする。	
252	Ｐ１	〃	3.3 1.5 0.4 1.8	〃	凸基式有茎石鏃である。両面に剥離面を残す。刃部の一辺は両面から、他の一辺は片面から押圧剥離をする。断面は不定五角形を呈する。	
253	ＳＤ１	〃	6.6 7.5 4.6 5.0	頁　岩	磨製石鏃の未製品である。先端部に研磨による擦痕がみられる。	

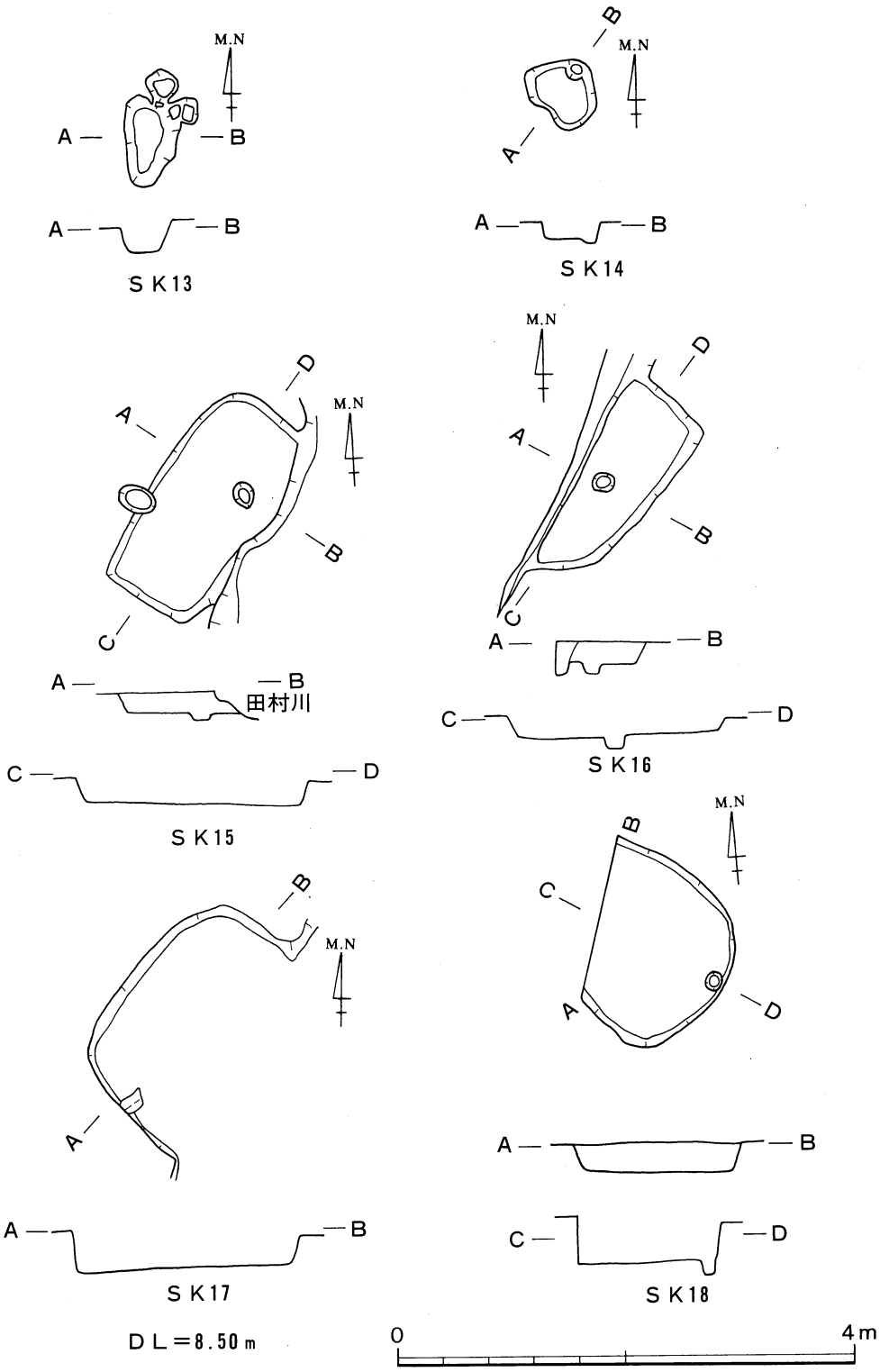
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
254	ＳＤ１	不明	(　8.5) (　1.8) 0.8 14.0	千枚岩	縦に大きく破損している。磨製石器の一部であるが、器種は不明である。	


M.N
A
B
SK1
SK2
田村川
SK3
第Ⅰ層　赤茶褐色粘質土
第Ⅱ層　近代攪乱
SK4
SK5
SK6
DL＝8.50m
0
4m

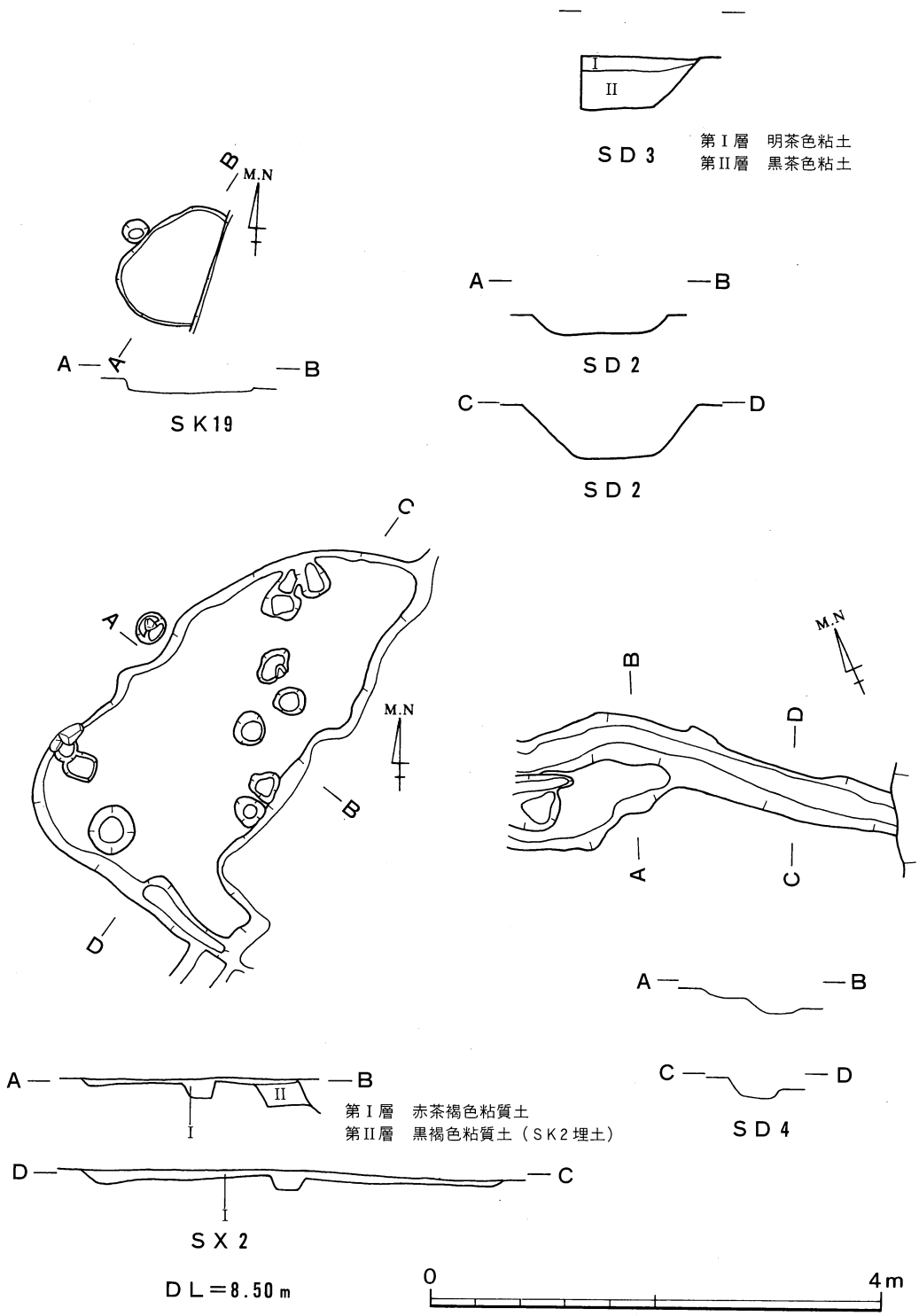
第67図　ＳＫ１～６


D
A
B
M.N
C
A
B
C
D
SK7
D
M.N
A
B
C
A
B
C
D
SK8
B
D
M.N
A
C
A
B
C
D
SK9
A
M.N
B
A
B
SK10
M.N
A
B
A
B
A
B
SK11
SK12
DL=8.50m
0
4m

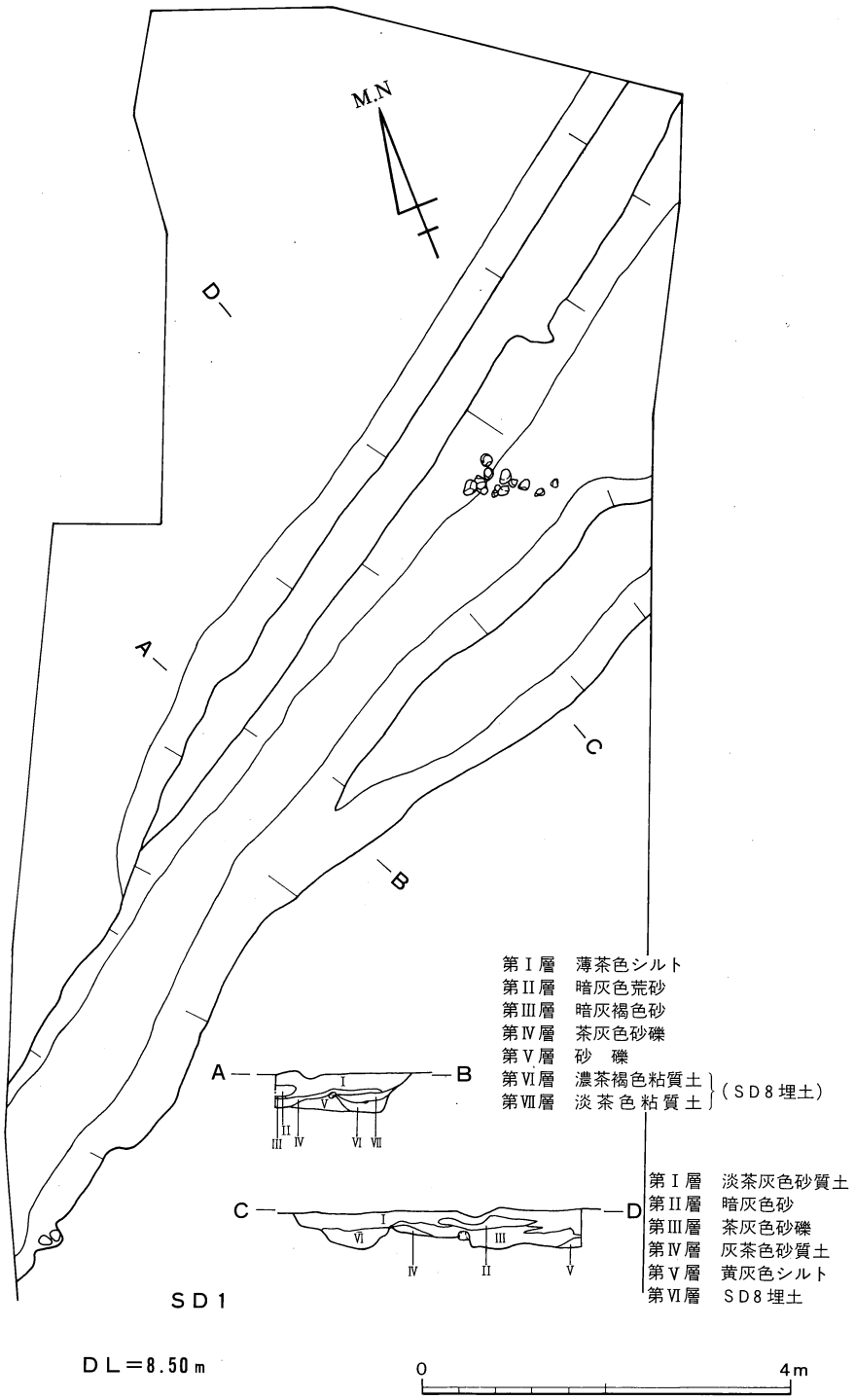
第68図　SK7～12



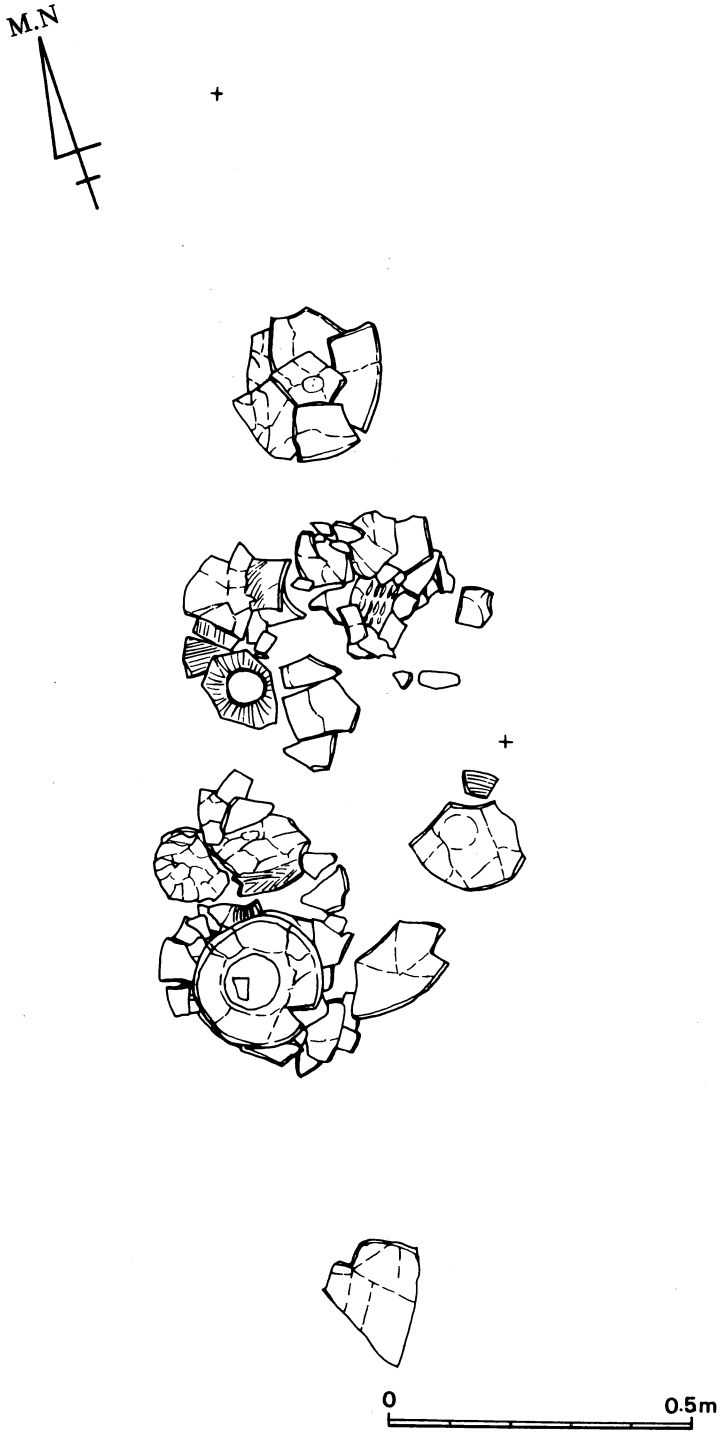
第69図　SK13～18



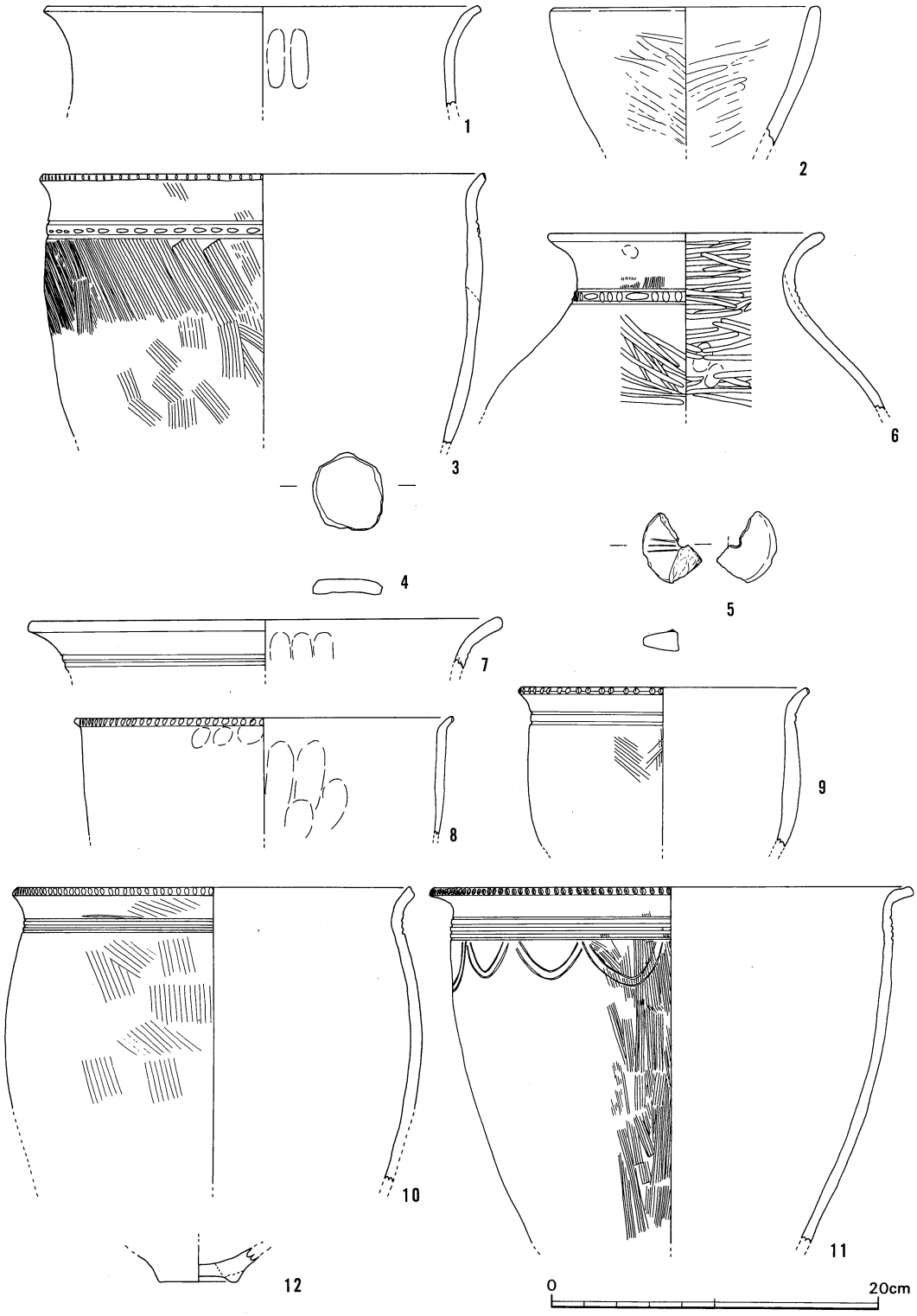
第70図　SK19、SD2～4、SX2


M.N
A
B
C
D
第Ⅰ層　薄茶色シルト
第Ⅱ層　暗灰色荒砂
第Ⅲ層　暗灰褐色砂
第Ⅳ層　茶灰色砂礫
第Ⅴ層　砂　礫
第Ⅵ層　濃茶褐色粘質土
第Ⅶ層　淡茶色粘質土
（SD8埋土）
第Ⅰ層　淡茶灰色砂質土
第Ⅱ層　暗灰色砂
第Ⅲ層　茶灰色砂礫
第Ⅳ層　灰茶色砂質土
第Ⅴ層　黄灰色シルト
第Ⅵ層　SD8埋土
SD1
DL＝8.50m
0
4m

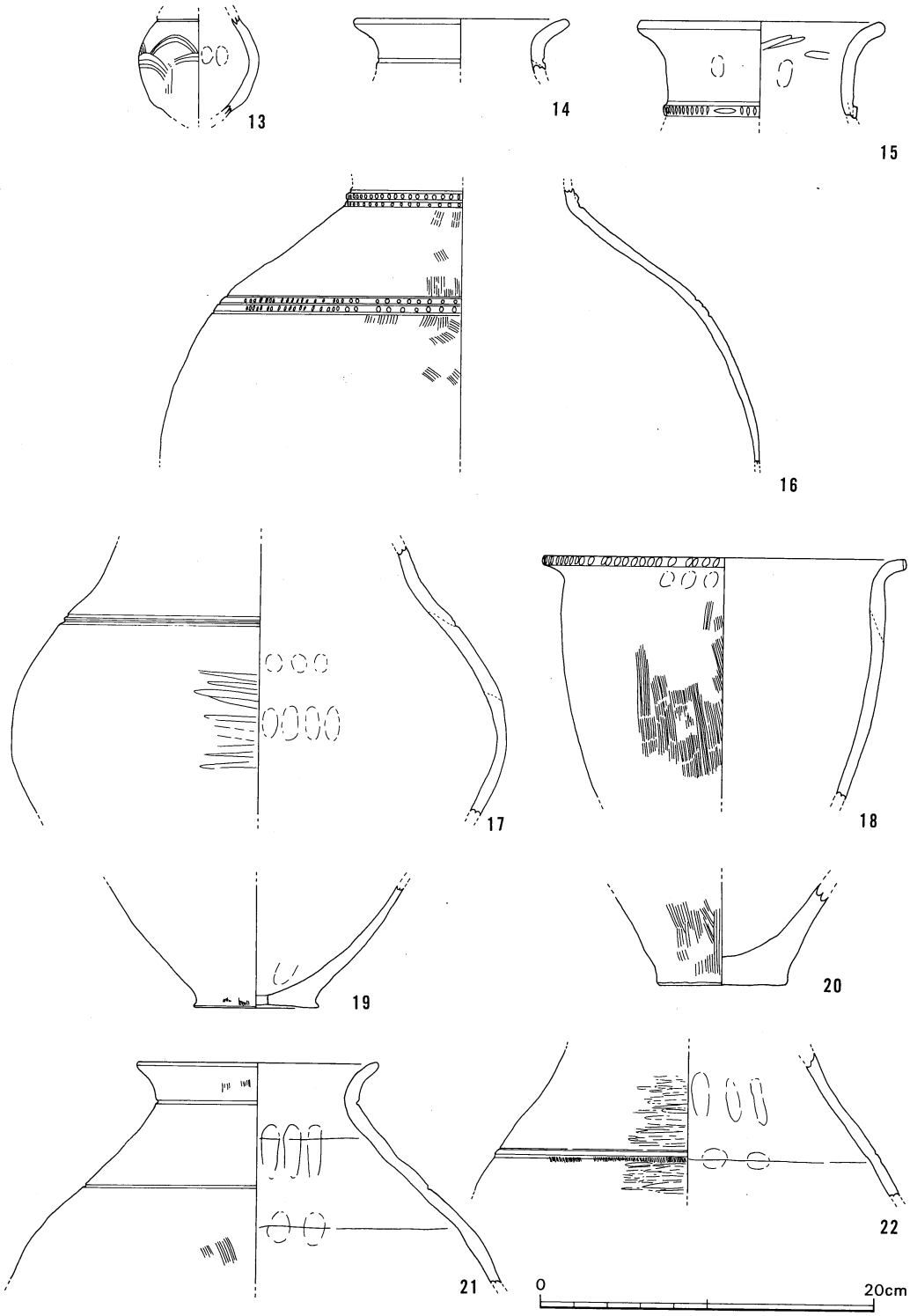
第71図　SD1



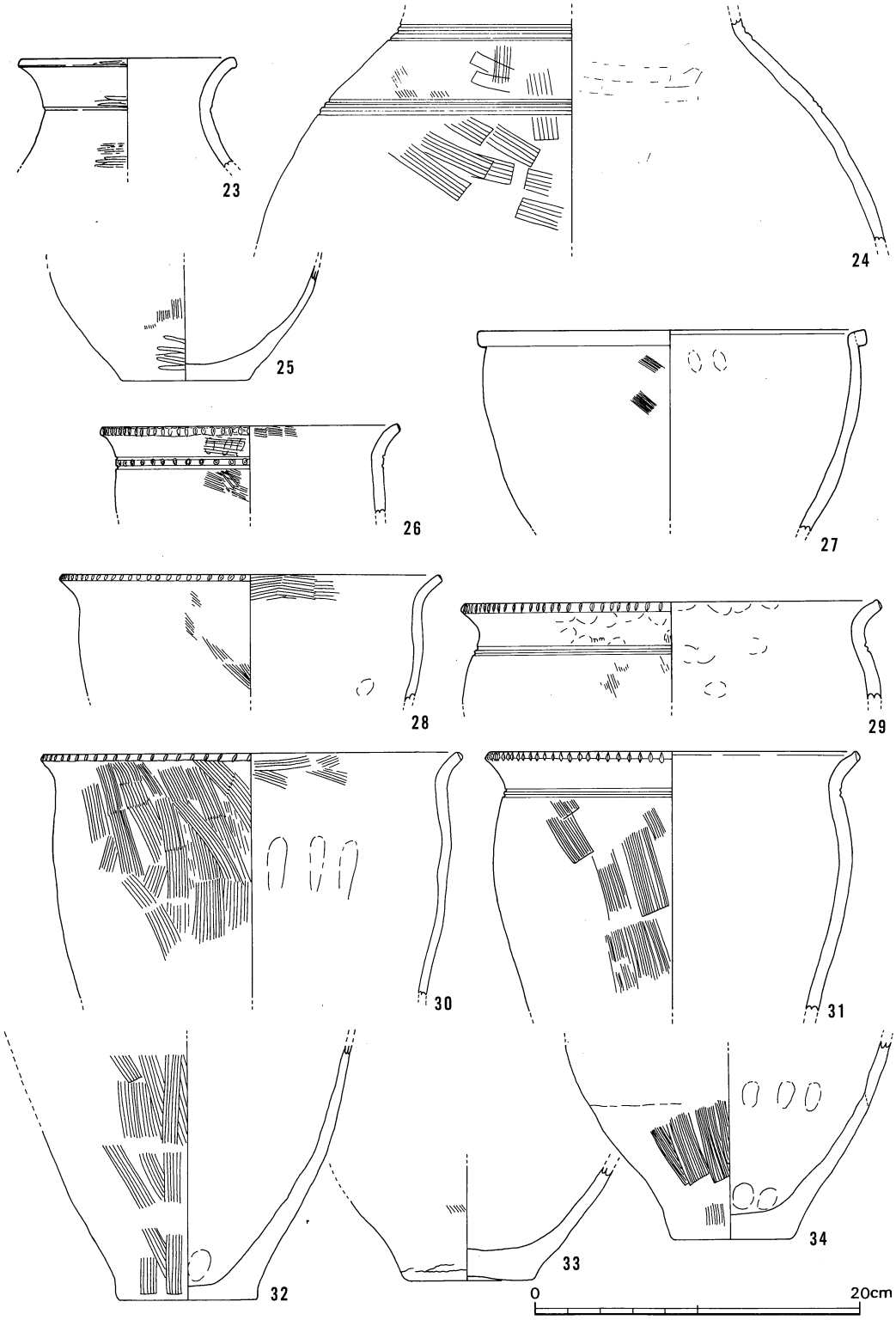
第72図　ＳＤ１第Ｉ層土器出土状態



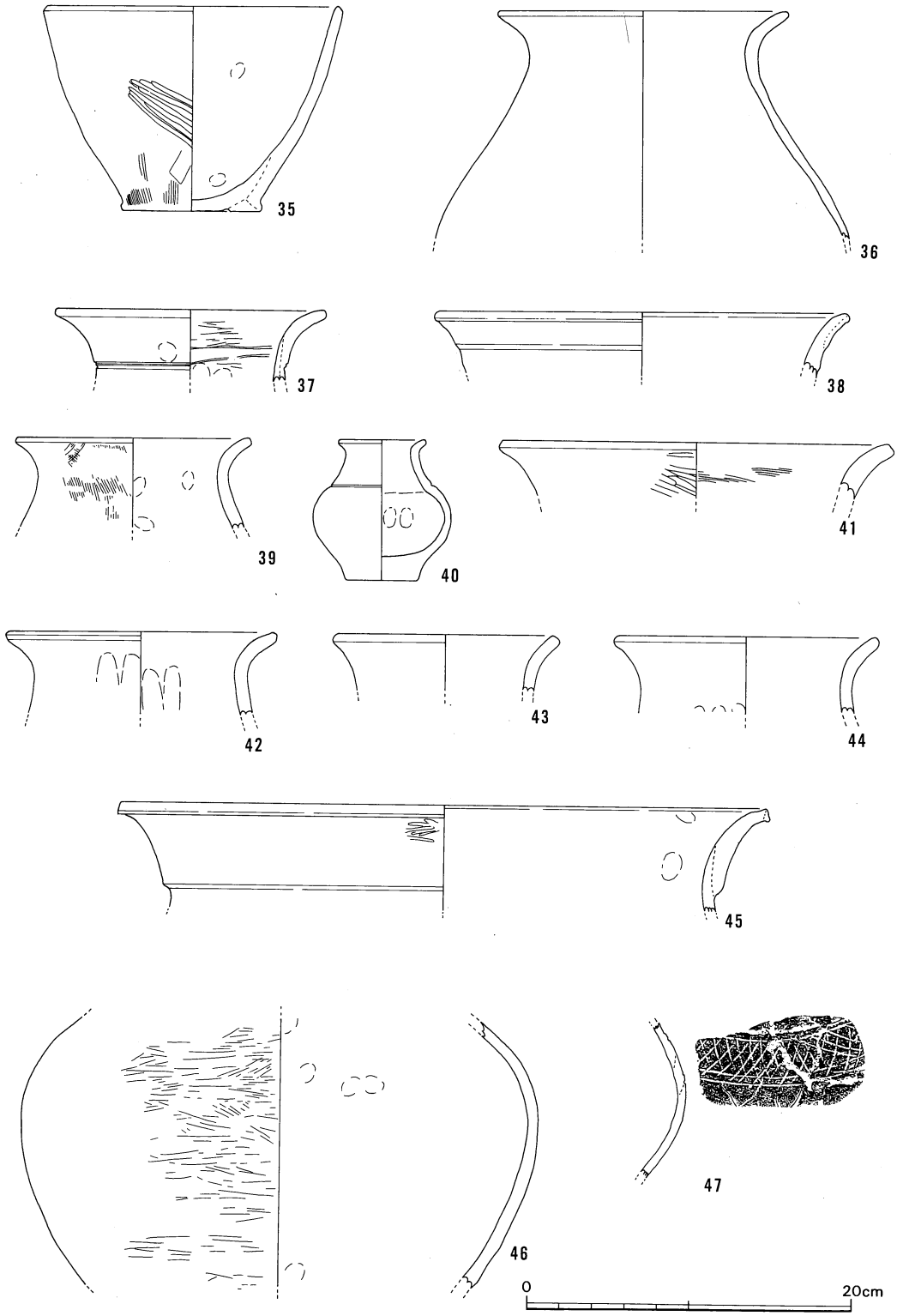
第73図　ＳＫ１・２・７・12・16出土遺物



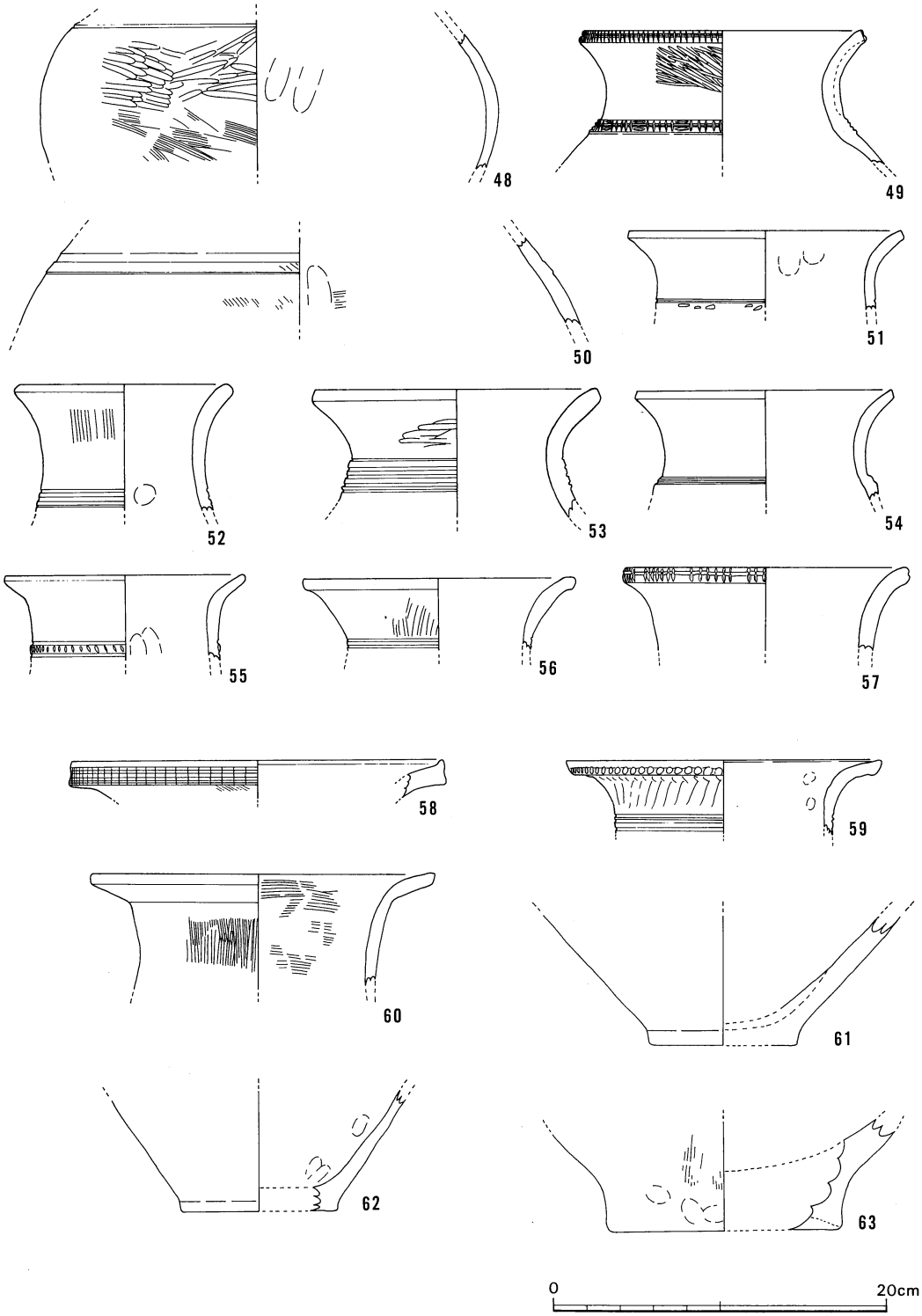
第74図　ＳＫ18・19出土遺物



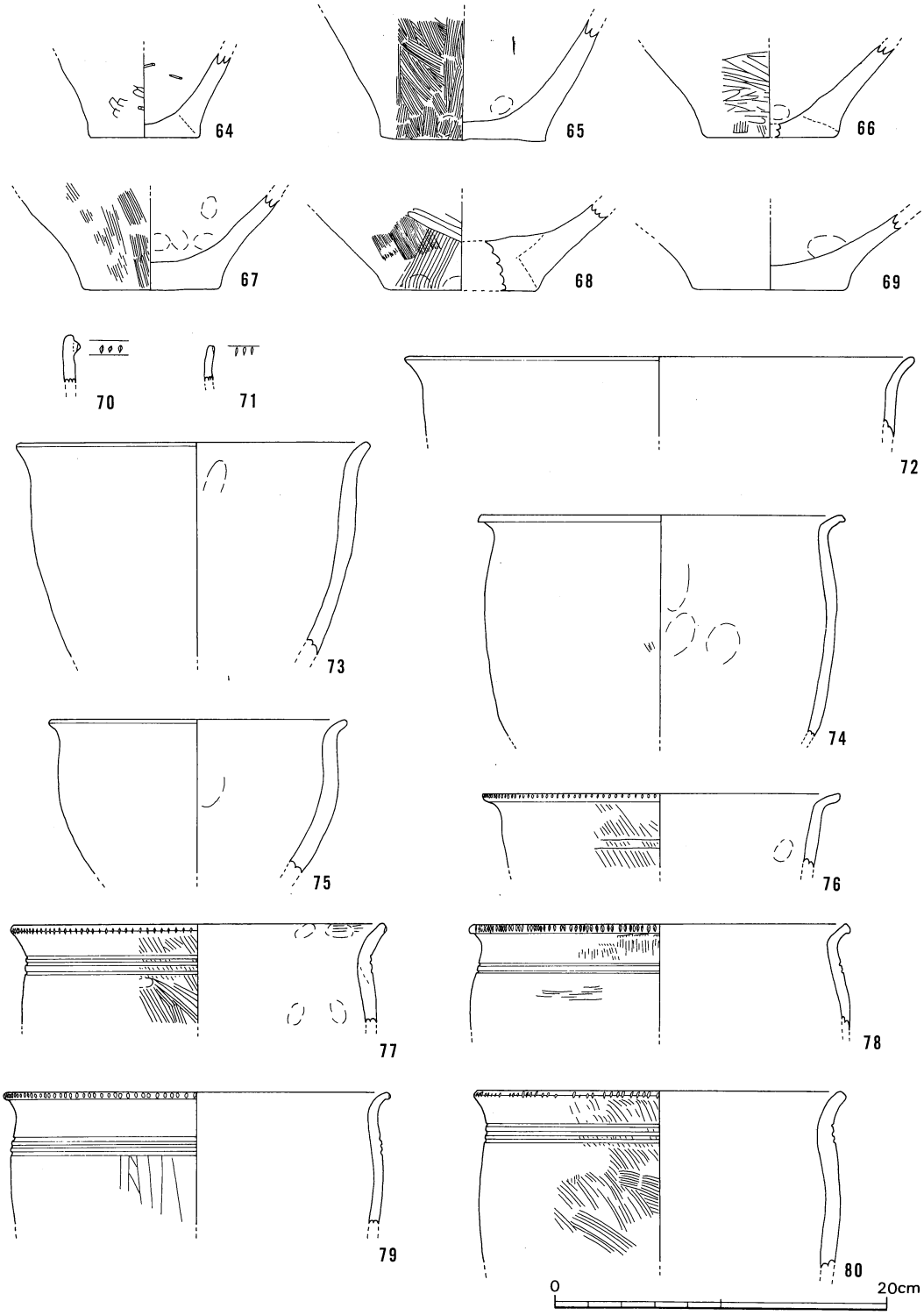
第75図　ＳＫ19出土遺物



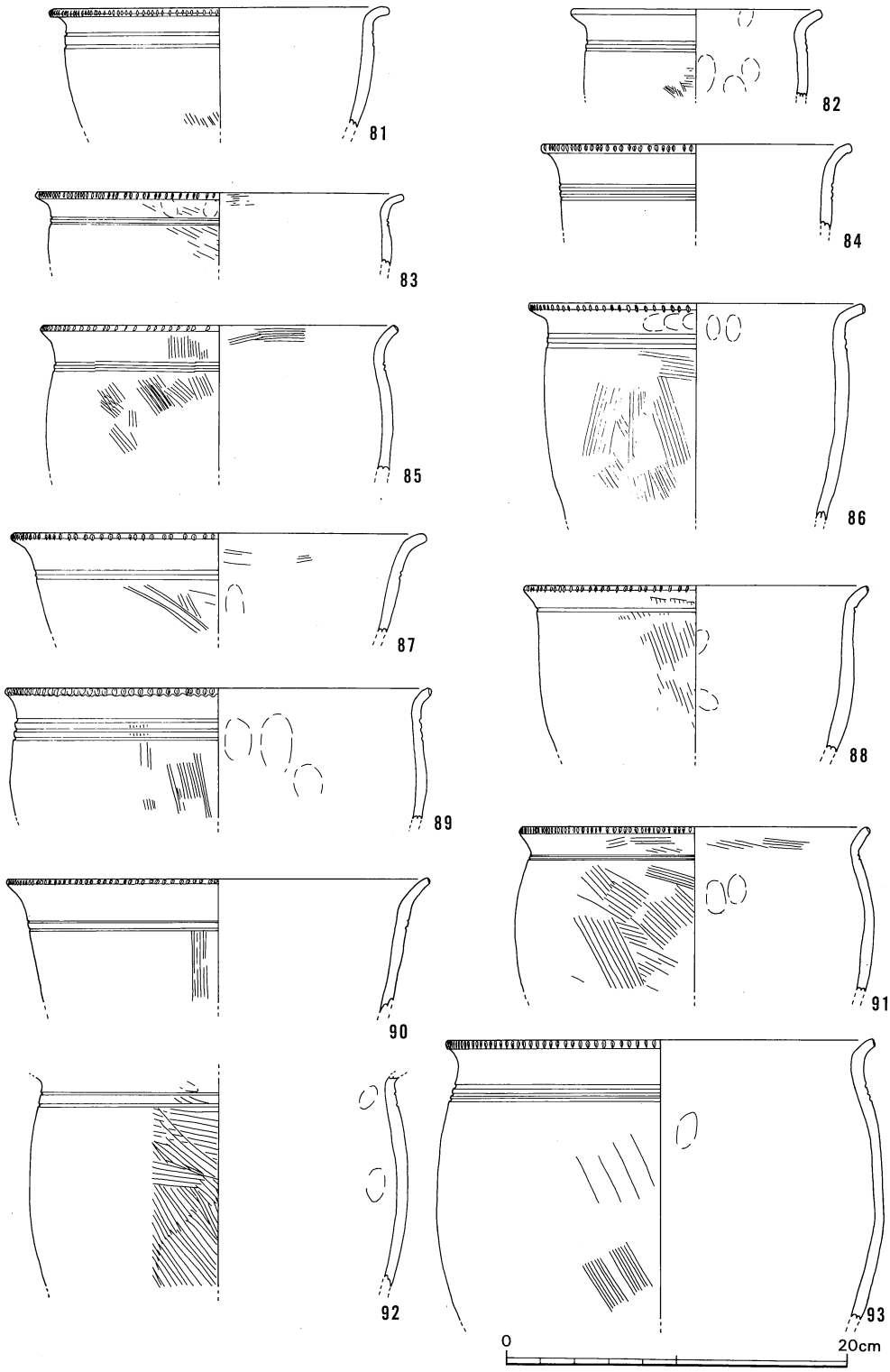
第76図　ＳＫ19、ＳＤ１出土遺物



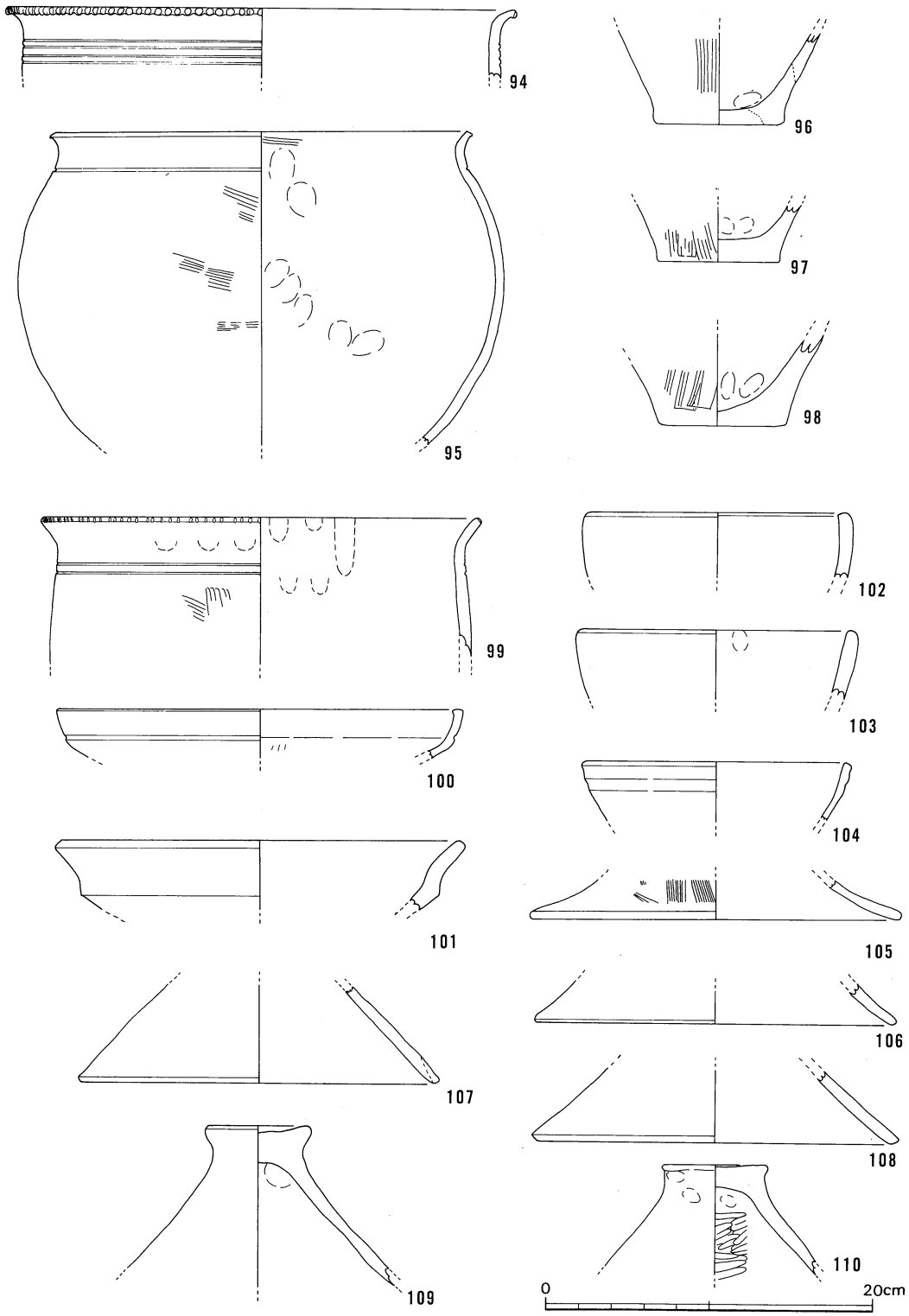
第77図　ＳＤ１出土遺物



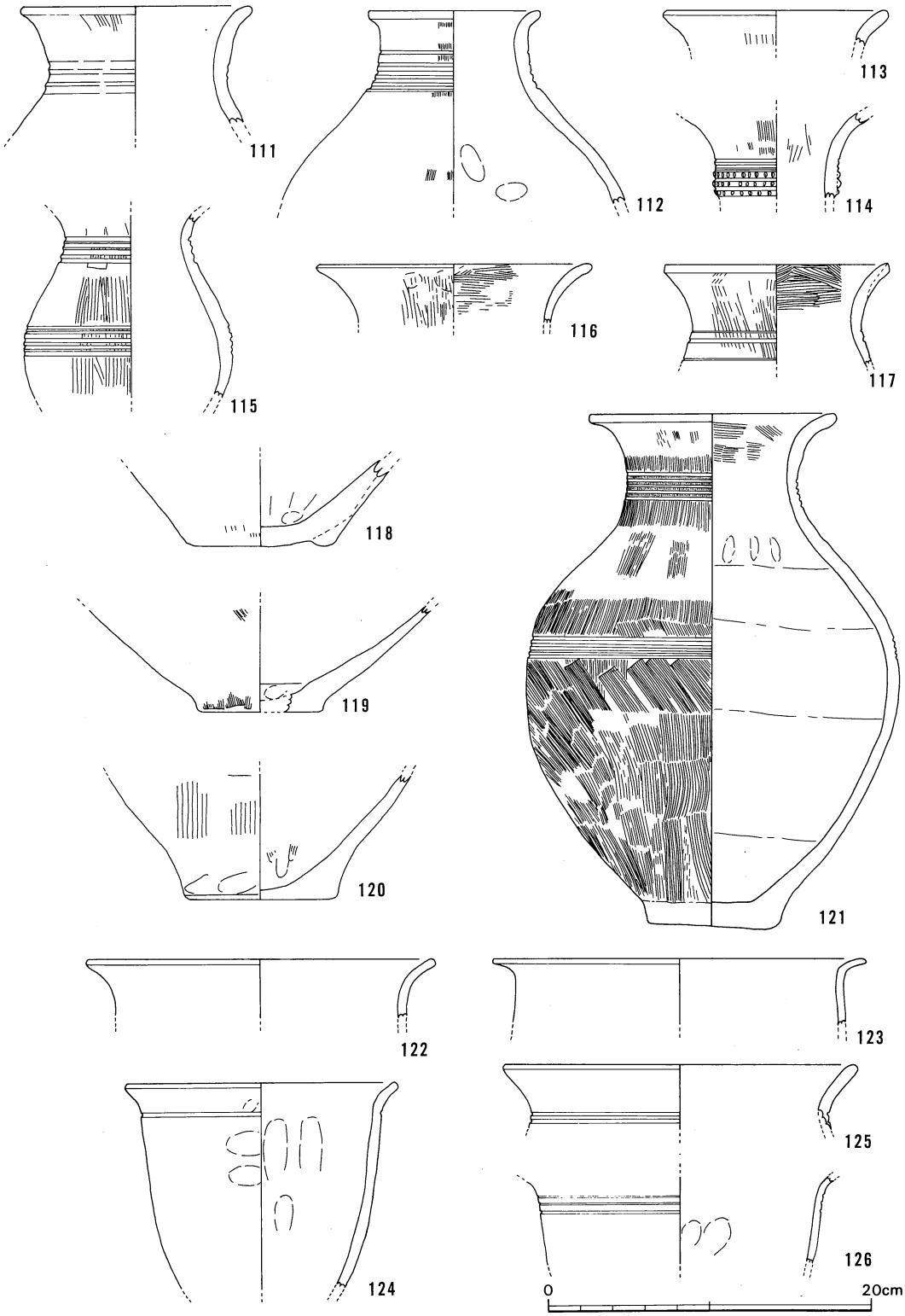
第78図　ＳＤ１出土遺物



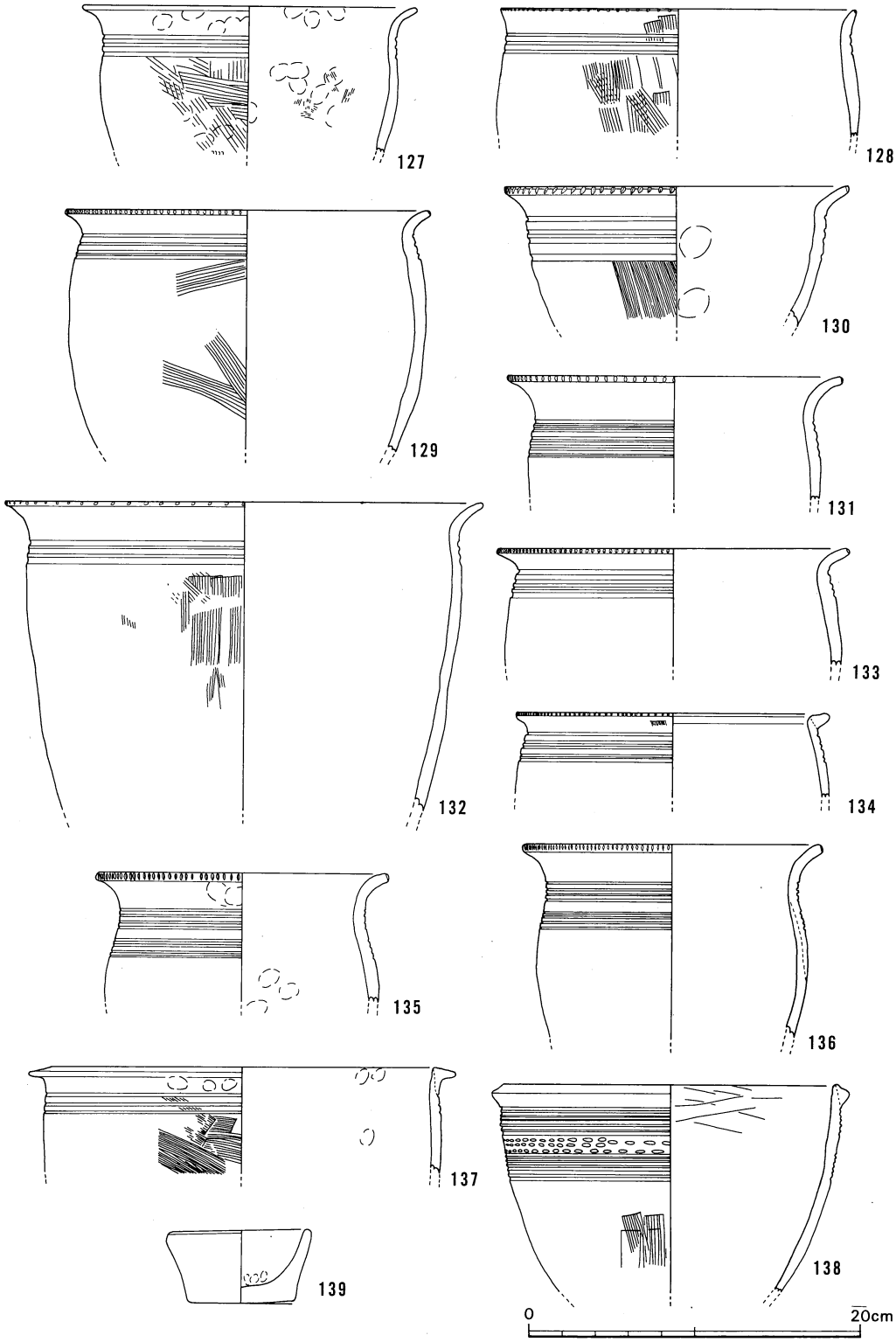
第79図　ＳＤ１出土遺物



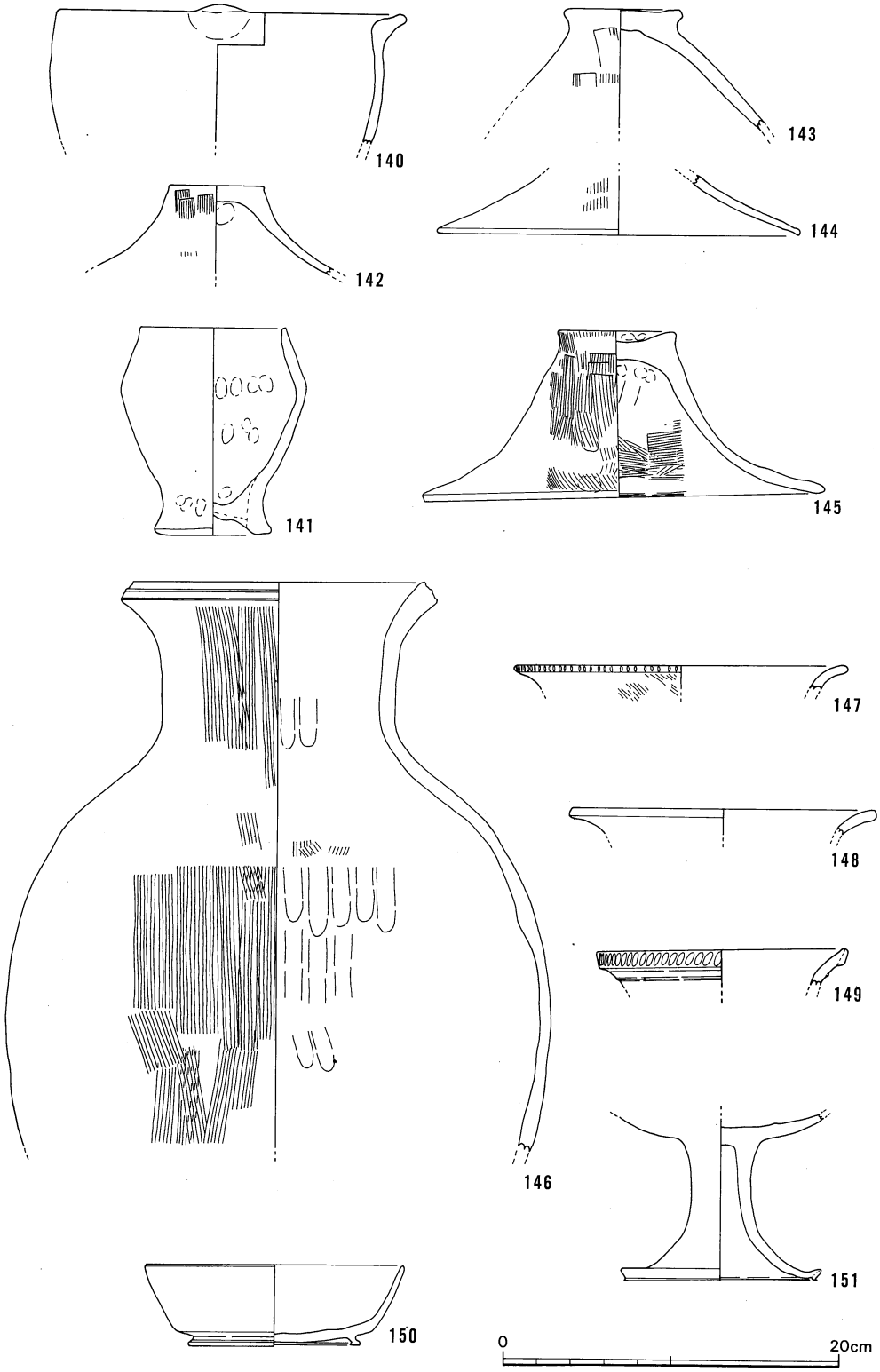
第80図　ＳＤ１出土遺物



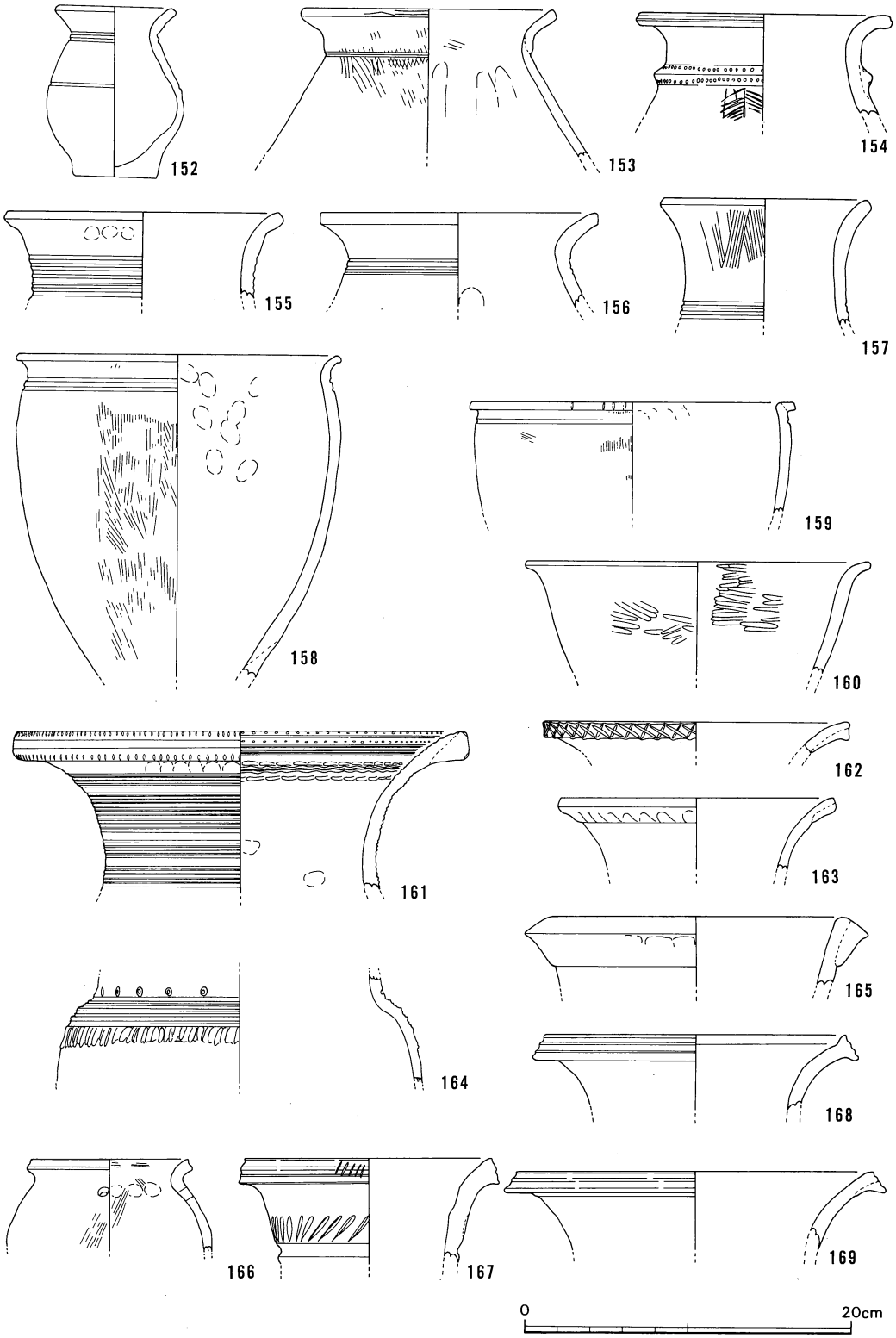
第81図　ＳＸ１出土遺物



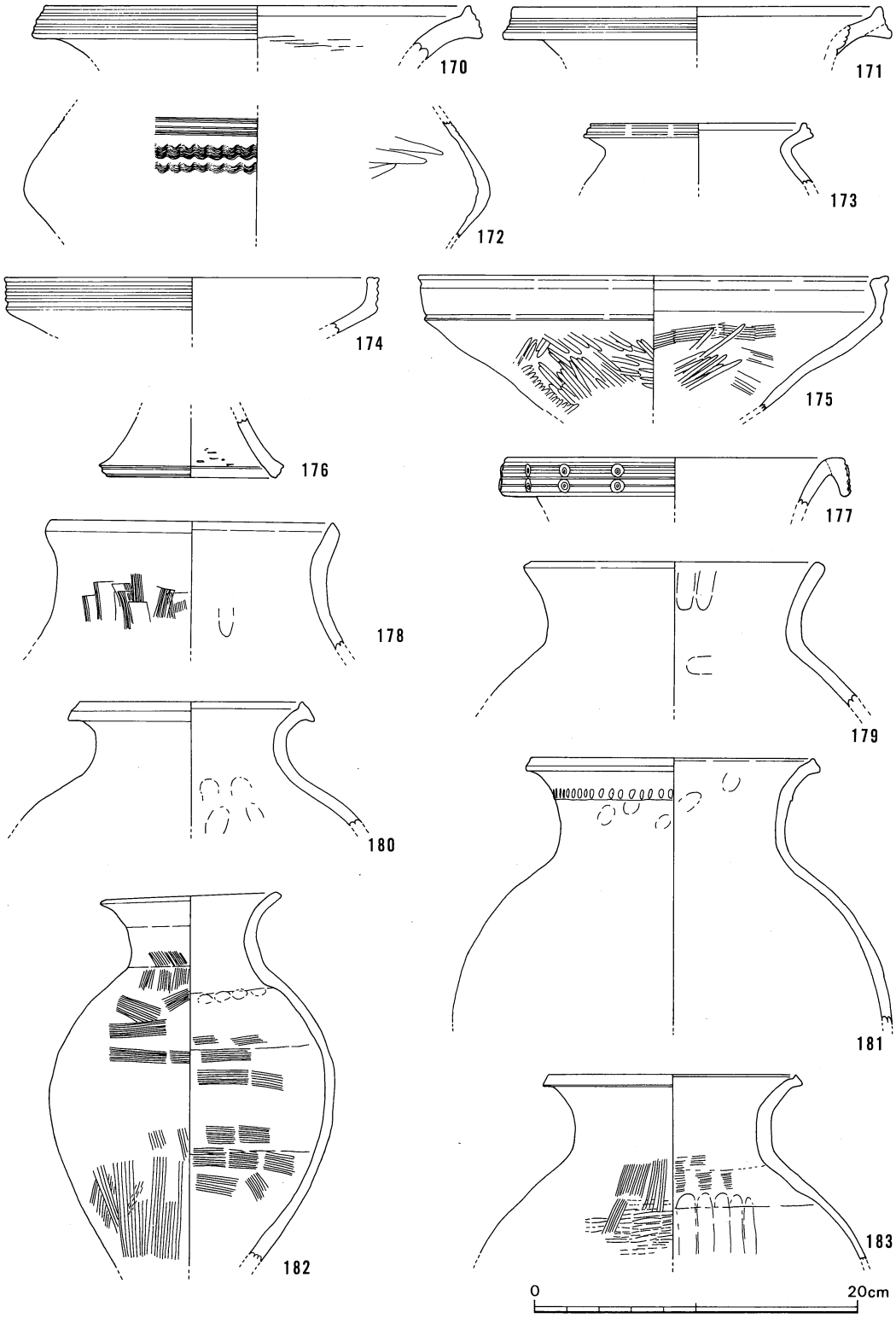
第82図　ＳＸ１出土遺物



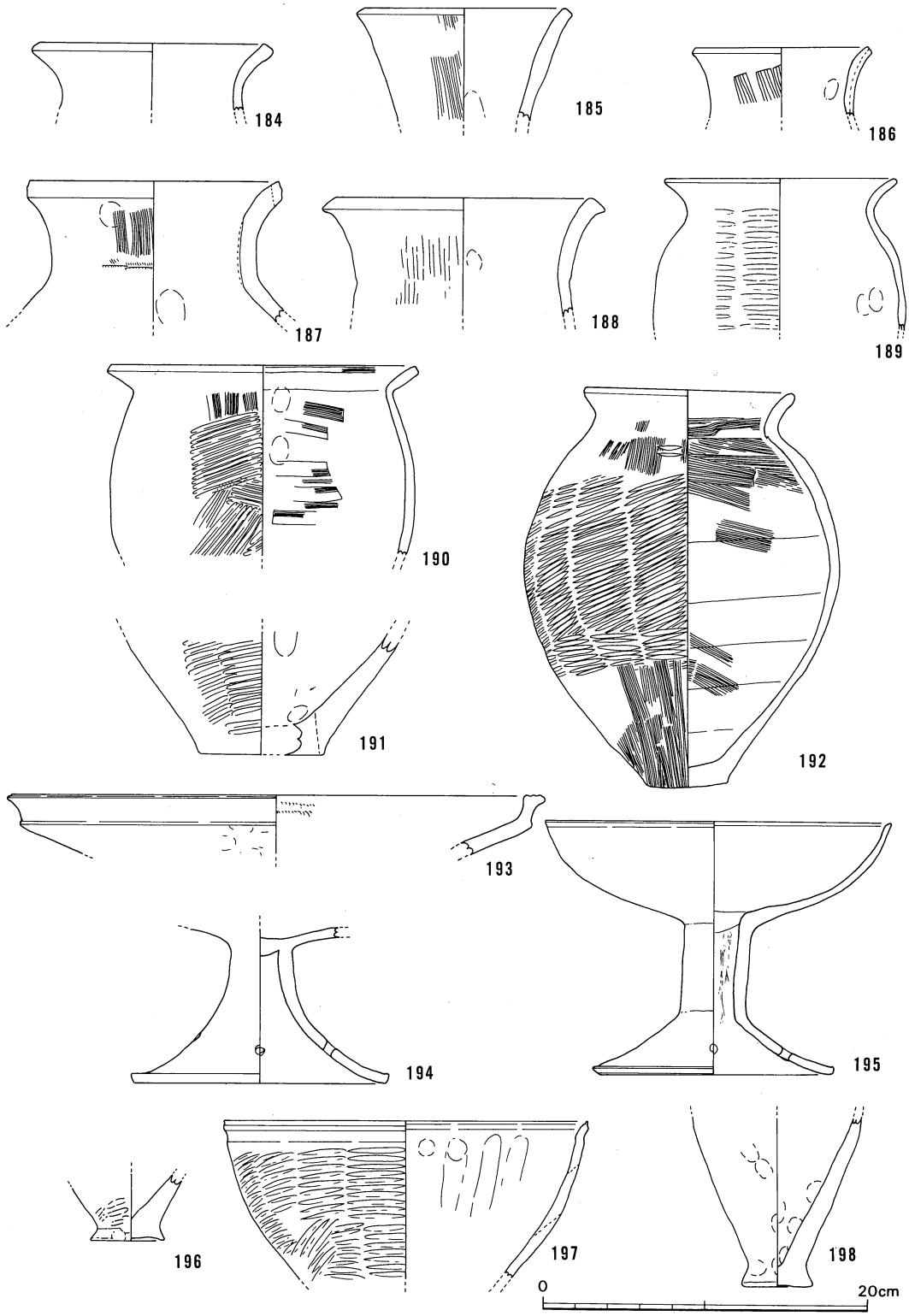
第83図　ＳＤ２、ＳＸ１・２出土遺物



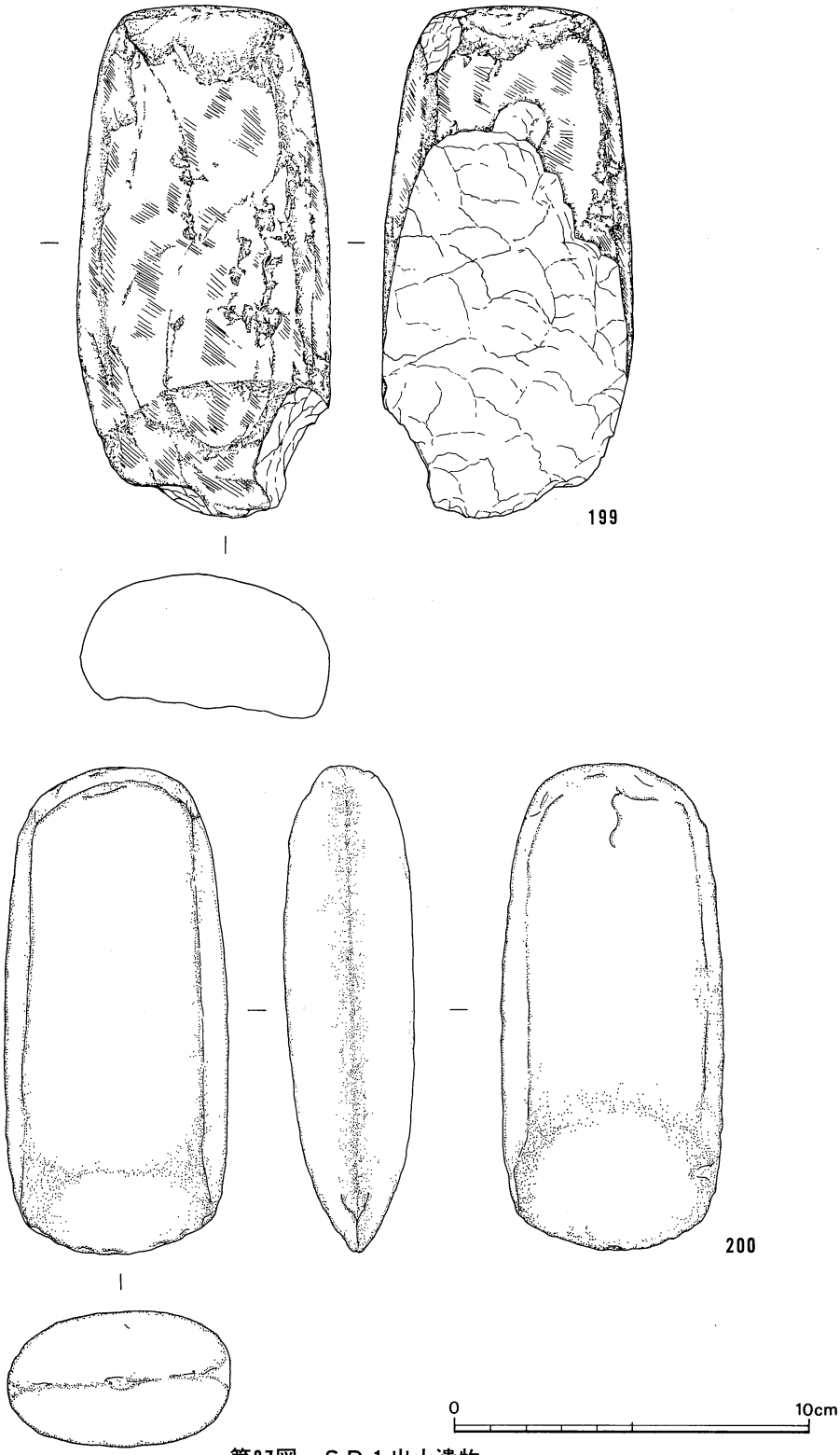
第84図　ＳＤ１出土遺物



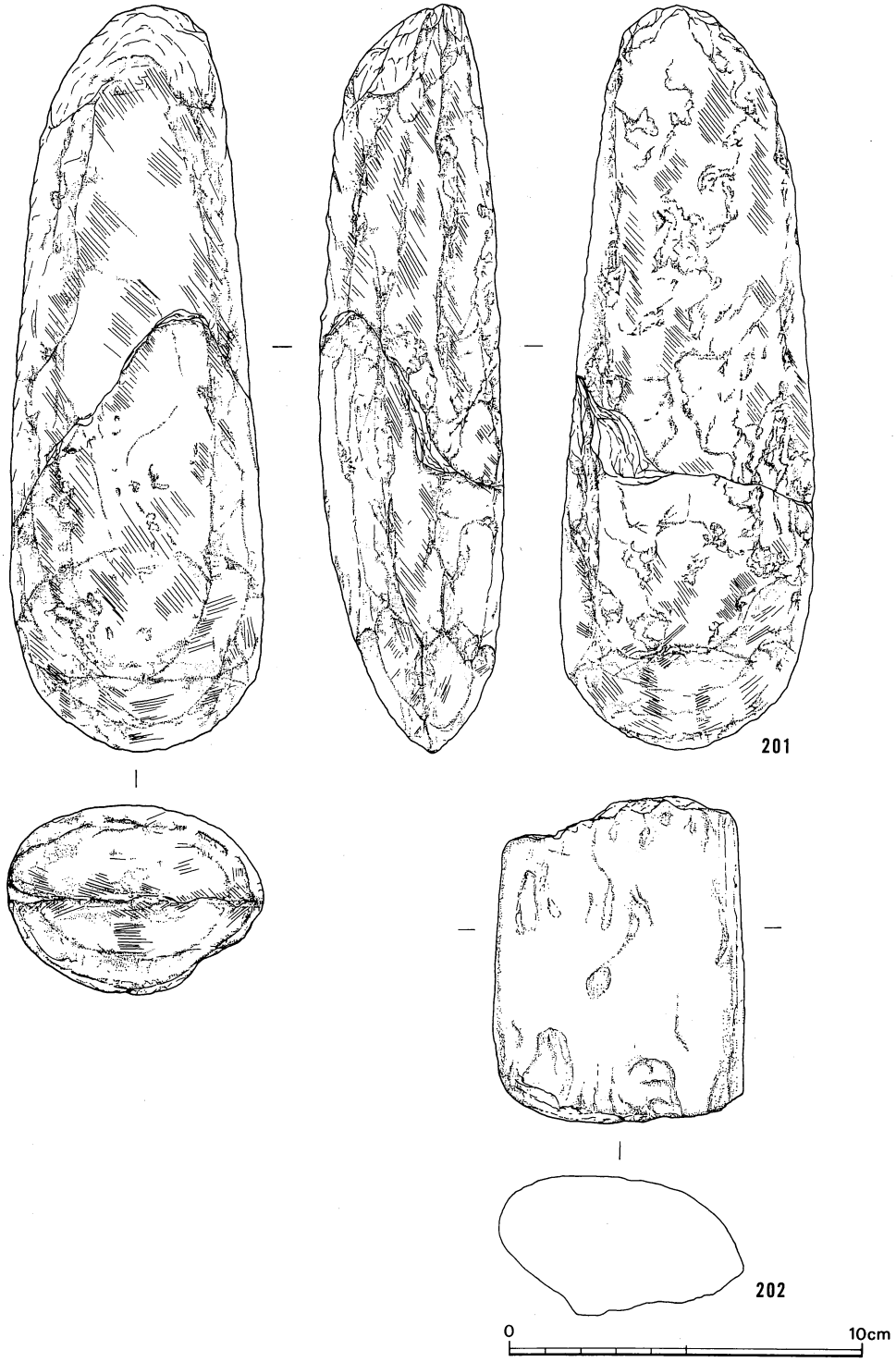
第85図　ＳＤ１出土遺物



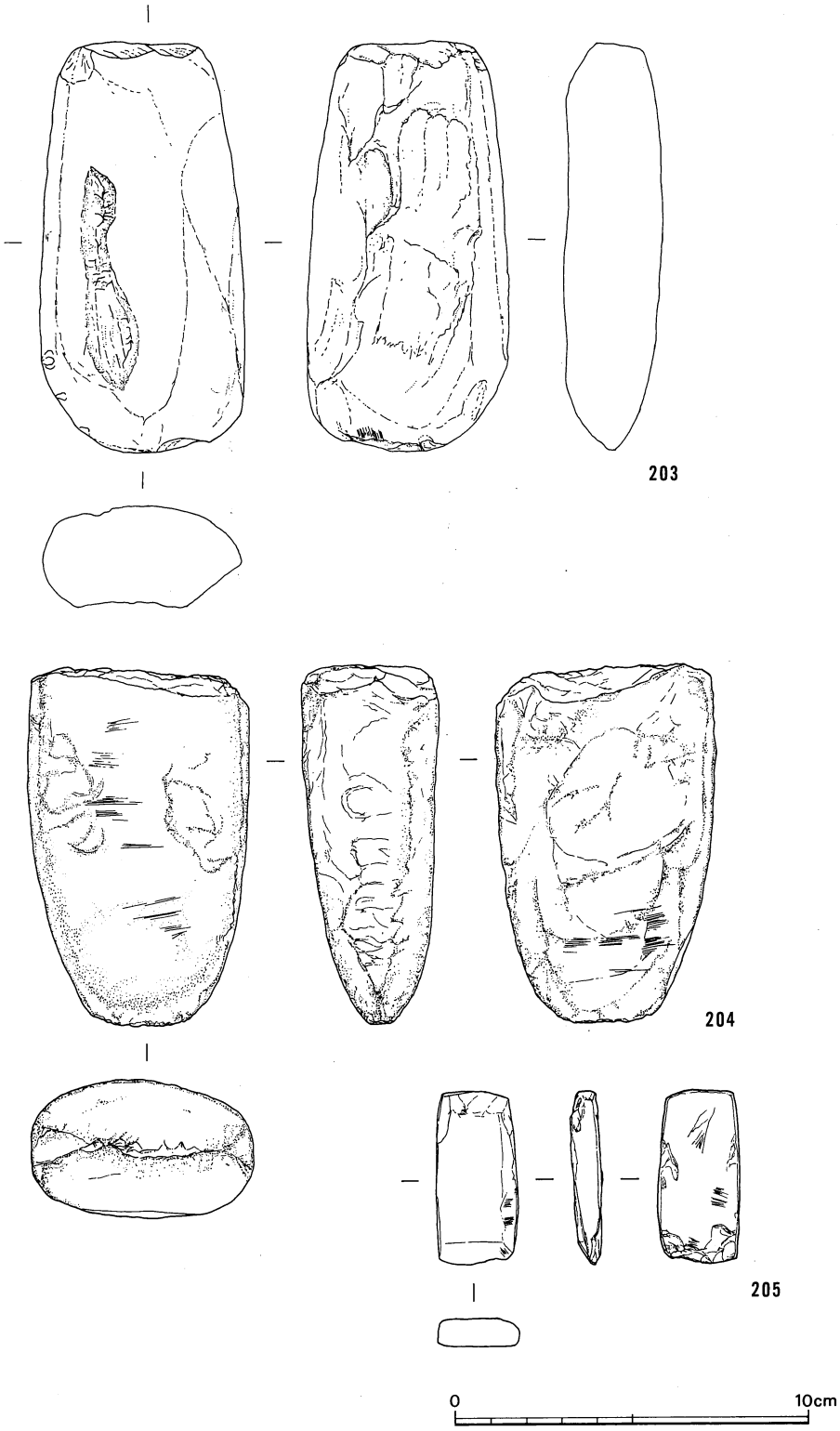
第86図　ＳＤ１出土遺物



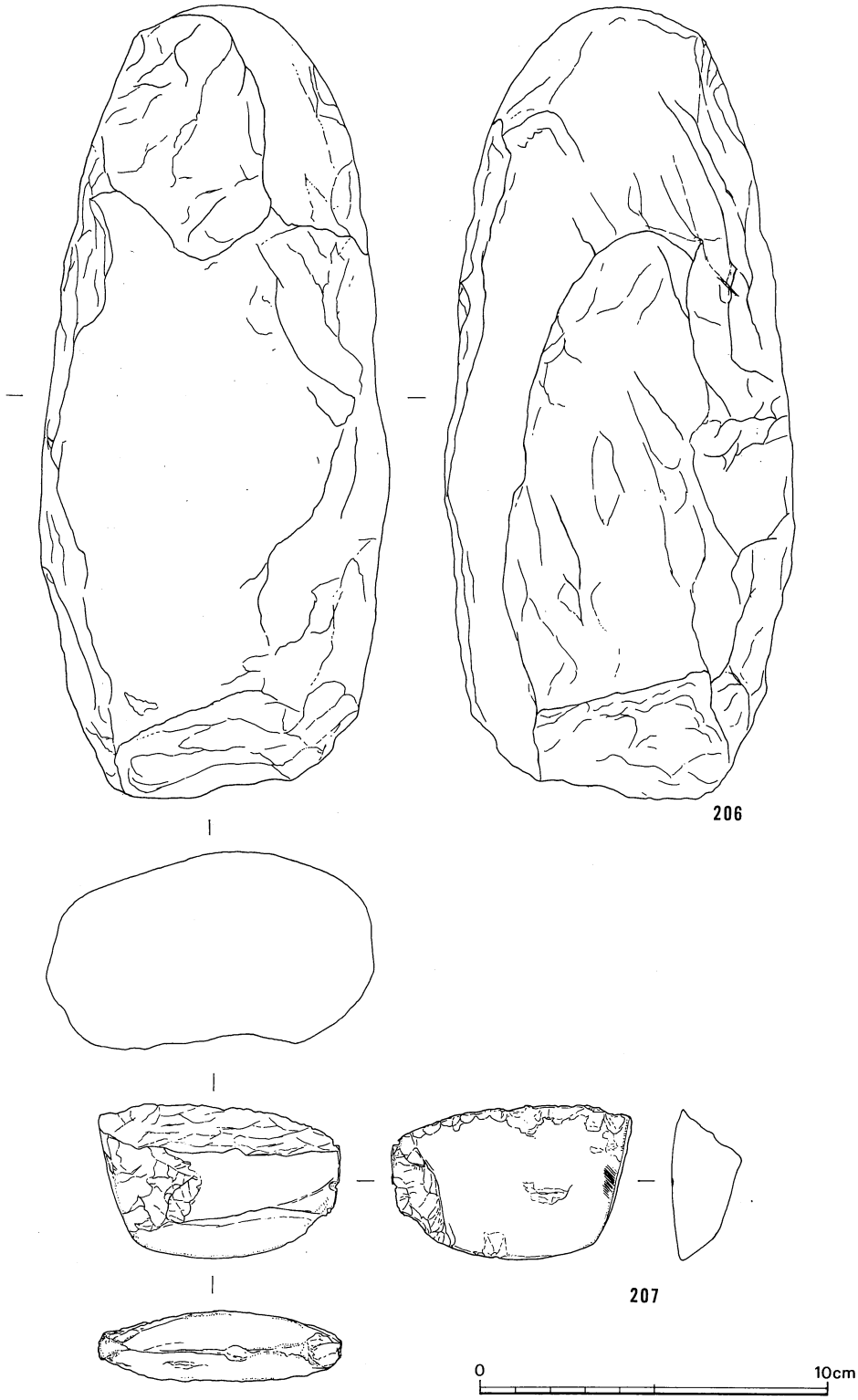
第87図　ＳＤ１出土遺物



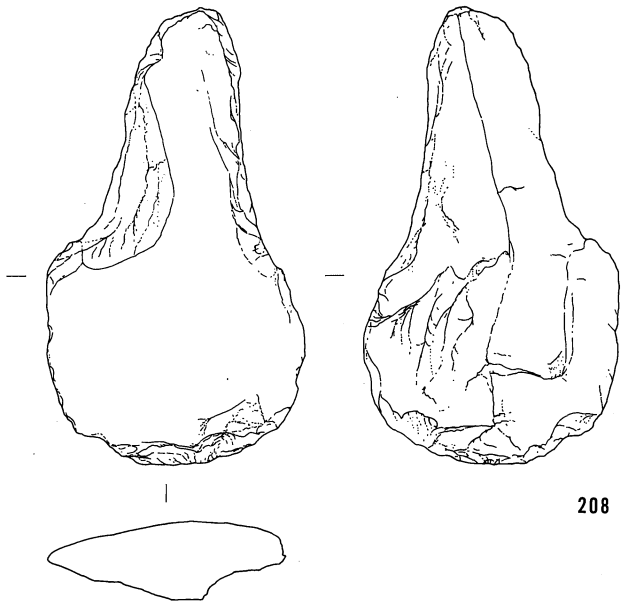
第88図　ＳＤ３、ＳＸ１出土遺物

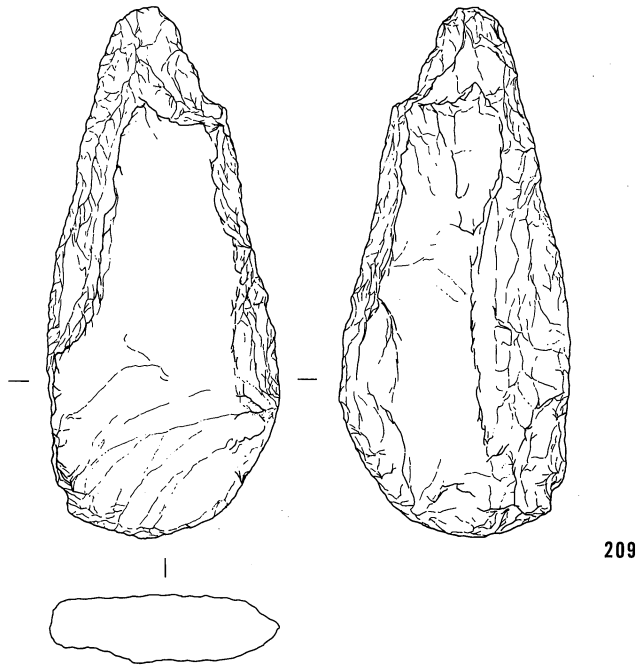


第89図　ＳＤ１・４、ＳＸ１出土遺物



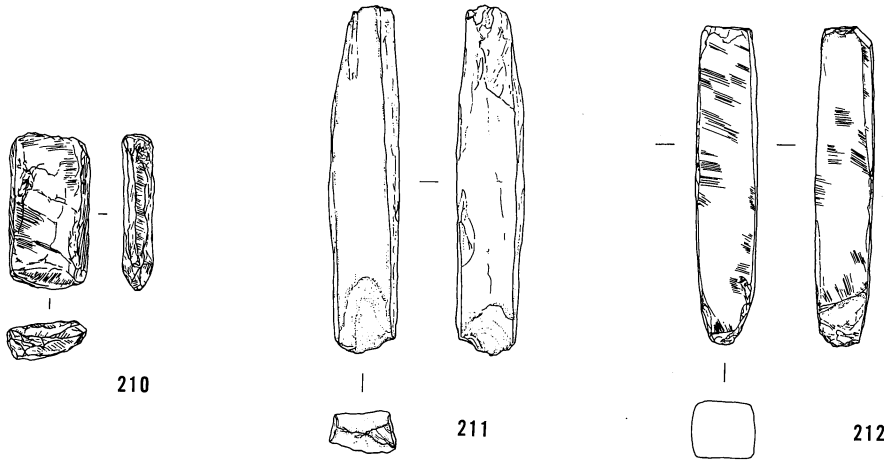
第90図　ＳＤ１・４出土遺物

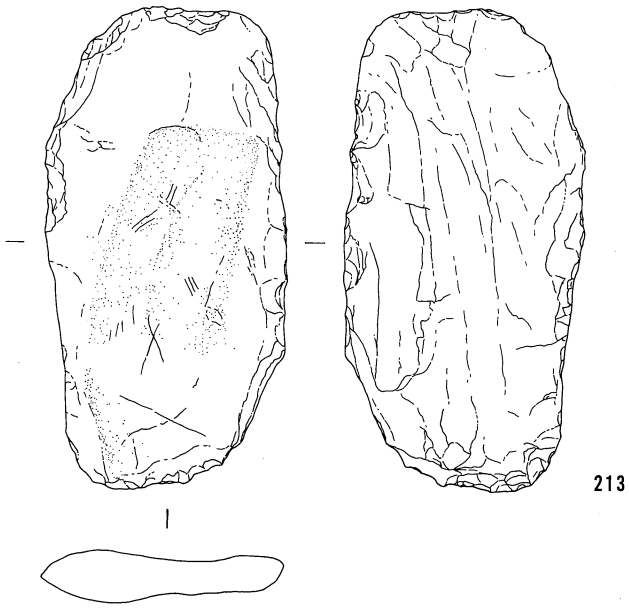




0　10cm

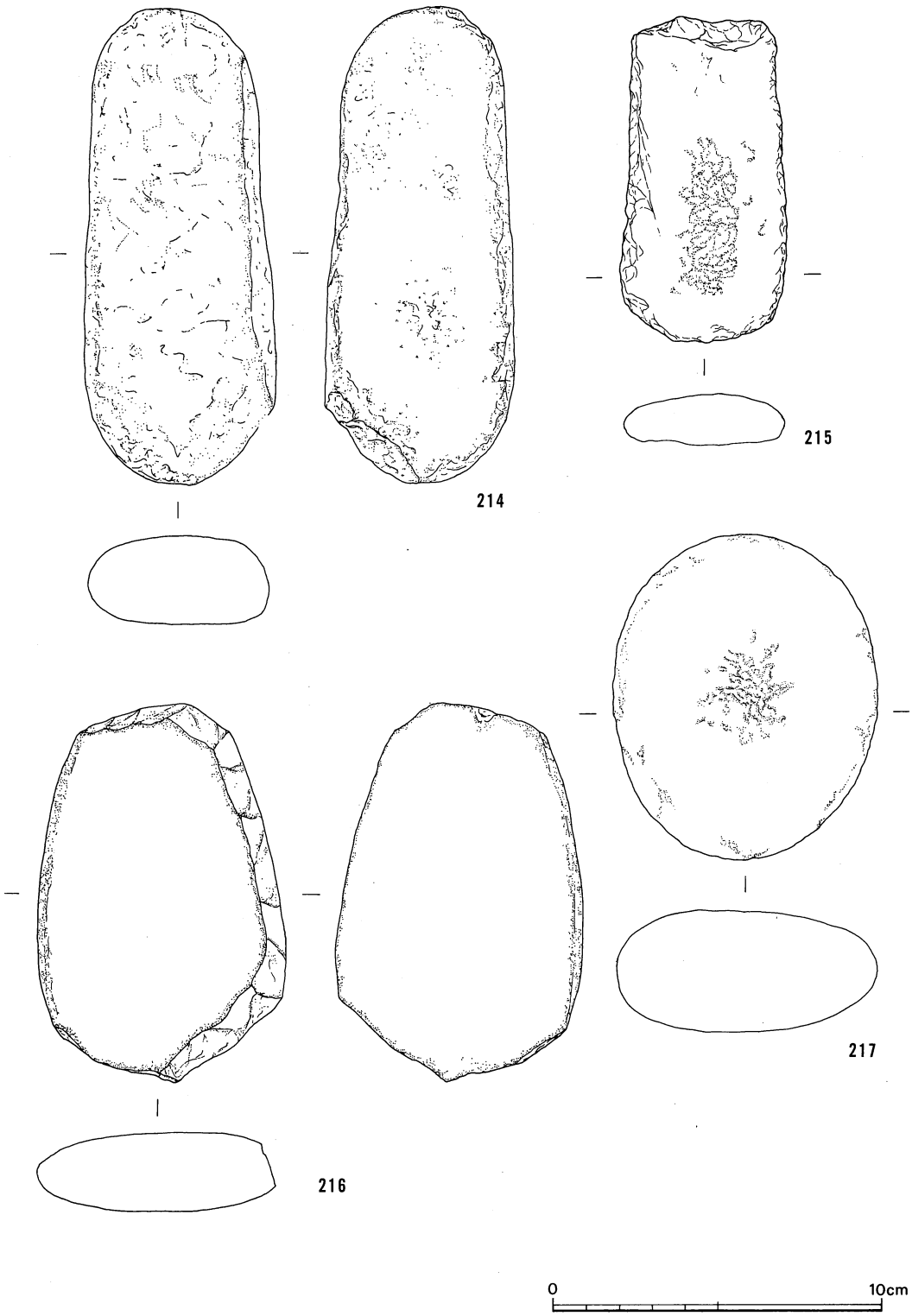
第91図　ＳＤ１、ＳＸ１出土遺物



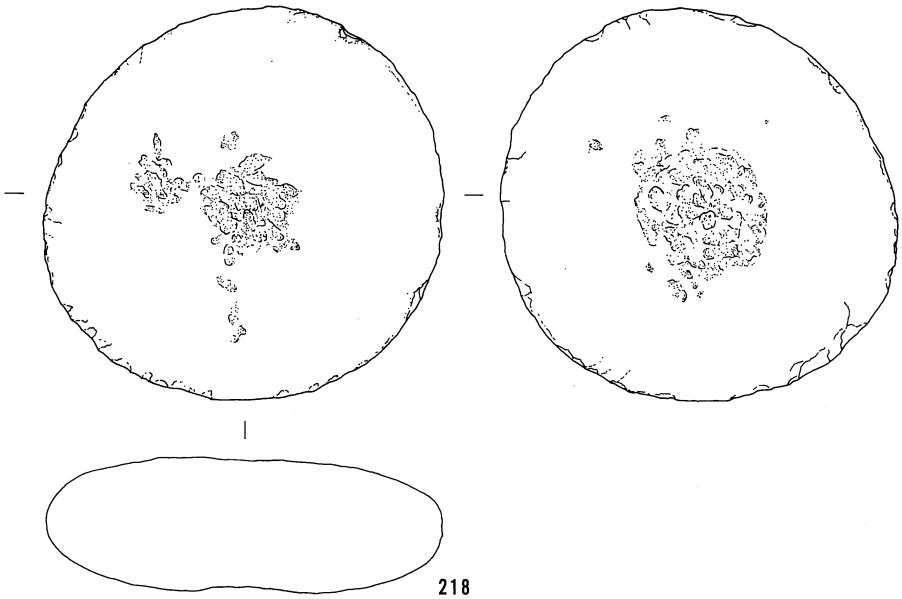


0 10cm

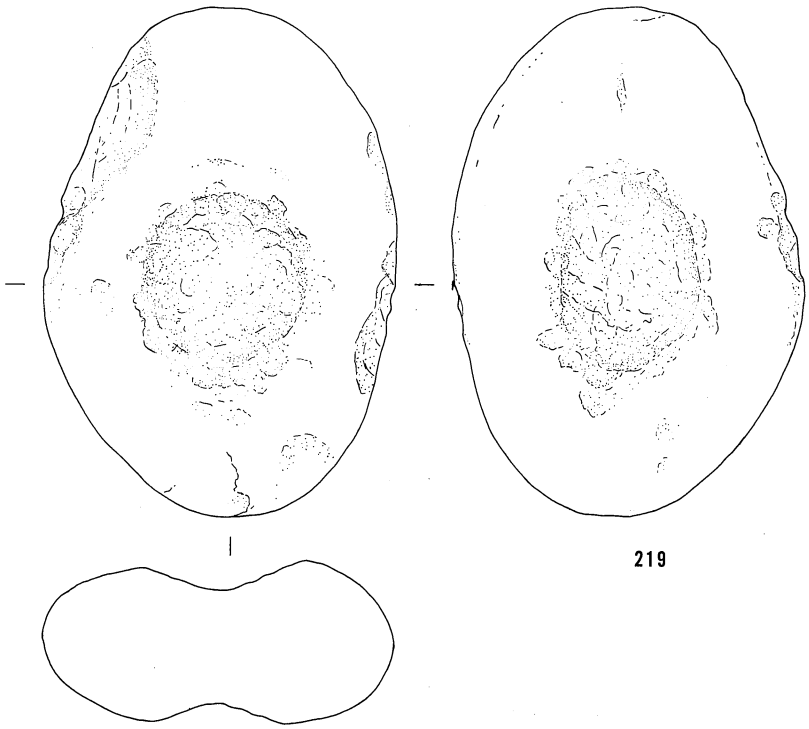
第92図　ＳＫ１、ＳＤ１、Ｐ２出土遺物



第93図　ＳＤ１出土遺物



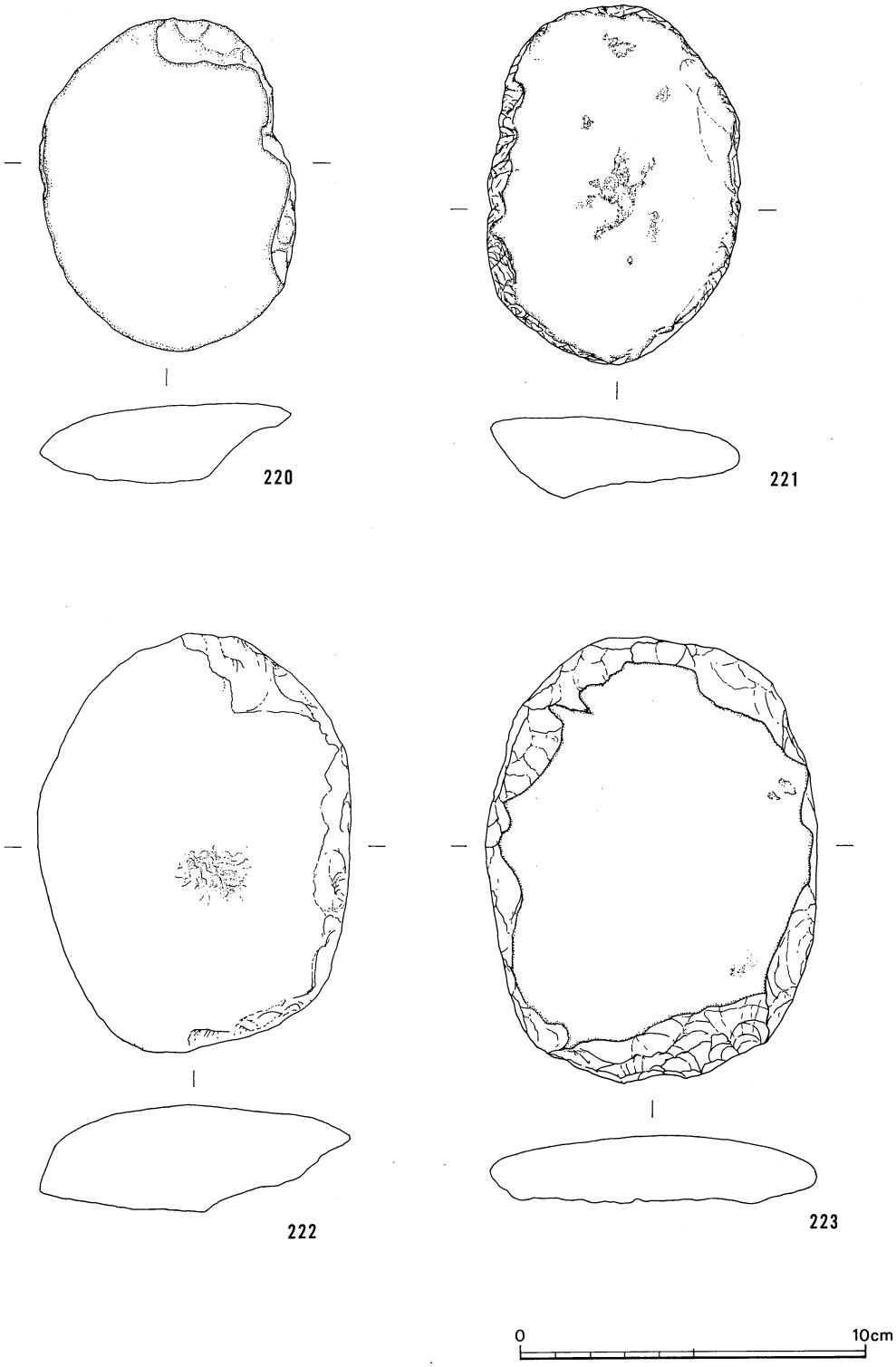
218



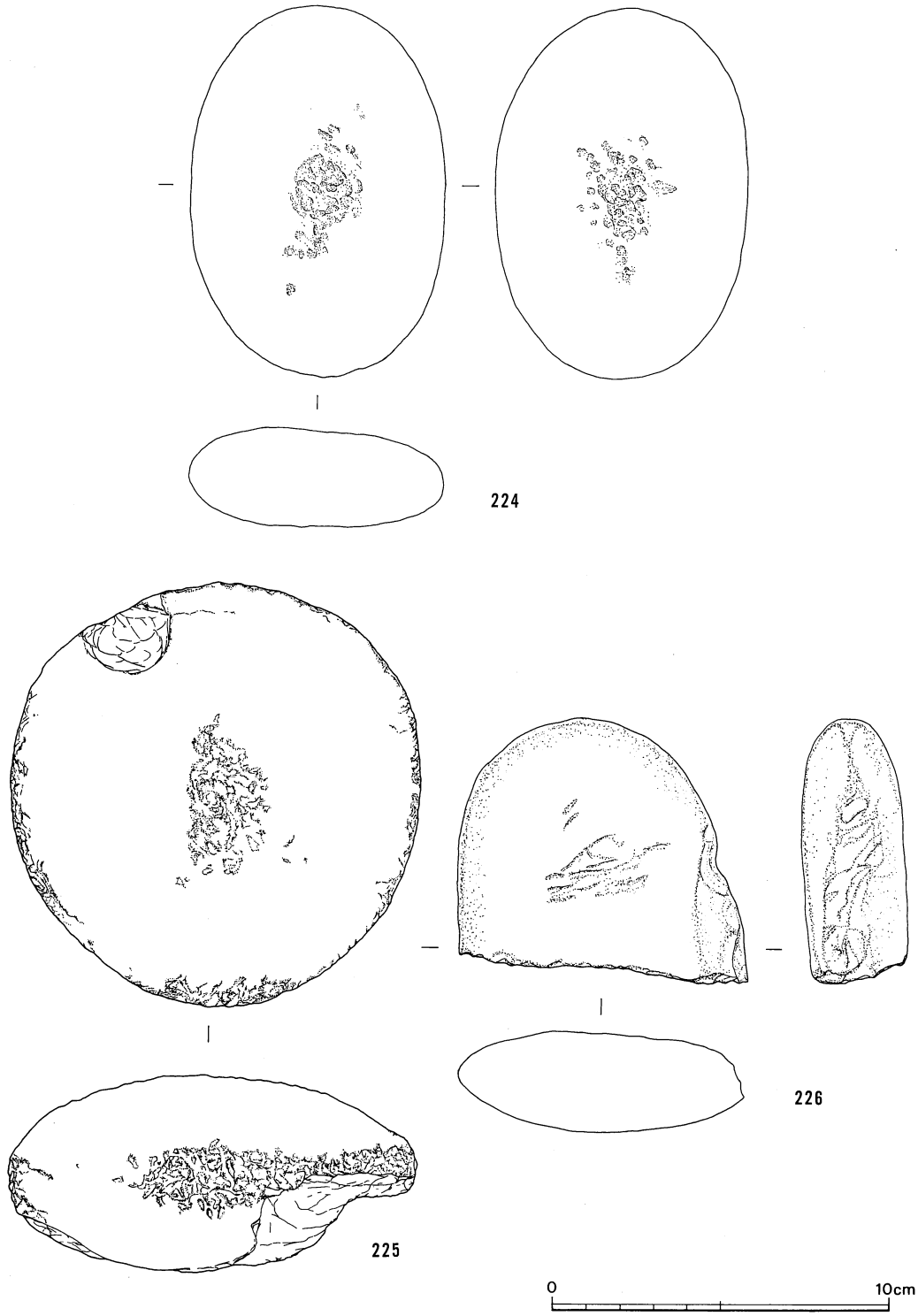
219

0 10cm

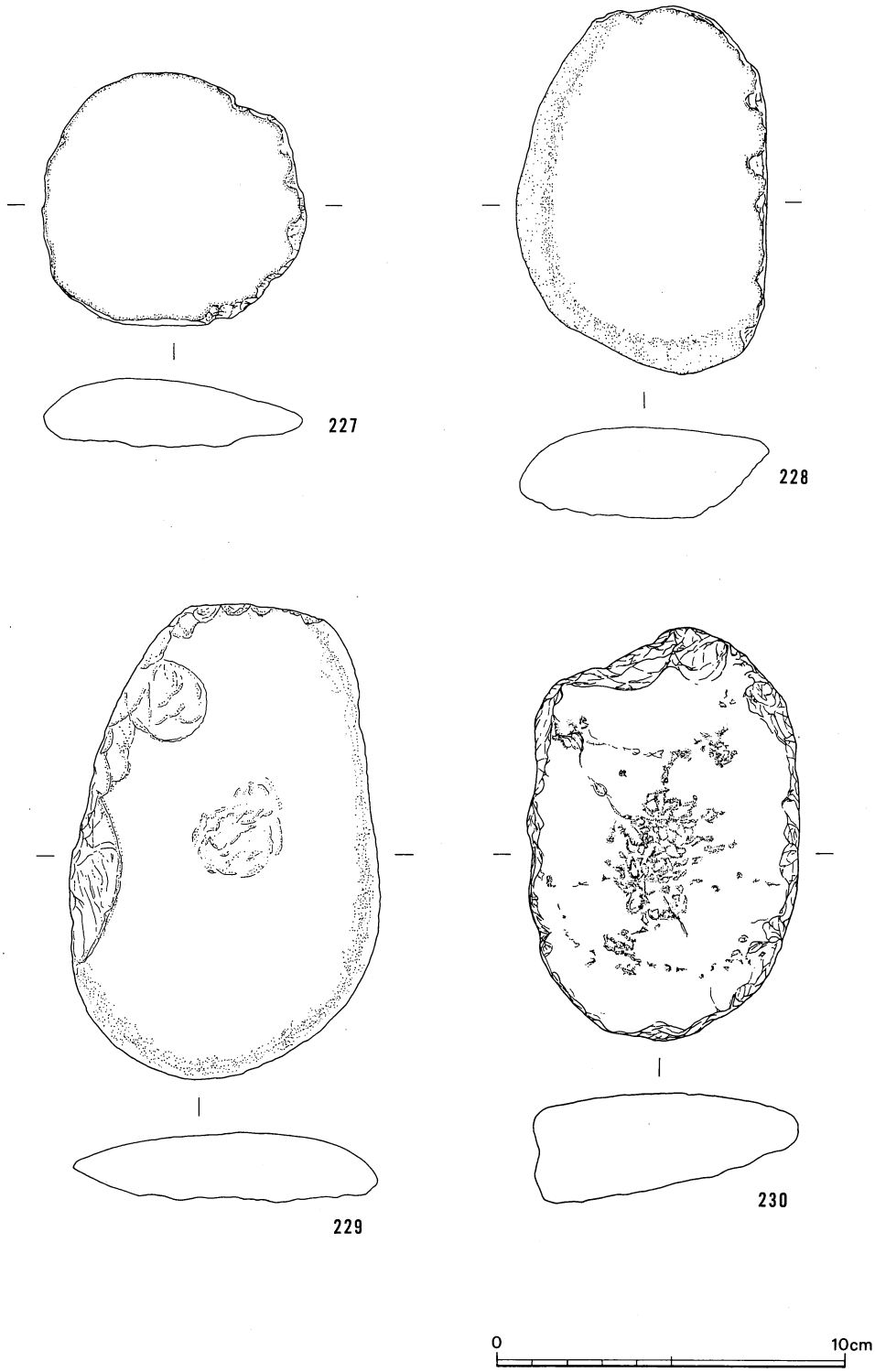
第94図　ＳＤ１、ＳＸ１出土遺物



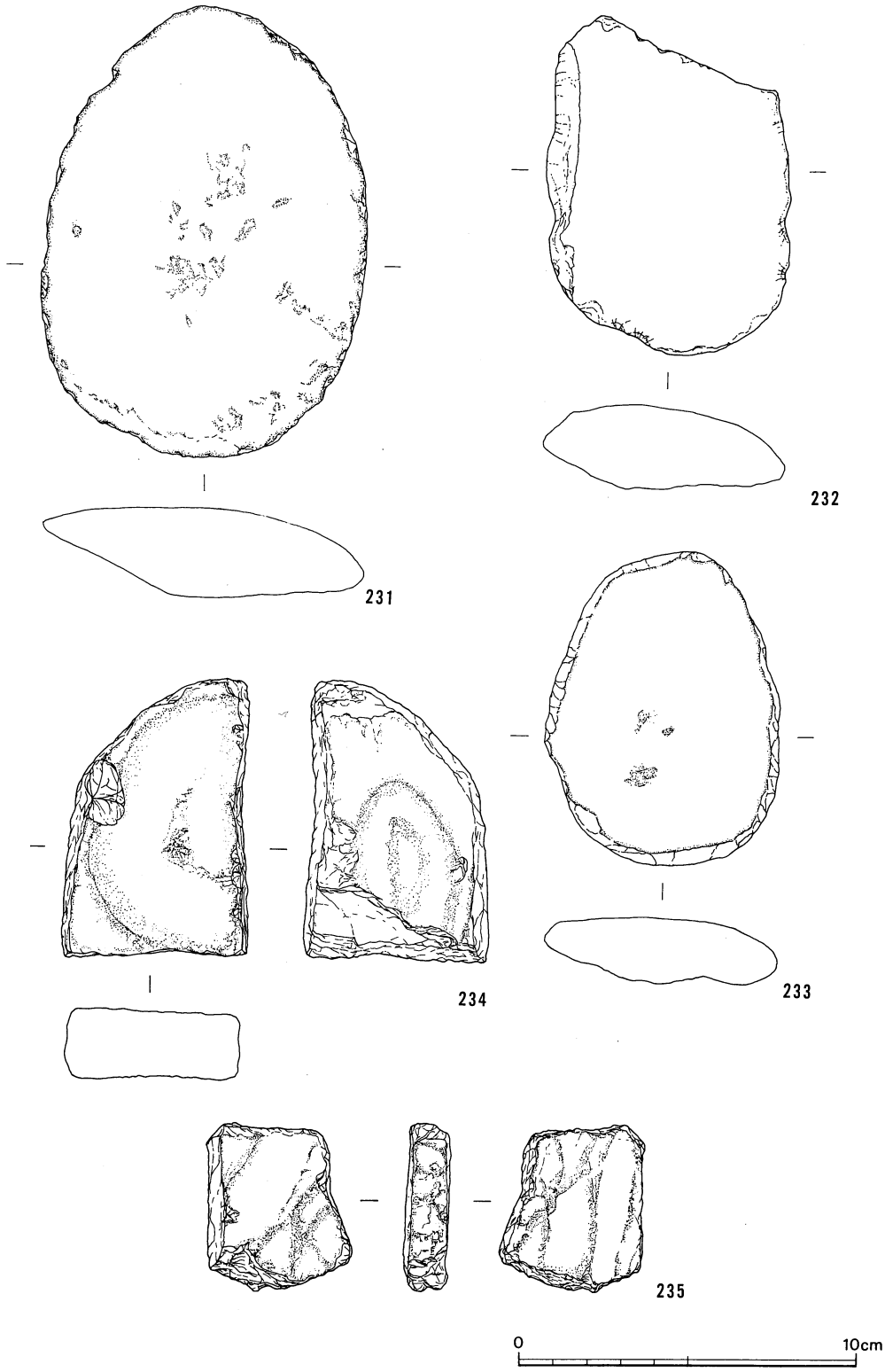
第95図　ＳＤ１・３、ＳＸ２出土遺物



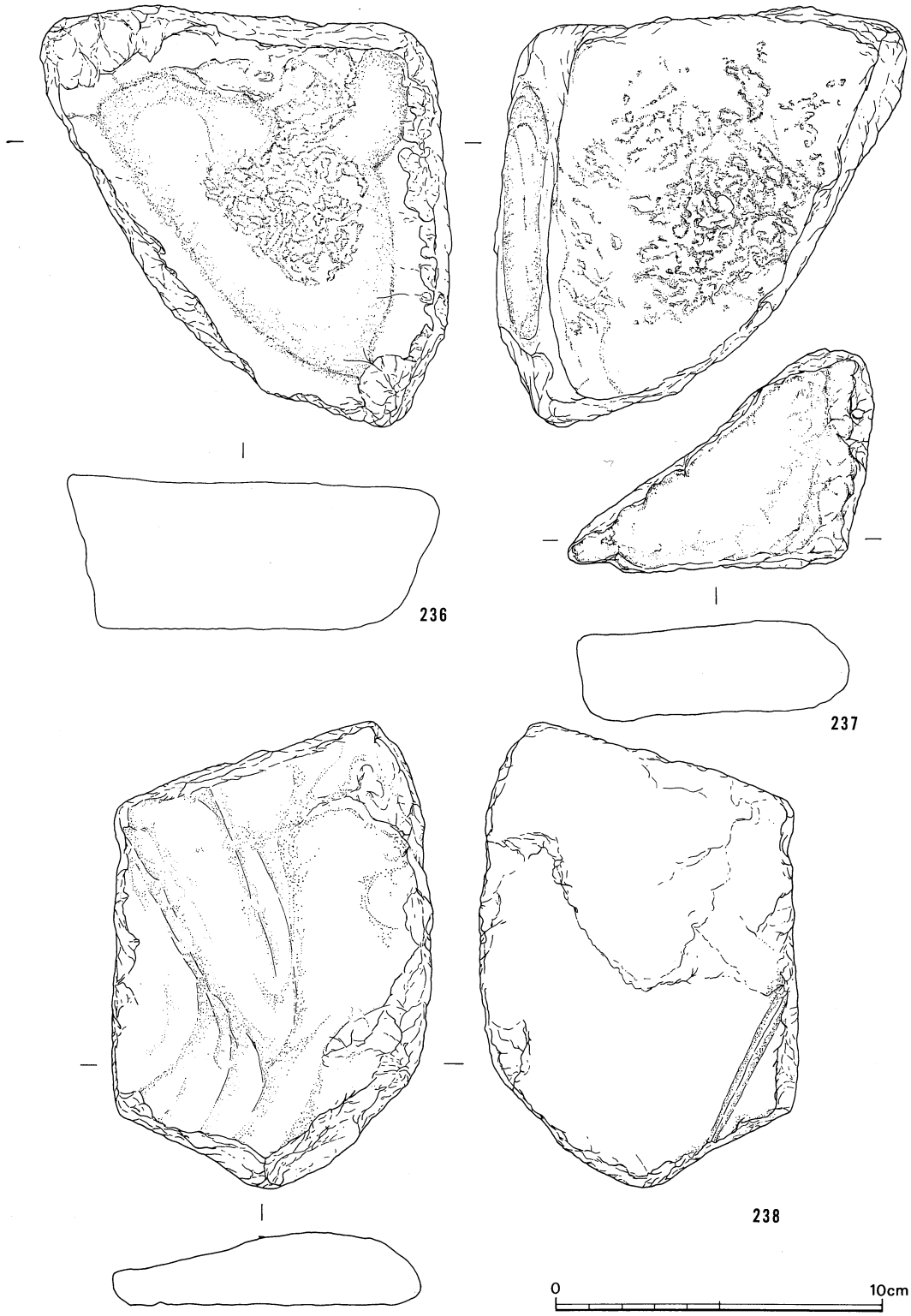
第96図　ＳＫ14、ＳＤ１、ＳＸ２出土遺物



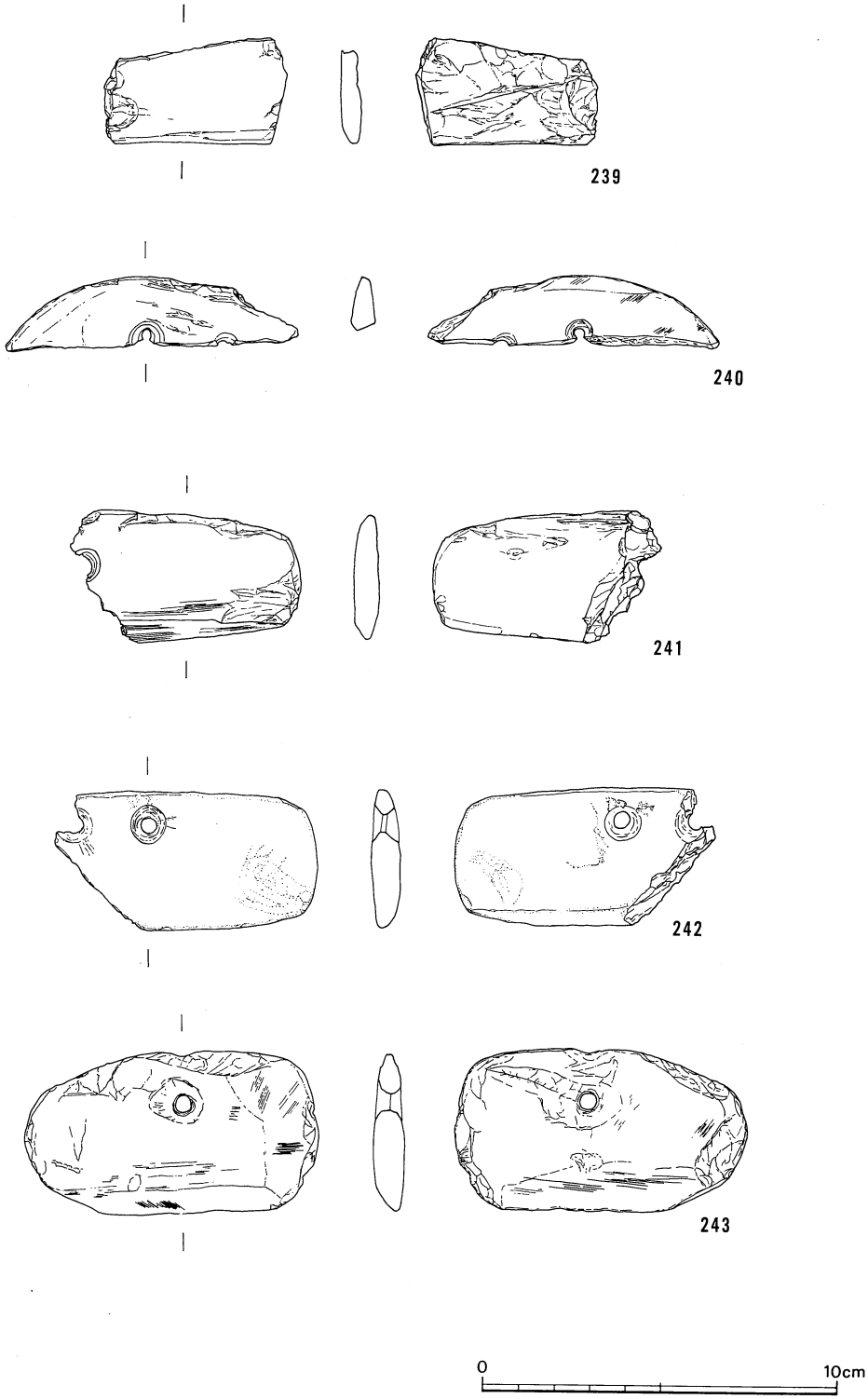
第97図　ＳＫ１・12・18、ＳＤ１出土遺物



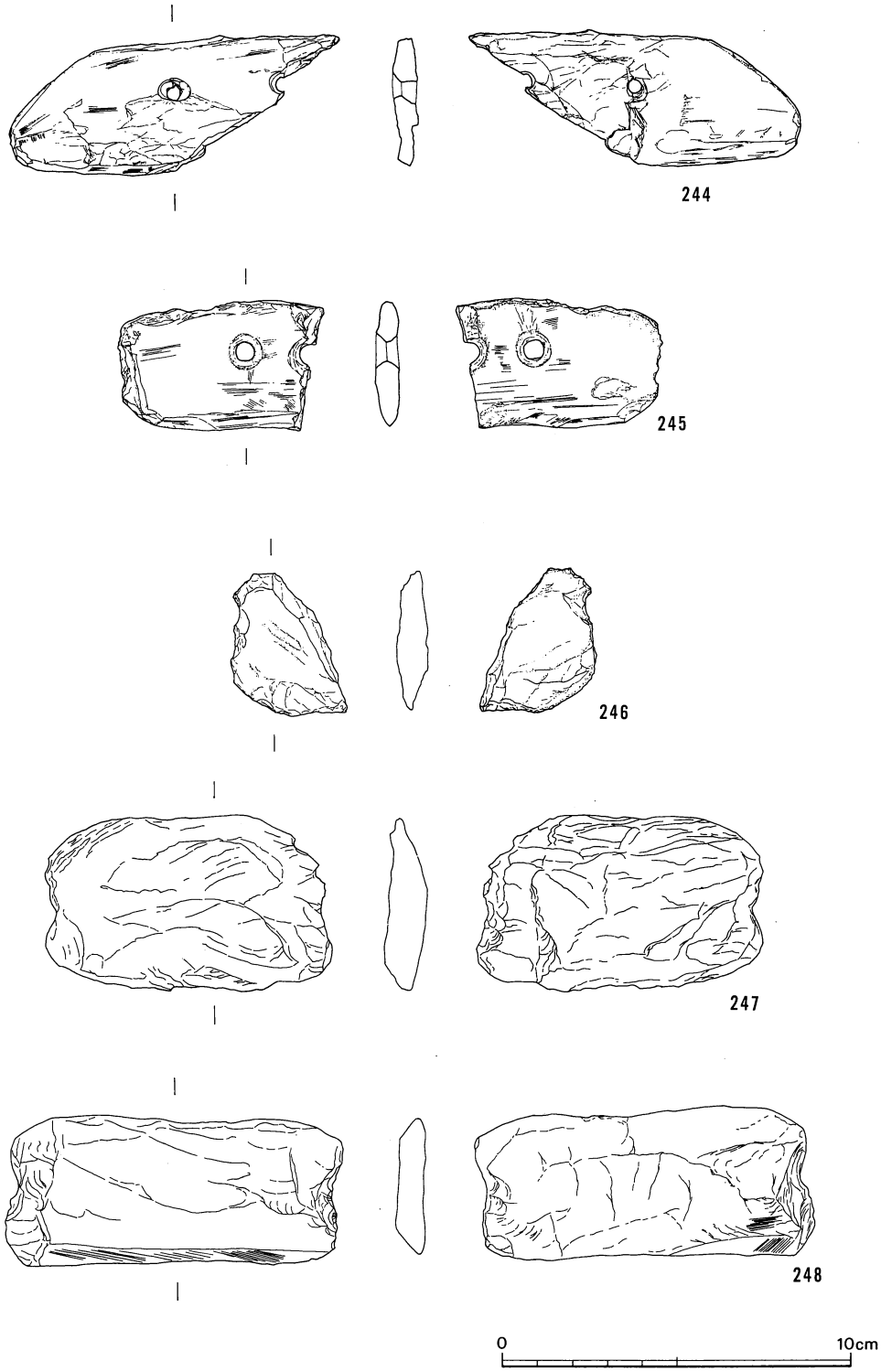
第98図　ＳＫ19、ＳＤ１・３、ＳＸ１出土遺物



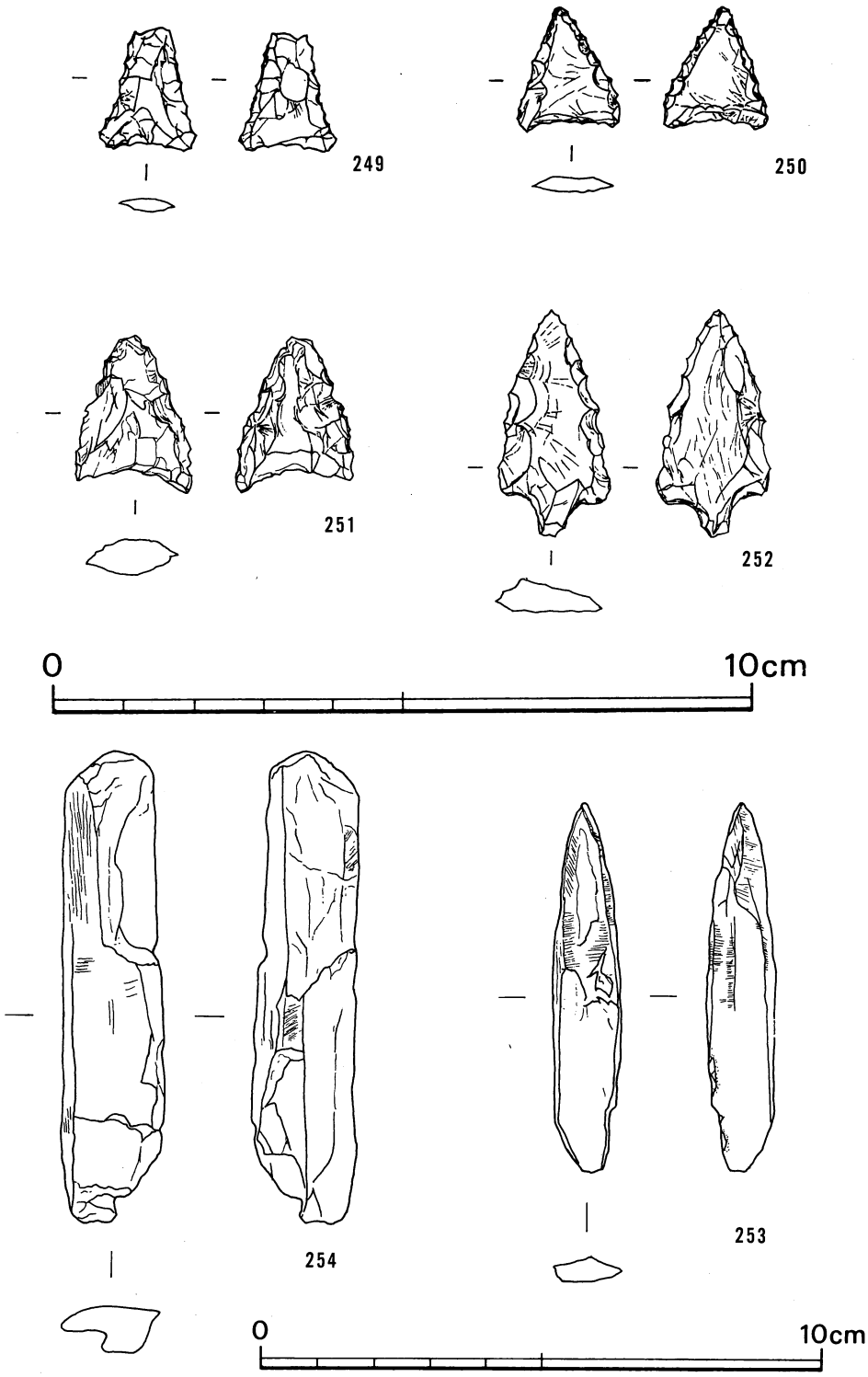
第99図　ＳＫ18、ＳＤ１出土遺物



第100図　ＳＤ１出土遺物



第101図　ＳＤ１、ＳＸ１・２出土遺物



第102図　ＳＫ１、ＳＤ１、Ｐ１出土遺物

第19表　D区遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
1	ST1	壺	18.2 (5.7) —— ——	口縁部は頸部から直線的に外方に開く。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付し、1条のヘラ描沈線を配する。	不　明。	
2	〃	〃	16.6 (5.4) —— ——	口縁部は直線的に外方に開く。端部はわずかに肥厚する。	〃	
3	〃	〃	16.0 (6.5) —— ——	口縁部はラッパ状に外反する。口唇部は上下に拡張し、3条の凹線文を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。頸部外面縦方向のハケ調整。	
4	〃	〃	31.2 (6.1) —— ——	口縁部大きく外反する。口唇部は凹状をなし、上下端に刻目を配する。頸部外面4条のヘラ描き沈線を配する。	口縁部外面に粘土帯を貼付。	
5	〃	〃	21.2 (5.0) —— ——	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は面をなす。	不　明。	
6	〃	〃	—— (4.4) —— 5.0	平底の底部。	〃	
7	〃	〃	—— (7.3) —— 9.0	〃	内面に指頭圧痕が顕著。内底より2cm上からコゲが付着している。	
8	〃	〃	—— (7.0) —— 7.0	〃	内面下→上のヘラ削りが認められる。	
9	〃	〃	—— (7.8) —— 8.2	〃	底部は厚いつくりで、内面に指頭圧痕が認められる。	
10	〃	甕	13.8 (5.2) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は上下に拡張され、2条の凹線文を配する。	外面縦方向のハケ調整。内面は頸部まで右→左上りのヘラ削り。口縁部内外面横方向のナデ調整を施す。	
11	〃	〃	14.3 (10.8) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は外傾する面をなす。	頸部内面に指頭圧痕あり。口縁部内外面横方向のナデ調整。	
12	〃	〃	20.0 (13.1) —— ——	口縁部は丸味をもって外反する。口唇部は外傾する面をなす。口頸部外面に2段の列点文を配する。	口唇部及び口縁部内外面横方向の強いナデ調整。胴部内面に指頭圧痕あり。	
13	〃	〃	16.5 (11.1) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部はわずかに拡張され、2条の凹線文を配する。	口縁部内外面に横方向のナデ調整。胴部外面右下がりのハケ調整。	
14	〃	〃	17.0 (10.7) —— ——	口縁部は丸味をもって外反する。口唇部は面をなし、上端をつまみ上げている。	内面に指頭圧痕。	
15	〃	〃	—— (6.3) —— 9.0	平底の底部。	外面縦方向のハケ調整。内面は指頭圧痕が顕著。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
16	ＳＴ１	甕	—— (2.9) —— 11.1	平底の底部。	外面は縦方向のヘラ磨きを施す。	
17	〃	〃	—— (8.0) —— 6.0	〃	内面に指頭圧痕が多く残る。	
18	ＳＫ１	壺	13.5 (9.0) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲し、直線的に伸びる。口唇部は丸くおさめる。	内面に指ナデ。	
19	〃	〃	16.5 (4.0) —— ——	口縁部は丸く外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面に横方向のヘラ磨きがわずかにみられる。	
20	〃	〃	—— (4.5) —— 8.5	平底の底部。	外面はヘラ磨きがわずかに見られる。	
21	〃	〃	—— (5.2) —— 10.4	〃	内外面ナデ調整。	
22	〃	〃	—— (3.5) —— 9.4	わずかに上げ底状を呈する。	不　　明。	内外面共に剝離が著しい。外底外縁が環状にススける。
23	〃	〃	—— (3.7) —— 6.8	平底の底部。	外面ヘラ磨きあり。	
24	〃	甕	24.9 (8.1) 23.2 ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は垂直な面をなし刻目を配する。	不　　明。	頸部外面以外は全面ススけている。
25	〃	〃	29.4 (13.5) 28.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、上に浅く下に深い刻目を配する。	〃	外面は全面がススけており、胴部下半は赤く変色している。
26	〃	〃	—— (4.2) —— 7.8	平底の底部。	外面縦方向のハケ調整を施す。	外面及び外底はススける。内底部より2cmほど上ったところからコゲが付着。
27	〃	〃	—— (5.9) —— 9.6	〃	〃	内底部より2cmほど上ったところからコゲが付着。
28	〃	鉢	18.0 (4.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり口唇部は水平な面をなす。	内外面横方向のヘラ磨き。	
29	ＳＫ２	壺	22.0 (3.5) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	外面縦方向のハケ調整がわずかに残っている。	
30	ＳＫ４	〃	22.0 (4.2) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部は一旦垂直に立ち上って強く外反する。口唇部は面をなす。	段部成形手法が観察できる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	ＳＫ４	壺	13.0 (9.5) —— ——	口頸間に段部を有し、更に沈線で隔する。段部には爪状の原体で列点文を配し、その間を２条のヘラ描沈線でむすぶ。頸部は縦方向に３条の沈線を配して区画をなし、２～３条からなる上弦の重弧文を配す。	外面全面ヘラ磨き。	
32	〃	〃	—— (4.5) —— 10.0	底部平底。	不　　明。	
33	〃	〃	—— (4.8) —— 10.0	〃	円盤貼付底。	外面はススけている。
34	〃	甕	28.0 (2.5) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。	不　　明。	〃
35	〃	〃	—— (1.5) —— ——	口縁端部を折り返して突帯状につくり、刻目を配する。	刻目は棒状工具による。	
36	〃	〃	—— (4.2) —— 6.0	底部平底。	外面ハケ調整。	
37	ＳＫ５	壺	7.5 18.0 12.5 4.9	最大径が胴部中位にある。頸部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反し直線的に立ち上がる。口縁部外面に粘土帯を貼付する。	内面に指頭圧痕が顕著、粘土帯の接合部を２ヶ所確認することができる。	
38	ＳＫ６	甕	18.2 (4.5) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部外面右下りのハケ調整。	
39	ＳＫ７	壺	—— (6.5) —— ——	口頸間に一見突帯のような段部を有し、刻目を配する。	段部は粘土帯接合によって生じたものである。段部の上下を強くおさえて横方向に強くナデる。	
40	〃	〃	—— (8.0) 28.4 ——	口頸間に段部を有する。	外面ヘラ磨き。	内外面共に剥離が著しい。
41	〃	〃	—— (4.3) —— 10.2	底部平底。	不　　明。	
42	〃	〃	—— (5.1) —— 9.0	〃	外面にヘラ磨きがわずかに残っている。	
43	〃	〃	—— (5.9) —— 8.7	〃	不　　明。	内外面共に器表面の剥離が著しい。
44	〃	〃	—— (4.5) —— 10.9	〃	〃	
45	〃	〃	—— (6.1) —— 8.0	わずかに上げ底状を呈する。	内面に指頭圧痕あり。	外底はススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
46	ＳＫ７	壺	—— (4.0) —— 8.8	底部平底。	内面に指頭圧痕あり。	
47	〃	甕	28.6 (5.8) —— ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。刻目はハケ状施文原体による。	
48	〃	〃	20.0 (10.0) 18.0 ——	口縁部は近く外反し、内面に稜を有する。口唇部は丸くおさめ、わずかに肥厚し、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。刻目はハケ状施文原体による。	外面全面ススけている。
49	ＳＫ８	壺	15.0 (7.3) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	段部はヘラによる押圧によって生じたものである。	
50	〃	〃	26.4 (9.2) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面ヘラ磨き。	
51	〃	〃	16.3 (11.0) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。段部に３条のヘラ描沈線を配する。	〃	
52	〃	〃	—— (9.0) —— ——	ヘラ描沈線４条からなる下弦の重弧文を配する。	〃	
53	〃	〃	—— (3.5) —— ——	３条のヘラ描沈線の下にヘラ描沈線４条からなる上弦の重弧文を配する。	〃	
54	〃	〃	11.9 (19.5) 18.0 7.0	口頸間に１条、頸胴間に３条のヘラ描沈線を配する。また頸胴間には４条からなる複線山形文を配する。	〃	
55	〃	〃	16.0 (29.5) 28.0 10.0	口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさめる。頸胴間に１条のヘラ描沈線を配する。上胴部に最大径を有する。	〃	
56	〃	〃	36.0 (9.0) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はわずかに外反し、口唇部は面をなす。	段部は口縁部外面に粘土帯を貼付することによって生じたもの。	
57	〃	〃	—— (11.7) —— ——	斜めに立ち上がる。	外面にヘラ磨きがわずかに認められる。	
58	〃	〃	19.0 (2.5) —— ——	口縁部はラッパ状に外反する。口唇部はわずかに凹状をなし、下端に刻目を配する。	口唇部は横方向のナデ調整。	
59	〃	〃	—— (4.0) —— 9.2	底部平底。	不　　明。	外底外縁部が環状にススけている。
60	〃	〃	—— (4.0) —— 8.4	〃	外面は縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施す。	外面がススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
61	ＳＫ８	壺	—— (9.5) —— 9.5	底部平底。	不　　明。	
62	〃	〃	—— (5.0 —— 10.5	わずかに上げ底状を呈する。	〃	内面は剝離が激しい。
63	〃	〃	—— (11.0) 24.0 ——	胴部球形。	外面ヘラ磨き。	
64	〃	〃	—— (4.5) —— 10.5	底部平底。	外面縦方向のハケ調整。内面に指頭圧痕あり。	
65	〃	〃	—— (5.5) —— 10.0	〃	内面に指頭圧痕あり。	
66	〃	〃	—— (6.0) —— 7.5	〃	底部内面に指頭圧痕あり。外面は縦方向のハケ調整。	
67	〃	〃	—— (4.4) —— 8.4	〃	内面に指頭圧痕あり。	
68	〃	〃	—— (11.5) —— 9.2	〃	外面は全面ヘラ磨きがあったと考えられるが、器表の剝離が著しく観察不可。	
69	〃	甕	15.5 (8.5) —— ——	卵倒形の体部。口縁部は丸みをもって「く」の字状に外反する。口唇部は上下に拡張され、外面に２条の凹線文を配する。	口頸部内外面共に横方向の強いナデ調整。頸部内面に凹線が入る。内面下半は下→上のヘラ削りあり。	外面及び胴部内面下半はススけている。
70	〃	〃	16.6 (5.5) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は上方に拡張され、２条の凹線文を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。内面屈曲部は強い横方向のナデにより凹線状をなす。胴部内外面ナデ調整。	
71	〃	〃	20.7 (4.5) —— ——	口縁部に段を有し、如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配する。	口縁部内面横方向のハケ調整。口縁部内外面横方向のナデ調整を施す。	
72	〃	〃	18.4 (5.4) 17.2 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
73	〃	〃	20.8 (5.8) 18.8 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下半に刻目を施す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。刻目はハケ状施文原体による。外面右下りのハケ調整。	
74	〃	〃	26.0 (17.0) 22.4 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	内面は指頭圧痕が顕著。	胴部下半がススけている。
75	〃	〃	22.5 (7.5) 21.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下半に刻目を施す。	口唇部及び口縁部内外面は横方向にナデる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
76	ＳＫ８	甕	18.5 (5.5) 18.2 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	頸部内面に指頭圧痕あり。	
77	〃	〃	22.0 (8.0) 20.6 ――	口縁部は如意形に外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸くおさめ､全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。		
78	〃	〃	20.7 19.7 ―― 8.5	口縁部は直線的に外反し、端部はやや肥厚気味。口唇部は外傾する面をなし下端に刻目を配する。	外面は縦方向のハケ調整。内面に指頭圧痕が顕著。	
79	〃	〃	25.6 (4.3) ―― ――	口縁部は如意形に外反し､段部を有する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口唇部及び口縁部内外面横方向の強いナデ調整。段部は粘土帯の貼付による。	
80	〃	〃	31.0 (5.0) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配する。また上胴部にも列点文を配する。	口縁部内面に横方向のハケ調整。口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。	
81	〃	〃	21.1 21.2 18.4 8.3	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下半に刻目を配する。	外面はハケ調整があったものと考えられる。	焼成後に底部穿孔。胴部外面はススけており下半は赤く変色している。
82	〃	〃	19.3 (10.0) 17.4 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	〃	
83	〃	〃	33.0 (6.5) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、上半に刻目を施す。	口唇部下端をつまんで、口唇部及び口縁部外面を横方向にナデる。	
84	〃	〃	23.0 27.5 21.0 7.2	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	口唇部及び口縁部内外面は横方向に強くナデる。	焼成後底部に穿孔。外面胴部中位以下ススけている。下位は赤く変色。
85	〃	〃	19.0 (15.5) 17.4 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、刻目を施す。	口縁部外面に横方向の強いナデ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整を施すが、上胴部は横方向のナデによって消えている。	外面は全面ススけている。
86	〃	〃	21.4 (4.6) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
87	〃	〃	21.6 (6.0) 19.2 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸味をおびており、下半に刻目を施す。頸部にヘラ描沈線１条を配する。	口縁部内面は横方向のナデ調整。	外面頸部以外は全面ススけている。
88	〃	〃	21.5 (8.5) 19.7 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を施す。	不　　明。	
89	〃	〃	26.0 (5.0) ―― ――	口縁部はなめらかに外反する。口唇部は凹状をなし、下端に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
90	〃	〃	21.0 (18.7) 13.5 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ下半に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。	胴部下半はススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
91	ＳＫ８	甕	22.6 (9.6) 21.3 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口唇部下端をつまみ出すようにして、横方向に強くナデる。口縁部外面横方向のナデ調整。	
92	〃	〃	27.0 (24.0) 26.0 ——	口縁部は如意形に外反し、しっかりした段部を有する。口唇部は丸くおさめ､全面に刻目を施す。	口縁部外面縦方向、胴部外面右下りのハケ調整を施す。口縁部内外面及び段部直下は横方向の強いナデ調整。	外面胴部上半はススけており、下半は赤く変色している。
93	〃	〃	22.5 33.0 24.0 9.5	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸味をおびており、全面に刻目を施す。	頸部外面横方向のナデ調整。胴部外面縦方向のハケ調整。	外底縁部が１cm幅で環状にススけている。
94	〃	〃	25.2 (8.5) 25.0 ——	上胴部に段部を有し、口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。段部にも刻目を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。外面縦方向のハケ調整。	外面は全面ススけている。
95	〃	〃	28.0 (13.0) 28.6 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
96	〃	〃	24.5 (14.0) 25.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	胴部外面全面ススけている。
97	〃	〃	24.8 (16.0) 22.6 ——	口縁部は直線的に外反する。口唇部は外傾する面をなし、刻目を施す。	外面縦方向のハケ調整。	外面上胴部以下ススけている。下半は赤く変色する。
98	〃	〃	24.5 (18.5) 24,0 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。頸部外面に１条のヘラ描沈線を配する。	外面縦方向のハケ調整。口縁部外面横方向の強いナデあり。	胴部外面全面ススけている。下半は赤く変色する。
99	〃	〃	20.2 (18.0) 20.3 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	口縁部内面は横方向のハケ調整。外面横方向のナデ調整。胴部外面右下りのハケ調整。	胴部外面ススけている。胴部下位は赤く変色している。
100	〃	〃	37.4 (7.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を配する。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	〃
101	〃	〃	—— (6.0) —— 8.3	上げ底状の底部。	不　　明。	外面は赤く変色し、ススけている。
102	〃	〃	—— (4.0) —— 8.4	底部平底。	〃	外底及び内面がススけている。
103	〃	〃	—— (5.0) —— 7.2	〃	〃	
104	〃	〃	—— (4.0) —— 8.5	〃	外面縦方向のハケ調整。内面に指頭圧痕あり。	
105	〃	〃	—— (3.2) —— 8.5	〃	外面縦方向のハケ調整。	外面は赤く変色しススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
106	ＳＫ８	甕	—— (6.5) —— 7.5	底部平底。	不　　明。	外底、外面が全面ススけている。外面は赤く変色している。内面は底部より若干上ったところがススける。
107	〃	〃	—— (11.0) —— 9.0	わずかに上げ底状を呈する。	〃	
108	〃	〃	—— (9.5) —— 8.0	底部平底。	内面に指頭圧痕あり。	
109	〃	鉢	20.5 (8.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施す。特に口唇部は丁寧にヘラ磨きを施す。	口唇部及び口縁内面がススけている。
110	〃	〃	6.7 4.5 7.0 5.3	底部から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	全面に指頭圧痕が顕著にみられる。手捏ねの鉢である。	
111	〃	〃	35.0 (10.0) —— ——	口縁部は如意形に外反し、段部を有する。口唇部は外傾する面をなす。	段部は粘土帯の接合によって生じたものである。	
112	ＳＫ９	壺	—— (2.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
113	〃	甕	—— (2.3) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を配する。	口縁部内面横方向、外面は縦方向のハケ調整を施す。	
114	〃	〃	24.0 (3.2) —— ——	胴部は大きく張り出す。口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。	口縁部内外面横方向のハケ調整を施す。	
115	〃	〃	25.0 (5.0) —— ——	内湾気味に立ち上がった胴部から口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口唇部はヘラ磨き。口縁部外面横方向のナデ調整。	
116	ＳＫ12	壺	—— (4.0) —— ——	胴部に削り出し突帯を有する。突帯上に細いヘラ描沈線を１条配し、突帯の下に縦方向に２条の沈線を配する。更に縦方向の沈線をはさんで２～３条からなる重弧文を配する。削り出し突帯上にも下弦の重弧文を配する。		
117	〃	甕	—— (4.0) —— 7.3	底部平底。	外面は縦方向のハケ調整。	
118	ＳＫ13	壺	—— (4.0) —— 8.5	〃	不　　明。	
119	〃	〃	—— (3.5) —— 9.2	〃	〃	
120	〃	〃	—— (25.0) 28.0 ——	口頸間に貼付突帯、頸胴間に削り出し突帯を有する。最大径は胴部中位にあり。	外面横方向のヘラ磨き。内面は胴部中位以上は横方向のヘラ磨き。下半はナデ調整である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
121	ＳＫ13	壺	—— (17.0) 44.4 ——	頸胴間に段を有する。	ヘラ磨きがあったと考えられるが、器表の荒れが著しいため、観察不能。	
122	〃	甕	19.3 (10.0) 19.2 ——	上胴部に段を有する。口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を施す。段部にも刻目を施す。	段は粘土帯の接合によって生じたものである。上胴部外面に横方向のハケ調整がみられる。口頸部内面に指頭圧痕あり。	
123	〃	〃	26.0 (7.0) 22.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。	口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。	外面は全面ススけている。
124	〃	〃	17.6 (7.5) 15.9 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向の強いナデ調整あり。	
125	〃	〃	—— (14.0 —— 9.8	底部平底。	外面は縦方向のハケ調整。内面は全面横方向のナデ調整を施す。	
126	〃	〃	—— (5.0) —— 8.3	〃	外面は縦方向のハケ調整。内面は指頭圧痕を認める。	
127	〃	〃	—— (6.5) —— 8.8	底部は外方に張り出し気味である。	底部外面は横方向のナデあり。	外面はススけており赤く変色する。
128	〃	〃	—— (4.5) —— 6.3	上げ底状の底部。	不　　明。	外面はススけており赤く変色する。
129	〃	鉢	5.5 3.0 —— 3.5	内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。	手捏ねで、全面に指頭圧痕がみられる。	
130	〃	壺	—— (5.0) —— 8.5	底部は外方に張り出し気味。	外面縦方向のハケ調整、内面に指頭圧痕あり。	
131	ＳＫ15	〃	—— (2.5) —— ——	櫛描波状文を施文。単位は不明。	不　　明。	
132	〃	〃	—— (3.5) —— ——	胴部外面に２条のヘラ描沈線を引き、その下に斜格子文を配する。	〃	
133	〃	〃	—— (2.0) —— ——	口縁部外面に幅２cmの粘土帯を貼付し、わずかに凹状をなした口唇部にはハケ状施文原体で、刻目を施す。		
134	〃	〃	—— (1.5) —— ——	大きく外反する口縁部で、口唇部は凹状をなす。内面に扁平な刻目突帯を貼付する。口唇部下端に刻目を施す。		
135	〃	〃	—— (2.0) —— ——	口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は凹状をなし、上下端に刻目を配する。	口唇部は横方向のナデ調整、外面縦方向のハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
136	ＳＫ15	壺	—— (4.0) —— ——	口縁部は大きく外反する。口唇部は面をなし上・下端に刻目を施す。	不　　明。	
137	〃	〃	18.3 (4.0) —— ——	口縁部は頸部からそのままなめらかに外反する。外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付する。頸部に櫛描波状文と直線文を配する。	内面は横方向のハケ調整。口唇部は横方向のナデ調整。	
138	〃	〃	14.0 (6.3) —— ——	口縁部は直線的に外反する。口唇部に１条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
139	〃	〃	17.0 (4.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面は横方向のヘラ磨き、外面は縦ハケ調整後、ヘラ磨きを施す。	
140	〃	〃	6.0 (2.5) —— ——	底部平底。		薄手式土器である。
141	〃	甕	21.0 (7.0) —— ——	胴部が著しく張り出す甕である。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は水平な面をなす。口唇端部に左上りの刻目を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。	外面は全面がススけている。
142	〃	〃	14.5 (8.0) 13.5 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に１条のヘラ描沈線を配し、その上に刻目を施す。	口縁部内面横方向のハケ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整後、右下りのハケ調整を施す。	外面全面がススけている。
143	〃	〃	—— (5.0) —— ——	口縁部は如意形に外反し、弱い段を有する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を配する。段部にも刻目を配する。	外面全面に横方向のナデを施すが、口縁部外面は特に強い。	
144	ＳＫ16	壺	—— (3.0) —— ——	２条のヘラ描沈線を配し、その下に上弦の重弧文を配する。	不　　明。	
145	〃	〃	—— (6.0) —— ——	頸胴間に弱い段を有する。横方向に３条のヘラ描沈線を配し、その下に縦に３条単位の沈線を引き、その間に縦向きの有軸羽状文を配する。	外面は全面横方向のヘラ磨きを施す。	
146	〃	〃	15.2 (3.0) —— ——	口頸間に段部を有し、口縁部は直線的に外反する。口唇部は外傾する面をなす。	口縁部内面横方向のナデ調整。	
147	〃	〃	15.5 (6.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、端部はやや肥厚する。口唇部は外傾する面をなす。	不　　明。	
148	〃	〃	—— (3.0) —— 7.5	底部平底。	底部外面に指頭圧痕あり。内面はヘラ磨き。胴部外面は縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施す。	
149	〃	〃	—— (4.5) —— 11.3	上げ底状の底部。	内面に指頭圧痕あり。	
150	〃	〃	—— (3.0) —— 8.4	底部平底。	不　　明。	器表の剥離が著しい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
151	ＳＫ16	壺	—— (5.0) —— 5.0	内湾して立ち上がる。	不　　明。	
152	〃	〃	—— (6.0) —— 8.0	円筒状の底部。	外面ハケ調整後に右下りのヘラ磨きを施す。	
153	〃	〃	—— (10.0) —— 8.7	底部平底。	円盤貼付底。	
154	〃	甕	—— (4.0) —— ——	口縁部は如意形に外反し、段を有する。段部直上に１条のヘラ描沈線を配する。口唇部及び段部に刻目を施す。	不　　明。	
155	〃	〃	—— (2.5) —— ——	口線部が直線的に立ち上がり、端部は外方に肥厚する。	端部の肥厚は粘土折り曲げによる。内外面横方向のナデ調整。	
156	〃	〃	—— (5.0) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は垂直な面をなし、刻目を施す。頸部には双線を引き、その間に棒状工具で刺突文を配する。	刻目はヘラ状原体による。	
157	〃	〃	23.0 (8.2) 21.4 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面横方向のナデ調整あり。	
158	〃	〃	19.0 (9.3) 19.2 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	刻目はヘラ状原体による。口縁部外面に指頭圧痕あり。	
159	〃	〃	25.0 (6.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線あり。	胴部外面に縦方向のハケ調整をわずかに認める。	
160	〃	〃	5.0 (7.5) 47.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	内面指ナデ。	
161	〃	〃	—— (4.0) —— 8.0	底部平底。	外面縦方向のハケ調整。内面は指頭圧痕が顕著。	外底は全面ススけている。
162	〃	〃	—— (5.5) —— 7.0	〃	外面縦方向のハケ調整。	
163	〃	〃	—— (4.0) —— 9.0	〃	外面縦方向のハケ調整。	
164	〃	〃	—— (3.0) —— 7.0	わずかに上げ底状を呈する。	〃	
165	〃	鉢	18.5 (7.5) —— ——	わずかに内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
166	ＳＫ19	壺	20.8 (2.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反。口唇部は面をなす。	口縁部内面横方向のヘラ磨き。口唇部及び口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
167	〃	甕	26.0 (7.0) 22.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	刻目はハケ状原体による。口縁部内外面横方向のナデ調整。	口唇部を横方向にナデた時に下垂した粘土を口縁部外面に折り曲げている。
168	〃	〃	20.2 (11.0) 18.2 ——	口縁部は如意形に強く外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。胴部外面縦方向のハケ調整を施す。	外面全面がススけている。胴部下半は赤く変色している。
169	〃	〃	—— (2.6) —— 4.2	底部平底。	底部内外面に指頭圧痕あり。	
170	〃	鉢	19.0 (6.5) —— ——	内湾して立ち上がり、口唇部は面をなす。	内外面横方向のハケ調整。	
171	ＳＫ20	壺	—— (5.0) —— ——	胴部外面にヘラ描沈線４条からなる複線山形文を認める。	外面ヘラ磨き。	
172	〃	〃	—— (4.5) —— ——	３条のヘラ描沈線の下に同原体で４条からなる複線山形文を認める。	〃	
173	〃	〃	15.5 (6.5) —— ——	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	外面全面ヘラ磨きを施す。	
174	〃	〃	15.4 (3.5) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	〃	
175	〃	〃	17.0 (4.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	口唇部及び口縁部内面は横方向のナデ調整。口頸部外面はヘラ磨きを施す。	
176	〃	〃	32.0 (7.5) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	段部は粘土帯の接合の際に生じたものである。	
177	〃	〃	—— (3.5) —— 6.5	底部平底。	円盤貼付底。内外面ヘラ磨き。	
178	〃	〃	—— (5.0) —— 7.2	〃	円盤貼付底。内面に指頭圧痕あり。	
179	〃	〃	—— (6.0) —— 9.4	〃	外面ヘラ磨きあり。	
180	〃	〃	—— (6.0) —— 9.4	〃	外面縦方向のハケ調整。内面指頭圧痕あり。	外底外縁は１cm幅で環状にススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
181	ＳＫ20	甕	25.0 (4.5) —— ——	口縁部は直線的に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。頸部外面にヘラ描沈線を１条配する。	口頸部内面に右下りのハケ調整をわずかに認める。	
182	〃	〃	22.7 (5.8) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。胴部外面縦方向のハケ調整。	
183	〃	〃	28.6 (4.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向のナデ調整を施す。	
184	〃	〃	32.8 (6.0) —— ——	上胴部に段部を有する。口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、下半に刻目を施す。段部にも刻目を施す。	段部は粘土帯接合時に生じたものである。	
185	〃	〃	31.0 (10.0) 28.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、下端に刻目を配する。	口縁部外面に指頭圧痕が残るが、横方向のナデによって消されている。	
186	〃	鉢	23.0 (10.5) 19.6 ——	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は指頭圧痕が顕著。胴部外面は右下りのヘラ磨き。口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
187	〃	〃	5.5 2.5 —— 5.3	底部からわずかに外反して立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	手捏ねである。	
188	〃	壺	17.5 (13.5) —— ——	口頸間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。頸胴間に１条の沈線あり。	外面は全面右下りのハケ調整後に、ヘラ磨きを施す。段部は粘土帯接合による。	
189	〃	〃	—— (7.0) —— ——	頸胴間に弱い段部あり。段部下に横方向のヘラ描沈線を引き、その下に５～６条を単位とする複線山形文を配する。	外面ヘラ磨き。	
190	〃	〃	34.0 (12.5) —— ——	口頸間にしっかりした段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は面をなす。	〃	
191	〃	甕	—— (5.5) —— 6.3	底部平底。	外面全面縦方向のハケ調整を施す。	
192	〃	〃	21.5 22.7 20.6 8.4	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下端に刻目を施す。	外面は縦方向のハケ調整。内面は指頭圧痕が顕著。	
193	〃	〃	20.5 27.0 19.2 8.0	口縁部は強く屈曲し、直線的に外方に伸びる。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。頸部付近は横方向。胴部は縦方向のハケ調整。	頸部以下外面全面が赤く変色し、ススけている。
194	〃	〃	40.6 (17.0) 43.0 ——	胴部は大きく張り出す。口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口唇部及び口縁部外面横方向の強いナデ調整。	
195	〃	〃	39.0 (24.0) 39.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を配し、更にヘラ描沈線を１条配する。上胴部に段部を有する。		胴部中位外面がススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
196	ＳＫ20	甕	21.5 (6.0) 20.5 ——	上胴部に段部を有する。口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ下半に刻目を施す。段部にも刻目を施す。	段部は粘土帯接合の際に生じたものである。	
197	〃	〃	15.3 (2.5) —— ——	口縁部は比較的直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。	不　明。	
198	〃	〃	—— (7.0) 21.3 ——	上胴部に段を有し、刻目を配する。	段部上下を横方向のナデ調整。外面は縦方向のハケ調整。段部は粘土帯接合によって生じたものである。	段部以下外面はススけている。
199	〃	〃	31.2 (8.7) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。外面右下りのハケ調整。	
200	〃	鉢	31.0 (5.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。口縁下に断面三角形のしっかりした刻目突帯を貼付する。口唇部は面をなし、下端に刻目を施す。		
201	〃	〃	46.0 30.0 44.5 13.0	底部から内湾して立ち上がり、口縁部は如意形に外反し、しっかりした段階を有する。口唇部は外傾する面をなす。	口縁部外面は横方向のナデ調整。外面は縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施していたものと考えられる。	
202	ＳＤ１	壺	—— (3.0) —— ——	胴部に２条のヘラ描沈線を配し、その上に３条単位のヘラ描きによる下弦の重弧文を配する。	外面ヘラ磨き。	
203	〃	〃	—— (5.0) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部はわずかに凹状をなす。	段部は粘土帯の接合によって生じたものである。口縁部外面には指頭圧痕があるが、横方向のハケ調整によって消している。	
204	〃	〃	16.0 (7.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面は横方向のヘラ磨き。	
205	〃	〃	—— (8.0) 33.7 ——	上胴部に３条のヘラ描沈線を配す。	外面横方向のヘラ磨き。内面は指頭圧痕が残る。	
206	〃	〃	—— (20.0) 28.4 ——	頸胴間に段部あり。	外面はハケ調整後全面ヘラ磨きを施す。頸部内面ヘラ磨き。	
207	〃	〃	—— (6.0) —— 5.5	底部平底。	外面は板状工具による縦方向のナデ調整。	
208	〃	〃	—— (5.0) —— 8.2	〃	外面は横方向のナデ調整。	外面はススけている。底部外面に糸圧痕あり。
209	〃	〃	—— 16.0 (27.0) ——	頸胴間に段部を有する。	胴部外面横方向。頸部外面右下りのヘラ磨きあり。	
210	〃	甕	—— (5.0) —— 9.3	底部平底。	外面は縦方向のハケ調整。	外面は赤く変色し、ススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
211	ＳＤ１	甕	—— (5.0) —— 6.4	底部平底。	外面は縦方向のハケ調整。	内面に炭化物が付着している。
212	〃	〃	—— (6.0) —— 6.7	〃		外底外縁に環状にススが付着。
213	〃	〃	22.5 (16.0) 22.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。頸部に沈線を配する。	口縁部外面は縦ハケの後に横方向の強いナデ調整を施す。上胴部横方向下胴部縦方向のハケ調整。	沈線以下が全面ススけている。
214	〃	〃	18.3 (6.4) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。頸部に１条のヘラ描沈線を配する。	外面右下りのハケ調整。	
215	〃	〃	24.6 (7.1) 24.2 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部には３条のヘラ描沈線を配す。	口縁部外面に指頭圧痕が顕著。外面は右下り、内面は横方向及び右下りのハケ調整を施す。	外面施文部以外全面ススけている。
216	〃	〃	20.2 (9.8) 18.5 ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部にヘラ描沈線を１条配する。	沈線下に指頭圧痕あり。外面は右下りのハケ調整。上胴部及び口縁部外面は横方向のナデ調整。	上胴部以下外面はススける。搬入品である。
217	〃	〃	13.0 (4.0) 12.6 ——	直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈す。	口縁部は折り曲げている。内面にわずかにハケ調整を認める。	外面はススけている。 擬朝鮮無文土器。
218	Ｐ　37	鉢	29.5 (6.0) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は水平な面をなす。	内外面ヘラ磨き。	

第20表　Ｄ区遺構出土石器観察表

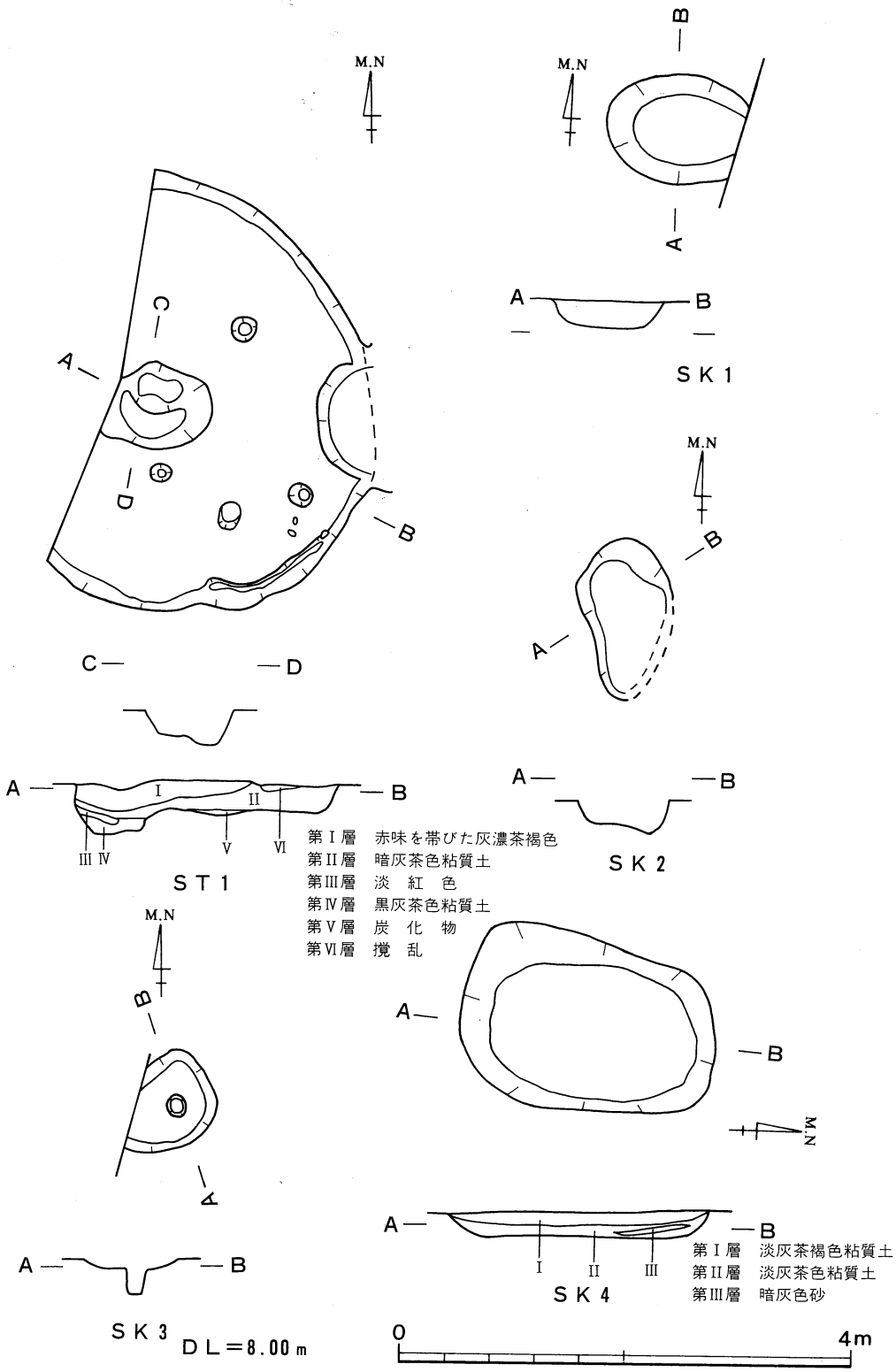
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
219	田村川	石斧	12.8 7.4 4.0 725.0	緑色岩	刃部と基端部が欠損している。全面丁寧に研磨されている。断面は楕円形をなし、平面形は隅丸長方形になるものと考えられる。	
220	〃	〃	11.8 6.7 3.0 475.0	〃	平面形は隅丸長方形で断面はやや扁平な楕円形をなす。刃部は丁寧に研磨されているが、刃先に打痕がみられる。	
221	〃	〃	14.0 6.5 3.5 600.0	〃	大型峪刃石斧の基部であると考えられる。基端部は尖基を呈し、刃部に最大幅を有するものであると考えられる。表面の研磨はみられない。両側縁には敲打による潰痕が著しく見られる。	
222	〃	〃	12.0 6.6 4.0 470.0	〃	刃部が欠損しているが最大幅が刃部にあるものと考えられる。基端は丸味をおびて尖基を呈する。断面は楕円形で、丁寧に研磨されている。	
223	ＳＫ８	〃	8.3 5.8 0.8 55.0	頁　岩	基部が欠損している。両主面が剥離面で、先端部の一部に自然面を残す。刃縁はゆるやかに外反し、刃先に潰痕がみられる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm, g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
224	田村川	石斧	16.0 8.7 6:3 1675.0	緑色岩	太型蛤刃石斧の未製品である。器表に多くの剥離痕がみられる。成形段階で欠損したものと考えられる。	
225	ＳＤ１	〃	11.0 7.5 5.0 660.0	〃	太型蛤刃石斧の基部である。断面は楕円形で、刃部に最大幅を有するものと考えられる。全面丁寧に研磨されているが、両側縁には敲打による著しい潰痕がみられる。欠損後叩石として利用されたものであろう。	
226	田村川	〃	15.0 3.4 5.5 450.0	〃	約半分が縦に欠損している。最大幅を基部中央部に有し、基端及び刃縁は丸くおさまるものである。片主面の刃部のみに研磨痕が見られ、他は全く研磨されていない。未製品の段階で欠損したものであろう。	
227	ＳＫ８	〃	4.0 3.4 1.2 15.0	頁　岩	小型の蛤刃石斧である。両主面ともに大きく欠損しており、刃部の一部しか残っていない。刃部は丁寧に研磨されている。	
228	田村川	〃	6.9 5.0 1.7 105.0	緑色岩	太型蛤刃石斧の基部である。断面は扁平な楕円形を有する。刃部に最大幅を有すると考えられる。全面研磨されている。	
229	ＳＫ８	〃	10.2 6.6 2.1 230.0	結晶片岩	断面は扁平な楕円形を呈し、刃部に最大幅を有し、基端が最もせまい。刃部は丁寧に研磨されているが、基部は荒成形のままである。	
230	田村川	〃	13.7 7.0 4.0 600.0	〃	断面は楕円形を呈し、基部中央に最大幅を有する。基端部は欠損している。全面に敲打痕が残り研磨は見られない。太型蛤刃石斧の未製品である。	
231	ＳＤ１	〃	6.0 3.5 3.4 150.0	〃	抉入柱状片刃石斧の基部である。全面研磨により光沢をはなっている。後側縁基端近くに浅い抉りが見られる。	
232	ＳＫ８	〃	6.3 2.2 1.3 25.0	頁　岩	ノミ形石器と言った方がよいかも知れない。棒状の河原石を利用し、先端に両面から刃部をつくり出している。刃部に擦痕が見られる。	
233	ＳＫ13	〃	10.0 4.5 1.2 68.0	〃	自然面と剥離面とからなる打製石斧である。分銅形の平面形を呈する。全縁部に潰痕が見られる。叩石の可能性もある。	
234	ＳＤ１	〃	14.4 5.5 1.0 110.0	結晶片岩	柱状片刃石斧が、縦に欠損している。右主面と前側縁、後側縁部の一部が残っている。刃部は鋭く研ぎ出されている。剥離以外は全面研磨されている。	
235	田村川	〃	7.4 1.9 0.9 20.0	〃	扁平片刃石斧、あるいは柱状片刃石斧の刃部小片である。右主面と前後側縁部の一部が残っている。	
236	〃	〃	22.0 9.5 3.6 1440.0	緑色岩	太型蛤刃石斧の未製品である。全面に敲打痕及び剥離痕がみられる。成形の段階で廃棄されたものである。	
237	ＳＫ16	〃	33.0 14.0 6.4 4500.0	〃	〃	
238	田村川	叩石	9.1 8.2 2.5 245.0	砂　岩	河原石を縦に打ち割っている。自然面と剥離面とからなり、全縁部に潰痕がみられる。	

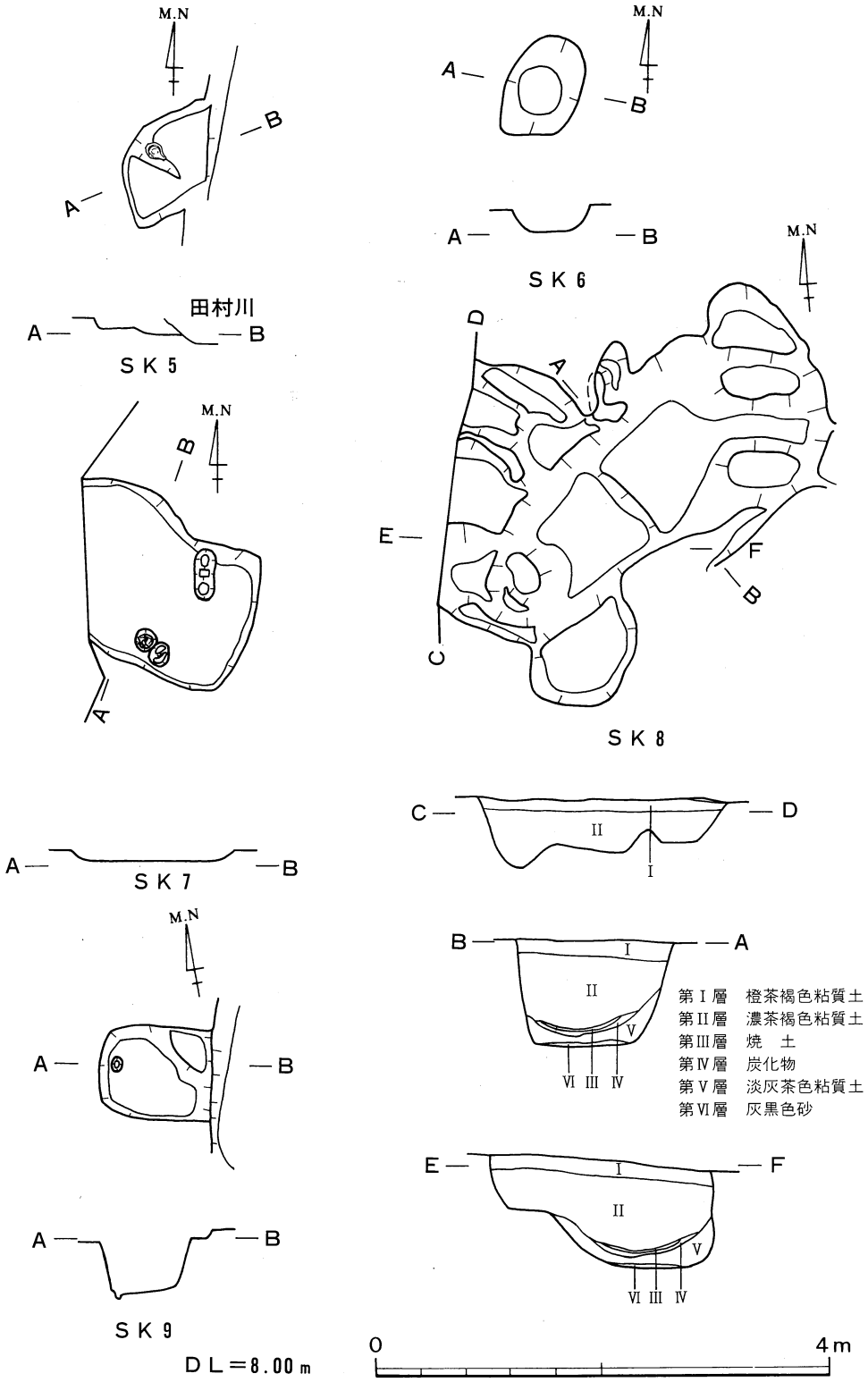
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm, g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
239	田村川	叩石	9.0 6.0 2.2 135.0	砂　岩	河原石を縦に打ち割っている。自然面と剥離面とからなり、全縁部に潰痕がみられる。	
240	〃	〃	7.2 6.4 1.3 90.0	〃	〃	
241	〃	〃	8.6 7.6 2.0 190.0	〃	〃	
242	ＳＫ８	〃	7.8 7.5 1.5 100.0	〃	〃	
243	田村川	〃	9.7 7.7 1.8 195.0	〃	〃	
244	〃	〃	9.2 6.2 2.1 170.0	〃	〃	
245	ＳＫ８	〃	8.1 6.4 1.8 120.0	〃	〃	
246	〃	〃	7.2 6.7 1.5 85.0	〃	河原石を縦に打ち割っている。自然面と剥離面とからなり、縁部の一部に潰痕がみられる。	
247	ＳＴ１	〃	7.6 5.3 1.6 75.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなる。全縁部に潰痕がみられる。	
248	田村川	〃	9.0 7.7 2.0 195.0	〃	〃	
249	ＳＫ８	〃	8.6 6.4 1.7 135.0	〃	〃	
250	田村川	〃	17.5 9.6 3.0 660.0	〃	〃	
251	〃	〃	12.5 9.3 3.1 500.0	〃	〃	
252	〃	〃	10.0 9.8 1.7 185.0	〃	河原石を縦に割って利用している。自然面と剥離面とからなる。縁部の１部に潰痕がみられる。	
253	〃	〃	8.3 6.7 1.2 105.0	〃	河原石を縦に割って利用している。自然面と剥離面とからなる。全縁部に潰痕が見られる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm, g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
254	田村川	叩石	12.9 9.8 2.2 403.0	砂　岩	河原石を縦に割って利用している。自然面と剝離面とからなる。全縁部に潰痕がみられる。	
255	ＳＫ７	〃	9.5 4.7 2.4 140.0	〃	縦長の叩石である。河原石を縦に割って利用している。全縁部に潰痕がみられる。	
256	田村川	〃	10.2 5.8 3.0 231.0	〃	約半分を欠損している。河原石を縦に割って利用している。欠損面以外の全縁部に潰痕がみられる。	
257	〃	〃	9.2 5.9 1.8 150.5	〃	扁平な隅丸長方形の河原石をそのまま利用している。全縁部に潰痕がみられる。表面には大きな剝離痕がある。	
258	〃	〃	9.2 9.8 3.6 545.0	〃	円形の河原石をそのまま利用している。表裏面中央部に潰痕がみられ、縁部の一部を集中して使用している。	
259	〃	〃	11.6 11.8 4.6 900.5	〃	円形の河原石をそのまま利用している。全縁部に潰痕がみられ、表裏面の中央部に著しい潰痕があり、凹状をなしている。	
260	〃	〃	9.8 5.6 1.7 185.0	緑色岩	扁平楕円形の河原石を利用している。一方の長側縁に両面からの剝離痕と敲打による潰痕がみられる。	
261	ＳＴ１	〃	8.5 6.4 1.4 115.0	砂　岩	河原石を縦に打割して利用している。自然面と剝離面とからなり、縁部の一部に潰痕がみられる。	
262	ＳＫ８	〃	15.0 12.0 5.3 1570.0	〃	２側縁に剝離面がある。表裏面は自然面であり、両面共に敲打による潰痕がみられる。	台石として利用された可能性あり。
263	田村川	〃	10.0 9.1 4.2 600.0	〃	楕円形の河原石をそのまま利用している。両面中央部及び全縁部に潰痕がみられる。	
264	ＳＫ８	〃	11.8 11.0 3.8 605.0	〃	円形の河原石を利用している。両面に大きな剝離痕がみられる。両面中央部に潰痕がみられる。	
265	ＳＫ16	砥石	14.8 14.0 6.2 2200.0	〃	１面を砥石として利用している。また使用面に潰痕がみられる。	
266	田村川	〃	10.8 10.2 4.2 670.0	〃	２面を砥石として利用している。うち１面には著しい潰痕が残る。	
267	ＳＫ13	〃	10.6 4.3 1.7 133.0	緑色岩	河原石をそのまま利用している。使用面は１面である。	
268	ＳＫ８	〃	10.2 5.0 2.0 135.0	頁　岩	棒状の自然礫を利用している。使用面は１面で、擦痕が顕著に残っている。	

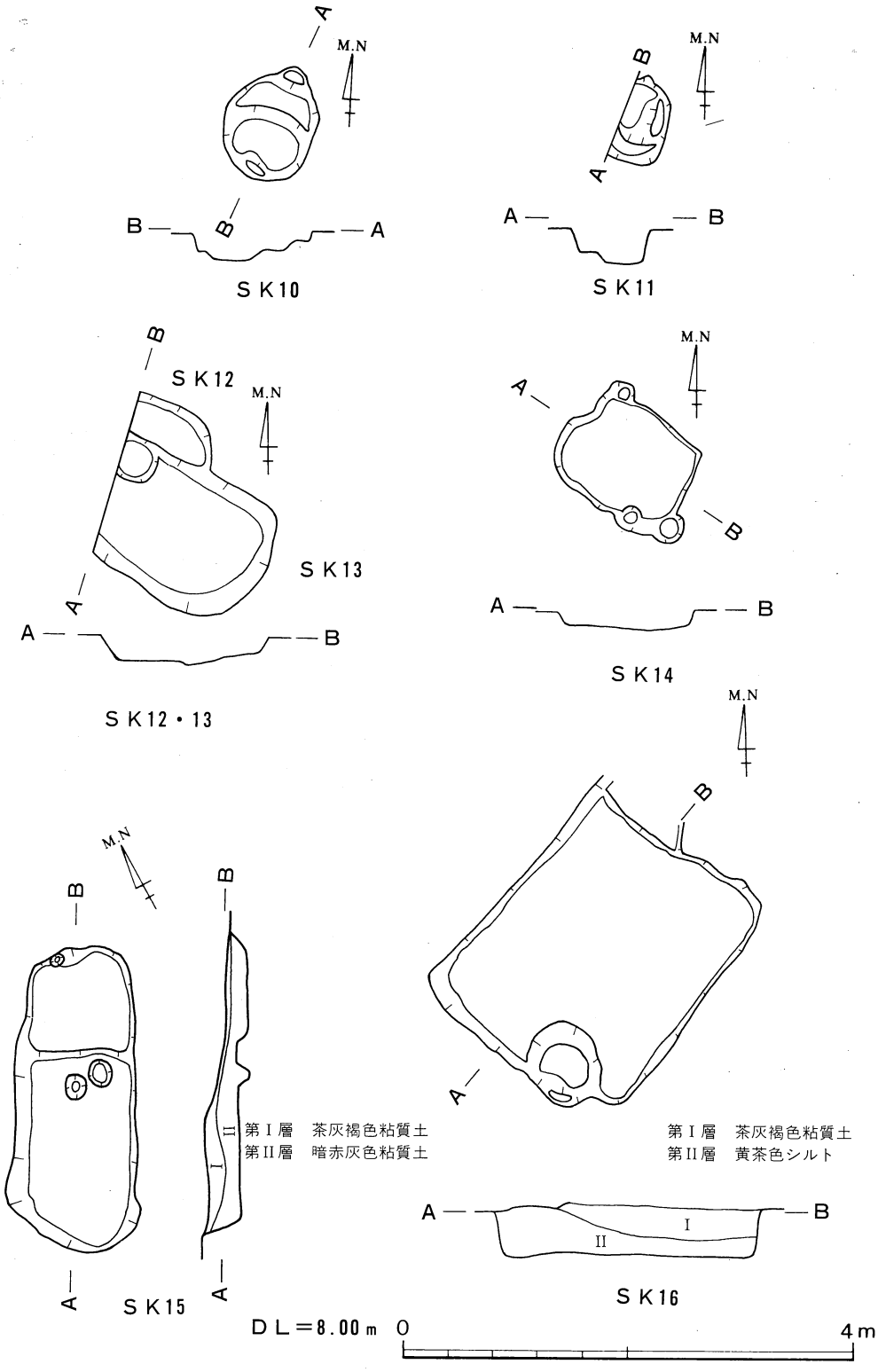
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値（cm, g） 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
269	ＳＴ１	砥石	11.7 12.6 3.9 855.0	砂　岩	２面を砥石として利用している。縁部は敲打によって調整している。	
270	ＳＫ８	石包丁	12.1 7.2 1.2 100.0	頁　岩	外湾刃石包丁の未製品である。背部には細かな押圧剥離があり、刃部には大きな階段状剥離を有する。	
271	〃	〃	12.2 6.6 1.1 130.0	〃	〃	
272	〃	石鏃	5.8 1.2 0.5 3.7	〃	断面菱形を呈する磨製石鏃である。刃部部は鋭く研ぎ出され、両面中央部には稜線を有する。基部は欠損している。	
273	〃	〃	5.3 1.0 0.4 2.9	〃	磨製石鏃の未製品である。両面に横方向の擦痕がみられる。	
274	〃	〃	2.2 1.4 0.2 0.6	サヌカイト	凹基式石鏃で、一方の端部がわずかに欠損している。断面は極めて扁平で、刃部は両面から押圧剥離している。	
275	〃	円盤	7.5 7.3 0.8 70.0	千枚岩	全縁を表面側へのみ粗く調整する。	
276	〃	〃	7.7 7.4 1.1 75.0	〃	〃	
277	〃	〃	8.0 7.5 7.0 65.0	〃	〃	



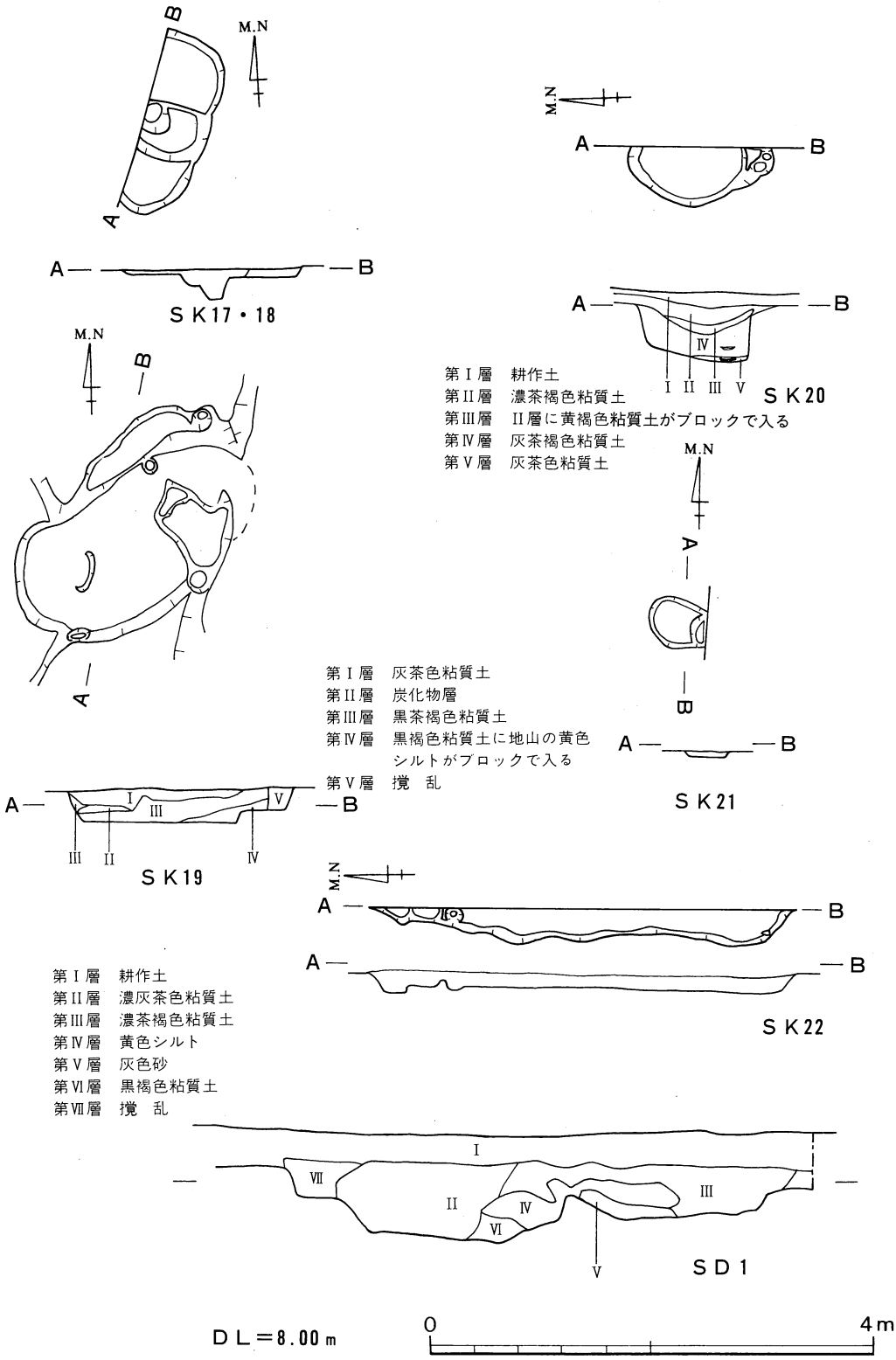
第103図　ＳＴ１、ＳＫ１～４


M.N
A
B
田村川
SK 5
SK 6
SK 7
SK 8
SK 9
C
D
E
F
II
I
第Ⅰ層　橙茶褐色粘質土
第Ⅱ層　濃茶褐色粘質土
第Ⅲ層　焼　土
第Ⅳ層　炭化物
第Ⅴ層　淡灰茶色粘質土
第Ⅵ層　灰黒色砂
VI III IV
V
DL＝8.00m
0
4m

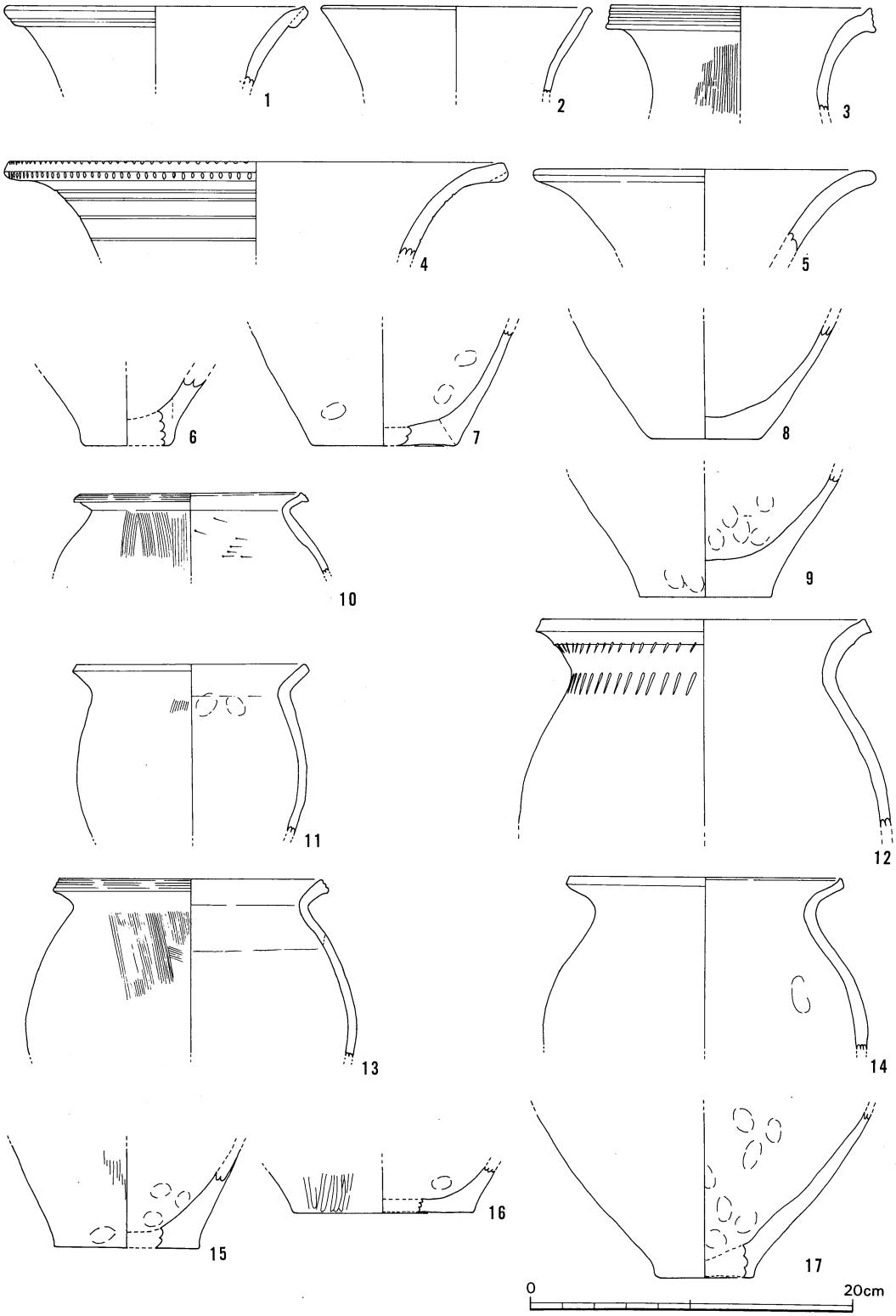
第104図　SK 5～9



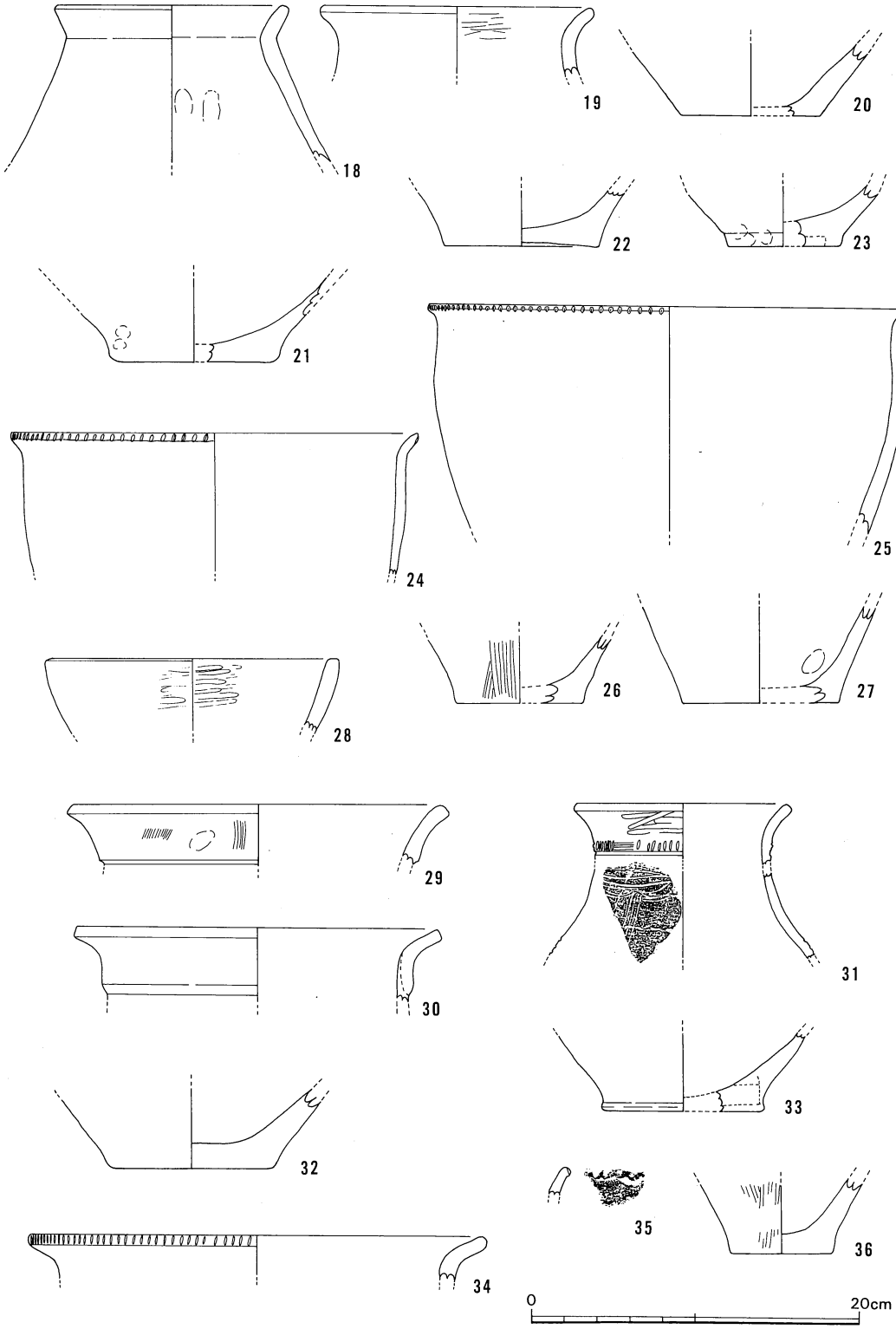
第105図　SK10～16



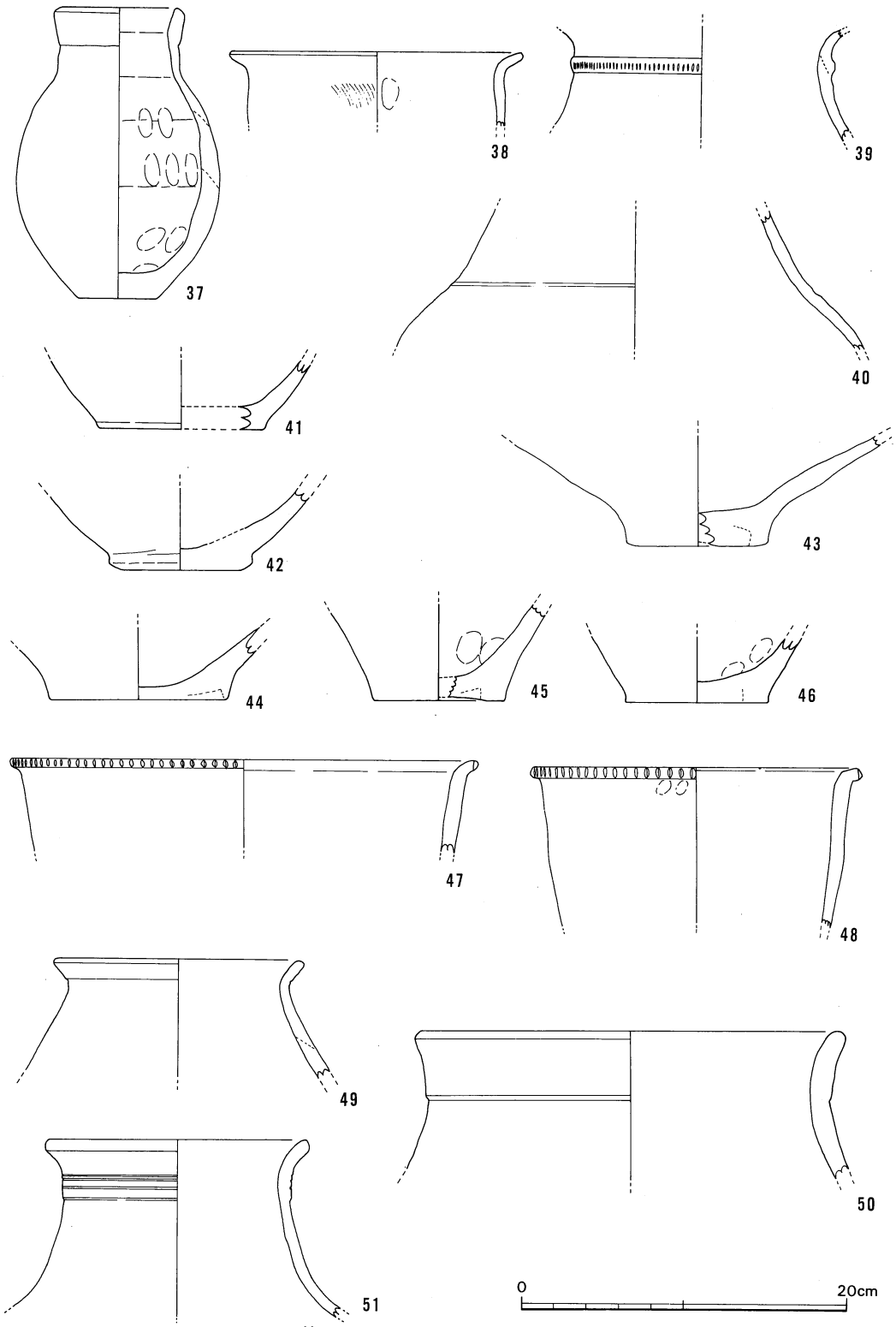
第106図　SK17～22、SD1



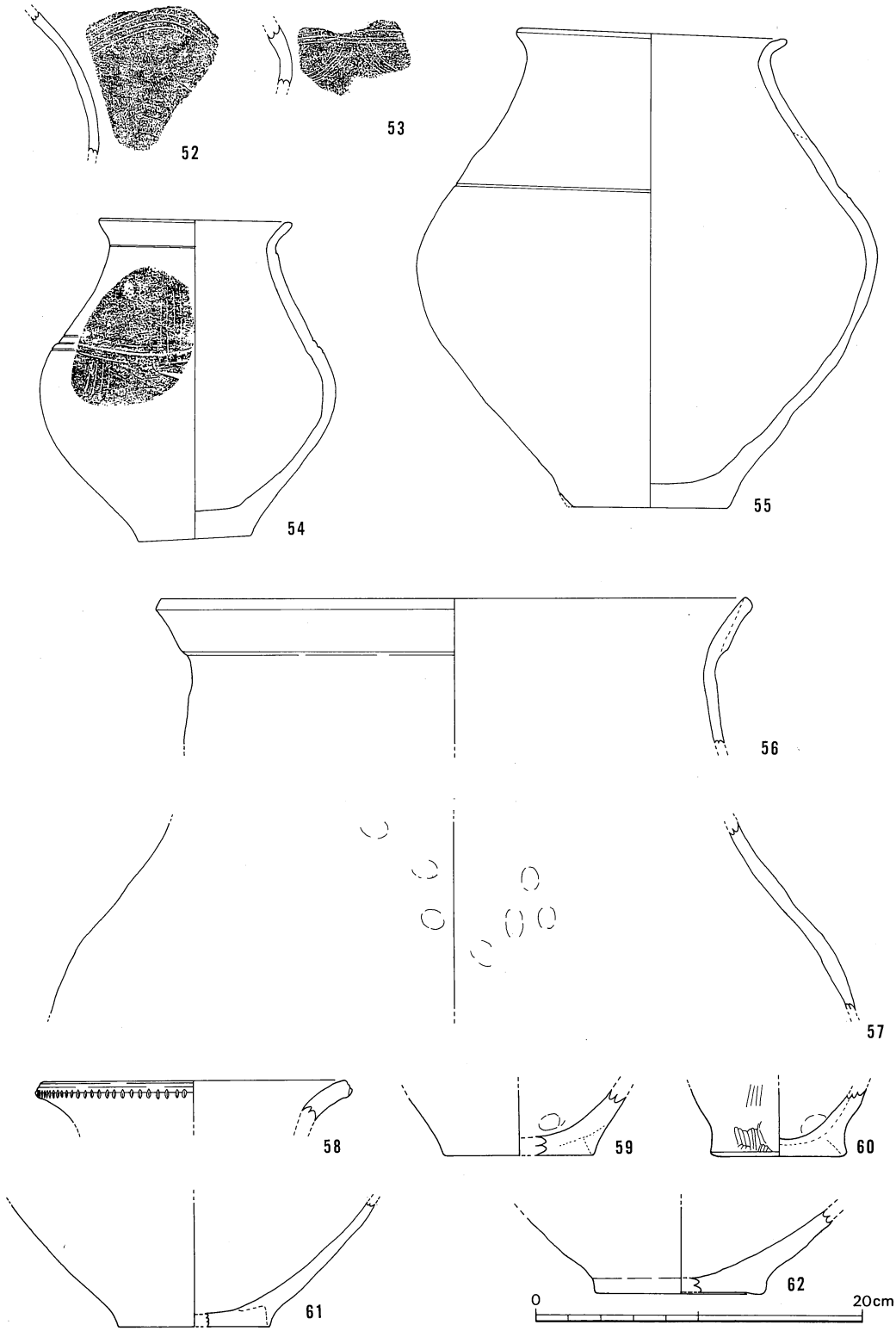
第107図　ＳＴ１出土遺物



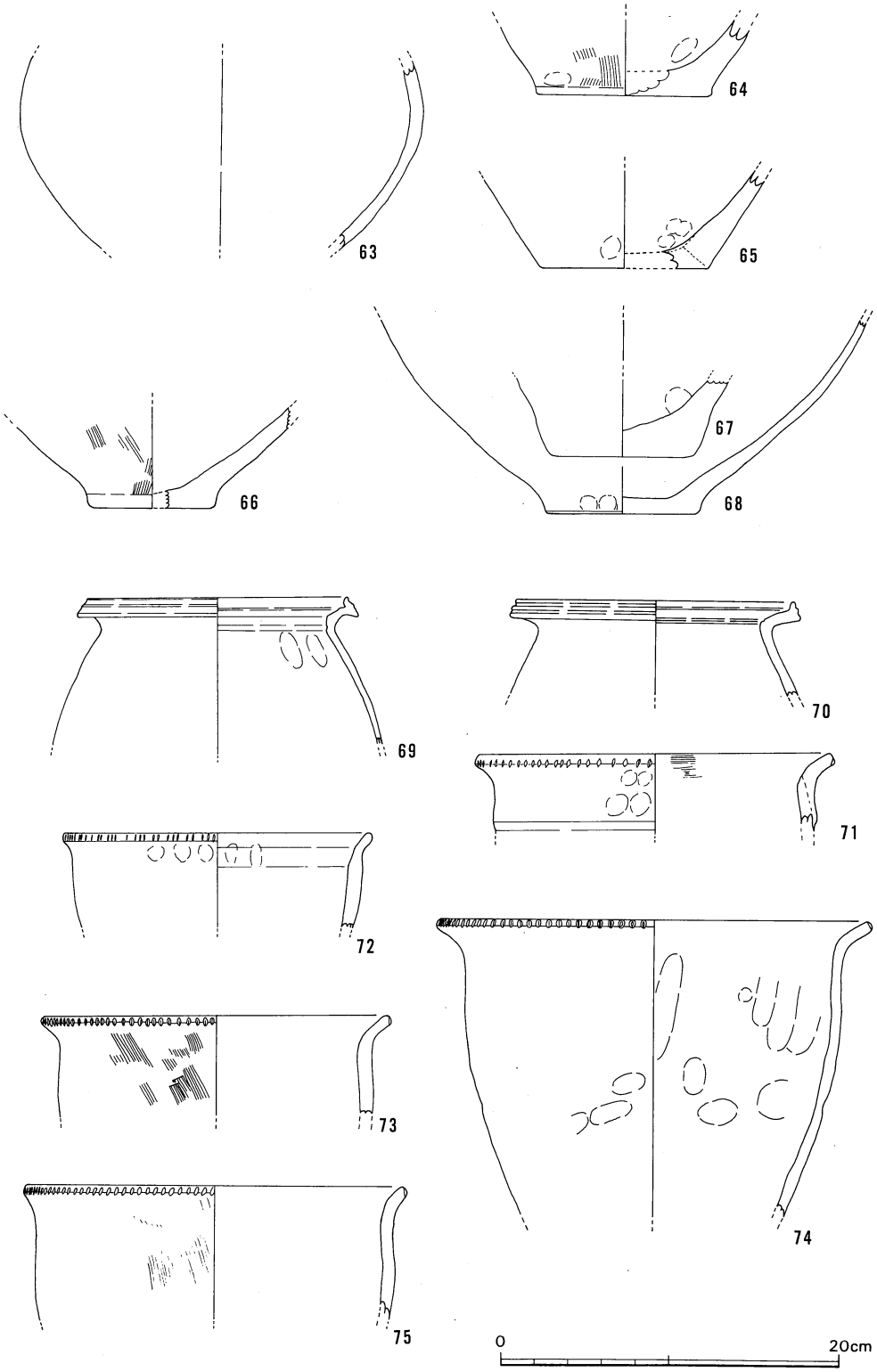
第108図　ＳＫ１・２・４出土遺物



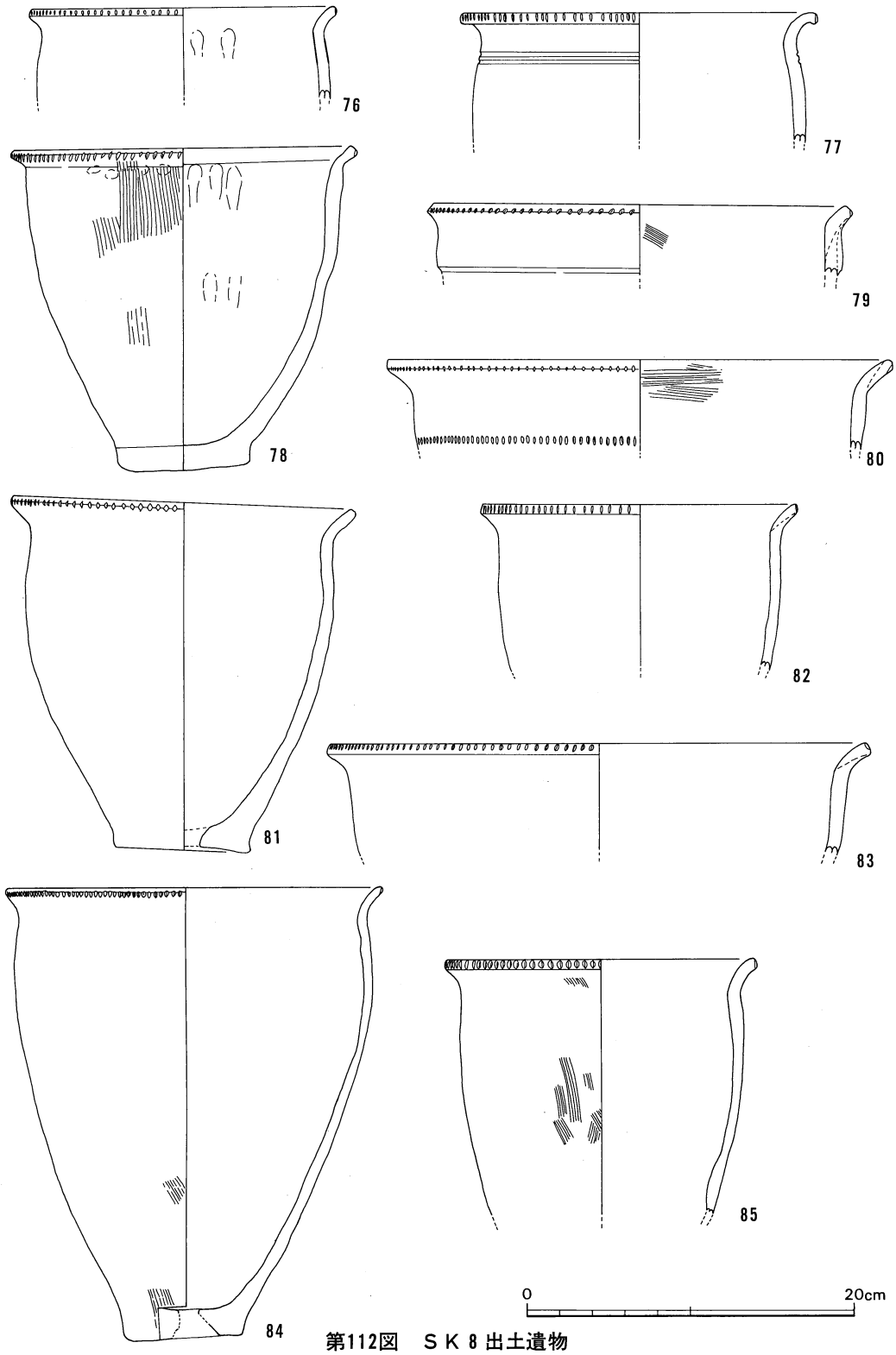
第109図　ＳＫ５～８出土遺物



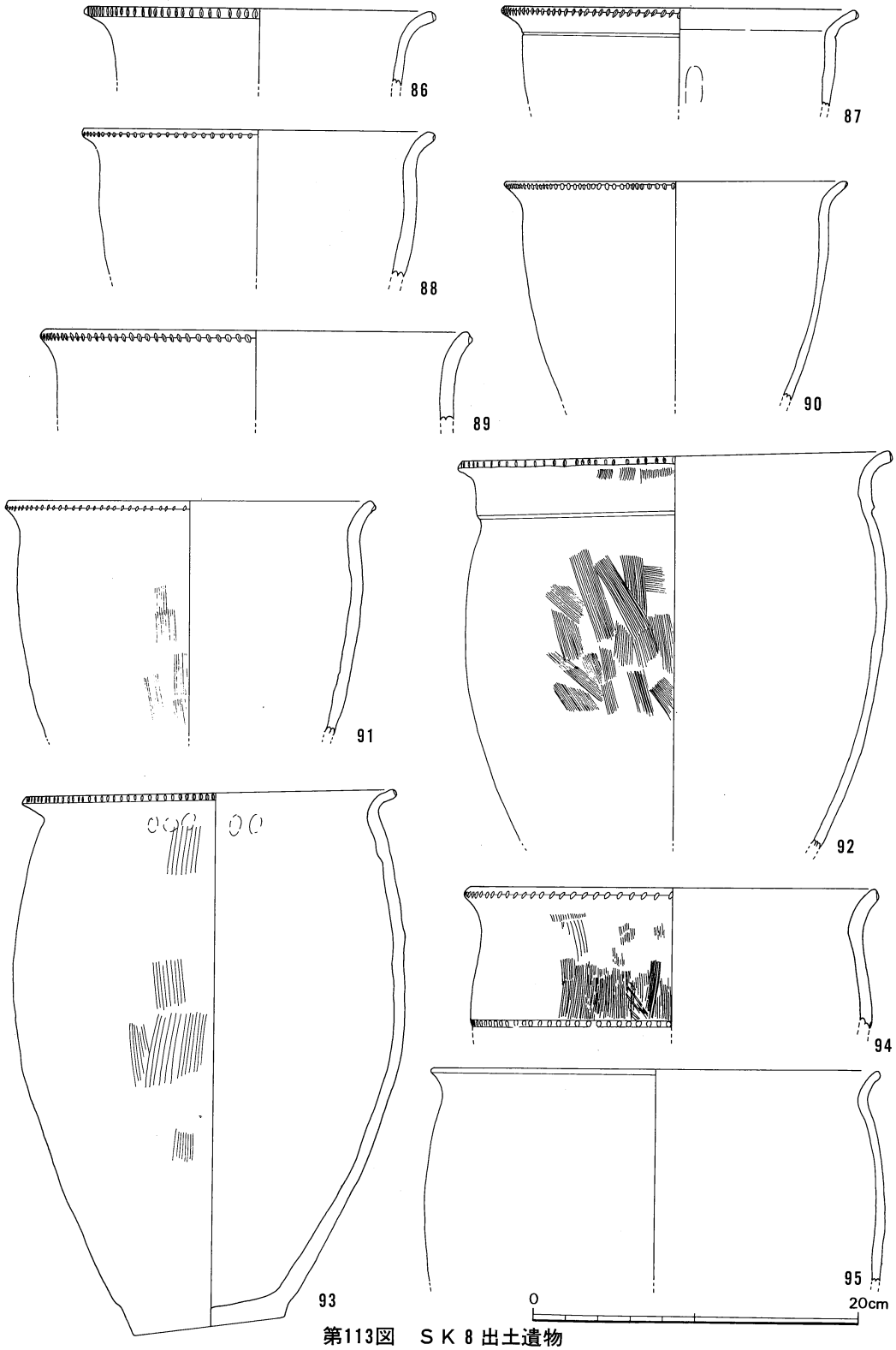
第110図　ＳＫ８出土遺物



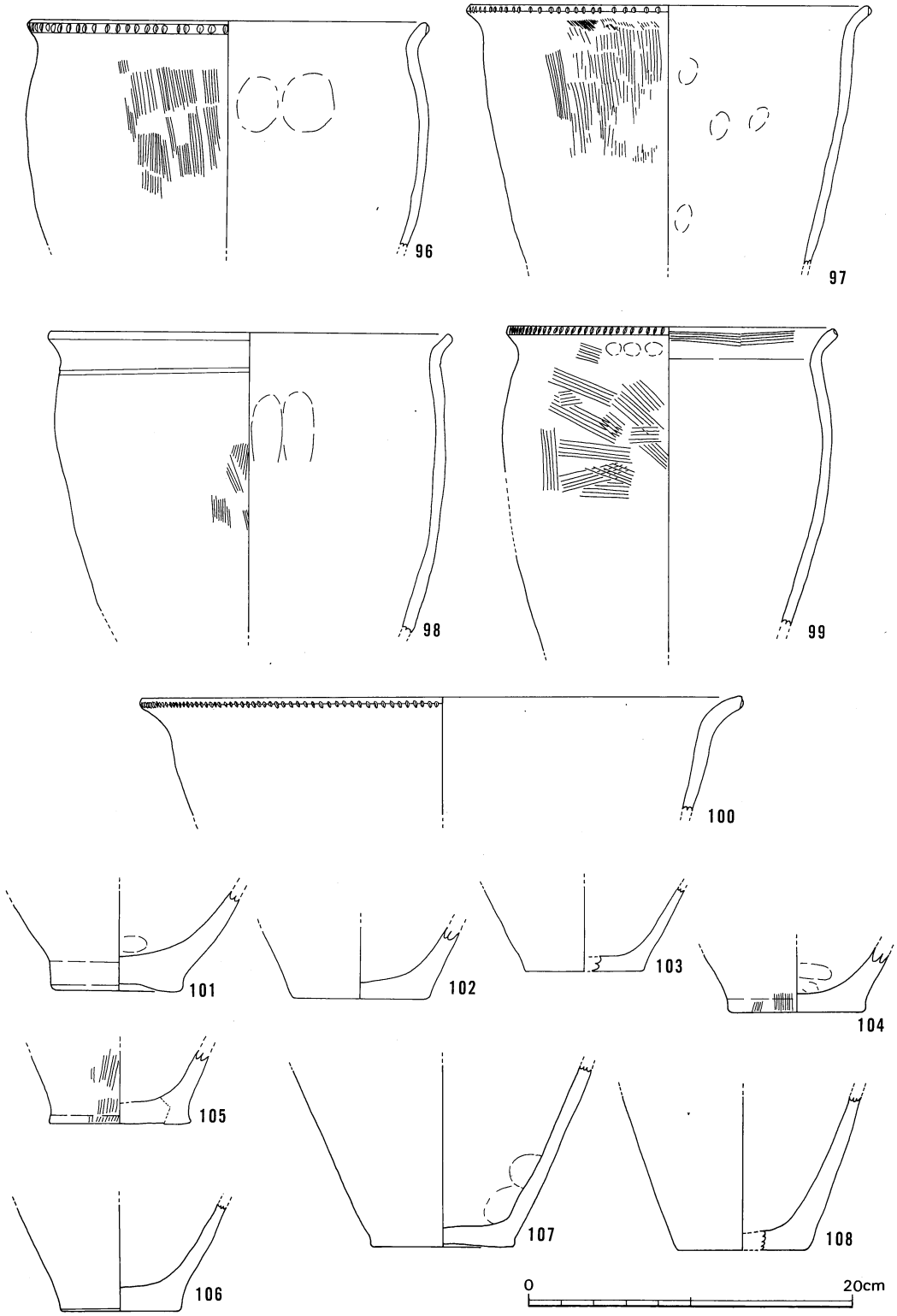
第111図　ＳＫ８出土遺物



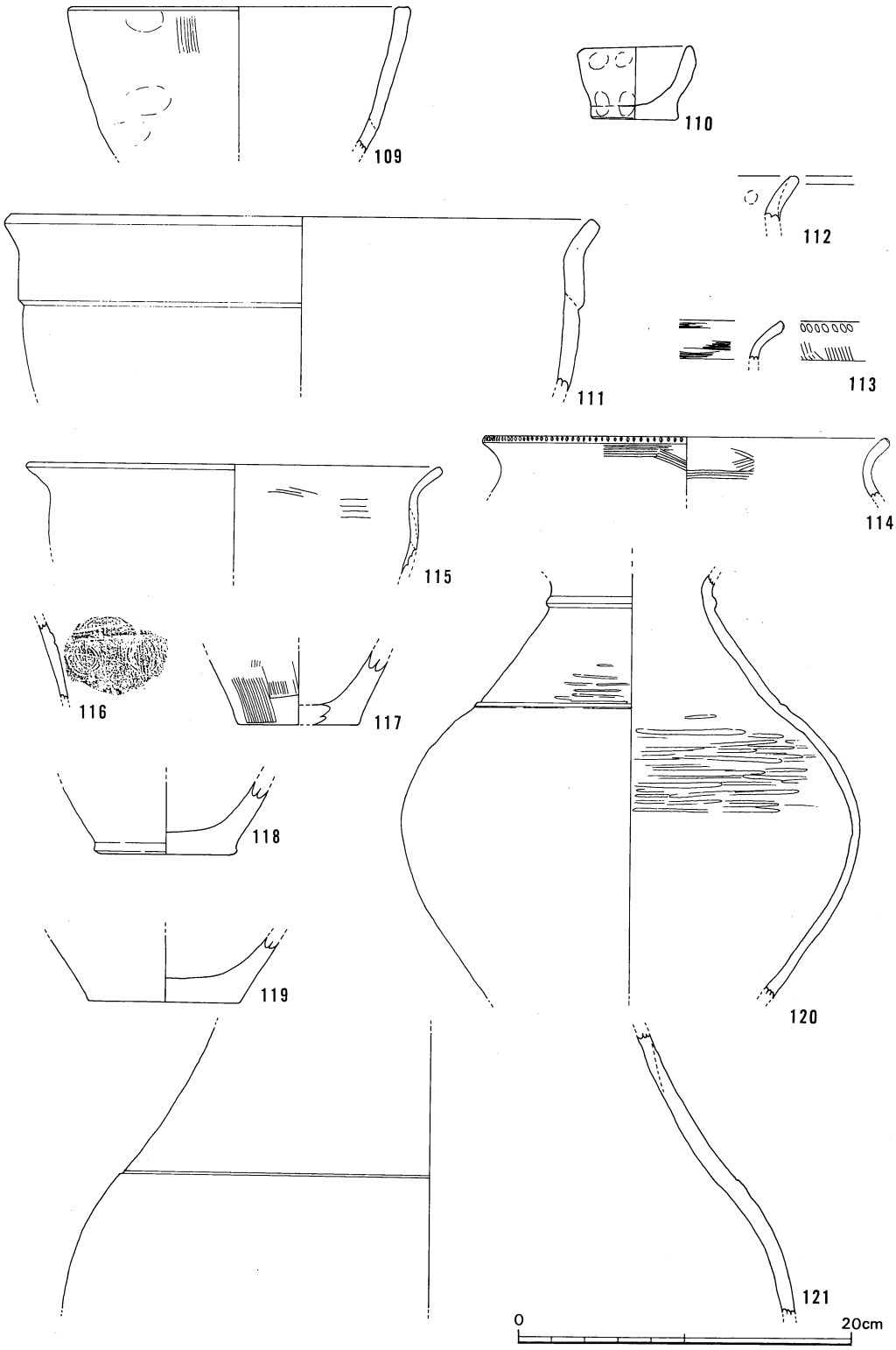
第112図　ＳＫ８出土遺物



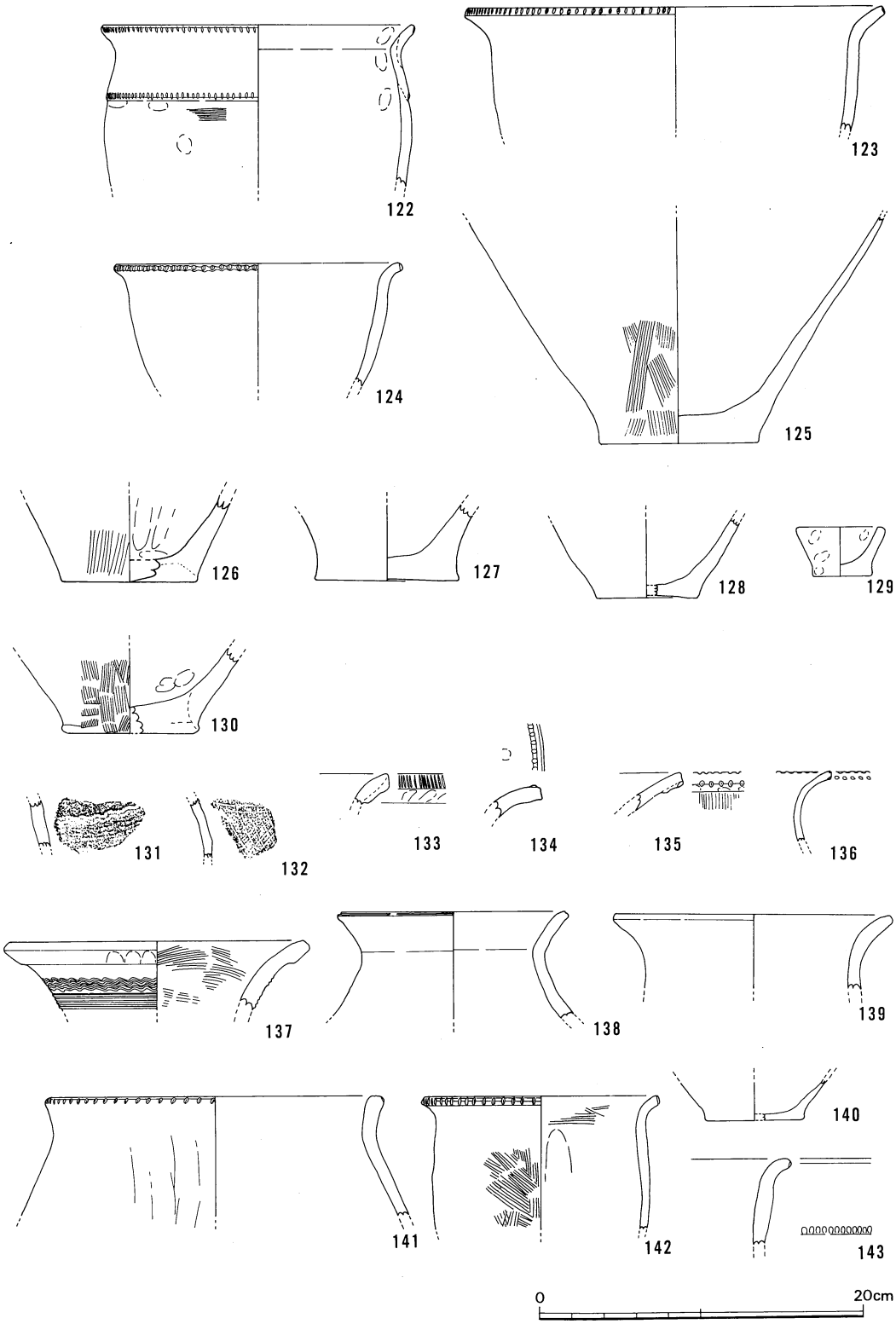
第113図　ＳＫ８出土遺物



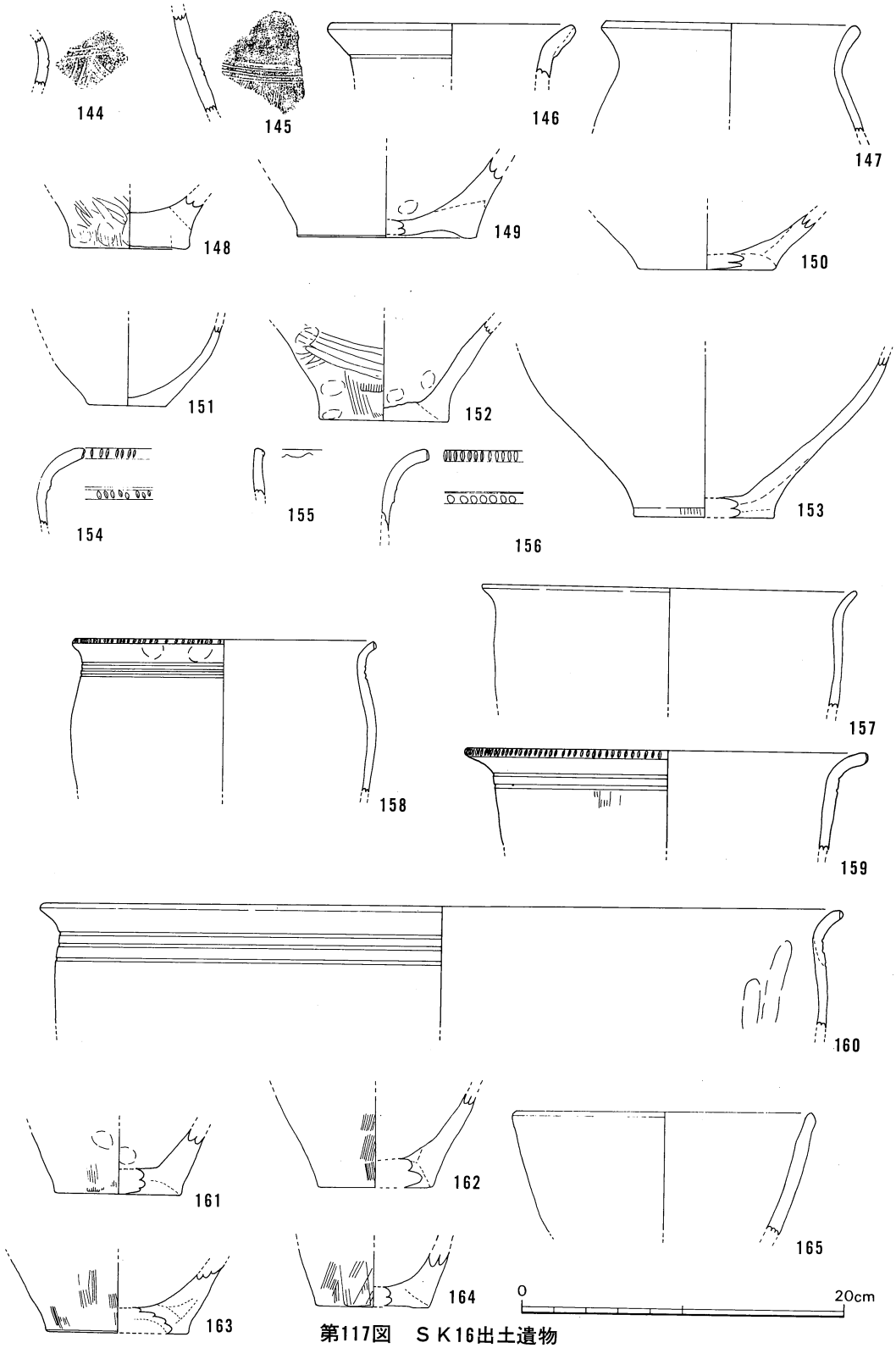
第114図　ＳＫ８出土遺物



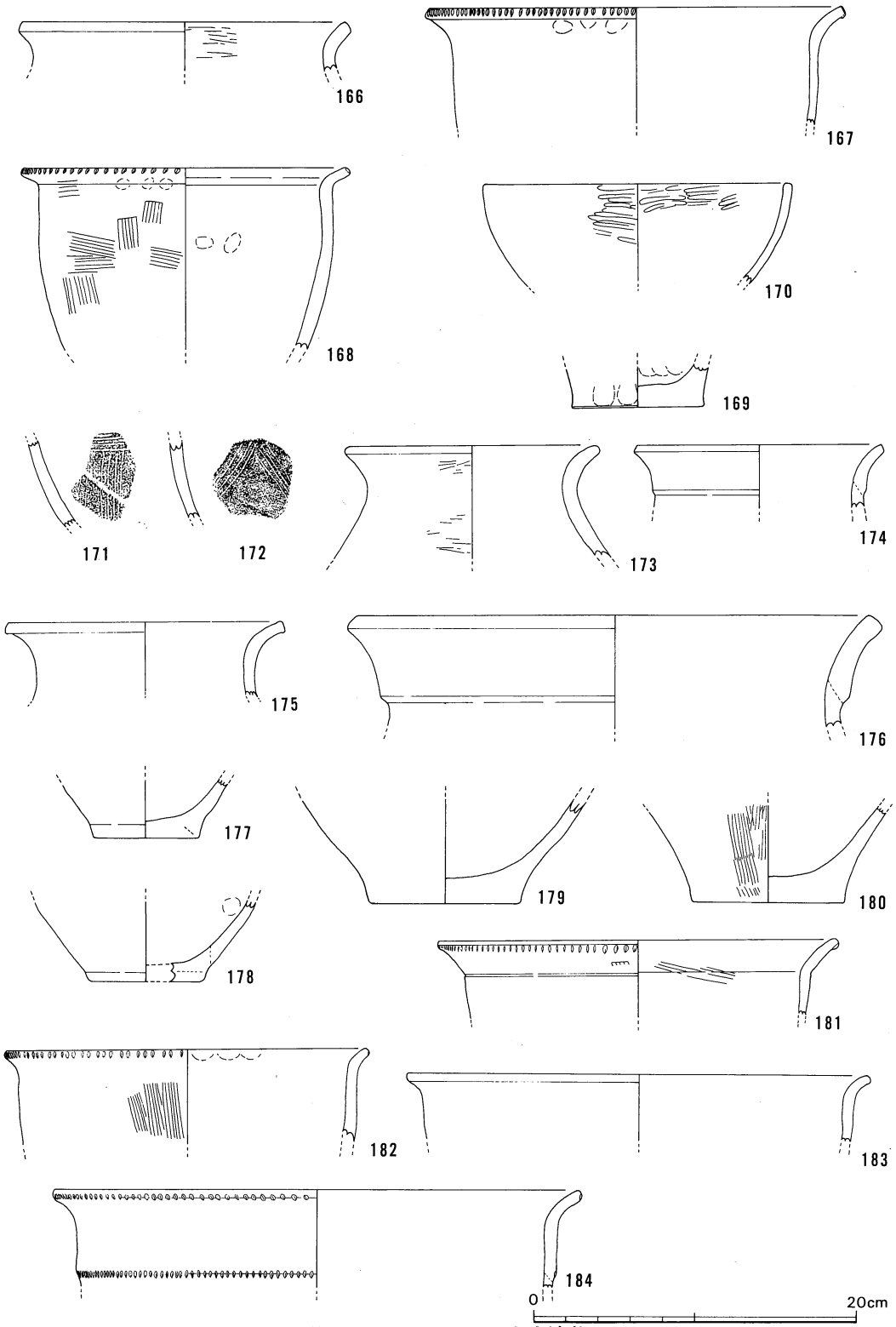
第115図　ＳＫ８・９・12・13出土遺物



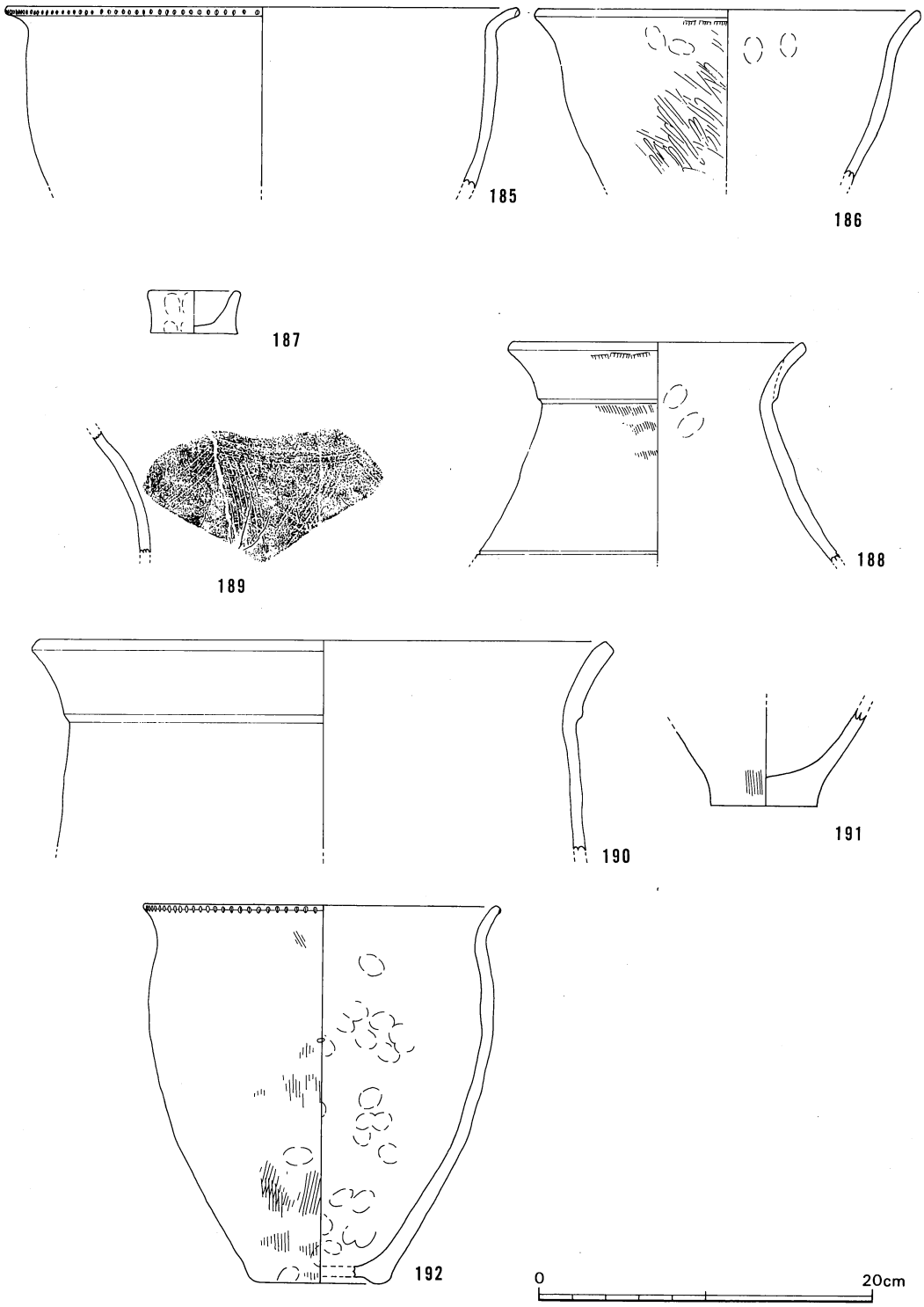
第116図　ＳＫ13～15出土遺物



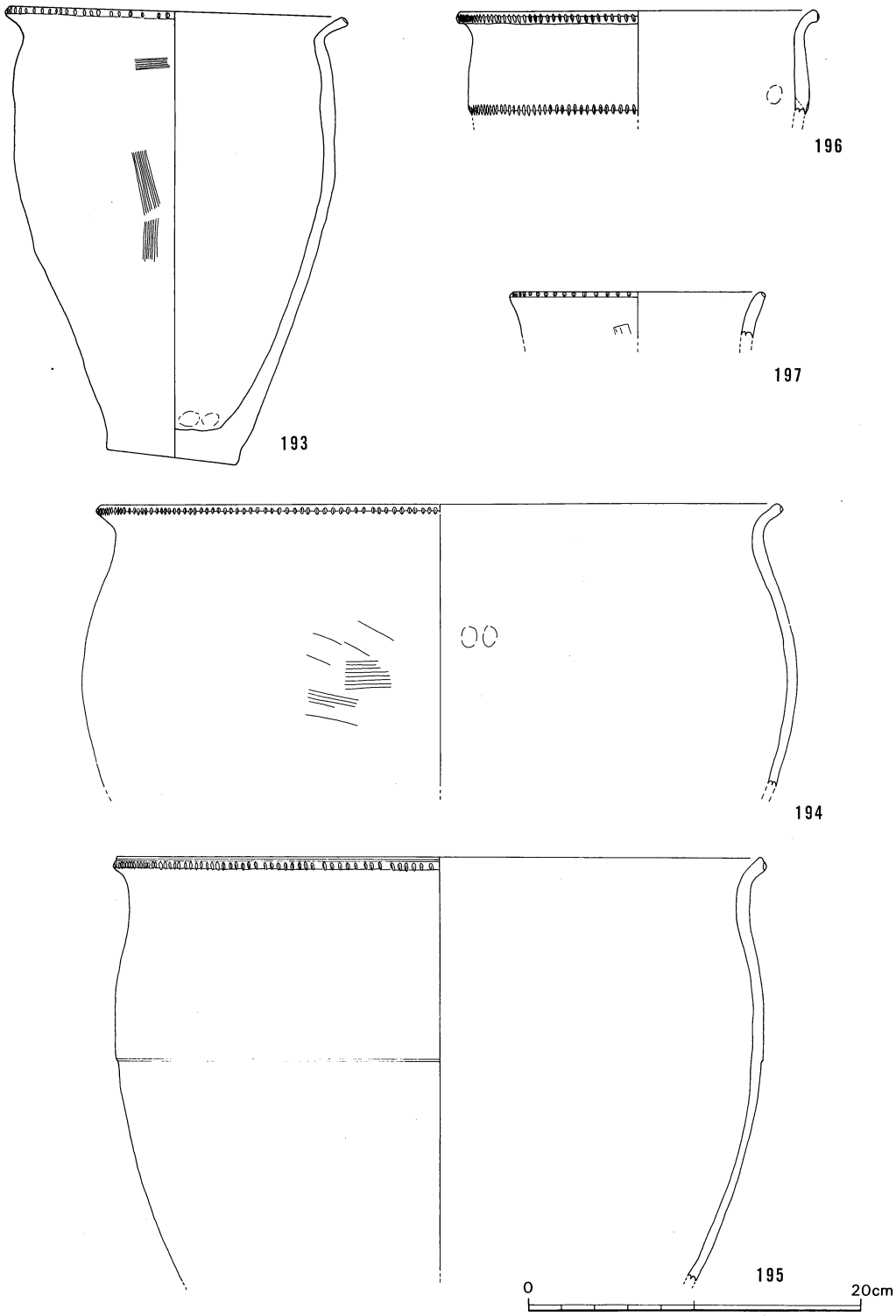
第117図　ＳＫ16出土遺物



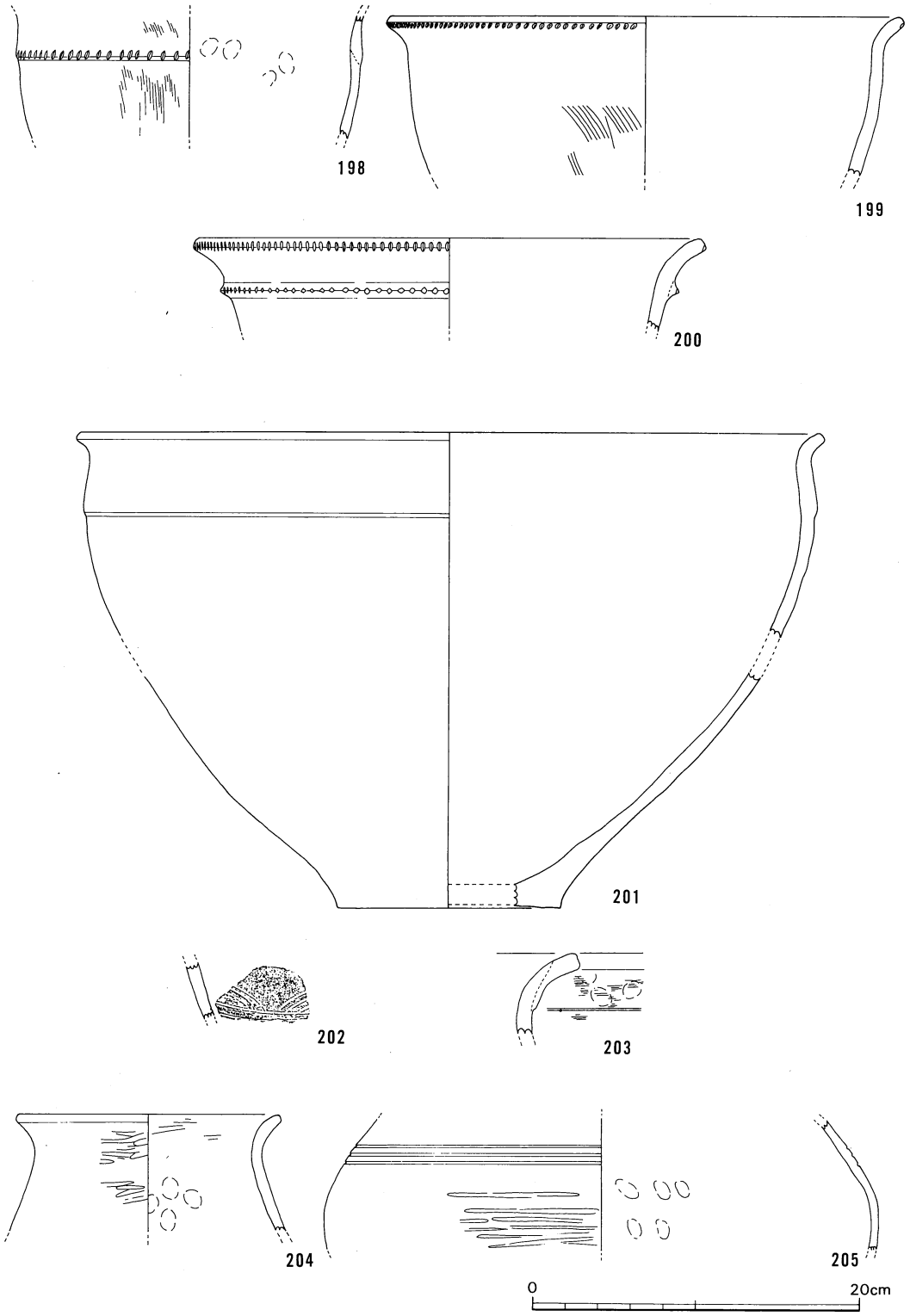
第118図　ＳＫ19・20出土遺物



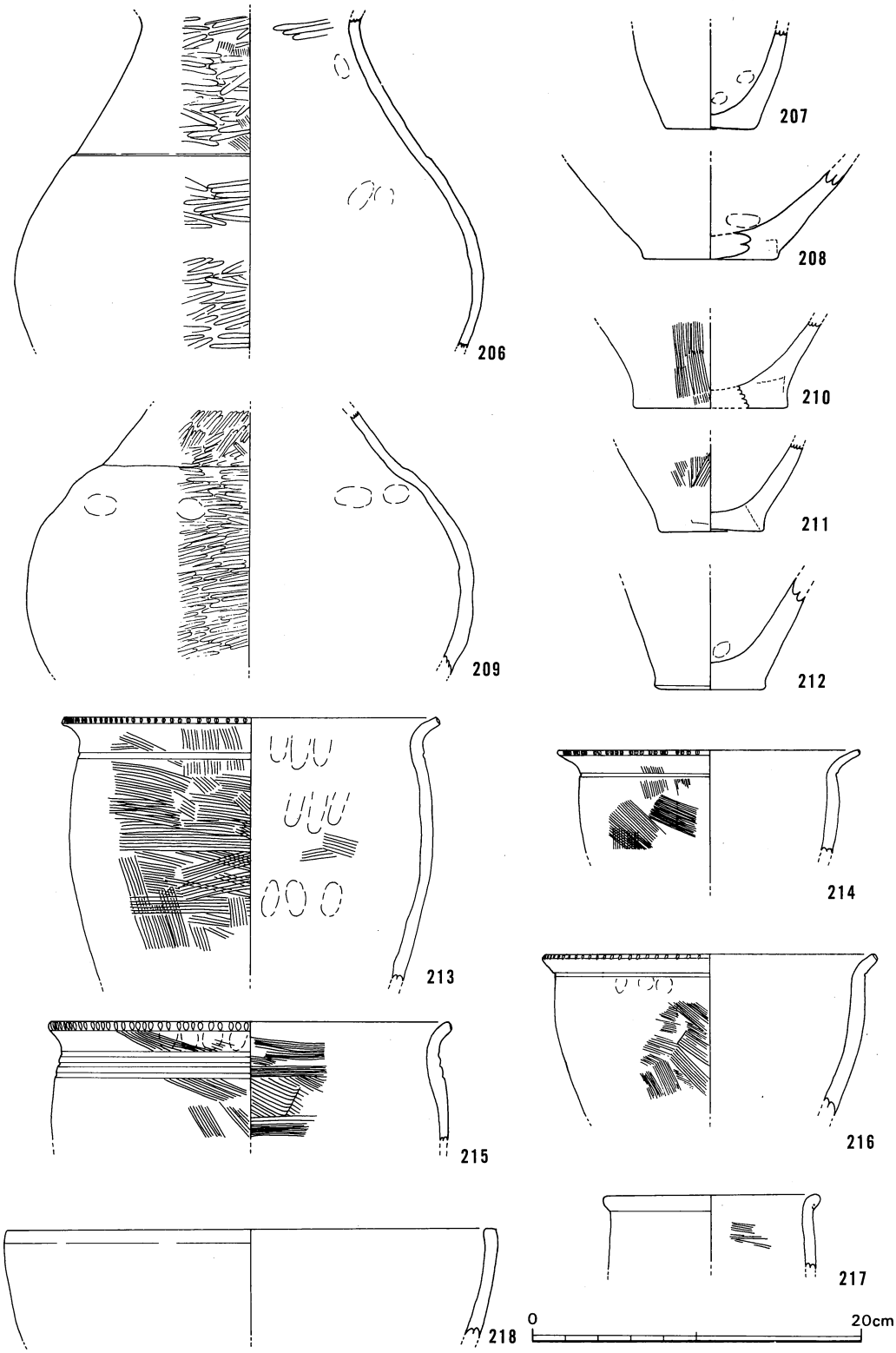
第119図　ＳＫ20出土遺物



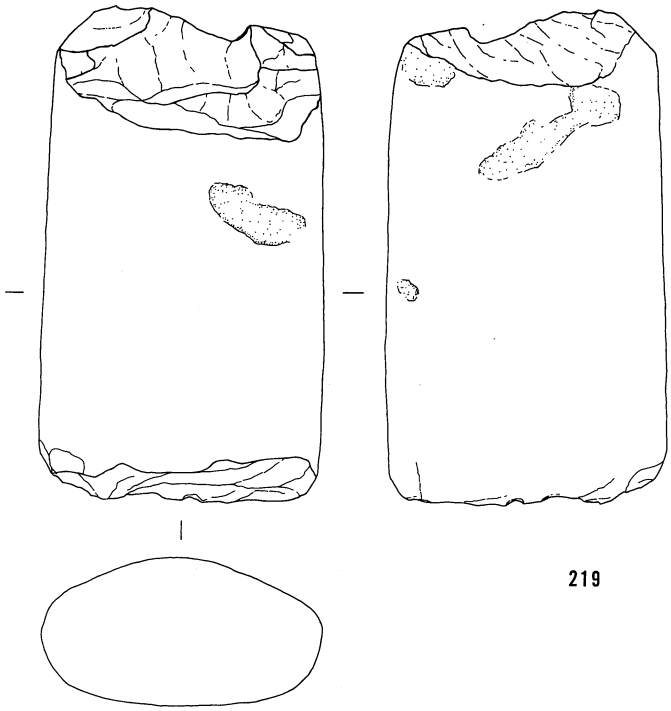
第120図　ＳＫ20出土遺物

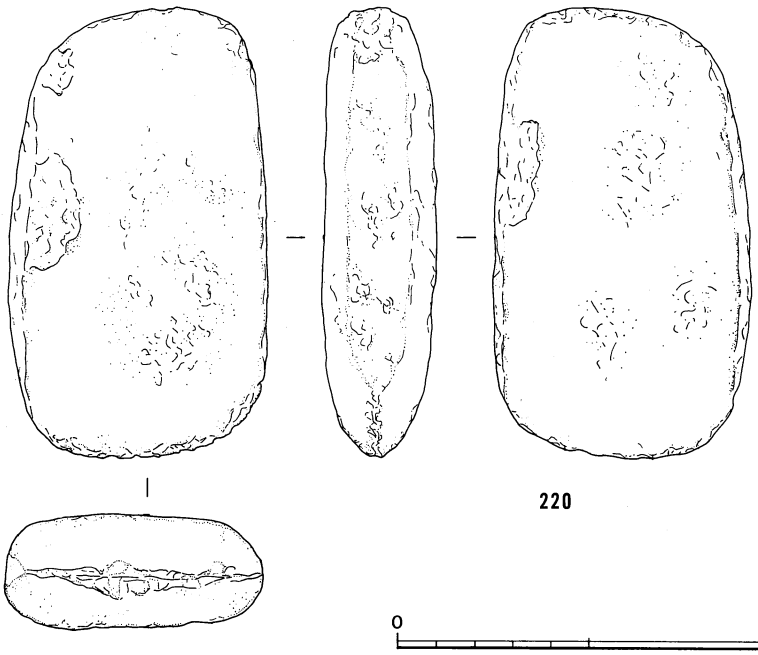


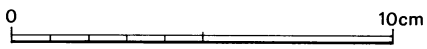
第121図　ＳＫ20、ＳＤ１出土遺物



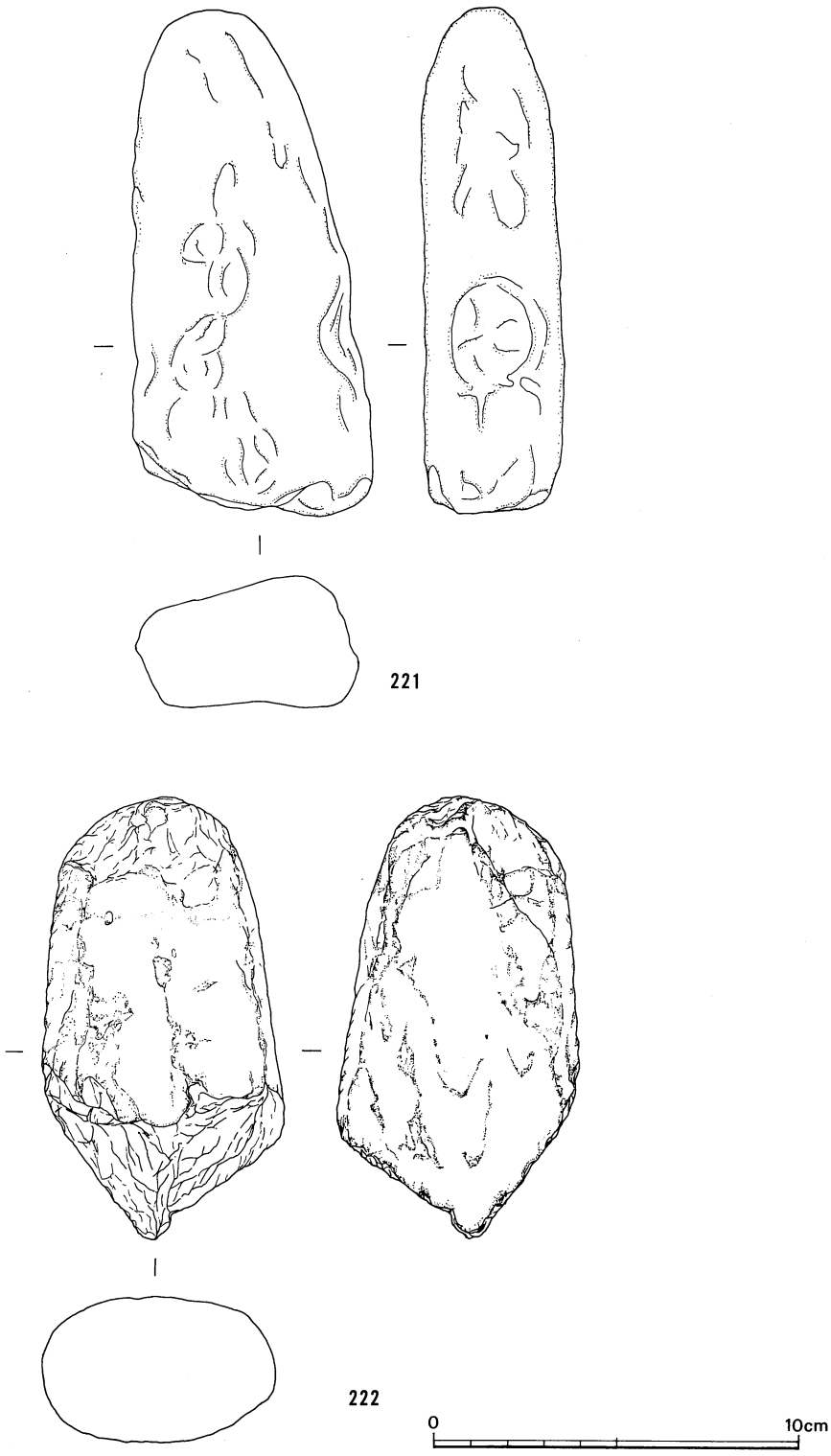
第122図　ＳＤ１、Ｐ37出土遺物



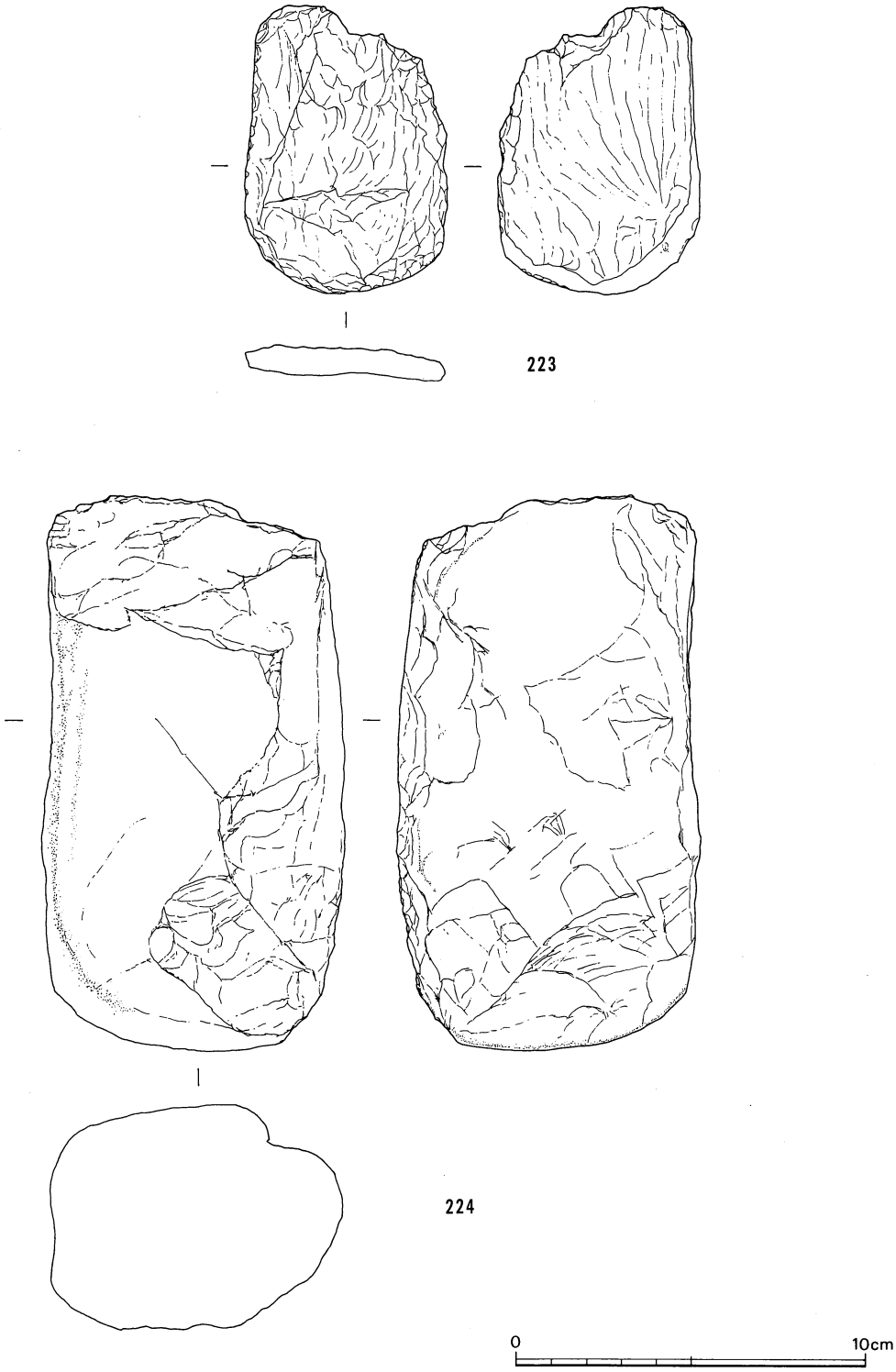




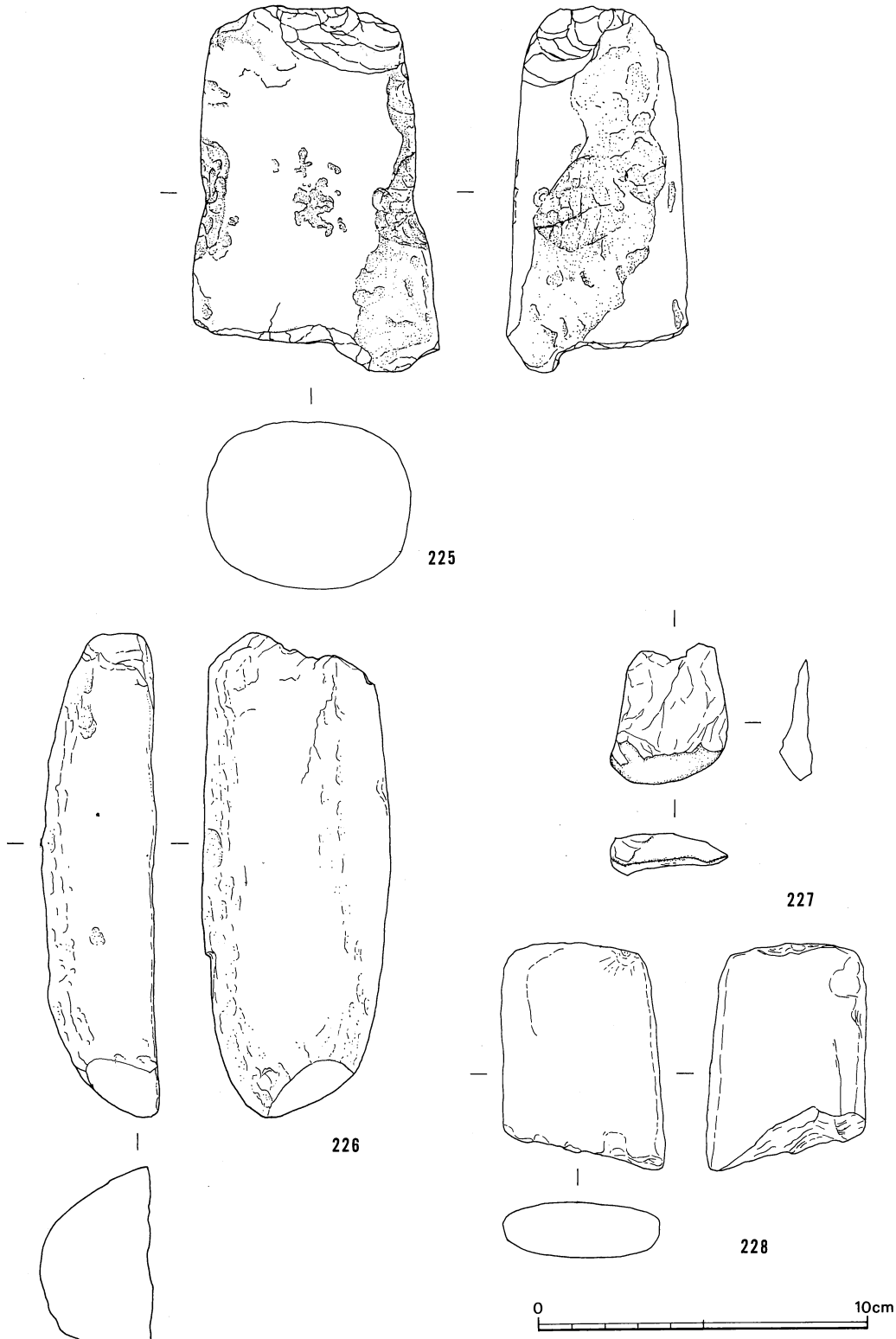
第123図　田村川出土遺物



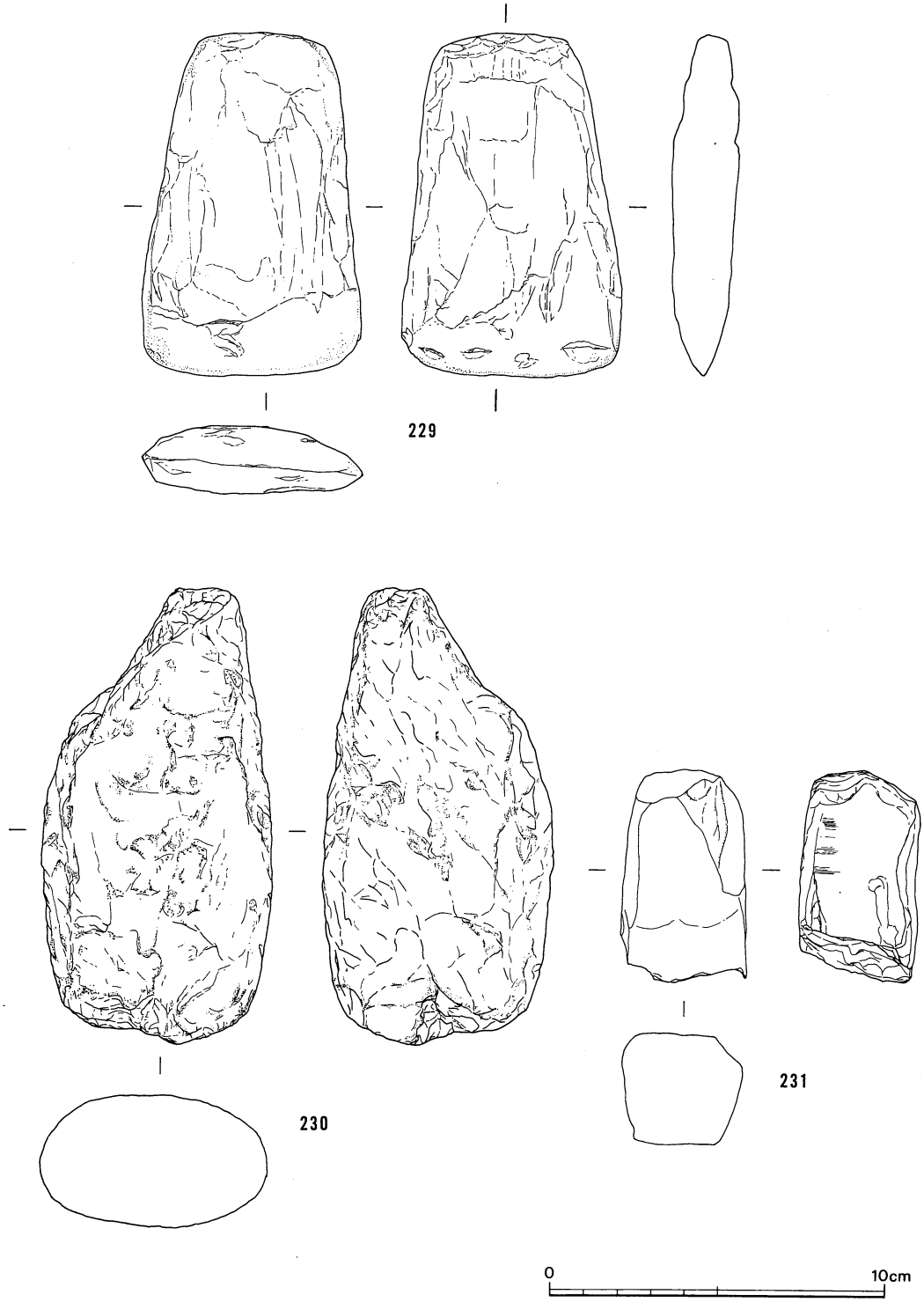
第124図　田村川出土遺物



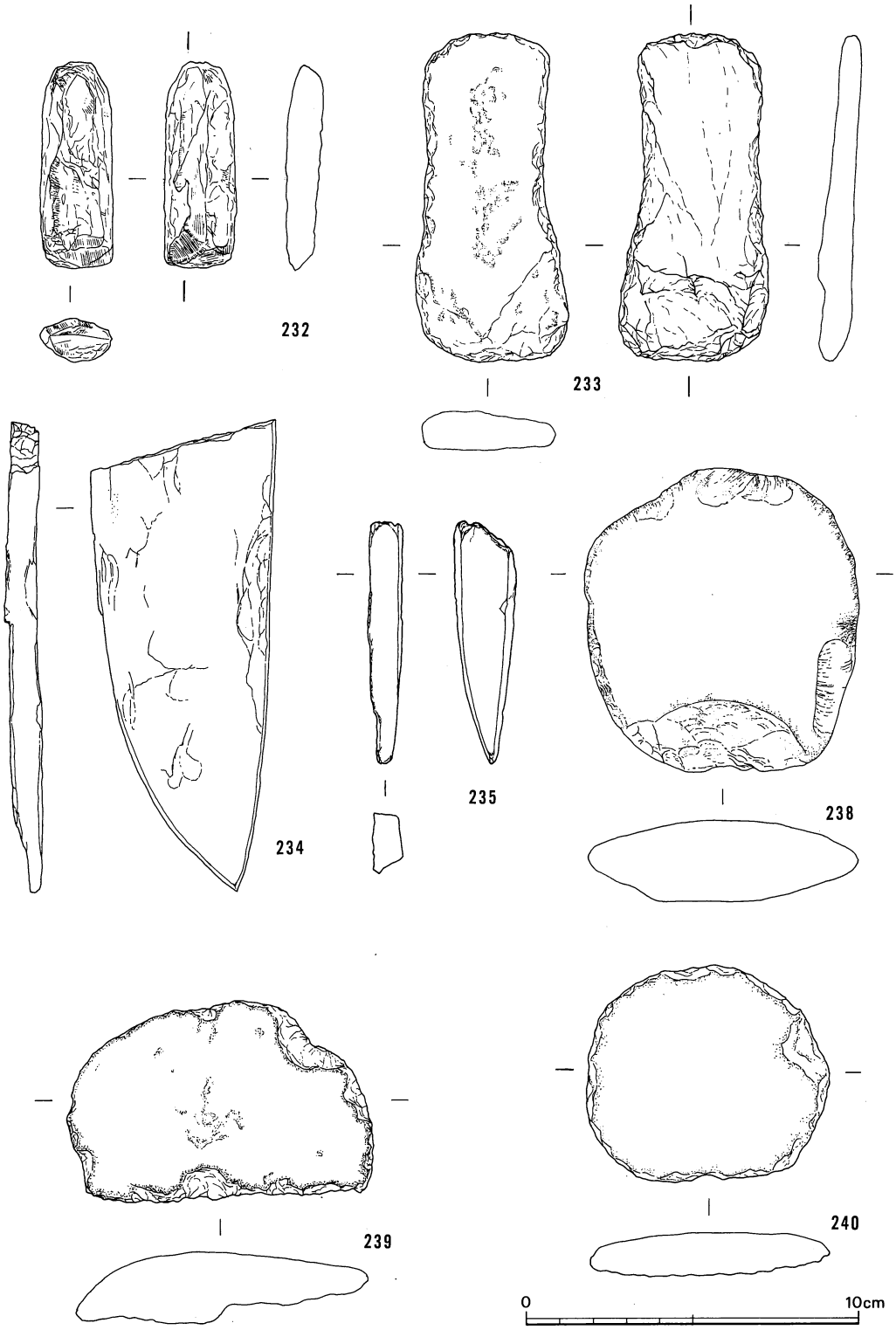
第125図　ＳＫ８、田村川出土遺物



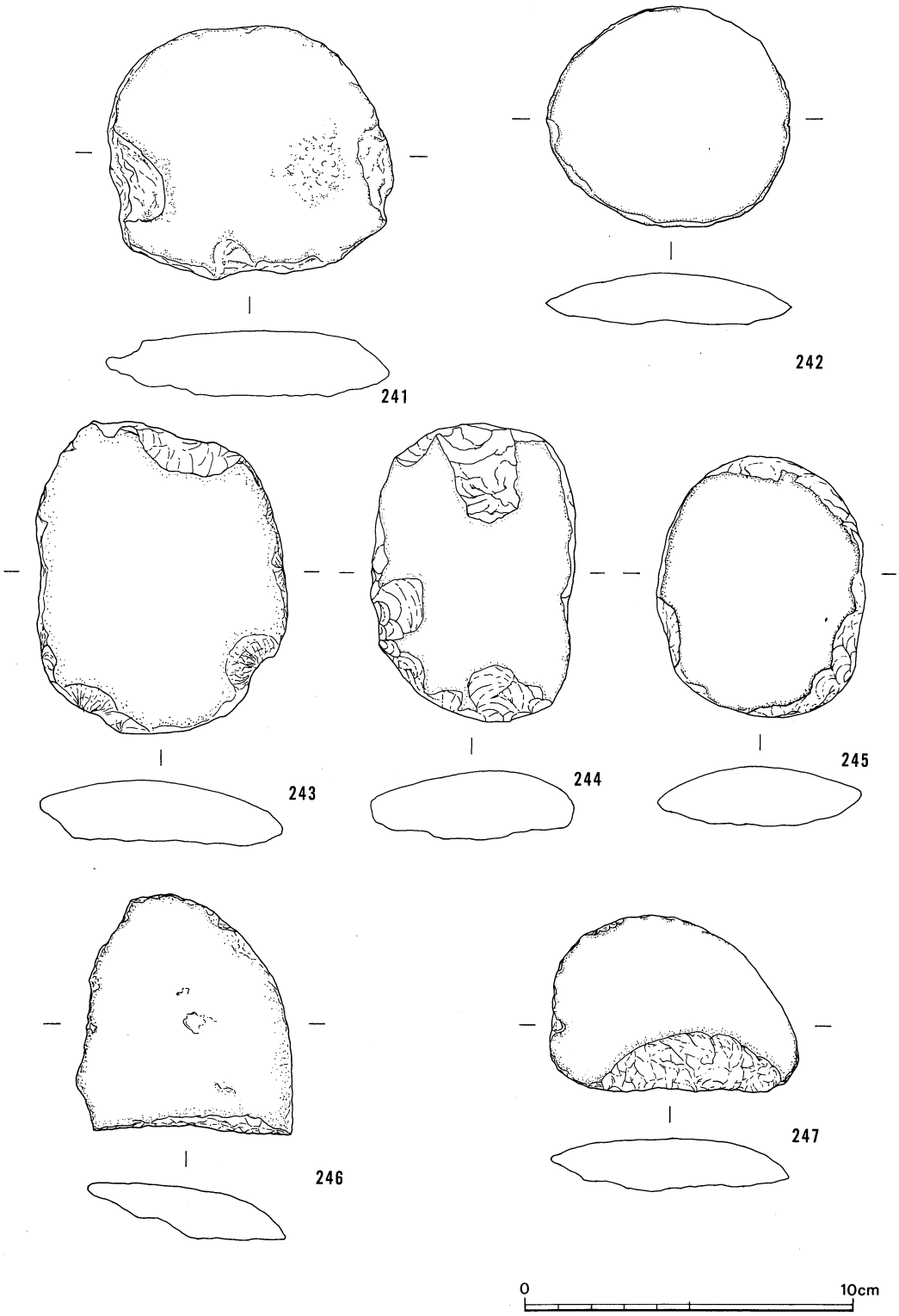
第126図　ＳＫ８、ＳＤ１、田村川出土遺物



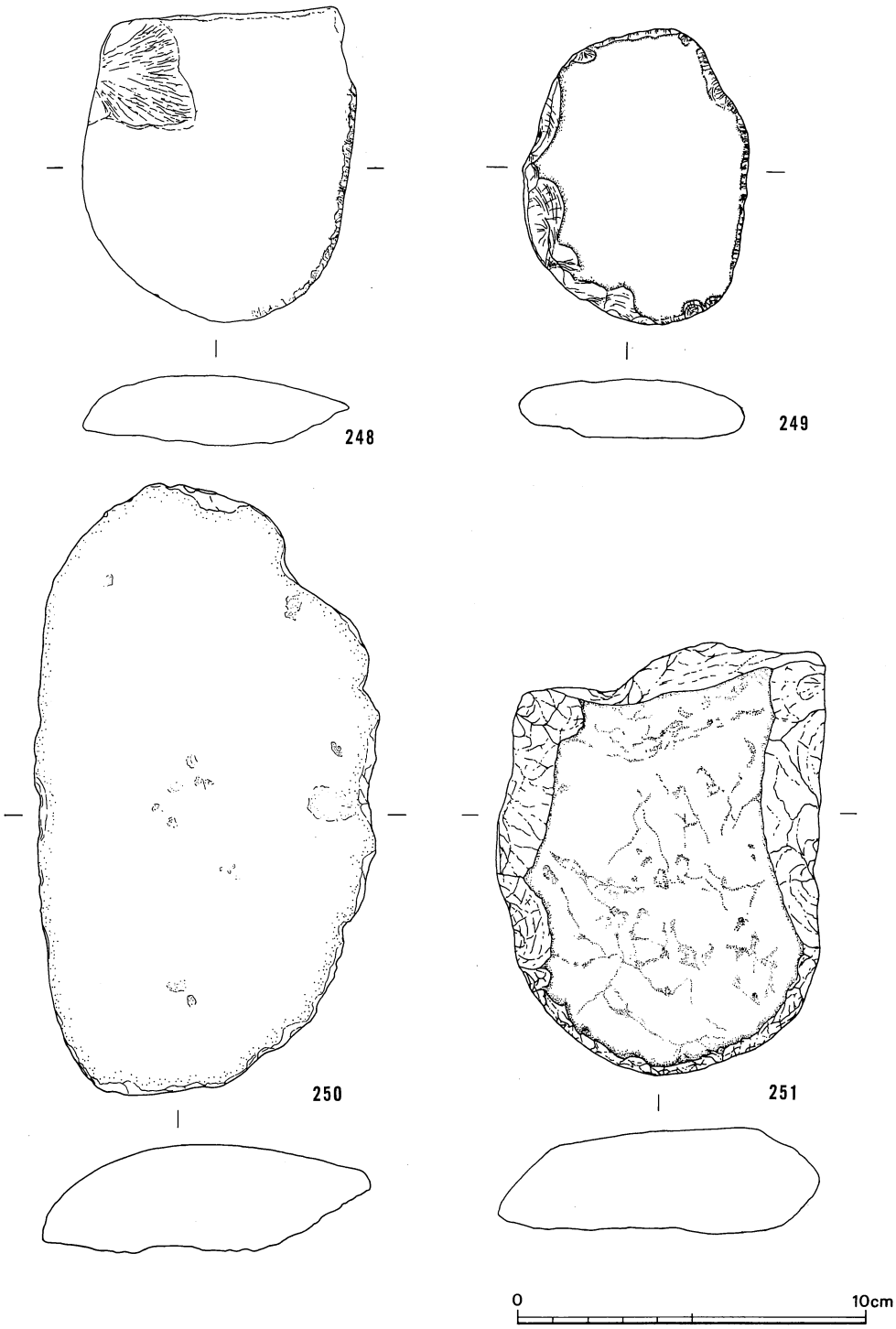
第127図　ＳＫ８、ＳＤ１、田村川出土遺物



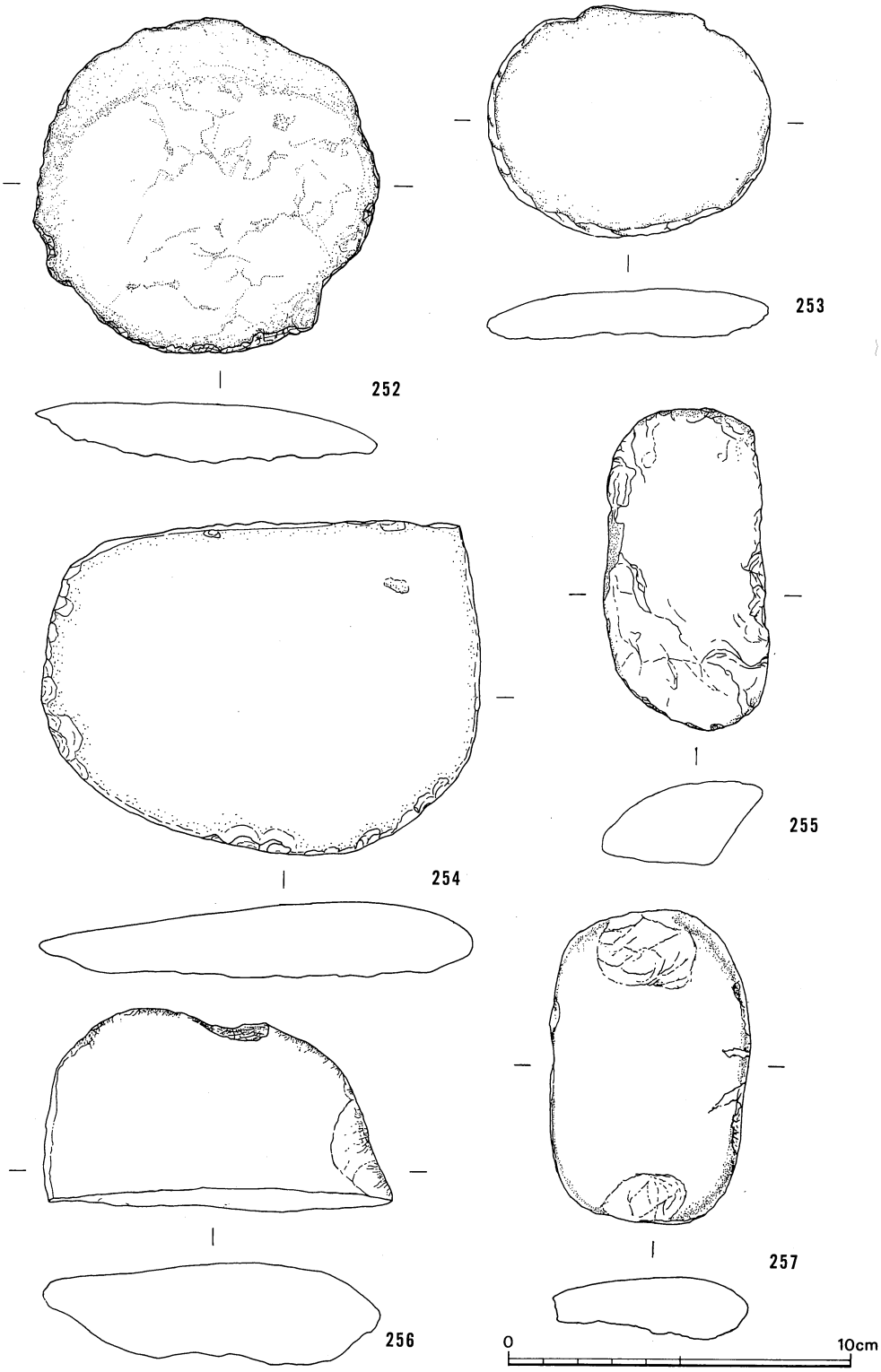
第128図　ＳＫ８・13、ＳＤ１、田村川出土遺物



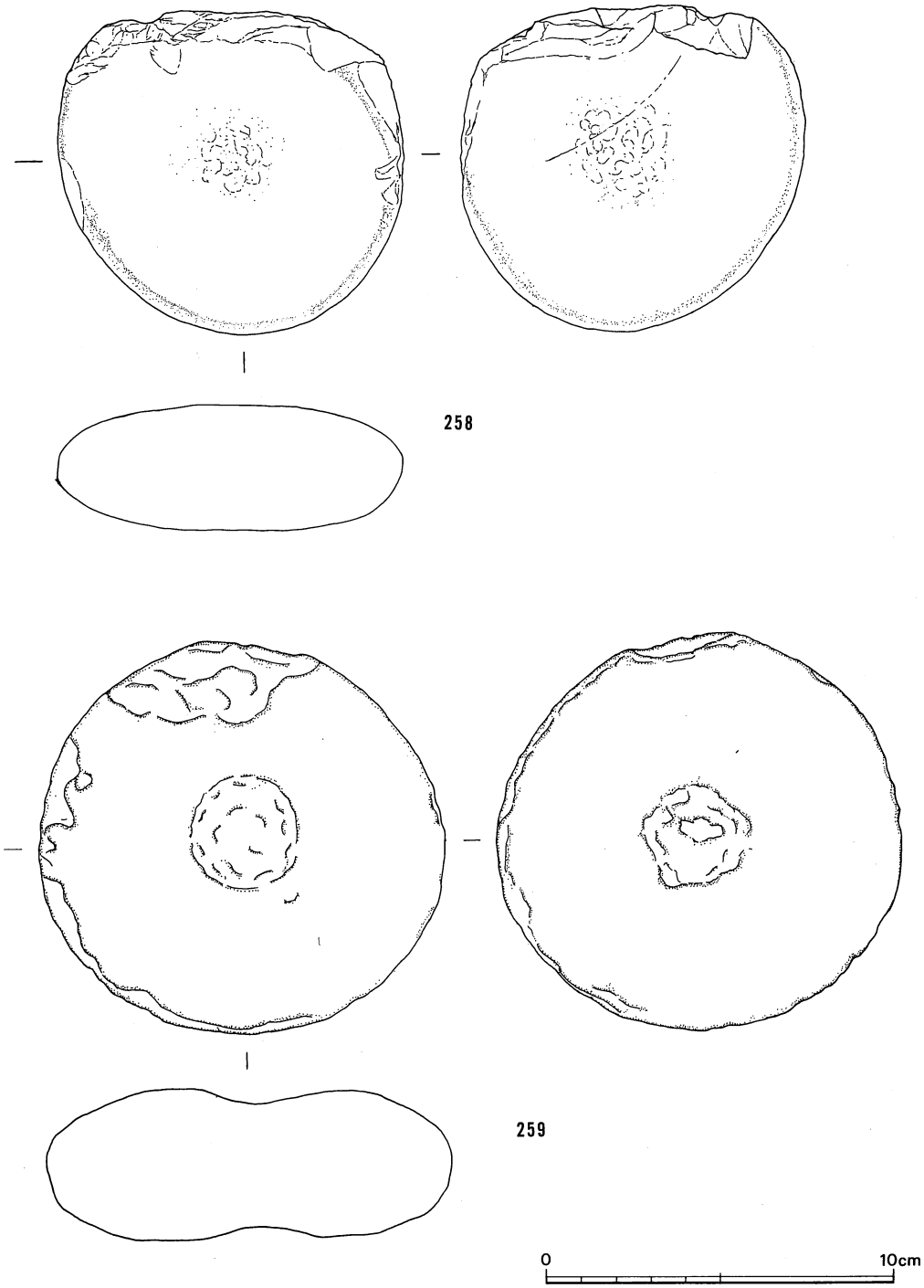
第129図　ＳＴ１、ＳＫ８、田村川出土遺物



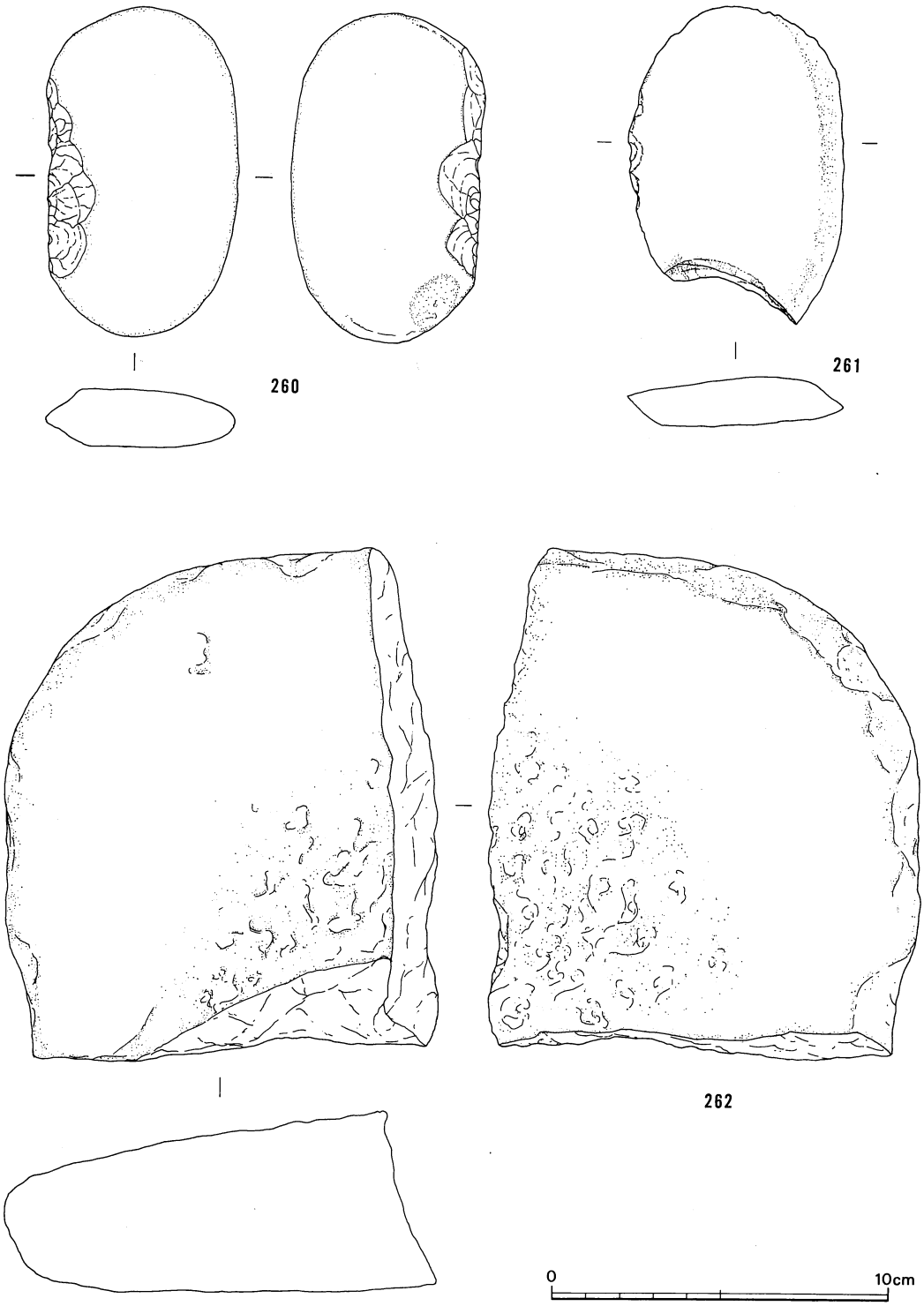
第130図　ＳＫ８、田村川出土遺物



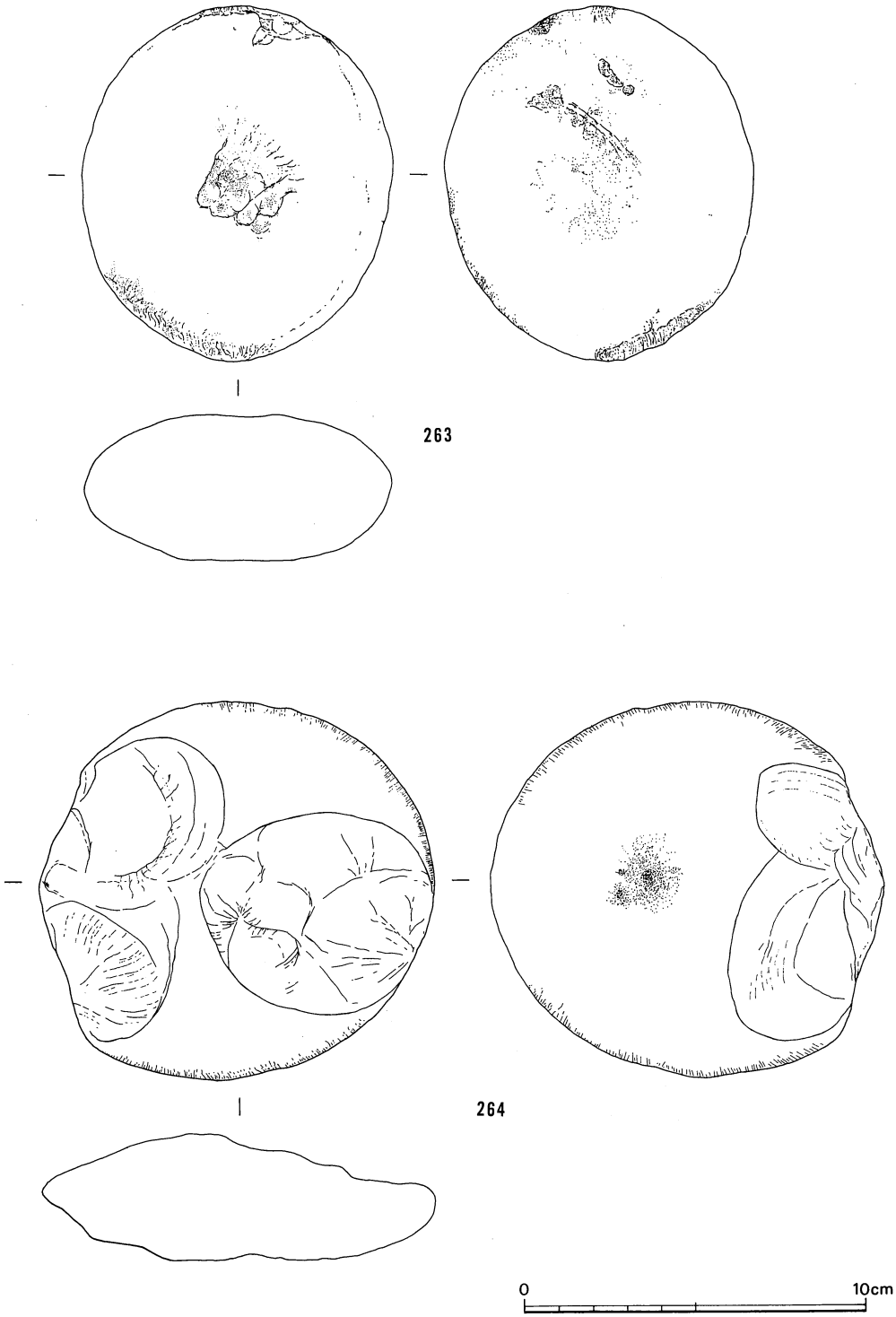
第131図　ＳＫ７、田村川出土遺物



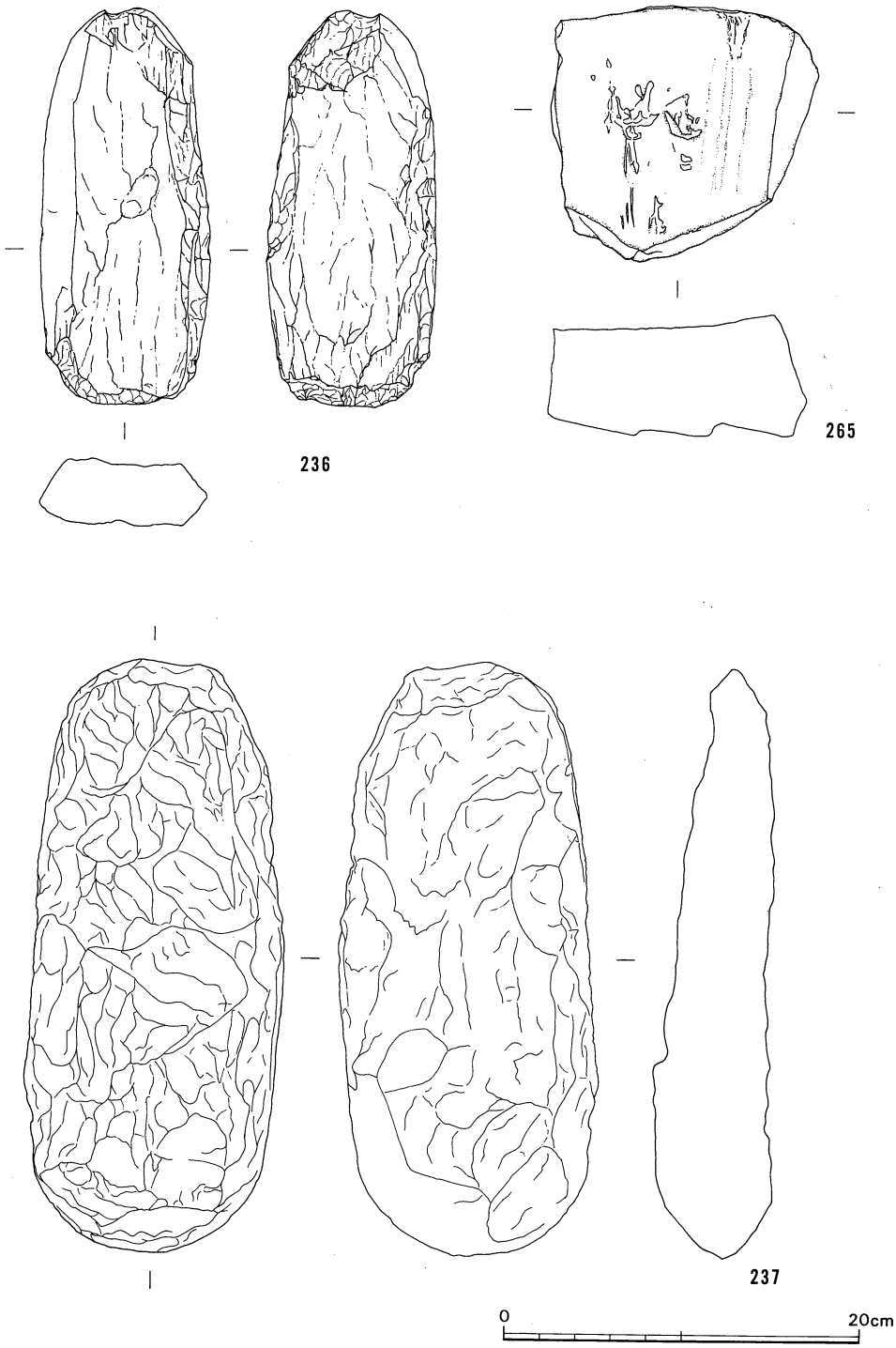
第132図　田村川出土遺物



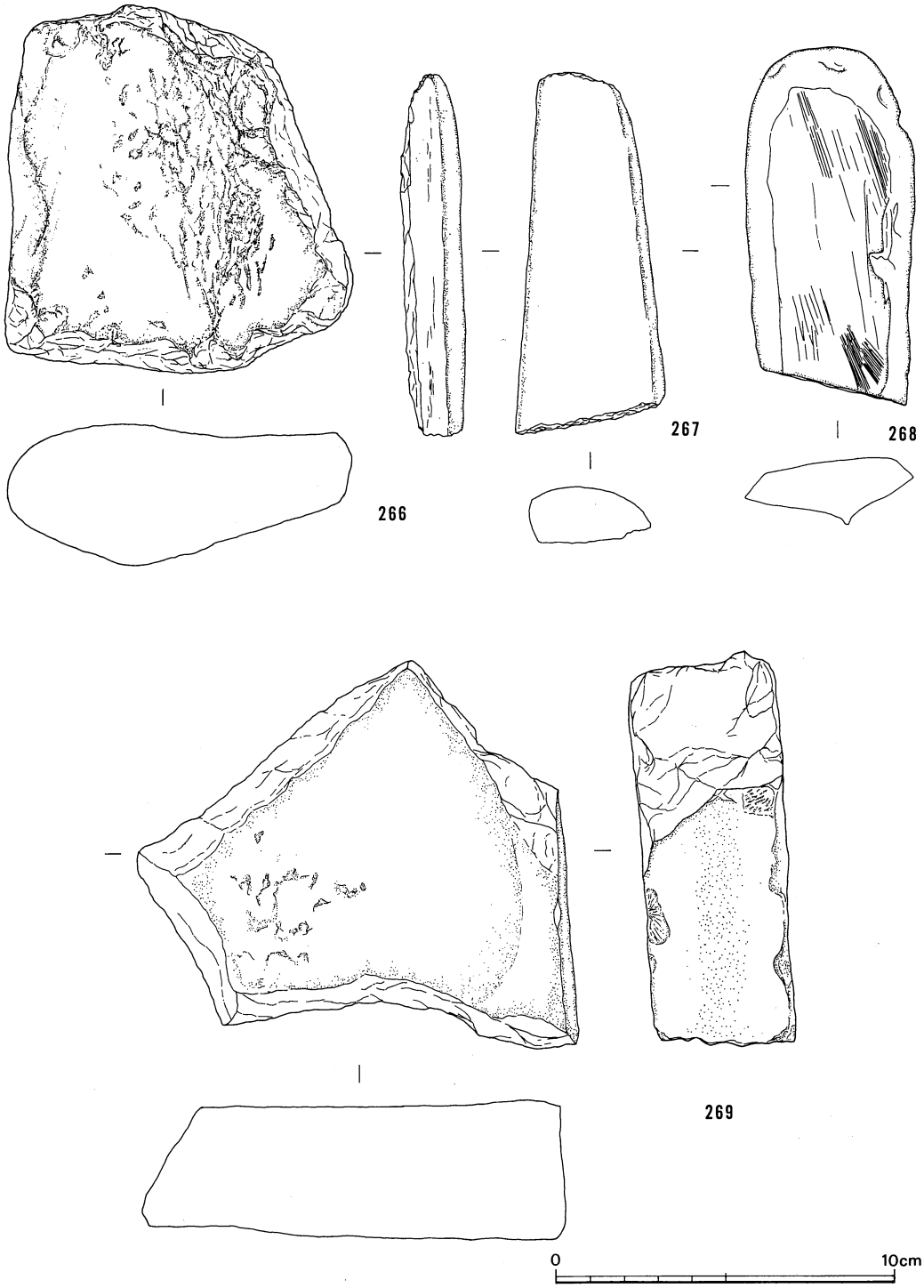
第133図　ＳＴ１、ＳＫ８、田村川出土遺物



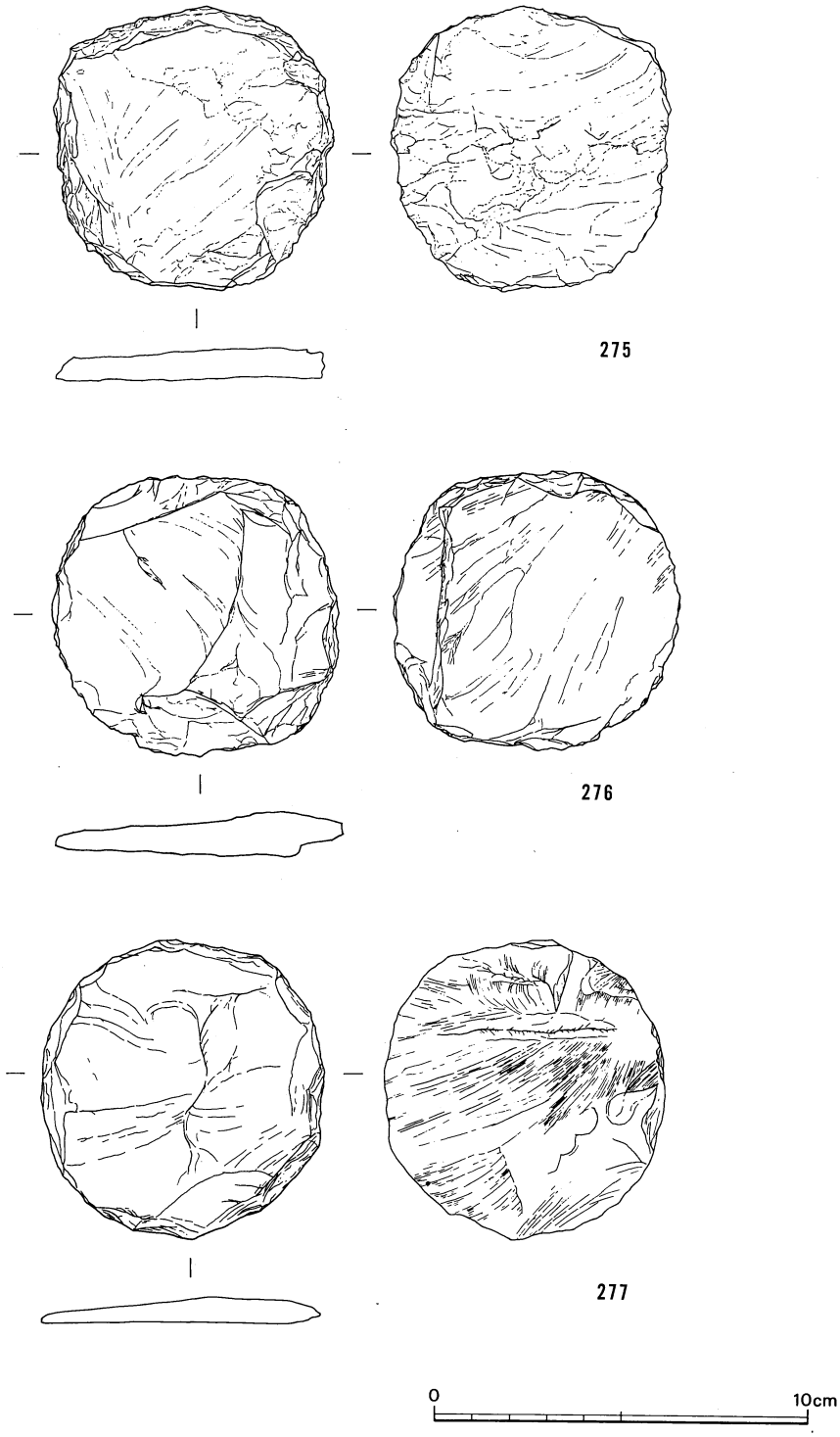
第134図　ＳＫ８、田村川出土遺物



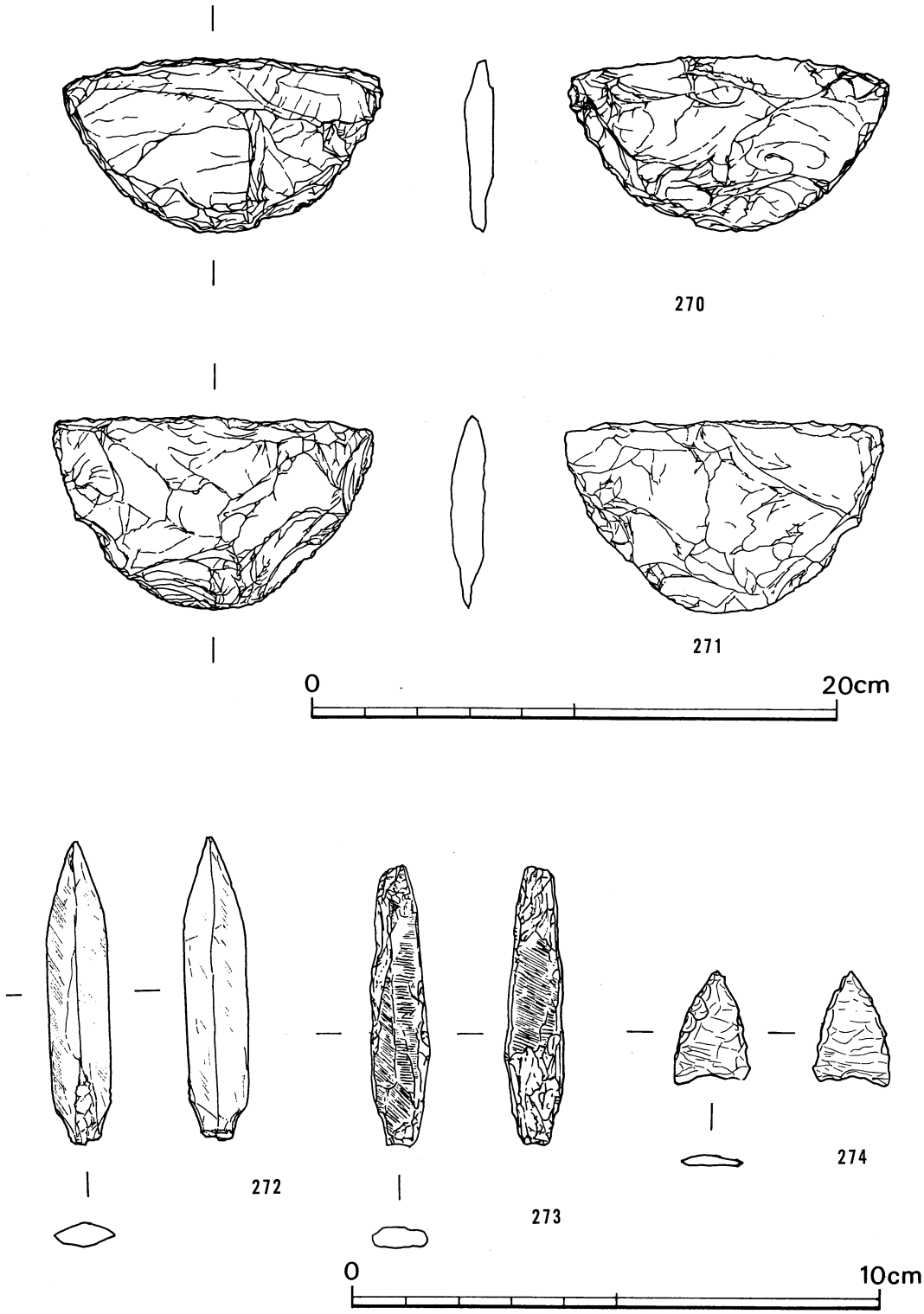
第135図　ＳＫ16、田村川出土遺物



第136図　ＳＴ１、ＳＫ８・13、田村川出土遺物



第137図　ＳＫ８出土遺物



第138図　ＳＫ８出土遺物

第21表　E区遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
1	ＳＫ４	甕	26.5 29.8 24.0 8.2	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	外面縦方向のハケ調整。内面ナデ調整。	胴部中位に黒斑あり。
2	〃	蓋	27.4 (2.0) —— ——	口縁部は外方に屈曲。甕の蓋である。	外面ヘラ磨き。	口縁部内面がススけている。
3	ＳＫ５	壺	—— (27.0) 24.2 8.2	最大径が胴部中位にある。上胴部にヘラ描沈線を配する。	上胴部、頸部に粘土帯接合部を認む。内面観察によると頸部まで5段で成形している。	外面沈線以下二次的な火をうけて変色、剥離が著しい。
4	ＳＫ６	〃	—— (15.3) 23.6 ——	胴部中位で「く」の字状に屈曲。上胴部に２条のヘラ描沈線、その下に３条単位の複線山形文を配する。	外面横方向のヘラ磨き。	屈曲部以下ススけており、下胴部は火をうけて変色。
5	〃	〃	17.5 (26.0) 35.6 ——	最大径が上胴部にある。口縁部は直線的に外反する。口頸間と頸胴間に１条のヘラ描沈線を配する。	外面縦方向のハケ調整の下地の上を横方向にヘラ磨き。頸部内面に指頭圧痕が顕著である。	口唇部は横方向の強いナデ調整。
6	〃	〃	—— (8.5) —— 7.5	上げ底状の底部。	外面ハケ調整。	外面は火を受けて変色。
7	〃	〃	—— (9.0) —— 8.2	わずかに上げ底状の底部。	外面ハケ調整。内面板状工具の擦痕あり。	
8	〃	〃	20.2 (2.0) —— ——	口唇部を上下に拡張し、３条の凹線文を配する。	口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。	
9	〃	〃	18.8 (5.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は外傾する面をなす。口頸間に１条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内面横方向のハケ調整。口頸部外面縦方向のハケ調整後ヘラ磨き。	
10	〃	甕	18.3 (9.0) 18.6 ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内面横方向のハケ調整。外面右下りのハケ調整。口縁部外面横方向のナデ調整。	
11	〃	〃	20.0 (4.5) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	口縁部内面ハケ調整。	
12	〃	鉢	26.0 (4.5) —— ——	頸部にしっかりした段部を有し、口縁部は如意形に外反。	内外面ヘラ磨き。	
13	〃	蓋	23.0 10.0 —— 6.4	笠部は直線的に外方に開く。頭部と笠部との間にヘラ描沈線を配する。	頭部に充塡している粘土が剥離。内外面ヘラ磨き。	口縁部内面が環状にススけている。
14	ＳＫ７	壺	18.0 (6.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面ヘラ磨き。	
15	〃	〃	—— (5.5) —— ——	胴部に２条のヘラ描沈線。その下に３条を単位とする上弦のヘラ描きによる重弧文を配する。	〃	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
16	ＳＫ７	壺	14.5 (18.0) 27.2 ――	口頸間と頸胴間に段部を有する。口縁部はわずかに外反し、口唇部は面をなす。段部に３条胴部中位に２条のヘラ描沈線を配し、その間に３条単位の下弦の重弧文を配する。	外面ヘラ磨き。	
17	〃	〃	―― 3.0 ―― (11.5)	円盤貼付底で、貼付部が剝離。また下胴部において粘土帯接合部で欠損しており、擬口縁を観察することができる。	内面に指頭圧痕あり。	
18	〃	〃	―― (11.0) ―― 9.0	上げ底状の底部。	外面ヘラ磨き。	
19	〃	甕	17.0 (2.0) ―― ――	口縁部は強く外方に屈曲する。口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
20	〃	〃	―― (3.5) ―― 6.6	上げ底の底部で、外方に張り出している。	内外面ナデ調整。	
21	〃	〃	17.6 (10.5) 17.3 ――	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に弱い双線を配する。	頸部外面縦方向、胴部外面右下りのハケ調整。	
22	〃	〃	19.0 (7.0) ―― ――	口縁部は如意形に外反し、口唇部は丸くおさめる。	不　　明。	
23	ＳＤ１	壺	―― (5.5) ―― ――	胴部の上下に２条のヘラ描沈線を配し、その間に３条単位の複線山形文を施す。	ヘラ磨き。	
24	〃	〃	―― (2.0) ―― ――	細いヘラで斜格子文を配する。	〃	
25	〃	〃	―― (3.5) ―― ――	胴部に１条のヘラ描沈線を施し、その下に４条単位の上弦の重弧文を配する。	〃	
26	〃	〃	―― (4.0) ―― ――	胴部に３条のヘラ描沈線を施し、その下に４条単位の下弦の重弧文を配する。	〃	
27	〃	〃	―― (5.0) ―― ――	胴部に削り出し突帯（一種）。	内面横方向のナデ調整。外面ヘラ磨き。	
28	〃	〃	―― (3.0) ―― ――	上胴部に２条のヘラ描沈線を配し、沈線間にヘラ描斜格子文を施す。	ヘラ磨き。	
29	〃	〃	―― (6.0) 24.4 ――	上胴部に横方向のヘラ描沈線３条を施し、その上を縦方向の３条のヘラ描沈線で区面し、その中に十字の木葉文を配する。	〃	
30	〃	〃	―― (4.5) ―― ――	頸部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は強く屈曲。口縁外面に２cm幅の粘土帯を貼付する。	口唇部外面は横方向の強いナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	ＳＤ１	壺	—— (2.5) —— 2.8	底部から斜め外方に柄部が伸びたものと考えられるが欠損。	手捏ね。	
32	〃	〃	15.0 (3.2) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	ヘラ磨き。	
33	〃	〃	16.0 (4.5) —— ——	口縁部はラッパ状に外反。口唇部に１条のヘラ描沈線を配し、更に刻目を施す。	外面右下りのハケ調整後にヘラ磨き。刻目はハケ状施文原体による。	
34	〃	〃	14.6 (4.5) —— ——	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に２条のヘラ描沈線を施す。	外面横方向のナデ調整。	
35	〃	〃	5.0 9.2 4.8 3.2	最大径を胴部中位に有し、頸部は長く伸びる。口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	内面に指頭圧痕が顕著に残る。外面ナデ調整。	
36	〃	〃	22.0 (5.0) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部はなめらかに外反し、端部はわずかに肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	口頸部内外面横方向のヘラ磨き。	
37	〃	〃	17.6 (5.5) —— ——	直線的に立ち上がる頸部から口縁部は丸く外反する。口唇部は面をなす。口頸間に２条のヘラ描沈線を配し、その間に棒状工具による刺突文を配する。		
38	〃	〃	17.5 (5.0) —— ——	口頸間に断面三角の貼付突帯。口縁部は大きく外反し、口唇部は丸くおさめる。	内外面ヘラ磨き。	
39	〃	〃	15.7 (7.0) —— ——	口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に２条のヘラ描沈線を配し、沈線間に竹管による刺突文を配する。	不　　明。	
40	〃	〃	16.7 (4.0) —— ——	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整の後、横方向のヘラ磨きを施る。内面は横方向のヘラ磨き。	
41	〃	〃	18.3 (4.5) —— ——	口頸間に段部を有し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整の上に横方向のヘラ磨きを施す。	
42	〃	〃	13.2 (8.0) —— ——	口頸間に段部を有する。口縁部は丸く外反し、端部はやや肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	
43	〃	〃	12.4 (7.0) —— ——	口縁部は長くなめらかに外反する。口唇部は外傾する面をなす。頸部に刺突文を配する。	不　　明。	
44	〃	〃	12.5 (8.0) —— ——	頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸く外反する。口唇部は丸くおさめる。	外面ヘラ磨き。	
45	〃	〃	13.8 (6.0) —— ——	口縁部の外反度は弱い。口唇部は丸くおさめる。	内面に指頭圧痕が顕著である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
46	ＳＤ１	壺	18.0 (16.5) —— ——	口頸間に弱い段部を有する。口縁部は一旦直線的に外方に立ち上がり、端部近くでわずかに屈曲。口唇部は面をなす。	外面ヘラ磨き、内面は横方向のハケ調整。	
47	〃	〃	21.5 (2.0) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面に粘土帯を貼付している。（段部を有するものか。）	
48	〃	〃	14.0 (4.5) —— ——	直立気味の頸部から口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	ヘラ磨き。	
49	〃	〃	13.0 (13.2) 19.6 ——	最大径は胴部中位にあり、口縁部は丸く外反する。口唇部は丸くおさめる。	外面ヘラ磨き。頸部内面に指頭圧痕あり。	
50	〃	〃	—— (9.0) 11.8 5.8	わずかに上げ底状を呈す。	内面に指頭圧痕あり。外面は右下りのヘラ磨き。	下胴部外面及び外底外縁が環状にススける。
51	〃	〃	—— (12.0) 21.0 ——	胴部が球形に近い。	内外面横方向のヘラ磨き。	
52	〃	〃	—— (5.0) 10.0 4.5	最大径が胴部中位にある。断面台形状の底部。	内面に指頭圧痕が顕著である。	
53	〃	〃	—— (6.0) —— 8.3	底部平底。	外面右下りのハケ調整。	
54	〃	〃	—— (3.2) —— 11.9	〃	不　　明。	
55	〃	〃	—— (4.5) —— 6.5	断面台形状の底部で、厚いつくりである。	〃	
56	〃	〃	—— (3.5) —— 9.5	底部平底。	外面ハケ調整。	内面がススけている。
57	〃	〃	—— (5.5) —— 9.0	〃	ハケ調整の下地の上にヘラ磨きを施す。	
58	〃	〃	—— (6.5) —— 7.3	〃	外面ハケ調整。内面ナデ調整。	外面全面及び外底が環状にススけている。
59	〃	〃	—— (6.0) —— 10.5	〃	不　　明。	〃
60	〃	〃	—— (8.0) —— 8.5	〃	内面は丁寧なナデ調整。	外面全面ススけ、火を受けて変色している。外底は環状にススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
61	ＳＤ１	壺	—— (5.5) —— 8.2	底部は上げ底状を呈する。	不　　明。	
62	〃	〃	—— (6.0) —— 9.0	底部は上げ底状を呈する。厚いつくりである。	内面は板状工具により調整する。	
63	〃	〃	—— (8.5) —— 8.5	底部平底。	内面は丁寧なナデ調整。	内外面及び外底外縁が、ススける。外面は火をうけて変色。
64	〃	〃	—— (8.0) —— 8.5	〃	内外面ハケ調整。	
65	〃	〃	—— (9.4) —— 7.7	〃	不　　明。	内外面剥離が著しい。
66	〃	〃	—— (7.5) —— 9.8	〃	内面は木理の細かいハケ調整。外面は、ハケ調整。底部近くは横方向のハケ調整。	
67	〃	〃	—— (7.5) —— 13.5	〃	外面は木理の粗いハケ調整の下地の上に横方向のヘラ磨き。	
68	〃	〃	—— (6.0) —— 8.3	〃	外面ヘラ磨きがわずかに観察できる。	
69	〃	甕	19.4 (2.5) —— ——	口縁部は強く外反し、口唇部は丸くおさめる。頸部に３条ヘラ描沈線を配する。		
70	〃	〃	17.0 (4.0) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に３条の沈線を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
71	〃	〃	20.0 (3.5) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	口縁部外面はススけている。
72	〃	〃	21.0 (6.0) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	〃	
73	〃	〃	22.5 (3.5) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。頸部に１条のヘラ描沈線。	外面縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面に指頭圧痕を認める。	
74	〃	〃	24.0 (3.6) —— ——	口縁部は強く外反し、直線的に伸びる。口唇部は垂直な面をなし、全面に刻目を施す。頸部に弱い段を有する。	口縁部内面横方向のハケ調整。刻目はハケ状施文原体による。	
75	〃	〃	23.5 (9.5) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部には２条のヘラ描沈線を配する。	内面右下り。外面は縦及び横方向のハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
76	ＳＤ１	甕	—— (4.0) —— ——	外面に３条のヘラ描沈線を施し、その下に双線による山形文を配する。	不　明。	双線の原体は半截竹管ではない。
77	〃	〃	12.9 (6.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、口唇部は丸くおさめる。	〃	内外面共に剝離が著しい。外面全面にススけている。
78	〃	〃	27.4 (7.5) 27.8 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。頸部に１条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面横方向のナデ調整。胴部外面横方向のハケ調整。	断面に外傾接合痕を認める。
79	〃	〃	23.0 (5.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を配する。頸部に２条のヘラ描沈線を施し、その間に刺突文を配する。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。	
80	〃	〃	27.4 (5.0) —— ——	口縁部は直線的に外方にのびる。口唇部は垂直な面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。	
81	〃	〃	21.3 (6.0) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部はやや凹状をなし、全面に「Ｄ」型の刻目を施す。	口縁部内面右下りのハケ調整。外面は右下り及び縦方向のハケ調整。	胴部中位以下ススけている。
82	〃	〃	31.2 (8.0) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。頸部に１条のヘラ描沈線を配する。	外面ハケ調整。	胴部外面中位以下ススけている。
83	〃	〃	21.8 (5.5) 22.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
84	〃	〃	31.0 (4.0) —— ——	胴部が大きく張り出すタイプ。口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目を施す。	内外面右下りのハケ調整。刻目はヘラ状原体による。	
85	〃	〃	18.0 (8.5) 17.0 ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。頸部に３～４条のヘラ描沈線をめぐらし、沈線上に列点文を配する。		内面上胴部に剝痕が付着。
86	〃	〃	22.5 (3.5) —— ——	口縁部は如意形に外反。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面右下りのハケ調整。	
87	〃	〃	22.2 (3.5) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。頸部に２条のヘラ描沈線。	口縁部外面に右下りのハケ調整。	
88	〃	〃	21.0 (7.0) 21.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を配する。	外面は右下りのハケ調整。	外面は全面ススけている。
89	〃	〃	20.5 (6.5) 19.2 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。	口縁部外面横方向のナデ調整。	
90	〃	〃	23.0 (5.5) 22.7 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は面をなし、全面に刻目。頸部に１条のヘラ描沈線。	外面横及び右下りのハケ調整。断面に２ヶ所外傾接合痕を認める。	外面は沈線付近以外はススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
91	ＳＤ１	甕	20.0 (9.7) 20.3 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を施す。	胴部外面縦方向のハケ調整。口縁部内外面は横方向のナデ調整。	外面にススが付着。
92	〃	〃	24.0 (6.0) 22.7 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を施す。	口縁部内外面横方向のナデ調整。外面は右下りの木理の粗いハケ調整。	外面全面がススける。
93	〃	〃	25.0 (8.0) 24.0 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、頸部にヘラ描沈線を１条配する。	口縁部内面横方向のハケ調整。外面右下りのハケ調整。口縁部内外面横方向の強いナデ調整。刻目はハケ状施文原体による。	
94	〃	〃	23.0 (14.0) 23.0 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を配する。	口縁部内面横方向、外面は右下りの木理の粗いハケ調整。刻目はヘラ状工具による。	
95	〃	〃	17.5 (18.5) 17.3 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、刻目を施す。頸部に３条のヘラ描沈線を配する。	外面は右下り、及び左下りのハケ調整を施す。	
96	〃	〃	28.4 (4.4) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、下端に強く刻目を施す。上胴部にも刻目を配する。	刻目はヘラ状原体による。	外面全面ススけている。
97	〃	〃	24.4 (12.0) 24.0 ――	〃	刻目はヘラ状原体による。口縁部外面及び上胴部は縦方向、胴部中位以下は縦及び右下りのハケ調整。	
98	〃	〃	30.4 (6.5) 35.4 ――	胴部が大きく張り出している。口唇部は外傾する面をなし、下端に深く刻目を施す。頸部に４条のヘラ描沈線。	口縁部内面横方向、口縁部外面縦方向、胴部外面横方向のハケ調整。	内面全面がススけている。
99	〃	〃	―― (4.5) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ、全面に刻目を施す。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面は横方向の強いナデ調整。	
100	〃	〃	―― (5.0) ―― ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなし、全面に刻目を配する。頸部に２条のヘラ描沈線を配する。	口縁部外面横方向の強いナデ調整。刻目はヘラ状原体による。	沈線以下がススけている。
101	〃	〃	25.0 (5.0) ―― ――	口縁部は如意形に外反し、口唇部は面をなす。	口縁部内外面右下りのハケ調整。	
102	〃	〃	24.4 (6.5) 23.4 ――	口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ全面に刻目を配する。頸部にヘラ描沈線１条を配する。	口頸部内外面横方向のナデ調整。	外面は全面ススけている。
103	〃	〃	―― (7.6) ―― 8.8	わずかに上げ底状を呈する。	外面縦方向のハケ調整。	〃
104	〃	〃	―― (4.5) ―― 7.8	底部平底。	不　　明。	内底にコゲ付きがみられる。外底外縁が環状にススけている。
105	〃	〃	―― (11.0) 19.9 ――	上胴部に段を有する。	内面は横方向のハケ調整。外面段部横方向、胴部外面縦方向のハケ調整。段部は粘土帯の貼付によって生ずる。	胴部中位以下ススけている。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
106	ＳＤ１	甕	—— (5.0) —— 8.4	上げ底状を呈する。	不　　明。	内面がススけている。
107	〃	〃	—— (6.5) —— 7.4	底部は高台状に外方に張り出す。	〃	
108	〃	〃	—— (9.5) —— 8.3	底部平底。	内面に指頭圧痕あり。外面に縦方向のハケ調整。	外面はススける。内面は底部より６～７cm上にコゲ付きが見られる。
109	〃	〃	—— (3.5) —— 7.0	〃	内面に指頭圧痕、外面縦方向のハケ調整。	外面がススける。外底外縁が環状にススけている。
110	〃	〃	—— (7.0) —— 6.4	〃	外面右下りのハケ調整。	外面はススけている。
111	〃	〃	—— (7.6) —— 8.5	わずかに上げ底状を呈する。	不　　明。	内外共にススけている。
112	〃	〃	—— (6.4) —— 7.2	底部平底。	〃	
113	〃	〃	—— (8.5) —— 9.5	〃	外面縦方向のハケ調整。	外面は全面ススけている。外底外縁は環状にススける。
114	〃	〃	—— (11.3) —— 6.0	底部が比較的小さく、薄いつくりである。	胴部中位ヘラ磨き。胴部下位は木理の粗いハケ調整。	外面は全面ススけている。外底は環状にススける。胴部下位は火を受けて変色。
115	〃	〃	—— (5.5) —— 7.0	底部平底。	外面縦方向のハケ調整。	外面はススけており、且つ火を受けて変色している。内面底部より3cm上からススけている。
116	〃	〃	—— (7.0) —— 8.0	〃	〃	〃
117	〃	高杯	26.4 (2.0) —— ——	口縁部内面に段部を有する。	〃	
118	〃	鉢	24.4 (7.0) 24.0 ——	口縁部は如意形に外反し、口唇部は外傾する面をなす。	口縁部外面は右下りのハケ調整が残るが、胴部以下横方向のヘラ磨き。	胴部断面に内傾接合部を有する。
119	〃	〃	—— (3.0) —— ——	口縁部は内湾しており、２孔を焼成前に穿つ。	外面ヘラ磨き。	
120	〃	〃	30.4 (6.0) 29.4 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部は外傾する面をなす。	外面にヘラ磨きの痕跡がわずかに残る。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
121	ＳＤ１	高杯	—— (2.6) —— ——	脚部と杯部の接合部に突帯あり。	不　　明。	
122	〃	鉢	26.8 (1.5) —— ——	口縁部はわずかに内湾する。外面に２条のヘラ描沈線を配する。	内面に指頭圧痕。	
123	〃	蓋	18.5 (4.0) —— ——	笠部は直線的に下降し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内外面ヘラ磨き。	口縁部内面が２cm幅で環状にススけている。
124	〃	〃	20.5 (3.0) —— ——	笠部は直線的に下降し、口縁部はなめらかに外反する。口唇部は面取り。	〃	口縁部内面が２cm幅で環状にススけている。内面に刻痕あり。
125	〃	〃	20.2 (3.4) —— ——	笠部から口縁部までなめらかに外反する。	口唇部及び口縁部外面は横方向に強くナデる。内面横方向、外面右下りのハケ調整。	口縁部内面が２cm幅で環状にススける。
126	〃	〃	23.0 (4.0) —— ——	笠部から口縁端部に至るまで、直線的に下降。	外面ヘラ磨き、内面横方向のハケ調整の下地の上をヘラ磨きする。	〃
127	〃	〃	21.0 (3.0) —— ——	笠部は直線的に下降し、口縁部はわずかに外方に屈曲する。	内外面ヘラ磨き。	〃
128	〃	〃	—— (5.6) —— 6.0	頂部は水平な面をなす。	不　　明。	
129	〃	〃	27.0 (2.5) —— ——	笠部から口縁端まで直線的に下降する。口唇部は丸くおさめる。	外面に横方向のハケをわずかに観察することができる。	口縁部内面が２cm幅で環状にススける。
130	〃	〃	—— (7.0) —— 7.0	頂部は水平な面をなし、外方に張り出す。笠部はわずかに外反気味に下降する。	外面縦方向、内面横方向のハケ調整。	
131	〃	〃	—— (6.0) —— 6.4	頂部は水平な面をなす。笠部はわずかに内湾気味に下降する。	外面ハケ調整。	
132	〃	紡錘車	直径　4.5 厚さ　0.9 重量(g)19.3	円形に近い。	ナデ調整。	
133	〃	〃	直径　4.4 厚さ　0.9 重量(g)17.9	〃	〃	
134	〃	土製円盤	直径　4.0 厚さ　0.7 重量(g) 8.2	〃	土器の胴部を転用。	
135	〃	〃	直径　5.7 厚さ　0.8 重量(g)32.0	〃	〃	

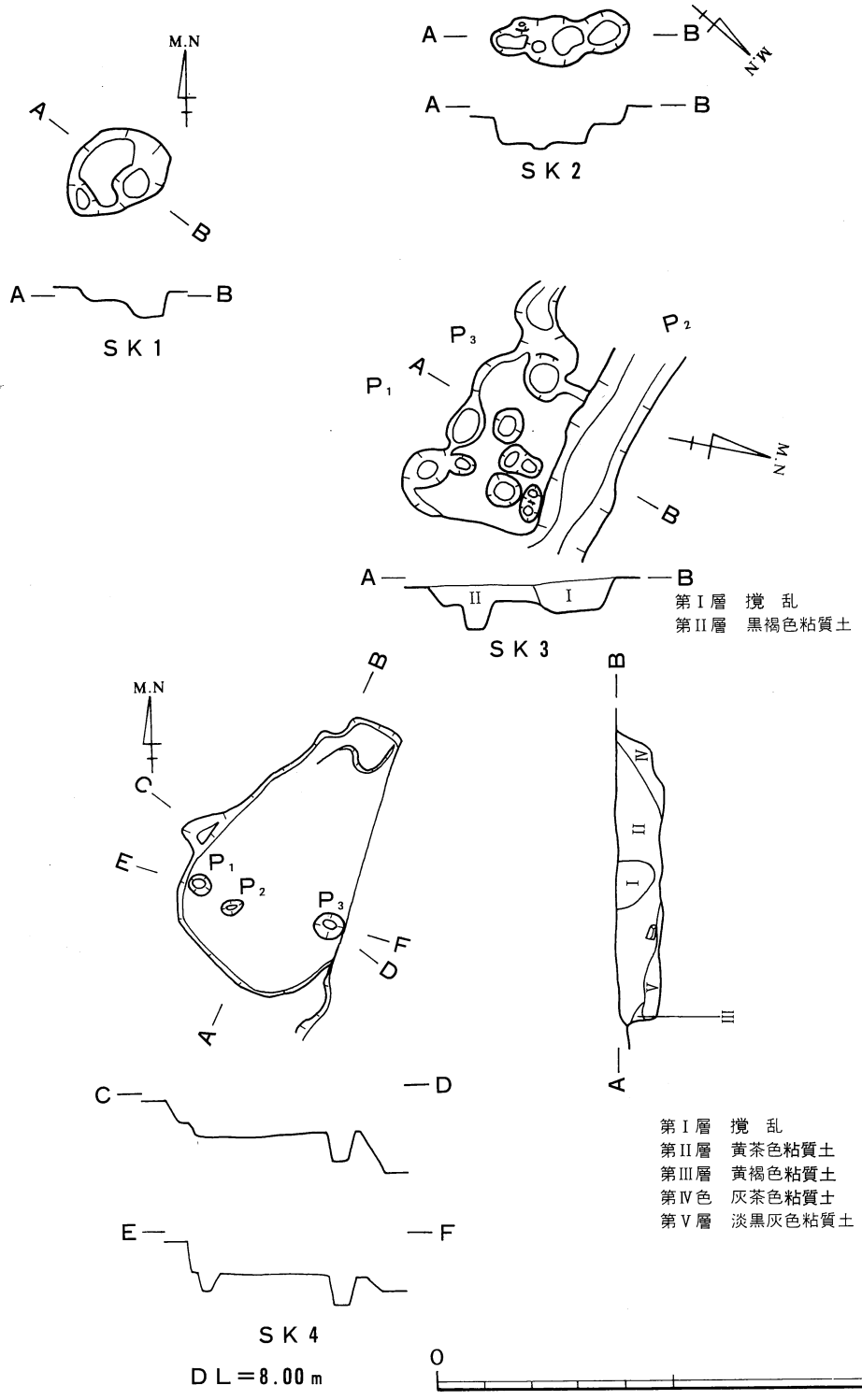
第22表　E区遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
136	SD1	石斧	(13.7) 7.5 4.8 810.0	緑色岩	刃部が欠損している。全面に敲打痕がみられ、成形されているが、研磨痕は全くみられない。未製品の段階で欠損したものである。	
137	SK3	〃	(16.6) 8.0 4.1 955.0	〃	基端部を欠損しているが、隅丸長方形の平面形を有するものであろう。残存部は全面丁寧に研磨されている。刃部両面に刃こぼれがみられる。	
138	SD1	〃	16.1 6.3 3.8 655.0	〃	平面形は隅丸長方形をなす。かろうじて原形をとどめているが、両面共に欠損が著しい。これは石斧として使用している時に欠損したものではない。別の用途に使われていたものと考えられる。	
139	田村川	〃	(10.6) 6.5 4.5 540.0	〃	刃部が欠損している。基端部は丸味をもっており、断面は楕円形を呈する。	表面はかなり風化している。
140	〃	〃	14.3 6.5 4.0 505.0	結晶片岩	基部が斜めに欠損している。刃部は光沢を出すほどに研磨されている。また刃部には敲打痕があるが、これは基部が欠損した後叩石として刃部を利用したものである。	
141	〃	〃	(7.7) 4.0 2.2 135.0	緑色岩	小型の蛤刃石斧であり、基端部は欠損する。後側縁側の刃部が使用により著しく磨耗している。刃先の一部に刃こぼれが見られる。	
142	〃	〃	17.5 9.2 4.6 1130.0	〃	太型蛤刃石斧の未製品である。敲打成形の段階に基部が大きく欠損したものである。	
143	〃	〃	(8.7) 7.5 2.6 510.0	〃	太型蛤刃石斧の刃部である。基部中央部に最大幅をもつものである。	
144	〃	〃	21.0 6.5 5.2 1130.0	〃	最大幅が刃部にあり、基端部は尖形を呈する。断面は丸い。全面に敲打痕が見られる。研磨前に基部から刃部にかけて欠損している。	
145	〃	〃	(9.2) 6.7 3.5 470.0	〃	太型蛤刃石斧の基部である。断面は楕円形をなす。刃部欠損後に両側縁を叩石として利用している。	
146	SD1	〃	(12.5) 5.2 1.2 110.0	頁　岩	打製石斧である。基部が大きく欠損しているが、平面形は長方形を呈するものである。刃先には使用による刃こぼれが見られる。	
147	〃	〃	(13.7) 4.8 1.5 154.0	結晶片岩	打製石斧である。刃部が欠損しているが、平面形は長方形を呈するものである。片方の主面に横方向の擦痕が見られる。	
148	田村川	叩石	9.0 7.5 5.4 500.0	砂　岩	河原石をそのまま利用している。6ヶ所に潰痕が見られる。	
149	SK3	〃	(13.0) 15.2 6.2 1860.0	〃	横に半分欠損している。縁部を打ち欠いており、一方の面の中央部に潰痕が見られる。	
150	〃	〃	10.3 10.1 3.4 555.0	〃	河原石をそのまま利用したものである。中央部に潰痕が見られる。	

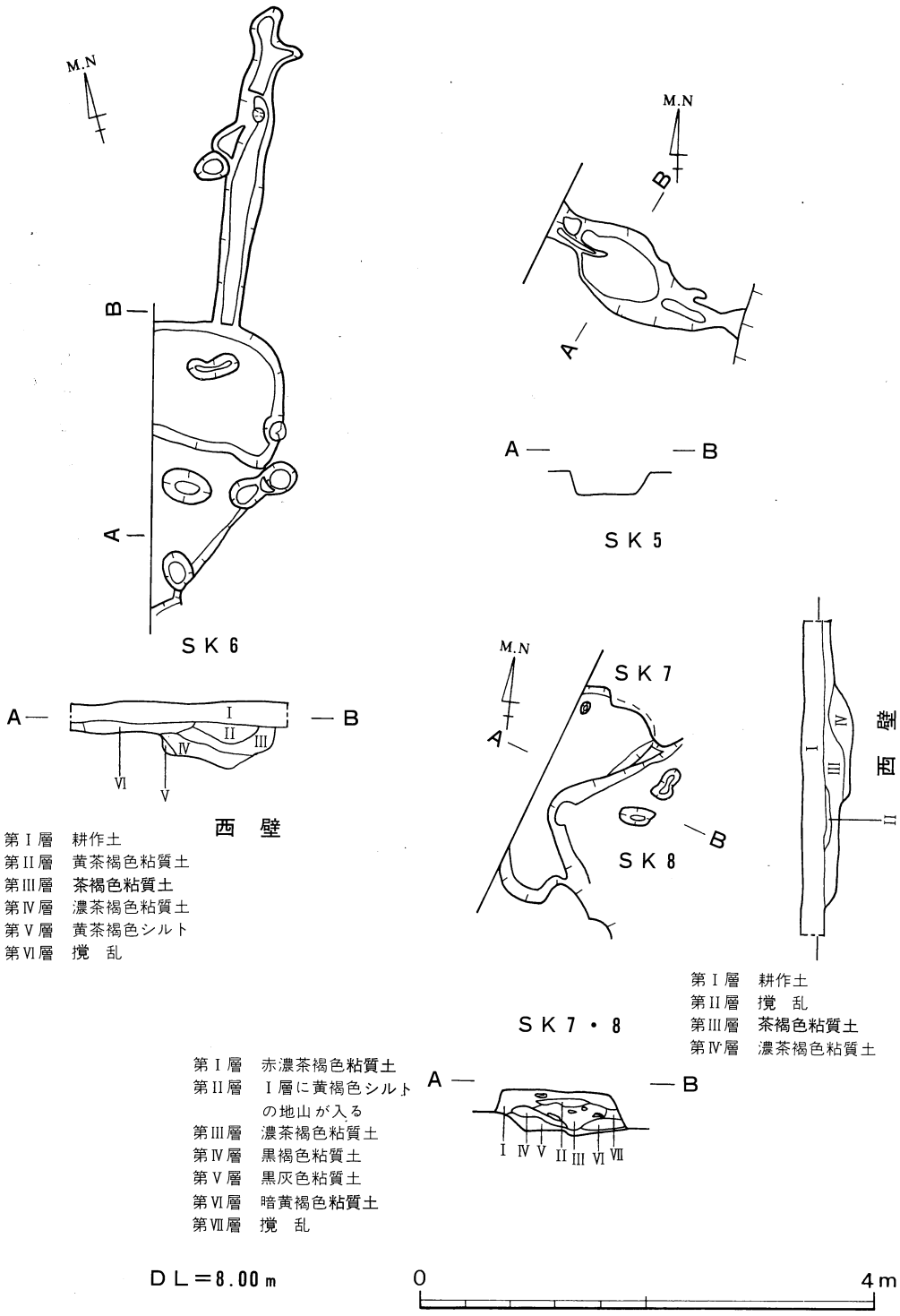
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
151	田村川	叩石	11.2 10.1 4.6 785.0	砂　岩	河原石を利用しており、全縁部に潰痕がみられるが、特に縁部半分に顕著。	
152	ＳＤ１	〃	8.0 5.6 1.5 95.0	〃	石原石を利用しており、全縁部に潰痕がみられる。	
153	ＳＫ６	〃	6.0 4.0 1.1 30.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剝離面とからなる。長側縁の一方のみが磨耗している。	
154	ＳＤ１	〃	9.2 8.5 2.5 163.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剝離面とからなる。全縁部に潰痕がみられる。	
155	〃	〃	9.2 7.8 1.8 180.0	〃	〃	
156	〃	〃	11.0 8.2 2.2 260.0	〃	〃	
157	〃	〃	8.8 7.3 2.3 230.0	〃	河原石をそのまま利用しており、全縁部に潰痕がみられる。	
158	田村川	〃	14.2 11.0 4.5 782.0	〃	中央部に潰痕がありくぼんでいる。両面に大きな剝離痕がみられる。	
159	ＳＤ１	〃	12.1 13.8 5.2 1,650.0	〃	自然の河原石を利用したものである。全縁部に潰痕が見られる。中央部も潰痕がありへこんでいる。	
160	田村川	〃	(6.5) 8.5 2.5 235.0	〃	河原石を利用したもので、半分が欠損している。片面の中央部及び縁部に潰痕がある。	
161	〃	〃	8.2 7.1 2.4 234.0	〃	河原石をそのまま利用したものである。全縁部に潰痕あり。	
162	ＳＤ１	〃	11.1 8.0 3.8 525.0	〃	河原石をそのまま利用し、全縁部に潰痕がある。一方の面に大きな剝離痕が見られる。	
163	〃	〃	(7.7) 7.0 3.2 265.0	〃	長楕円形の河原石を利用している。半分が欠損している。縁部及び中央部に潰痕あり。	
164	〃	〃	7.8 7.3 4.5 327.5	〃	平面形は三角形をなし、一面を砥石として利用し、一面に潰痕がみられる。	
165	〃	〃	8.9 6.0 2.0 140.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剝離面とからなる。全縁部に潰痕がみられる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
166	ＳＤ１	叩石	12.0 7.0 1.5 132.5	砂　岩	河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなる。潰痕はほとんどみられない。	
167	〃	〃	(6.3) 6.5 1.5 72.5	〃	半分以上が欠損している。河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなる。縁部に潰痕が見られ、自然面は研磨されている。	
168	ＳＫ３	〃	14.4 9.0 2.4 400.0	〃	河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなっている。縁部に潰痕がみられる。	
169	ＳＤ１	〃	11.0 8.5 2.5 315.0	〃	河原石をそのまま利用したもので、全縁部に潰痕がみられる。	
170	〃	〃	(8.0) 10.5 2.6 300.0	〃	半分が欠損している。河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなっている。縁部に潰痕がみられる。	
171	〃	〃	10.0 7.2 2.1 210.0	〃	〃	
172	〃	〃	10.0 7.5 2.3 240.0	〃	〃	
173	〃	〃	13.0 8.5 2.0 250.0	〃	半分が欠損している。河原石を縦に割っており、自然面と剥離面とからなっている。縁部に潰痕がみられ、自然面の中央部にも潰痕がある。	
174	〃	〃	8.2 7.5 1.7 103.0	〃	河原石を利用したもので、自然面と剥離面からなる。潰痕はほとんどみられない。	
175	〃	〃	10.2 5.5 1.1 77.0	〃	河原石を利用したもので、自然面と剥離面とからなる。全縁部に潰痕がある。	
176	〃	磨石	4.0 4.0 3.0 57.0	〃	ほぼ球形をなしており、全面丁寧に研磨されている。	
177	〃	〃	3.5 2.9 2.6 37.0	〃	平面形は楕円形で、全面丁寧に研磨されている。	
178	〃	砥石	19.5 13.5 7.9 260.0	〃	平面形は長方形で、大型の砥石である。２面を使用している。	
179	〃	台石	(23.5) 20.0 5.7 4.5	〃	扁平で大型の河原石の両端を打ち欠いており、両面共中央部に潰痕がみられる。	
180	ＳＫ５	石包丁	(5.1) 4.3 0.8 25.0	頁　岩	半月形直線刃片刃石包丁である。0.65cmの円孔を有する。全面に研磨による擦痕がみられる。全体の⅔が欠損している。	

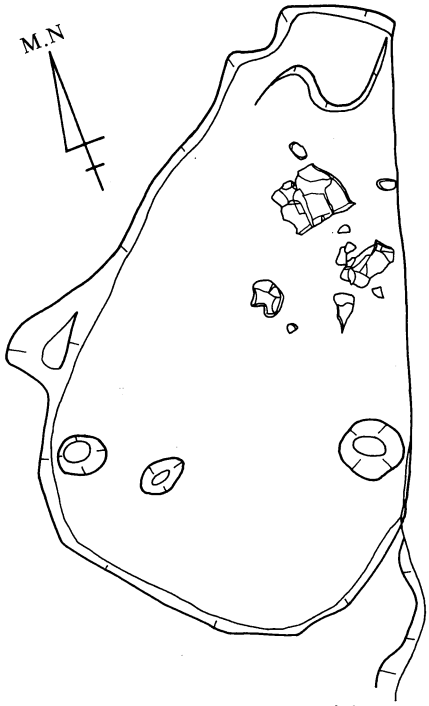
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
181	ＳＤ１	石包丁	(6.0) 3.6 0.5 18.0	頁　　岩	大部分が欠損しているが、長方形直線刃片刃石包丁である。6.5㎜の円孔を２つ両面から穿つ。	
182	〃	〃	(3.5) 4.5 0.6 15.0	安山岩質凝灰岩 ホルンフェルス	穿孔部付近の小片であるが、三角形外湾刃の石包丁であると考えられる。	
183	〃	石鏃	0.7 1.1 0.2 0.2	サヌカイト	凹基式打製石鏃である。断面形は菱形で、両面から押圧剥離による調整をしている。片面に主剥離面が残る。	
184	〃	〃	(1.2) 1.1 0.2 0.2	〃	基部が欠損しており、全体の形状は不明である。断面は極めて扁平である。	
185	〃	〃	1.5 1.4 0.2 0.5	〃	基部が左右に強く張り出し、抉りの大きな石鏃である。両面から押圧剥離による調整を施している。両面に主剥離面が残る。	
186	〃		2.9 1.3 6.0 2.0	〃	凹基式打製石鏃で、中心部の断面は三角形をなす。	
187	〃	〃	3.4 1.3 0.3 1.6	〃	凹基式で長身の石鏃である。両面に主剥離面を残す。刃部は両面から押圧剥離によって調整している。	
188	〃	石錐	3.4 1.3 0.4 2.2	〃	サヌカイトのフレークを利用したドリルで、正面の右側辺は表面より。左側辺は裏面より剥離している。	
189	〃	石剣	(7.4) 2.7 0.5 0.6	千 枚 岩	縦横に欠損しているが、残存部から石剣と考えられる。残存面は丁寧に研磨されている。	


M.N
A
B
SK1
SK2
P1
P2
P3
SK3
第Ⅰ層　撹　乱
第Ⅱ層　黒褐色粘質土
C
D
E
F
第Ⅰ層　撹　乱
第Ⅱ層　黄茶色粘質土
第Ⅲ層　黄褐色粘質土
第Ⅳ色　灰茶色粘質土
第Ⅴ層　淡黒灰色粘質土
SK4
DL＝8.00m
0
4m

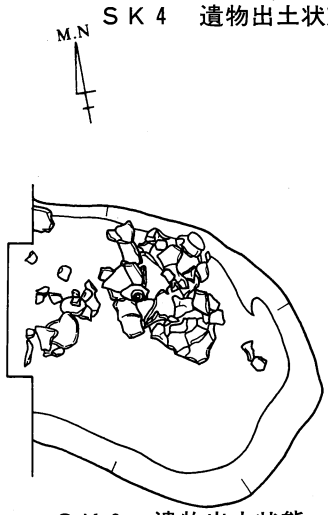
第139図　ＳＫ１～４


M.N
B
A
SK 6
A
B
I
II
III
IV
V
VI
西　壁
第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　黄茶褐色粘質土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土
第Ⅳ層　濃茶褐色粘質土
第Ⅴ層　黄茶褐色シルト
第Ⅵ層　撹　乱
M.N
B
A
A
B
SK 5
M.N
SK 7
A
B
SK 8
SK 7・8
西　壁
I
II
III
IV
第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　撹　乱
第Ⅲ層　茶褐色粘質土
第Ⅳ層　濃茶褐色粘質土
第Ⅰ層　赤濃茶褐色粘質土
第Ⅱ層　Ⅰ層に黄褐色シルトの地山が入る
第Ⅲ層　濃茶褐色粘質土
第Ⅳ層　黒褐色粘質土
第Ⅴ層　黒灰色粘質土
第Ⅵ層　暗黄褐色粘質土
第Ⅶ層　撹　乱
A
B
I
IV
V
II
III
VI
VII
DL＝8.00m
0
4m

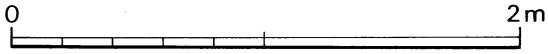
第140図　SK 5～8



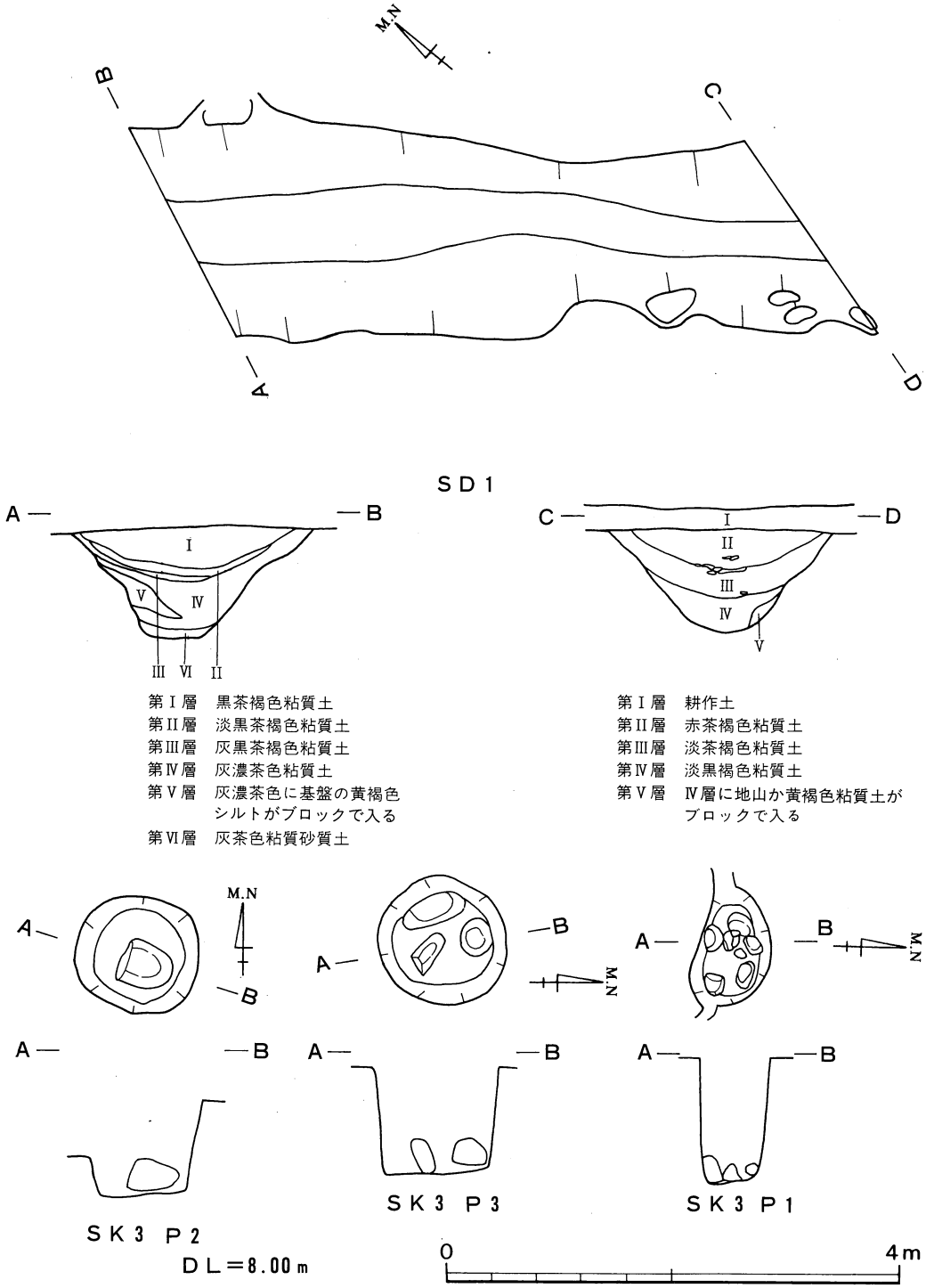
ＳＫ４　遺物出土状態



ＳＫ６　遺物出土状態



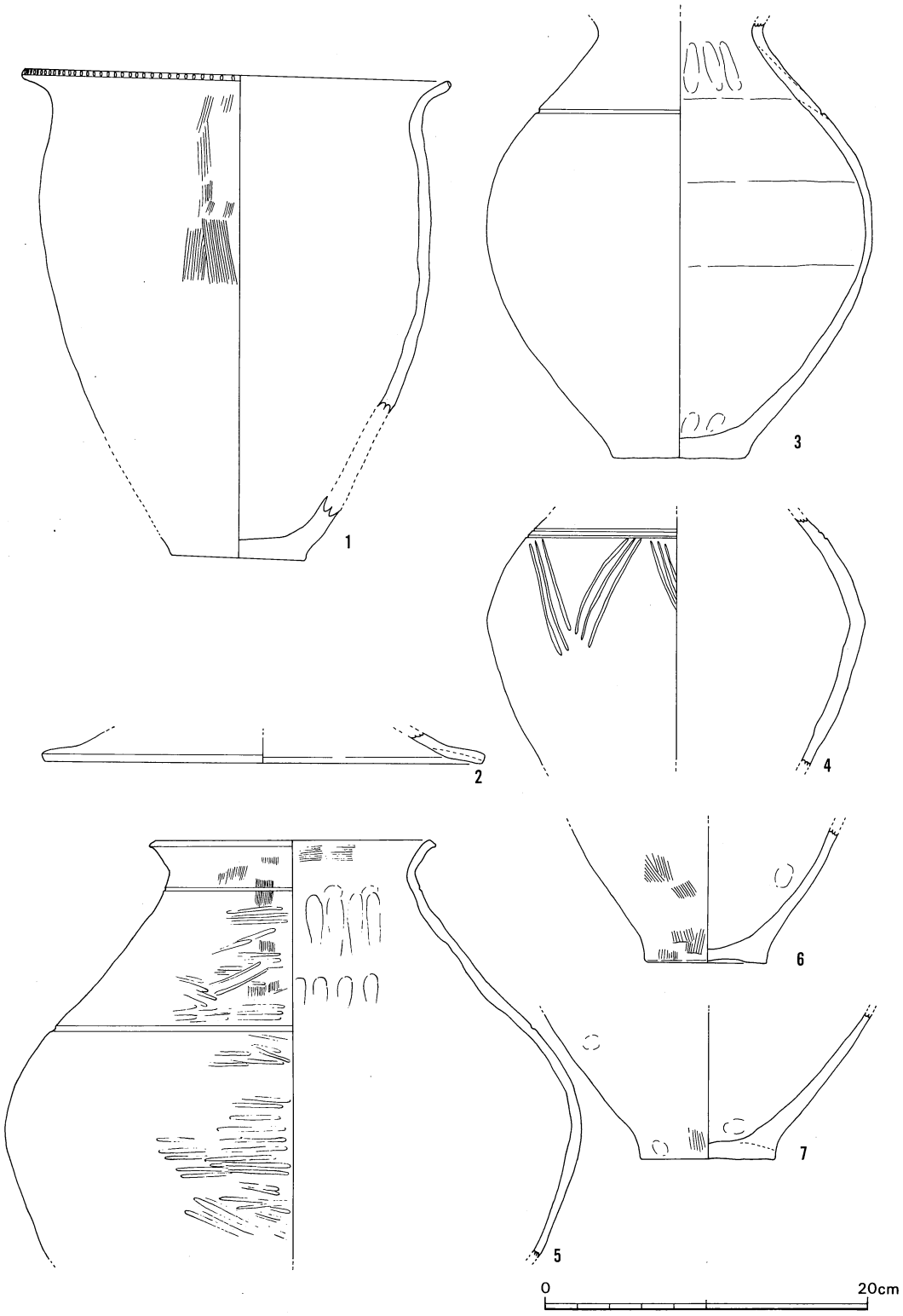
第141図　ＳＫ４・６遺物出土状態



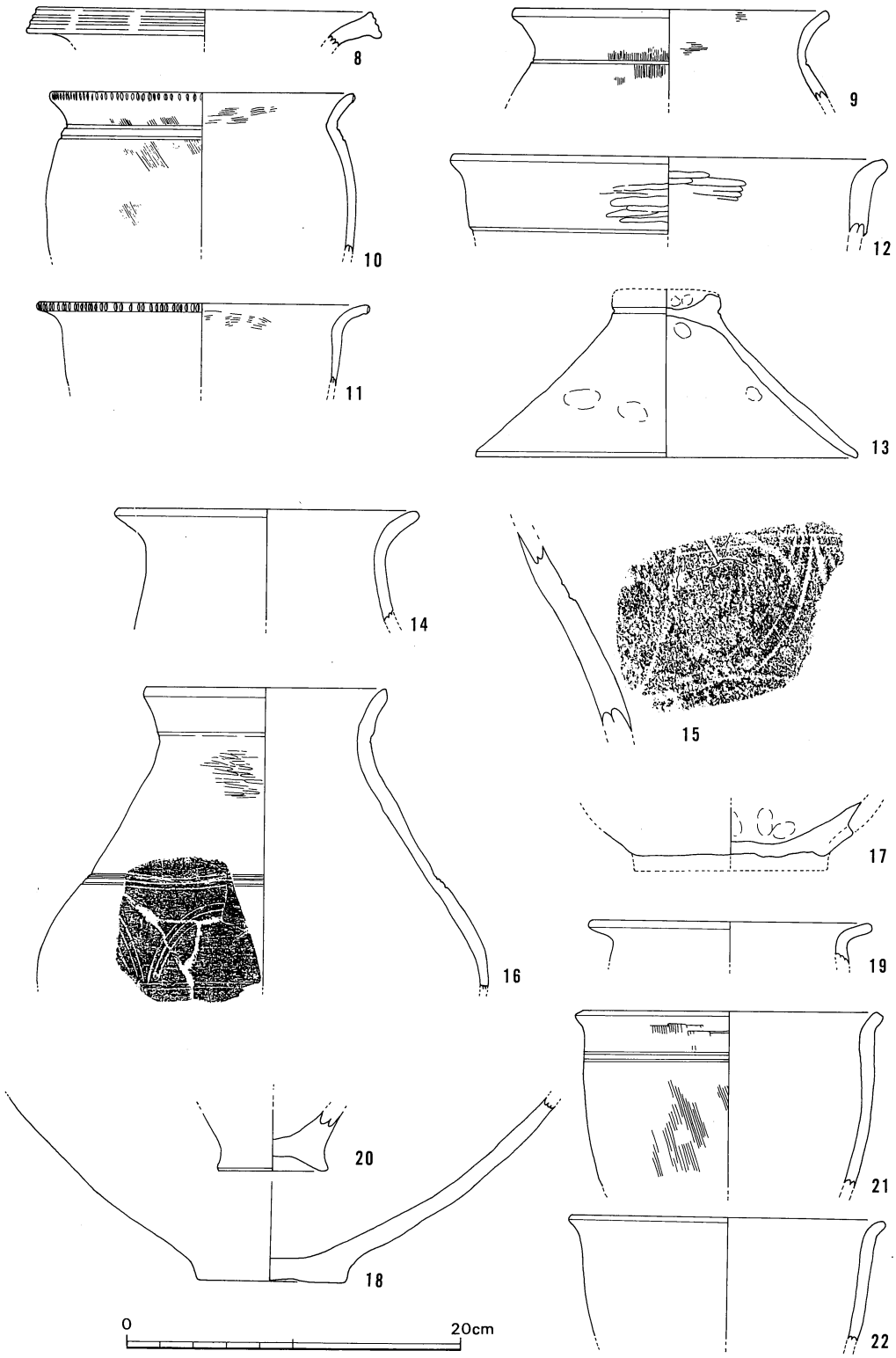
第Ⅰ層　黒茶褐色粘質土
第Ⅱ層　淡黒茶褐色粘質土
第Ⅲ層　灰黒茶褐色粘質土
第Ⅳ層　灰濃茶色粘質土
第Ⅴ層　灰濃茶色に基盤の黄褐色シルトがブロックで入る
第Ⅵ層　灰茶色粘質砂質土

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　赤茶褐色粘質土
第Ⅲ層　淡茶褐色粘質土
第Ⅳ層　淡黒褐色粘質土
第Ⅴ層　Ⅳ層に地山か黄褐色粘質土がブロックで入る

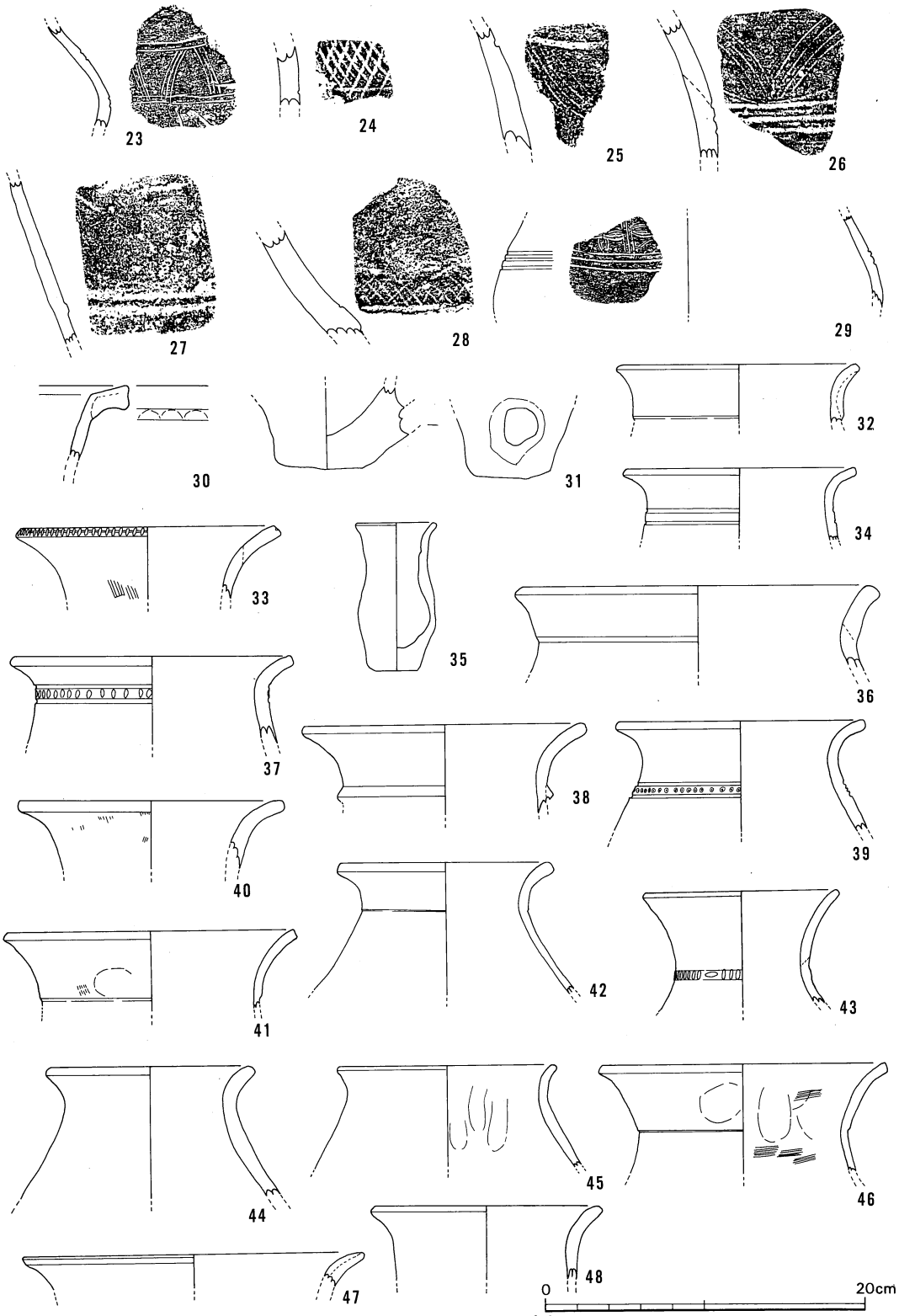
第142図　ＳＫ３－Ｐ１～３、ＳＤ１



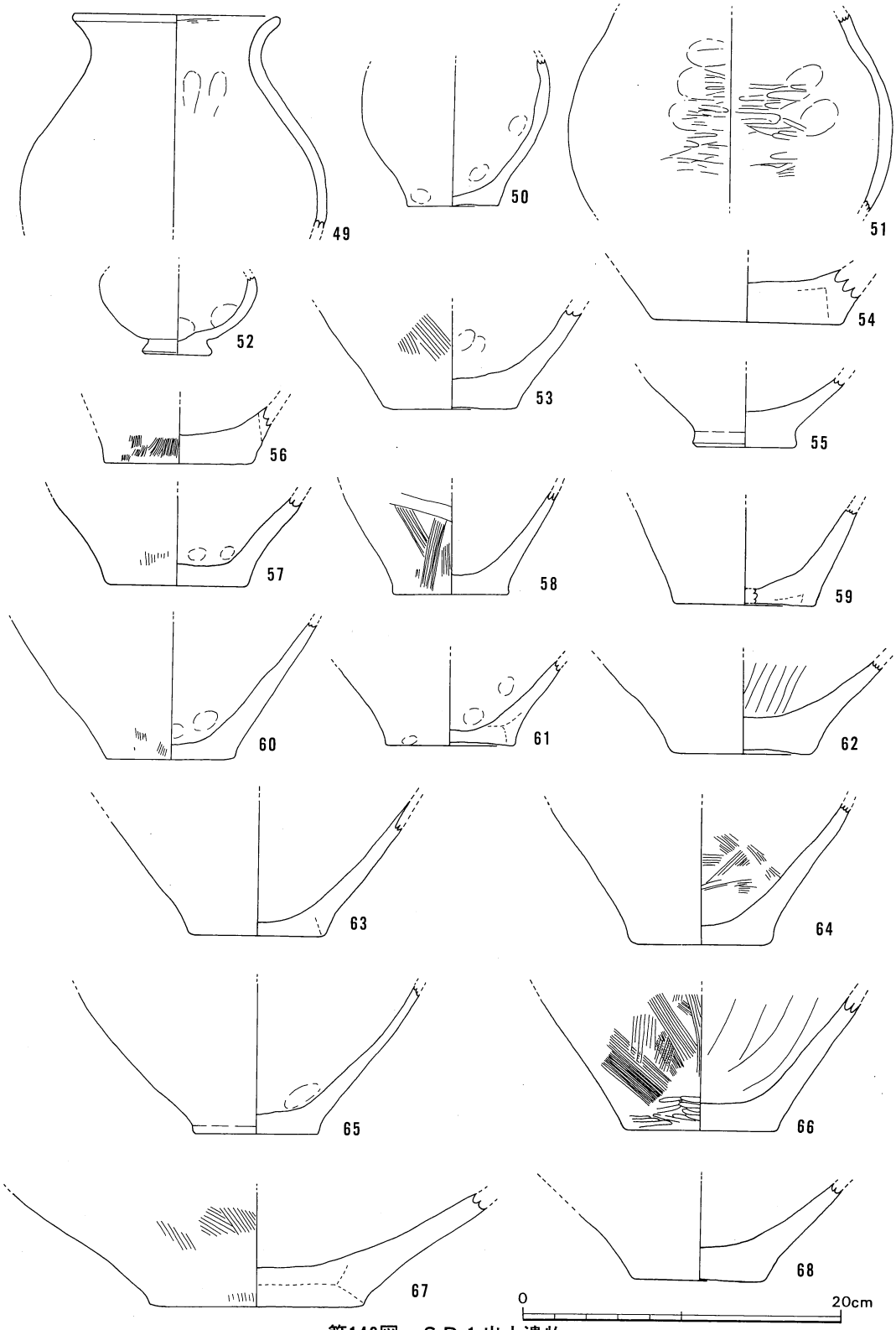
第143図　ＳＫ４～６出土遺物



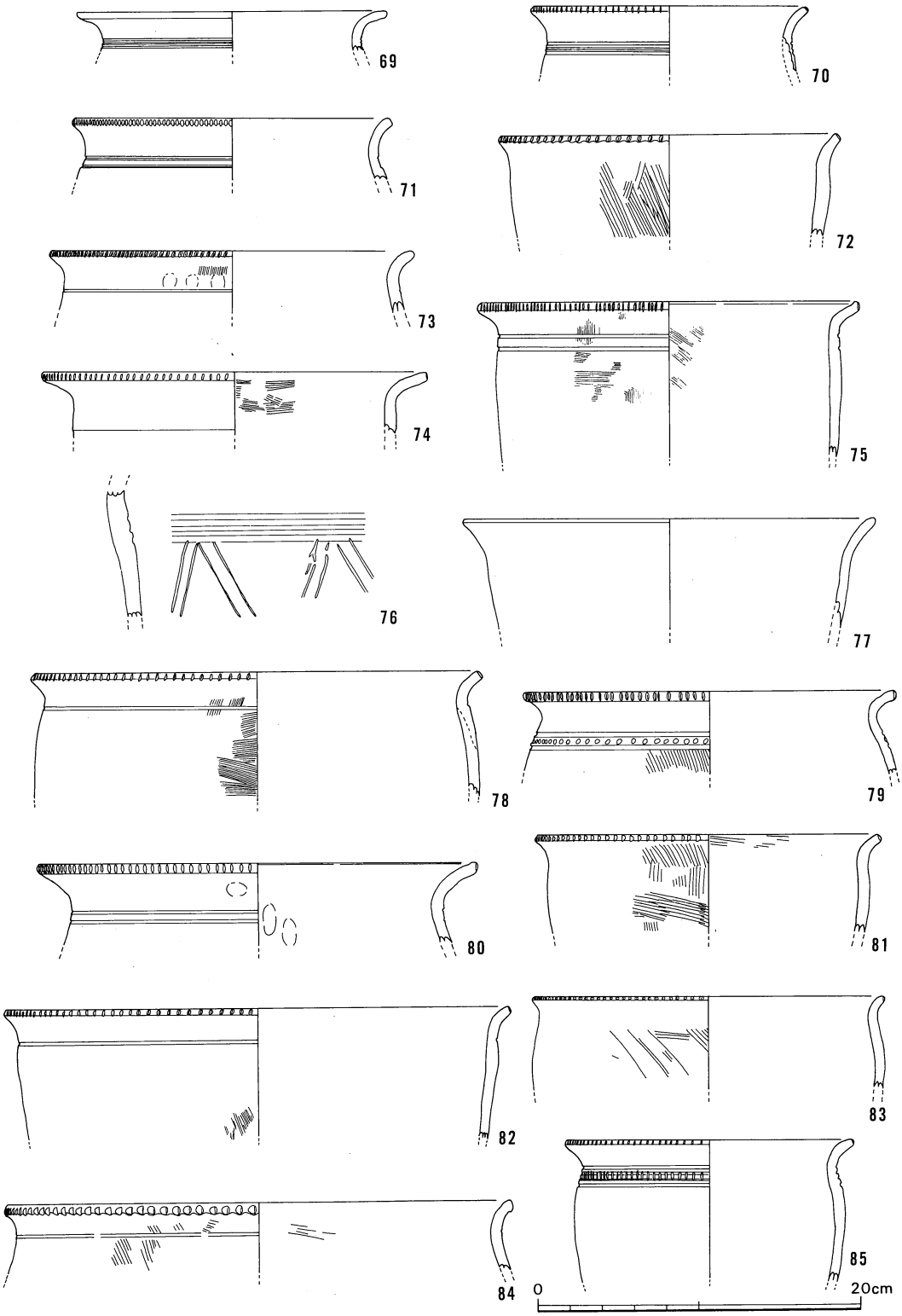
第144図　ＳＫ６・７出土遺物



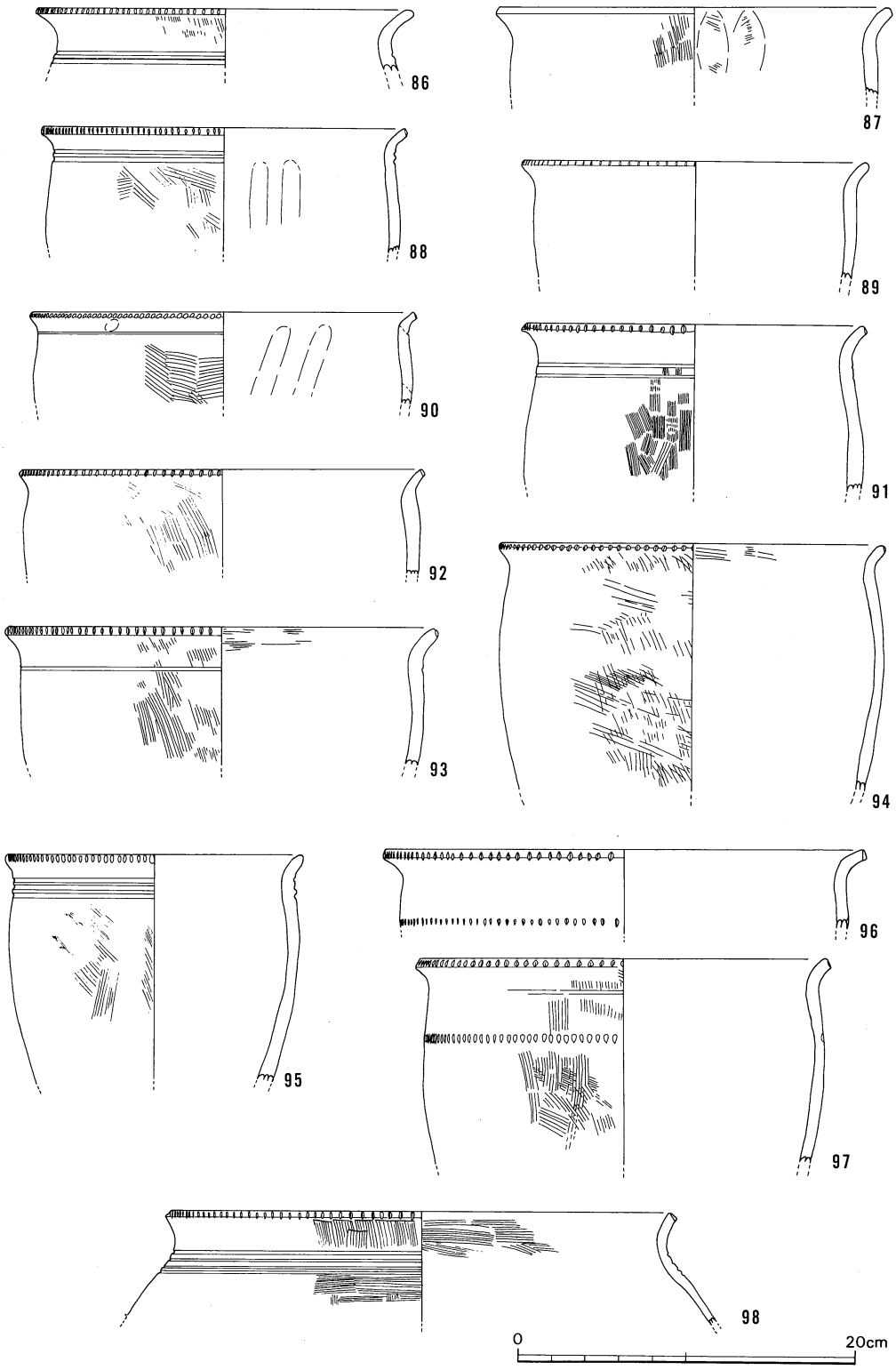
第145図　ＳＤ１出土遺物



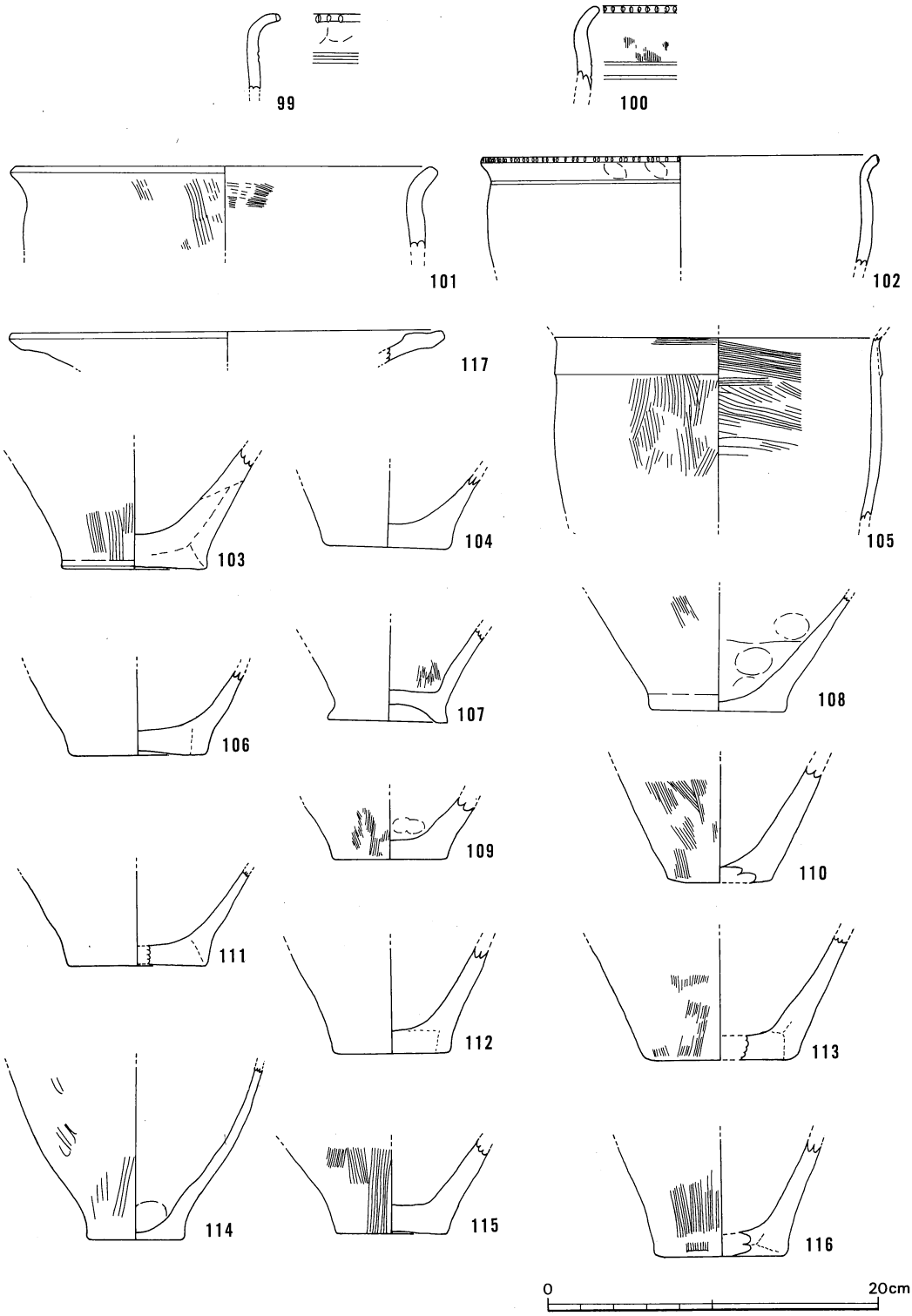
第146図　ＳＤ１出土遺物



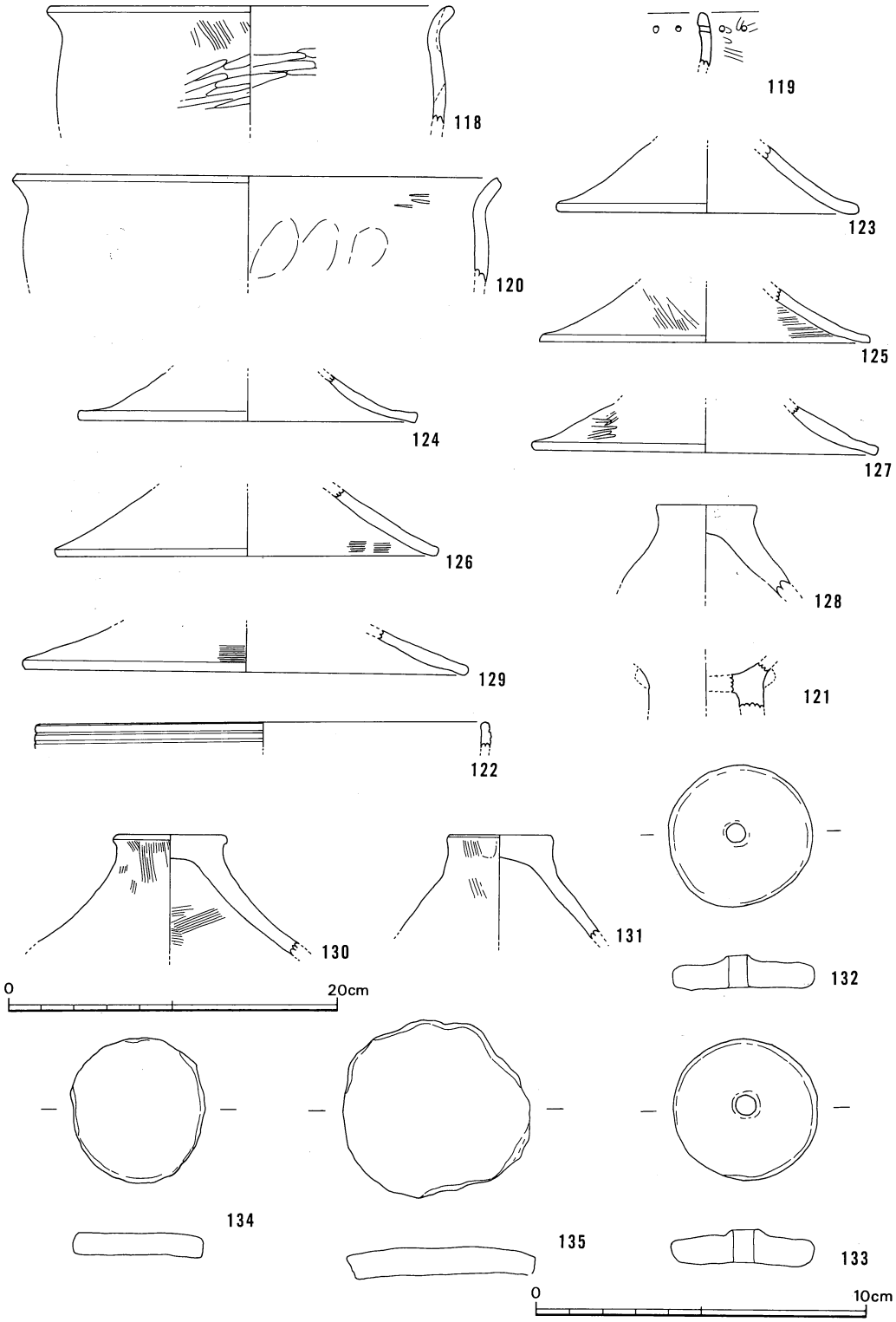
第147図　ＳＤ１出土遺物



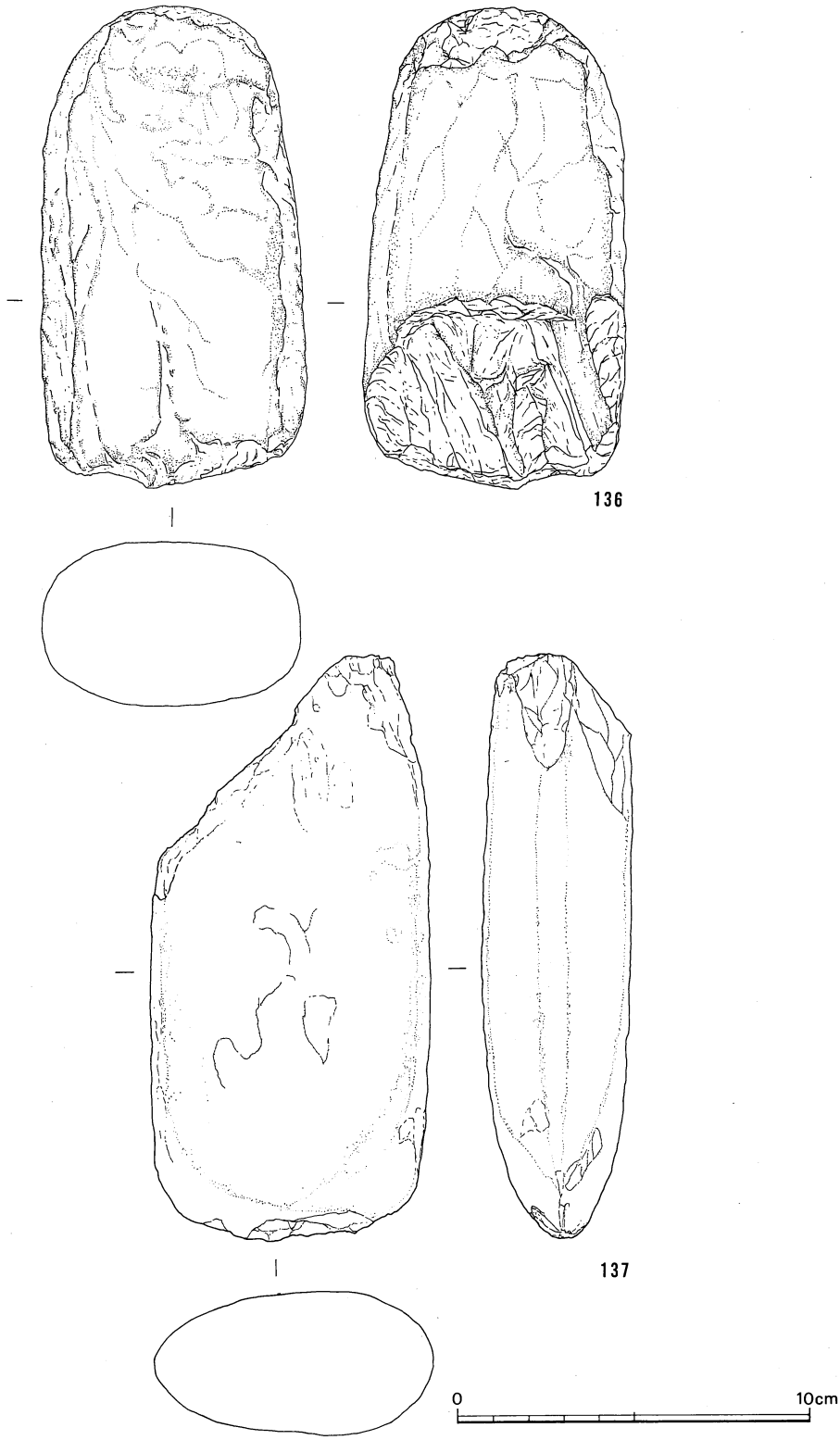
第148図　ＳＤ１出土遺物



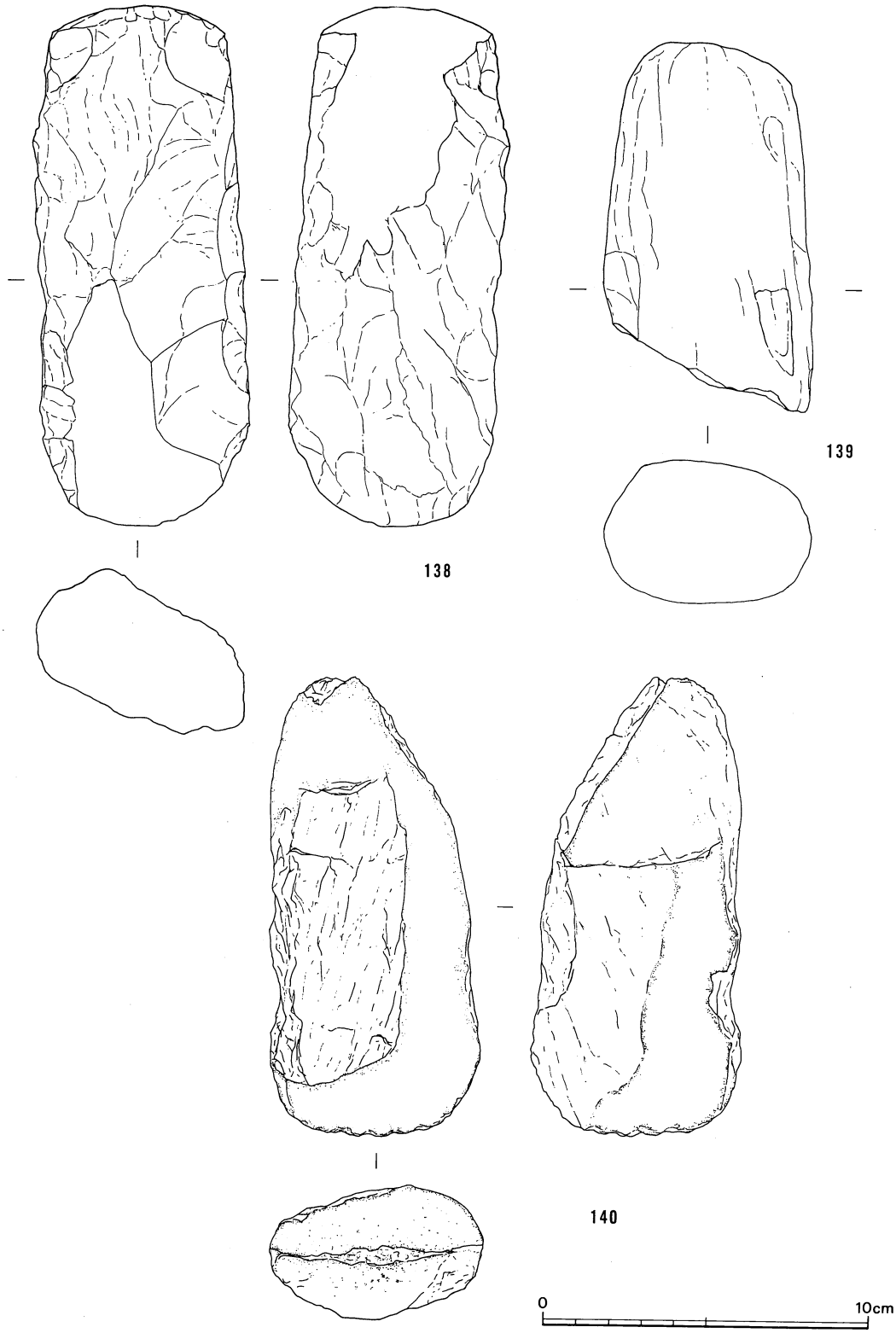
第149図　ＳＤ１出土遺物



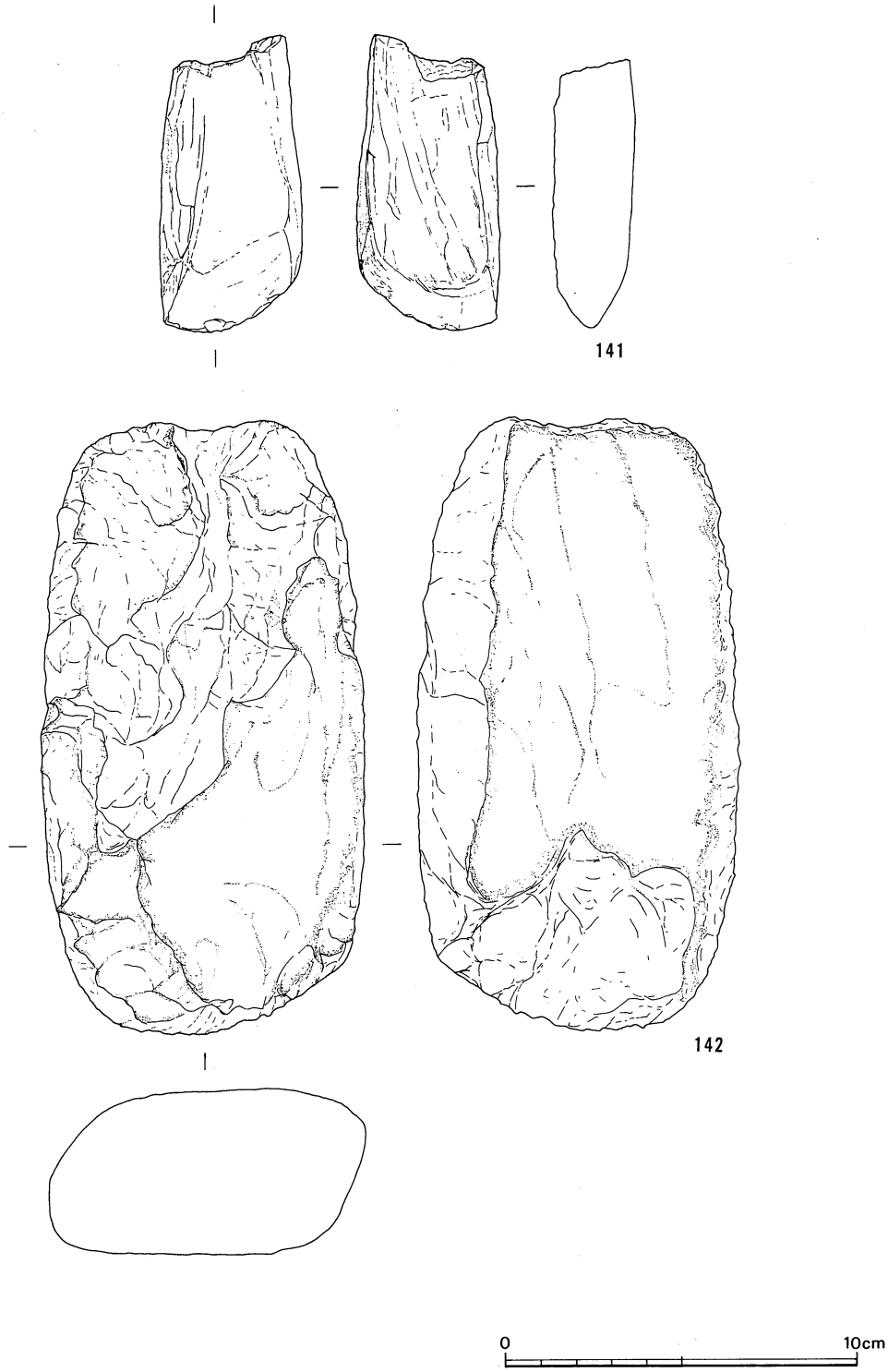
第150図　ＳＤ１出土遺物



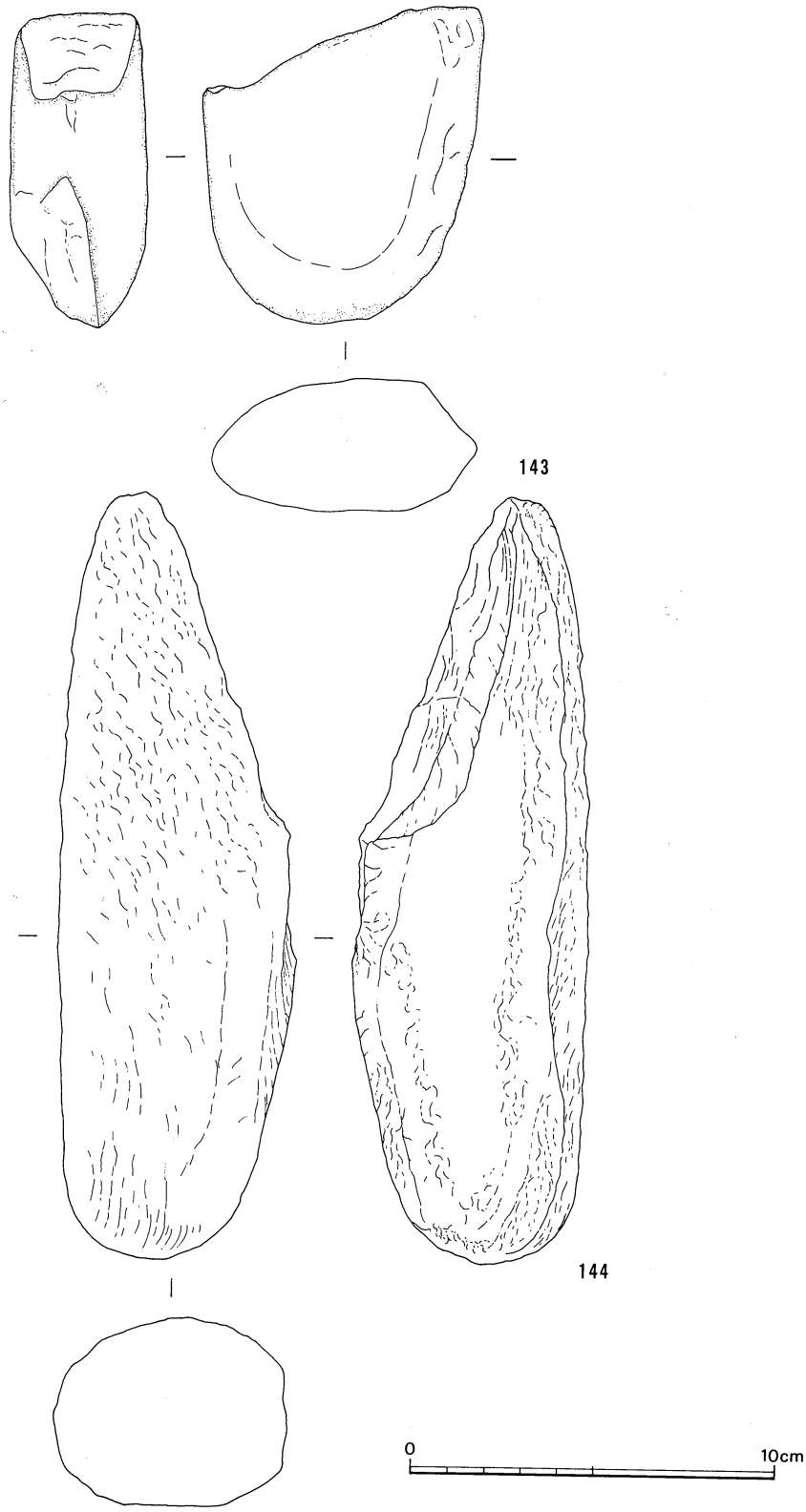
第151図　ＳＫ３、ＳＤ１出土遺物



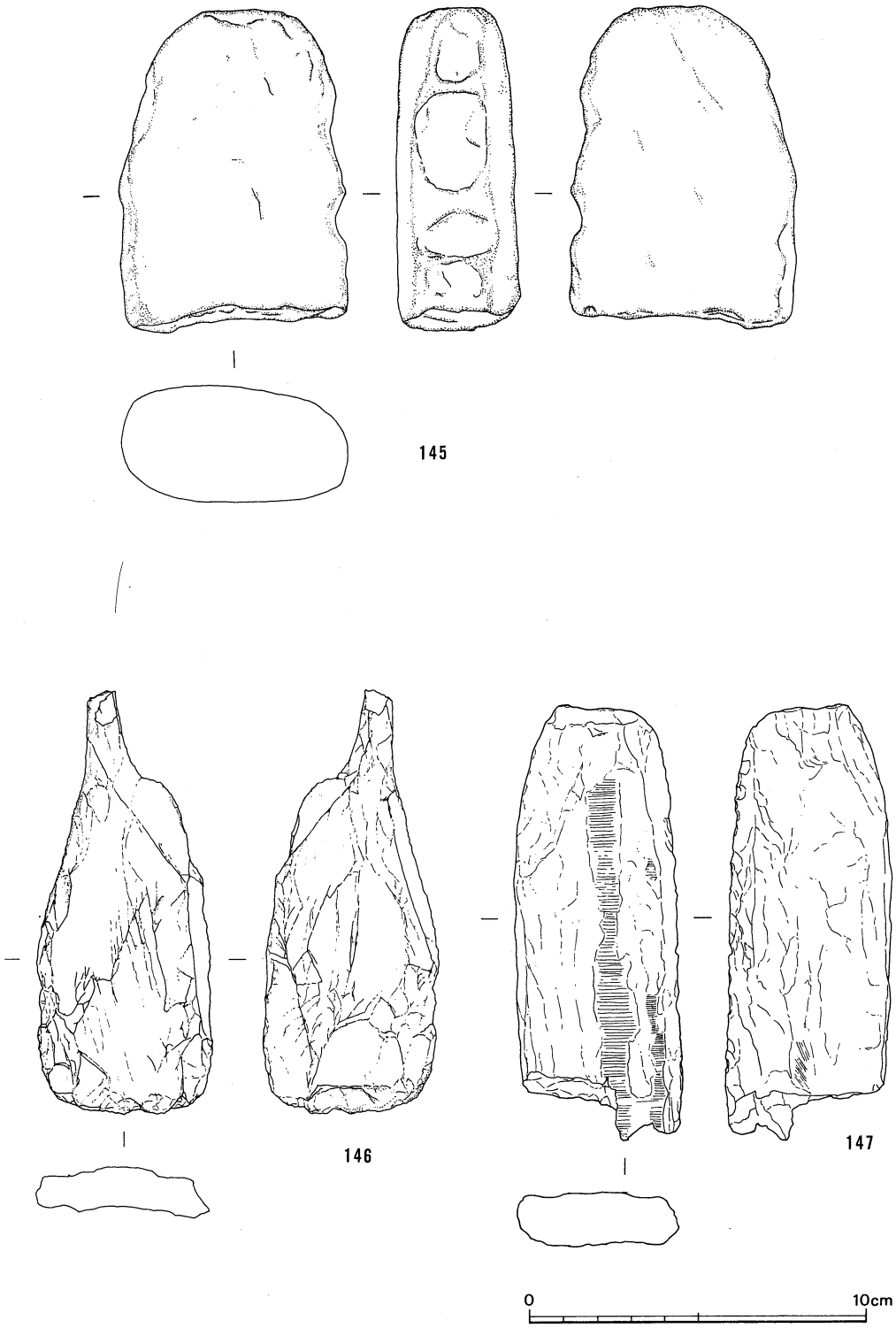
第152図　ＳＤ１、田村川出土遺物



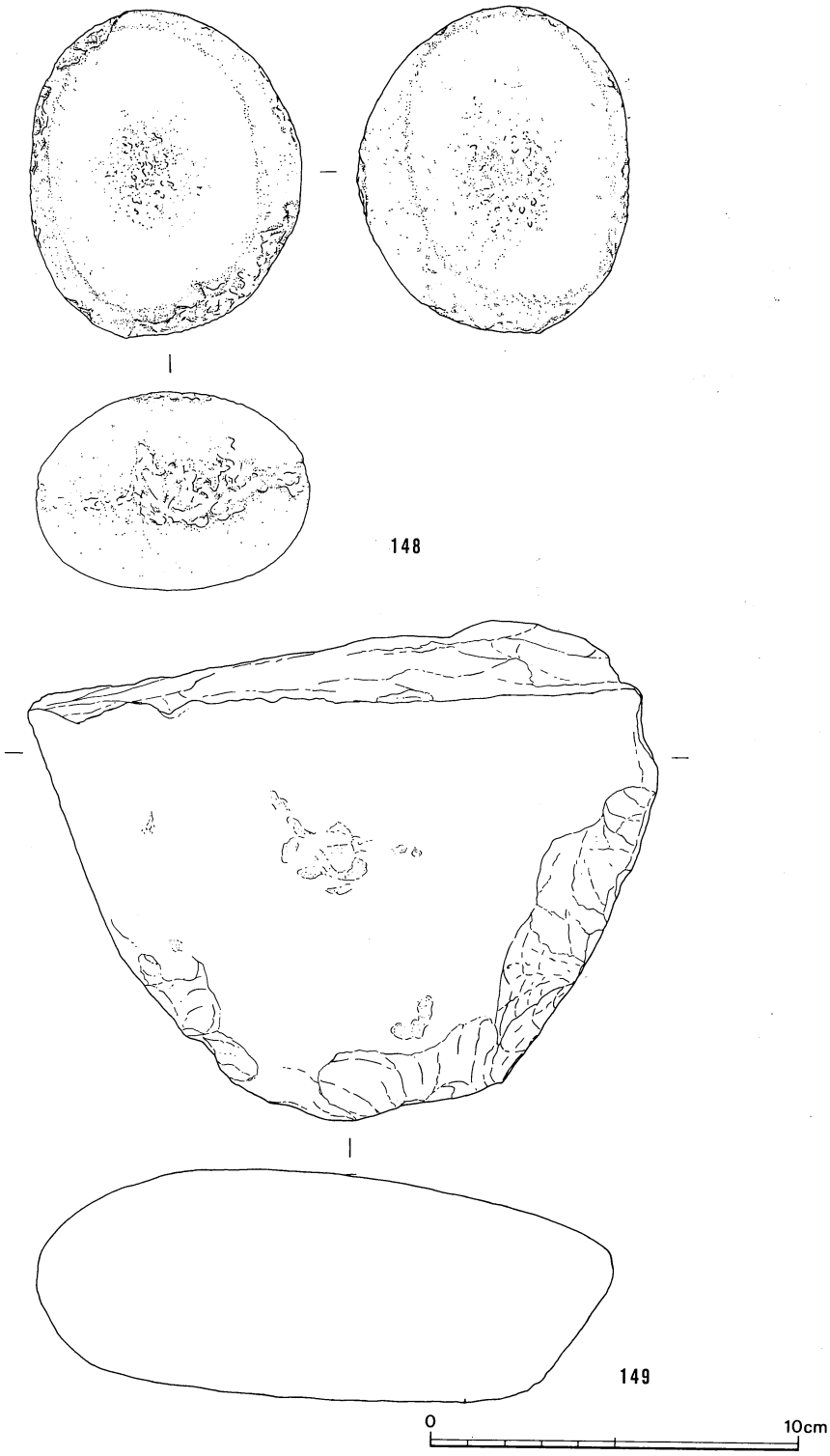
第153図　田村川出土遺物



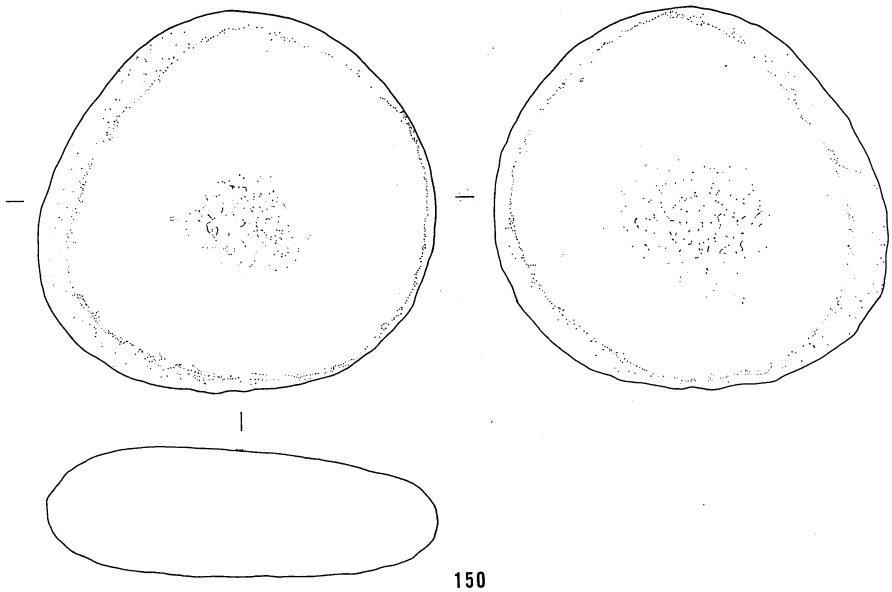
第154図　田村川出土遺物



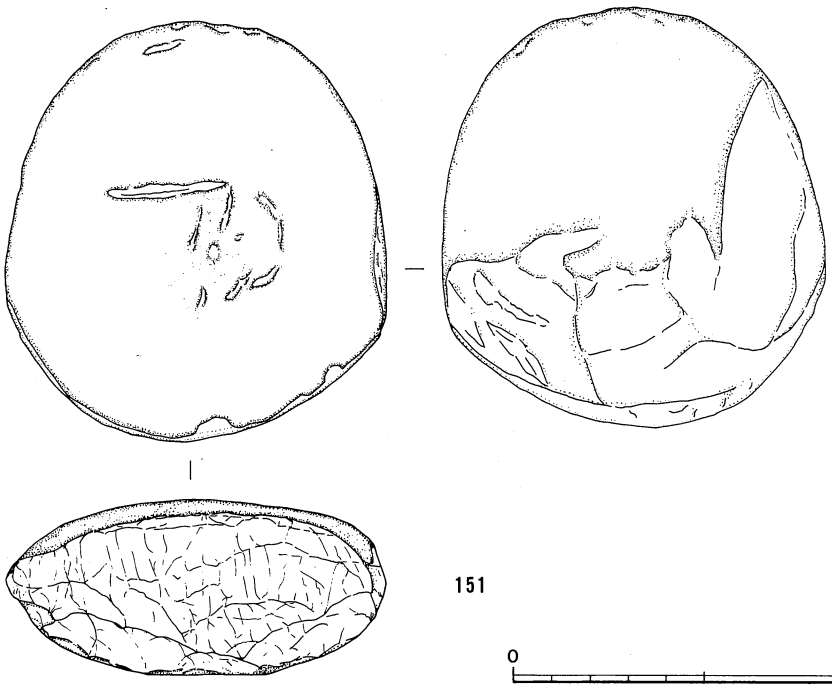
第155図　ＳＤ１、田村川出土遺物



第156図　ＳＫ３、田村川出土遺物



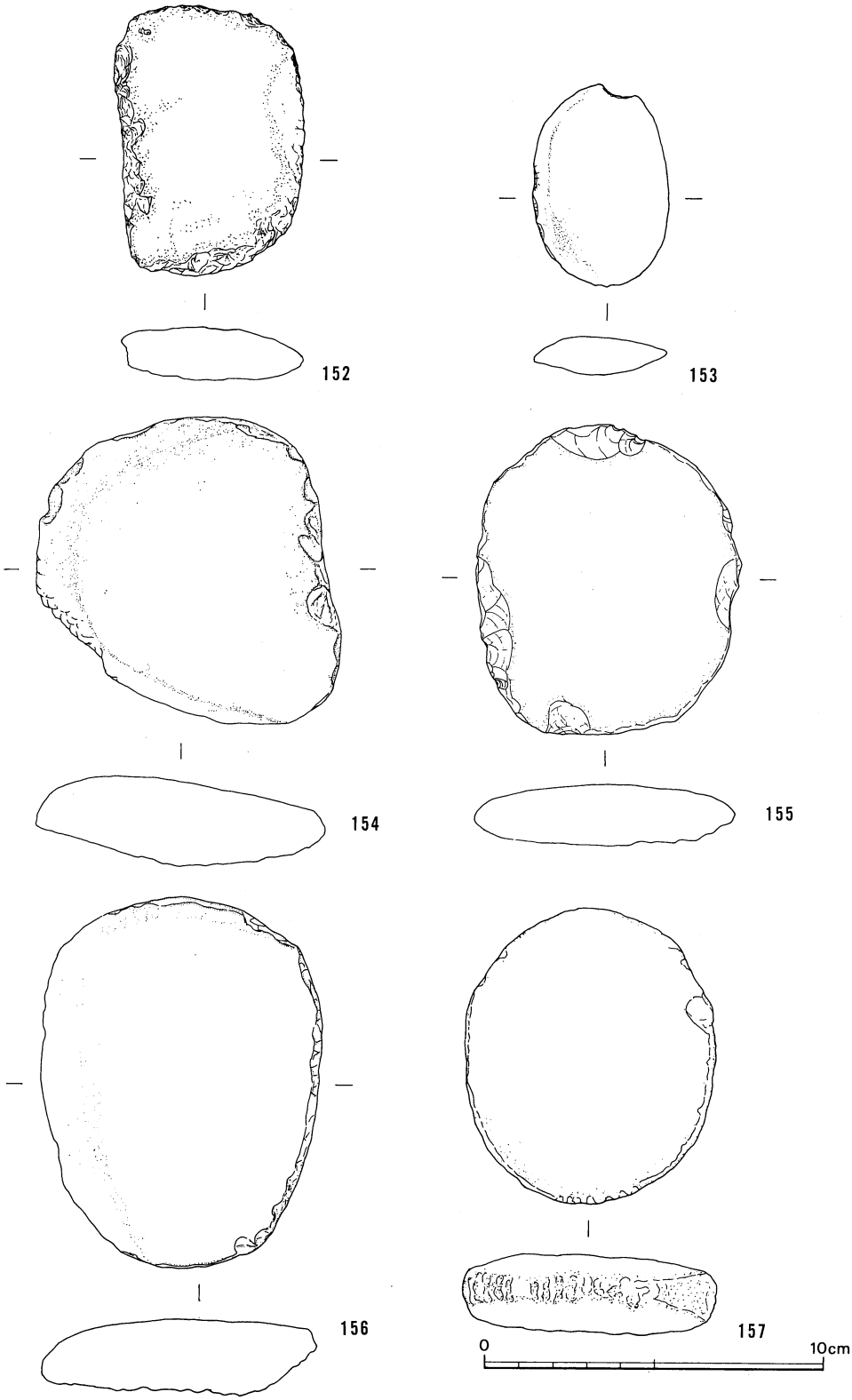
150



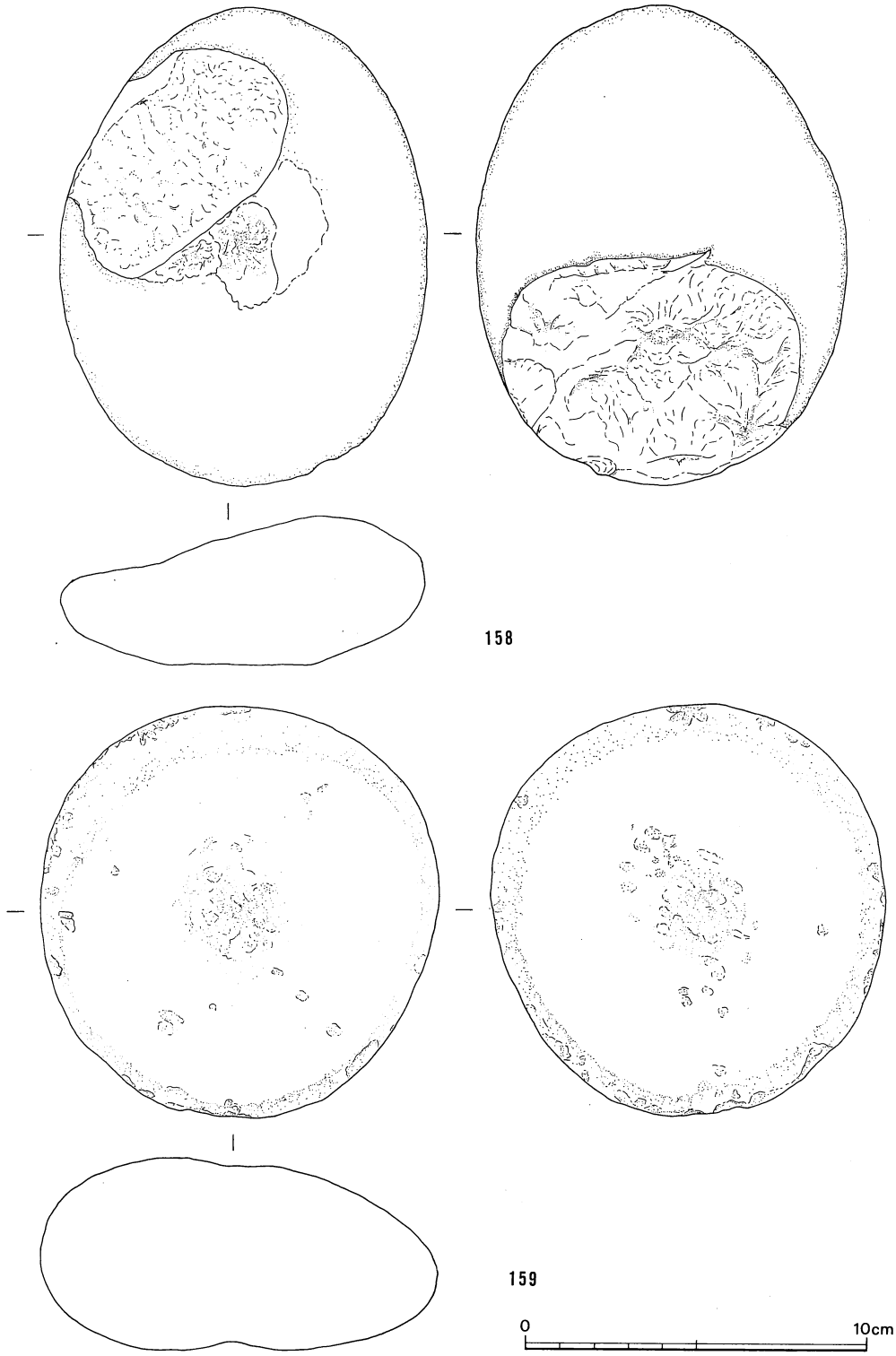
151

0　10cm

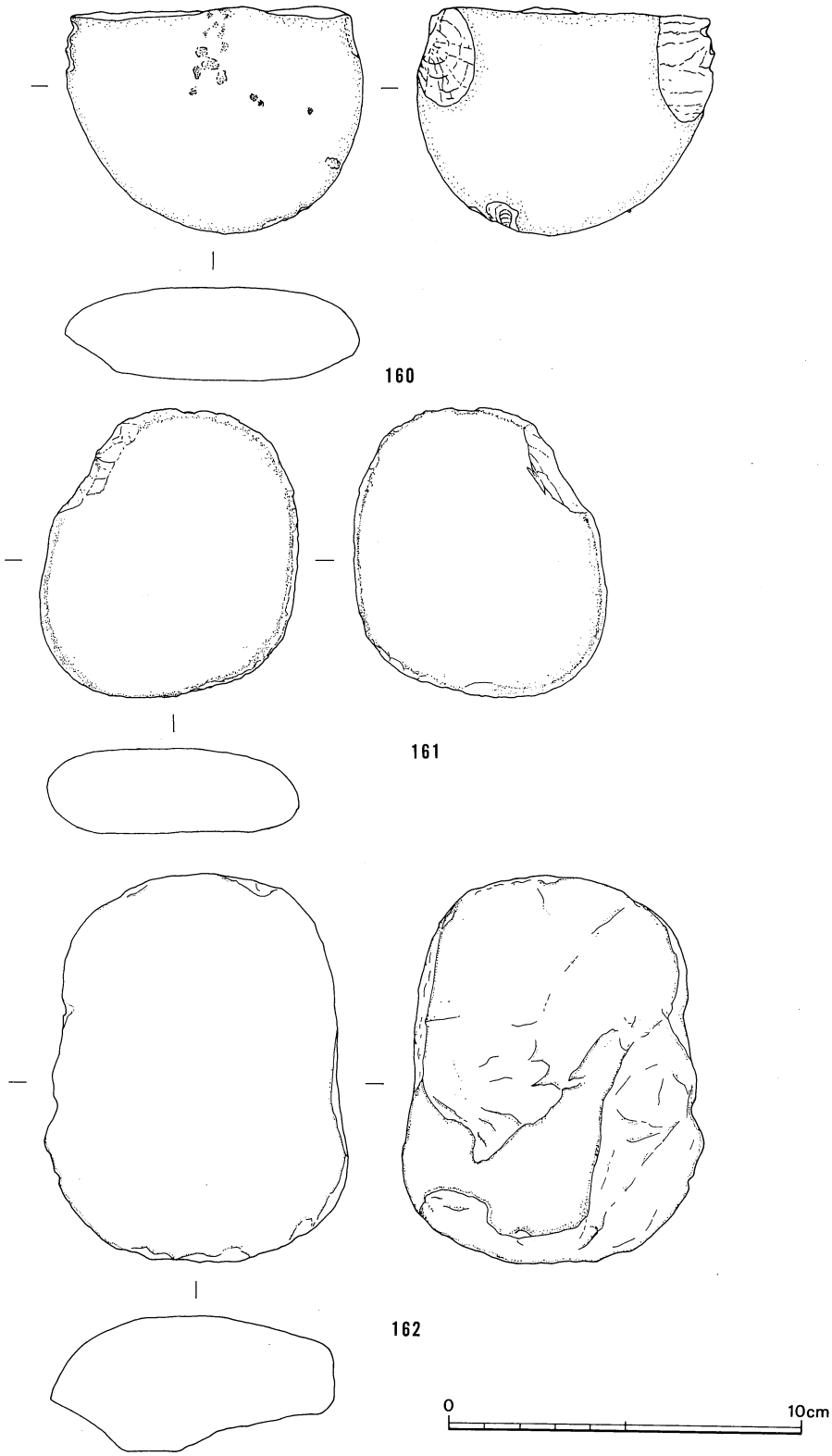
第157図　ＳＫ３、田村川出土遺物



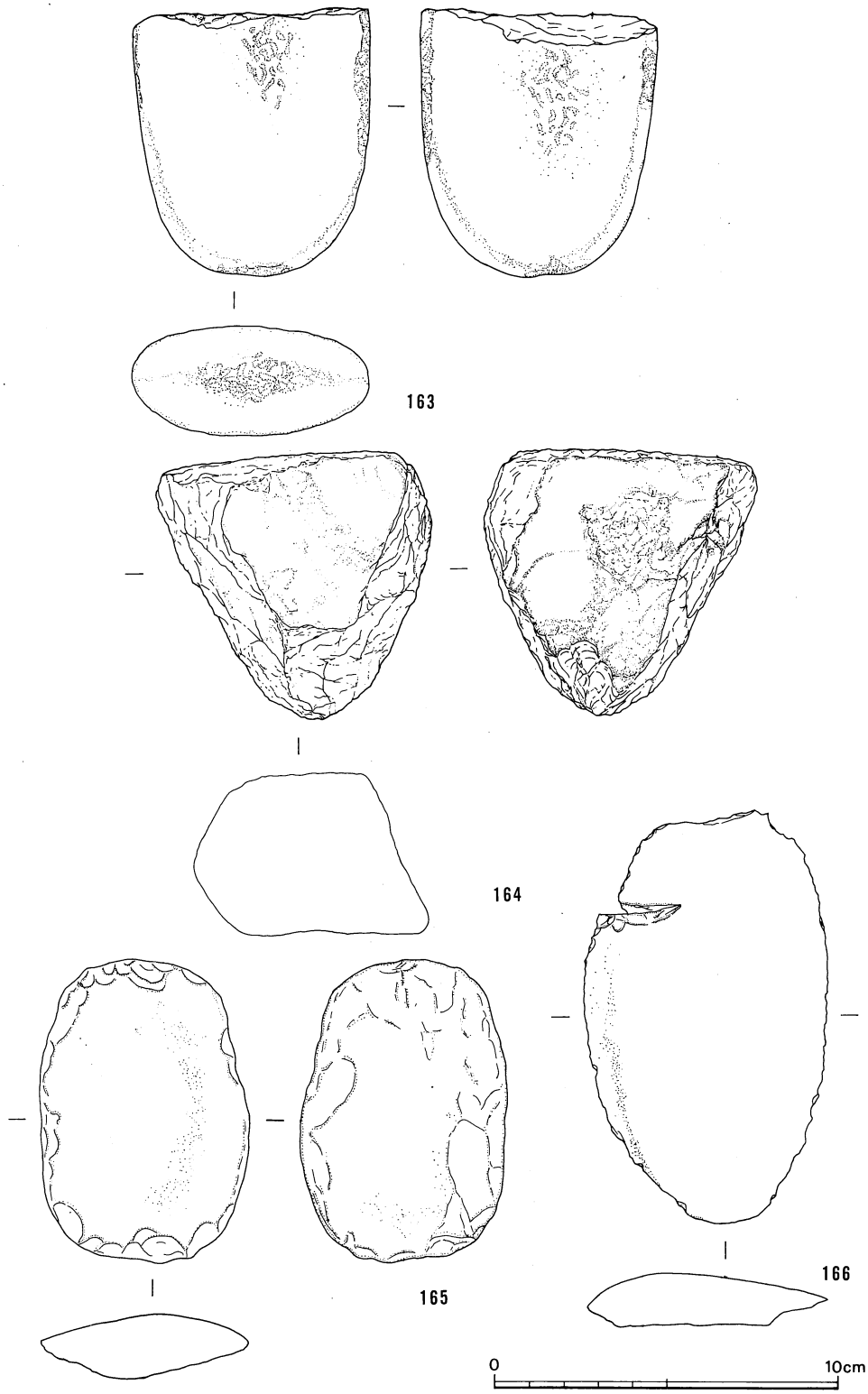
第158図　ＳＫ６、ＳＤ１出土遺物



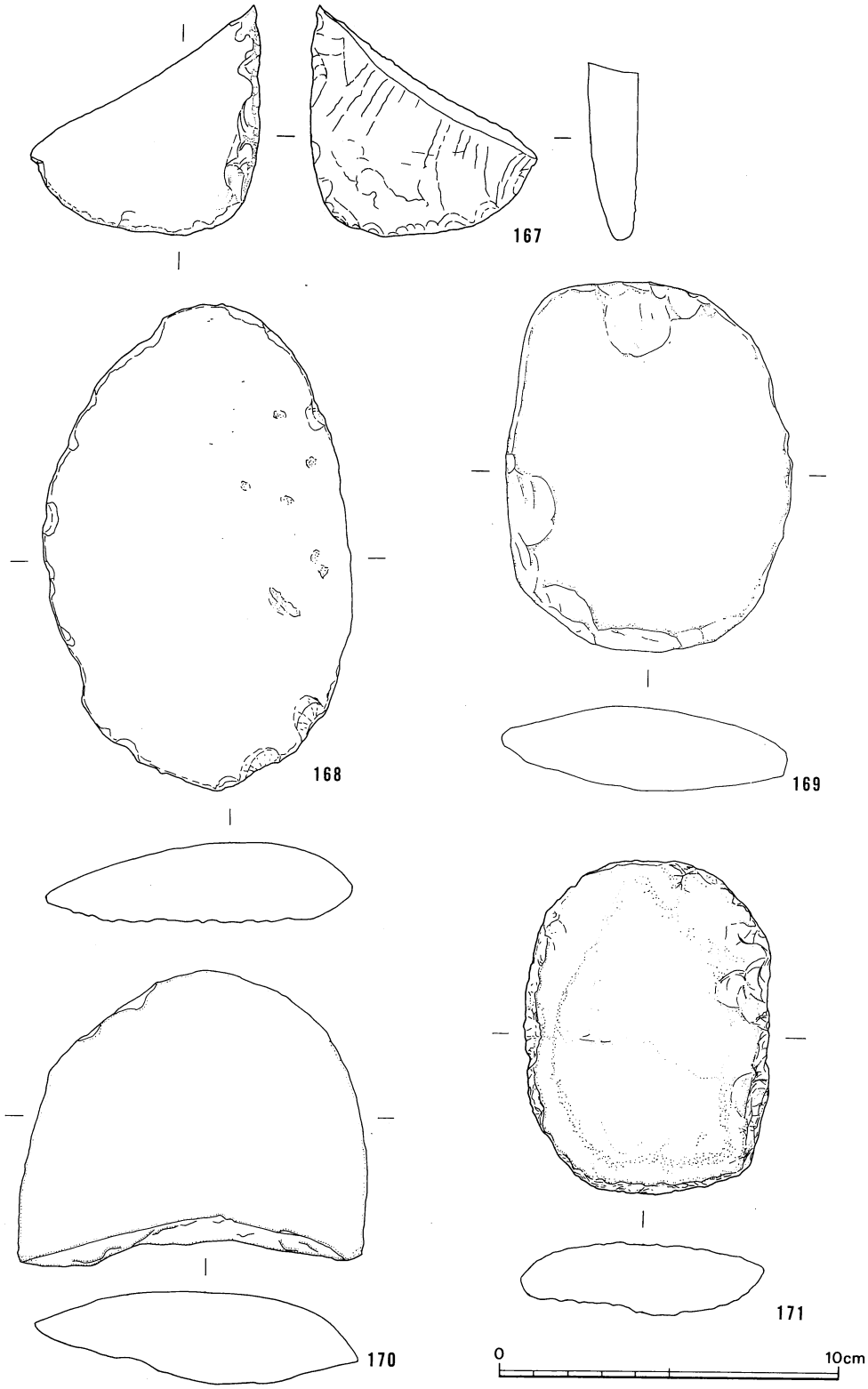
第159図　ＳＤ１、田村川出土遺物



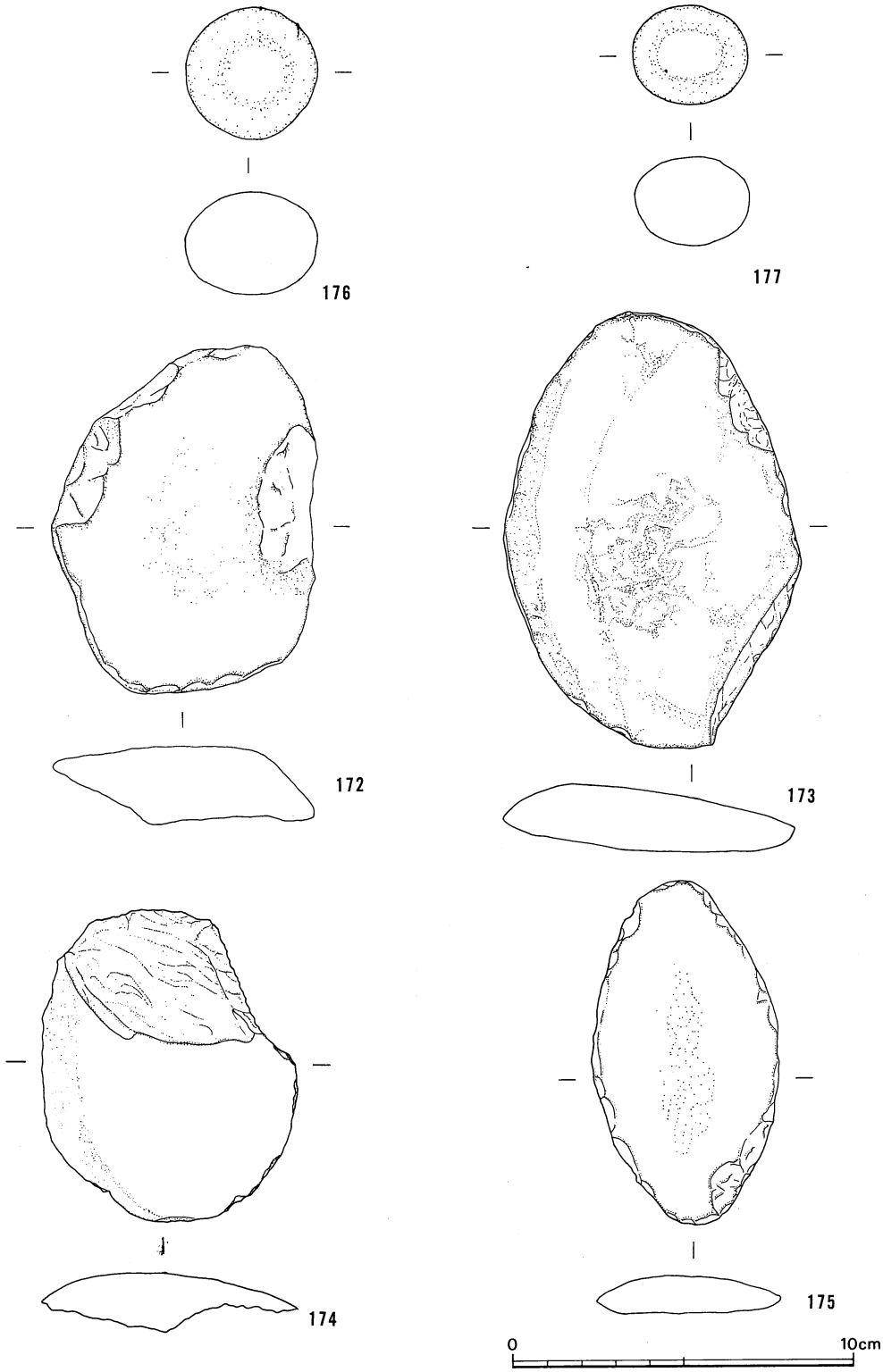
第160図　ＳＤ１、田村川出土遺物



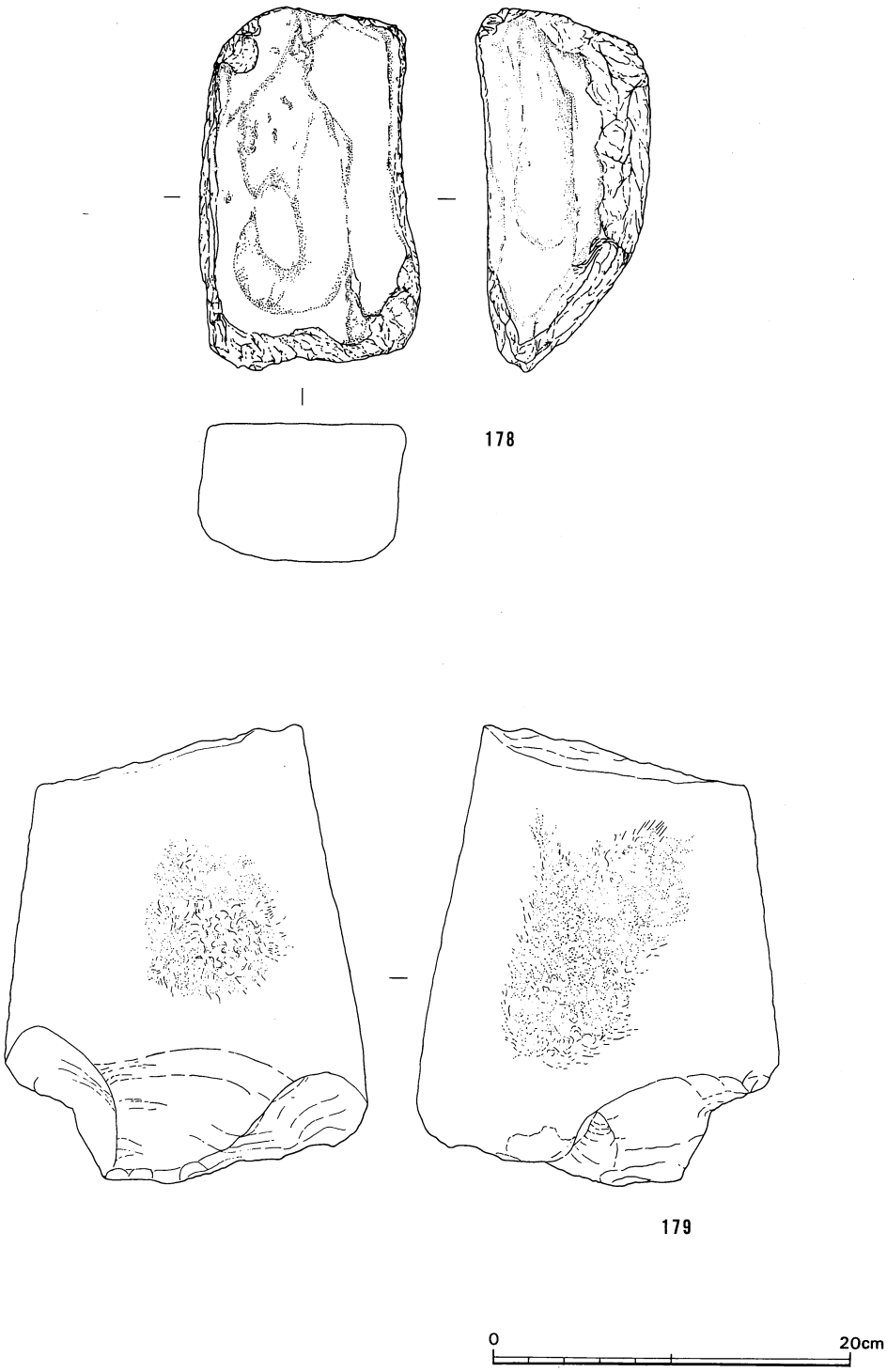
第161図　ＳＤ１出土遺物



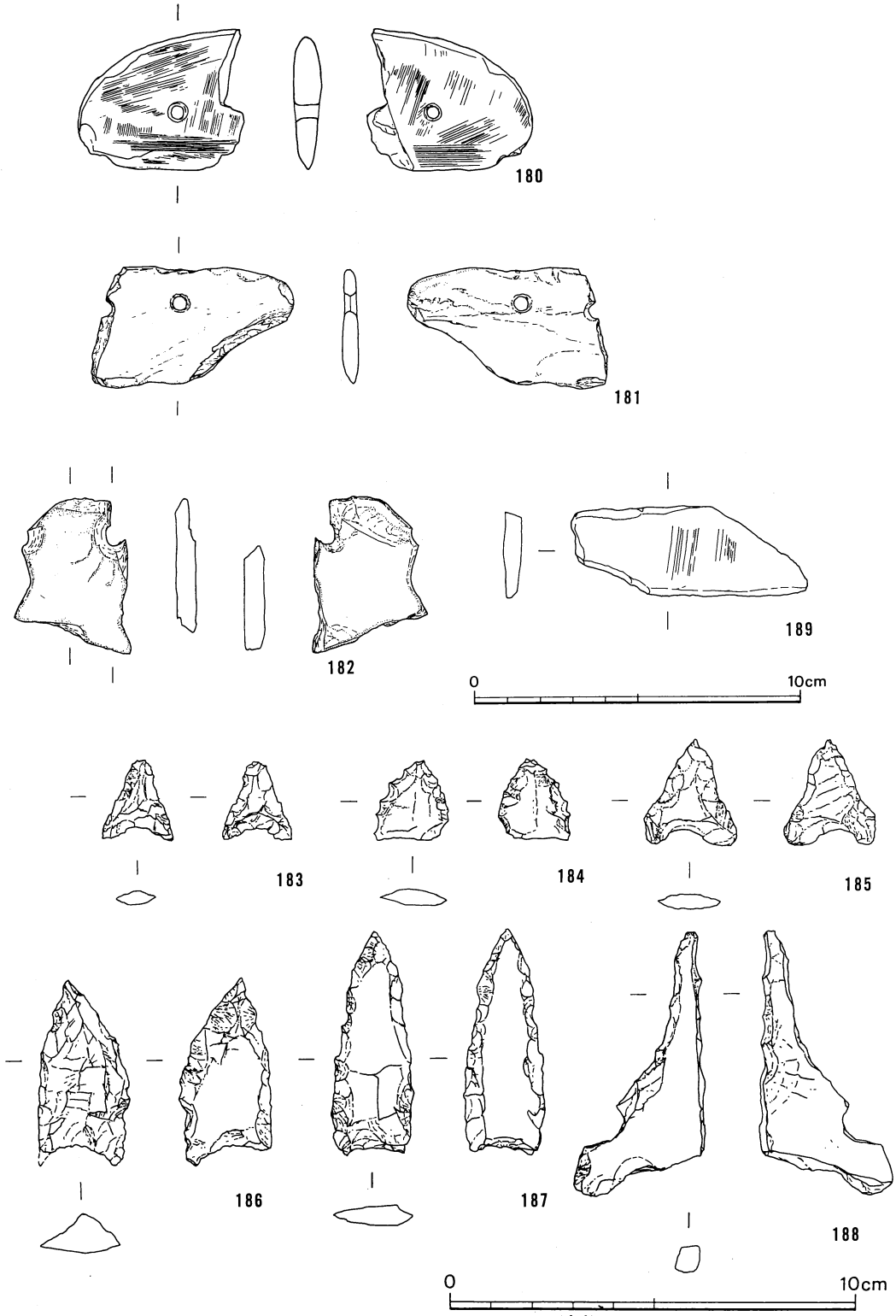
第162図　ＳＫ３、ＳＤ１出土遺物



第163図　ＳＤ１出土遺物



第164図　ＳＤ１出土遺物



第165図　ＳＫ５、ＳＤ１出土遺物

5. Loc.10B

Loc.10B

1. 位置と調査経過

Loc.10Bは、昭和54年度に実施された試掘調査により、弥生時代から古墳時代の遺物包含層や遺構が存在することが判明していた。しかし、当地点の調査は、土地買収や墓の移転等の手続きの関係から数年にわたって実施された。

昭和55年度には未買収地の部分を除いたLoc.10Bの北半部3,430m²の調査を実施し、昭和57年度には未買収地であった部分とLoc.10Bの南半部約3,300m²の調査を実施した。

Loc.10Bは、田村遺跡群の中でも南東端部に位置しており、小字は川原田（カワラダ）である。調査期間は、昭和55年12月から昭和56年３月と昭和57年10月から昭和58年１月の合計約８か月間であり、最終的な調査面積は約6,730m²であった。

2. 調査概要

Loc.10Bは、昭和54年度の試掘調査の成果から、ほぼ全域に弥生時代から古墳時代の遺物包含層や遺構が存在すると予測されたため、昭和55年度の調査では南北と東西の両方向にセクションベルトを残し、北部から南部へ向かって遺構検出を進めていったが、調査対象面積もかなり広大であったために、Loc.10Bの北半部で一旦調査を終了することにした。この調査では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居址や土坑、溝等の遺構を検出した他、中世の多数のピット群や土坑群及び溝等の遺構を確認することができた。

昭和57年度には、Loc.10Bの西部の未買収地であった部分と南半部の調査を実施した結果、弥生時代から古墳時代の竪穴住居址や土坑群、溝等の遺構を検出すると共に、中世のピット群や土坑群、溝等の遺構も確認した。Loc.10Bの南東部では、遺構検出面に拳大から人頭大程度の大きさの自然礫が多量に存在しており、遺構検出は困難を極め、調査もやや長期化した。

調査は、場周の道路工事の関係で、南部域の最南端部をトレンチ状に調査し、その後に北部に向かって精査を進め、南部域の調査を終了した。その後、未買収地であった西部域を北部から南部に向かって精査してLoc.10Bの調査は完了するに至った。

3. 層序と出土遺物

Loc.10Bの基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土

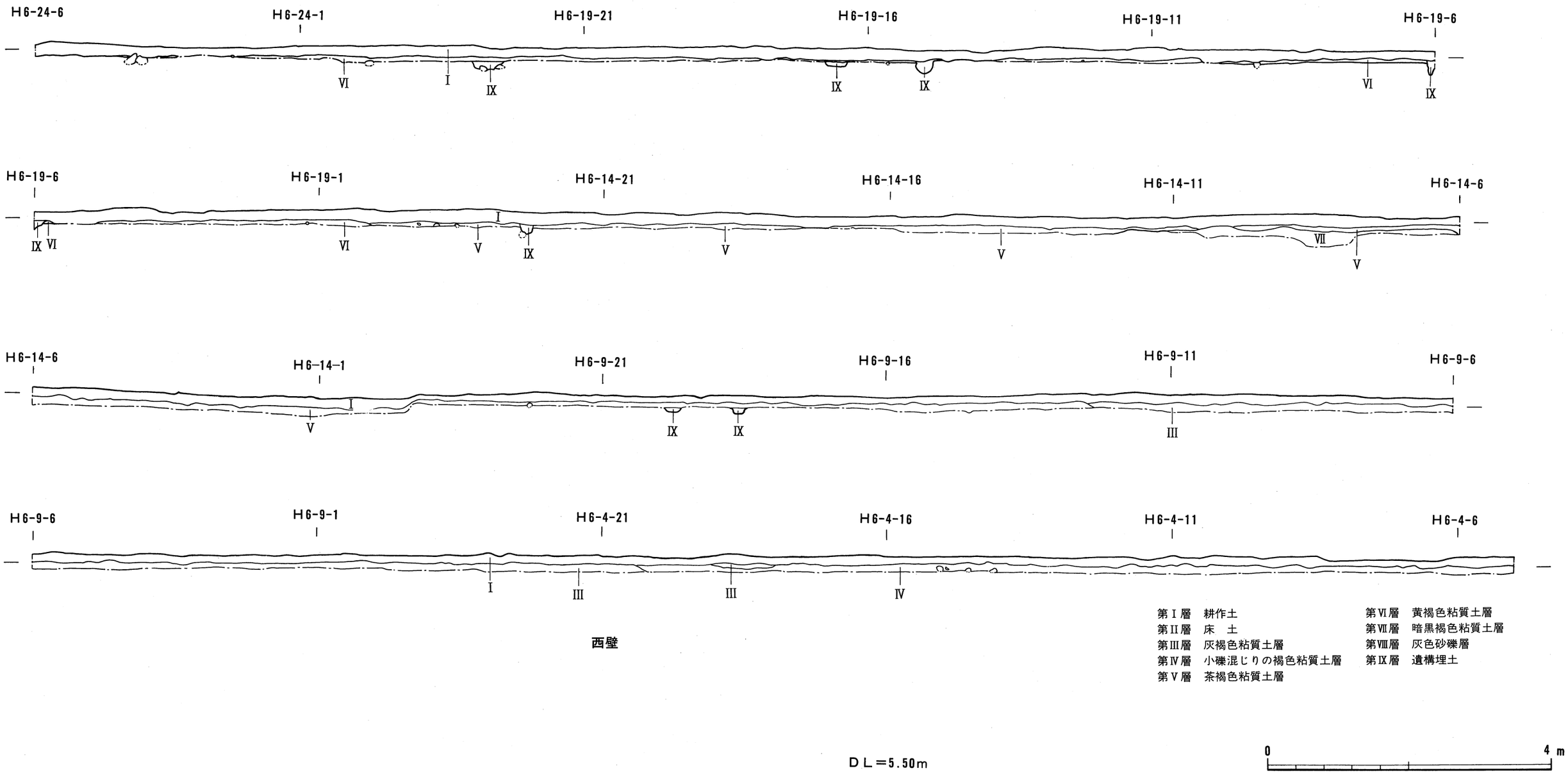
第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　灰褐色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　茶褐色粘質土層

第166図　調査区設定図



第167図　調査区セクション

第Ⅵ層　黄褐色粘質土層

第Ⅶ層　暗黒褐色粘質土層

第Ⅷ層　灰色砂礫層

Loc.10Bの南西部では遺構検出面に至る土層がかなり厚く堆積していたが、東部及び南東部では第Ⅰ層の耕作土の直下に第Ⅵ層の黄褐色粘質土層が堆積しており、拳大から人頭大の大きさの自然礫が多量に露呈していた。古物部川の氾濫により東部域の堆積土が南西方向に向かって押し流されており、南西部の土層序はかなり複雑な様相を呈した箇所が存在した。

第Ⅰ層は耕作土で全域にみられた。第Ⅱ層は、床土であり、少量の遺物を包含しているが、散在していた。第Ⅲ層は、灰褐色粘質土層で中世の遺物包含層であるが、東部域ではほとんど堆積がない。第Ⅳ層は、褐色粘質土層で指頭大程度の大きさの小礫がかなり多量に混入しており、弥生時代から古墳時代の遺物を包含している。第Ⅳ層も、第Ⅲ層と同様に東部域ではほとんど堆積がない。第Ⅴ層は、茶褐色粘質土層で弥生時代の主要な遺物包含層で、古墳時代の遺構検出面でもある。第Ⅴ層も、第Ⅲ層や第Ⅳ層と同様に東部域ではほとんど堆積がない。第Ⅵ層は、黄褐色粘質土層で弥生時代から中世の遺構検出面であり、調査区のほぼ全域に堆積していた。第Ⅶ層は、暗黒褐色粘質土層であり、無遺物層である。第Ⅶ層の暗黒褐色粘質土層も東部域には堆積がない。第Ⅷ層は、灰色砂礫層であり、無遺物層である。第Ⅷ層の灰色砂礫層は、全域にかなり厚く堆積している。

包含層から出土した弥生時代の遺物は、第Ⅲ層の灰褐色粘質土層と第Ⅳ層の小礫混じりの褐色粘質土層からも少量出土しているが、その大半が、弥生時代の主要な遺物包含層である第Ⅴ層の茶褐色粘質土層から出土している。

包含層から出土した壺は、(1～70、135～141) である。(1～70) は前期Ⅳの壺、(135、136) は中期Ⅲの壺、(137～141) は後期Ⅰの壺である。包含層から出土した甕は、(71～130、142～148) である。(71～130) は前期Ⅳの甕、(143) は中期Ⅲの甕、(142、144～146) は後期Ⅰの甕、(147、148) は後期Ⅲの甕である。また、甕用の蓋 (131～133) も出土しているが、前期Ⅳと考えられる。

包含層から石器もかなり多量に出土しており、石斧(150～162)、叩石(163～167)、砥石(168～170)、石包丁 (171～177)、石鏃 (178) 等があり、石斧の中には環状石斧 (157、158) も含まれている。

4. 遺構と遺物

竪穴住居址

Loc.10Bでは、西部と南部で6棟の竪穴住居址が検出されたが、ＳＴ２・４～６は前期Ⅳの住居址で、ＳＴ３は後期Ⅰの住居址である。ＳＴ１は、隅丸方形を呈した小さな住居

址で、床面の直上から古墳時代後期の遺物が出土しているため、古墳時代の項で触れることにする。

ＳＴ２

ＳＴ２は、調査区の北西部に位置しており、第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出された。ＳＴ２は、不整円形を呈したかなり小型の竪穴住居址で、長径3.12ｍ、短径2.96ｍ、深さ約８cmを測る。主軸方向はほぼ磁北を向いており、壁高は約５cmで、埋土は茶褐色粘質土である。北壁がやや崩れているが、床面積は約7.3m²を測り、床面で12個のピットを確認した。壁際には、不整円形のやや大型のピット３個（Ｐ８・10・12）が存在するが、壁溝等の排水施設はみられない。

ＳＴ２のＰ７からは、チャートのフレイクと少量の弥生土器片が出土しており、Ｐ４からも弥生土器の細片が出土している。南壁際の大きなピット（Ｐ10）からは完形の甕（181）、叩石（701）等の遺物が出土している。ＳＴ２から出土した遺物は非常に少量であったが、壺(179、180)、甕（181）は前期Ⅳに属する。ＳＴ２は前期Ⅳの住居址としてはかなり小型のものである。

ＳＴ３

ＳＴ３は、調査区の北西部に位置しており、ＳＴ２のすぐ南側に隣接して検出された竪穴住居址で、発掘時にはすでに西部の約⅓が削平されていた。第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出された。

ＳＴ３は、北部がやや突出気味に湾曲した不整円形の竪穴住居址で、長径4.48ｍ、短径の残存長2.56ｍ、その推定長約4.00ｍである。主軸方向はほぼ磁北を向いており、壁高約0.10ｍである。ＳＴ３の床面積は約14.1m²を測り、床面に17個のピットを確認した。床面中央部のやや南寄りに不整円形を呈した中央ピット（Ｐ10）があり、中から多量の炭化物と弥生時代の遺物が出土した。また、Ｐ８及びＰ９からも弥生土器の細片が出土した。

ＳＴ３の北東側に近接して土坑（ＳＫ３）が存するが、南東部は袋状を呈し、ＳＴ３に付随する遺構とは考えられない。

ＳＴ３の埋土は暗茶褐色粘質土であり、少量の弥生時代の遺物が出土しているが、その大半は中央ピット（Ｐ10）から出土している。ＳＴ３の埋土から出土した遺物は甕底部（334）と小型土器底部（336）で、中央ピット（Ｐ10）からは、壺（330～332)、甕（333、335）の他にやや大型の打製石鏃（742）や砥石（731）等の遺物が出土している。

壺（330～332)、甕（333～335）共に後期Ｉの土器であり、本住居址は後期Ｉに属する。

ＳＴ４

ＳＴ４は、調査区の北西部で検出された竪穴住居址で、ＳＴ３の南側約３ｍに位置しており、東部の約¼程度がすでに削平されていた。ＳＴ４は第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出されている。

ＳＴ４は円形を呈する竪穴住居址で、長径5.12ｍ、短径の残存長3.92ｍ、その推定長約4.80ｍである。主軸方向はほぼ磁北を向いており、壁高は約0.52ｍを測り、残存状況は非常に良好であった。ＳＴ４の床面積は約19.3㎡を測り、床面では16個のピットを確認した。北西部と南東部の壁際には、やや大きなピット２個（Ｐ15・18）が存し、西部は不定形のかなり大きな土坑（ＳＫ４）に切られているが、切り合い関係は判然としない。

ＳＴ４の埋土は４層に分層され、東部はすでに撹乱を受けていた。第Ⅰ層は、茶褐色粘質土で、約40cmほど堆積しており、弥生時代の遺物を多量に包含する。第Ⅱ層は、暗茶褐色粘質土で、第Ⅰ層の茶褐色粘質土に酷似しており、約12cmほど堆積し、多量の炭化物と弥生時代の遺物を包含している。第Ⅲ層は黒灰色粘質土で、西壁際の床面に約８cmほど堆積しており、弥生時代の遺物を少量包含している。第Ⅳ層は、淡黄褐色粘質土で、床面中央部の直上に約14cmほど堆積しており、弥生時代の遺物を少量包含している。

ＳＴ４からは弥生時代の遺物が多量に出土している。壺（182～247）、甕（248～299）、蓋(300～304）は前期Ⅳの遺物である。石器も多量に出土しており、石斧(685、690、694)、叩石(702、724、726)、砥石（729)、石包丁（737、738)、石鏃（743）等がみられる。

ＳＴ４の床面直上からは壺（183、188、198）や甕（256、260、263、271）等の遺物が出土しており、本住居址は前期Ⅳの竪穴住居址である。

ＳＴ５

ＳＴ５は、調査区の南部で検出された竪穴住居址で、完存しており、第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出された。ＳＴ５は、不整円形を呈した竪穴住居址で、長径4.12ｍ、短径3.84ｍ、深さ約0.10ｍを測る。主軸方向はＮ－56°－Ｗで、北西部は中世の土坑に切られている。床面積は約12.6㎡を測り、床面の中央部と東部で４個のピット（Ｐ１～４）を確認し、北西部の壁際では小段のあるピット１個（Ｐ５）を検出した。

ＳＴ５の埋土は暗茶褐色粘質土であり、弥生時代の遺物は少量出土しているが、弥生土器の細片が多く、実測不能なものが大半を占めた。壺（306～308)、甕（309～311）は前期Ⅳの土器であるが、後期Ⅰの壺（312～314）や甕（315、316）も出土している。

本住居址は前期Ⅳの竪穴住居址であり、後期Ⅰの時期に撹乱を受けたと考えられる。

ＳＴ６

ＳＴ６は、調査区の南端部付近で検出された竪穴住居址で、ほぼ完存していたが、東部がわずかに土坑（ＳＫ27）に切られている。ＳＴ６は、第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去した段階で

検出されている。

ＳＴ６は、円形を呈した竪穴住居址で、長径5.53ｍ、短径5.44ｍで、深さ約0.20ｍを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｅであり、壁高は約0.12ｍを測る。ＳＴ６の床面積は約23.6㎡を測り、床面の壁際では主柱穴と考えられる９個のピット（Ｐ１～９）を確認した。また、床面中央部に楕円形を呈した中央ピット（Ｐ10）があり、床面に27個のピット（Ｐ11～37）を検出したが、性格は不明である。

ＳＴ６の埋土は茶褐色粘質土であり、弥生時代の遺物が少量出土している。北部の主柱穴（Ｐ１）からは甕（327）、叩石（713）が出土しており、Ｐ２からは叩石（705）が出土している。北東部の主柱穴（Ｐ３）からは壺（321）や叩石（707）が出土している。東部の主柱穴（Ｐ４）からは叩石（706、710）が出土している。南西部の主柱穴（Ｐ７）の底面からは大型の砥石（732）が出土している。北西部の主柱穴（Ｐ９）からは鉢（329）が出土している。また、ＳＴ６の埋土からは石斧（686、691）や叩石（703、704、708、709、711、712、714～716、727）、石鏃（740）等の遺物が出土している。ＳＴ６の床面直上からは壺（328）が出土している。

本住居址は主柱穴からの遺物の出土が顕著であり、また、叩石が多量に出土していることも注目される。壺（317～326、328）、甕（327）、鉢（329）は前期Ⅳの土器であり、本住居址は前期Ⅳの竪穴住居址である。

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区北西部で検出された２×３間の南北棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－３°－Ｗである。ＳＢ１は、第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出された。梁間は4.00ｍを測り、柱間距離は1.44～1.75ｍである。桁行は5.72ｍを測り、柱間距離は1.77～1.82ｍである。柱穴は直径24～52㎝、深さ12～48㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区北西部で検出された２×１間の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－86°－Ｗである。ＳＢ２は、第Ⅴ層の茶褐色粘質土層を除去して検出された。梁間は4.36ｍを測り、柱間距離は1.83～1.98ｍである。桁行は4.76ｍを測り、柱間距離は4.18～4.29ｍである。柱穴は直径40～60㎝、深さ16～24㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は暗茶褐色粘質土で出土遺物はみられなかった。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区中央部のやや東側で検出された２×３間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方

向はＮ－83°－Ｅである。ＳＢ３は、第Ⅰ層の耕作土を除去して検出された。梁間は4.64ｍを測り、柱間距離は1.88～2.07ｍである。桁行は、8.04ｍを測り、柱間距離は1.87～2.92ｍである。柱穴は直径44～52cm、深さ12～16cmを測り、不整円形及び隅丸三角形を呈す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

土坑

Loc.10Ｂで検出された弥生時代から古墳時代の土坑は46基存するが、この中で、ＳＫ５・10・17・18の４基は古墳時代後期の土坑と考えられるため、古墳時代の項で説明する。

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の北西端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は、北東部が突出気味に外湾した不定形で、底面で９個のピット（Ｐ１～９）を確認した。ＳＫ１は、土坑としたが、小竪穴状遺構として考えた方が良いかもしれない。断面形は浅い逆台形を呈し、長径1.97ｍ、短径1.83ｍ、深さ約９cmを測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗで、埋土は暗茶褐色粘質土である。ＳＫ１のＰ２・６から少量の弥生土器片が出土している。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区の北部中央よりやや東側に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.94ｍ、短径0.72ｍ、深さ約0.17ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－39°－Ｅである。埋土は暗茶褐色粘質土であり、壺（337～340）や大型砥石が出土している。ＳＫ２の底面から大型砥石が出土していることから、ＳＫ２は、工房址的な性格を持った前期Ⅳの土坑と考えられる。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区の北西部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.60ｍを測る。ＳＫ３は、ＳＴ３の北東側に隣接し、南東部は袋状を呈している。断面形は不整台形で、長軸方向はＮ－60°－Ｗである。埋土は暗茶褐色粘質土であり、弥生土器片が少量出土している。ＳＫ３は形態等から前期Ⅳの土坑と考えられるが性格は不明である。

ＳＫ４

ＳＫ４は調査区の北西部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不定形で、長径2.24ｍ、短径1.80ｍ、深さ約0.60ｍを測る。断面形は舟底形を呈し、長軸方向はほぼ磁北である。埋土は茶褐色粘質土であり、壺（341～345、350）、甕（346～349）等の遺物が出土している。ＳＫ

4は、前期Ⅳの土坑であるが、ＳＴ４との切り合い関係は判然としない。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区中央部のやや北寄りに位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径1.52ｍ、短径1.24ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－81°－Ｅである。埋土は茶褐色粘質土であり、壺（448～450）の他、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区の中央部よりやや北寄りに位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.34ｍ、短径0.86ｍ、深さ約0.27ｍを測る。ＳＫ７は、ＳＫ６の南側に近接し、南端部が中世の溝（ＳＤ20）に切られている。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－16°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、甕（351）の他に、弥生土器片が数点出土している。

ＳＫ８

ＳＫ８は、調査区東部のやや北寄りに位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.01ｍ、短径0.70ｍ、深さ約７㎝を測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－23°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、叩石（723）の他に弥生土器片が少量出土している。

ＳＫ９

ＳＫ９は、調査区東部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.67ｍ、深さ約0.19ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－３°－Ｅを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、石斧（689）等の遺物が出土している。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区中央部のやや南側に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、東部が逆Ｓ字状に屈曲している。平面形は不整楕円形を呈し、長径2.16ｍ、短径1.68ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－18°－Ｅである。埋土は淡茶褐色粘質土であり、壺(451～453）の他に数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区の中央部よりやや南側に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.84ｍ、短径0.62ｍ、深さ約0.24ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ

－81°－Ｅである。埋土は暗茶褐色粘質土であり、壺（352）の他に数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区中央部のやや南側に位置し、第Ⅵ層で検出された。ＳＤ６北部の東側に近接しており、東部は中世の溝（ＳＤ23）に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.74ｍ、深さ約0.23ｍを測る。断面形は舟底形を呈し、長軸方向はＮ－45°－Ｅである。埋土は灰色砂質土であり、壺（353～356）、石斧（688）、叩石（698）、砥石（728）等の遺物が出土している。ＳＫ13は、出土遺物等から前期Ⅳの土坑と考えられる。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区中央部のやや南側に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、北東部と南西部の両端部に２個のピット（Ｐ１・２）を有している。平面形は楕円形を呈し、長径1.22ｍ、短径0.77ｍ、深さ約0.14ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－35°－Ｅを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片の他に、チャートのチップ及びフレイク約3000点が出土している。ＳＫ14は、出土遺物等から、前期Ⅳの工房址的な性格を持った土坑と考えられる。

ＳＫ15

ＳＫ15は、調査区中央部のやや東側に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.50ｍ、短径0.88ｍ、深さ約0.18ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－77°－Ｗである。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区中央部付近に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、東壁際に１個のピット（Ｐ１）を有している。平面形は長楕円形を呈し、長径2.58ｍ、短径0.85ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－19°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

ＳＫ19

ＳＫ19は、調査区の南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、北端部が中世の溝（ＳＤ24）にわずかに切られている。平面形は楕円形を呈し、長径0.70ｍ、短径0.60ｍ、深さ約0.14ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－69°－Ｅである。埋土は茶褐色粘質土であり、叩石（697）と数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ20

ＳＫ20は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、北部に小段を有し、中央部の上面は中世の溝（ＳＤ24）に切られている。ＳＫ19のすぐ東側に近接しており、平面形は長楕円形を呈し、長径0.93ｍ、短径0.42ｍ、深さ約0.30ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－６°－Ｗである。埋土は暗茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ21

ＳＫ21は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＴ５の西側に近接し、南部は発掘時にすでに削平されており、短径は不明である。平面形は楕円形を呈し、長径3.05ｍ、短径の残存長1.14ｍ、深さ約0.22ｍを測る。断面形は浅い皿形を呈し、長軸方向はＮ－83°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、甕（454、455）等の遺物が出土している。ＳＫ21は、後期Ｉの土坑と考えられるが、性格は不明である。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、壁際に３個のピット（Ｐ１～３）を有している。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.83ｍ、短径0.67ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－７°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径1.18ｍ、短径1.14ｍ、深さ約0.20ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－28°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＴ６の北東側に隣接している。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.61ｍ、短径0.73ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－６°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土しており、底面には拳大程度の大きさの自然礫数個が堆積していた。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＫ24の南東側に近接している。平面形は長楕円形を呈し、南西部は突出気味に外湾しており、壁際に３個のピット（Ｐ１～３）を有している。長径3.36ｍ、短径0.92ｍ、深さ約0.18ｍを測る。断面形は浅い皿形を呈

し、長軸方向はN－45°－Eを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

SK26

SK26は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、SK25の東側に隣接している。SK26は、南北の両端部に小段を有しており、南部は袋状を呈している。平面形は不整楕円形を呈し、長径2.00m、短径1.54m、深さ約0.83mを測る。断面形は台形を呈し、長軸方向はN－17°－Eを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、壺（357～391）、甕（392、393）の他に叩石（722）等の遺物が多量に出土している。底面からは壺（358、360、362、371、372、377）、甕（392、393）等の土器が出土している。SK26は、出土した土器のうちで壺の占める割合いが非常に高く、形態及び出土遺物等から前期Ⅳの貯蔵穴と考えられる。

SK27

SK27は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ST6の東部をわずかに切り取っている。平面形は長楕円形を呈し、長径3.62m、短径0.70m、深さ約0.24mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向は、N－80°－Wを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、壺（458、459、463）、甕（460～462）等の遺物が出土している。出土遺物等から、SK27は後期Ⅰの土坑であるが性格等は不明である。

SK28

SK28は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径0.88m、短径0.84m、深さ約0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－76°－Eを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

SK29

SK29は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、SK26のすぐ東側に近接している。平面形は楕円形を呈し、長径0.64m、短径0.55m、深さ0.28mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－69°－Eを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

SK30

SK30は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑であるが、調査時にすでに削平されており、長径は不明である。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長1.20m、短径1.28m、深さ約0.25mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－10°－Wを示す。埋土は茶褐色粘

質土であり、甕(456)、高杯(457)等が出土している。ＳＫ30は、出土遺物等から後期Ｉの土坑と考えられるが、性格等は不明である。

ＳＫ31

ＳＫ31は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.20ｍ、短径0.62ｍ、深さ約0.14ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－29°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＫ29の東側に近接している。平面形は隅三角形を呈し、長径1.39ｍ、短径1.05ｍ、深さ約0.31ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－80°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、前期Ⅳの壺（394～400)、砥石733）等の遺物が出土しているが、後期Ｉの壺（402）等も混入している。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区南東部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＫ32のすぐ東側に近接している。ＳＫ33は、東西の両端部小段を有しているが、東部は撹乱を受けている。平面形は楕円形を呈し、長径0.89ｍ、短径0.52ｍ、深さ約0.31ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－69°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区の南東端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、南部の２か所にかなり大きな段部を有している。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.64ｍ、短径0.40ｍ、深さ約0.21ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－６°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

ＳＫ35

ＳＫ35は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＴ６の南西部に近接している。平面形は楕円形を呈し、長径1.43ｍ、短径0.90ｍ、深さ約0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－78°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、ＳＤ７の東側に近接してお

り、西部に段部を有している。平面形は不整円形を呈し、長径1.20m、短径1.09m、深さ約0.21mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－68°－Wを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

SK37

SK37は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、SK36のすぐ東側に近接している。平面形は隅丸三角形を呈し、長径0.87m、短径0.82m、深さ約0.11mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－22°－Eを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、少量の弥生土器片が出土している。

SK38

SK38は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、南西部にかなり大きな段部を有している。底面は南部に向かって緩やかに傾斜しており、壁はかなり急傾斜で立ち上がっている。長径3.03m、短径2.04m、深さ約0.64mを測る。断面形は箱形に近い逆台形で、長軸方向はN－59°－Eを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、壺（403～409）甕（410～412）、甕用蓋（413）等の遺物がかなり多量に出土している。SK38は前期Ⅳの貯蔵穴と考えられる。

SK39

SK39は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不整円形を呈するが、北西部は突出気味に外湾しており、段部を形成している。底面はほぼ水平で、壁はかなり急傾斜して立ち上がっている。長径2.56m、短径2.20m、深さ約0.43mを測る。断面形は箱形に近い逆台形を呈しており、長軸方向はN－68°－Eを示し、埋土は4層に分層される。

第Ⅰ層は、淡茶褐色粘質土で、約8cmほど堆積しており、少量の遺物を包含している。第Ⅱ層は、暗茶褐色粘質土で、約32cmほど堆積しており、拳大程度の大きさの自然礫が多量に混入している。第Ⅱ層の暗茶褐色粘質土からは弥生時代の遺物が多量に出土している。第Ⅲ層は、暗黒褐色粘質土で、約6cmほど堆積しており、多量の炭化物と少量の弥生時代の遺物を包含している。第Ⅳ層は、茶褐色粘質土で、約14cmほど堆積しており、弥生時代の遺物を少量包含している。

SK39からは、壺（414、424～428）、壺用蓋（415）、甕（416～423）、叩石（696、717、721）、石包丁（734）等の遺物が出土しており、SK39は、前期Ⅳの貯蔵穴と考えられる。

SK40

SK40は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈しており、北

西部の上面が中世の土坑（ＳＫ117）に切られ、南東部はＳＫ41により切られているが、切り合い関係等は判然としない。底面はほぼ水平で、壁はかなり急傾斜して立ち上がる。長径2.91ｍ、短径1.70ｍ、深さ約0.43ｍを測る。断面形は箱形に近い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－55°－Ｅを示す。埋土は暗茶褐色粘質土で、壺（432～437）等の遺物が出土しており、ＳＫ40は前期Ⅳの貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ41

ＳＫ41は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不定形を呈し、壁際に３個の張り出し状のピット（Ｐ１・３・４）を有している。また、底面の中央部にも１個のピット（Ｐ２）を有しており、北西部では土坑（ＳＫ40）を切り取っている。長径2.64ｍ、短径1.36ｍ、深さ約４cmを測る。断面形は非常に浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－37°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土で、Ｐ１からは、石鏃（741）が出土しており、Ｐ４からは、壺（440～444）、甕（438）等の遺物が出土している。

ＳＫ42

ＳＫ42は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.18ｍ、短径0.58ｍ、深さ約８cmを測る。断面形は非常に浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－３°－Ｗを示す。埋土は茶褐色粘質土で、壺（429）、甕（430、431）等の遺物が出土している。

ＳＫ43

ＳＫ43は、調査区最南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、壁際に３個のピット（Ｐ１～３）を有しており、西部は調査区外に延びているため、長径は不明である。平面形は不定形で、長径の検出長1.20ｍ、短径1.44ｍ、深さ約0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－81°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土で、壺（446、447）、甕（445）等の遺物が出土している。

ＳＫ44

ＳＫ44は、調査区最南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された土坑で、東部は袋状を呈している。平面形は隅丸三角形を呈し、長径0.64ｍ、短径0.56ｍ、深さ約0.13を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。埋土は茶褐色粘質土で、数点の弥生土器片が出土している。

ＳＫ45

ＳＫ45は、調査区最南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長

径0.72m、短径0.58m、深さ約0.20mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－78°－Eを示す。埋土は茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK46

SK46は、調査区に最南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は不定形で、南東部が方形状に突出している。長径1.08m、短径0.94m、深さ約0.20mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－8°－Wである。埋土は茶褐色粘質土で、出土遺物は皆無であった。

溝

Loc.10Bでは弥生時代ら古墳時代の溝7条を検出したが、SD1～4は、古墳時代後期の溝と考えられるため、古墳時代の項で述べることにする。

SD5

SD5は、調査区南西部に位置し、第Ⅵ層で検出された南北方向に延びる溝であり、中央部付近でN字状に鋭く屈曲し、北部から南部に向かって南流したと考えられる。しかし、南北の両端部が調査区外に延びているため、全長等は不明である。残存長38.4m、幅約2.5m、深さ約0.8mを測る。断面形はゆるやかなU字形を呈し、埋土は灰色もしくは黄灰色砂で、南端部で2条に分岐している。

SD5からは、壺（464～482）、甕（483～495）、甕用の蓋（496、497）の他に叩石（719、720）等の遺物が出土しており、前期Ⅳの溝と考えられる。

SD6

SD6は、調査区南西部に位置し、第Ⅵ層で検出された南北方向に延びる溝であり、レベル差等により北部から南部に向かって南流したと考えられる。SD6は、南北の両端部と中央部が調査区外に延びているため、全長等は不明である。推定される残存長約52.0m、幅約1.1m、深さ約0.4mを測る。断面形は緩やかなU字形を呈し、南端部でSD7に合流しているが、一部、撹乱を受けた箇所がある。SD6の埋土は淡茶褐色粘質土であり、壺（498～507）が出土しており、SD6は前期Ⅳの溝と考えられる。

SD7

SD7は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された溝で、レベル差等により、東北東から西南西に向かって西南流したと考えられる。南北の両端部が調査区外に延びているため、全長等は不明であるが、残存長約39.7m、幅約1.6m、深さ約0.7mを測り、断面形はU字形を呈す。SD7は、西南西の端部でSD6に合流しており、上面が一部中世の溝（SD26）に切られている。SD7の東半部で

は、検出面である第Ⅵ層の黄褐色粘質土層の上面及びＳＤ７の埋土中に拳大から人頭大ほどの大きさの自然礫が多量に堆積していた。

ＳＤ７の埋土は、３層に分層される。第Ⅰ層は、茶褐色粘質土で、約0.16ｍほど堆積しており、弥生時代の遺物を少量包含している。第Ⅱ層は、暗茶褐色粘質土で、約0.32ｍほど堆積しており、弥生時代の遺物を多量に包含している。また、この暗茶褐色粘質土中には拳大から人頭大程度の大きさの自然礫がかなり多量に混入していた。第Ⅲ層は、暗灰褐色粘質土で、約0.16ｍほど堆積しており弥生時代の遺物を少量包含している。この暗灰褐色粘質土中にも拳大から人頭大の自然礫がかなり大量に堆積していた。

ＳＤ７からは、壺（508～605）、甕（606～658）、鉢（659～661）、蓋（662～669）等の弥生土器の他に石斧（687、692、693、695）、叩石(699、725)、砥石(730)、石包丁（735、736）等の石器も出土している。

ＳＤ７の底面からは、壺（535）、甕（618）、鉢（661）、蓋（664、667）等の遺物が出土しており、ＳＤ７は前期Ⅳの溝と考えられる。

柱穴

Ｐ１

Ｐ１は、調査区北部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は円形を呈し、直径30cm前後、深さ12cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、甕（680）が出土している。

Ｐ２

Ｐ２は、調査区中央部のやや北側に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は円形を呈し、直径60cm、深さ11cmを測り、柱痕を有する。埋土は茶褐色粘質土で、壺(675)が出土している。

Ｐ３

Ｐ３は、調査区東端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、直径40cm前後、深さ18cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、壺（673、674、676）等の遺物が出土している。

Ｐ４

Ｐ４は、調査区の東端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、直径50cm前後、深さ８cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、壺底部(683)が出土している。

Ｐ５

Ｐ５は、調査区東端部位置し、第Ⅵ層で検出されたピットで、Ｐ３の南側に位置している。平面形は楕円形を呈し、直径30cm前後、深さ７cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、壺底部(678)

が出土している。

P 6

P 6は、調査区のほぼ中央部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、直径60cm前後、深さ9cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、壺(677)が出土している。

P 7

P 7は、調査区の南西部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は円形を呈し、直径30cm前後、深さ39cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、高杯の脚部(684)が出土している。

P 8

P 8は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、直径40cm前後、深さ13cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、甕(679、681)が出土している。

P 9

P 9は、調査区南部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、直径60cm前後、深さ16cmを測り、柱痕を有している。埋土は茶褐色粘質土で、甕底部(682)が出土している。

P10

P10は、調査区南端部に位置し、第Ⅵ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、直径40cm前後、深さ15cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、壺(672)が出土している。

5. まとめ

Loc.10Bでは弥生時代前期Ⅳと後期Ⅰの集落址を確認することができた。

前期Ⅳの竪穴住居址は、調査区の北西部と南部で4棟検出されたが、全て円形を呈し、床面積は7.3m²から23.6m²である。しかし、これらの住居址(ＳＴ２・４～６)は、全て溝に近接しており、排水を考えた選地がなされたと考えられる。

前期Ⅳの土坑は、調査区に散在して分布する傾向がみられ、性格も不明なものが多かった。しかし、底面から大型の砥石が出土したＳＫ2や、チャートのフレイクやチップが多量に出土したＳＫ14のように、工房址的な性格をもつものが存在した。また、ＳＫ４・26・38～40のように、規模がやや大きくて深さがあり、壺等の遺物を多量に出土した貯蔵穴的な性格をもった土坑も存在した。この貯蔵穴と考えられる土坑群は、調査区の南部に集中して存在する傾向がみられた。前期Ⅳの貯蔵穴は、ＳＫ26のように断面形が袋状を呈したものも存在するが、ＳＫ４・38～40のように断面形が箱形に近い逆台形を呈するものが多くなる傾向がみられた。しかしLoc.

10Ｂでは墓坑的な性格をもった土坑は全く見出せなかった。

前期Ⅳの溝は、北部から南部へ向かって南流するＳＤ５・６と、東北東から西南西へ向かって流れるＳＤ７が存在した。調査区の東半部では、遺構検出面である第Ⅵ層の黄褐色粘質土層の上面に、拳大から人頭大の自然礫が多量に堆積していたことを考えると、これらの溝（ＳＤ５～７）は、排水溝的な性格をもっていたと考えられる。

後期Ｉの竪穴住居址は、円形を呈したＳＴ３の１棟のみであり、調査区の北西部に位置している。これは洪水等の被害を避けるための選地と考えられるが、居住域における住居址の密度は極端に低い。

後期Ｉの土坑はＳＫ21・27・30等であり、平面形は楕円形もしくは長楕円形を呈し、深さも浅いものが多く、性格は不明である。この時期の土坑も調査区の南部にやや集中する傾向がみられた。

Loc.10Ｂは、前期Ⅳ段階の分村により成立した集落とみられる。そして幾度かの洪水に見舞われた形跡が存し、検出された弥生時代の遺構の上端はかなりの削平を受けていると考えられ、出土遺物もかなり磨耗したものが多い。

第23表　竪穴住居址計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）	主軸方向	柱穴	面積（m²）	施設	備考
第168図	ＳＴ２	不整円形	2.96×3.12	N	12	7.3		
〃	ＳＴ３	〃	(2.56)×4.48	〃	17	14.1	中央ピット（P10）がある。	
第169図	ＳＴ４	円形	(3.92)×5.12	〃	18	19.3		西部がＳＫ４に切られる。
第170図	ＳＴ５	不整円形	3.84×4.12	N－56°－W	5	12.6		
〃	ＳＴ６	円形	5.44×5.53	N－53°－E	37	23.6	中央ピット（P10）がある。	

第24表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積(m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁×桁(m)	柱間距離(m)			
第171図	ＳＢ１	２×３	4.00×5.72	1.44～1.82	N－ 3°－W	22.9	
〃	ＳＢ２	２×１	4.36×4.76	1.83～4.29	N－86°－W	20.8	
第172図	ＳＢ３	２×３	4.64×8.04	1.87～2.92	N－83°－E	37.3	

第25表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第173図	ＳＫ１	不定形	1.97	1.83	0.09	N－ 6°－W	逆台形	
〃	ＳＫ２	不整楕円形	0.94	0.72	0.17	N－39°－E	〃	大型砥石が出土。
―――	ＳＫ３	〃	0.76	0.60	0.60	N－60°－W	不整台形	南東部は袋状を呈す。
―――	ＳＫ４	不定形	2.24	1.80	0.60	N	舟底形	ＳＴ４の西部を切り取る。
―――	ＳＫ６	隅丸台形	1.52	1.24	0.12	N－81°－E	逆台形	
第173図	ＳＫ７	楕円形	1.34	0.86	0.27	N－16°－W	〃	
〃	ＳＫ８	不整楕円形	1.01	0.70	0.07	N－23°－W	〃	
〃	ＳＫ９	〃	0.90	0.67	0.19	N－ 3°－E	〃	
―――	ＳＫ11	〃	2.16	1.68	0.12	N－18°－E	〃	
―――	ＳＫ12	楕円形	0.84	0.62	0.24	N－81°－E	〃	
第173図	ＳＫ13	不整楕円形	0.90	0.74	0.23	N－45°－E	舟底形	
第174図	ＳＫ14	楕円形	1.22	0.77	0.14	N－35°－E	擂鉢形	両端部に柱穴を有し、チャートのチップやフレイクが多量に出土。
〃	ＳＫ15	不整楕円形	1.50	0.88	0.18	N－77°－W	逆台形	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第174図	SK16	長楕円形	2.58	0.85	0.12	N－19°－E	逆台形	
〃	SK19	楕円形	0.70	0.60	0.14	N－69°－E	〃	
〃	SK20	長楕円形	0.93	0.42	0.30	N－ 6°－W	擂鉢形	
〃	SK21	楕円形	3.05	(1.14)	0.22	N－83°－W	皿形	
第175図	SK22	不整楕円形	1.83	0.67	0.12	N－ 7°－W	逆台形	
〃	SK23	隅丸三角形	1.18	1.14	0.20	N－28°－E	〃	
〃	SK24	不整楕円形	1.61	0.73	0.12	N－ 6°－E	〃	
〃	SK25	長楕円形	3.36	0.92	0.18	N－45°－E	皿形	壁際に3個のピットを有す。
〃	SK26	不整楕円形	2.00	1.54	0.83	N－17°－E	台形	南部は袋状を呈す。
第176図	SK27	長楕円形	3.62	0.70	0.24	N－80°－W	逆台形	
第175図	SK28	隅丸台形	0.88	0.84	0.14	N－76°－E	〃	
――	SK29	楕円形	0.64	0.55	0.28	N－69°－E	〃	
――	SK30	〃	(1.20)	1.28	0.25	N－10°－W	〃	
第176図	SK31	〃	1.20	0.62	0.14	N－29°－W	〃	
〃	SK32	隅丸三角形	1.39	1.05	0.31	N－80°－E	擂鉢形	
〃	SK33	楕円形	0.89	0.52	0.31	N－69°－W	〃	
――	SK34	不整楕円形	0.64	0.40	0.21	N－ 6°－W	逆台形	
第176図	SK35	楕円形	1.43	0.90	0.12	N－78°－E	〃	
第177図	SK36	不整円形	1.20	1.09	0.21	N－68°－W	擂鉢形	
〃	SK37	隅丸三角形	0.87	0.82	0.11	N－22°－E	逆台形	
〃	SK38	不整楕円形	3.03	2.04	0.64	N－59°－E	〃	
第178図	SK39	不整円形	2.56	2.20	0.43	N－68°－E	〃	
〃	SK40	楕円形	2.91	1.70	0.43	N－55°－E	〃	
〃	SK41	不定形	2.64	1.36	0.04	N－37°－W	〃	
第179図	SK42	長楕円形	1.18	0.58	0.08	N－ 3°－W	〃	
〃	SK43	不定形	(1.20)	1.44	0.13	N－81°－E	〃	
――	SK44	隅丸三角形	0.64	0.56	0.13	N－20°－E	〃	
――	SK45	〃	0.72	0.58	0.20	N－78°－E	〃	
第177図	SK46	不定形	1.08	0.94	0.20	N－ 8°－W	〃	

第26表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
1	第Ⅴ層	壺	15.5 (2.9) —— ——	かなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	焼成は良好である。
2	〃	〃	15.6 (3.1) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。	外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
3	〃	〃	9.8 (5.2) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
4	〃	〃	12.8 (2.4) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
5	〃	〃	16.0 (5.9) —— ——	口縁部はゆるく外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
6	第Ⅳ層	〃	17.4 (4.0) —— ——	鋭く外反する口縁部である。	〃	
7	第Ⅴ層	〃	18.8 (6.7) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。	〃	
8	〃	〃	22.0 (3.3) —— ——	口縁部はかなり鋭く外反する。口唇部にヘラ状原体による刻目がある。	〃	
9	〃	〃	16.0 (3.4) —— ——	口縁部は鋭く外反する。口唇部に1条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
10	〃	〃	19.7 (2.7) —— ——	鋭く外反する口縁部である。口唇部に1条のヘラ描沈線を施したあとに刻目を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	口縁部には2個1対の穿孔がある。
11	第Ⅳ層	〃	16.7 (9.0) —— ——	わずかに斜行する頸部に続に口縁部は鋭く外反する。頸部には2条の太いヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部以下の外面はタテハケで仕上げ内面はナデである。	
12	第Ⅴ層	〃	13.4 (4.8) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部は非常に鋭く外反する。頸部に4条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
13	〃	〃	16.8 (6.3) —— ——	ほぼ直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部に刻目を施し、頸部に10条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
14	〃	〃	14.5 (3.7) —— ——	鋭く外反する口縁部である。頸部に3条のヘラ描沈線がある。	器表面が剥落し、調整は不明である。	
15	〃	〃	11.6 (5.5) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部に8条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部外面に黒斑がある。

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
16	第Ⅴ層	壺	12.8 (5.8) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部下端に２条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
17	〃	〃	12.7 (5.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
18	〃	〃	11.6 (5.9) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に６条のヘラ描沈線を施す。	〃	やや頸の細い壺である。
19	〃	〃	19.3 (6.3) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。口縁部内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ､内面はナデである。	
20	〃	〃	14.0 (4.7) —— ——	かなり鋭く外反する口頸部である。頸部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
21	第Ⅳ層	〃	13.6 (6.1) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部外面に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
22	第Ⅴ層	〃	19.7 (5.4) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部である。頸部外面に２条のヘラ描沈線がある。	器表面が剝落し、調整は不明である。	
23	〃	〃	13.6 (5.3) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口縁部内面に粘土帯を貼付する。
24	〃	〃	17.8 (6.3) —— ——	ゆるく外反する口頸部で、頸部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
25	〃	〃	8.3 18.4 17.1 5.4	斜行する細長い頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。胴部はやや横に張り出す。上胴部に５条１単位のヘラ描沈線がある。	口縁部外面は横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケのあとにヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	完形である。下胴部外面に黒斑がある。
26	〃	〃	15.8 (3.2) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。頸部上端に１条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
27	〃	〃	11.0 (2.4) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に刻目を施す。口縁部内面に幅の狭い１条の突帯を貼付し、刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口縁部に２孔１対の穿孔がある。やや頸の細い壺である。
28	〃	〃	22.2 (6.8) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部で頸部に８条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	広口壺である。
29	〃	〃	18.5 (3.0) —— ——	なめらかに外反する口縁部である。口唇部に刻目を施し、頸部に３条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	ややロの広い壺である。
30	〃	〃	25.8 (15.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に刻目を入れ、頸部に18条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラ描列点文をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	広口壺である。

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
31	第Ⅴ層	壺	31.9 (8.2) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。口唇部に刻目を施す。頸部に10条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	広口壺である。
32	〃	〃	12.6 (7.6) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に５条の篦描沈線を施し、沈線上にヘラ状原体による刻目を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
33	〃	〃	7.7 (4.5) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部で頸部に６条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	細頸壺である。
34	〃	〃	11.0 (3.3) —— ——	なめらかに外反する口縁部である。頸部を４条のヘラ描沈線と１条の貼付突帯で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口縁部外面に黒斑がある。
35	〃	〃	8.7 (5.0) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部を8条のヘラ描沈線と2条の貼付突帯で飾る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
36	〃	〃	10.6 (5.9) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部を9条のヘラ描沈線と3条の貼付突帯で飾る。	〃	
37	〃	〃	9.8 (5.3) —— ——	口頸部はゆるやかに外反する。頸部を6条のヘラ描沈線と3条の貼付突帯で飾る。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
38	〃	〃	12.7 (7.5) —— ——	ほぼ直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部を６条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯で飾る。	〃	
39	〃	〃	12.5 (7.2) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。頸部を11条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯で飾る。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
40	〃	〃	—— (7.2) —— ——	ゆるやかに外反する頸部である。頸部は12条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯で飾る。	頸部外面はタテハケで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
41	第Ⅳ層	〃	—— (8.3) —— ——	ゆるやかに外反する頸部には16条のヘラ描沈線と４条の貼付突帯がある。口縁部内面にも貼付突帯がある。	頸部はナデで仕上げる。	
42	第Ⅴ層	〃	—— (7.7) —— ——	ゆるやかに外反する頸部に12条のヘラ描沈線と５条の貼付突帯がある。	頸部はタテハケのあとにナデで仕上げる。	
43	〃	〃	—— (8.4) —— ——	わずかに斜行する頸部は11条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯で飾る。頸部下端のヘラ描沈線文帯に棒状浮文を貼付する。	頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	焼成は良好である。頸部外面の貼付突帯には２枚貝の頂部で刻目を施す。
44	〃	〃	18.8 (4.0) —— ——	鋭く外反する口縁部である。口縁部外面に２条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
45	〃	〃	23.0 (6.8) —— ——	かなり発達した口縁部は鋭く外反する。口縁部外面には１条の微隆起帯がある。	〃	〃

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
46	第Ⅴ層	壺	18.7 (4.6) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部である。口縁部外面に１条の微隆起帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。
47	〃	〃	19.4 (4.8) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部には２条の微隆起帯がある。	〃	〃
48	〃	〃	12.0 (6.0) —— ——	くの字状にゆるく外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	短頸壺か？
49	第Ⅳ層	〃	—— (4.5) —— 9.4	平底の底部でやや胴が張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
50	第Ⅴ層	〃	—— (5.4) —— 9.6	平底の底部で中央部がややくぼんでいる。胴部はやや張り出す。	外面はタテハケのあとに縦方向のヘラ磨きで仕上げる。内面は横方向のナデで仕上げる。	
51	第Ⅳ層	〃	—— (6.1) —— 8.2	平底の底部で器壁は厚く、胴部もやや張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
52	第Ⅴ層	〃	—— (4.2) —— 9.4	平底の底部で中央部がわずかにくぼみ、胴部もやや張り出す。	器表面が剥落し、調整は不明である。	
53	〃	〃	—— (5.1) —— 7.5	平底の底部で器壁はやや厚く、胴部もやや張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
54	第Ⅳ層	〃	—— (6.1) —— 10.1	平底の底部で器壁は非常に厚い。胴もやや張り出す。	〃	
55	〃	〃	—— (4.4) —— 10.3	平底の底部である。	両面共にナデで仕上げる。	
56	第Ⅴ層	〃	—— (4.8) —— 8.8	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
57	〃	〃	—— (4.1) —— 11.1	平底の底部で中央部はわずかにくぼみ、胴も強く張り出す。	〃	
58	〃	〃	—— (6.0) —— 8.7	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとに縦方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	下胴部外面に黒斑がある。
59	第Ⅳ層	〃	—— (7.3) —— 9.5	平底の底部で器壁は非常に厚い。胴はやや張る。	外面はタテハケのあとに右下がり方向のヘラ磨きで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	
60	第Ⅴ層	〃	—— (6.7) —— 8.1	平底の底部で器壁はかなり厚い。胴もやや張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
61	第Ⅳ層	壺	—— (4.9) —— 8.4	平底の底部で器壁はかなり厚く、胴はやや張る。	器表面の剝落が著しく、調整は不明である。	
62	第Ⅴ層	〃	—— (4.8) —— 11.3	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	下胴部外面に輪積み成形痕がある。また胴部に黒斑もある。
63	第Ⅳ層	〃	—— (6.1) —— 10.0	平底の底部で中央部がわずかにくぼみ、器壁も厚い。胴もやや張る。	〃	
64	第Ⅴ層	〃	—— (7.8) —— 8.8	平底の底部で中央部がややくぼみ、胴部も張り出す。	〃	
65	第Ⅳ層	〃	—— (9.0) —— 7.3	平底の底部で中央部がわずかにくぼむ。胴もやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が剝落し、調整は不明である。	
66	〃	〃	—— (6.3) —— 11.3	平底の底部でかなり胴が張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
67	第Ⅴ層	〃	—— (6.1) —— 15.5	平底の底部で器壁は非常に厚い。胴部も非常に強く張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
68	〃	〃	—— (6.9) —— 8.7	平底の底部で器壁はかなり厚く、胴もやや張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヘラ磨きで仕上げる。	下胴部外面に小さな黒斑がある。
69	〃	〃	—— (8.1) —— 9.9	平底の底部で胴部はやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げる。	下胴部外面に黒斑がある。
70	〃	〃	—— (13.5) —— 11.1	平底の底部で胴はやや張る。	外面は入念なヘラ磨きで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	下胴部外面に大きな黒斑がある。
71	第Ⅳ層	甕	27.8 (5.0) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
72	〃	〃	18.8 (5.5) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で胴の張りは弱い。	器表面の剝落が著しく、調整は不明である。	
73	第Ⅴ層	〃	21.3 (4.5) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
74	〃	〃	22.0 (3.7) —— ——	如意形になめらかに外反する口縁部である。	〃	
75	〃	〃	25.7 (2.4) —— ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口縁部外面に煤伏炭化物が付着する。

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
76	第Ⅳ層	甕	25.6 (4.0) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
77	〃	〃	20.5 (4.8) —— ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に刻目を施し、上胴部に6条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。	
78	〃	〃	26.7 (5.0) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
79	〃	〃	19.7 (10.0) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施す。口径＞胴部最大径	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
80	〃	〃	27.4 (6.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。上胴部に12条のヘラ描沈線を施し、その下に刺突文をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げ、頸部はナデで仕上げる。	
81	〃	〃	21.0 (4.1) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で上胴部に2条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
82	〃	〃	18.3 (4.3) —— ——	ゆるく外反する口縁部で、6条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	やや広口の壺かもしれない。
83	〃	〃	15.7 (6.0) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く上胴はやや張り出す。上胴部に3条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部はナデで仕上げる。	
84	第Ⅴ層	〃	19.5 (4.3) —— ——	ゆるく外反する口縁部で上胴部に3条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
85	〃	〃	15.2 (6.4) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で上胴部に6条のヘラ描沈線を施す。壺の口頸部かもしれない。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	小型の甕か？
86	第Ⅳ層	〃	18.8 (11.2) —— ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部に5条のヘラ描沈線を施す。口径≒胴部最大径	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
87	〃	〃	27.0 (24.3) 29.9 ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。上胴部に6条のヘラ描沈線を施す。口径＜胴部最大径	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	やや大型の甕である。胴部外面に黒斑がある。
88	第Ⅴ層	〃	29.0 (3.9) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で上胴部に2条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	やや大型の甕である。
89	第Ⅳ層	〃	16.9 (3.5) —— ——	くの字状にやや鋭く外反する口縁部である。口唇部に刻目を施し、上胴部に3条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
90	第Ⅴ層	〃	16.1 (5.4) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に刻目を施す。上胴部に9条のヘラ描沈線を施す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
91	第Ⅴ層	甕	23.8 (3.7) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で上胴部に2条のヘラ描沈線がある。口唇部に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
92	〃	〃	20.6 (4.8) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に6条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部はナデで仕上げる。	
93	〃	〃	30.0 (3.4) —— ——	好意形にやや鋭く外反する口縁部で、口唇部に1条のヘラ描沈線を施したあとに、下端に刻目を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	上胴部に3条のヘラ描沈線がある。
94	〃	〃	22.6 (3.6) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で口唇部上端に刻目を施す。上胴部に2条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。口縁部内面はヨコナデで仕上げる。	
95	第Ⅳ層	〃	25.8 (6.6) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に刻目を施し、上胴部に2条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
96	第Ⅴ層	〃	21.4 (3.9) —— ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で口唇部に刻目を施し、上胴部に6条のヘラ描沈線がある。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。	
97	〃	〃	22.9 (5.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に刻目を持ち、上胴部に7条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
98	〃	〃	28.6 (9.2) —— ——	如意形にかなり鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部下端に刻目を施し、上胴部に5条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデである。	
99	〃	〃	20.0 (8.0) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。胴の張りは弱く、口唇部に刻目がある。上胴部に6条のヘラ描沈線があり、その下に列点文がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
100	〃	〃	25.7 (9.8) —— ——	如意形にやや鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に6条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデである。	
101	第Ⅳ層	〃	20.8 (5.3) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口唇部にハケ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケで仕上げる。	上胴部に3条のヘラ描沈線を施す。
102	第Ⅴ層	〃	23.5 (4.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。上胴部に5条のヘラ描沈線を施す。口唇部上端に刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部外面に小さな黒斑がある。
103	〃	〃	29.5 (11.1) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に10条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口径は胴部最大径より大きい。
104	〃	〃	23.5 (8.3) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に1条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	上胴部に3条と2条のヘラ描沈線文帯がある。
105	〃	〃	22.6 (3.6) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部である。口唇部に1条のヘラ描沈線を施したあとに刻目を入れる。上胴部に3条のヘラ描沈線文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
106	第Ⅴ層	甕	20.0 (3.5) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に1条のヘラ描沈線を施したあとに刻目を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	上胴部に2条のヘラ描沈線がある。
107	第Ⅳ層	〃	21.0 (2.7) —— ——	逆L字状口縁の甕である。口唇部に刻目を入れ、上胴部には3条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
108	第Ⅴ層	〃	—— (4.6) —— 6.6	平底の底部で中央部がわずかにくぼむ。	外面はタテハケで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に大きな黒斑がある。
109	〃	〃	—— (3.7) —— 6.7	平底の底部で胴の張りが弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
110	〃	〃	—— (6.3) —— 5.4	平底の底部で中央部がわずかにくぼみ、胴の張りは弱い。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	下胴部外面に火熱を受け、薄赤く変色する。
111	第Ⅳ層	〃	—— (4.5) —— 7.0	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
112	第Ⅴ層	〃	—— (3.5) —— 7.7	平底の底部で器壁はやや薄い。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
113	〃	〃	—— (3.3) —— 10.3	平底の底部で中央部がわずかにくぼむ。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底部外面に小さな黒斑がある。
114	〃	〃	—— (5.4) —— 6.6	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケで仕上げ、内面はナデである。	
115	第Ⅳ層	〃	—— (4.9) —— 8.8	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
116	第Ⅴ層	〃	—— (5.3) —— 8.7	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	壺底部かもしれない。
117	〃	〃	—— (5.9) —— 11.1	平底の底部で器壁はやや厚い。	外面は粗いタテハケで仕上げ、内面はナデである。	〃
118	第Ⅳ層	〃	—— (5.8) —— 7.4	平底の底部で外面がわずかにくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
119	〃	〃	—— (6.7) —— 7.3	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗、もしくは剝落して調整は不明である。外面にはタテハケが残る。	
120	第Ⅴ層	〃	—— (6.9) —— 6.7	平底の底部で器壁はやや厚い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
121	第Ⅴ層	甕	—— (8.6) —— 8.5	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
122	〃	〃	—— (8.7) —— 6.8	平底の底部で胴の張りは弱い。	両面共にナデで仕上げる。	
123	〃	〃	—— (7.2) —— 9.0	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
124	〃	〃	—— (8.8) —— 7.1	平底の底部で中央部はややくぼみ、やや胴が張っている。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
125	〃	〃	—— (5.0) —— 7.6	平底の底部である。	外面は粗いタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	
126	〃	〃	—— (10.2) —— 9.4	平底の底部でやや胴が張る。	両面共にナデで仕上げる。	下胴部外面に黒斑がある。
127	第Ⅳ層	〃	—— (8.6) —— 8.9	平底の底部である。	〃	〃
128	〃	〃	—— (13.1) —— 7.9	平底の底部で器壁はやや厚い。	両面共に縦方向のヘラ削りで仕上げる。	壺底部かもしれない。胴部内面に黒斑がある。
129	〃	〃	13.7 (4.5) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴部がやや張る。上胴部に1条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗もしくは剝落し、調整は不明である。	小型の甕である。
130	〃	〃	12.5 (5.3) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りが弱い。上胴部に3条のヘラ描沈線を施す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	〃
131	〃	蓋	—— (6.6) —— 6.1	傘形の蓋で頂部がくぼんでいる。	器表面が磨耗し、調整は不明である。外面に縦方向のハケメ痕が残る。	
132	第Ⅴ層	〃	—— (5.5) —— 7.0	傘形の蓋である。 器壁はかなり厚い。	器表面が剝落し、調整は不明である。	
133	第Ⅳ層	〃	15.4 7.9 —— 6.5	傘形の蓋で頂部はかなりくぼむ。 器壁は薄く、小型の蓋である。	〃	
134	第Ⅴ層	壺	—— (5.7) —— 5.4	平底の小さな底部で中央部がわずかにくぼむ。胴の張りも弱い。	両面共にナデで仕上げる。	小型の壺底部である。胴部に数条の篦描沈線を施し、その下に格凹形の刺突文を施す。
135	第Ⅳ層	〃	15.3 (3.0) —— ——	かなり鋭く外反する口縁部で口唇部を拡張して3条の凹線文を施す。凹線文の上に刻目を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	口唇部に粘土帯を貼付して拡張する。

挿図番号	層　位	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
136	第Ⅳ層	壺	22.6 (2.4) —— ——	鋭く外反する口縁部で口唇部に3条の凹線文を施す。跳び上がり口縁である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	焼成は悪い。
137	〃	〃	15.8 (8.8) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部下端に3条のヘラ描沈線を施し、上胴部にも1条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はナデで仕上げ、内面は縦方向のヘラ削りで仕上げる。	口唇部を縁取りして肥厚させる。
138	〃	〃	17.0 (6.6) —— ——	直立する頸部に続く口縁部は短いが、鋭く外反する。口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデ。	
139	〃	〃	16.6 (5.9) —— ——	くの字状に屈折する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部に1条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	甕かもしれない。
140	〃	〃	10.5 (4.7) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。	器表面が剝落し、調整は不明である。	細頸壺か？
141	〃	〃	11.8 (2.7) —— ——	鋭く外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	やや細頸の壺か？
142	〃	甕	12.8 22.6 19.6 5.8	くの字状に鋭く外反する口縁部である。口唇部に3条の凹線文を施す。跳び上がり口縁である。	〃	
143	〃	〃	16.1 (1.7) —— ——	〃	〃	
144	〃	〃	11.2 26.5 18.4 5.4	くの字状に鋭く外反する口縁部に無果実型の胴部が続く。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はナデで仕上げ、内面はヘラ削りである。	上胴部内面は横方向の、下胴部内面は縦方向のヘラ削りで仕上げる。
145	〃	〃	24.5 (10.2) —— ——	くの字状にかなり鋭く外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面は粗いタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデ。	やや大型の甕である。口縁部はわずかに跳び上がり口縁である。
146	〃	〃	24.5 (3.9) —— ——	くの字状に外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
147	〃	〃	22.8 (14.0) 25.2 ——	くの字状に外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。	口縁部外面は右下がりのハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。胴部は両面共にハケ調整である。	両面に指頭圧痕が残る。
148	〃	〃	16.3 (4.2) —— ——	くの字状にゆるく外反する口縁部である。	口縁部外面は叩き調整のあとにタテハケを施し、ヨコナデで仕上げる。口縁部内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
149	〃	高杯	—— (3.0) —— 11.3	外方に開く、高杯の脚端部である。	外面はナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	

第27表　包含層出土石器観察表

挿図番号	層　位	器　種	計測値(cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　徴	備　考
150	第Ⅳ層	石斧	(13.1) 6.9 4.8 750.0	緑色岩	太型蛤刃石斧で基部を欠損する。全面に擦痕が残る。	
151	〃	〃	(12.8) 6.2 (1.3) 192.0	〃	太型蛤刃石斧の割れで大半が欠損する。	
152	表採	〃	(11.7) (5.7) 3.2 383.0	斑糲岩質 緑色岩	太型蛤刃石斧で刃部を欠損する。表裏両面に縦方向の擦痕が残る。	
153	第Ⅳ層	〃	(9.2) (3.3) (2.5) 80.7	〃	太型蛤刃石斧で大半を欠損する。全面に擦痕が残る。	
154	〃	〃	(3.8) (5.2) (1.6) 48.9	頁　岩	扁平片刃石斧の基部であり、それ以下の部分を欠損する。全面を入念に研磨し、擦痕が残る。	
155	〃	〃	5.7 3.6 1.0 38.0	〃	やや小型の扁平片刃石斧で、縁辺部が一部剥離するが完形である。全面を入念に研磨し、擦痕が残る。	
156	第Ⅴ層	〃	(4.2) (4.6) (8.5) 24.2	砂質片岩	扁平片刃石斧の未製品で刃部を欠損する。表裏両面に大きな剥離面を残す。	
157	第Ⅳ層	〃	12.8 5.0 2.8 391.0	斑糲岩質 緑色岩	環状石斧で半分を欠損する。かなり頻繁に使用され、刃部の磨滅が著しい。	
158	〃	〃	(13.2) (7.2) 3.6 475.0	〃	環状石斧の未製品で刃部をつくり出しているが、さほど明瞭でない。	
159	第Ⅴ層	〃	7.1 2.0 1.2 23.5	砂　岩	細長い小型の両刃石斧で完形である。基部と刃部のごく一部が欠損する。磨製で全面に擦痕が残る。刃部は蛤刃を呈す。	裏面の中央部に剥離面を残す。
160	〃	〃	4.6 2.6 0.6 7.3	砂質片岩	非常に扁平な小型の両刃石斧である。裏面に大きな剥離面を残すが、表面は入念に研磨し、擦痕が残る。局部磨製である。	ほぼ完形である。
161	第Ⅳ層	〃	(4.4) 1.5 0.6 5.4	〃	細長い小型の両刃石斧である。磨製で全面に擦痕が残る。	
162	第Ⅴ層	〃	4.5 1.9 0.7 7.3	〃	細長い小型の片刃石斧である。全面に剥離面を残す。両面の先端部周辺のみを研磨し、刃部をつくり出している。	局部磨製石斧で刃部と裏面の先端部に擦痕が残る。ほぼ完形である。
163	第Ⅳ層	叩石	10.6 6.2 2.6 310.0	凝灰岩質 緑色岩	表面は研磨面で裏面は剥離面である。上下の両端部に明瞭な高打痕が残る。太型蛤刃石斧の破損品を転用したものか？	
164	〃	〃	20.3 5.9 4.2 815.0	緑色岩	やや線長い棒状を呈した叩石で上下両端部に敲打痕らしき痕跡が残る。	太型蛤刃石斧の未製品かもしれない。完形である。

挿図番号	層　位	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　徴	備　考
165	第Ⅳ層	叩石	10.9 13.9 2.5 488.0	砂　岩	楕円形を呈したやや大型の扁平叩石で表面は自然の礫皮面を大きく残すが、裏面は主剥離面である。両面共に縁辺部に小剥離痕を残す。	周縁部には敲打痕を残す箇所がある。完形。
166	〃	〃	11.3 7.2 1.9 177.0	〃	楕円形の扁平叩石で表面は礫皮面を大きく残し、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。	周縁部に敲打痕の残る箇所がある。表面の中央部にも敲打痕が残る。完形。
167	〃	〃	9.1 6.8 1.6 110.4	〃	〃	周縁部に敲打痕を残す箇所がある。完形である。
168	〃	砥石	(5.2) 3.3 1.1 38.7	泥　岩	乳白色の不整長方形を呈した小型の砥石である。表裏両面と両側面の4面に研磨痕が残る。	
169	〃	〃	13.7 3.7 1.9 139.1	粘板岩	淡黒灰色を呈した細長い長方形の砥石で裏面が割れている。表面と右側面と上面の3面に明瞭な研磨痕が残る。	表面と右側面に擦痕が残る。裏面は風化等で磨滅している。
170	〃	〃	15.2 3.4 2.8 214.0	泥　岩	細長い隅丸長方形を呈した砥石で明乳白色を呈す。下面を除く5面に明瞭な研磨痕がある。	
171	〃	石包丁	(9.3) 4.1 0.8 41.2	千枚岩	横方向の細長い形態の石包丁で中央部に2個の紐孔がある。背部と刃部は共に直線状を呈し、両刃である。両面を入念に研磨しており、擦痕が残る。	刃部と背部に小剥離痕を残す。
172	表採	〃	12.7 4.9 1.1 105.0	砂質片岩	横長の不整長方形を呈した石包丁で全面を入念に研磨し、擦痕が残る。背部と刃部はほぼ直線状を呈し、片刃である。中央部に紐孔が2個ある。	両面共に敲打したあとに紐孔をうがつ。完形である。
173	第Ⅴ層	〃	(9.5) (4.0) 0.8 50.1	千枚岩	背部と刃部の一部が欠損する。恐らく直線状の背部に外湾する刃部の続く半月型の石包丁である。中央部に2個の紐孔がある。	全面を入念に研磨し、擦痕が残る。
174	〃	〃	(9.6) 5.8 0.7 43.8	〃	両側辺部が欠損するが、外湾する背部に直線状の刃部の続く形態である。中央部に2個の紐孔があり片刃である。全面を入念に研磨し、擦痕が残る。	
175	〃	〃	(8.7) 4.5 0.7 36.5	〃	外湾する背部に直線状の刃部が続く三日月型の石包丁であるが、右側辺部を欠損する。片刃の石包丁で、全面を入念に研磨し、擦痕が残る。	中央部に2個の紐孔がある。
176	〃	〃	13.3 4.7 1.1 79.2	〃	半磨製の片刃の石庖丁で両面に大きな剥離面を残す。両側辺部に紐かけの抉りがある。両面共、中央部を入念に研磨し、擦痕が残る。	両面共、背部に小剥離痕を残す。背部と刃部はほぼ直線状を呈する。完形。
177	第Ⅳ層	〃	(6.5) 4.3 0.7 27.0	砂質片岩	約半分ほど欠損するが、刃部、背部共に直線状を呈した石包丁で片刃である。中央部に1個の紐孔が残る。両面共にやや大きな剥離面を残す。	磨製の石包丁で表面に擦痕が残る。
178	第Ⅴ層	石鏃	1.6 1.7 0.3 0.3	サヌカイト	正三角形状を呈した凹基無茎式の打製石鏃である。両面共にやや大きな剥離面を残す。	完形である。

第28表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
179	ＳＴ２	壺	—— (6.1) —— ——	ほぼ直立気味の頸部に５条のヘラ描沈線を施す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
180	〃	〃	—— (5.2) —— 9.1	平底の底部であるが、中央部がわずかにくぼむ。	外面はタテハケのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げる。内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	下胴部外面に黒斑がある。
181	〃	甕	22.7 26.6 22.5 7.2	如意形に鋭く外反する口縁部に続く胴部は無果実型を呈す。口径≒胴部最大径、上胴部に６条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げ、内面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	完形である。Ｐ10出土。
182	ＳＴ４	壺	17.9 (3.5) —— ——	外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	薄手の壺かもしれない。
183	〃	〃	28.0 (6.4) —— ——	大きく外反する口縁部である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	広口壺か？床面出土。
184	〃	〃	10.9 (6.7) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
185	〃	〃	15.1 (6.7) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に５条のヘラ描沈線を施す。	〃	
186	〃	〃	15.4 (7.4) —— ——	やや斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に５条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
187	〃	〃	7.9 (6.2) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部外面に12条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	細頸壺である。頸部内面に黒斑がある。
188	〃	〃	10.6 (18.2) 16.1 5.9	ほぼ直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反し、短い。胴部はややいびつで球形に近い形を呈す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	床面出土。
189	〃	〃	9.0 (3.4) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	細頸壺である。口唇部は縁取りをしている。床面出土。
190	〃	〃	11.6 (3.2) —— ——	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に１条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	細頸壺か？
191	〃	〃	—— (6.0) —— ——	斜行する頸部に５条のヘラ描沈線を施す。	外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
192	〃	〃	9.0 (5.7) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口唇部に１条のヘラ描沈線を施し、下端に刻目をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	細頸壺である。頸部外面に８条のヘラ描沈線がある。
193	〃	〃	—— (12.2) 30.3 ——	かなり胴の張り出した上胴部に５条のヘラ描沈線を施す。	上胴部外面はハケ調整のあとに横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
194	ＳＴ４	壺	—— (10.8) 23.7 ——	張りの弱い上胴部である。頸部に胴部最大径、上胴部に６条のヘラ２条のヘラ描沈線を施し、上胴部に９条と６条のヘラ描沈線文帯がある。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
195	〃	〃	—— (8.8) —— ——	やや胴の張る上胴部で12条のヘラ描沈線と１条の貼付突帯で飾る。貼付突帯にはハケ状原体による刻目がある。	上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
196	〃	〃	—— (8.8) —— ——	直立気味の頸部を５条の貼付突帯と16条のヘラ描沈線で飾る。	頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
197	〃	〃	—— (6.4) —— ——	わずかに外反する頸部を９条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯で飾る。	頸部はナデで仕上げる。	
198	〃	〃	—— (5.9) —— ——	ゆるく外反する頸部には13条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯がある。	頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	細頸壺である。床面出土。
199	〃	〃	—— (9.0) —— ——	やや斜行する頸部に続く胴部は張りが弱い。上胴部に４条の微隆起帯がある。	両面共にナデで仕上げる。	薄手の壺である。
200	〃	〃	—— (10.8) 19.7 ——	球形を呈す上胴部で頸部から上胴部に５条以上のヘラ描沈線を施し、その上に棒状浮文を貼付する。上胴部に９条１単位のヘラ描沈線を施し、その上に円形浮文をめぐらす。	上胴部外面は細いハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	細頸壺の胴部である。上胴部内面に輪積み成形痕が残る。
201	〃	〃	—— (4.6) —— ——	やや小型の壺で胴の張りも弱い。上胴部にヘラ描沈線文帯をつくり、その間に双線の山形文を配す。	上胴部外面はタテハケのあとに丁寧なナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	細頸壺か？
202	〃	〃	—— (3.6) —— 9.2	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
203	〃	〃	—— (2.1) —— 9.2	平底の底部で中央部がわずかにくぼんでいる。	外面は器表面が磨耗もしくは剝落し、調整は不明である。内面はナデで仕上げる。	
204	〃	〃	—— (5.4) —— 7.6	平底の底部でやや胴が張る。	外面はやや器表面が磨耗するが、ハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
205	〃	〃	—— (5.5) —— 6.7	平底の底部で中央部がややくぼんでいる。	外面はナデで仕上げ、内面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	
206	〃	〃	—— (4.5) —— 9.7	平底の底部で器壁は非常に厚い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底部外面に煤状炭化物が付着する。
207	〃	〃	—— (8.7) —— 7.7	平底の底部で中央部はややくぼんでいる。胴はやや張り出す。	器表面が磨耗もしくは剝落し、調整は不明である。	下胴部外面に大きな黒斑がある。
208	〃	〃	—— (2.8) —— 9.7	平底の底部で中央部がややくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
209	ＳＴ４	壺	—— (3.9) —— 10.5	平底の底部で中央部はややくぼんでいる。胴はやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
210	〃	〃	—— (4.6) —— 7.0	〃	外面はナデで仕上げ、内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
211	〃	〃	—— (5.0) —— 10.7	平底の底部で胴がやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	焼成は良好である。
212	〃	〃	—— (5.6) —— 5.0	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとにナデを施し、ヘラ磨きを加える。内面はナデ調整である。	下胴部内外面にかなり大きな黒斑がある。
213	〃	〃	—— (5.8) —— 10.0	平底の底部で中央部がややくぼみ、胴が張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
214	〃	〃	—— (4.9) —— 10.5	平底の底部で中央部がわずかにくぼみ、器壁は厚い。やや胴が張る。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底部外面に黒斑がある。
215	〃	〃	—— (4.9) —— 7.6	平底の底部で胴がかなり張り出す。	外面はタテハケのあとにヘラ磨きで仕上げる。内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	下胴部外面にかなり大きな黒斑がある。床面出土。
216	〃	〃	—— (5.7) —— 8.6	平底の底部で胴がかなり張り出す。	外面はタテハケのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げる。内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
217	〃	〃	—— (9.5) —— 10.8	平底の底部で器壁は厚い。胴部はかなり張り出す。	外面はタテハケのあとに粗いヘラ磨きを加え、内面はナデで仕上げる。	
218	〃	〃	—— (9.6) —— 9.6	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底部外面に黒斑がある。
219	〃	〃	—— (11.3) —— 6.5	〃	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデ調整で仕上げる。	下胴部外面に大きな黒斑がある。
220	〃	〃	—— (8.0) —— 6.1	平底の底部で器壁は厚い。胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとに横方向のヘラ磨きを加える。内面はナデ調整で仕上げる。	下胴部外面に黒斑がある。
221	〃	〃	—— (7.1) —— 8.0	わずかに上げ底の底部である。	外面はタテハケのあとに丁寧なナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	床面出土。
222	〃	〃	—— (21.0) —— 10.2	平底の底部で中央部がややくぼんでいる。底部に焼成後の穿孔がある。やや胴が張る。	外面はタテハケで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	〃
223	〃	〃	—— (2.3) —— 6.9	平底の底部であるが、わずかにくぼむ。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
224	ＳＴ４	壺	—— (2.2) —— 7.2	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	甕底部かもしれない。
225	〃	〃	—— (2.7) —— 8.0	平底の底部で中央部がややくぼむ。	〃	
226	〃	〃	—— (3.0) —— 6.5	平底の底部で器壁はやや厚い。	〃	甕底部かもしれない。底部外面に黒斑がある。
227	〃	〃	—— (2.8) —— 8.5	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
228	〃	〃	—— (2.6) —— 6.6	平底の底部でやや胴が張る。器壁もかなり厚い。	外面はタテハケのあとにナデ仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
229	〃	〃	—— (5.9) —— 7.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	床面出土。
230	〃	〃	—— (4.8) —— 7.7	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	甕底部かもしれない。
231	〃	〃	—— (4.8) —— 7.8	平底の底部で胴の張りは強い。	両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
232	〃	〃	—— (3.7) —— 9.7	平底の底部で器壁は厚い。	両面共にナデで仕上げる。	
233	〃	〃	—— (5.1) —— 7.9	平底の底部で胴がやや張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	床面出土。
234	〃	〃	—— (5.2) —— 7.6	平底の底部で中央部がややくぼむ。胴はやや張る。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
235	〃	〃	—— (6.7) —— 6.7	平底の底部で器壁は厚い。胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
236	〃	〃	—— (6.6) —— 6.6	平底の底部でやや胴が張る。	器表面が磨耗し、調整は不明であるが、外面にハケメ痕が残る。	焼成は不良である。
237	〃	〃	—— (9.0) —— 7.5	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
238	〃	〃	—— (6.2) —— 6.8	平底の底部で中央部がわずかにくぼむ。胴部はやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
239	ＳＴ４	壺	—— (7.7) —— 7.0	平底の底部であるが中央部がややくぼんでいる。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
240	〃	〃	—— (6.2) —— 8.6	平底の底部で中央部がわずかにくぼみ、器壁も厚い。やや胴が張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
241	〃	〃	—— (6.1) —— 8.3	平底の底部である。	〃	
242	〃	〃	—— (7.8) —— 7.4	平底の底部で器壁は厚いが胴の張りは弱い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
243	〃	〃	—— (2.8) —— 7.8	平底の底部に続く胴部はかなり張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
244	〃	〃	—— (6.4) —— 8.0	平底の底部で器壁はかなり厚い。	〃	
245	〃	〃	—— (7.8) —— 8.3	平底の底部で中央部がわずかにくぼんでいる。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底部外面に籾痕が残る。下胴部内面に黒斑がある。
246	〃	〃	—— (9.0) —— 11.0	平底の底部でややくぼみ、器壁はやや厚い。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明であるが縦方向のハケメ痕が残る。内面はタテハケのあとにナデで仕上げる。	
247	〃	〃	—— (13.0) —— 7.0	平底の底部に続く下胴部は張りが弱い。下胴部に10条のヘラ描沈線がある。	下胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に大きな黒斑がある。
248	〃	甕	23.3 (14.5) 21.8 ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。口径は胴部最大径より大きい。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
249	〃	〃	16.4 (2.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する胴部はやや張り出す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	やや小型の甕である。
250	〃	〃	22.8 (5.7) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で口唇部にヘラ状原体による刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
251	〃	〃	22.8 (5.6) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で上胴部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
252	〃	〃	18.9 (4.4) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部に６条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
253	〃	〃	39.0 (6.2) —— ——	口縁部は如意形になめらかに外反する。上胴部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部内面にヨコハケの痕跡が残る。器表面が磨耗し調整は不明である。	大型の甕である。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
254	ＳＴ４	甕	19.4 (4.5) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。上胴部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部外面に煤状炭化物が付着する。
255	〃	〃	31.4 (10.8) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。上胴部に８条のヘラ描沈線を施す。口径は胴部最大径より大きい。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデで仕上げる。	
256	〃	〃	23.9 (16.7) —— 23.1	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部に９条のヘラ描沈線を施す。口径は胴部最大径より大きい。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整で仕上げ、内面はナデである。	上胴部外面にかなり大きな黒斑がある。床面出土。
257	〃	〃	26.2 (10.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部外面に７条のヘラ描沈線を施す。口径は胴部最大径より大きい。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部外面に大きな黒斑がある。
258	〃	〃	19.0 (7.7) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。上胴部に７条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口唇部にもヘラ状原体による刻目を施す。口径は胴部最大径より大きい。
259	〃	〃	24.2 (5.6) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。上胴部に３条のヘラ描沈線を施す。口唇部にヘラ状原体による刻目を施す。	〃	口径は胴部最大径より大きい。上胴部外面に小さな黒斑がある。
260	〃	〃	19.9 (12.0) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に11条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	床面出土。
261	〃	〃	24.8 (13.8) 25.2 ——	如意形にゆるく外反する口縁部で、上胴部に16条のヘラ描沈線を施す。ヘラ描沈線間にヘラ状原体による刻目と双線の山形文を配す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	口径は胴部最大径とほぼ同じ。口唇部にヘラ状原体による刻目がある。
262	〃	〃	28.8 (5.7) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部に10条のヘラ描沈線を施す。口唇部に刻目をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口径は胴部最大径より大きい。
263	〃	〃	22.9 (9.9) —— ——	如意形になめらかに外反する口唇部で胴の張りは弱い。上胴部に６条のヘラ描沈線を施す。口唇部に刻目がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	上胴部外面に煤状炭化物が付着する。床面出土。
264	〃	〃	22.2 (14.3) 23.0 ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部でやや胴が張る。上胴部に９条のヘラ描沈線を施し、その間に刻目をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口唇部下端に刻目をめぐらす。口径は胴部最大径とほぼ同じ。
265	〃	〃	24.0 (5.8) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で口唇部に１条のヘラ描沈線を施す。口縁部外面にも２条のヘラ描沈線を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
266	〃	〃	40.1 (5.3) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に１条のヘラ描沈線を施す。口縁部外面に２条のヘラ描沈線を施す。	〃	大型の甕である。
267	〃	〃	29.8 (7.4) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部で胴の張りは弱い。上胴部に６条のヘラ沈線を施し、その間にヘラ描の八字文を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	口唇部に１条のヘラ描沈線を施し、その上端に刻目を入れる。
268	〃	〃	28.0 (9.2) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴の張りはやや弱い。口唇部に１条のヘラ描沈線を施し、下端に刻目を施す。上胴部に12条のヘラ描沈線を施し、その下端に列点文をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部外面に黒斑がある。口径は胴部最大径より大きい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
269	ＳＴ４	甕	20.6 (12.6) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕であるが口唇部は短い。張りの弱い上胴部に８条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラ状原体による刺突文をめぐらす。	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	口唇部に刻目を施す。上胴部外面に大きな黒斑がある。
270	〃	〃	20.7 (7.3) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕であるが口唇部は短い。胴の張りは弱い。上胴部外面に10条のヘラ描沈線を施す。口唇部に刻目をめぐらす。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部はナデで仕上げる。	
271	〃	〃	17.7 (5.9) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕でやや胴が張る。上胴部に２条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのとにナデで仕上げ、内面はナデである。	床面出土。
272	〃	〃	18.1 (4.3) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕である。上胴部に２条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	〃
273	〃	〃	—— (5.6) —— 7.9	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
274	〃	〃	—— (7.7) —— 7.4	平底であるが中央部がわずかに突出気味である。底部に焼成後の穿孔がある。	〃	甑か？ 底部外面に黒斑がある。 床面出土。
275	〃	〃	—— (3.3) —— 5.6	平底のやや小さな底部である。	〃	
276	〃	〃	—— (3.3) —— 5.0	〃	両面共にナデで仕上げる。	
277	〃	〃	—— (4.4) —— 4.6	平底の小さな底部である。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げる。内面はナデである。	
278	〃	〃	—— (3.3) —— 6.5	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
279	〃	〃	—— (3.3) —— 4.9	平底の小さな底部である。	両面共にナデで仕上げる。	
280	〃	〃	—— (3.7) —— 8.0	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
281	〃	〃	—— (3.5) —— 8.0	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
282	〃	〃	—— (4.0) —— 7.2	平底で中央に向かってややくぼんでいる。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
283	〃	〃	—— (3.2) —— 6.8	平底の底部である。	〃	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
284	ＳＴ４	甕	—— (3.3) —— 8.9	平底の底部で器壁は薄い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
285	〃	〃	—— (4.1) —— 7.8	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
286	〃	〃	—— (5.1) —— 8.3	〃	〃	
287	〃	〃	—— (4.1) —— 6.5	〃	ナデ調整で仕上げる。	
288	〃	〃	—— (5.3) —— 6.2	平底の底部で器壁はやや厚い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	壺底部かもしれない。
289	〃	〃	—— (4.9) —— 7.2	〃	器表面が剥落し、調整は不明である。	
290	〃	〃	—— (5.1) —— 8.6	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
291	〃	〃	—— (6.6) —— 6.8	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	
292	〃	〃	—— (6.0) —— 9.0	平底の底部である。	ナデ調整で仕上げる。	
293	〃	〃	—— (7.9) —— 8.4	平底の底部であるが中央部がややくぼんでいる。胴の張りは弱い。	器表面が剥落し、調整は不明である。	床面出土。
294	〃	〃	—— (7.4) —— 8.2	平底の底部で中央部がわずかにくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
295	〃	〃	—— (8.2) —— 6.7	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	底部外面に小さな黒斑がある。 床面出土。
296	〃	〃	—— (10.0) —— 6.4	平底の底部でやや胴が張る。	〃	
297	〃	〃	—— (6.5) —— 6.6	平底の底部で器壁は薄い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
298	〃	〃	—— (13.5) —— 7.4	平底の底部でやや胴が張る。	〃	胴部外面に煤状炭化物が付着する。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
299	ＳＴ４	甕	19.5 (10.5) —— ——	如意形にゆるく外反する口縁部に張りの弱い胴部が続く甕である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	胴部外面に小さな黒斑がある。
300	〃	蓋	—— (9.1) —— 6.7	傘形の蓋である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
301	〃	〃	20.2 (2.8) —— ——	傘形の蓋の口縁部である。	両面共にハケ調整のあとに丁寧なナデで仕上げる。	
302	〃	〃	27.9 (6.3) —— ——	やや大型の傘形の蓋の口縁部である。体部に続く口縁部はわずかに屈曲して外方にひらく。	外面はヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	
303	〃	〃	6.3 (8.9) —— ——	傘形の蓋で口縁部を欠損する。	外面はタテハケのあとにヘラ磨きで仕上げ、内面はヘラ磨きで仕上げる。	頂部に黒斑がある。
304	〃	〃	6.8 (6.5) —— ——	傘形の蓋である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面もハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
305	〃	小型土器	—— (2.4) —— 3.3	小型土器の底部で平底である。	両面共にナデで仕上げる。	
306	ＳＴ５	壺	18.9 (4.7) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に２条のヘラ描沈線がある。	口縁部はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
307	〃	〃	—— (4.5) —— 9.4	平底の底部で器壁は非常に厚い。	両面共にナデで仕上げる。	底部外面に大きな黒斑がある。
308	〃	〃	—— (6.8) —— 5.9	平底の底部で胴の張りが弱い。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。下胴部内面にヘラ圧痕がある。	
309	〃	甕	19.0 (6.6) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕で胴部の張りは弱い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
310	〃	〃	—— (4.7) —— 7.4	平底の底部でややくぼんでいる。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
311	〃	〃	—— (4.9) —— 6.4	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	底部外面に黒斑がある。
312	〃	壺	—— (3.6) —— 6.2	平底の底部である。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデで仕上げる。	
313	〃	〃	—— (2.4) —— 8.1	平底の底部で器壁は薄い。	両面共にナデ調整で仕上げる。	底部外面に籾痕がある。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
314	ＳＴ５	壺	15.9 (6.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。口唇部に３条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
315	〃	甕	14.5 (1.7) —— ——	くの字状に屈曲する口縁で口縁端部を上方につまみあげた跳び上がり口縁である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口唇部に２条の凹線文を施す。
316	〃	〃	18.2 (1.8) —— ——	くの字状にゆるく屈曲する口縁部で口唇部に３条の偽凹線文を施す。	〃	
317	ＳＴ６	壺	—— (5.8) —— ——	ほぼ直立する頸部下端に断面三角形の突帯を貼付する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
318	〃	〃	—— (5.6) —— 7.2	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
319	〃	〃	—— (6.7) —— 8.8	平底の底部で器壁はやや厚い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
320	〃	〃	—— (3.9) —— 9.2	平底の底部であるが中央部がわずかにくぼむ。	外面はナデで仕上げるが、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
321	〃	〃	—— (6.6) —— 7.2	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	甕底部かもしれない。 Ｐ３出土。
322	〃	〃	—— (4.7) —— 12.0	平底でやや胴が張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
323	〃	〃	—— (3.5) —— 6.9	平底である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
324	〃	〃	—— (4.2) —— 8.3	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
325	〃	〃	—— (6.7) —— 9.1	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
326	〃	〃	—— (6.5) —— 7.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	
327	〃	甕	—— (7.5) —— 6.2	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	Ｐ１出土。
328	〃	壺	—— (7.9) —— 8.8	平底の底部でやや胴が張る。	両面共にナデで仕上げる。	底部外面に小さな黒斑がある。 床面出土。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
329	ＳＴ６	鉢	—— (9.4) —— 5.0	平底で胴の張りも弱く、器壁は薄い。	外面はヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	Ｐ９出土。
330	ＳＴ３	壺	14.4 (5.1) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口唇部は縁取りをしている。Ｐ10出土。
331	〃	〃	11.8 (2.3) —— ——	口縁部は外反する。口唇部に２条の偽凹線文がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	細頸壺か？ Ｐ10出土。
332	〃	〃	—— (8.6) —— ——	胴の張った上胴部である。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りで仕上げる。	Ｐ10出土。
333	〃	甕	15.1 (11.8) 20.0 ——	くの字状に屈曲して外反する口縁部に無果実型の胴部が続く。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面は縦方向のヘラ削りで仕上げる。	内面の胴部中央は横方向のヘラ削りである。 Ｐ10出土。
334	〃	〃	—— (3.1) —— 5.9	平底の底部であるが、中央部がややくぼむ。	外面にはタテハケの痕跡が残る。器表面が磨耗し、調整は不明である。	底部外面に小さな黒斑がある。
335	〃	〃	—— (5.6) —— 10.0	平底の底部である。	外面は縦方向のヘラ削りで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	Ｐ10出土。 壺底部かもしれない。
336	〃	小型土器	—— (3.2) —— 4.2	小型土器の底部で上げ底である。	両面共にナデで仕上げる。底部外面に指頭圧痕がある。	底部内外面に黒斑がある。
337	ＳＫ２	壺	—— (6.7) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
338	〃	〃	—— (5.9) —— 8.4	平底の底部で器壁はやや厚い。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
339	〃	〃	—— (8.1) —— 6.9	平底の底部でやや胴が張る。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
340	〃	〃	—— (4.0) —— 7.4	平底の底部で胴が張り出している。中央部がわずかにくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
341	ＳＫ４	〃	11.5 (8.5) —— ——	やや斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。口頸部に15条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁端部はわずかに外方に突出する。
342	〃	〃	15.1 (4.2) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部である。頸部に２条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
343	〃	〃	— (3.6) —— 7.6	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
344	ＳＫ４	壺	—— (2.5) —— 11.0	平底の底部で胴が張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
345	〃	〃	—— (4.8) —— 12.6	平底の底部でやや胴が張る。	外面はタテハケのあとにナデを施し、ヘラ磨きを加える。内面はナデで仕上げる。	
346	〃	甕	—— (4.3) —— 6.5	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
347	〃	〃	—— (3.6) —— 7.3	平底の底部で器壁は厚い。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に黒斑がある。
348	〃	〃	—— (3.9) —— 7.1	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
349	〃	〃	—— (4.0) —— 6.5	平底の底部で器壁は非常に厚い。	〃	
350	〃	壺	—— (2.9) —— 5.6	平底の底部である。	〃	
351	ＳＫ７	甕	25.1 (10.3) —— ——	口縁部は発達し、如意形にゆるく外反する。上胴部には４条の双線がある。胴部にも５条のヘラ描沈線がある。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。上胴部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	類例はほとんどなく薄手の甕かもしれない。
352	ＳＫ12	壺	10.1 (7.5) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に数条のヘラ描沈線を施し、その上に４条の突帯を貼付する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	細頸壺である。
353	ＳＫ13	〃	9.7 17.5 14.1 6.1	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。胴部は張りが弱く、卵型を呈す。頸部に４条と胴部に２条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、ヘラ磨きを施す。胴部内面はナデで仕上げる。	完形である。
354	〃	〃	—— (8.1) —— ——	斜行する頸部に続く胴部はやや張り出す。頸部～上胴部にかけ７条のヘラ描沈線がある。	外面はナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
355	〃	〃	—— (4.9) —— 9.0	平底の底部でわずかにくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
356	〃	〃	—— (6.2) —— 7.6	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
357	ＳＫ26	〃	9.4 (3.0) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	細頸壺。
358	〃	〃	11.9 (4.5) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	底面出土。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
359	ＳＫ26	壺	17.4 (4.3) —— ——	直立する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。口唇部の上下両端に刻目を施す。頸部に８条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	口縁部内面に１条の貼付突帯がある。口縁部外面には３個の穿孔がある。
360	〃	〃	10.4 (8.2) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部には13条のヘラ沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	細頸壺か？ 床面出土。
361	〃	〃	13.7 (3.0) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。頸部に２条のヘラ描沈線がある。口縁端部上面に刻目を付した突帯が貼付される。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
362	〃	〃	23.4 (9.7) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はわずかに外反する。口唇部に１条のヘラ描沈線を施し、口唇部下端に刻目を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	広口壺。口縁部内面に粘土帯を貼付する。頸部に11条のヘラ描沈線と１条の貼付突帯を施す。
363	〃	〃	—— (8.0) —— ——	わずかに外反する筒状の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に17条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯が施される。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	細頸壺。
364	〃	〃	9.6 (5.2) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に6条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	〃
365	〃	〃	—— (6.2) —— ——	わずかに外反する頸部に19条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯がある。		
366	〃	〃	13.5 (8.0) —— ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口縁部内面の上端に２条の貼付突帯がある。口縁部に２個１対の穿孔がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	頸部に７条のヘラ描沈線と３条の貼付突帯がある。
367	〃	〃	11.4 (4.8) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に６条のヘラ描沈線と１条の貼付突帯がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	細頸壺である。
368	〃	〃	—— (5.5) —— ——	やや胴の張る上胴部である。頸部に６条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯がある。上胴部に円形浮文と５条のヘラ描沈線がある。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
369	〃	〃	—— (5.4) —— ——	やや胴の張った上胴部である。上胴部には8条のヘラ描沈線と1条の貼付突帯がある。また円形浮文もめぐらされる。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
370	〃	〃	—— (7.8) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く胴部は強く張り出す。頸部～上胴部を２条の貼付突帯と14条のヘラ描沈線で飾る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部に円形浮文が認められる。上胴部内面に小さな黒斑がある。
371	〃	〃	26.3 (3.6) —— ——	口縁部は鋭く外反する。口縁部外面に２条の微隆起帯がある。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げる。	薄手の壺である。 底面出土。
372	〃	〃	21.9 (19.4) 24.6 ——	直立する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に続く上胴部の張りは弱い。上胴部外面に４条の微隆起帯がある。	両面共に磨耗し、不明である。	薄手の壺である。胴部内面に黒斑がある。底面出土。
373	〃	〃	—— (7.3) —— ——	斜行する頸部に続く上胴部はやや張り出す。上胴部に少くとも３条の微隆起帯がある。	両面共に丁寧なナデで仕上げる。	底面出土。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
374	ＳＫ26	壺	—— (3.9) —— ——	直立気味の頸部に続く上胴部は強く張り出す。上胴部外面を貼付突帯とヘラ描沈線で飾る。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	上胴部のヘラ描沈線間に双線の山形文が描かれる。
375	〃	〃	—— (9.6) —— ——	やや強く張った上胴部で貼付突帯とヘラ描沈線で飾る。上胴部のヘラ描沈線は多条化している。	〃	
376	〃	〃	—— (6.7) —— ——	張りの弱い上胴部で多条化したヘラ描沈線間に双線の山形文が描かれる。	外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
377	〃	〃	—— (5.6) —— ——	〃	両面共にナデで仕上げる。	底面出土。
378	〃	〃	—— (3.4) —— 6.9	中央に向かってわずかにくぼんだ平底の底部である。	外面はナデで仕上げるが内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
379	〃	〃	—— (5.7) —— 6.6	中央部に向かってくぼんだ平底の底部でやや胴が張る。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、横方向のヘラ磨きを施す。内面はナデで仕上げる。	底面出土。
380	〃	〃	—— (4.3) —— 8.4	平底の底部でやや胴が張る。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
381	〃	〃	—— (3.1) —— 9.8	平底の底部で器壁は薄い。	外面はナデで仕上げるが内面は磨耗し、調整は不明である。	薄手の壺底部である。 底面出土。
382	〃	〃	—— (3.7) —— 7.7	平底の底部で胴が強く張り出す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
383	〃	〃	—— (3.9) —— 6.6	平底の底部である。	〃	
384	〃	〃	—— (3.5) —— 9.7	平底の底部で胴の張りは弱い。	両面共にナデで仕上げる。	薄手の壺で底部外面に木葉痕がある。
385	〃	〃	—— (5.1) —— 7.9	平底の底部であるが中央がややくぼんでいる。やや胴が張る。	外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
386	〃	〃	—— (5.9) —— 8.6	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	底面出土。
387	〃	〃	—— (2.9) —— 11.7	平底である。	両面共にナデで仕上げる。	薄手の壺底部か？
388	〃	〃	—— (5.4) —— 8.5	平底の底部で中央部がややくぼんでおり、器壁は厚い。胴は強く張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
389	ＳＫ26	壺	—— (9.1) —— 10.0	平底の底部で器壁は厚い。胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
390	〃	〃	—— (8.3) —— 5.9	平底の底部であるが中央に向かってややくぼんでいる。底径のわりに胴が張り出している。	〃	
391	〃	〃	—— (8.2) —— 11.4	平底の底部でややくぼんでいる。胴はやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、横方向のヘラ磨きを加える。内面はナデで仕上げる。	
392	〃	甕	25.9 (6.9) —— ——	如意形にゆるやかに外反する口縁部で上胴部に10条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	底面出土。
393	〃	〃	20.4 (5.6) —— ——	如意形に外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部にハケ状原体による刻目を施す。上胴部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	〃
394	ＳＫ32	壺	12.0 (5.1) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。頸部に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
395	〃	〃	13.3 (6.3) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に７条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
396	〃	〃	—— (4.9) —— ——	やや胴の張った上胴部で４条のヘラ描沈線間に斜格子目文を入れる。	両面共にナデで仕上げる。	
397	〃	〃	—— (5.7) —— 7.6	平底の底部で胴の張りは弱い。	外面はタテハケで仕上げるが、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
398	〃	〃	—— (2.3) —— 8.2	平底の底部である。	両面共にナデで仕上げる。	底部外面に黒斑がある。
399	〃	〃	—— (3.0) —— 8.4	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
400	〃	〃	—— (3.6) —— 6.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	〃	
401	〃	高杯	—— (4.9) —— ——	杯部と脚部の接合部の破片である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
402	〃	壺	14.1 (3.8) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部で口唇部に３条の偽凹線文が施される。	〃	
403	ＳＫ38	〃	19.1 (4.1) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部である。口唇部に１条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
404	ＳＫ38	壺	13.1 (4.6) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は短いが鋭く外反する。頸部に４条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
405	〃	〃	11.7 (12.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に6条のヘラ描沈線を施し、その間に竹管状工具による刺突文をめぐらす。	口縁部外面は横方向の細いヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部以下は丁寧なナデ調整で仕上げる。	上胴部にも４条のヘラ描沈線が施される。
406	〃	〃	14.0 (7.6) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部下端に断面台形の突帯を貼付し、その上に３条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部以下はナデ調整で仕上げる。	
407	〃	〃	—— (12.1) —— ——	頸部に５条のヘラ描沈線をめぐらす。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
408	〃	〃	18.1 (4.6) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。口唇部にハケ状原体による刻目を入れる。頸部に３条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
409	〃	〃	24.3 (3.4) —— ——	鋭く外反する口縁部である。口唇部にハケ状原体による刻目を施す。頸部に１条のヘラ描沈線が認められる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	広口壺か。
410	〃	甕	22.7 (2.5) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕で胴の張りは強い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
411	〃	〃	—— (3.3) —— 7.4	平底の底部で器壁は比較的に薄い。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
412	〃	〃	—— (3.6) —— 6.9	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
413	〃	蓋	—— (7.3) —— 7.3	傘形の蓋で頂部外面は中央に向かってくぼむ。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	甕用の蓋である。
414	ＳＫ39	壺	14.8 (2.9) —— ——	ゆるく外反する口縁部である。	両面共にヨコナデで仕上げる。	
415	〃	蓋	8.9 3.1 —— ——	小型の粘土板の中央部に粘土塊を貼付し、つまみとしている。つまみの部分に２箇所穿孔がある。	外面はハケ調整のあとにヘラ磨きを施す。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	壺用の蓋である。外面に黒斑がある。
416	〃	甕	19.6 (6.1) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部の張りは弱い。口唇部にヘラ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデ。	
417	〃	〃	21.3 (5.0) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。	口縁部外面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部はナデで仕上げる。	
418	〃	〃	19.4 (13.2) 19.8 ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部の張りは弱い。口唇部に刻目を入れ、上胴部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口径は胴部最大径とほぼ同じ。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
419	ＳＫ39	甕	23.8 (3.8) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴の張りは弱い。口唇部に刻目を入れ、上胴部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部はナデで仕上げる。	
420	〃	〃	19.1 (3.2) —— ——	〃	口縁部はヨコナデで仕上げ、上胴部はナデで仕上げる。	
421	〃	〃	—— (5.6) —— 5.9	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
422	〃	〃	—— (4.2) —— 7.9	平底の底部であるが中央に向かってわずかにくぼむ。	〃	底部外面に輪積み成形痕が残る。
423	〃	〃	—— (5.6) —— 7.0	平底の底部である。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
424	〃	壺	—— (6.5) —— 6.3	〃	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
425	〃	〃	—— (5.9) —— 7.2	わずかに上げ底の底部である。胴はやや張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	下胴部外面に煤状炭化物が付着する。
426	〃	〃	—— (3.2) —— 7.5	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
427	〃	〃	—— (3.7) —— 7.3	平底の底部であるが中央部がわずかにくぼむ。胴はかなり張り出す。	両面共にナデで仕上げる。	下胴部内面に黒斑がある。
428	〃	〃	—— (2.2) —— 8.1	平底の底部で器壁は非常に薄い。	〃	薄手の壺底部である。
429	ＳＫ42	〃	14.8 (6.4) —— ——	ゆるやかに外反する口頸部である。口唇部に1条のヘラ描沈線を施し、頸部には５条の太いヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部はナデ調整である。	
430	〃	甕	—— (5.8) —— 8.1	平底の底部である。	両面共にナデで仕上げる。	
431	〃	〃	—— (4.4) —— 9.0	〃	〃	
432	ＳＫ40	壺	—— (17.9) —— ——	やや斜行する頸部に続く胴部は卵倒型を呈す。頸部に４条、上胴部に７条のヘラ描沈線が施される。	外面はハケ調整のあとにナデを施し、横方向のヘラ磨きで仕上げる。内面はナデ調整で仕上げる。	
433	〃	〃	12.3 (7.2) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。上胴部内面は器表面が磨耗する。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
434	ＳＫ40	壺	—— (4.9) —— 8.2	底部は上げ底を呈し胴もやや張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
435	〃	〃	—— (2.6) —— 8.8	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
436	〃	〃	—— (4.4) —— 7.2	平底の底部であるが、わずかにくぼんでいる。	〃	
437	〃	〃	—— (6.6) —— 7.9	平底の底部で胴部はやや張り出す。	〃	
438	ＳＫ41	甕	—— (13.8) —— 3.2	口縁部は如意形に外反するが胴の張りは弱い。底部は小さな平底であるが器壁は厚い。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面は縦方向の指ナデで仕上げる。	Ｐ４出土。 下胴部外面に大きな黒斑がある。
439	〃	壺	—— (2.8) —— 4.5	平底の小さな底部である。	両面共にナデで仕上げる。	甕底部かもしれない。
440	〃	〃	—— (2.8) —— 8.1	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	Ｐ４出土。
441	〃	〃	—— (3.1) —— 9.8	平底の底部で器壁はかなり厚い。	〃	〃
442	〃	〃	—— (5.0) —— 4.2	小さな底部であり、中央に向かってわずかにくぼんでいる。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明であるが、内面はナデで仕上げる。	小型土器の底部である。下胴部内面に輪積み成形痕が残る。 Ｐ４出土。
443	〃	〃	—— (4.8) —— 8.6	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	薄手の壺底部か？ Ｐ４出土。
444	〃	〃	—— (5.1) —— 6.6	〃	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデ調整で仕上げる。	Ｐ４出土。
445	ＳＫ43	甕	23.3 (5.9) —— ——	如意形に外反する口縁部は短い。胴の張りも弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に４条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。上胴部内面は磨耗し、調整は不明である。	
446	〃	壺	—— (3.4) —— 7.5	平底であるが中央に向かってややくぼんでいる。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面はナデである。	
447	〃	〃	—— (6.7) —— 7.8	平底の底部で胴はやや張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に黒斑がある。
448	ＳＫ6	甕	—— (5.5) —— 6.8	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に煤状炭化物が付着する。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
449	ＳＫ６	甕	—— (5.6) —— 7.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	両面共にナデで仕上げる。	
450	〃	壺	—— (7.4) —— 8.1	〃	両面共に器表面が磨耗し、調整は不明である。	
451	ＳＫ11	〃	15.4 (10.5) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部には７条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデ、内面はナデで仕上げる。	
452	〃	〃	18.0 (3.6) —— ——	直立気味に外反する口縁部で２条の微隆起帯がある。	口縁部外面はヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
453	〃	〃	12.6 (2.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	両面共にヨコナデで仕上げる。	細頸壺か？
454	ＳＫ21	甕	17.5 (5.5) —— ——	頸部はくの字状にゆるく屈折する。口縁端部が上方に跳び上がる跳び上がり口縁である。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部はナデである。	
455	〃	〃	—— (18.4) —— ——	胴の張りが弱い長胴の甕である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
456	ＳＫ30	〃	—— (3.2) —— 9.0	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
457	〃	高杯	—— (10.0) —— ——	中空の脚部は細長くのびる。	両面共にナデ調整である。柱状部上端の内面には絞り目が残る。	
458	ＳＫ27	壺	16.9 (28.0) 28.8 ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。胴部は卵形を呈す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとに粗いナデで仕上げ、内面は縦方向の指ナデで仕上げる。	底面出土。
459	〃	〃	—— (10.4) —— ——	球形の上胴部である。上胴部外面にヘラ描の羽状文が施される。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ削りである。	〃
460	〃	甕	14.8 22.4 18.0 6.0	平底のやや小さな底部である。	口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部外面はハケ調整のあとに丁寧なナデで仕上げ、内面は縦方向のヘラ削りで仕上げる。	上胴部内外面に黒斑がある。
461	〃	〃	—— (3.5) —— 5.8	平底の小さな底部で器壁は薄い。	外面は丁寧なナデ調整で仕上げ、粗いヘラ磨きを施す。内面はナデ調整である。	底面出土。
462	〃	〃	—— (3.9) —— 6.1	平底のやや小さな底部である。	両面共にナデで仕上げる。	〃
463	〃	壺	—— (8.3) —— 8.7	平底の底部で胴はやや張り出す。	器表面の磨耗が著しく、調整は不明である。	〃

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
464	ＳＤ５	壺	14.8 (3.7) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
465	〃	〃	12.1 (5.0) —— ——	ほぼ直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	
466	〃	〃	12.6 (4.0) — —	口縁部はゆるやかに外反する。口縁部外面には縦方向のヘラ描沈線がみられる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
467	〃	〃	16.6 (4.5) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
468	〃	〃	23.0 (3.2) —— ——	〃	〃	広口壺か？
469	〃	〃	10.8 (4.5) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に3条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	細頸壺か？
470	〃	〃	11.9 (5.3) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に３条のヘラ描沈線がある。	口縁部は丁寧なヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデで仕上げる。	やや小型の壺か？
471	〃	〃	13.4 (4.7) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
472	〃	〃	17.4 (9.4) —— ——	ほぼ直立する頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。頸部に６条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
473	〃	〃	12.9 (7.0) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反し短い。頸部には４条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は縦方向の指ナデである。	
474	〃	〃	18.0 (8.6) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に５条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面は縦方向の指ナデで仕上げる。	
475	〃	〃	14.9 (13.4) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はわずかに外反する。頸部に４条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部は両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
476	〃	〃	25.9 (6.7) —— ——	ほぼ直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部には４条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	広口壺である。
477	〃	〃	14.2 (3.8) —— ——	頸部には1条のヘラ描沈線がある。口縁部はゆるく外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。	
478	〃	〃	11.9 (6.4) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部には8条のヘラ描沈線と２条の貼付突帯がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	細頸壺である。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
479	ＳＤ５	壺	—— (10.6) —— ——	ほぼ直立気味の頸部に続く胴部は張りが弱い。頸部には２条の太いヘラ描沈線がある。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
480	〃	〃	—— (5.1) —— 7.2	底面の周辺部がわずかにくぼんでいる。	両面共に丁寧なナデ調整で仕上げる。	
481	〃	〃	—— (8.1) —— 6.3	平底の底部に続く下胴部は張りが強く、球形を呈す。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
482	〃	〃	—— (6.8) —— 8.7	平底の底部である。	両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
483	〃	甕	20.8 (10.5) 25.2 ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口唇部に刻目を施し、頸部に１条のヘラ描沈線を入れる。口径より胴部最大径が大きい。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
484	〃	〃	22.7 (6.0) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。口唇部に刻目を施し、頸部に４条のヘラ描沈線がある。口径は胴部最大径より大きい。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
485	〃	〃	20.5 (4.5) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部は張りが弱い。口唇部にヘラ状原体による刻目を入れ、頸部に１条のヘラ描沈線を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
486	〃	〃	23.1 (4.2) —— ——	口縁部は如意形に外反する。上胴部に３条の篦描沈線がある。口唇部にヘラ状原体による刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
487	〃	〃	19.6 (15.3) 20.8 ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口唇部に１条のヘラ描沈線を入れ、下端に刻目を入れる。口径より胴部最大径が大きい。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにナデである。	上胴部に10条のヘラ描沈線が施され、その下端にヘラ状原体による刻目を入れる。
488	〃	〃	22.5 (5.3) —— ——	口縁部は如意形にゆるく外反する。口唇部にヘラ状原体による刻目を入れ、上胴部に２条のヘラ描沈線を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口縁部内面に黒斑がある。
489	〃	〃	27.1 (7.8) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕で、胴の張りは弱い。口唇部に刻目を施し、上胴部に８条のヘラ描沈線を入れる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
490	〃	〃	—— (3.5) —— 6.8	平底の底部で胴の張りは弱い。	器表面は磨耗し、調整は不明である。	
491	〃	〃	—— (2.1) —— 7.1	底部の中央はわずかにくぼんでいる。	両面共にナデ調整で仕上げる。	薄手の壺底部かもしれない。
492	〃	〃	—— (3.5) —— 6.9	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
493	〃	〃	—— (2.8) —— 7.1	〃	両面共にナデで仕上げる。	底部外面に大きな黒斑がある。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
494	ＳＤ５	甕	—— (4.5) —— 7.3	平底の底部である。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
495	〃	〃	—— (3.8) —— 9.0	底部は上げ底気味である。	両面共にナデで仕上げる。	
496	〃	蓋	—— (7.5) —— 5.0	傘形の蓋である。	両面共に丁寧なナデで仕上げる。	頂部外面に小さな黒斑がある。
497	〃	〃	22.7 8.7 —— 5.6	傘形の蓋で頂部外面は中央に向かってくぼんでいる。	両面共にハケ調整のあとに丁寧なヨコナデで仕上げる。	
498	ＳＤ６	壺	15.4 (3.7) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はヨコナデのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
499	〃	〃	17.8 (3.3) —— ——	口縁部は鋭く外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
500	〃	〃	14.0 (5.2) —— ——	口縁部は外反するが短い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
501	〃	〃	—— (5.0) —— 10.3	平底の底部に続く胴部はかなり強く張り出す。	両面共にナデで仕上げる。	底部外面に糸痕がある。
502	〃	〃	—— (6.2) —— 6.9	平底の底部である。	〃	甕底部かもしれない。
503	〃	〃	—— (4.1) —— 9.0	平底の底部に続く胴部はやや張り出す。	〃	
504	〃	〃	—— (4.0) —— 9.2	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	下胴部外面に小さな黒斑がある。
505	〃	〃	—— (4.3) —— 11.5	平底の安定した底部である。	外面にはハケ調整の痕跡が残る。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
506	〃	〃	—— (9.0) —— 8.5	平底の底部に続く胴部はやや張り出す。	外面はハケ調整のあとに縦方向のヘラ磨きで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	外面に大きな黒斑がある。
507	〃	〃	—— (6.1) —— 5.2	平底の小さな底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
508	ＳＤ７	〃	16.9 (4.4) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
509	ＳＤ７	壺	14.0 (3.5) —— ——	口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。口縁部内面はヨコナデで仕上げる。	
510	〃	〃	14.9 (6.1) —— ——	口縁部はかなり鋭く外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
511	〃	〃	14.9 (5.4) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデを施し、ヘラ磨きで仕上げる。	頸部と上胴部との境にはやや幅広の断面台形の突帯が貼付される。
512	〃	〃	15.5 (2.9) —— ——	わずかに外反する口縁部内面には断面三角形気味の突帯が貼付される。	両面共にヨコナデで仕上げる。	
513	〃	〃	14.8 (3.8) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	〃	
514	〃	〃	15.3 (3.4) —— ——	〃	外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。	
515	〃	〃	—— (10.0) —— ——	筒状のやや細長い頸部に続く胴部は張りが弱い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
516	〃	〃	17.6 (8.3) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ磨きで仕上げる。頸部は両面共に横方向のヘラ磨きで仕上げる。	
517	〃	〃	—— (14.8) —— ——	胴はかなり強く張り出す。	胴部外面はタテハケのあとに横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	
518	〃	〃	15.3 (5.0) —— ——	口縁部はラッパ状になめらかに外反する。頸部には4条のヘラ描沈線が認められる。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部はナデで仕上げる。	
519	〃	〃	16.6 (5.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はなめらかに外反する。頸部に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
520	〃	〃	11.8 (5.1) —— ——	直立気味の短い頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部下端に１条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
521	〃	〃	14.8 (6.0) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部に４条のヘラ描沈線が施される。	外面はナデで仕上げるが、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
522	〃	〃	—— (8.2) —— ——	斜行する頸部に続く上胴部は強く張り出す。頸部に6条のヘラ描沈線がある。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
523	〃	〃	14.6 (11.6) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。上胴部はかなり強く張り出す。頸部には4条のヘラ描沈線がある。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部以下の外面はハケのあとにナデ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
524	ＳＤ７	壺	15.2 (5.3) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部には4条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
525	〃	〃	11.2 (3.2) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部にヘラ描沈線を施し、沈線間にヘラ状原体による刻目を施す。	口縁部外面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	細頸壺か。
526	〃	〃	—— (7.8) —— ——	やや斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。胴部もやや強く張り出す。頸部に6条のヘラ描沈線が施される。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
527	〃	〃	—— (5.1) —— ——	直立気味の頸部に続く胴部はやや張り出す。頸部に3条のヘラ描沈線がある。	上胴部外面は横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
528	〃	〃	16.6 (10.5) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部には4条のヘラ描沈線が施される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。頸部以下の外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
529	〃	〃	—— (5.2) —— ——	斜行する頸部には6条のヘラ描沈線が施される。	頸部外面はタテハケのあとに横方向のナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとに縦方向のナデで仕上げる。	
530	〃	〃	— (4.4) —— ——	斜行する頸部下端には３本以上のヘラ描沈線が施される。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
531	〃	〃	20.0 (3.4) —— ——	口縁部はゆるやかに外反する。口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。	口縁部外面は右下がり方向のハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
532	〃	〃	22.0 (4.2) —— ——	口縁部はなめらかに鋭く外反する。頸部には４条のヘラ描沈線が施される。口唇部に１条のヘラ描沈線を施し、刻目を入れる。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。	
533	〃	〃	15.0 (6.9) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。頸部下端に断面台形の突帯が貼付される。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
534	〃	〃	17.2 (7.0) —— ——	直立気味の頸部に続く口縁部はゆるやかに外反する。頸部下端には断面三角形の突帯を貼付する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げる。頸部外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗する。	
535	〃	〃	16.0 (11.8) —— ——	わずかに斜行する頸部に続く口縁部はゆるく外反する。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、横方向のヘラ磨きを加える。口縁部内面はヨコナデのあとにヘラ磨きを加える。頸部外面はタテハケのあとにナデを施し、ヘラ磨きで仕上げる。	底面出土。
536	〃	〃	—— (6.2) —— ——	ゆるく外反する頸部には断面台形の突帯が貼付される。	頸部外面はタテハケのあとにナデで仕上げる。頸部内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
537	〃	〃	13.0 (5.4) —— ——	斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に断面台形の幅広の突帯を貼付する。	口縁部外面は横方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。頸部外面もヘラ磨きで仕上げ、内面はナデである。	貼付突帯上に３条のヘラ描沈線を施し、沈線間にヘラ描列点文を入れる。
538	〃	〃	—— (9.9) 23.6 ——	やや長胴の胴部である。上胴部外面には、ヘラ描の文様が施される。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
539	ＳＤ７	壺	—— (9.8) 23.4 ——	細長い頸部に続く胴部は球形に近い形を呈す。上胴部に断面三角形の突帯２条が貼付される。	胴部外面は右下がり方向のハケ調整のあとにナデを施し、横方向のヘラ磨きで仕上げる。胴部内面は縦方向の指ナデで仕上げる。	
540	〃	〃	—— (6.0) —— 11.6	平底の底部である。	両面共に丁寧なナデ調整のあとにヘラ磨きを施す。	
541	〃	〃	—— (5.0) —— 10.6	安定した平底の底部で胴の張り出しは強い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
542	〃	〃	—— (7.6) —— 8.0	平底の底部である。	〃	下胴部外面に小さな黒斑がある。
543	〃	〃	—— (12.7) —— 8.9	平底の底部に続く胴部の張りは弱い。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底面出土。
544	〃	〃	—— (8.7) —— 9.7	平底の底部に続く胴部は強く張り出す。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に黒斑がある。
545	〃	〃	—— (9.4) —— 8.3	平底の底部であるが器壁は薄い。	〃	褒底部かもしれない。
546	〃	〃	—— (8.7) —— 9.4	平底の底部で胴はかなり強く張り出す。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
547	〃	〃	—— (20.4) —— 9.5	平底の底部に続く胴部はやや張り出すが長胴である。	両面共にハケ調整のあとに丁寧なナデで仕上げる。	底面出土。
548	〃	〃	—— (4.2) —— 11.2	平底の安定した底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
549	〃	〃	—— (5.1) —— 8.2	平底の底部で胴の張りは弱い。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
550	〃	〃	—— (3.6) —— 9.2	底部はしゃくれた平底である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
551	〃	〃	—— (4.8) —— 8.2	平底の底部で胴がやや張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデを施し、入念なヘラ磨きで仕上げる。内面はナデで仕上げる。	底部外面に糸痕が残る。
552	〃	〃	—— (5.3) —— 7.0	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面は磨耗し、調整は不明である。	
553	〃	〃	—— (4.4) —— 6.5	平底の底部で胴部はやや強く張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
554	ＳＤ７	壺	―― (4.9) ―― 7.5	平底の底部で器壁はかなり厚く、胴もやや張る。	外面はタテハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
555	〃	〃	―― (4.8) ―― 8.0	平底の底部で器壁は厚い。胴部もやや張り出す。	〃	
556	〃	〃	―― (6.0) ―― 8.8	底部は平底で器壁は厚い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
557	〃	〃	―― (6.3) ―― 8.0	底部はわずかに上げ底気味である。	〃	
558	〃	〃	―― (6.2) ―― 10.0	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
559	〃	〃	―― (5.5) ―― 8.2	平底の底部で器壁はやや厚い。	〃	
560	〃	〃	―― (6.7) ―― 10.4	平底であるが器壁はやや薄い。	〃	甕の底部かもしれない。
561	〃	〃	―― (6.7) ―― 5.3	やや不安定な平底の底部である。胴部の張り出しは強い。	〃	
562	〃	〃	―― (5.1) ―― 7.0	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
563	〃	〃	―― (6.1) ―― 6.4	平底の底部であるが中央部がわずかにくぼんでいる。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
564	〃	〃	―― (7.1) ―― 9.2	平底の底部である。	〃	
565	〃	〃	―― (7.0) ―― 7.4	平底の底部で器壁は厚い。胴部の張りは弱い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	甕の底部かもしれない。
566	〃	〃	―― (5.2) ―― 9.5	平底の底部である。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデ調整で仕上げる。	
567	〃	〃	―― (6.0) ―― 9.5	平底の底部で器壁はかなり厚い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
568	〃	〃	―― (4.9) ―― 9.0	平底の底部で胴部はやや張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
569	ＳＤ７	壺	―― (8.4) ―― 8.6	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
570	〃	〃	―― (7.4) ―― 10.0	平底の底部で胴部はやや張り出す。	〃	
571	〃	〃	―― (5.6) ―― 8.7	平底であるが、中央部に向かってややくぼんでいる。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
572	〃	〃	―― (7.1) ―― 7.7	平底の底部で器壁はかなり厚い。	外面は縦方向のハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
573	〃	〃	―― (9.4) ―― 8.0	底部はわずかに上げ底気味である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
574	〃	〃	―― (2.4) ―― 4.6	底部は平底で、かなりしゃくれている。	両面共にナデ調整で仕上げる。	小型の壺底部か？
575	〃	〃	―― (3.1) ―― 7.4	底部は平底であるが、ややくぼんでおり、器壁もかなり厚い。胴も強く張る。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
576	〃	〃	―― (4.2) ―― 6.6	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	甕底部かもしれない。
577	〃	〃	―― (3.6) ―― 7.4	〃	器表面が磨耗し、調整は不明である。	底部の中央部には焼成後の穿孔がある。
578	〃	〃	―― (3.4) ―― 8.9	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	両面共に器表面の磨耗が著しい。
579	〃	〃	―― (4.7) ―― 5.6	平底の底部で器壁は厚い。	〃	
580	〃	〃	―― (4.8) ―― 6.5	〃	〃	
581	〃	〃	―― (3.8) ―― 6.5	平底の底部である。	両面共にナデ調整で仕上げる。	
582	〃	〃	―― (4.9) ―― 6.5	平底の底部で器壁はかなり厚い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
583	〃	〃	―― (3.9) ―― 7.4	平底の底部である。	〃	甕底部かもしれない。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
584	ＳＤ７	壺	―― (3.5) ―― 5.8	平底の底部であるが、胴部はやや張り出す。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
585	〃	〃	―― (4.6) ―― 6.6	やや上げ底の底部か？	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
586	〃	〃	―― (3.7) ―― 6.6	平底の底部である。	〃	
587	〃	〃	―― (4.1) ―― 9.4	底部はわずかに上げ底気味である。	両面共にナデで仕上げる。	
588	〃	〃	―― (5.0) ―― 6.6	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	甕底部かもしれない。
589	〃	〃	―― (4.8) ―― 8.0	〃	外面はハケ調整のあとにナデを施し、粗いヘラ磨きを加える。内面はナデ調整である。	外面に黒斑がある。
590	〃	〃	―― (4.2) ―― 7.4	平底の底部で胴はやや張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	底部外面に黒斑がある。
591	〃	〃	―― (4.0) ―― 8.4	平底の底部に続く胴部はやや張り出す。	両面共にナデで仕上げる。	
592	〃	〃	―― (3.8) ―― 8.3	平底の底部に続く胴部はかなり強く張り出す。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
593	〃	〃	―― (3.6) ―― 9.1	平底の底部である。	器表面の剝落が著しく、調整は不明である。	
594	〃	〃	―― (5.2) ―― 7.6	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	甕底部かもしれない。
595	〃	〃	―― (7.0) ―― 9.4	やや上げ底気味の底部か。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
596	〃	〃	―― (5.9) ―― 6.6	やや上げ底の底部で器壁はかなり厚い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	甕底部かもしれない。
597	〃	〃	―― (5.0) ―― 7.5	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデを施し、粗いヘラ磨きを加える。内面はナデで仕上げる。	
598	〃	〃	―― (7.0) ―― 8.7	平底の底部で器壁はかなり厚い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
599	ＳＤ７	壺	—— (5.6) —— 8.1	底部はわずかに上げ底気味である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
600	〃	〃	—— (4.9) —— 8.4	平底の底部である。	両面共にナデで仕上げる。	
601	〃	〃	—— (8.2) —— 7.6	〃	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	下胴部外面に小さな黒斑がある。底面出土。
602	〃	〃	—— (5.1) —— 9.3	平底の底部であるが、ややくぼんでいる。	外面は縦方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	底面出土。
603	〃	〃	—— (6.0) —— 7.5	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、横方向の粗いヘラ磨きを加える。内面はナデである。	
604	〃	〃	—— (6.2) —— 8.4	平底の底部で胴の張りは強い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
605	〃	〃	—— (3.9) —— 8.5	やや上げ底気味の底部で胴の張りは強い。	〃	
606	〃	甕	19.5 (6.0) —— ——	口縁部は如意形に外反するが、胴の張りは弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げる。	両面共に器表面が磨耗する。
607	〃	〃	22.2 (6.9) —— ——	如意形に外反する口縁部に続く上胴部は張りが弱い。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
608	〃	〃	24.6 (9.5) 23.6 ——	如意形に外反する口縁部に続く上胴部はやや張り出す。口径は胴部最大径より大きい。口頸部に４条のヘラ描沈線がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	上胴部外面に小さな黒斑がある。
609	〃	〃	17.9 (5.9) 18.1 ——	如意形に外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口径は胴部最大径とほぼ同じ。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部には２条のヘラ描沈線がある。
610	〃	〃	37.4 (6.6) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口頸部に１条のヘラ描沈線が施される。口径より胴部最大径が大きい。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。上胴部内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	大型の甕である。
611	〃	〃	17.5 (4.4) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。上胴部には４条のヘラ描沈線が施される。	両面共に器表面が磨耗し、調整は不明である。	
612	〃	〃	19.2 (5.7) —— ——	口縁部は如意形に鋭く外反する。口頸部には３条のヘラ描沈線が施される。口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部は両面共にナデ調整で仕上げる。	
613	〃	〃	17.7 (5.7) —— ——	口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。頸部には１条の太いヘラ描沈線が施される。口縁部はくの字状に鋭く外反する。口径より胴部最大径が大きい。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	上胴部内面は縦方向の指ナデで仕上げる。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
614	ＳＤ７	甕	23.1 (6.3) —— ——	口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。上胴部には２条のヘラ描沈線がある。口縁部は如意形に外反する。口径は胴部最大径より大きい。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
615	〃	〃	20.0 (11.3) 21.8 ——	口唇部にはヘラ状原体による刻目が入る。如意形に外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口径より胴部最大径が大きい。	〃	上胴部に３条のヘラ描沈線がある。
616	〃	〃	25.0 (5.8) —— ——	口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。如意形に外反する口縁部に続く胴部はやや張り出す。口径より胴部最大径が大きい。	〃	
617	〃	〃	29.2 (5.3) —— ——	口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。口頸部には３条のやや太いヘラ描沈線が施される。口縁部は如意形に外反する。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	やや大型の甕である。上胴部外面に黒斑がある。
618	〃	〃	20.6 (18.2) —— ——	如意形に鋭く外反する口縁部で胴が張る。口唇部に刻目をめぐらし、上胴部に３条のヘラ描沈線を施す。	口縁部外面はタテハケのあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコハケのあとにヨコナデで仕上げる。胴部外面はヨコハケのあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	口径より胴部最大径が大きい。底面出土。
619	〃	〃	19.0 (3.7) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕である。上胴部に２条のヘラ描沈線が施される。口径より胴部最大径が大きい。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。	
620	〃	〃	17.4 (3.2) —— ——	逆Ｌ字状口縁の甕である。口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。上胴部には４条のヘラ沈線を施したあとに刻目を施す。	〃	口径より胴部最大径が大きい。
621	〃	〃	—— (2.6) —— 6.6	平底のやや小さな底部である。	外面はハケ調整で仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
622	〃	〃	—— (2.7) —— 5.4	平底の小さな底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
623	〃	〃	—— (2.6) —— 7.0	平底の底部である。	〃	
624	〃	〃	—— (2.6) —— 6.8	〃	〃	
625	〃	〃	—— (4.0) —— 9.0	〃	〃	
626	〃	〃	—— (3.1) —— 9.8	やや上げ底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
627	〃	〃	— (4.1) —— 7.8	平底の底部である。	外面は器表面が磨耗し、調整は不明である。内面はナデで仕上げる。	
628	〃	〃	—— (5.0) —— 7.8	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
629	ＳＤ７	甕	－ (2.9) － 6.0	平底のやや小さな底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
630	〃	〃	－ (2.2) － 3.2	平底の小さな底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	小型土器の底部か。?
631	〃	〃	－ (2.3) － 4.8	平底のやや小さな底部である。	両面共にナデで仕上げる。	
632	〃	〃	－ (2.5) － 6.2	上げ底の底部である。	両面共に丁寧なナデで仕上げる。	
633	〃	〃	－ (2.4) － 7.7	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
634	〃	〃	－ (3.7) － 6.6	平底のやや小さな底部である。	外面はハケ調整のあとに丁寧なナデで仕上げ、内面はナデである。	
635	〃	〃	－ (2.7) － 8.2	平底の底部である	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面に黒斑がある。
636	〃	〃	－ (2.5) － 7.0	〃	〃	底部外面に糸痕がある。
637	〃	〃	－ (3.6) － 6.5	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
638	〃	〃	－ (3.0) － 7.2	〃	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
639	〃	〃	－ (3.4) － 5.6	やや小さな平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
640	〃	〃	－ (3.2) － 7.1	底部はやや上げ底気味である。	〃	
641	〃	〃	－ (3.6) － 5.6	平底のやや小さな底部である。	外面はハケ調整のあとに丁寧なナデで仕上げる。内面は剝落し、調整は不明である。	
642	〃	〃	－ (3.6) － 7.0	平底の底部である。	〃	
643	〃	〃	－ (3.3) － 7.7	〃	両面共に器表面が磨耗し、調整は不明である。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
644	ＳＤ７	甕	— (4.6) — 6.6	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
645	〃	〃	— (4.0) — 7.1	〃	〃	
646	〃	〃	— (5.3) — 6.3	〃	〃	
647	〃	〃	— (4.4) — 7.2	〃	外面は器表面の磨耗が著しく、調整は不明である。内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
648	〃	〃	— (4.5) — 6.6	〃	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
649	〃	〃	— (4.6) — 7.1	〃	〃	
650	〃	〃	— (4.1) — 8.0	平底のややしゃくれた底部で器壁は薄い。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
651	〃	〃	— (5.2) — 6.4	下胴部外面に小さな黒斑がある。底部は平底である。	外面にはハケ調整の痕跡が残るが、内面は磨耗し不明である。	
652	〃	〃	— (5.7) — 7.4	平底のややしゃくれた底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
653	〃	〃	— (5.7) — 8.8	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げる。	焼成は良好。
654	〃	〃	— (6.8) — 7.7	平底の底部で外面に黒斑がある。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
655	〃	〃	— (9.5) — 9.0	平底で胴の張りは弱い。	両面共にナデで仕上げる。	
656	〃	〃	— (10.0) — 8.0	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデ調整である。	
657	〃	〃	— (10.1) — 7.5	平底で胴の張りは弱い。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
658	〃	〃	— (7.5) — 7.6	平底の底部である。	外面はハケ調整で内面はナデである。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
659	ＳＤ７	鉢	18.2 (5.6) — —	如意形に外反する口縁で胴の張りは弱い。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面は横方向のヘラ磨きである。	口縁部内面に小さな黒斑がある。
660	〃	〃	15.8 (8.2) — —	口縁部は如意形に鋭く外反する。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデである。上胴部外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデである。	
661	〃	〃	28.4 (12.7) — —	かなり大型の鉢で、口縁部は如意形に外反する。	下胴部外面はヘラ磨きで仕上げる。両面共に磨耗が著しい。	上胴部外面に黒斑がある。底面出土。
662	〃	蓋	— (4.5) — 6.9	傘形を呈した蓋の頂部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	頂部外面に黒斑がある。
663	〃	〃	— (5.5) — 4.4	傘形を呈した蓋で頂部からやや内湾気味に体部へと続く。	外面は器表面が剝落し、調整は不明である。内面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	体部内面に黒斑がある。
664	〃	〃	23.6 (3.4) — —	傘形の蓋の端部付近である。	両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	端部に小さな黒斑がある。底面出土。
665	〃	〃	— (6.9) — 6.8	傘形の蓋で、頂部から外反する体部へと続く。	〃	頂部外面に黒斑がある。
666	〃	〃	— (7.2) — 6.8	傘形の蓋である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	
667	〃	〃	22.0 9.3 — 6.0	〃	両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	頂部外面に小さな黒斑がある。 底面出土。
668	〃	〃	— (3.9) — 6.2	〃	両面共にナデ調整である。	焼成は良好である。
669	〃	〃	23.8 (7.1) — —	倒鐘形の蓋である。	両面共にハケ調整のあとにナデで仕上げる。	〃
670	〃	小型土器	— (7.4) 9.2 —	小型の壺の胴部である。	外面はハケ調整のあとにナデを施し、粗いヘラ磨きを加える。内面はナデである。	上胴部内面に輪積み成形痕が残る。
671	〃	〃	— (6.9) — 6.3	やや小型の壺底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデである。	下胴部外面にかなり大きな黒斑がある。
672	Ｐ10	壺	13.4 (4.0) — —	口縁部は鋭く外反する。	両面共に器表面が剝落し、調整は不明である。	
673	Ｐ３	〃	17.2 (7.8) — —	頸部には9条のヘラ描沈線が施される。やや発達した口縁部は外反し、かなり張りのある胴部へと続く。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げ、内面はヨコナデで仕上げる。頸部以下の外面はハケ調整のあとにナデで、内面はナデ。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
674	P 3	壺	17.0 (7.3) — —	口縁部内面には断面三角形の突帯を貼付し、注ぎ口を形成する。頸部外面はヘラ描沈線間に円形の竹管文を施す。	口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	口縁部内面にも円形の竹管文がめぐらされている。
675	P 2	〃	9.4 (3.9) — —	わずかに斜行する頸部に続く口縁部は鋭く外反する。頸部に2条のヘラ描沈線が残る。	口縁部外面はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。口縁部内面はヨコナデで仕上げる。	やや小型の壺である。
676	P 3	〃	— (5.5) — 8.7	胴がかなり張りだす平底の底部である。	外面はハケ調整で内面はナデで仕上げる。	
677	P 6	〃	— (10.0) — 7.3	平底の底部である。	外面にはハケ調整の痕跡が残る。内面は横方向のヘラ磨きで入念に仕上げる。	
678	P 5	〃	— (6.6) — 7.0	かなりしゃくれた平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	
679	P 8	甕	19.7 (5.5) — —	口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。口頸部には4条のヘラ描沈線が施される。口縁部は如意形に外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げる。上胴部外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。	
680	P 1	〃	26.3 (3.6) — —	口縁部は如意形に外反する。口唇部にはヘラ状原体による刻目がある。口頸部にはかなり太いヘラ描沈線がある。	口縁部はハケ調整のあとにヨコナデで仕上げる。	
681	P 8	〃	— (3.9) — 8.4	平底の底部である。	外面はハケ調整のあとにナデで仕上げる。内面は器表面が磨耗し、調整は不明である。	
682	P 9	〃	— (3.2) — 6.5	底部は小さな平底である。	外面はハケ調整のあとに粗いナデで仕上げ、内面はナデで仕上げる。	
683	P 4	壺	— (4.1) — 8.0	平底の底部である。	器表面が磨耗し、調整は不明である。	淡乳褐色を呈した薄手の壺底部である。
684	P 7	高杯	— (6.6) — —	充実した柱状部である。	両面共にナデで仕上げる。	

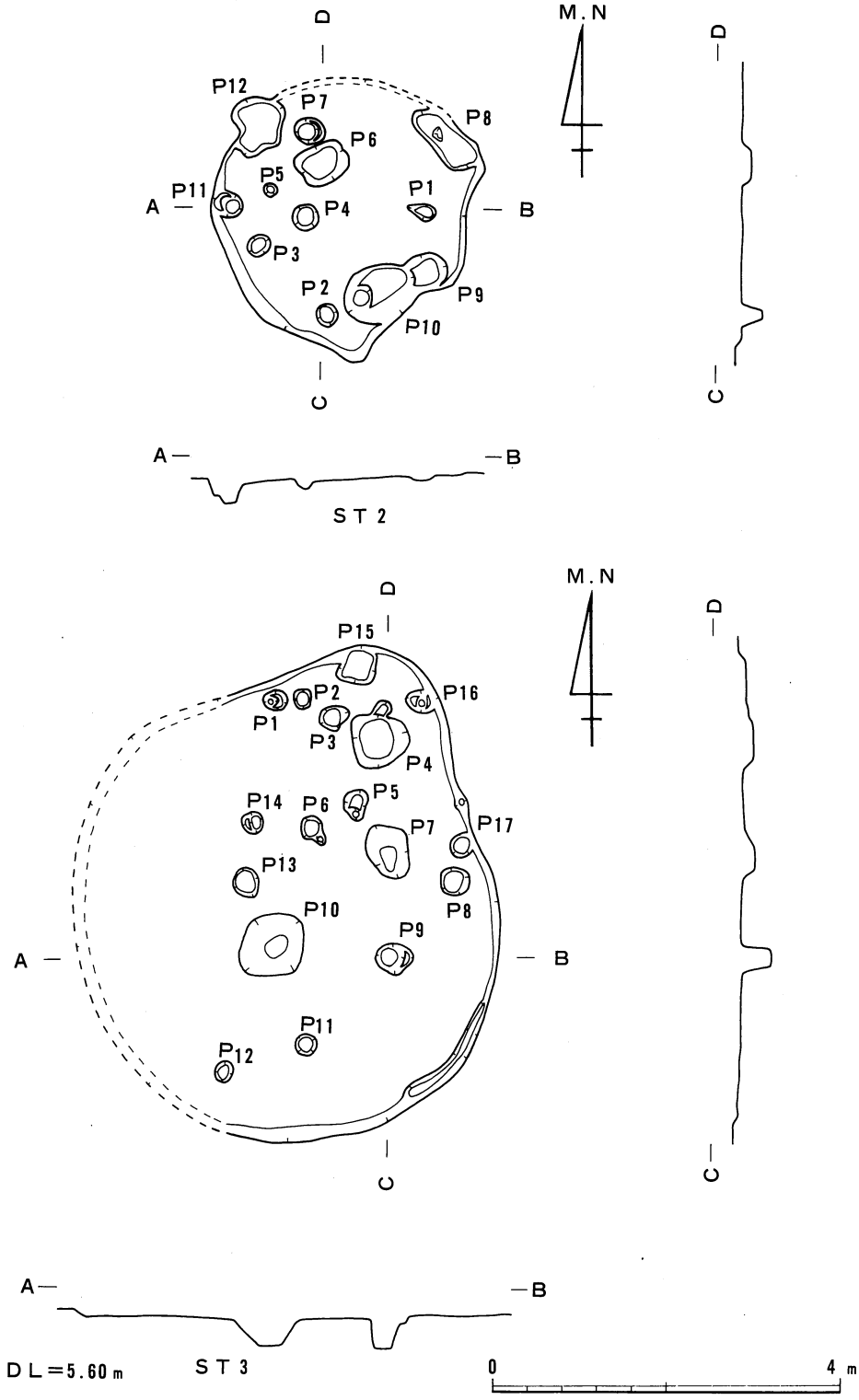
第29表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
685	ＳＴ４	石斧	(14.8) 6.6 (2.2) 366.0	凝灰岩質 緑色岩	太型蛤刃石斧で裏面の半分が欠損する。表面には製作時に生じた擦痕が残る。	
686	ＳＴ６	〃	(11.6) 7.2 4.1 625.0	〃	太型蛤刃石斧の刃部が欠損したあとに叩石に転用している。両面に製作時に生じた擦痕が残る。両面と両側辺部に明瞭な敲打痕が残る。	
687	ＳＤ７	〃	(2.3) (4.6) (0.7) 10.7	緑色岩	太型蛤刃石斧の小さな破片である。表面に擦痕が残る。	
688	ＳＫ13	〃	(4.2) (3.7) (0.5) 10.2	〃	扁平片刃石斧の小破片である。表面及び側面に明瞭な研磨痕が残る。	
689	ＳＫ９	〃	9.5 (1.4) 2.4 41.2	砂　岩	柱状片刃石斧であるが、半分ほどが欠損する。表面、裏面、左側面に擦痕が残る。刃部の先端部がやや磨滅する。	
690	ＳＴ４	〃	(5.1) 2.3 (2.8) 44.5	千枚岩	柱状片刃石斧の刃部で表面が欠損する。刃部の先端部は磨滅している。	
691	ＳＴ６	〃	(7.2) (3.8) 1.3 54.4	頁　岩	扁平片刃石斧で刃部と左側辺部が欠損する。表面と裏面と右側面に擦痕が残る。	
692	ＳＤ７	〃	(9.7) (5.8) (2.1) 149.8	蛇紋岩	環状石斧の未製品である。表面の中央部は明瞭な敲打痕が残り、ややくぼんでいる。	
693	〃	〃	11.2 5.0 1.1 80.0	千枚岩	局部磨製石斧で完形である。表面に横方向の擦痕が残る。刃部は両面に擦痕がある。両側辺部に両面から打撃を加え、調整を施している。	縦方向に長い長楕円形を呈す。 完形である。
694	ＳＴ４	〃	12.3 6.0 1.1 106.6	砂質片岩	ばち形を呈した打製石斧である。刃部を両面から打撃を加え、つくり出しているが、やや磨滅する。	完形である。
695	ＳＤ７	〃	9.2 2.9 0.7 25.4	千枚岩	縦方向に細長い小型の局部磨製石斧である。両側辺部を両面から打撃し、調整を施す。表面は自然面であるが裏面は全て剝離面である。	刃部に擦痕が残る。 完形である。
696	ＳＫ39	叩石	8.3 10.8 2.8 330.0	砂　岩	両面共にやや磨耗し、もろい。表面と裏面及び周縁部に敲打痕が認められるが、周縁部は特に顕著である。	完形。
697	ＳＫ19	〃	15.7 5.5 3.0 375.0	〃	先端部が敲打部であり、不整方形を呈し、５面に顕著な敲打痕が残る。基部は柄の部分で擦痕が残る箇所がある。	〃
698	ＳＫ13	〃	15.2 8.8 5.2 1185.0	凝灰岩質 緑色岩	両面共に自然面を残す。表面及び側面に敲打痕が残る。	〃
699	ＳＤ７	〃	10.4 10.3 5.0 910.0	石英質 緑色岩	円形を呈したやや厚い叩石であり表裏両面に明瞭な敲打痕が残る。また、周縁部にも明瞭な敲打痕がある。	〃

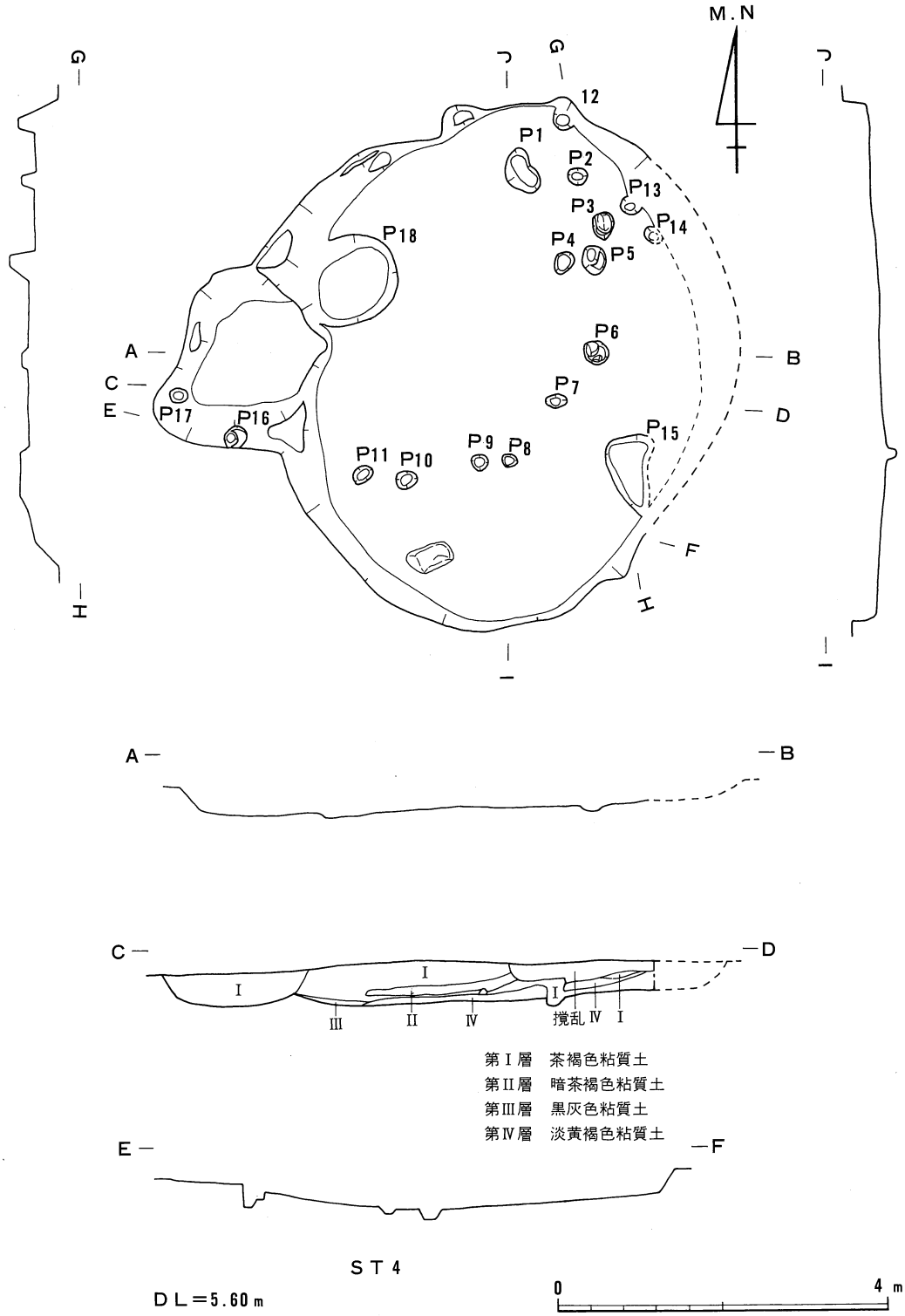
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
700	ＳＫ43	叩石	12.1 9.6 4.4 760.0	砂　岩	表裏両面の中央部付近と周縁部の全面に顕著な敲打痕が認められる。	完形。
701	ＳＴ２	〃	11.5 9.8 2.1 303.0	〃	楕円形の扁平叩石である。表面は縁辺部の小剝離面を残す他は自然の礫皮面である。裏面は主剝離面である。完形である。Ｐ10出土。	周縁部のほぼ全面に敲打痕が残る。表面の中央部付近にも明瞭な敲打痕がある。
702	ＳＴ４	〃	(4.6) (5.8) 1.3 44.4	〃	扁平叩石の割れである。表面は縁辺部に小剝離痕を残す以外は自然の礫皮面である。裏面は主剝離面である。	周縁部に敲打痕が残る。
703	ＳＴ６	〃	10.2 8.8 2.3 258.0	〃	楕円形を呈した扁平叩石で縁辺部に小剝離痕を残す。周縁部のほぼ全面に敲打痕が残る。	完形。
704	〃	〃	9.7 13.0 2.9 407.0	〃	楕円形の扁平叩石で表裏両面の縁辺部に小剝離痕を残す。周縁部と表面の中央部に敲打痕を残す。	〃
705	〃	〃	8.5 9.5 1.7 168.0	〃	不整円形を呈した扁平叩石で表裏両面の縁辺部に小剝離痕を残す。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	完形。 Ｐ２出土。
706	〃	〃	8.6 11.0 1.4 134.8	〃	楕円形の扁平叩石で周縁部に敲打痕のある箇所がある。表面は礫皮面を残し、裏面は主剝離面である。	完形。 Ｐ４出土。
707	〃	〃	9.6 12.0 2.7 362.0	〃	不整楕円形の扁平叩石で表面は自然の礫皮面で裏面は主剝離面である。両面の縁辺部に小剝離痕を残す。	周縁部のほぼ全面に敲打痕が残る。完形。 Ｐ３出土。
708	〃	〃	7.1 7.9 1.4 82.6	〃	不整円形の扁平叩石で表裏両面の縁辺部に小剝離痕を残す。周縁部に敲打痕は認められない。	完形。
709	〃	〃	8.3 10.2 2.7 228.0	〃	不定形の扁平叩石で表面にはかなり大きな剝離痕を残すが、大半は礫皮面である。周縁部に敲打痕の認められる箇所がある。	
710	〃	〃	11.0 11.0 2.7 343.0	〃	不整楕円形を呈した扁平叩石で両面の縁辺部に小剝離痕を残す。表面の中央部付近と周縁部に敲打痕が残る。	完形。 Ｐ４出土。
711	〃	〃	8.2 8.9 1.7 123.2	〃	ほぼ円形を呈した扁平叩石で表裏両面の縁辺部に小剝離痕があるが、周縁部に敲打痕は認められない。	完形。
712	〃	〃	8.0 11.3 2.4 226.0	〃	不整楕円形を呈した扁平叩石で表面は縁辺部にやや大きな剝離痕を残すが、礫皮面が大半を占める。周縁部のほぼ全面に敲打痕がある。	〃
713	〃	〃	8.9 12.8 2.0 287.0	〃	楕円形を呈したかなり大きな扁平叩石で表面は自然の礫皮面で裏面は主剝離面である。両面の縁辺部に小剝離痕がある。	周縁部の一部に敲打痕が認められる。完形。Ｐ１出土。
714	〃	〃	7.3 9.7 1.8 154.2	〃	楕円形を呈した扁平叩石で表面は礫皮面で、裏面は主剝離面である。両面の縁辺部に小剝離痕を残す。周縁部には明瞭な敲打痕がある。	完形。

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
715	ＳＴ６	叩石	8.4 10.9 1.9 239.0	砂　岩	不整楕円形を呈した扁平叩石で表面は自然の礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部には敲打痕が残る。	完形。
716	〃	〃	10.9 10.7 1.9 265.0	〃	不整楕円形の扁平叩石である。表面は自然の礫皮面で裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部に敲打痕の認められる箇所がある。	〃
717	ＳＫ39	〃	6.7 8.5 1.8 100.0	〃	不整楕円形の小さな扁平叩石で表面は礫皮面で裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	〃
718	Ｐ　11	〃	9.8 6.6 1.2 91.6	〃	不整楕円形の扁平叩石で、一部欠損する。表面は礫皮面で裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部に敲打痕が残る。	〃
719	ＳＤ５	〃	11.0 15.1 2.3 450.0	〃	不整楕円形を呈した非常に大きな扁平叩石である。表面は自然の礫皮面を残し裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	〃
720	〃	〃	11.2 12.5 2.9 530.0	〃	不整円形を呈したかなり大きな扁平叩石である。表面にはかなり大きな剥離痕を残し、裏面は主剥離面である。周縁部のほぼ全面に敲打痕が残る。	〃
721	ＳＫ39	〃	7.7 9.2 1.9 173.0	〃	不整楕円形の扁平叩石で表面は礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕が残る。周縁部に顕著な敲打痕が残る。	〃
722	ＳＫ26	〃	8.7 8.5 1.2 106.5	〃	不定形な扁平叩石で表面は礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に明瞭な剥離痕は認められず、周縁部に敲打痕も認められない。	扁平叩石の未製品か？ 完形。
723	ＳＫ８	〃	9.7 11.9 2.1 251.0	〃	不定形の扁平叩石で表面は礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕がある。周縁部の一部に敲打痕がある。	完形。
724	ＳＴ４	〃	9.1 11.1 3.6 572.0	〃	表裏両面の中央部に顕著な敲打痕があり、くぼんでいる。また、周縁部にも敲打痕が認められる。	〃
725	ＳＤ７	〃	6.9 9.1 1.5 79.7	〃	楕円形の扁平叩石で表面は礫皮面を大きく残すが、裏面は主剥離面である。両面の縁辺部に小剥離痕を残す。周縁部のほぼ全面に敲打痕を残す。	〃
726	ＳＴ４	〃	10.5 6.3 2.0 176.0	〃	横長の不整長方形を呈した扁平叩石で表面は自然の礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。周縁部に小さな剥離痕を残す箇所がある。周縁部に敲打痕の残る箇所がある。	〃
727	ＳＴ６	〃	6.3 7.1 1.4 75.5	〃	不整楕円形を呈した扁平叩石で表面は礫皮面を残し、裏面は主剥離面である。周縁部も剥離し、敲打痕が残る。	表面にも大きな剥離面がある。 完形。
728	ＳＫ13	砥石	16.3 12.7 3.0 535.0	〃	表面と裏面と左側面の３面に顕著な研磨痕が残る。３面共に器表面がやや粗い。不定形を呈した扁平な砥石である。	完形。
729	ＳＴ４	〃	(3.3) (1.8) 1.2) (9.9)	玄武岩	暗茶褐色を呈した砥石の小破片である。表裏両面に右下がり方向の擦痕が残る。表裏両面に研磨痕が残る。	

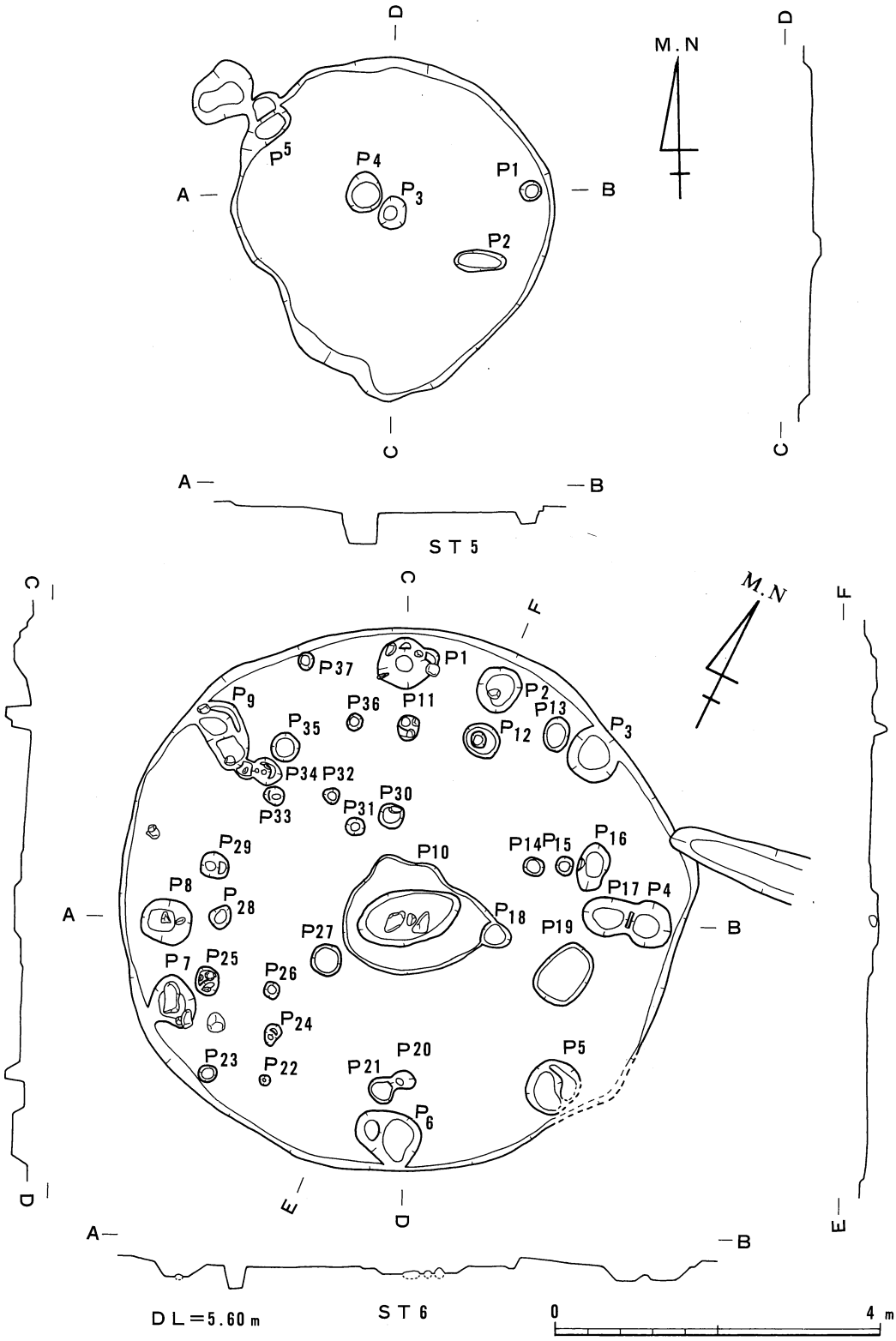
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm,g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
730	ＳＤ７	砥石	(6.7) (4.6) 3.0 117.1	砂　岩	表面のみに研磨痕が残る。石質がもろく、風化が著しい。	
731	ＳＴ３	〃	12.1 1.9 (1.2) 34.9	千枚岩	細長い棒状の砥石の割れで大半が欠損する。ほぼ全面に右下がり方向の擦痕が残る。	Ｐ10出土。
732	ＳＴ６	〃	38.2 19.7 8.3 10000.0	砂　岩	不整長方形を呈した大型の砥石である。表裏両面と両側面の４面に顕著な研磨痕が認められる。表面には研磨時に生じた縦方向の条線がある。	完形か？ Ｐ７出土。
733	ＳＫ32	〃	9.6 12.0 2.9 387.0	〃	不定形の扁平な砥石である。表裏両面に顕著な研磨痕が認められる。石質がもろく、両面共に磨耗している。	完形か？
734	ＳＫ39	石包丁	(4.3) (3.1) (0.5) 6.9	千枚岩	石包丁の小破片で背部と側辺部の一部しか残っていない。背部に擦痕が認められる。	
735	ＳＤ７	〃	(10.8) (5.7) 0.7 34.0	緑色岩	直線状の背部に外湾する刃部の続く半月型の石包丁で一部欠損する。紐孔が１個残る。表裏両面に横方向の擦痕が残る。	
736	〃	〃	(10.7) 4.4 0.7 47.1	〃	外湾する背部に直線状の刃部がつく形態の石包丁である。紐孔は２個残る。中央部に左下がり方向の擦痕が残る。	刃部には横方向の擦痕がある。半月型の直線刃の石包丁である。
737	ＳＴ４	〃	(9.3) 5.2 0.9 56.3	千枚岩	打製の石包丁で表裏両面が剝離面である。両面の刃部に小剝離痕が残る。側辺部が一部欠損する。	粗雑なつくりの石包丁である。
738	〃	〃	9.8 6.1 1.5 93.0	砂質片岩	打製のやや粗雑なつくりの石包丁で両側辺部に抉りをつくり出している。表面の刃部に小剝離痕が残る。	完形。
739	ＳＫ26	石鏃	2.2 1.5 0.6 1.3	サヌサイト	両面の中央部にはかなり大きな剝離痕を残す。二等辺三角形状の凸基無茎式の打製石鏃でやや厚く、粗雑なつくりである。	〃
740	ＳＴ６	〃	(1.7) 1.2 0.2 0.5	〃	二等辺三角形状を呈した平基無茎式の打製石鏃で先端部がわずかに欠損する。両面の中央部に大きな剝離面を残す。	ほぼ完形。
741	ＳＫ41	〃	2.6 1.8 0.4 1.3	〃	二等辺三角形状を呈した凸基有茎式の打製石鏃で両面にやや大きな剝離痕を残す。両面共にやや磨滅する。	完形。 Ｐ１出土。
742	ＳＴ３	〃	4.8 2.8 0.8 9.5	〃	五角形状を呈した平基無茎式の大型の打製石鏃である。両面の中央部に大きな剝離面を残している。縁辺部には押圧剝離による小剝離痕が残る。	器表面がやや磨滅する。 Ｐ10出土。 完形。
743	ＳＴ４	〃	2.6 2.0 0.3 —	〃	二等辺三角形状を呈した凹基無茎式の打製石鏃で断面形は凸レンズ状である。両面共に、押圧剝離により入念に仕上げる。	完形。


D
M.N
D
P12
P7
P8
P6
P5
P11
P1
A
P4
B
P3
P2
P9
P10
C
C
A
B
ST 2
D
M.N
D
P15
P2
P16
P1
P3
P4
P5
P14
P6
P7
P17
P13
P10
P8
P9
A
B
P11
P12
C
C
A
B
DL=5.60m
ST 3
0
4 m

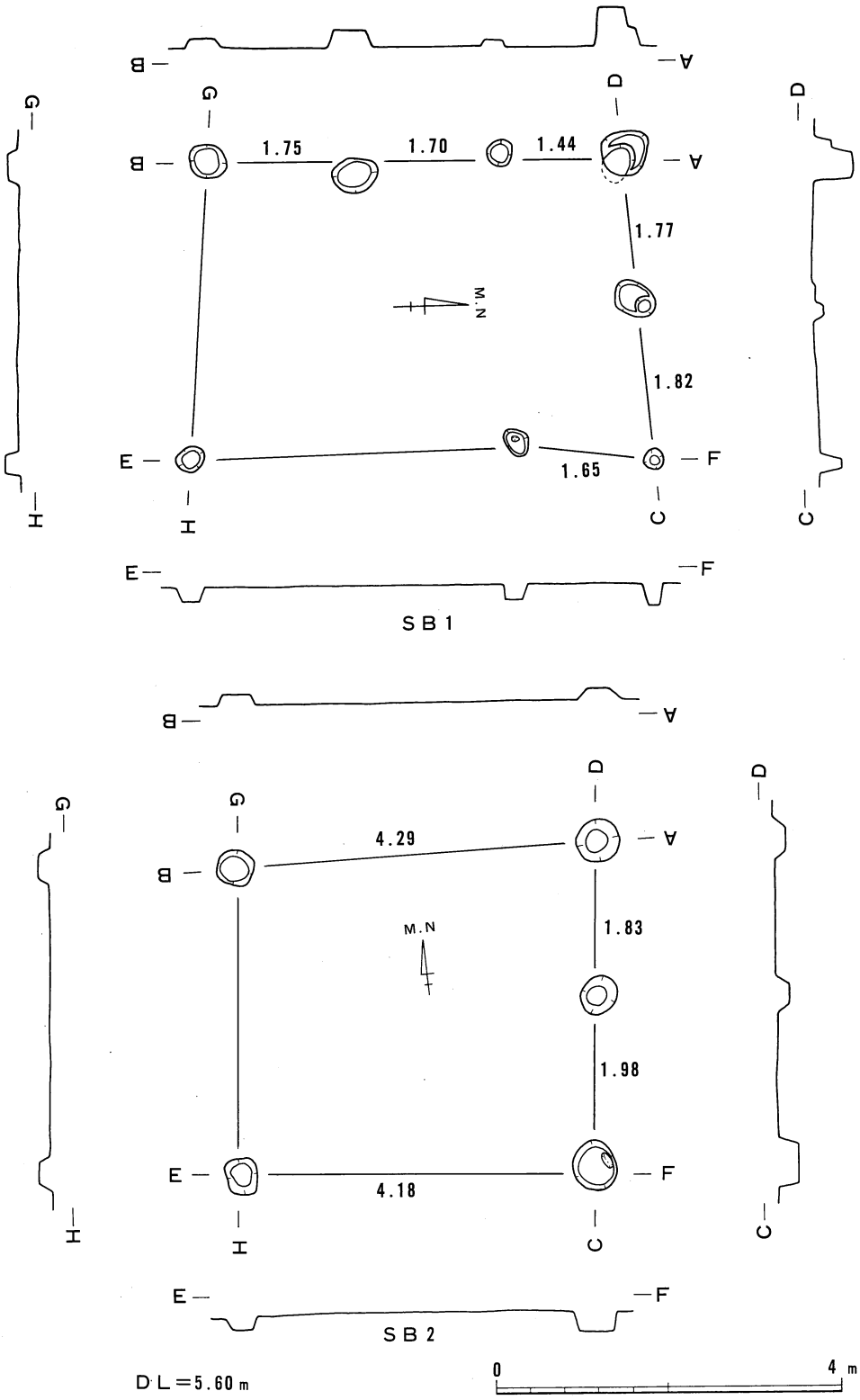
第168図　ST2・3


M.N
G
J
12
P1
P2
P13
P3
P14
P4
P5
P18
P6
A
B
C
P7
D
E
P17
P16
P15
P11
P10
P9
P8
F
H
I
第Ⅰ層　茶褐色粘質土
第Ⅱ層　暗茶褐色粘質土
第Ⅲ層　黒灰色粘質土
第Ⅳ層　淡黄褐色粘質土
撹乱
ＳＴ４
ＤＬ＝5.60ｍ
0
4 m

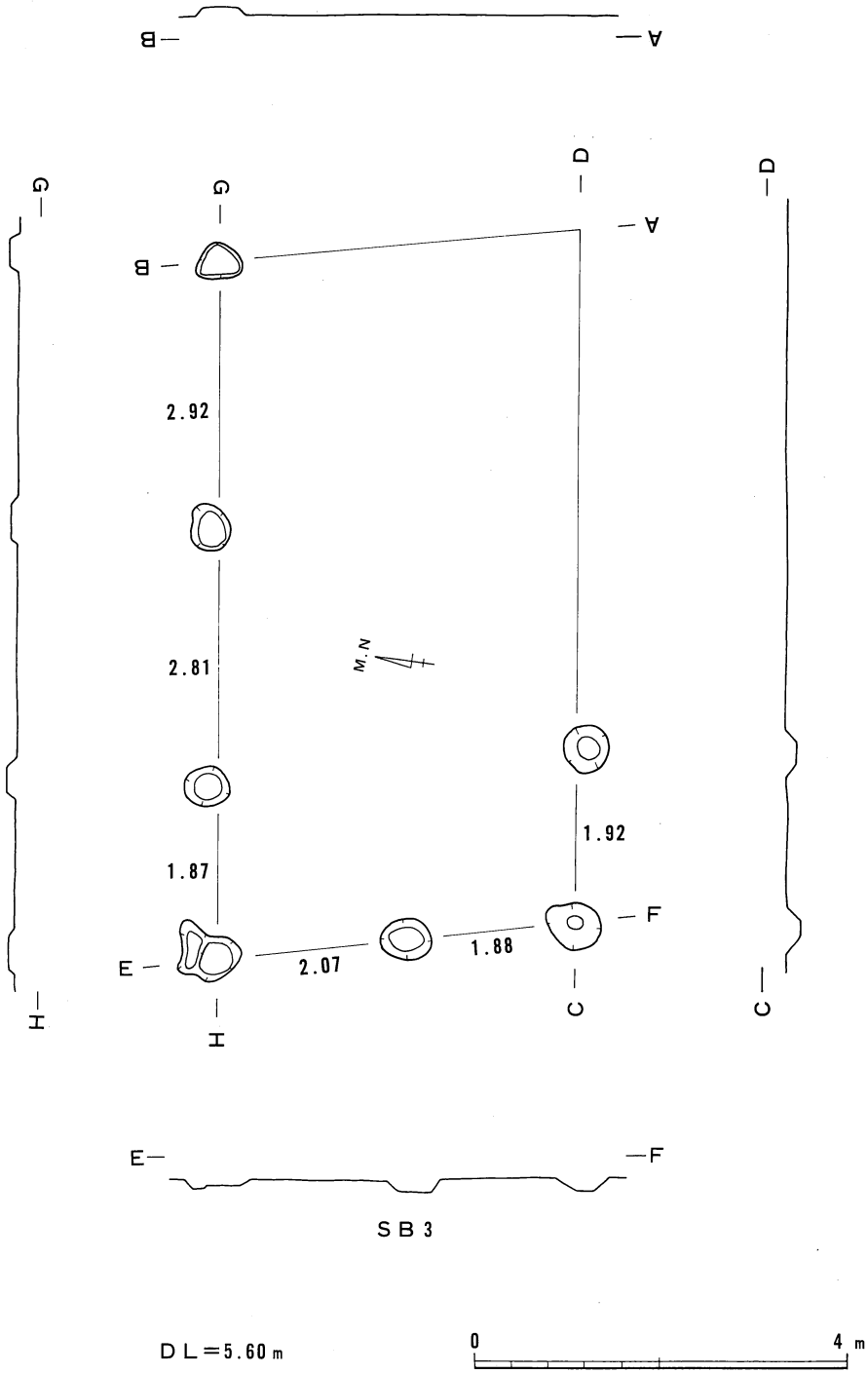
第169図　ＳＴ４


M.N
A
B
C
D
P1
P2
P3
P4
P5
ST 5
M.N
A
B
C
D
E
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
ST 6
DL=5.60m
0
4 m

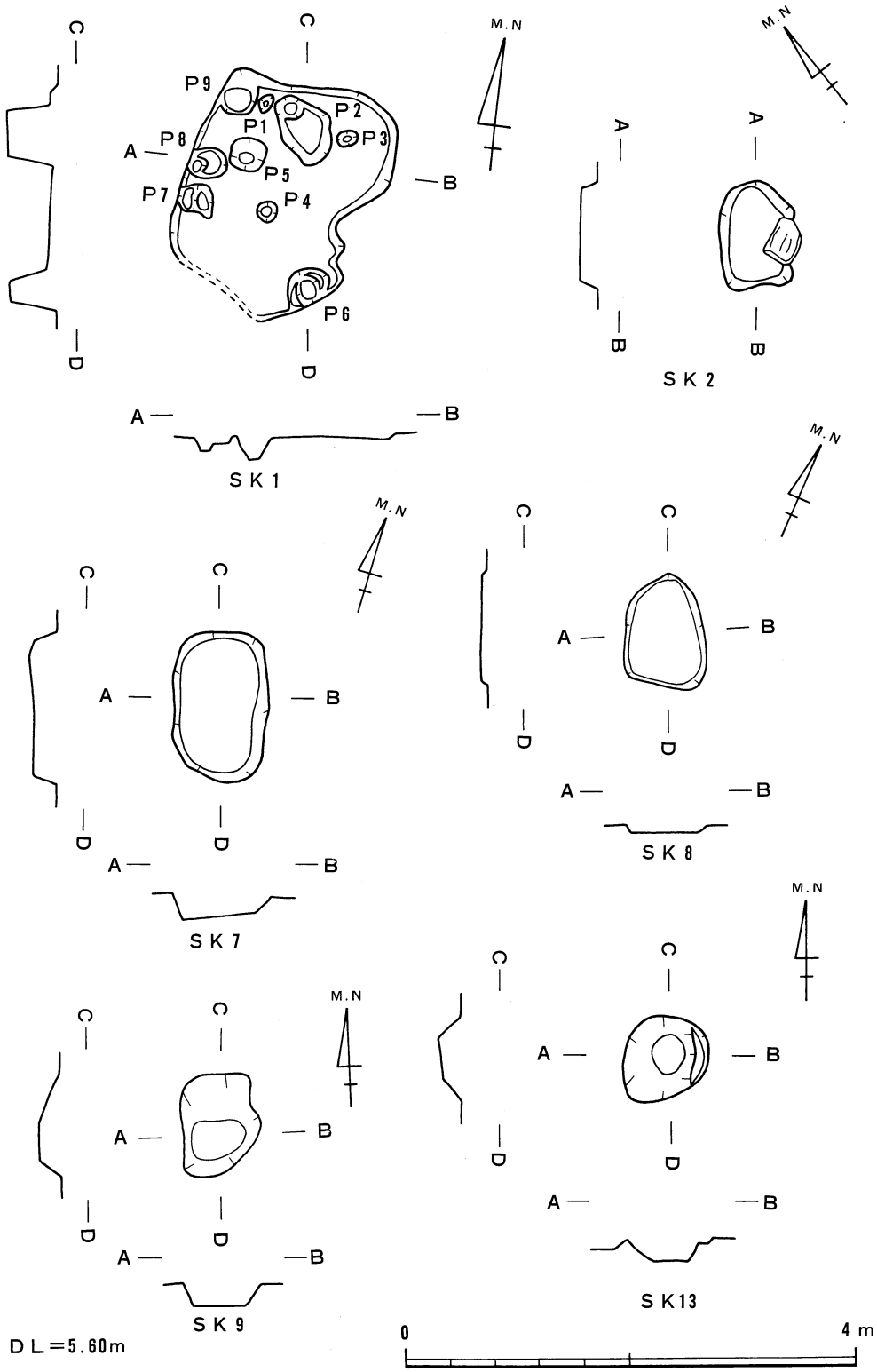
第170図　ＳＴ５・６


A
B
C
D
E
F
G
H
1.75
1.70
1.44
1.77
1.82
1.65
M.N
SB1
4.29
1.83
1.98
4.18
SB2
DL=5.60m
0
4m

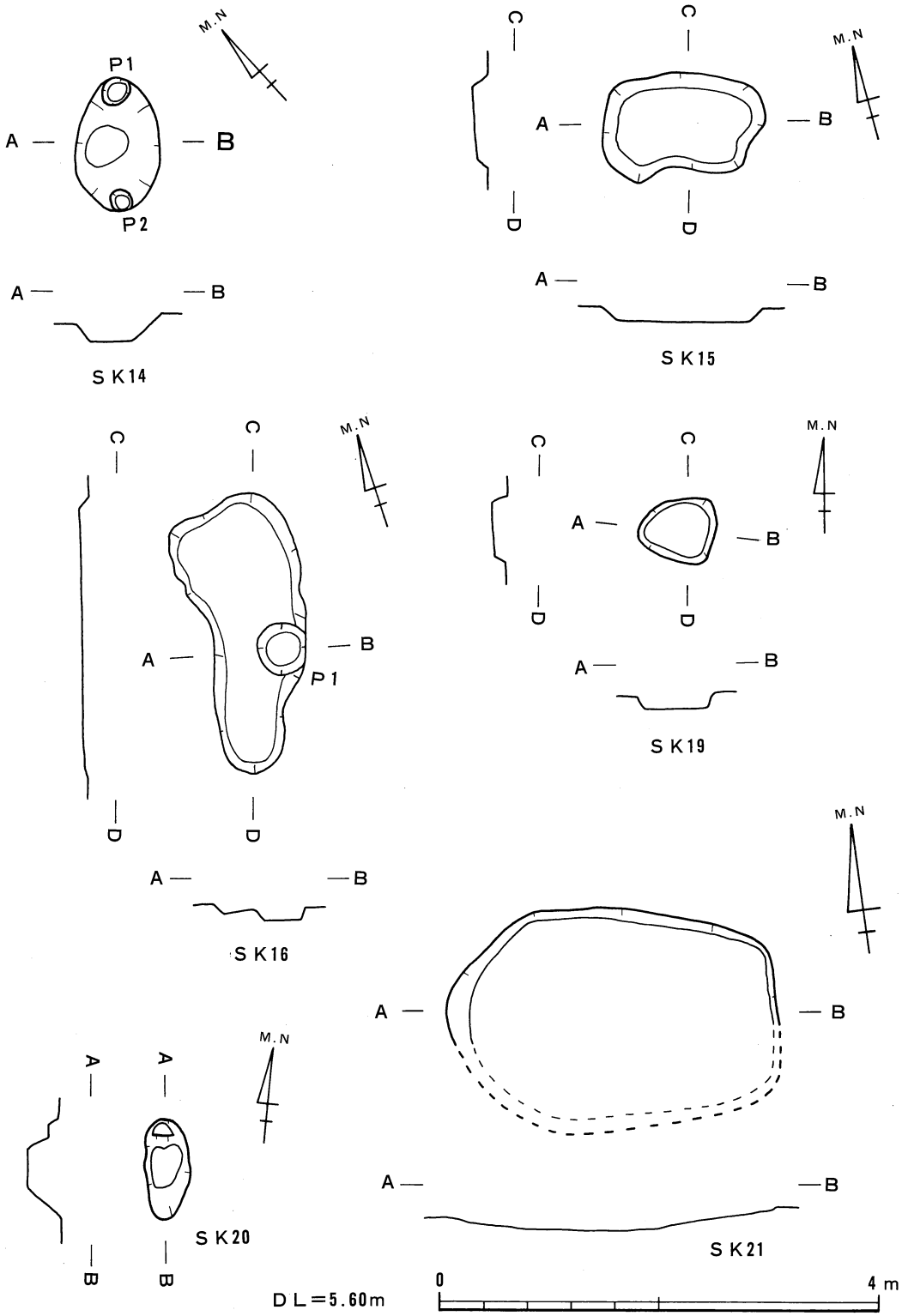
第171図　ＳＢ１・２



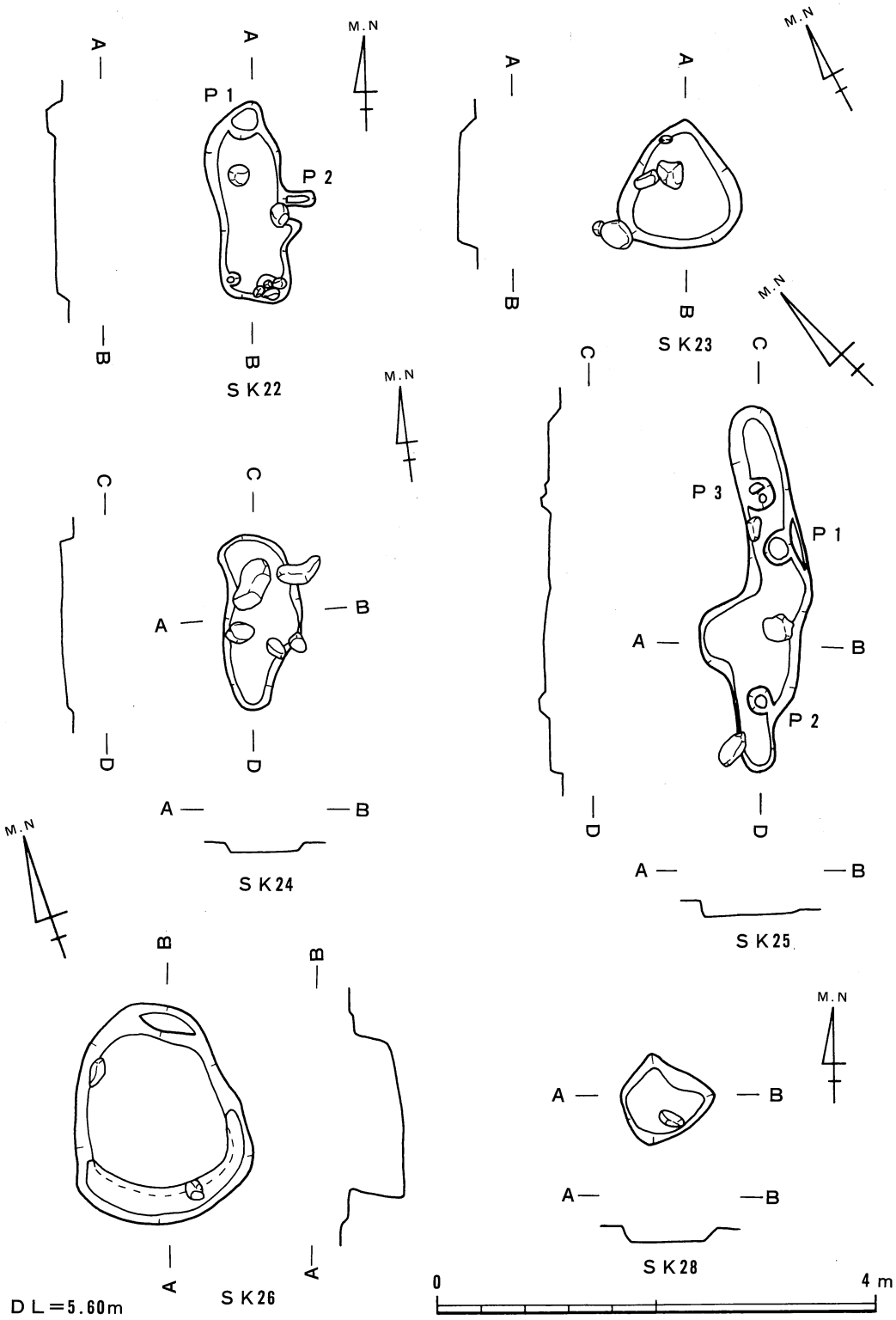
第172図　ＳＢ３



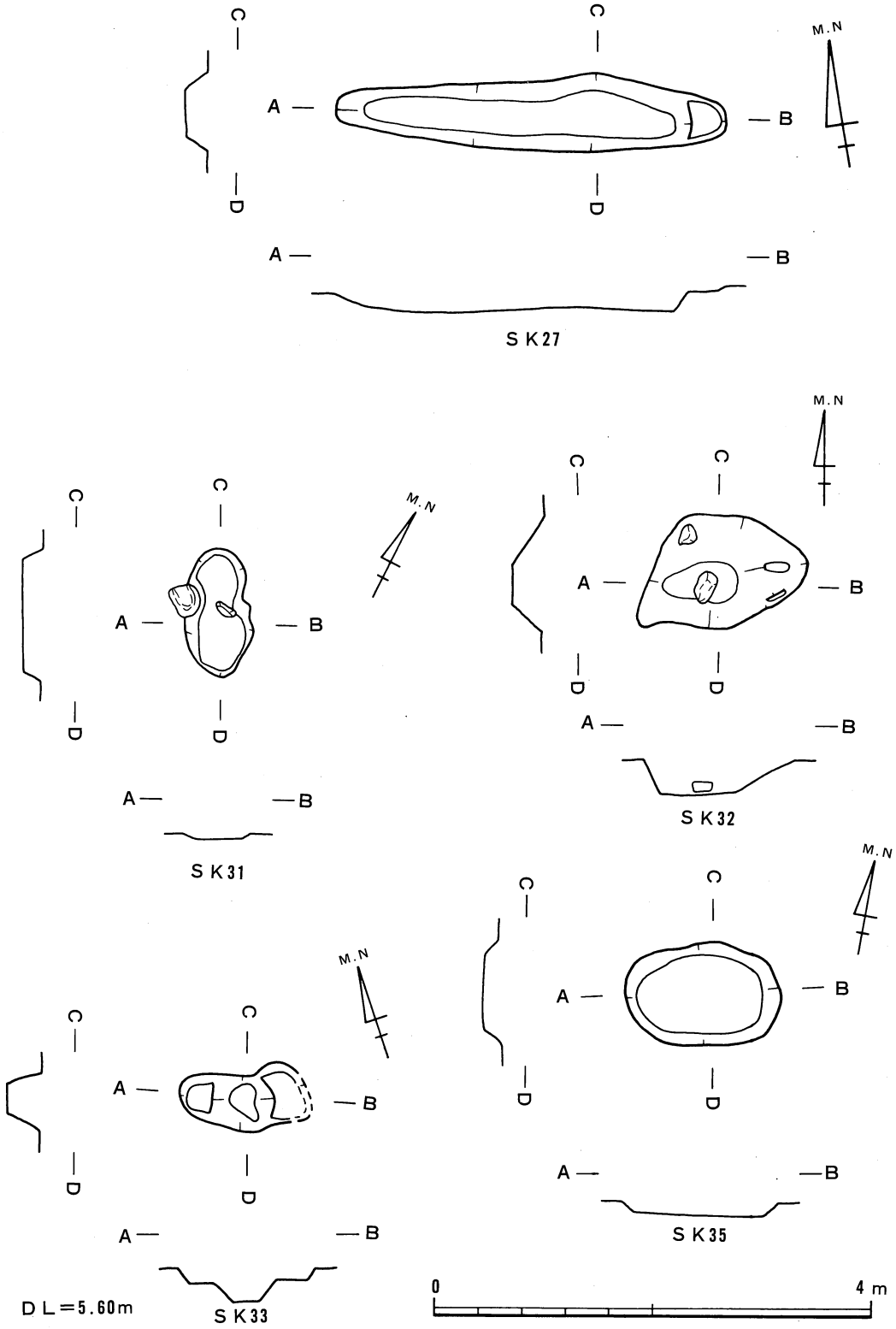
第173図　ＳＫ１・２・７～９・13



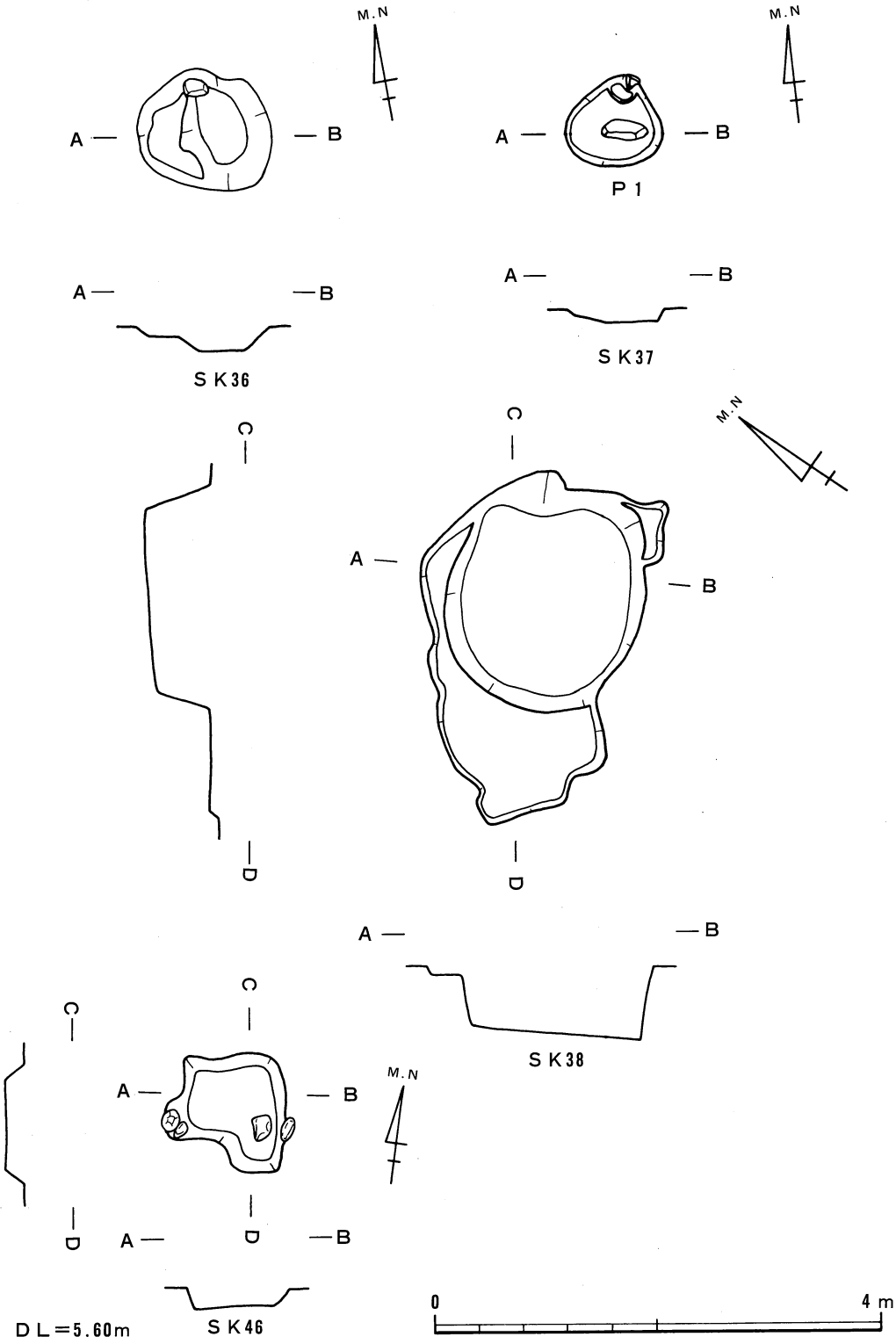
第174図　SK14～16・19～21



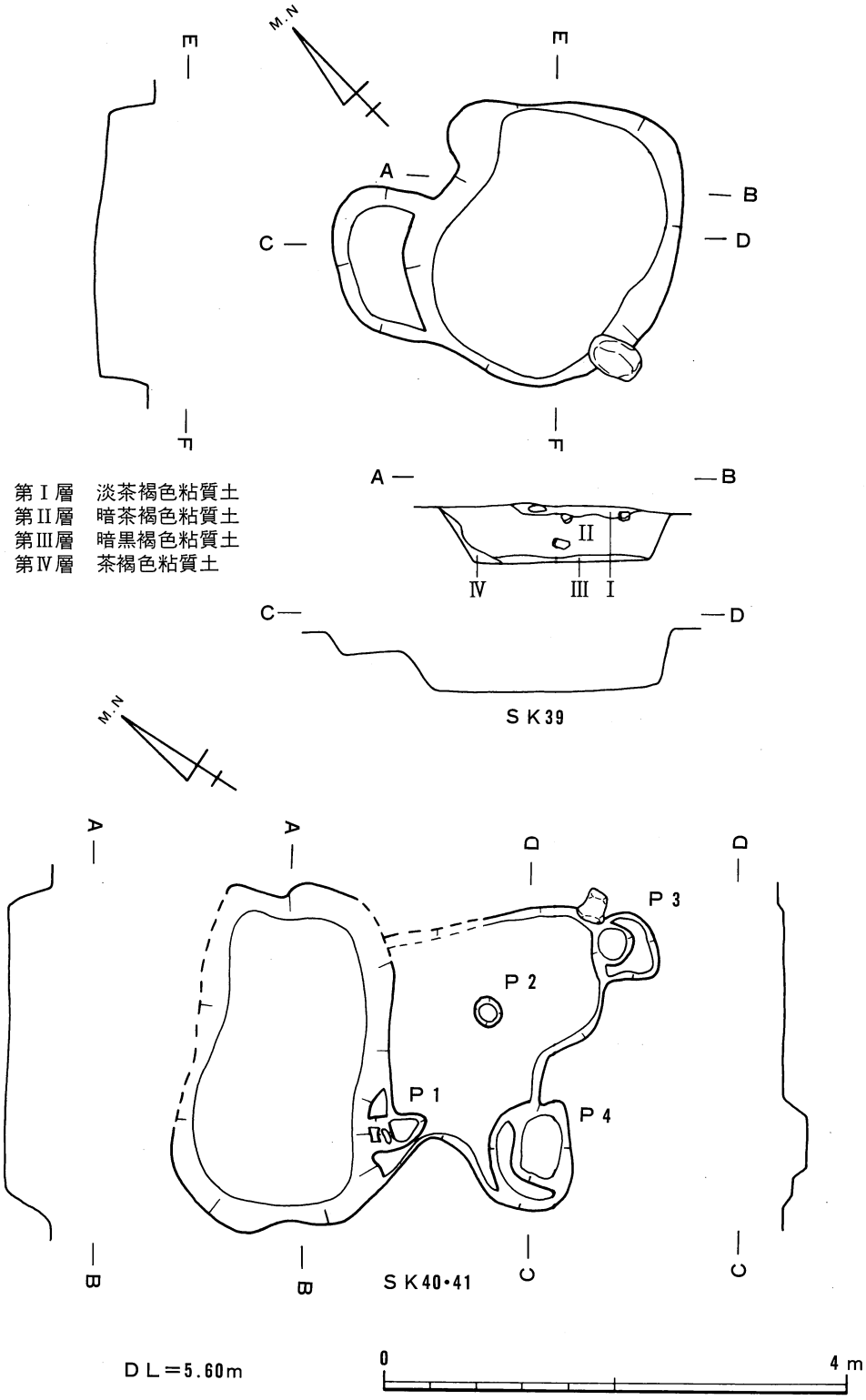
第175図　SK22～26・28



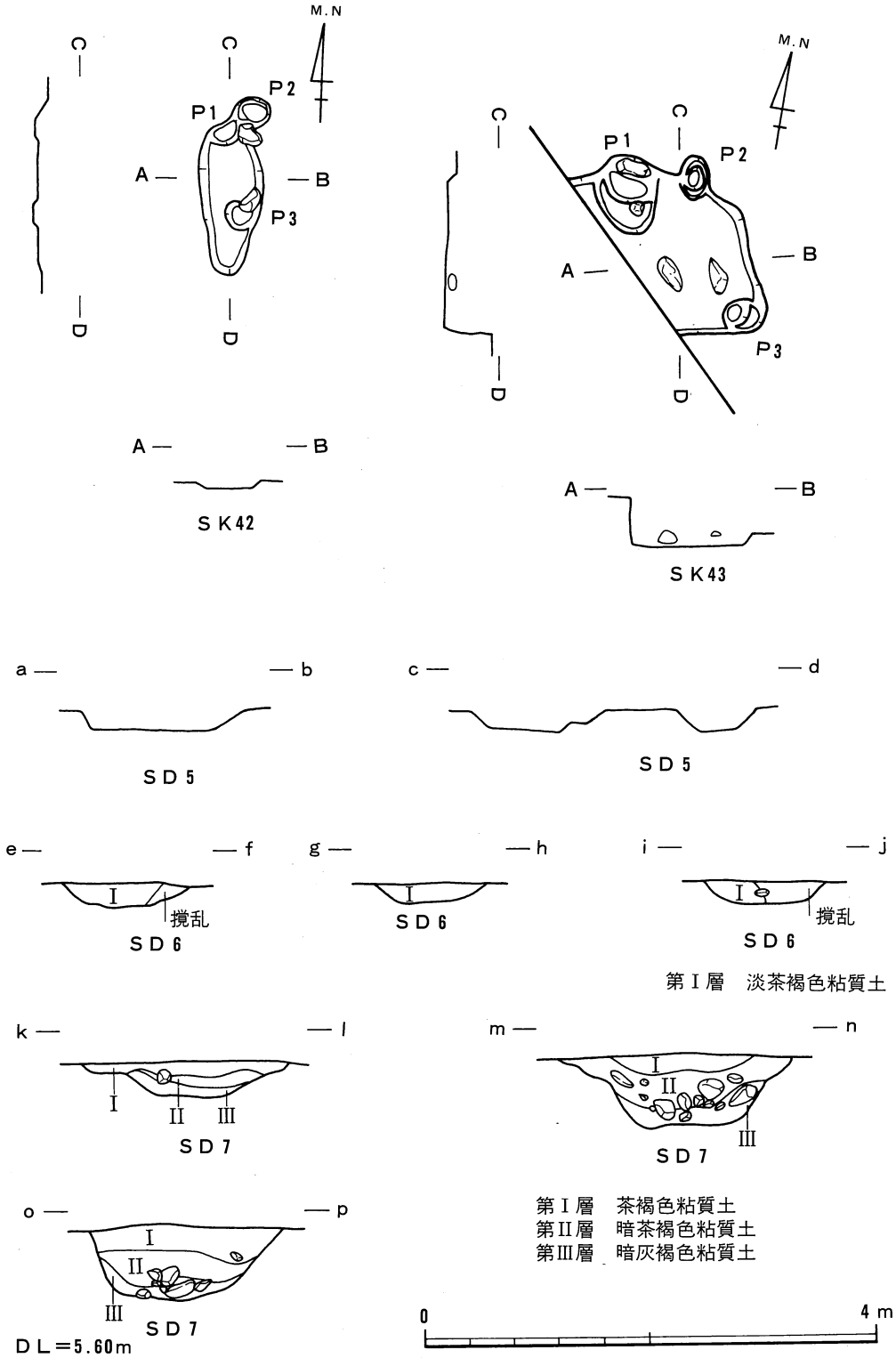
第176図　SK27・31～33・35



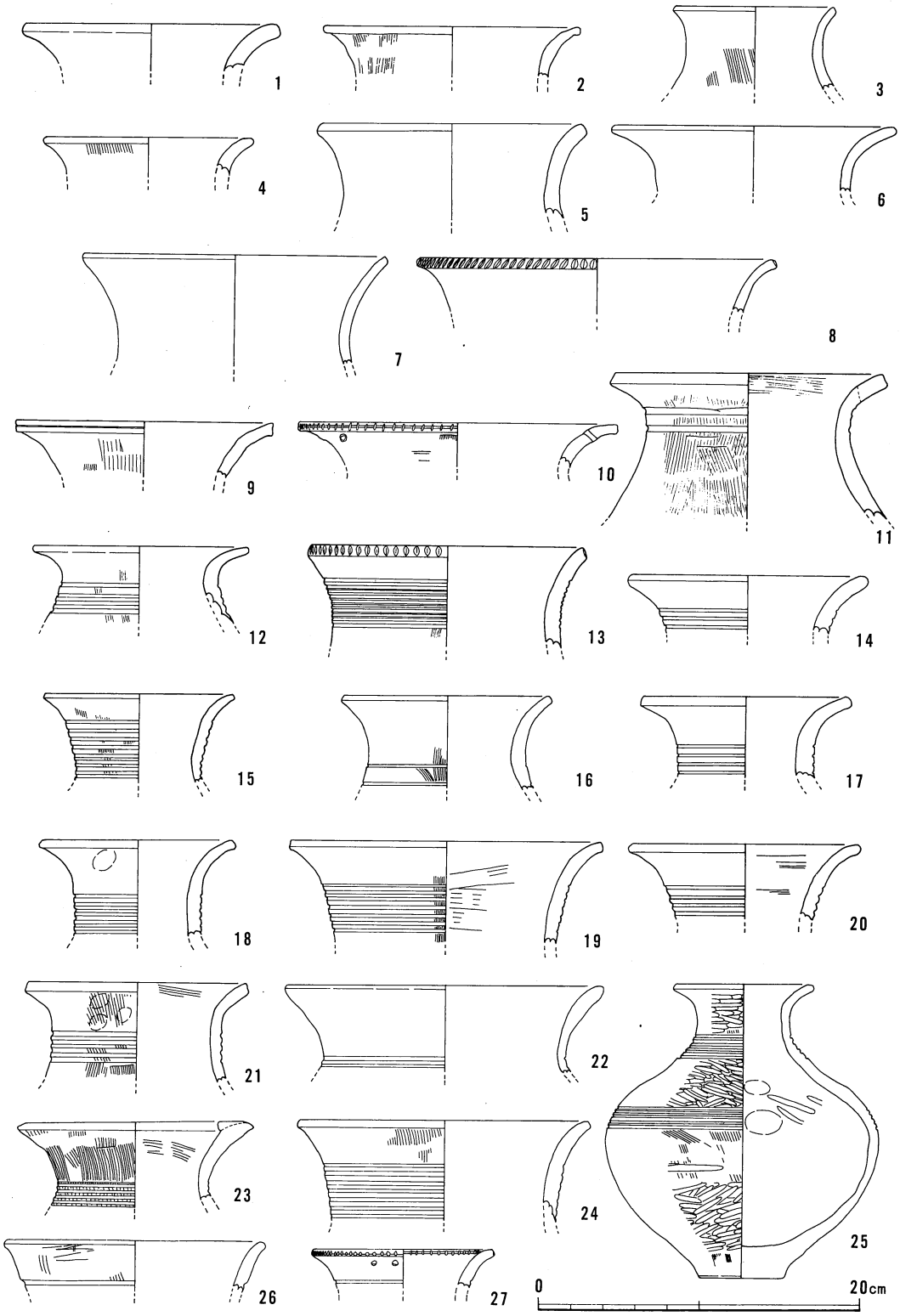
第177図　SK36～38・46



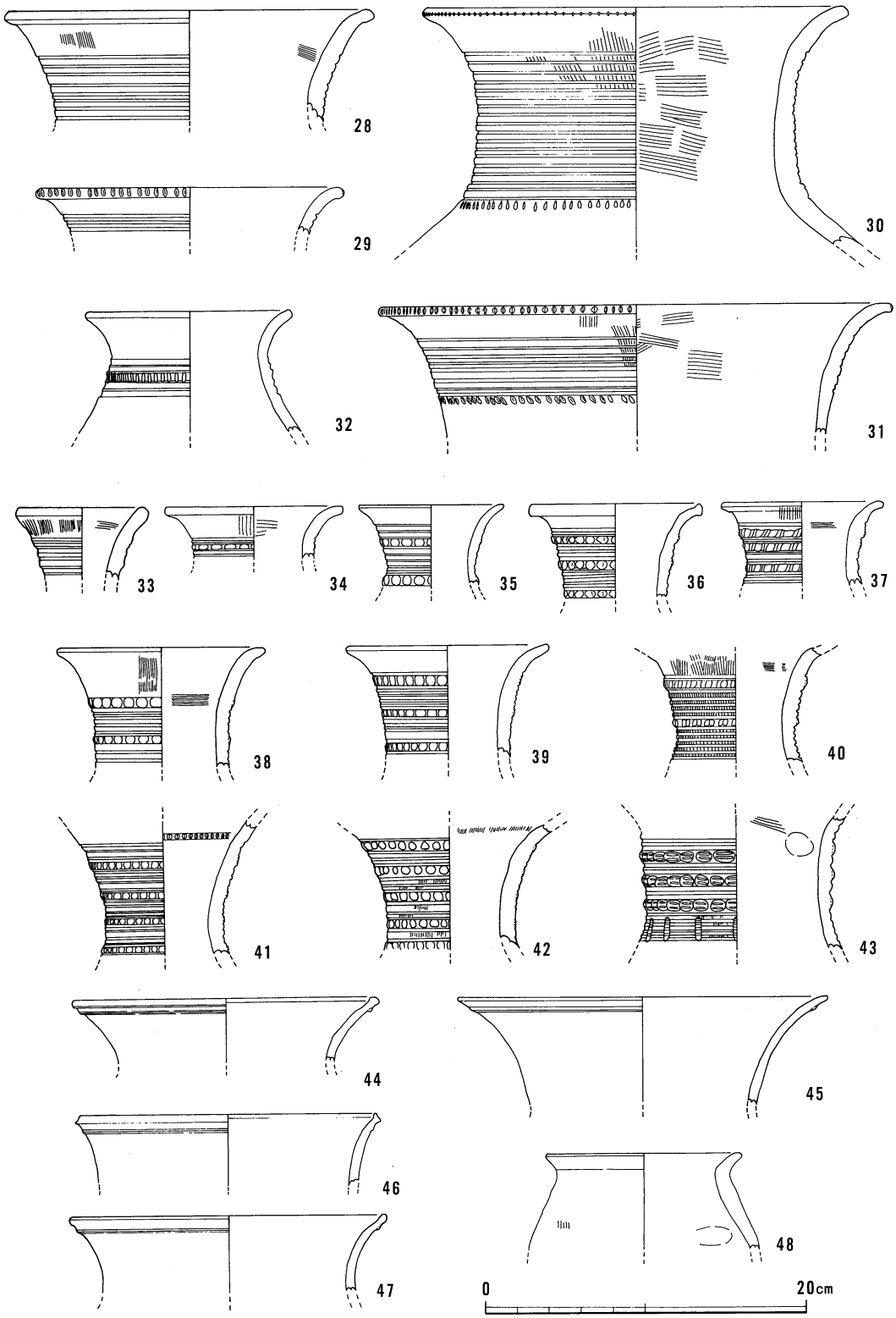
第178図　SK39～41



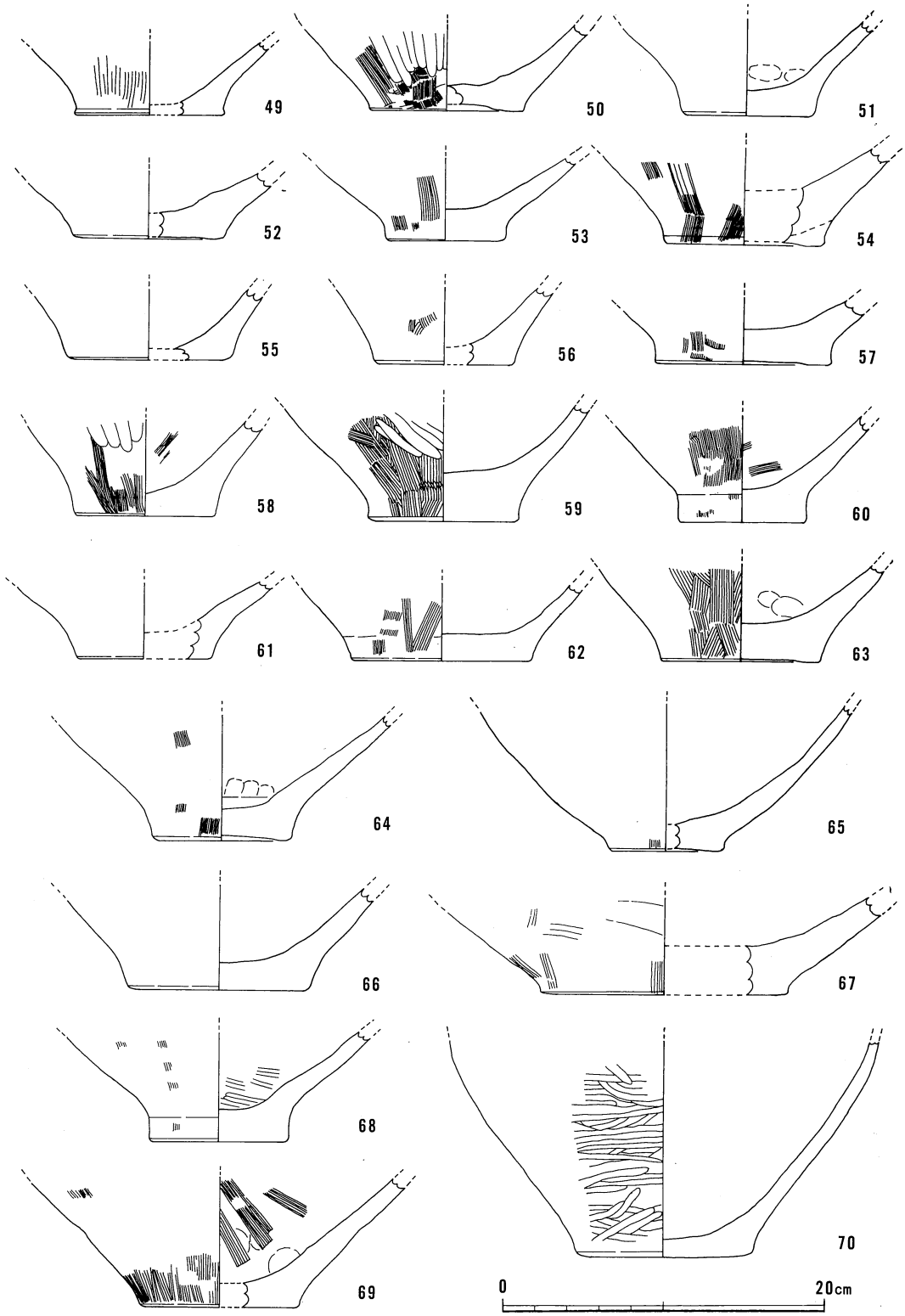
第179図　ＳＫ42・43、ＳＤ５～７



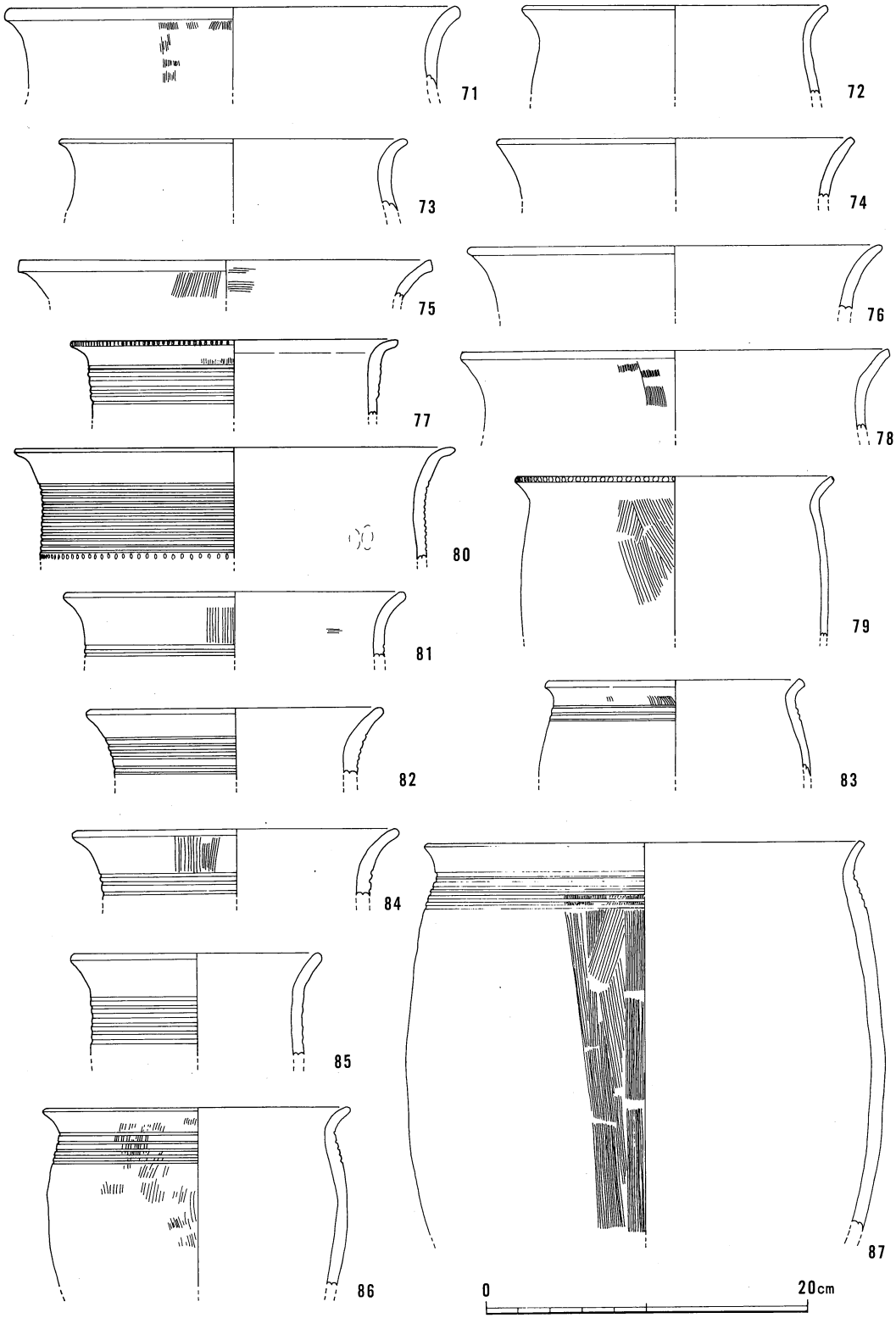
第180図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



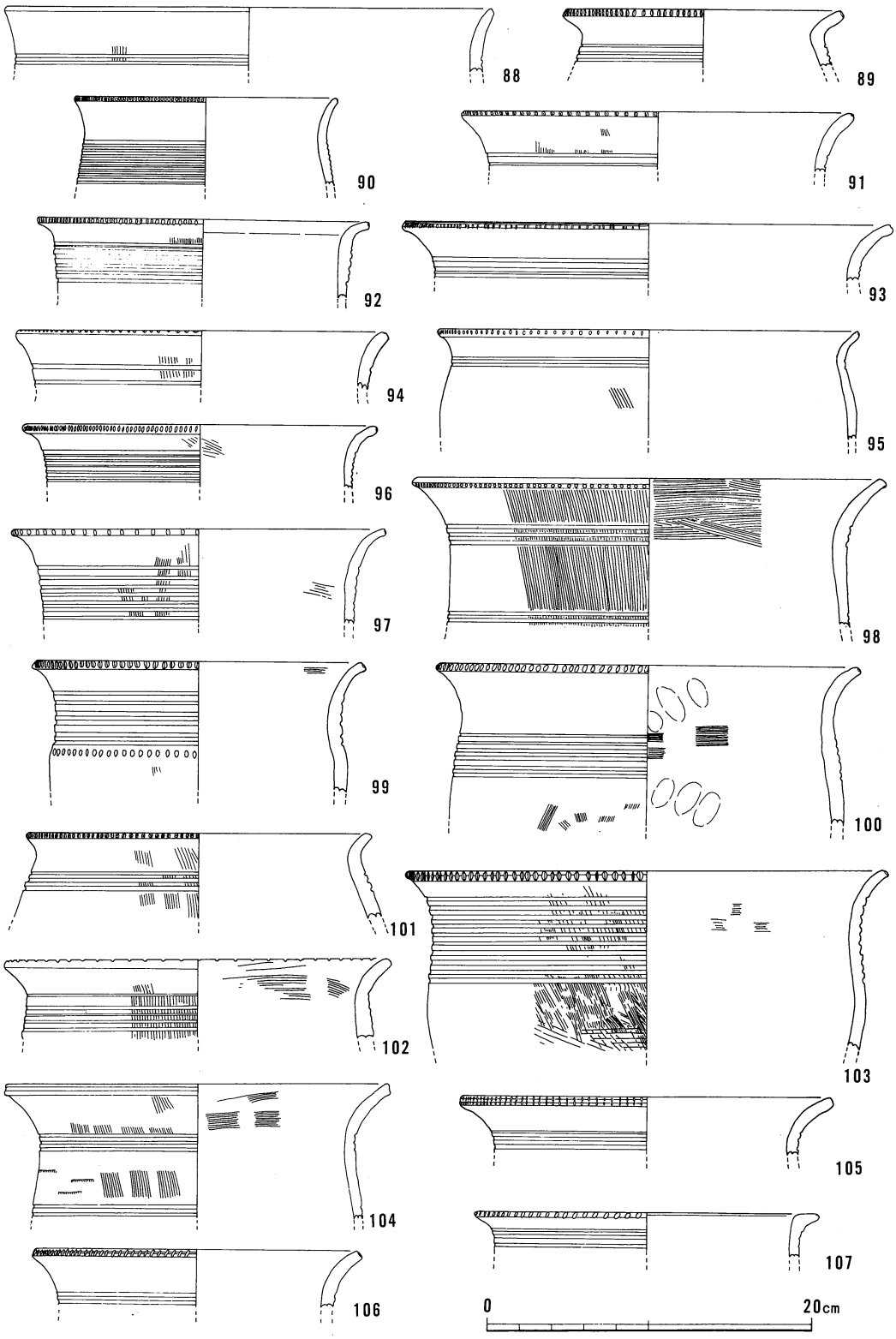
第181図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



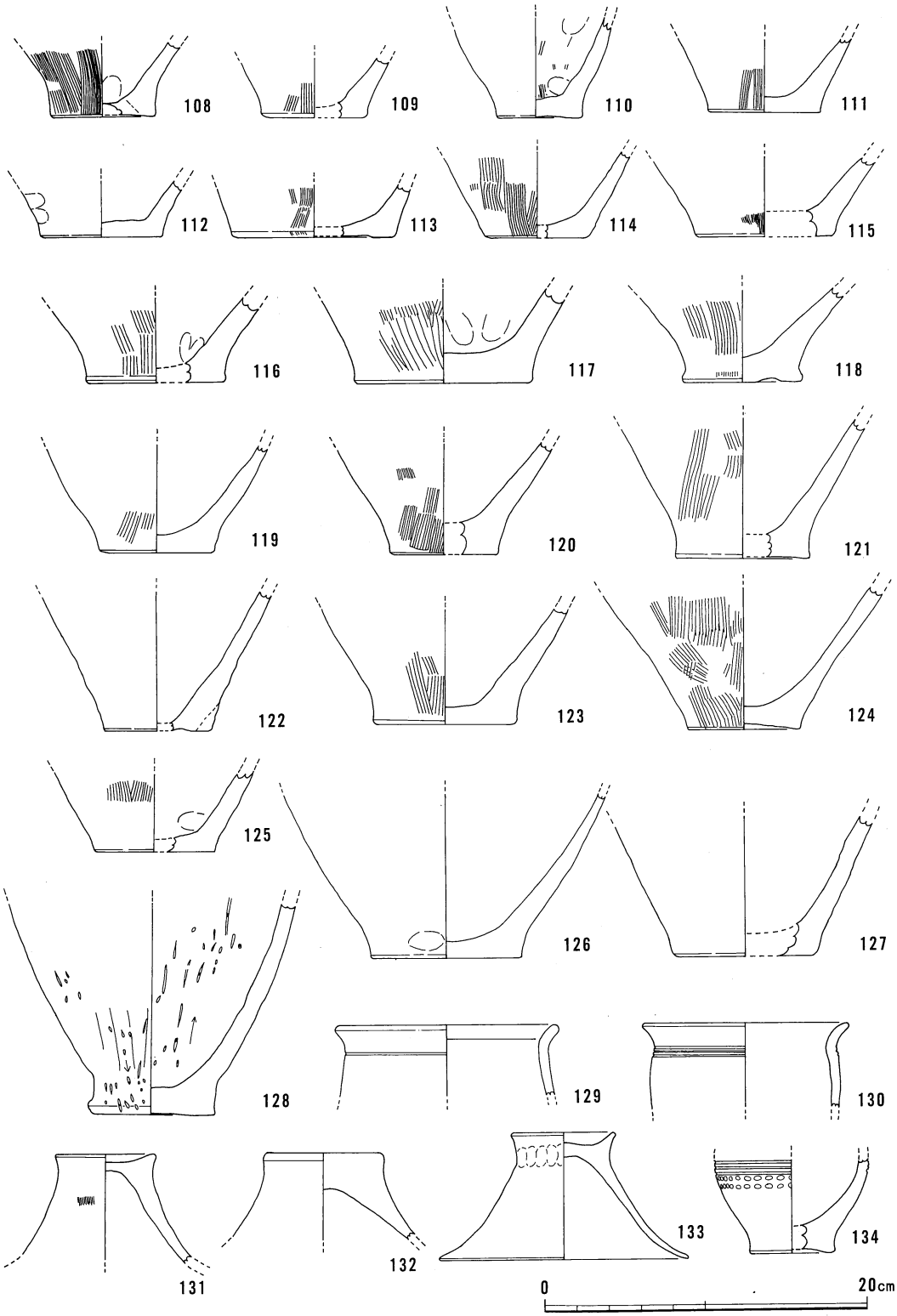
第182図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



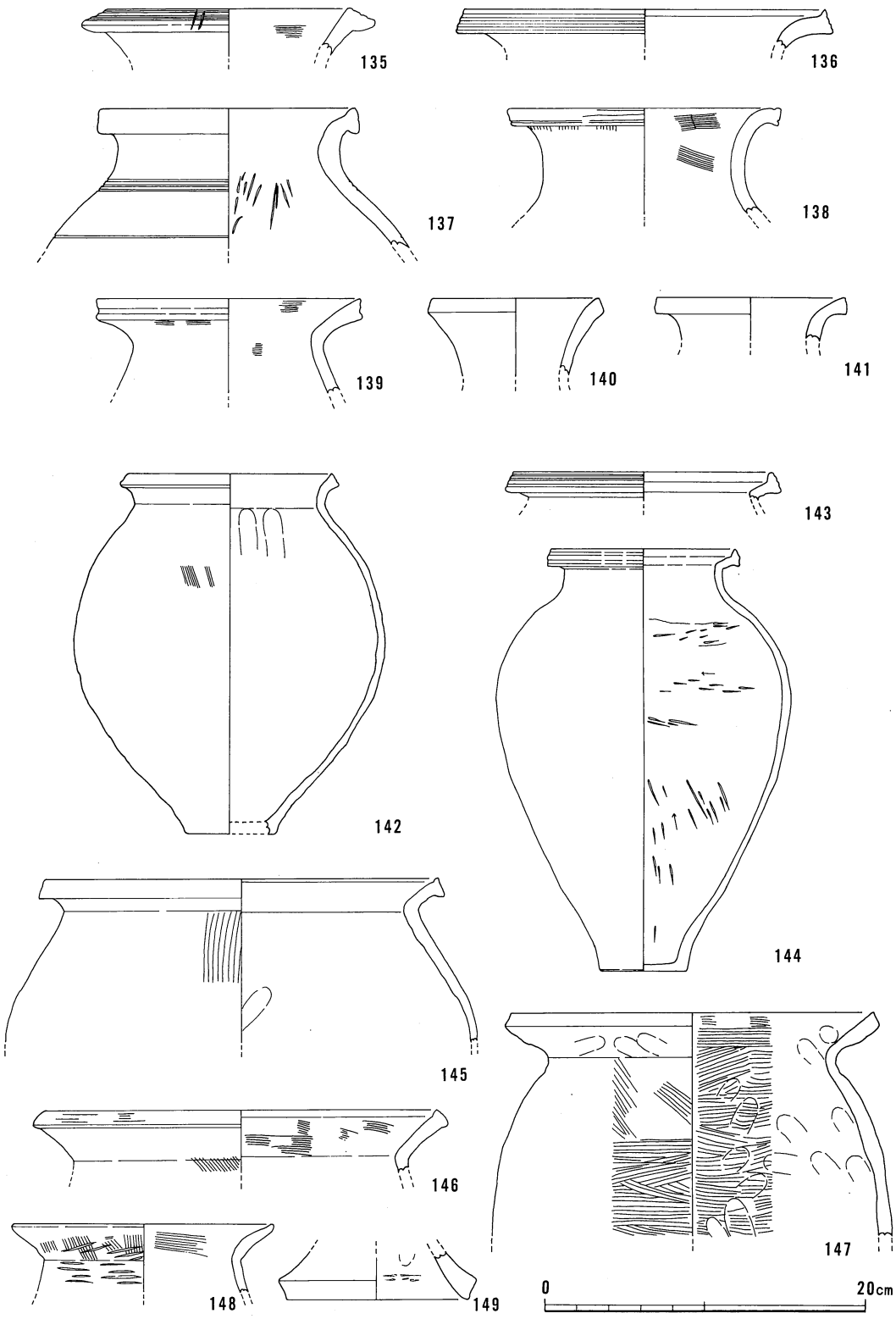
第183図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



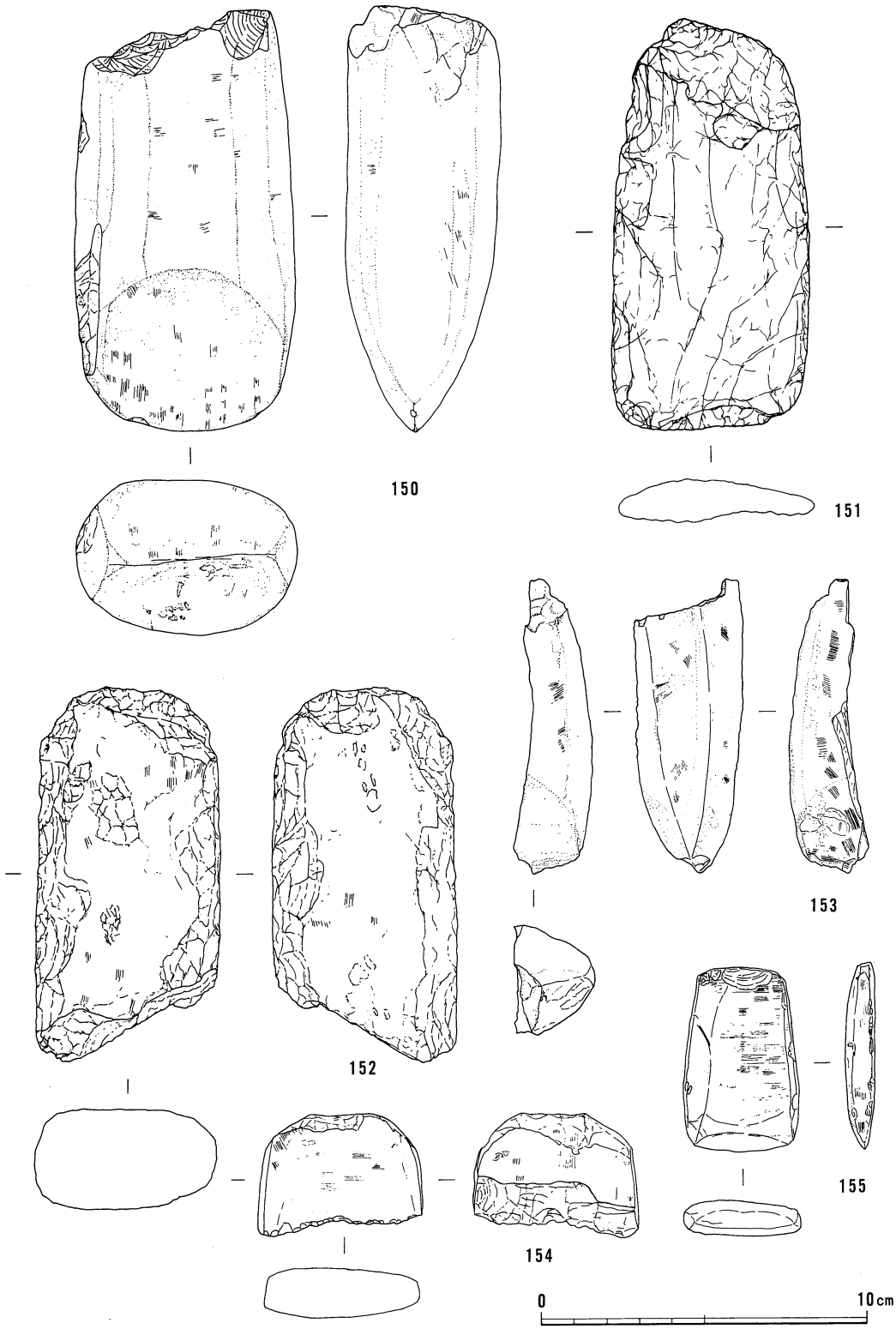
第184図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



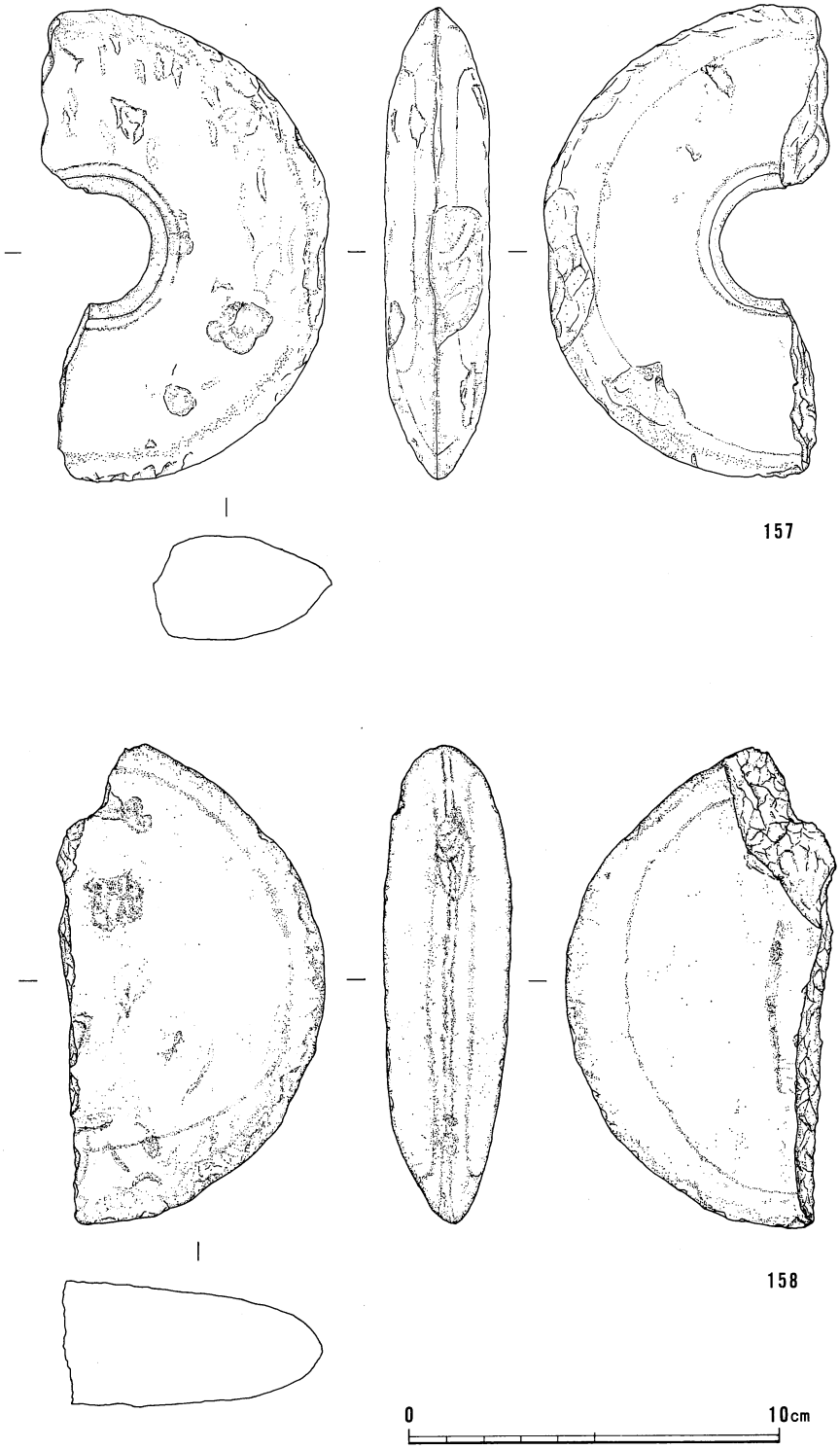
第185図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



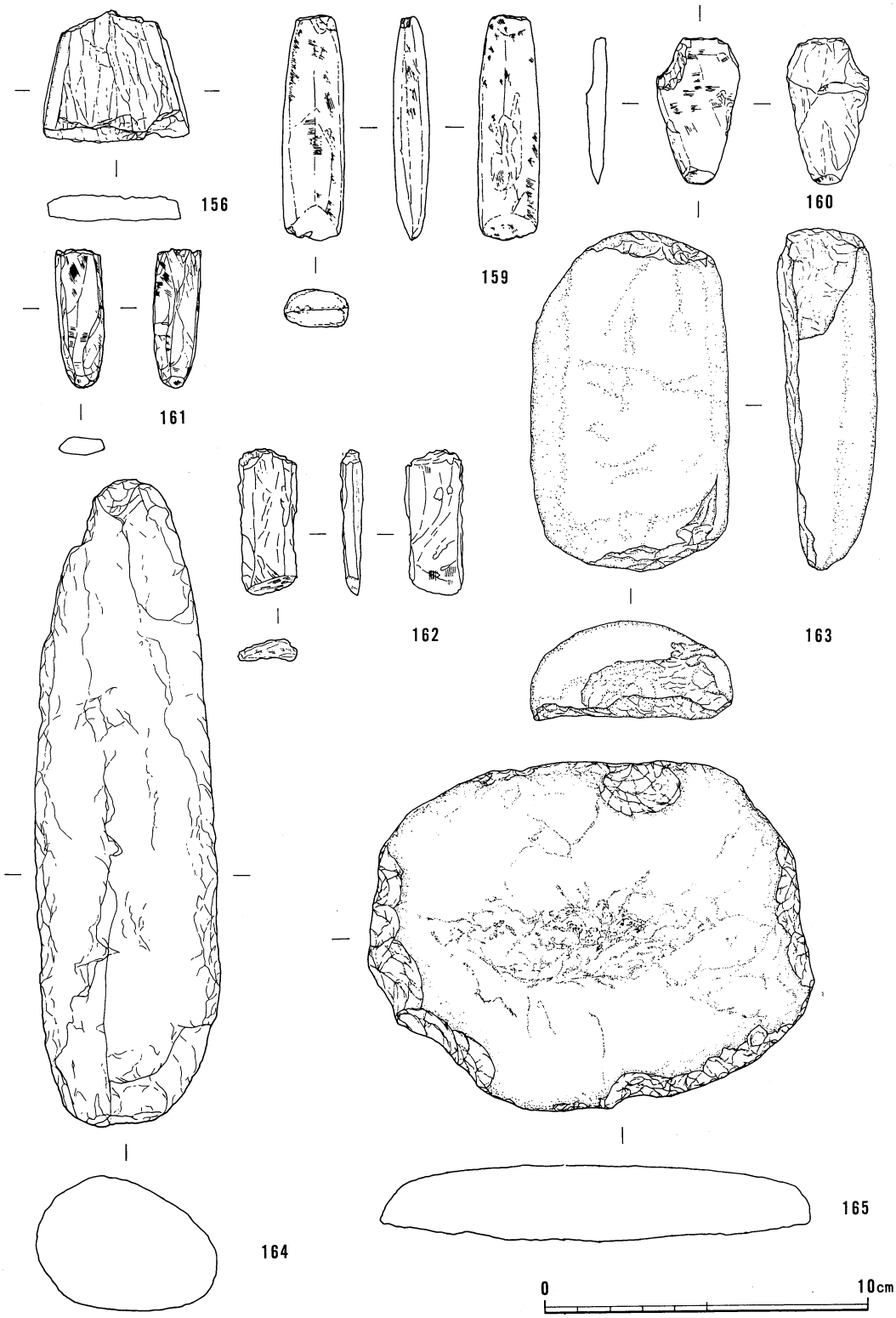
第186図　第Ⅳ層出土遺物



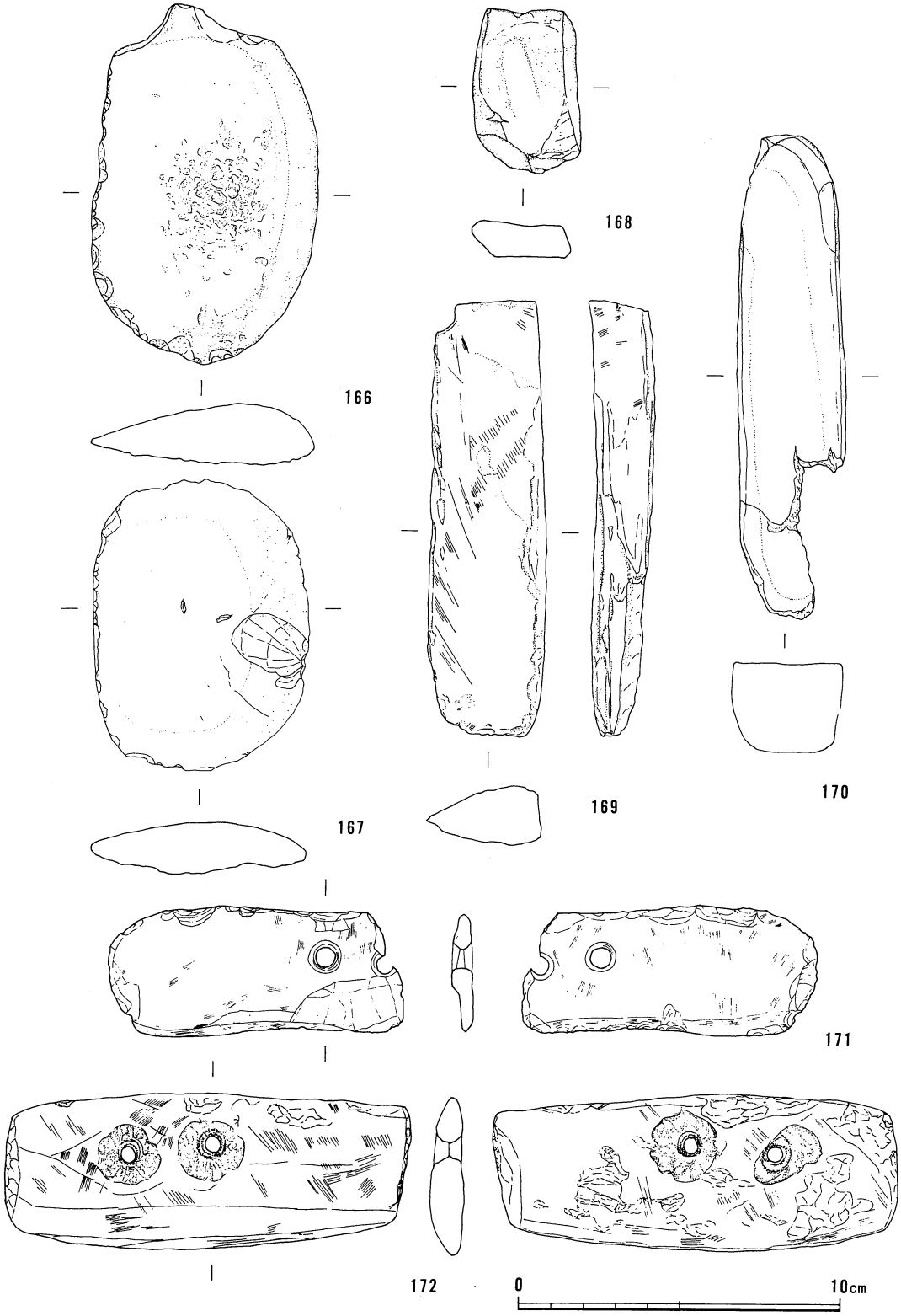
第187図　第Ⅰ・Ⅳ層出土遺物



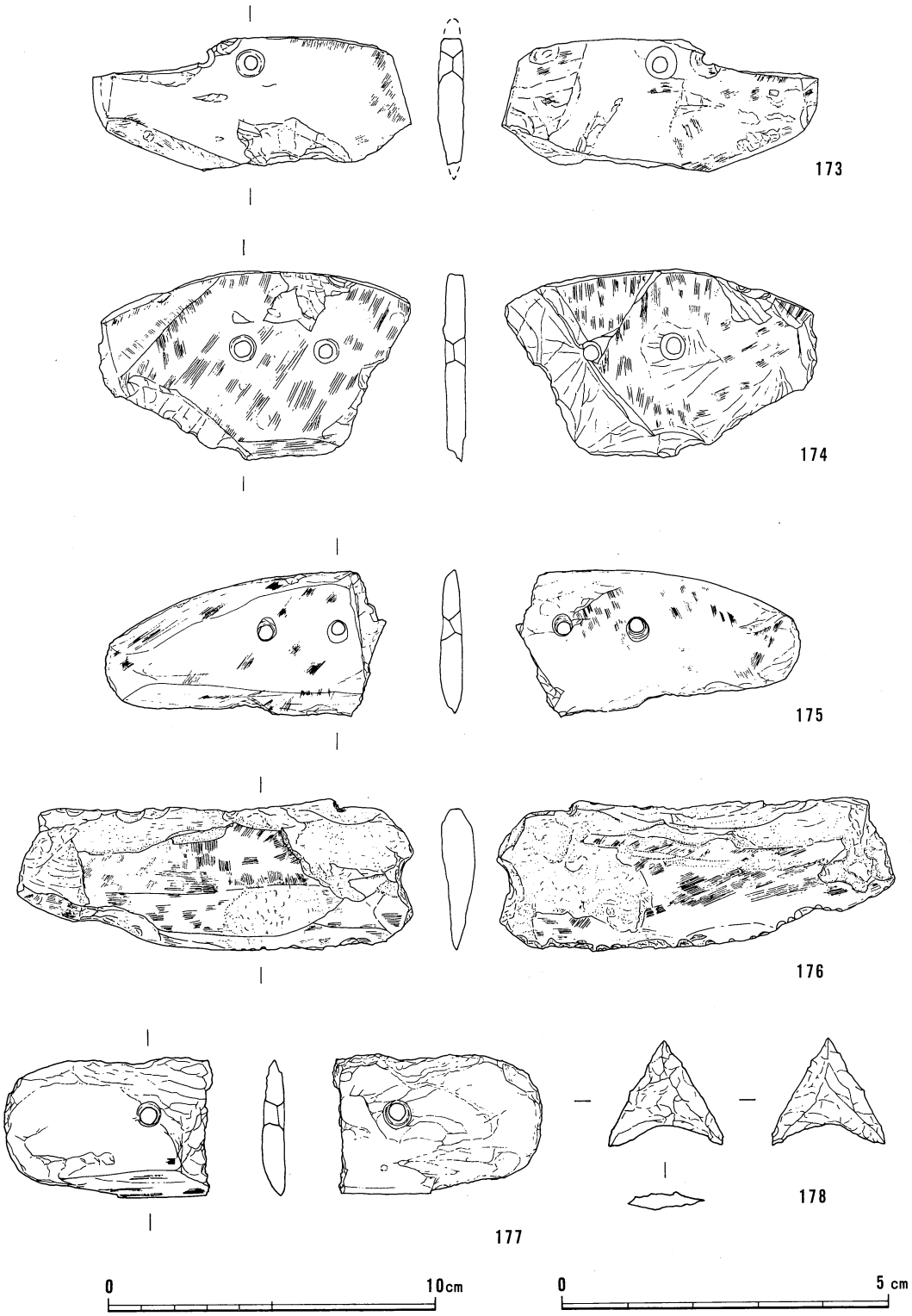
第188図　第Ⅳ層出土遺物



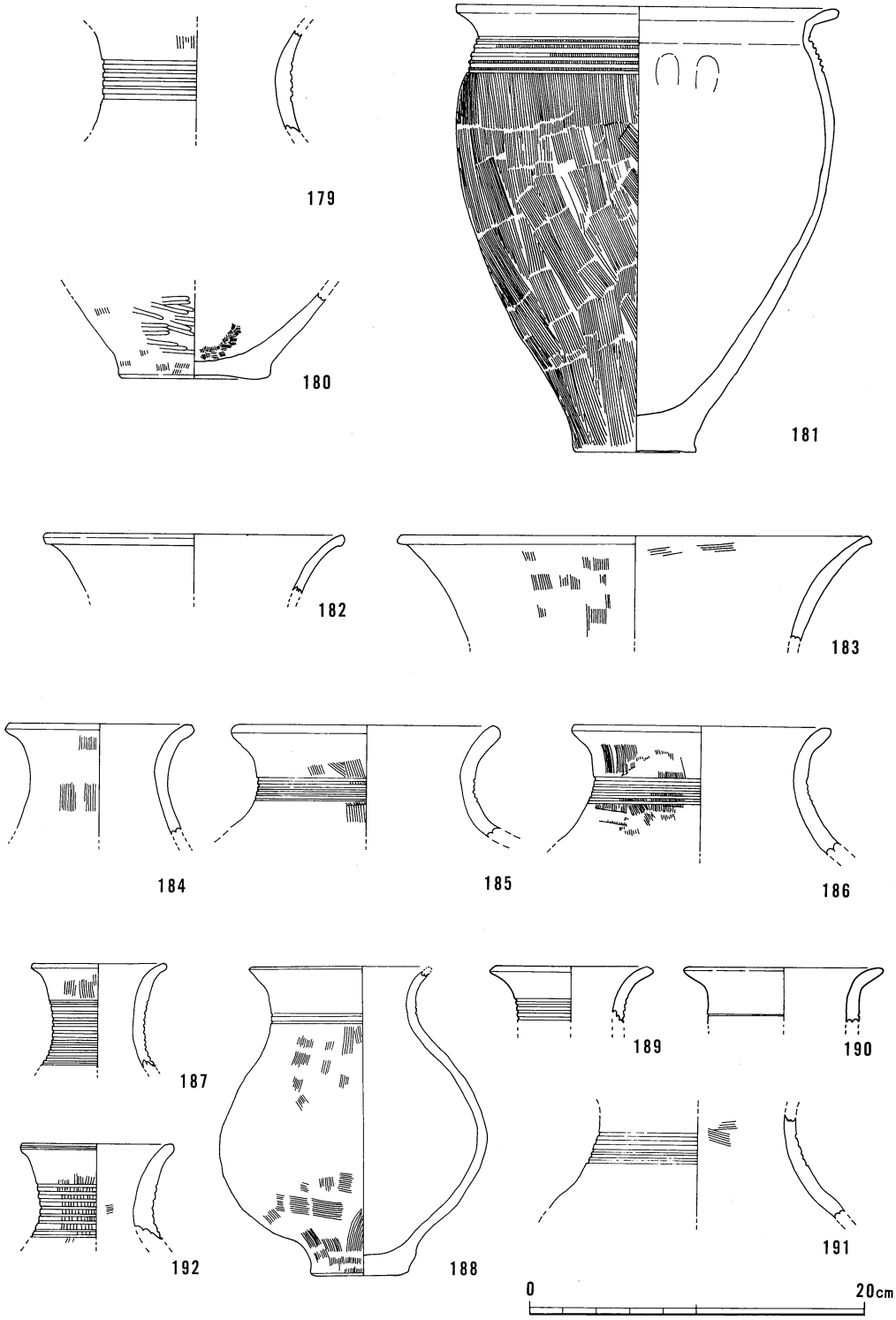
第189図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



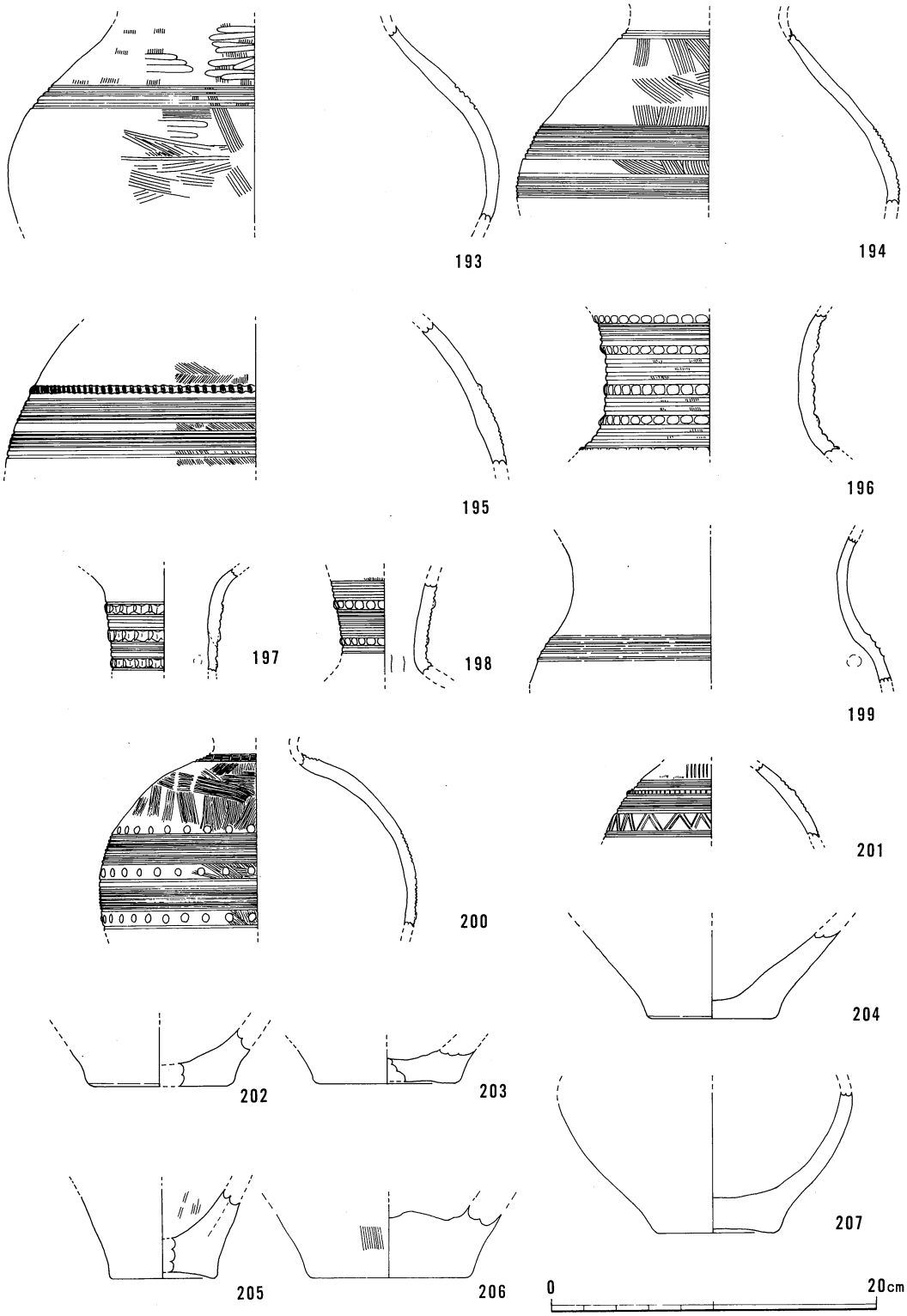
第190図　第Ⅰ・Ⅳ層出土遺物



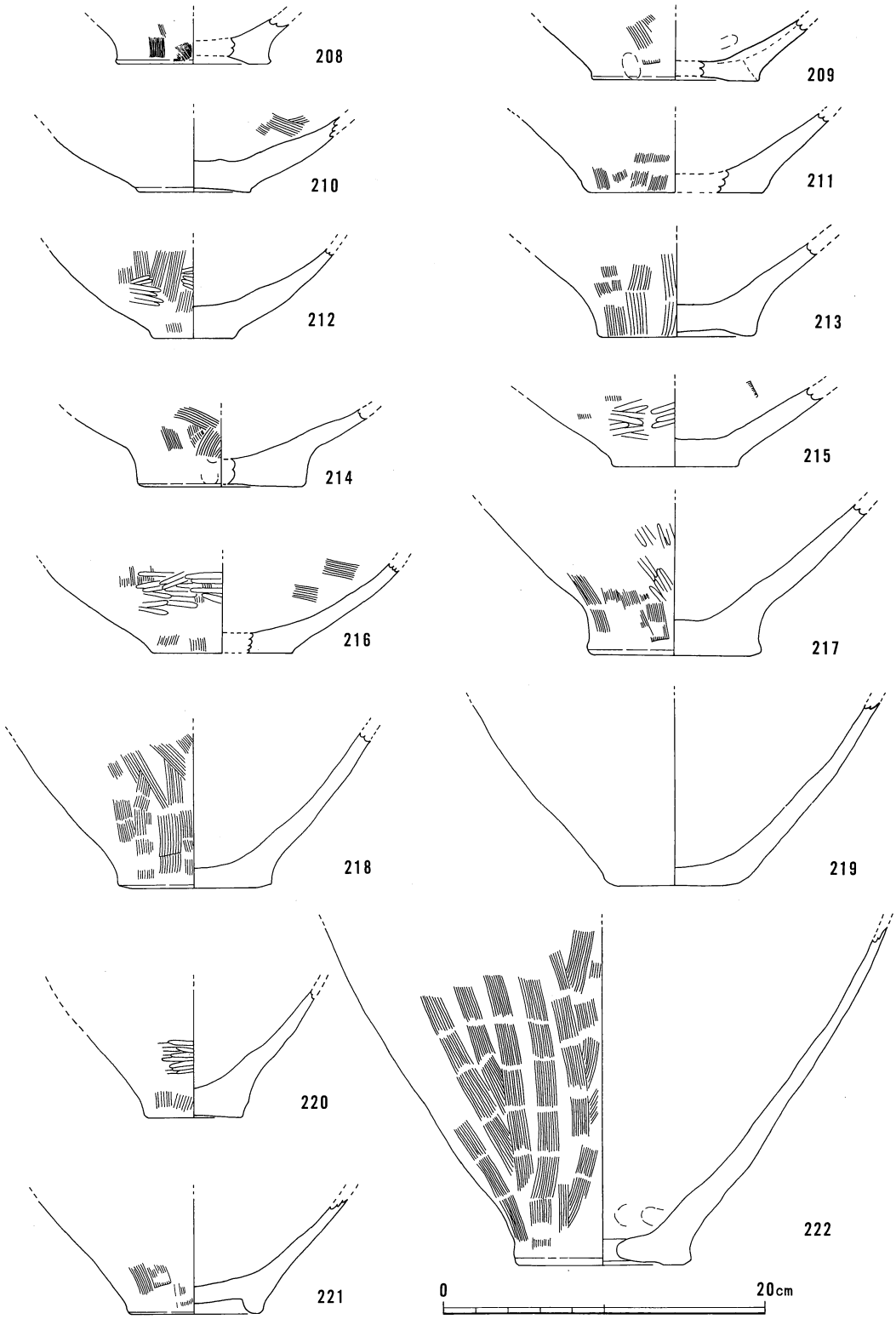
第191図　第Ⅳ・Ⅴ層出土遺物



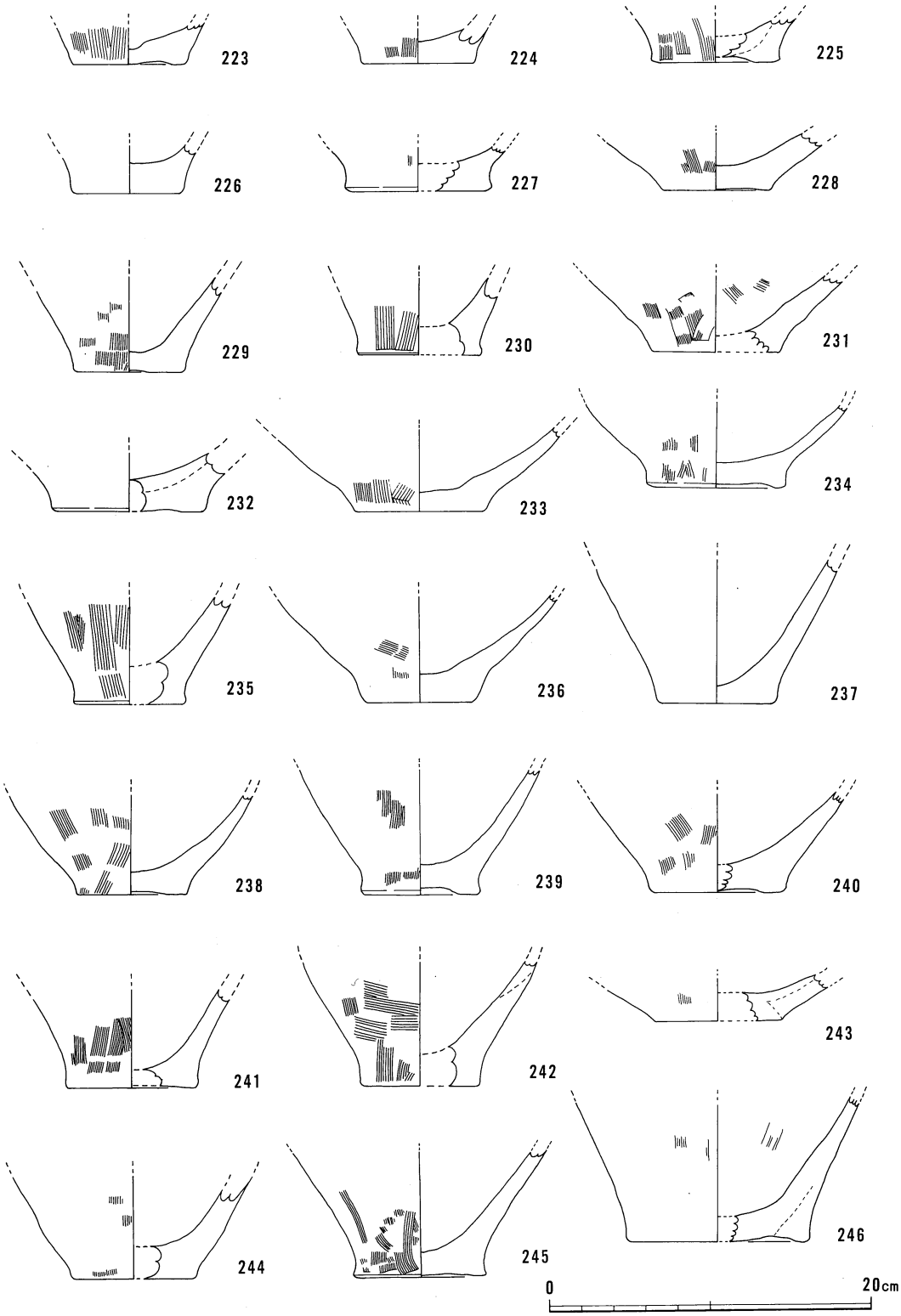
第192図　ＳＴ2･4出土遺物



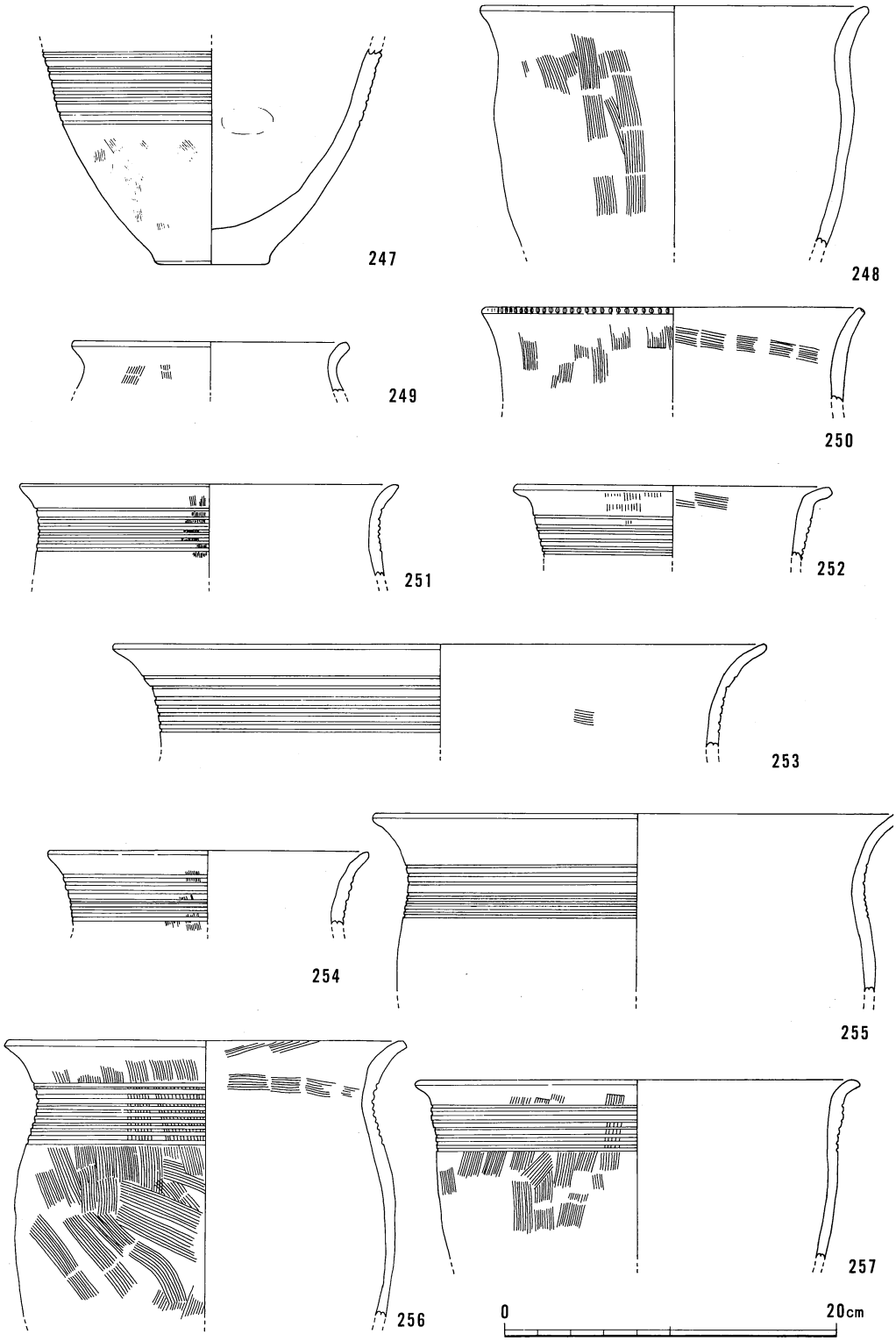
第193図　ＳＴ４出土遺物



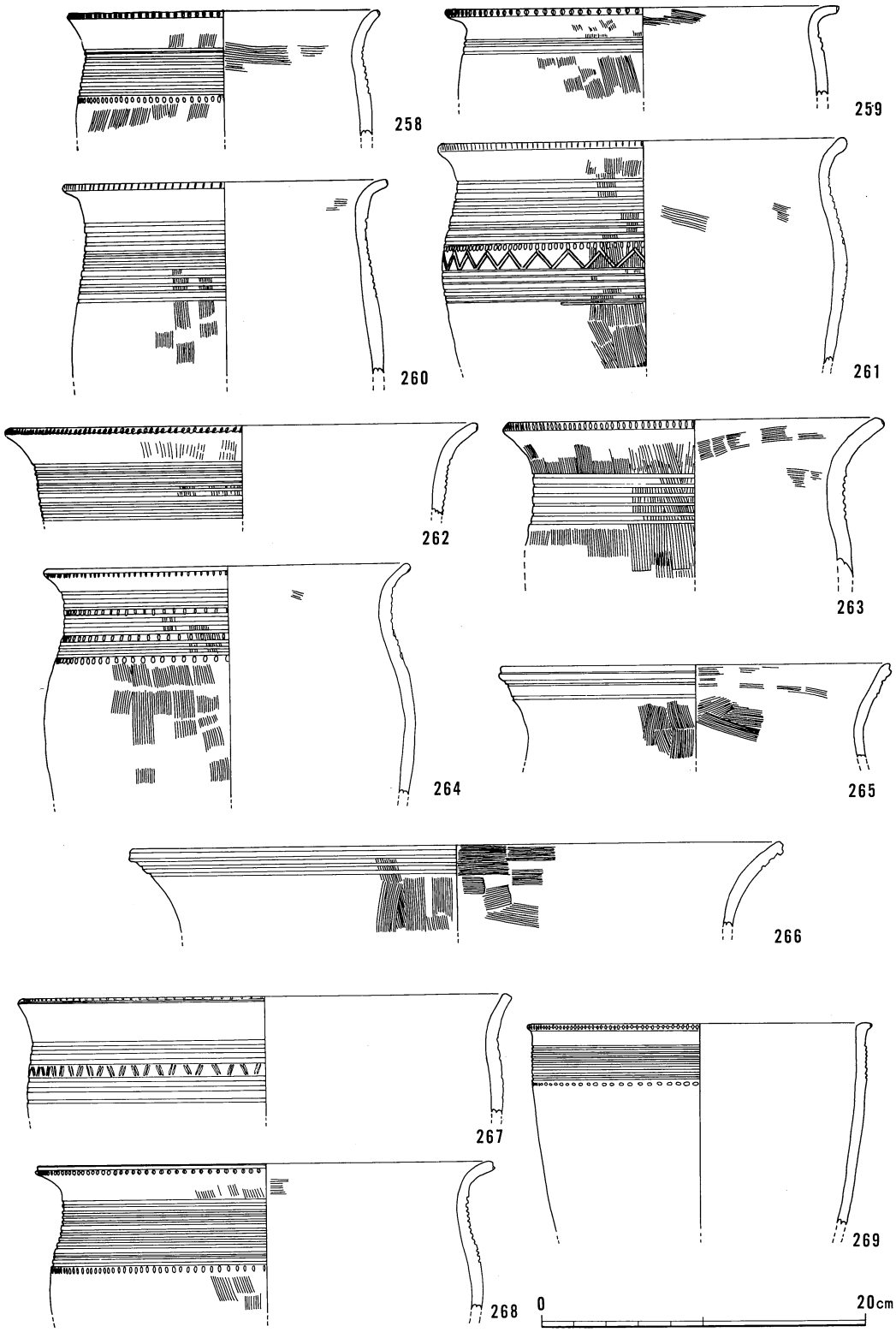
第194図　ＳＴ４出土遺物



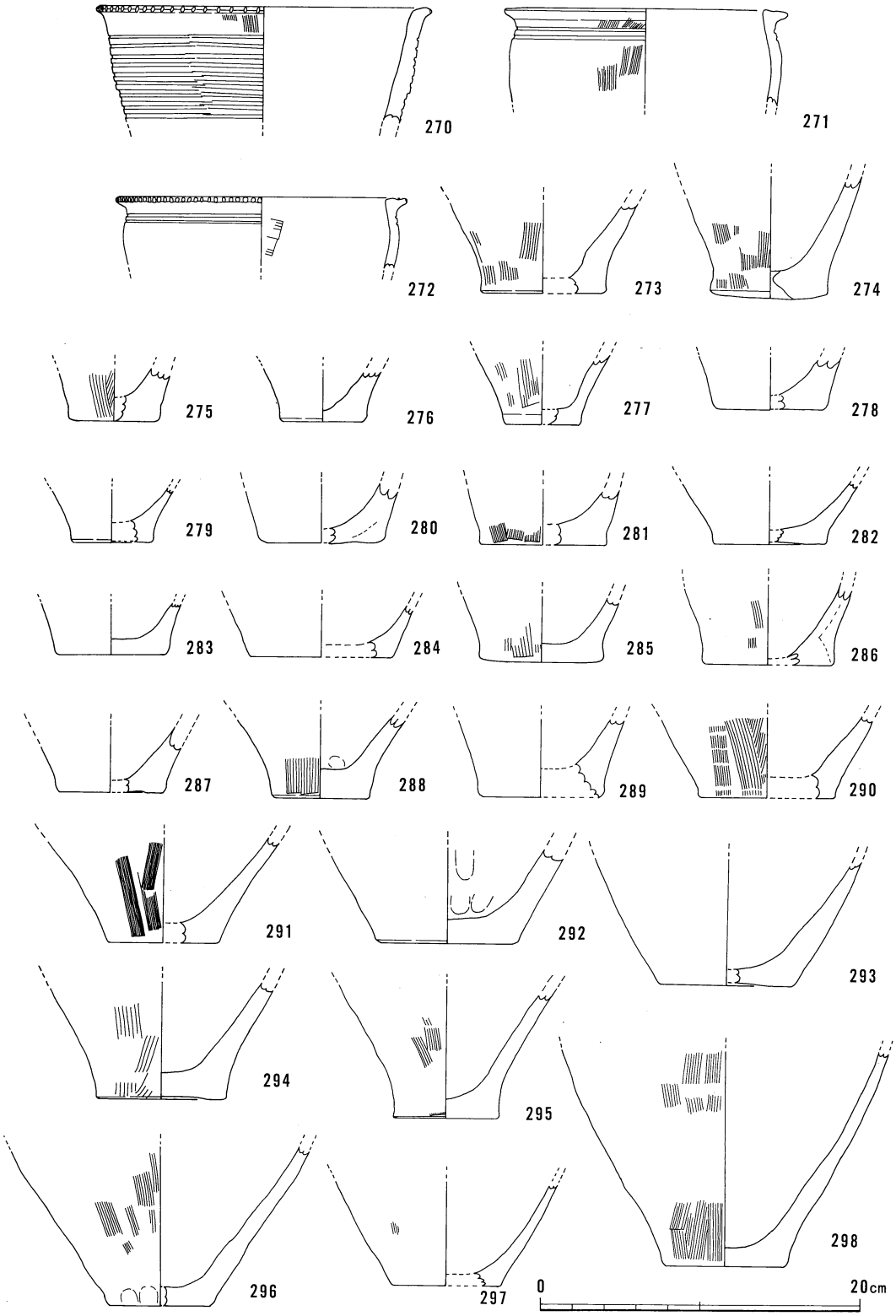
第195図　ＳＴ４出土遺物



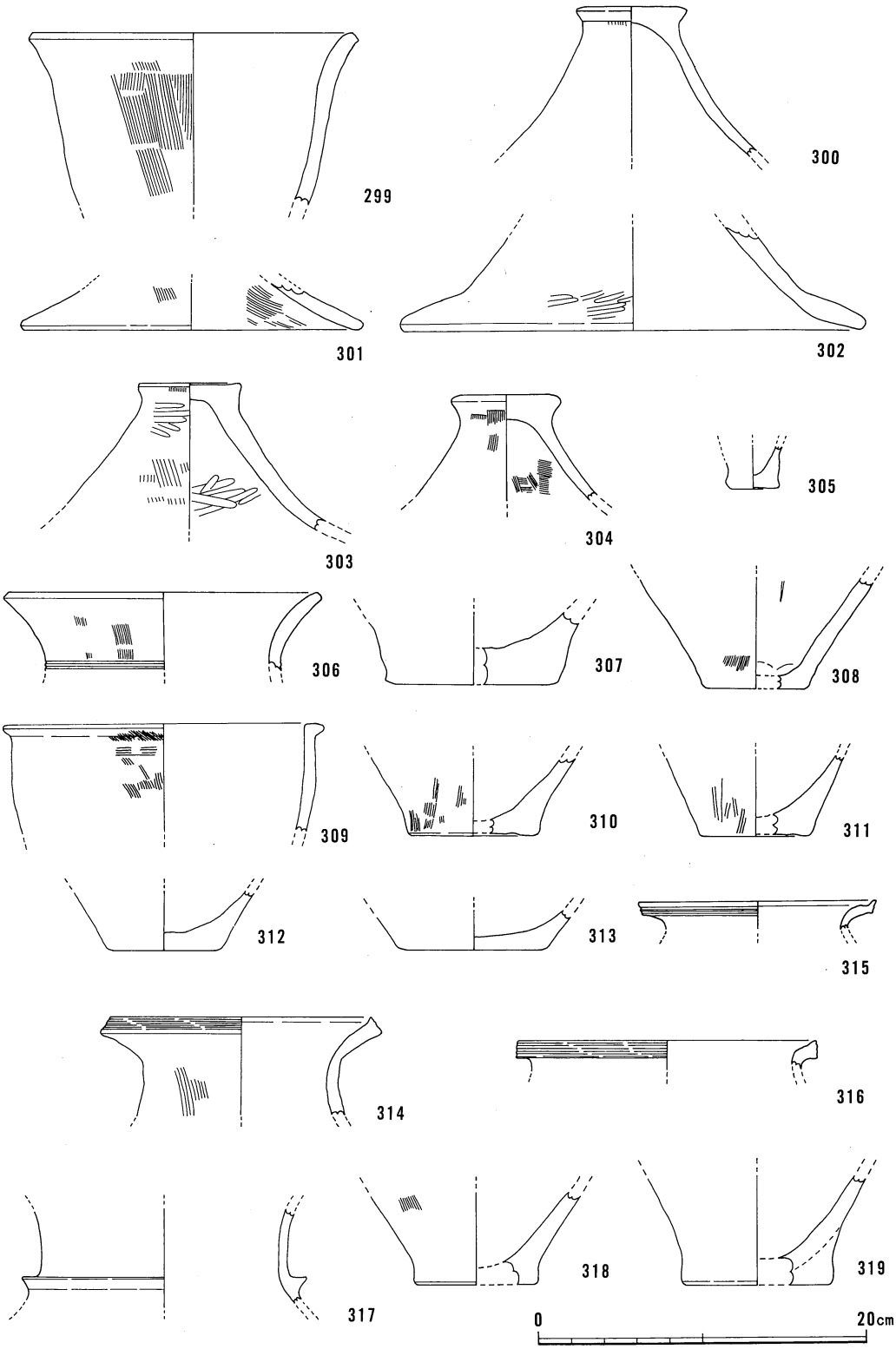
第196図　ＳＴ４出土遺物



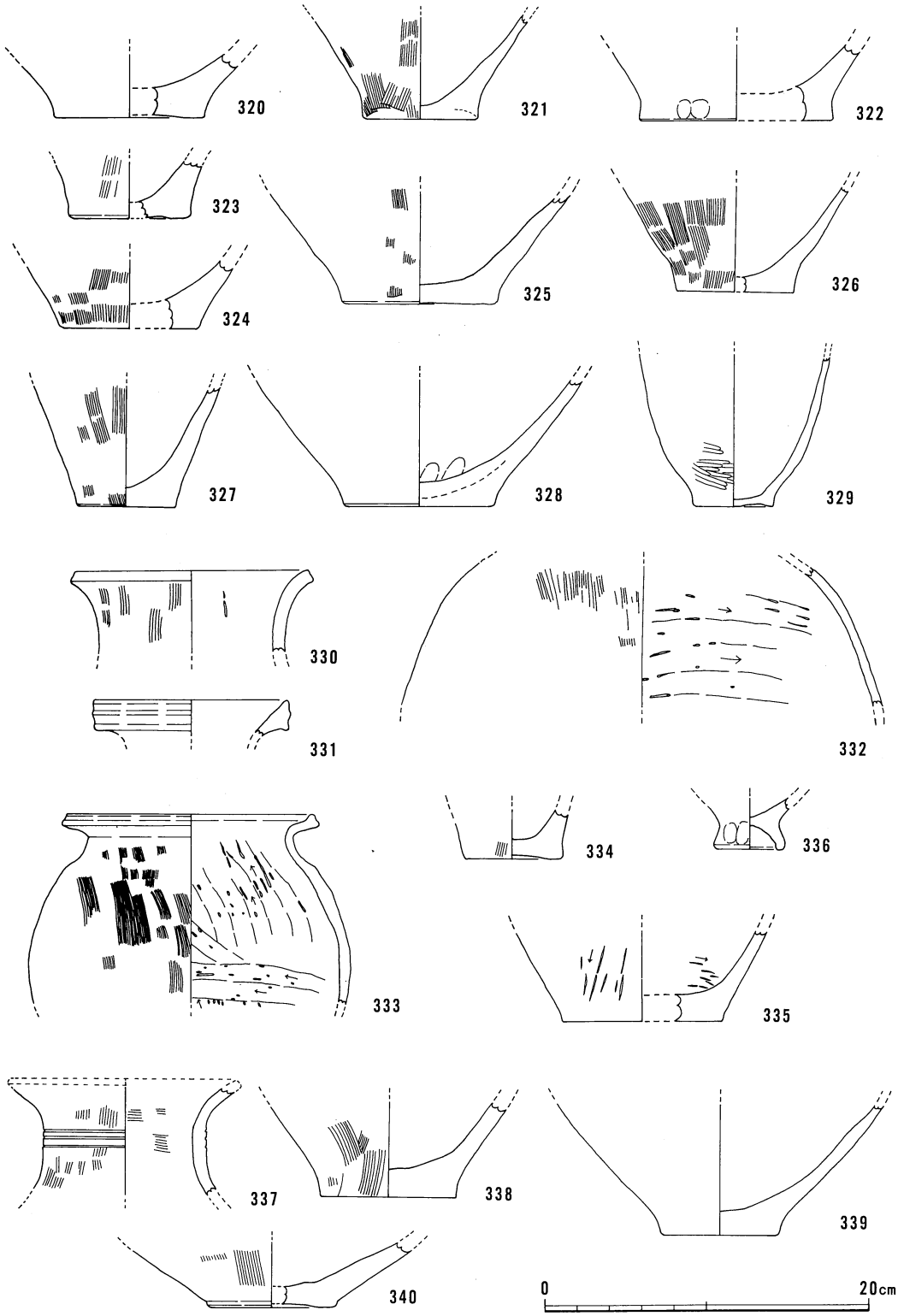
第197図　ＳＴ４出土遺物



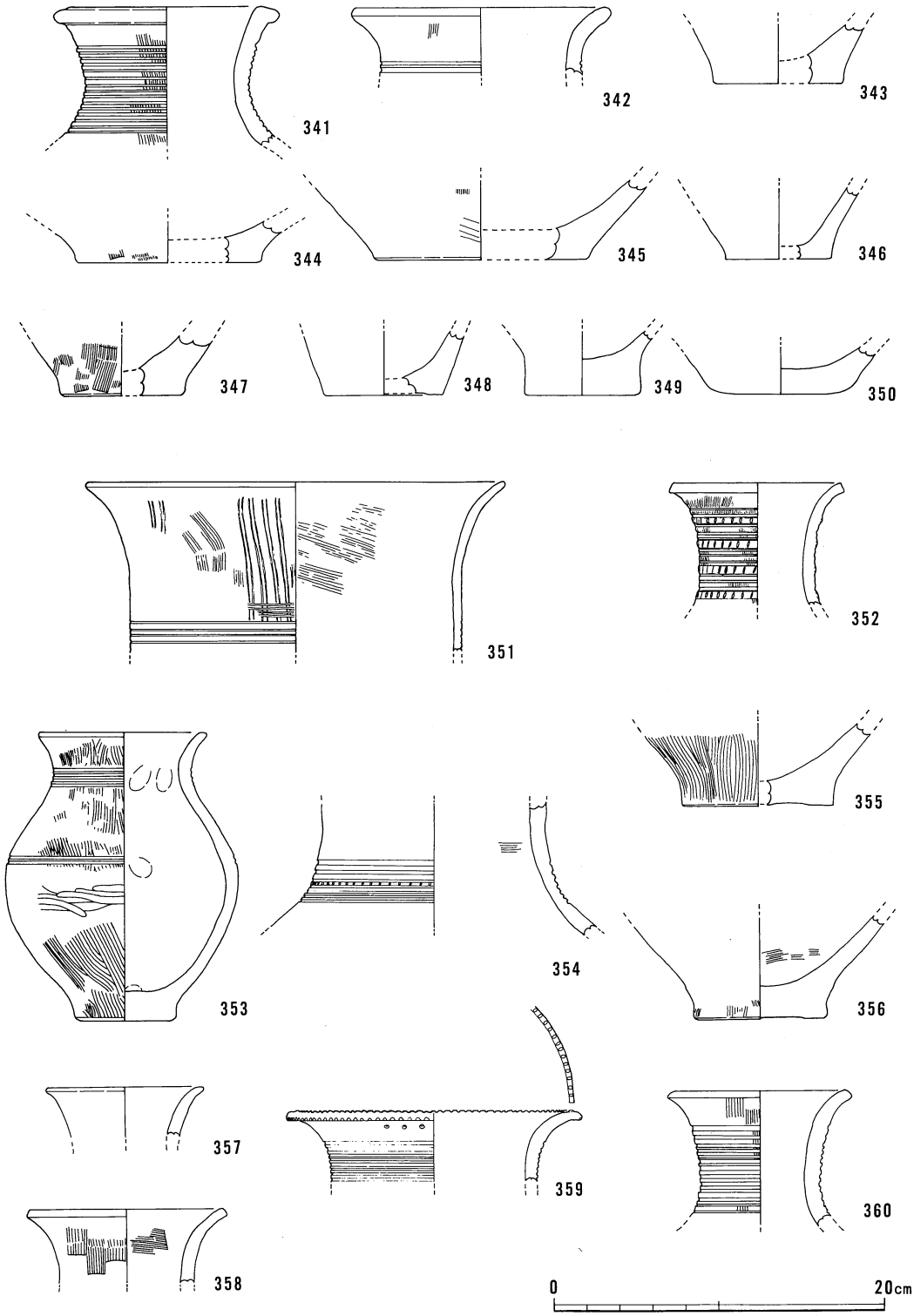
第198図　ＳＴ４出土遺物



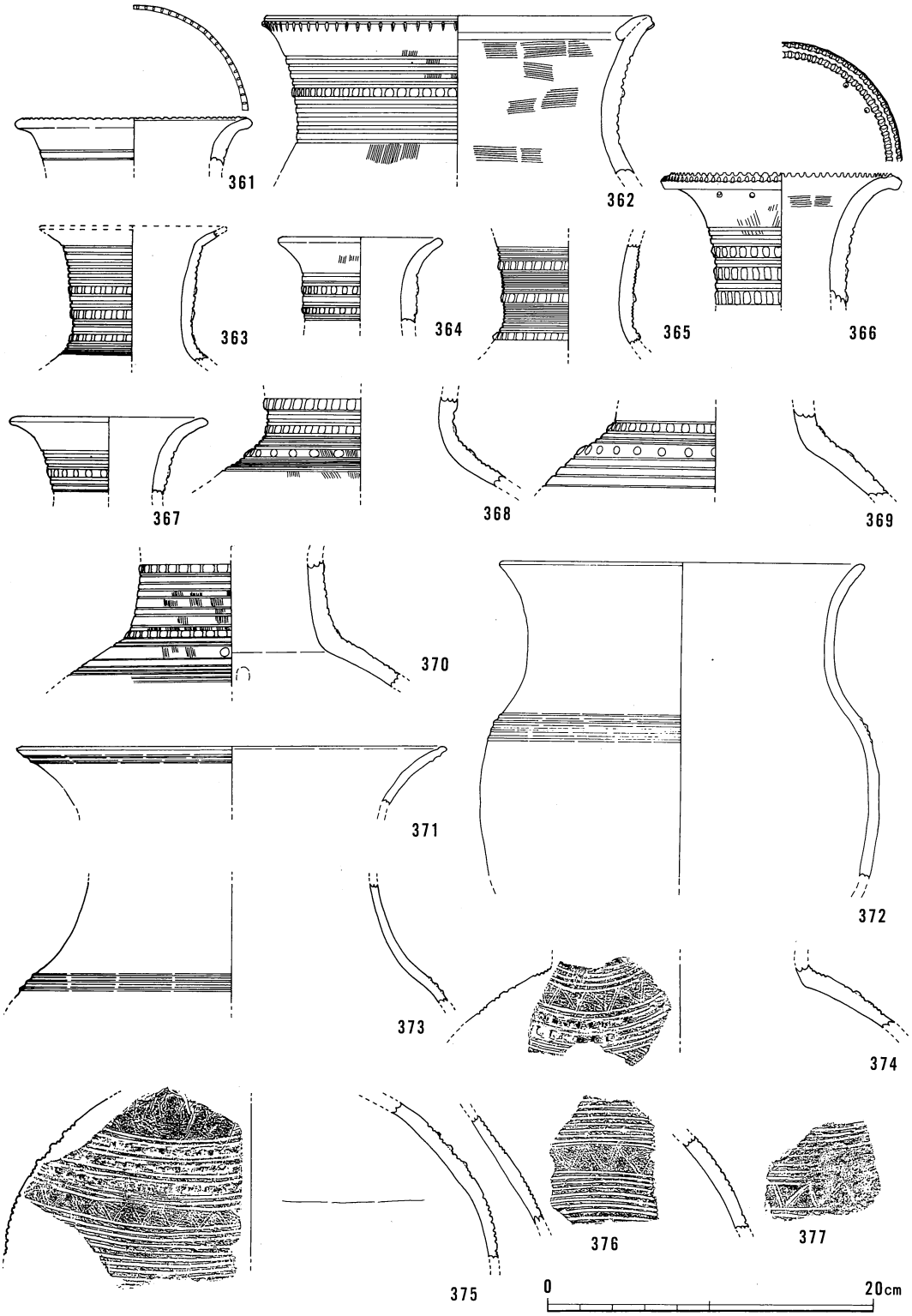
第199図　ＳＴ４～６出土遺物



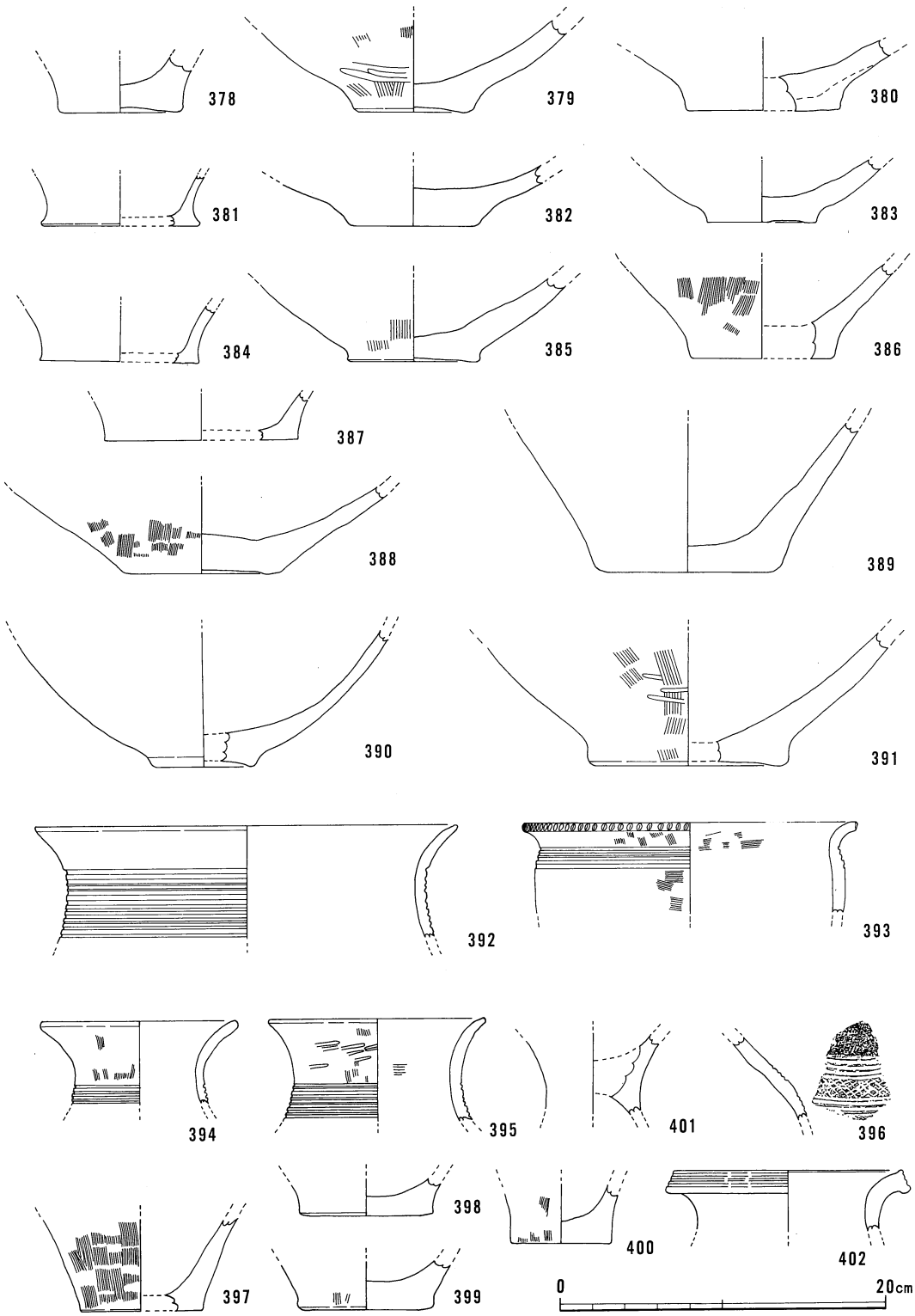
第200図　ＳＴ３・６、ＳＫ２出土遺物



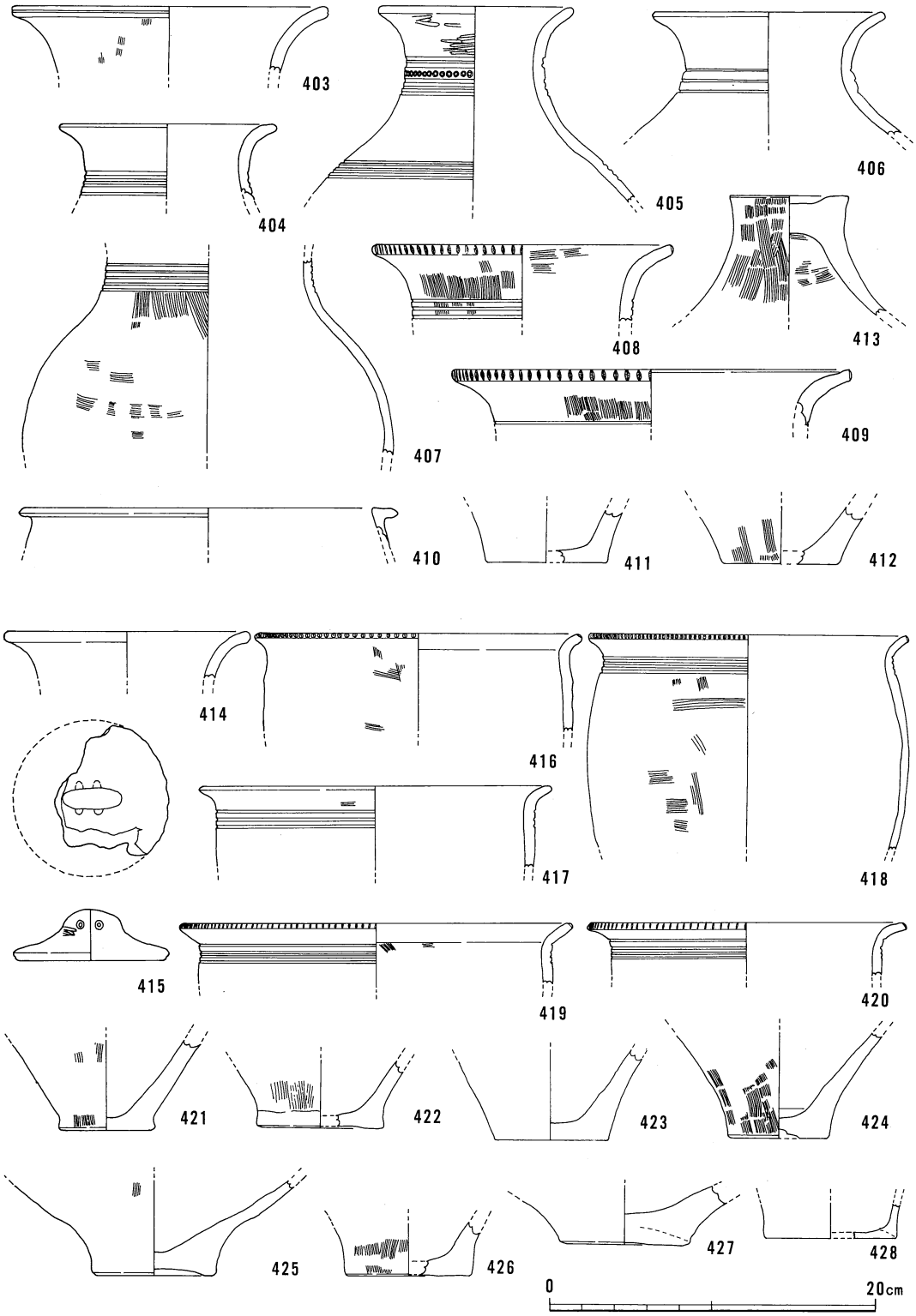
第201図　ＳＫ4・7・12・13・26出土遺物



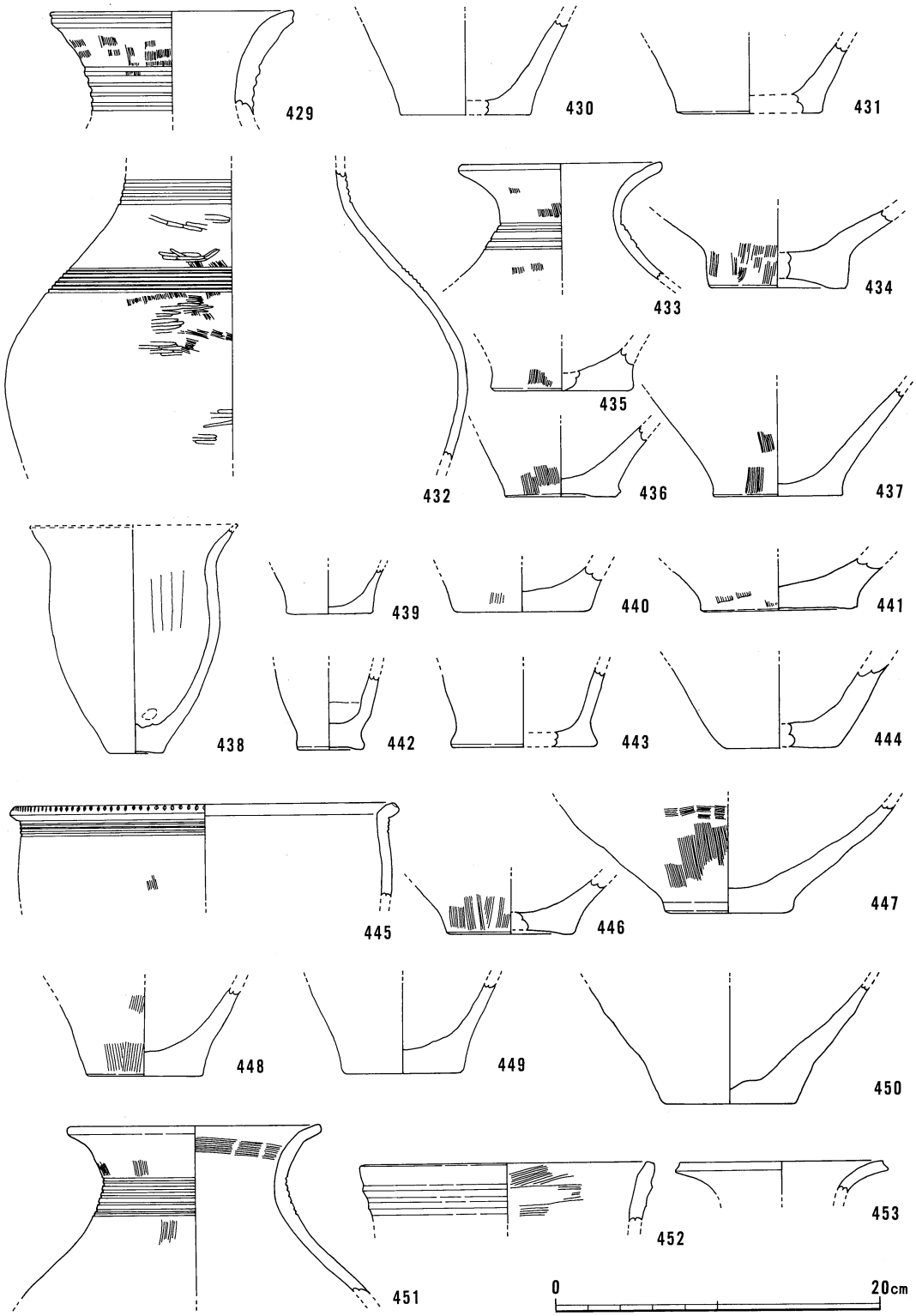
第202図　ＳＫ26出土遺物



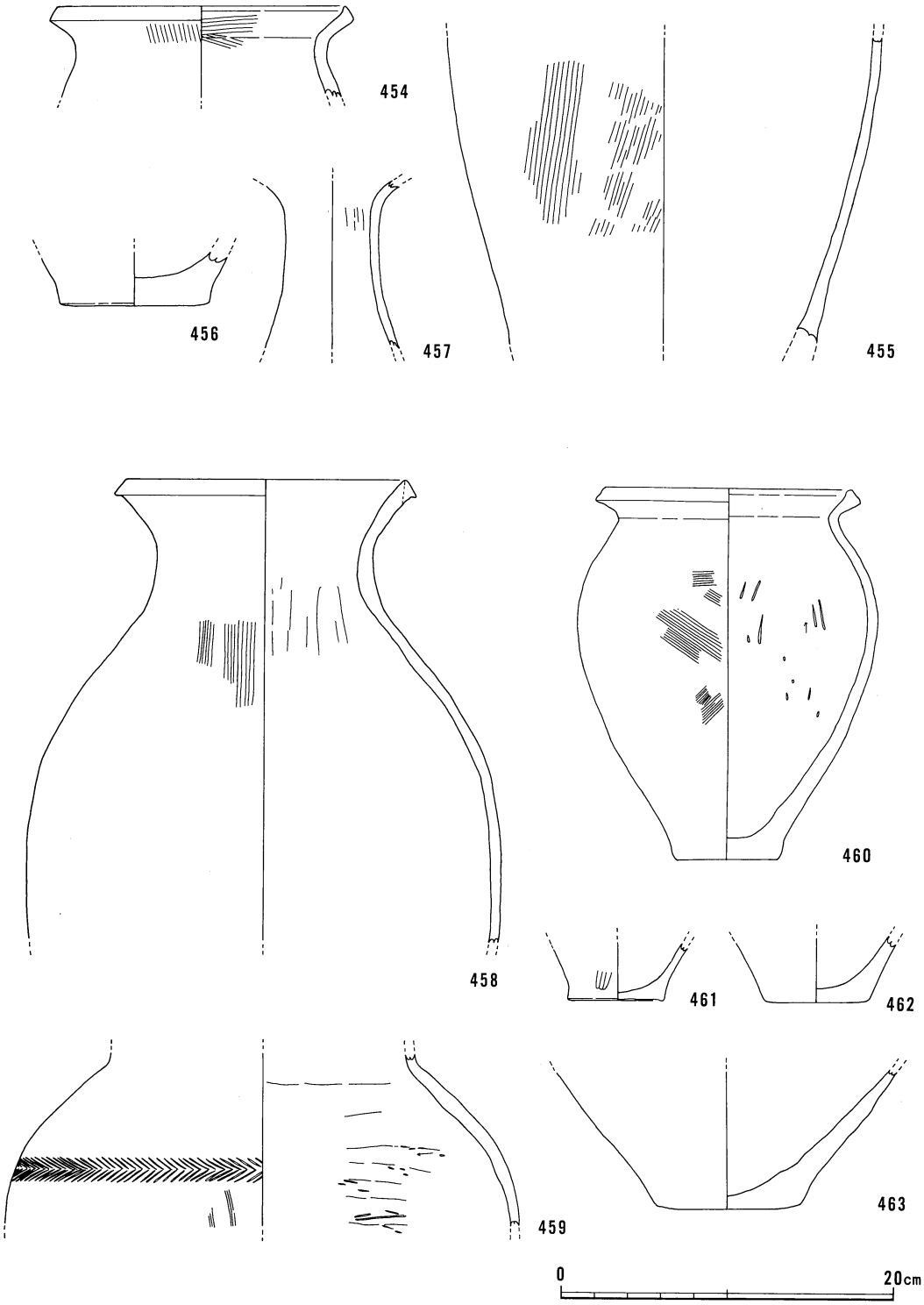
第203図　ＳＫ26・32出土遺物



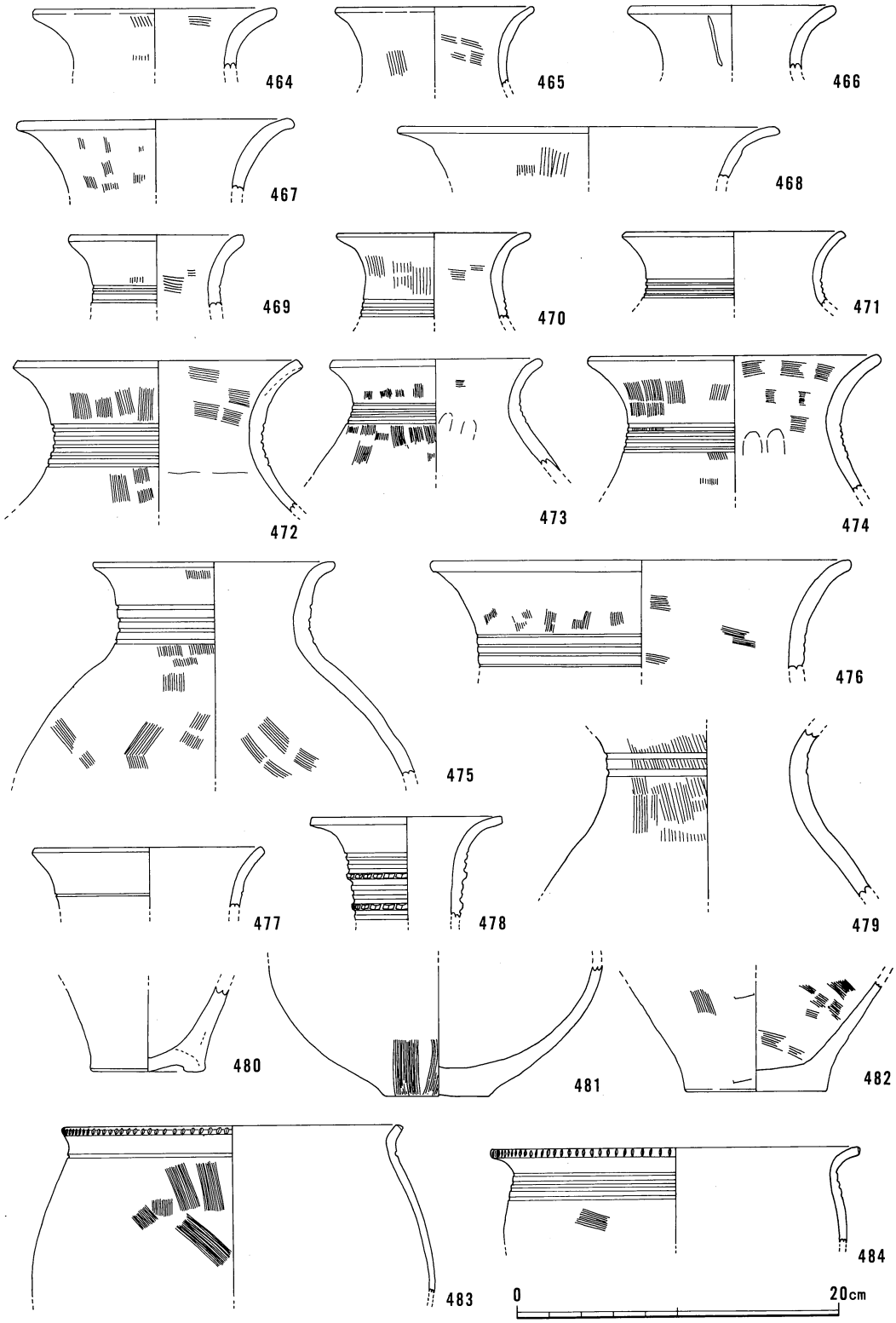
第204図　ＳＫ38・39出土遺物



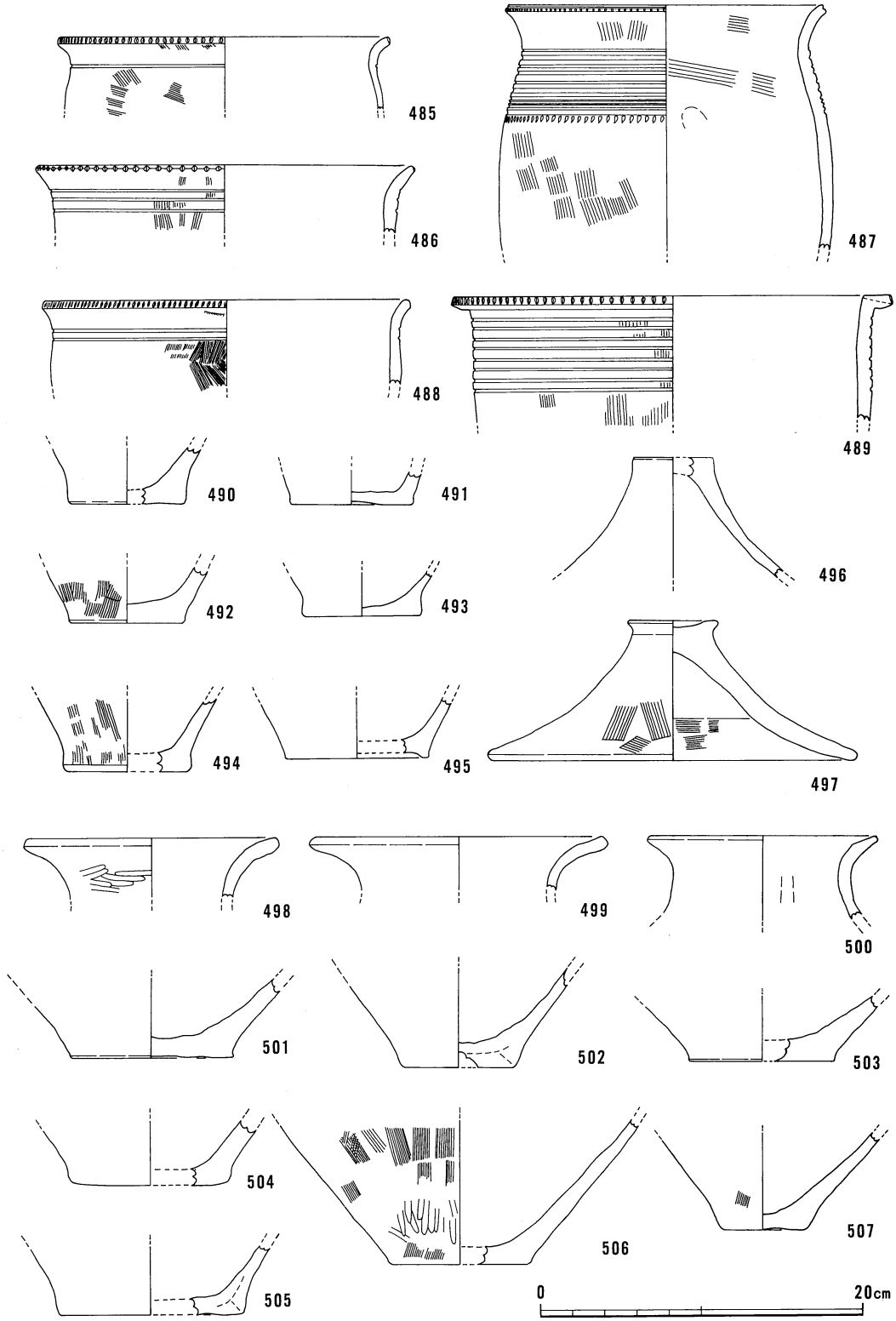
第205図　ＳＫ6・11・40～43出土遺物



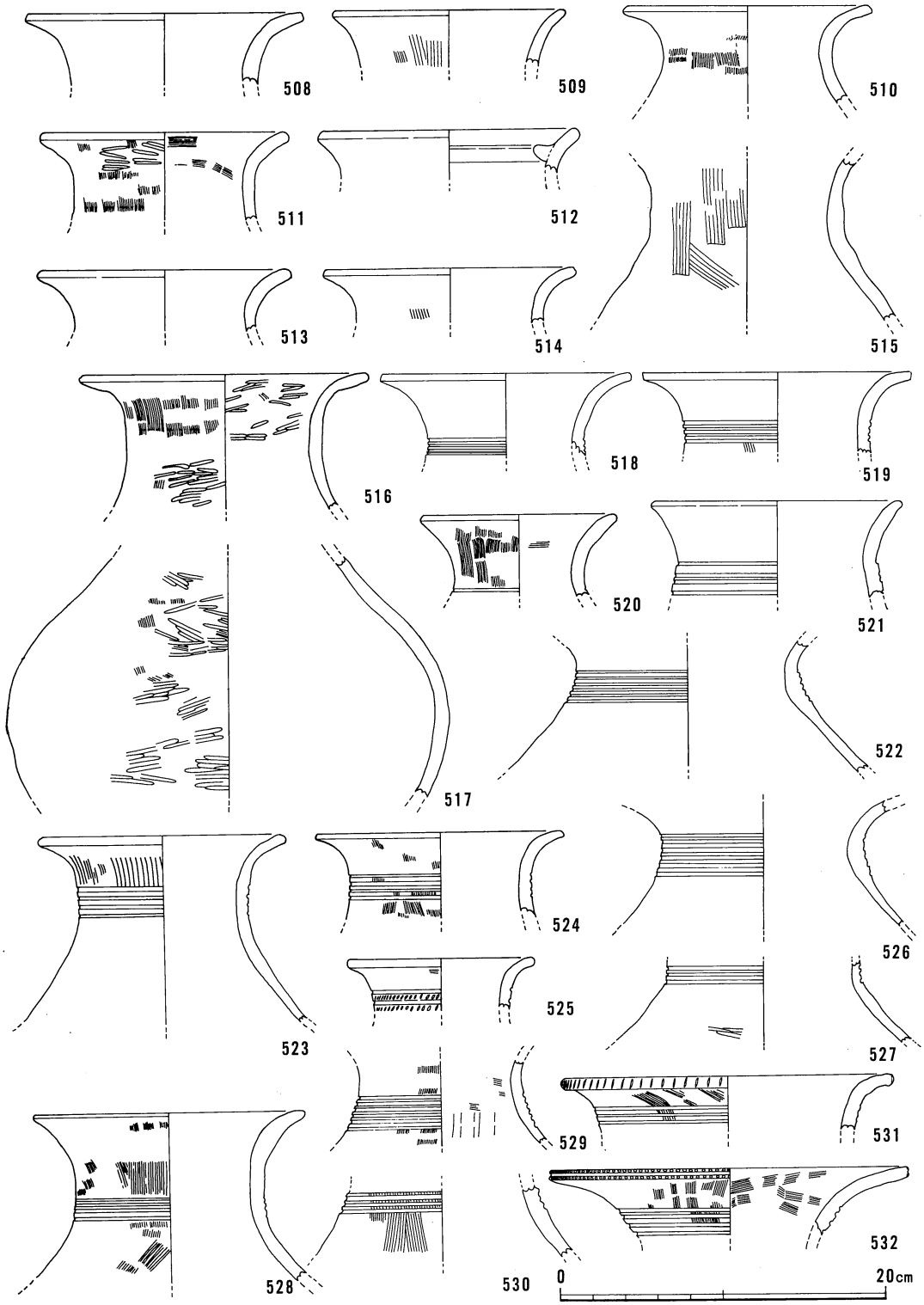
第206図　ＳＫ21・27・30出土遺物



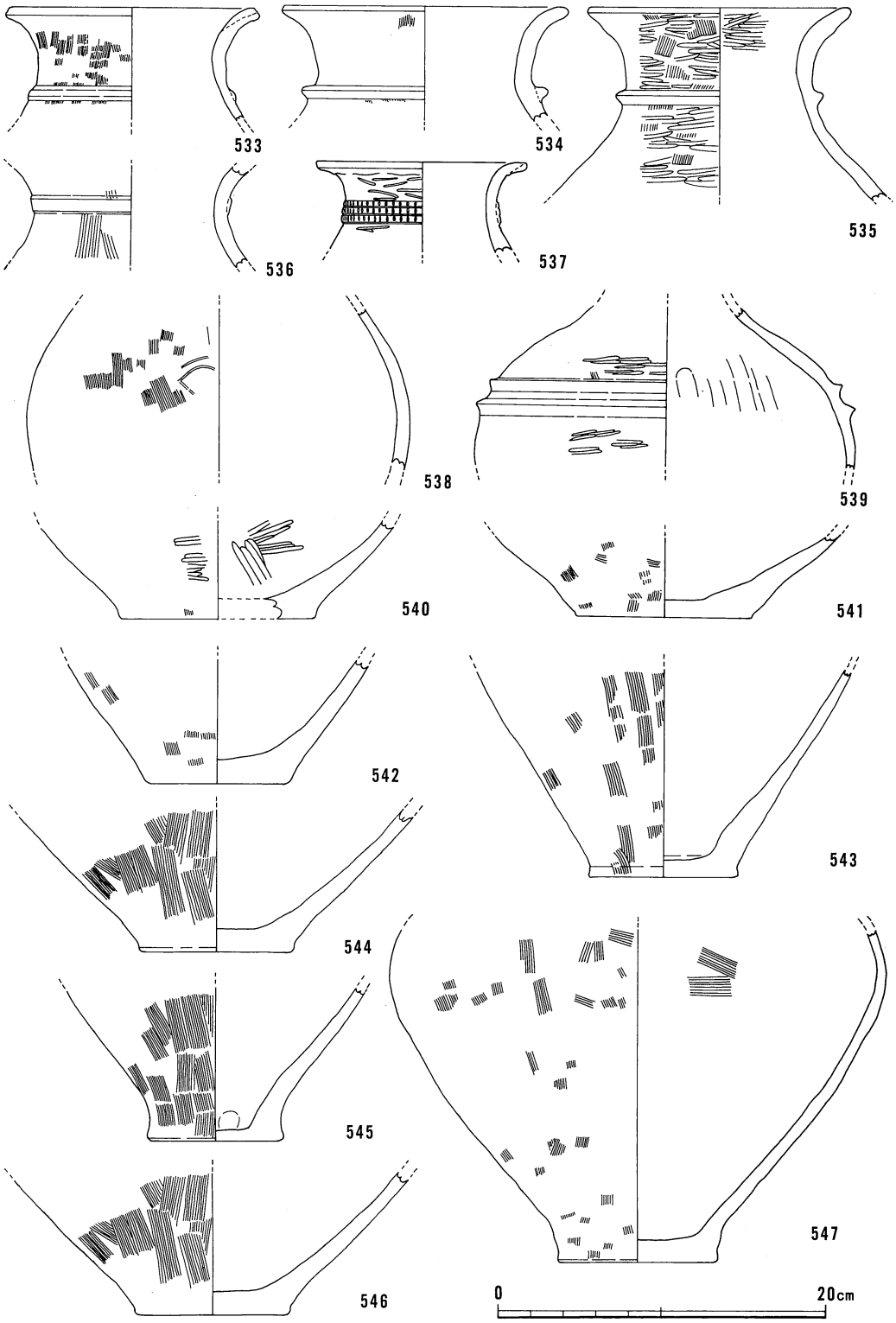
第207図　ＳＤ５出土遺物



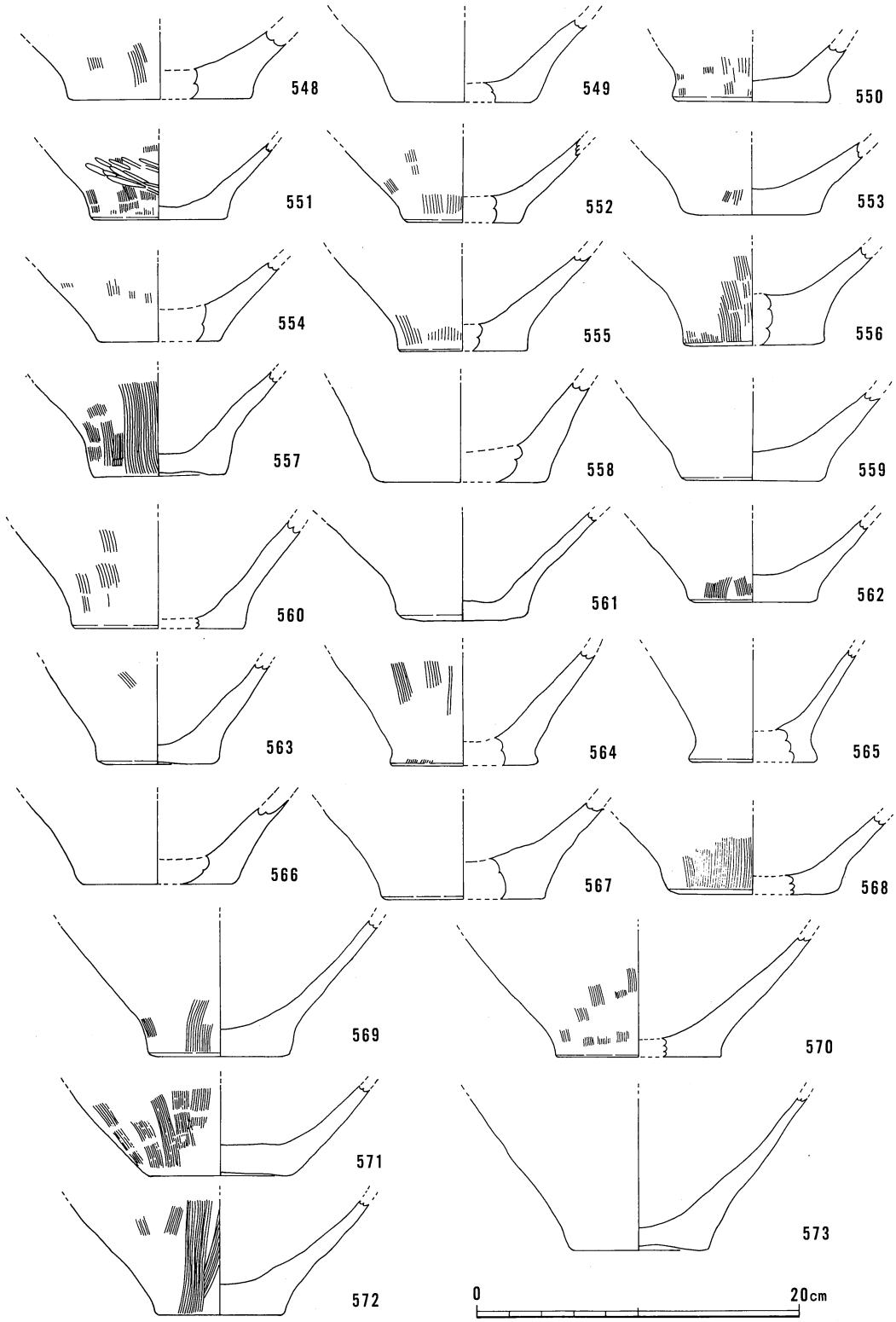
第208図　ＳＤ5･6出土遺物



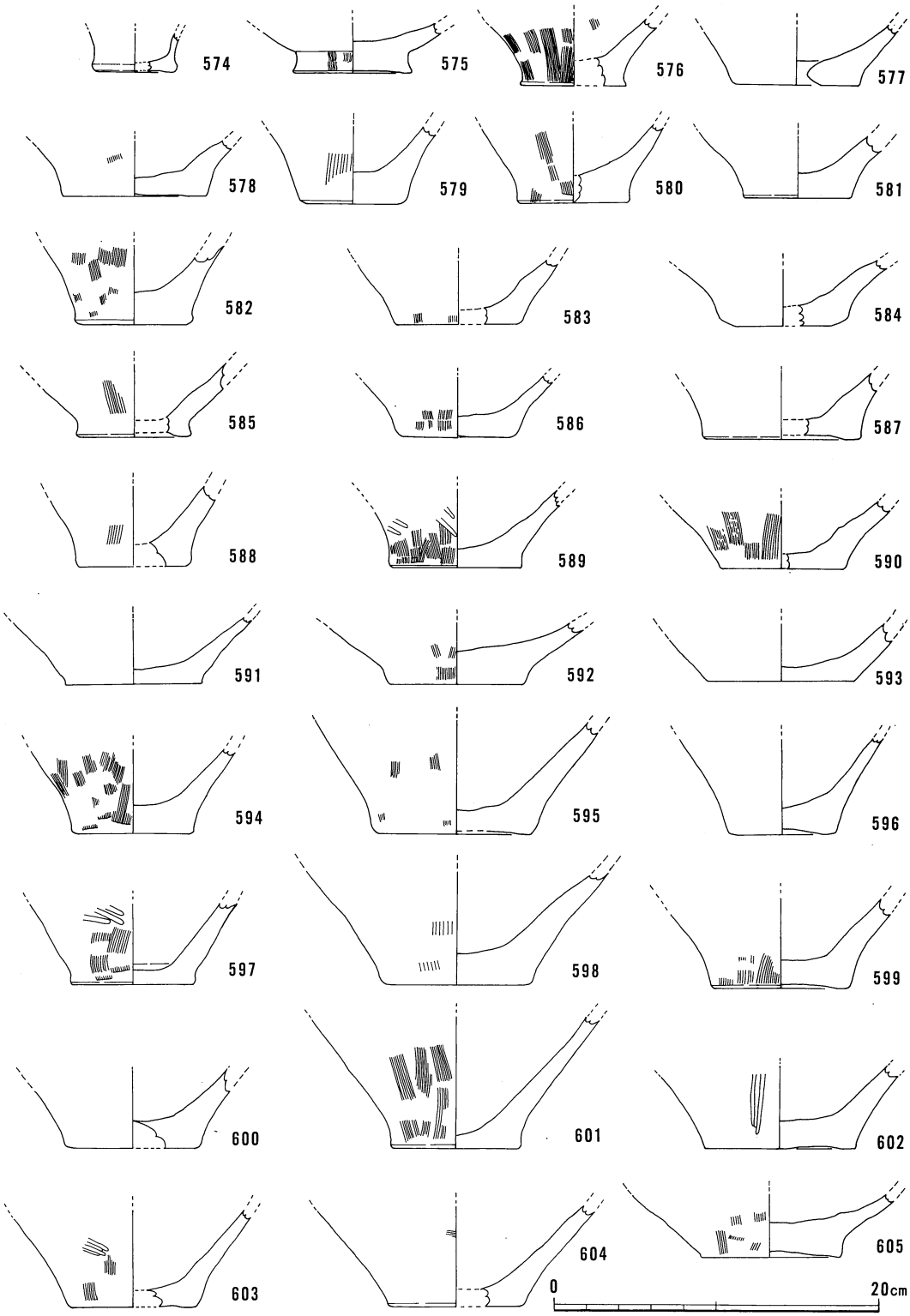
第209図　ＳＤ７出土遺物



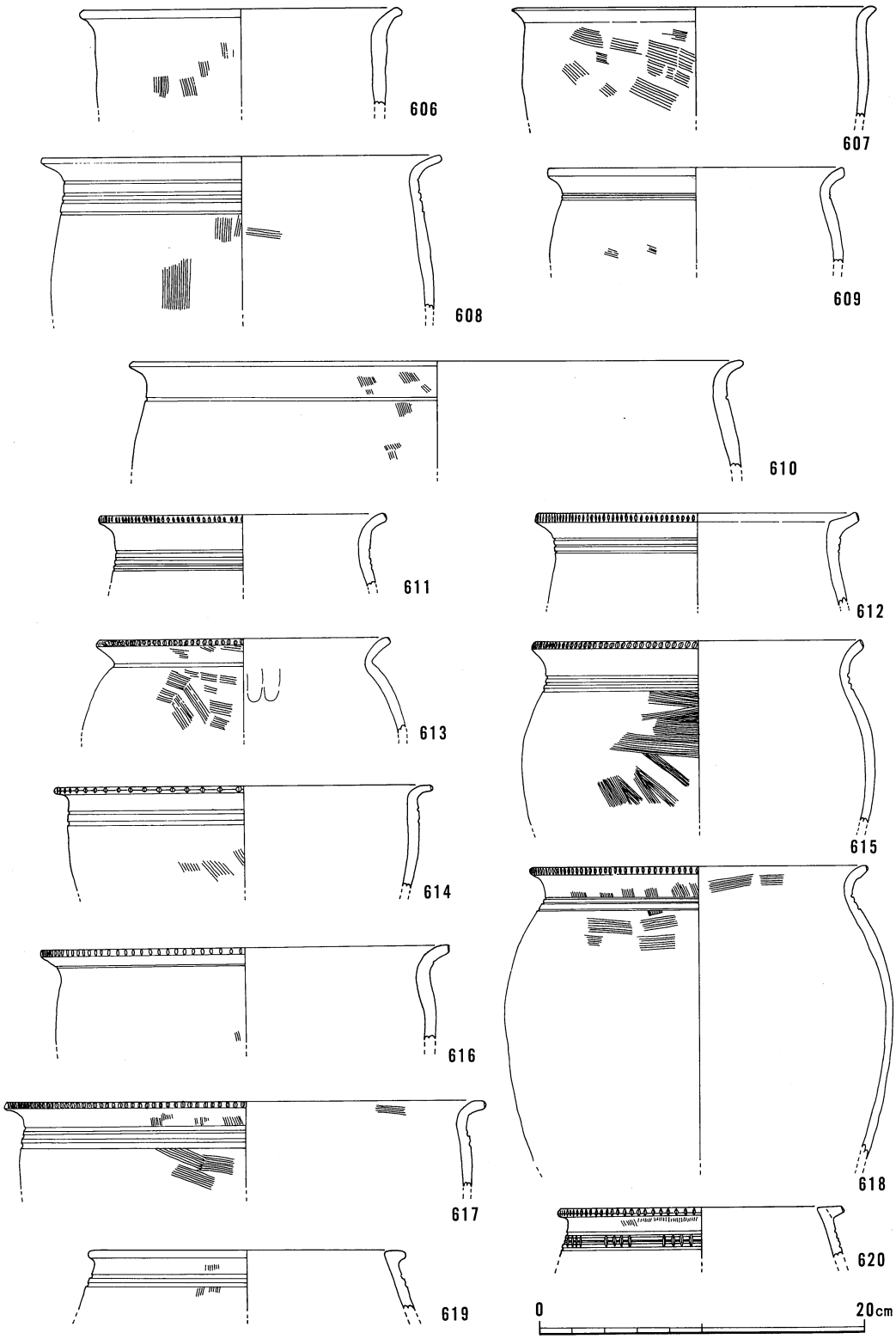
第210図　ＳＤ７出土遺物



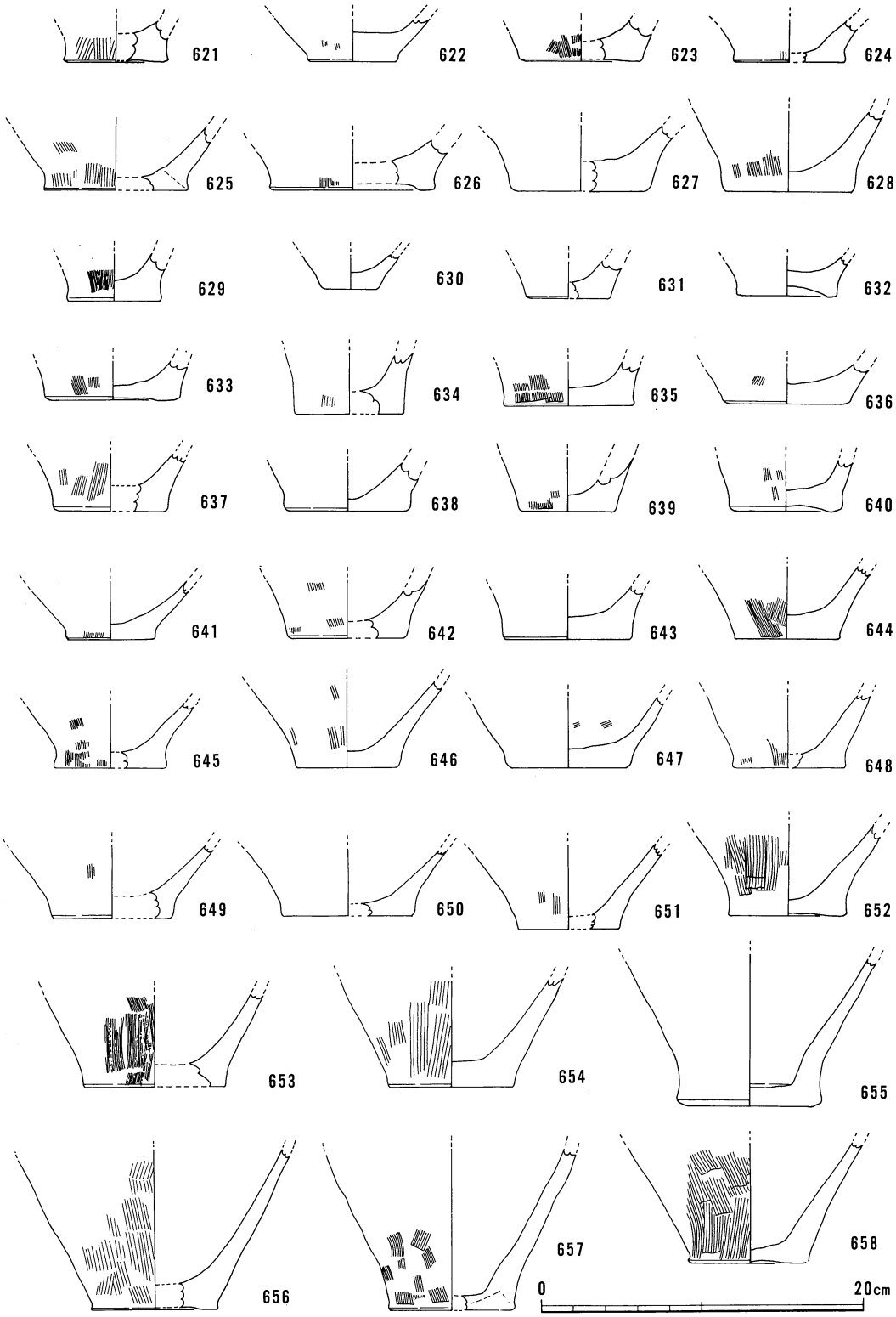
第211図　ＳＤ７出土遺物



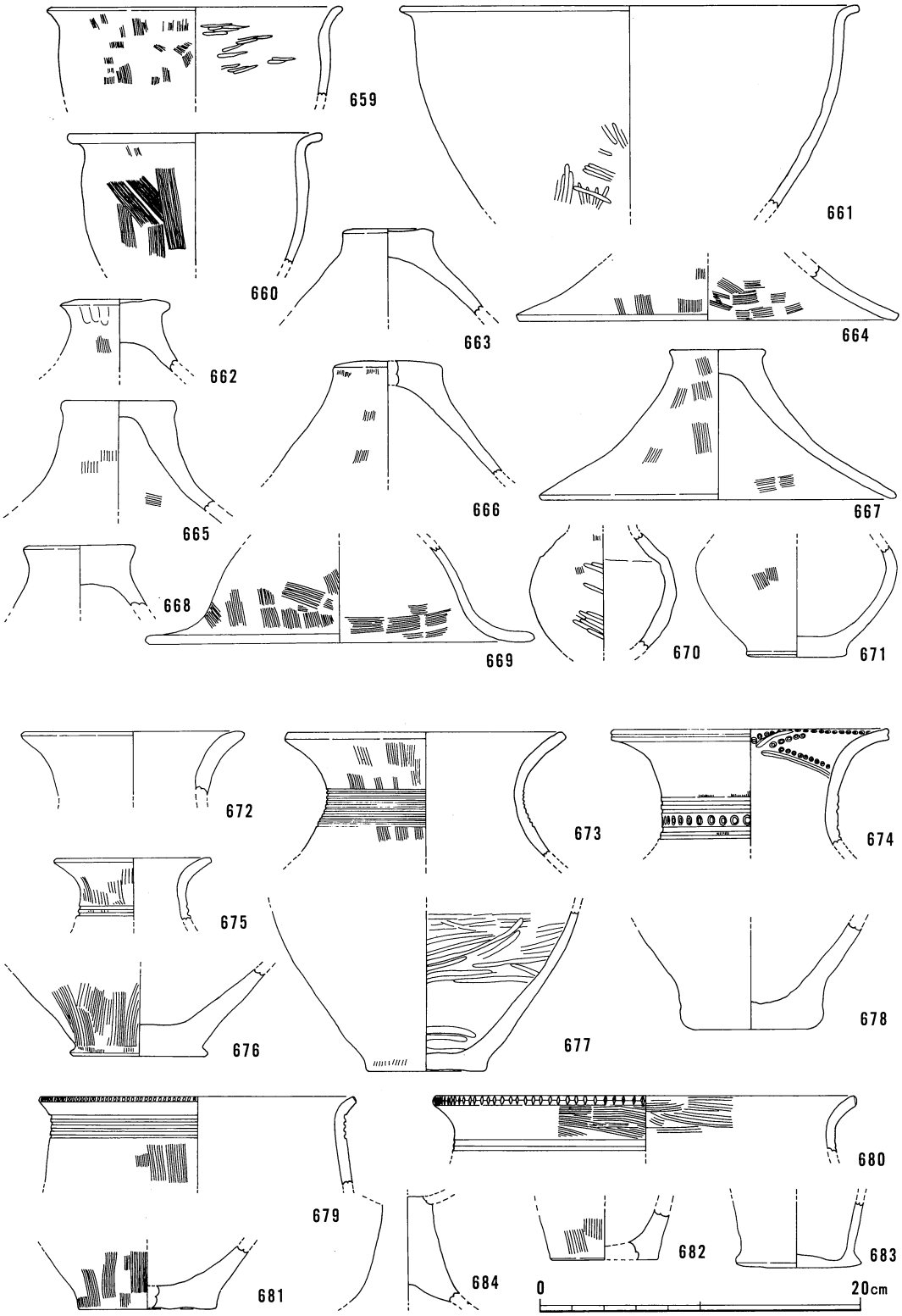
第212図　ＳＤ７出土遺物



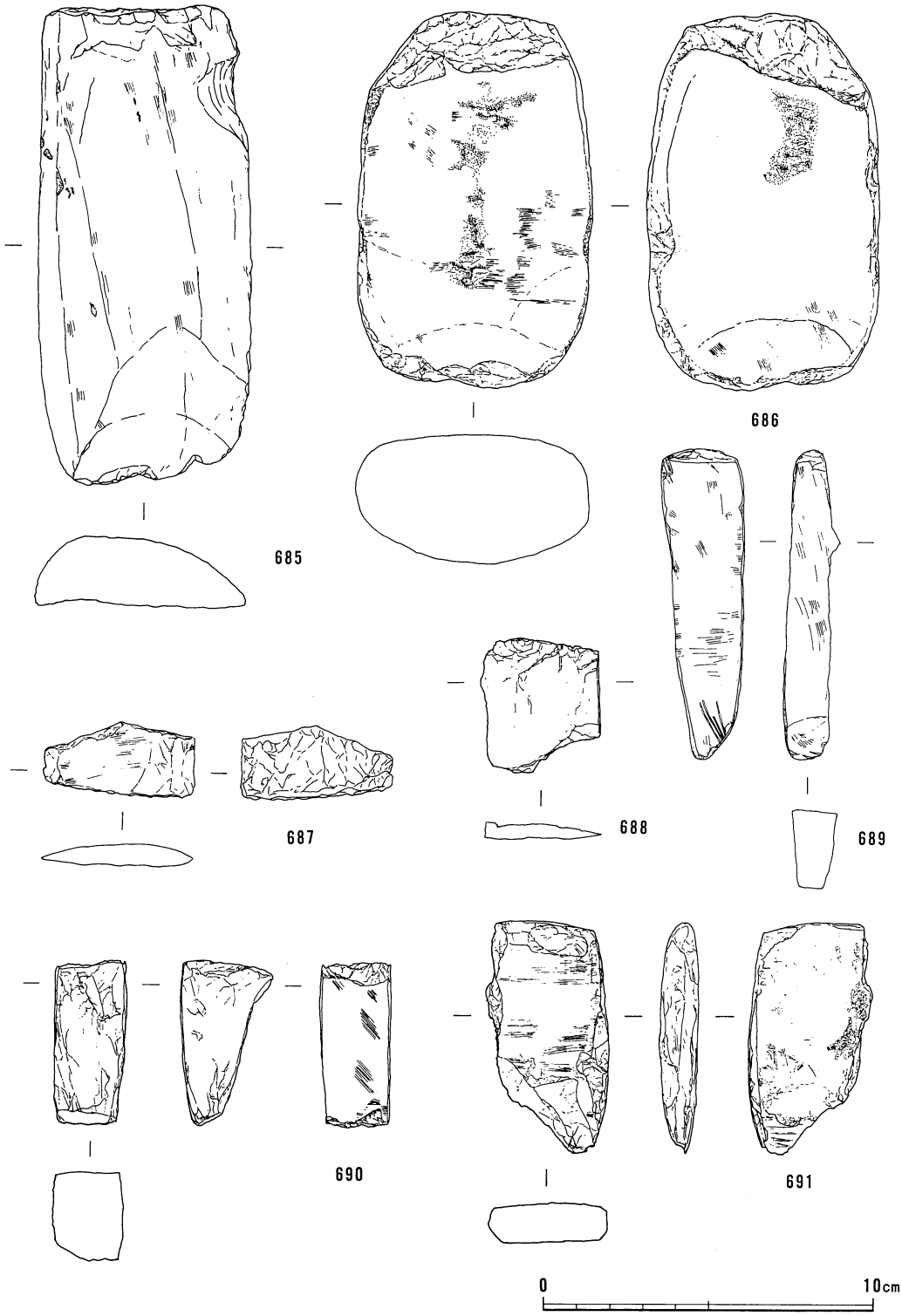
第213図　ＳＤ７出土遺物



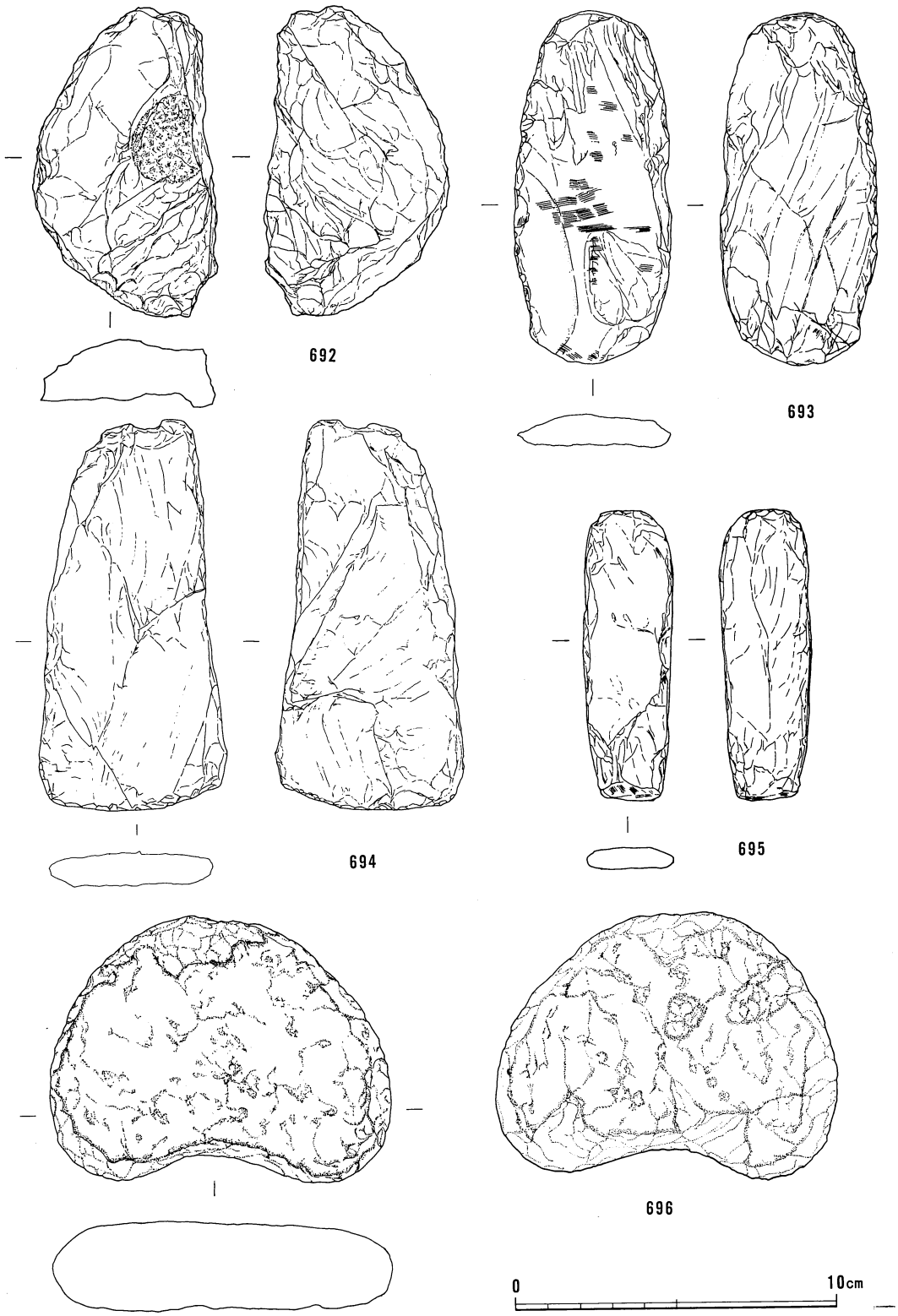
第214図　ＳＤ７出土遺物



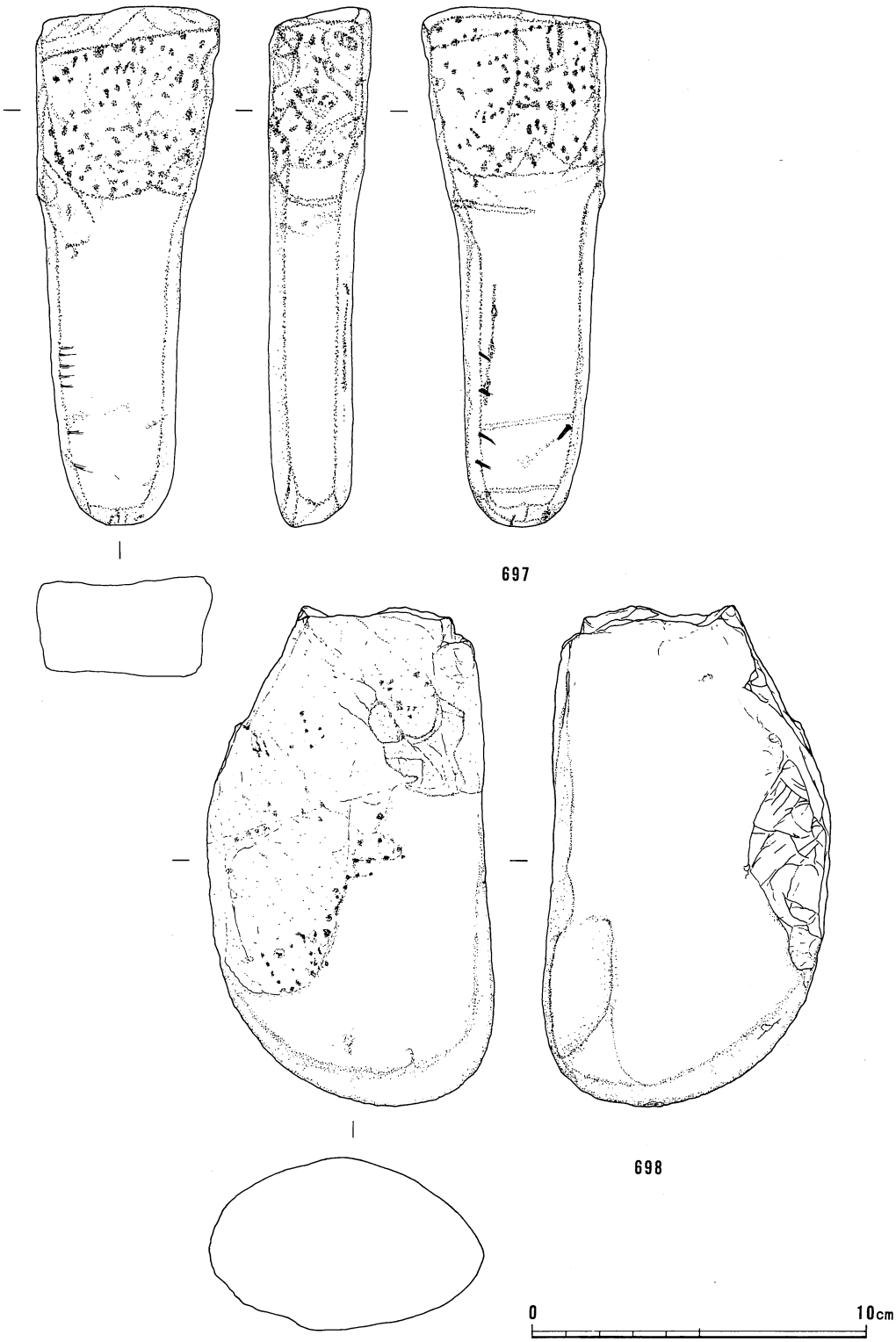
第215図　ＳＤ７、Ｐ1～10出土遺物



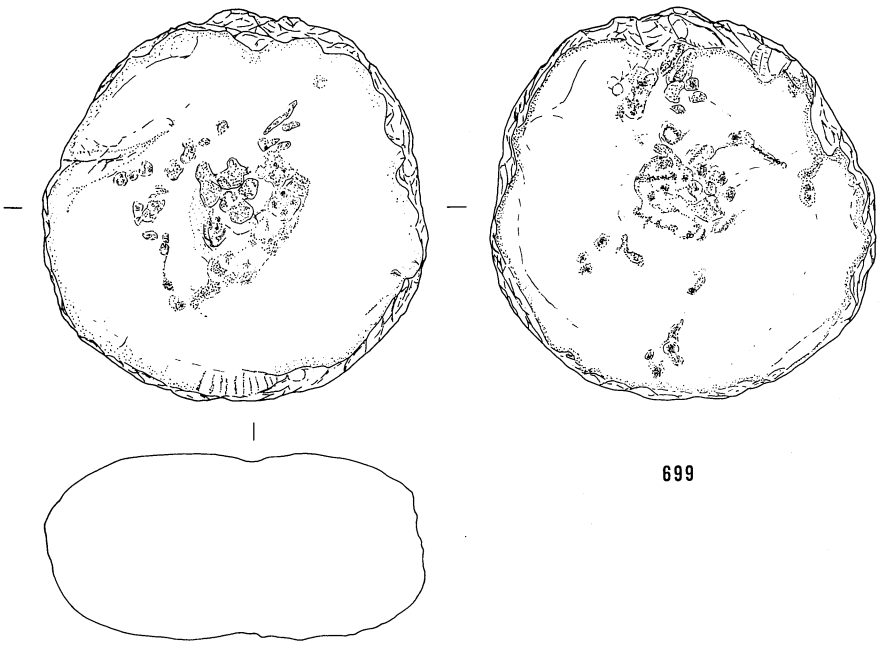
第216図　ＳＴ4・6、ＳＫ9・13、ＳＤ７出土遺物



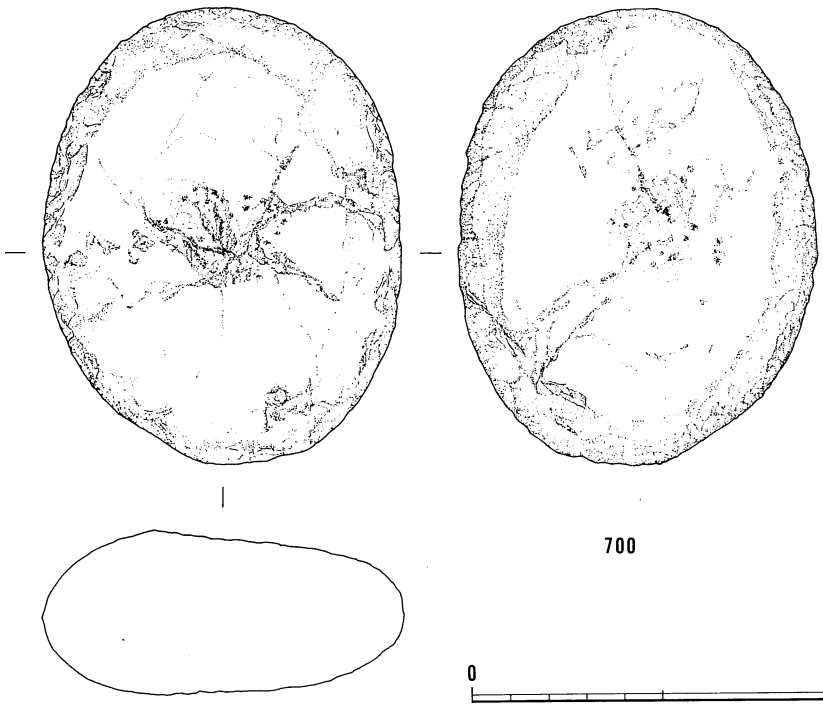
第217図　ＳＴ４、ＳＫ39、ＳＤ７出土遺物



第218図　ＳＫ13・19出土遺物



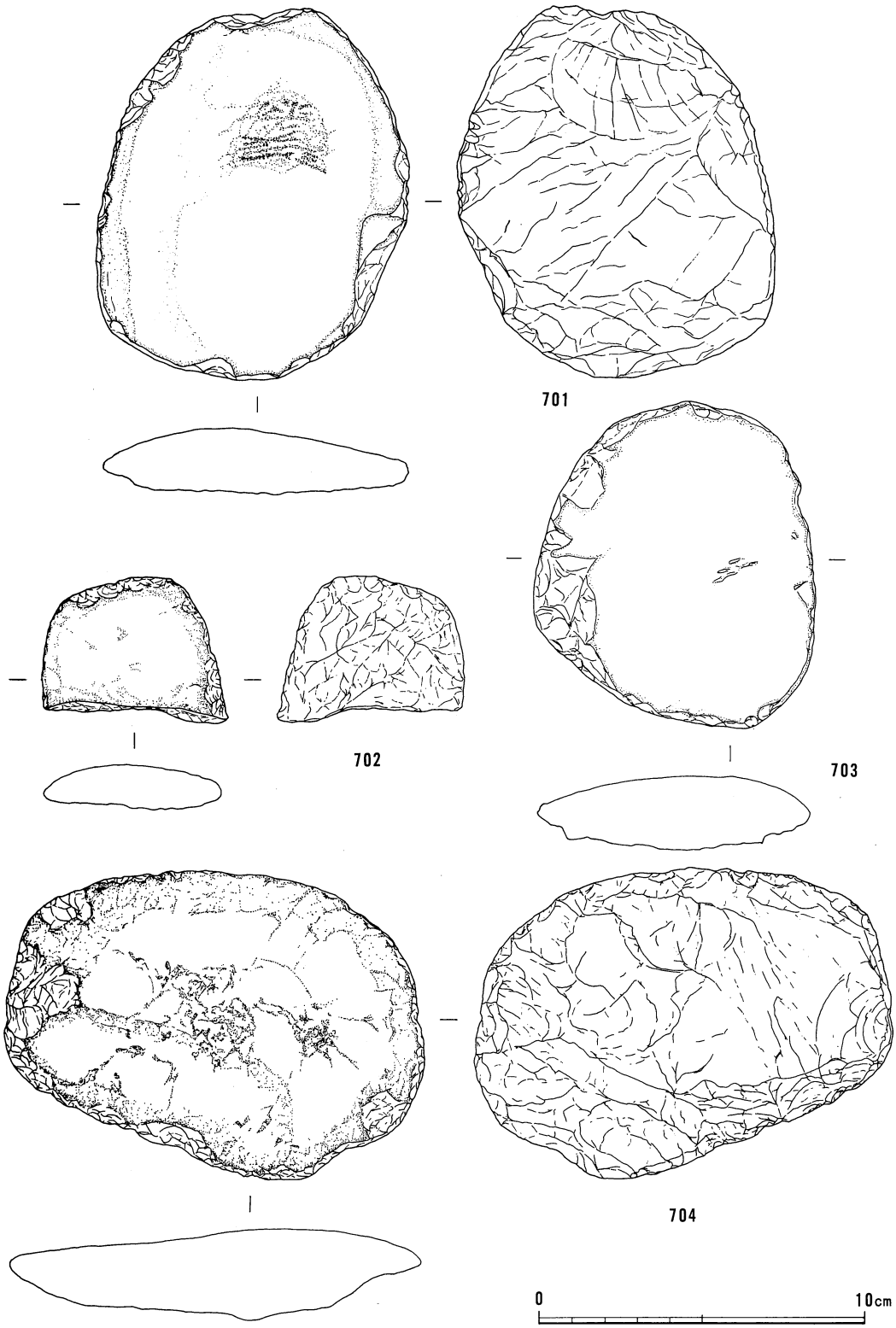
699



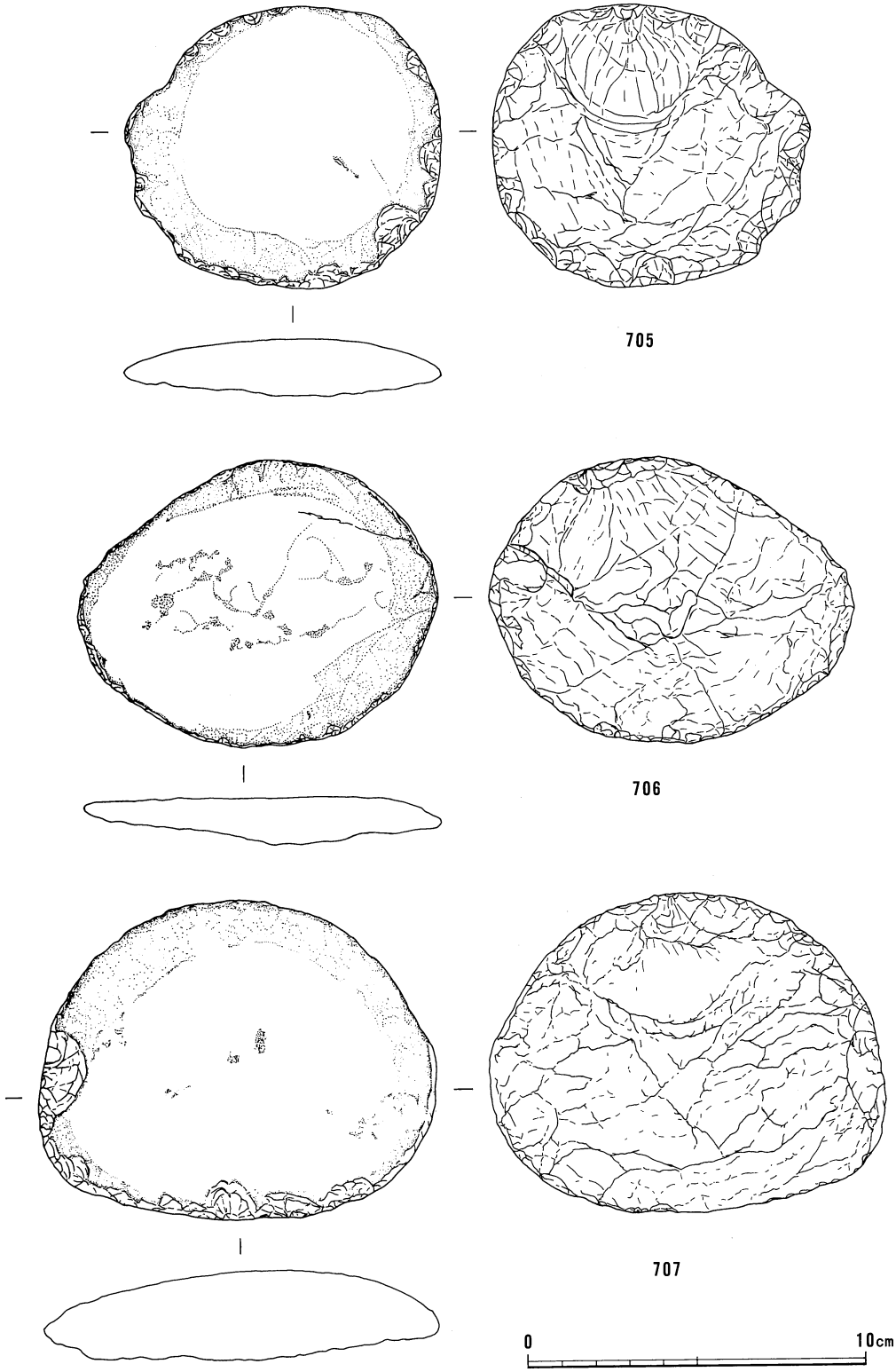
700

0　10cm

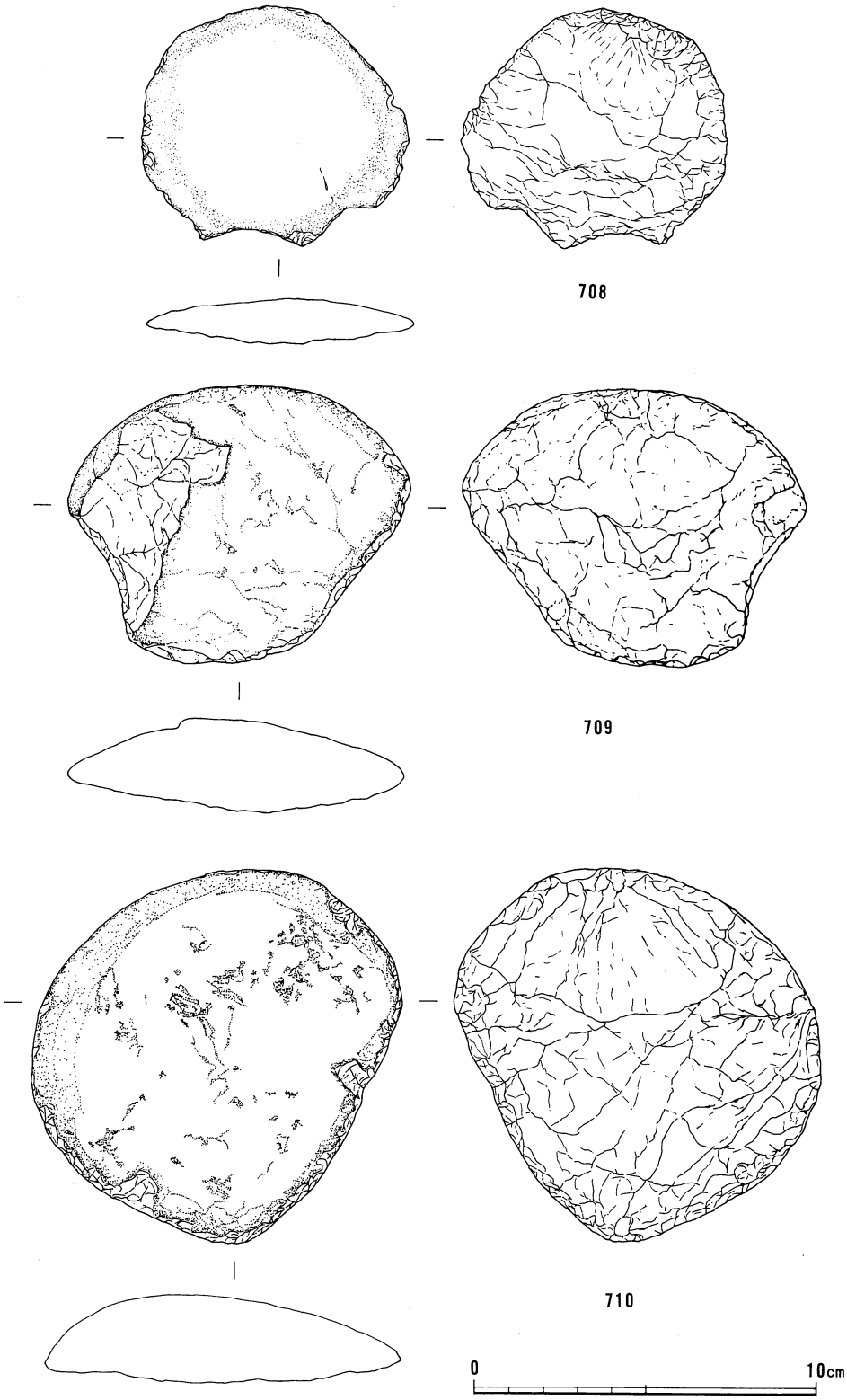
第219図　ＳＫ43、ＳＤ７出土遺物



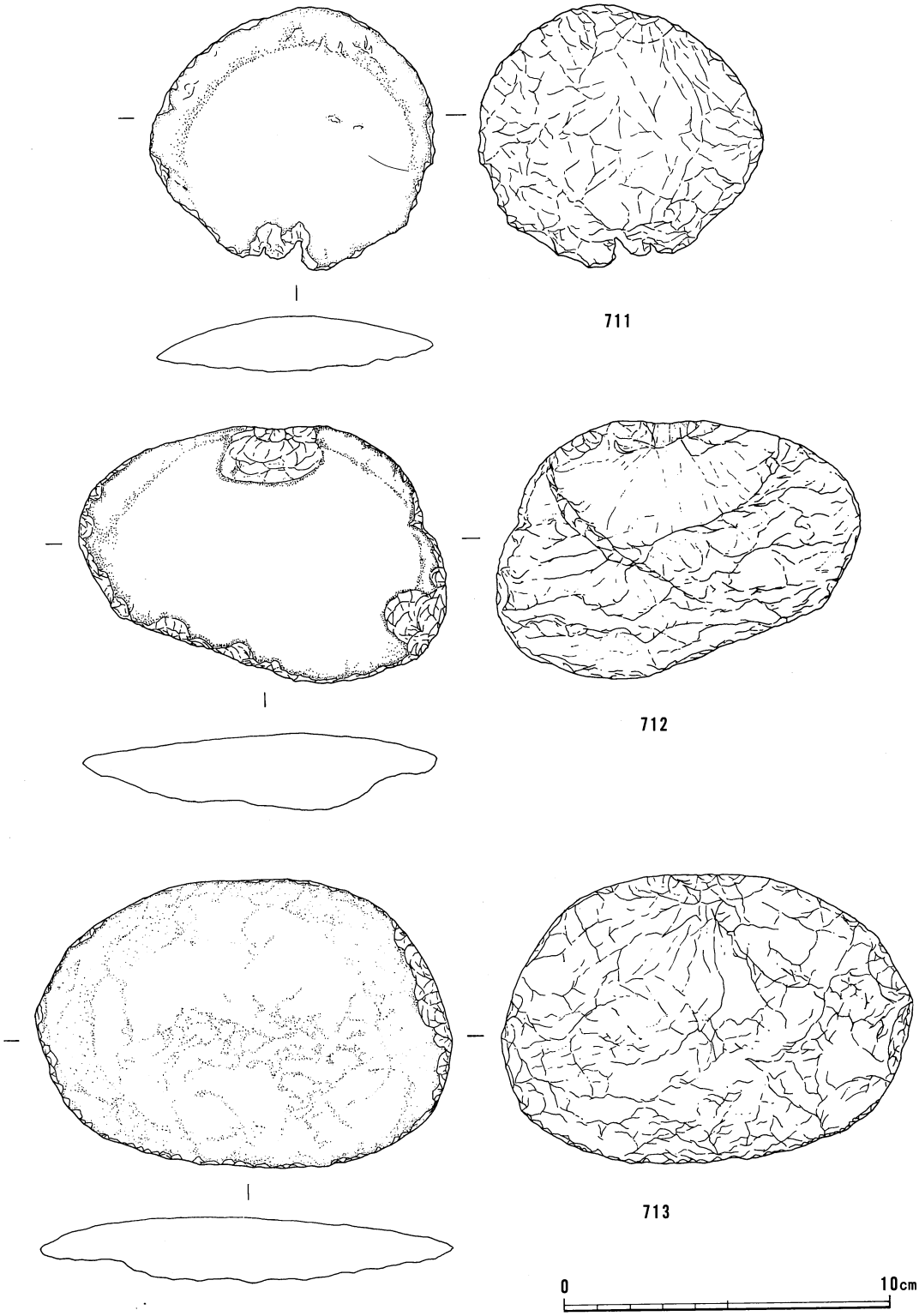
第220図　ＳＴ２・４・６出土遺物



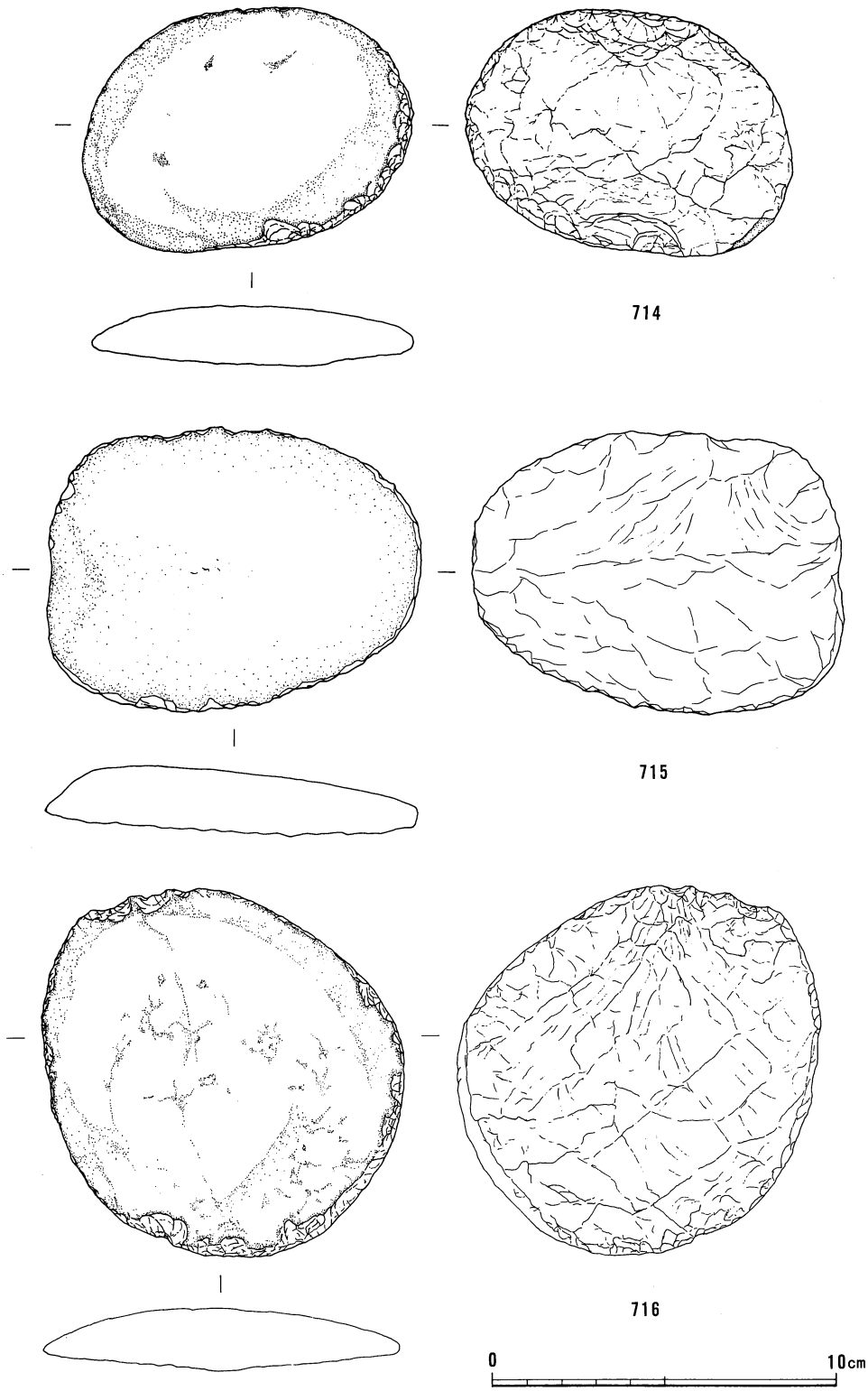
第221図　ＳＴ６出土遺物



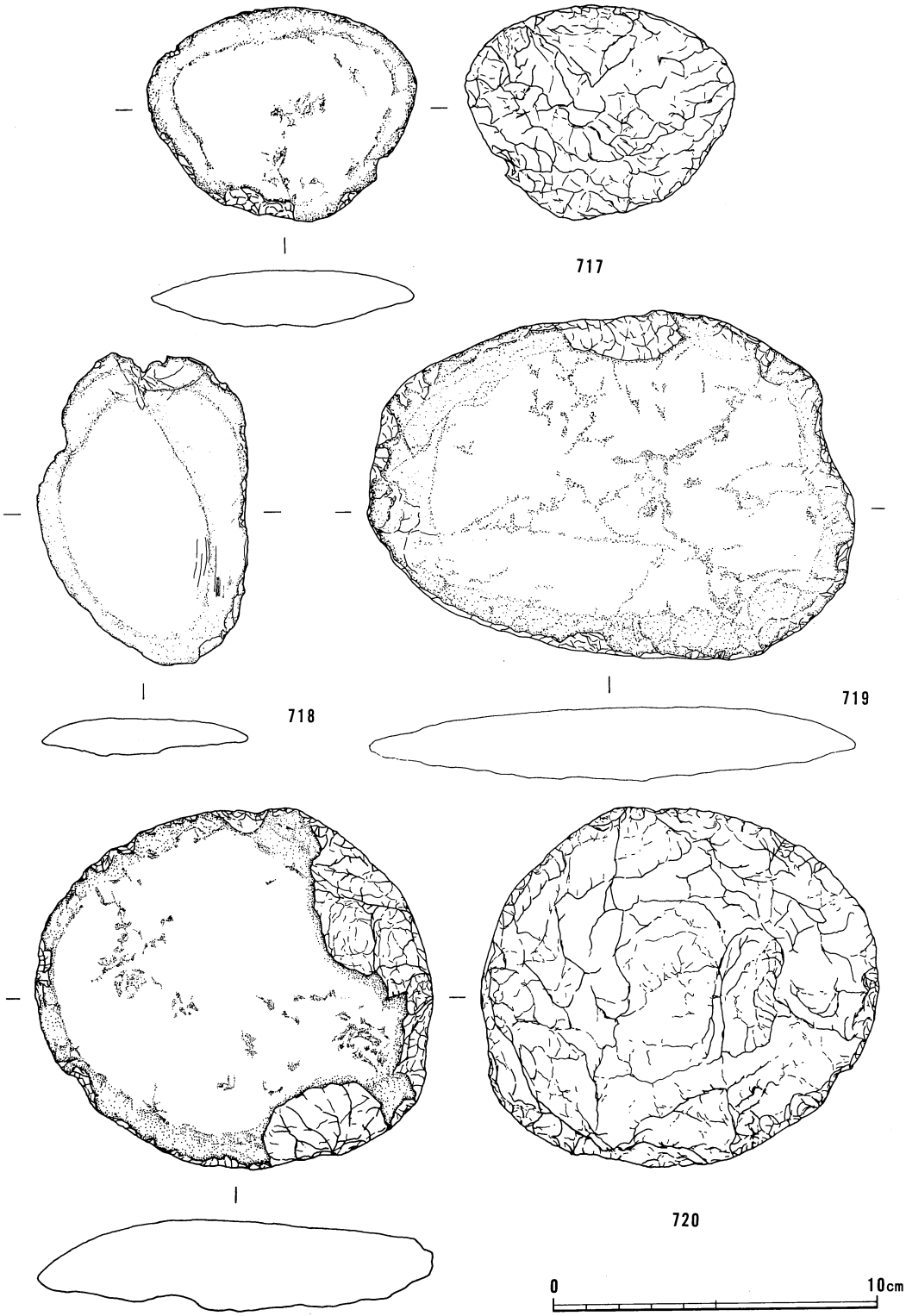
第222図　ＳＴ６出土遺物



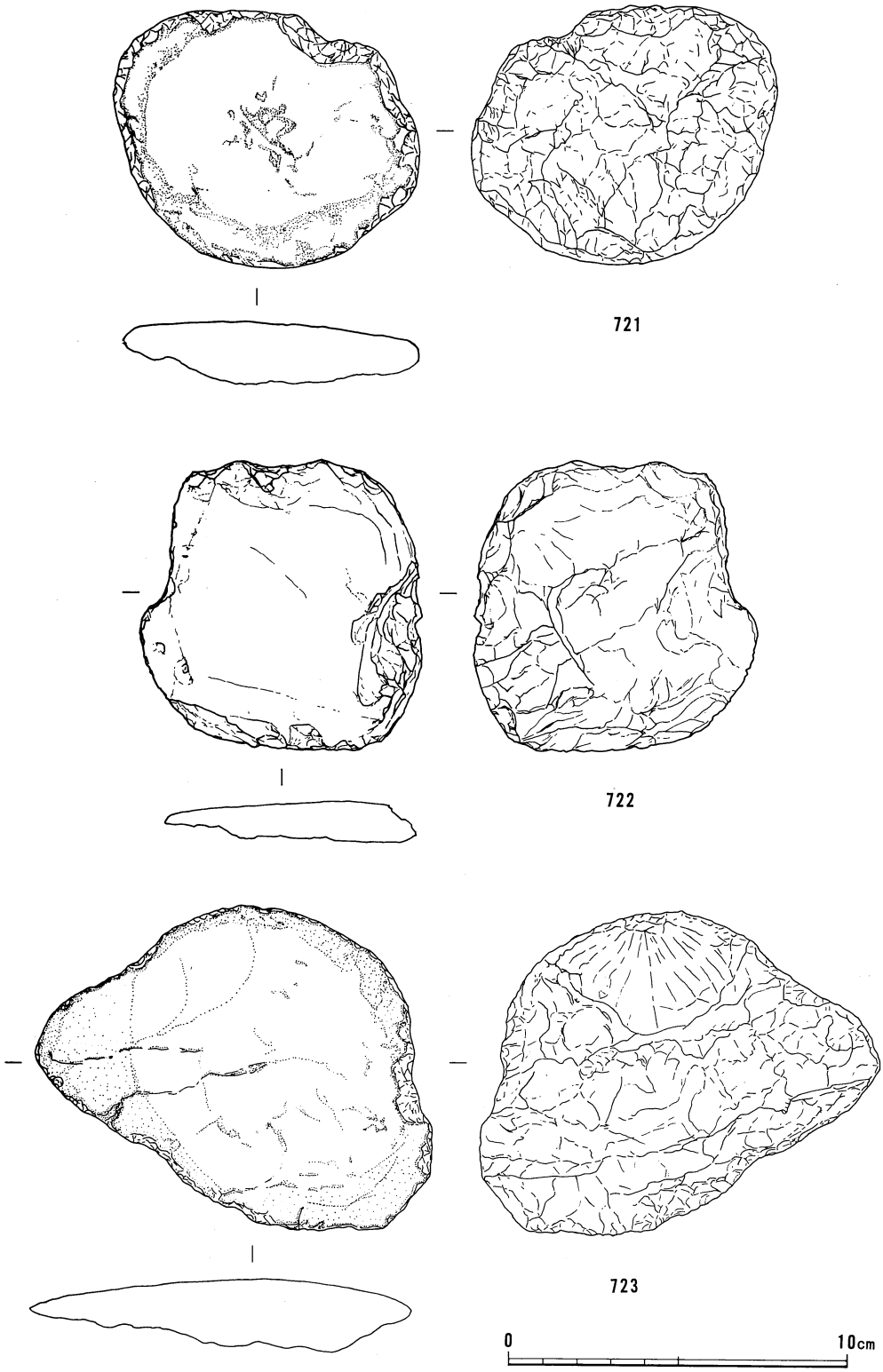
第223図　ＳＴ６出土遺物



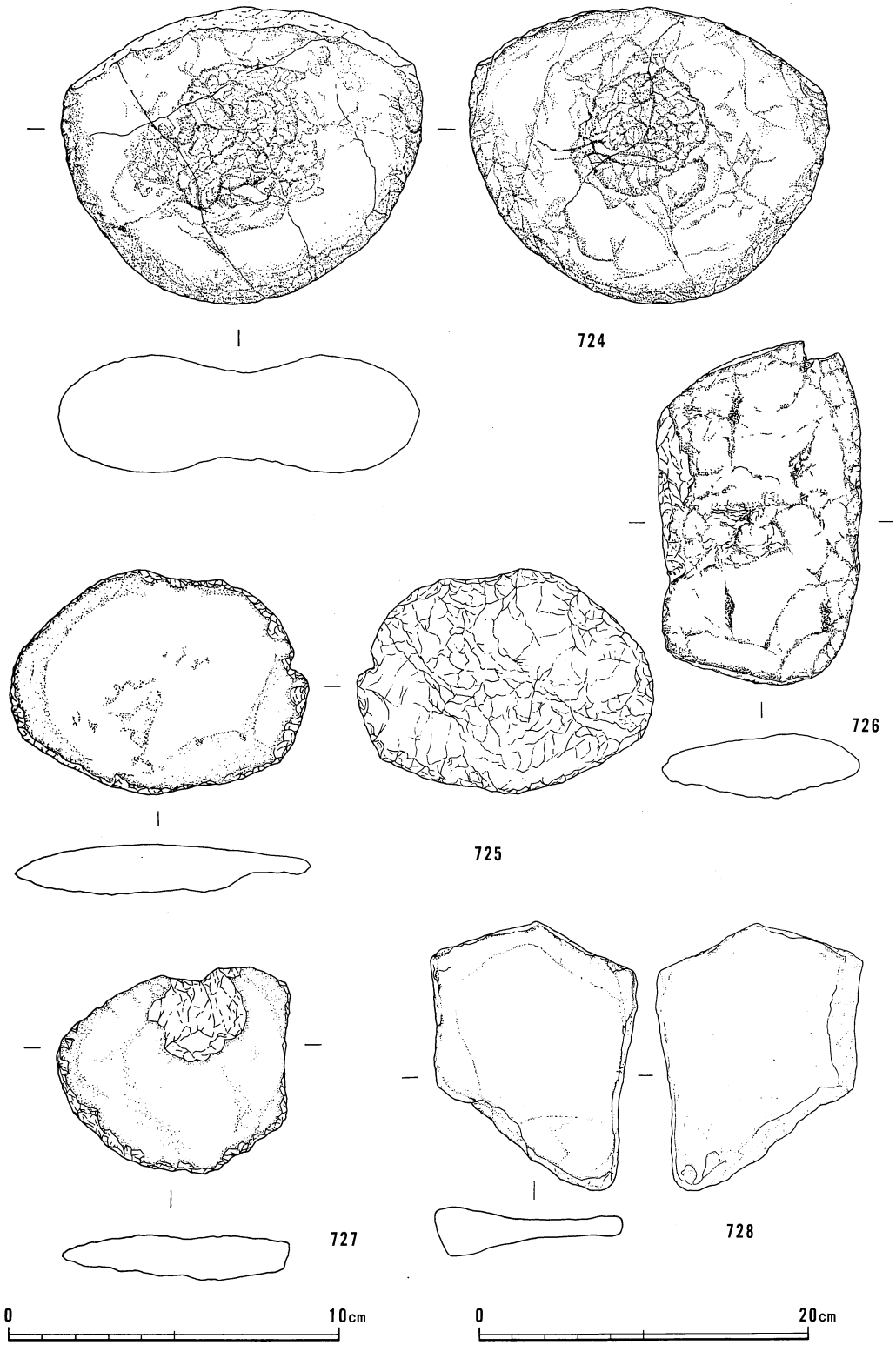
第224図　ＳＴ６出土遺物



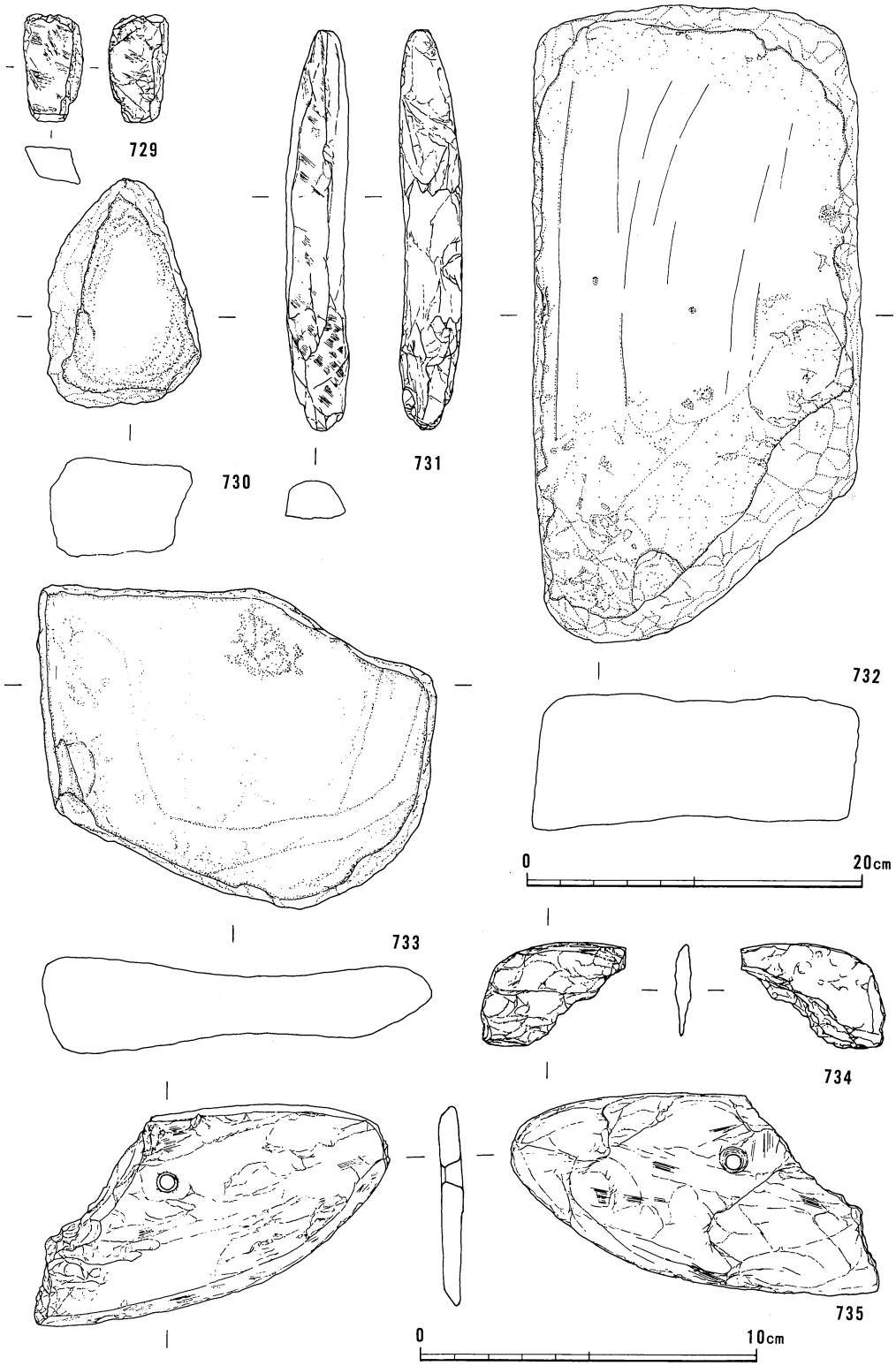
第225図　ＳＫ39、ＳＤ５、Ｐ11出土遺物



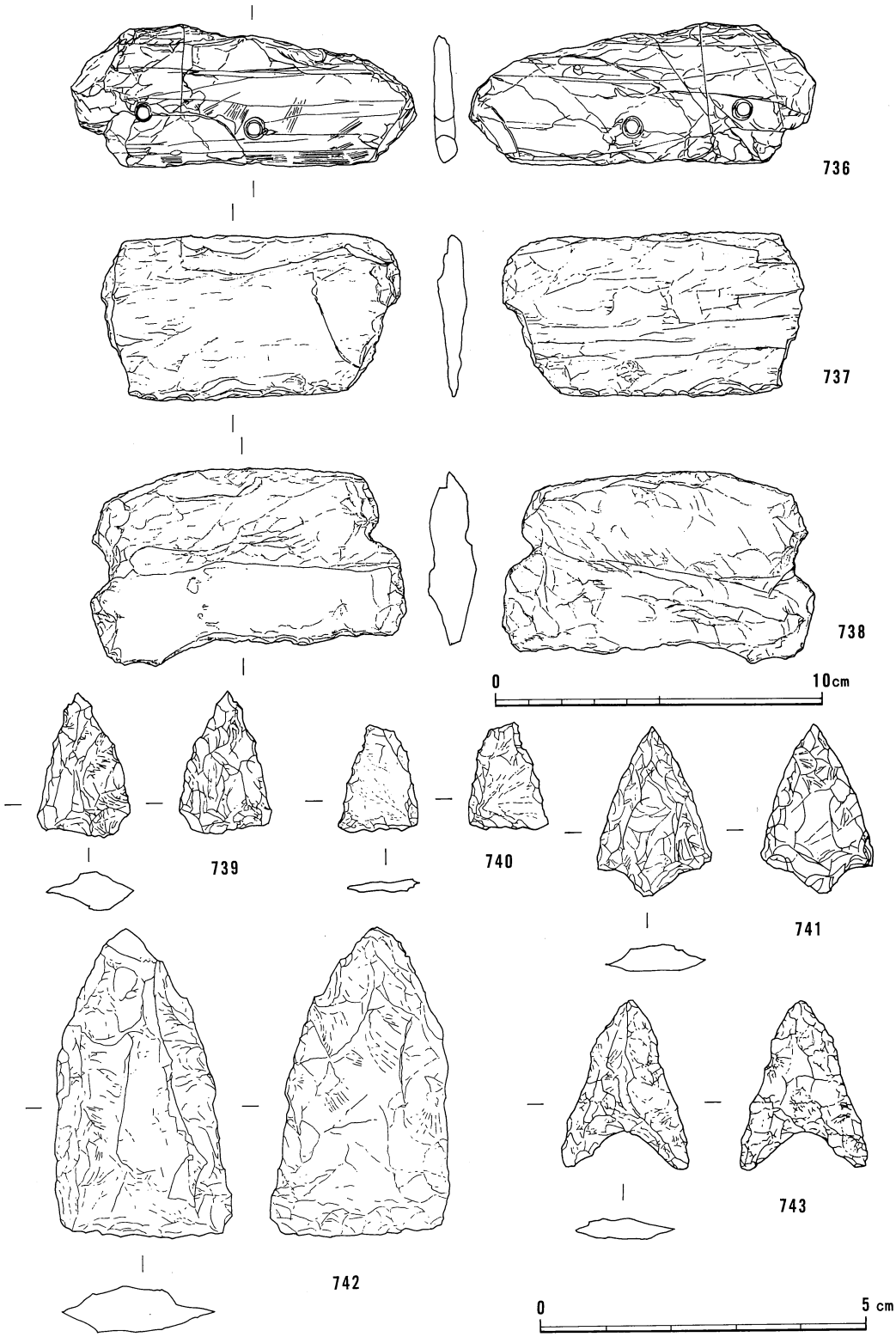
第226図　ＳＫ８・26・39出土遺物



第227図　ＳＴ4･6、ＳＫ13、ＳＤ７出土遺物



第228図　ＳＴ3・4・6、ＳＫ32・39、ＳＤ７出土遺物



第229図　ＳＴ3・4・6、ＳＫ26・41、ＳＤ７出土遺物

6. Loc.23·37

Loc.23・37

1．位置と調査経過

Loc.23・37は、空港拡張範囲の中央部やや北西寄りに位置し、類似した水田址が検出されているLoc.39の南西に隣接している。字名は北側を桑ノ本（Loc.37）、南側を船戸田（Loc.23）と称す。

調査は3次に分けて行われた。まず、第1次は、試掘トレンチによる調査で、この段階で水田址の存在を確認した。なお、発掘区の東隣りでは中～近世の遺構が検出されているが、水田址が検出されたこの発掘区では全く検出されなかった。第2次は、第1次の試掘トレンチの範囲を全面発掘し、さらに水田址の広がりを確認するための試掘トレンチを入れた。第3次は、第2次の試掘トレンチ部分の全面発掘と、Loc.23・37との間にあった道路部分の調査を行った。その際、弥生人の足跡を検出し、また、プラントオパール分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼して実施した。

以上調査した範囲は、全長94m、北半分は幅68m、南半分は幅35mを測る。そして、調査区の全域で水田址を検出することができた。

調査期間は、昭和57年5月から6月の2か月間と同年8月から10月までの3か月間、そして同年11月から昭和58年1月までの3か月間であり、合計、約8か月間であった。最終的な水田址の調査面積は5,810m²であった。

2．調査概要

Loc.23・37では弥生時代前期前半と考えられる水田址244枚を検出した。検出された水田址は、個々の水田面積が小区画のものが大半を占めるものである。これらの水田は、物部川の自然堤防の後背湿地に立地し、微高地縁辺から低湿地に向う緩斜面と低湿地部分とを利用して造成されている。全般に遺存状況が良好で、平面的にも上下2面の水田址が確認された部分もあった。また、第3次で調査した北西部と南西部では弥生人の足跡と共に稲の株痕の可能性も考えられる跡をいくつか検出された。

遺物は全般に少なく、20点あまりが出土しただけであった。これら遺物はすべて水田の埋土中からの出土である。

3．層序と出土遺物

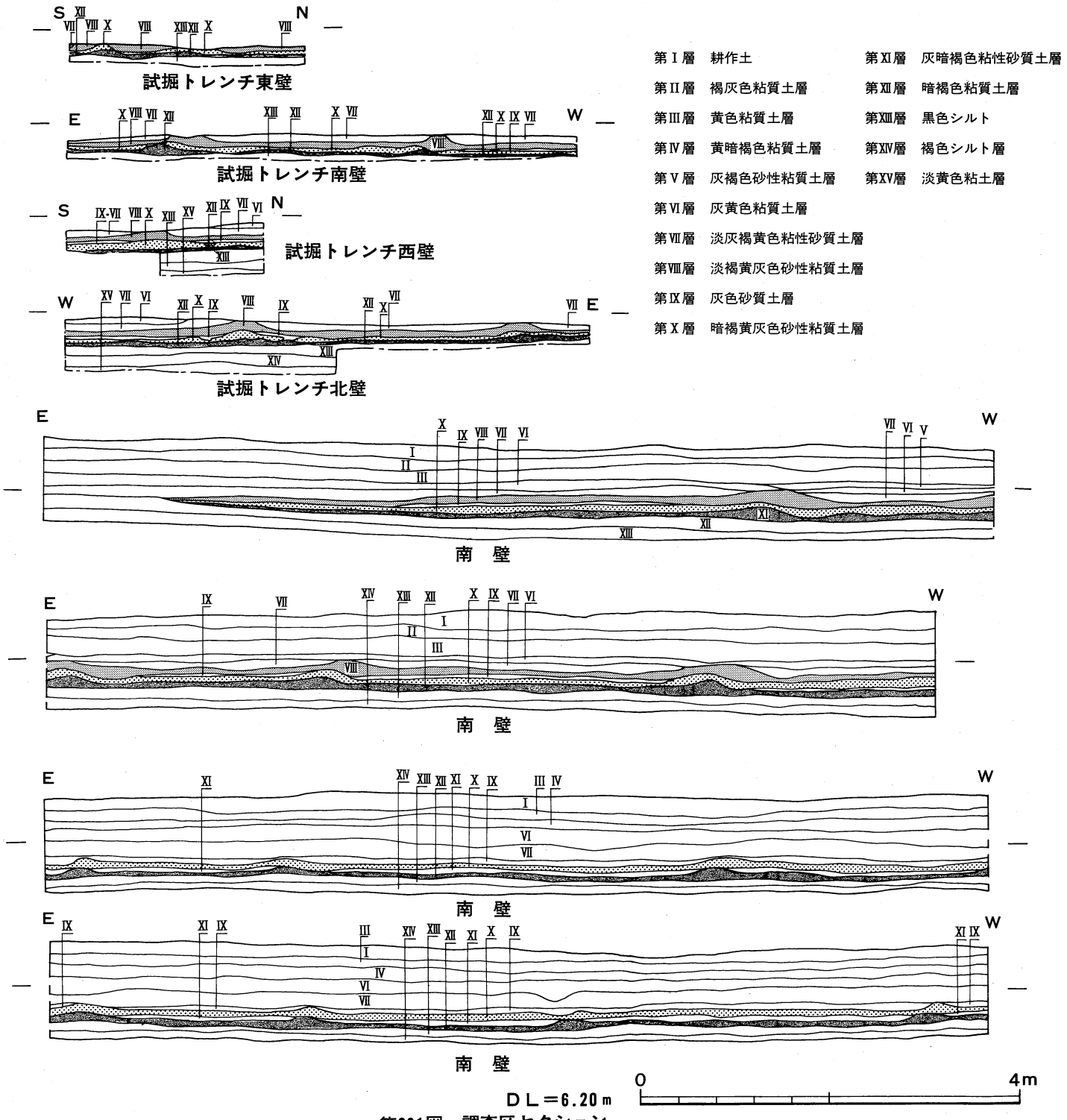
Loc.23・37において認められた基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　褐灰色粘質土層

第Ⅲ層　黄色粘質土層

第230図　調査区設定図



第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　褐灰色粘質土層
第Ⅲ層　黄色粘質土層
第Ⅳ層　黄暗褐色粘質土層
第Ⅴ層　灰褐色砂性粘質土層
第Ⅵ層　灰黄色粘質土層
第Ⅶ層　淡灰褐黄色粘性砂質土層
第Ⅷ層　淡褐黄灰色砂性粘質土層
第Ⅸ層　灰色砂質土層
第Ⅹ層　暗褐黄灰色砂性粘質土層
第Ⅺ層　灰暗褐色粘性砂質土層
第Ⅻ層　暗褐色粘質土層
第XIII層　黒色シルト
第XIV層　褐色シルト層
第XV層　淡黄色粘土層

第231図　調査区セクション

第Ⅳ層　黄暗褐色粘質土層

第Ⅴ層　灰褐色砂性粘質土層

第Ⅵ層　灰黄色粘質土層

第Ⅶ層　淡灰褐黄色粘性砂質土層

第Ⅷ層　淡褐黄灰色砂性粘質土層

第Ⅸ層　灰色砂質土層

第Ⅹ層　暗褐黄灰色砂性粘質土層

第Ⅺ層　灰暗褐色粘性砂質土層

第Ⅻ層　暗褐色粘質土層

第XIII層　黒色シルト層

第XIV層　褐色シルト層

第XV層　淡黄色粘土層

発掘により水田面を検出し得たのは、第Ⅹ層上面と第Ⅻ層上面であった。第Ⅻ層の堆積はほぼ全域で認められたが、第Ⅹ層の堆積は低湿地とその周辺部でしか認められなかった。

第Ⅰ層は現代の水田耕作土である。

第Ⅱ～Ⅳ層も水田の耕作土ではないかとみられるが、平面的には確認できなかったし、時期的にも不明と言わざるを得ない。

第Ⅴ・Ⅳ層は、かなり起伏しており洪水等の流れ込みによる堆積層とみられ、低湿地部分でのみこれが認められた。

第Ⅶ層も、洪水等の流れ込みによる堆積層と考えられる。

第Ⅷ層は、水田の耕作土ではないかと考えられるが、平面的には確認できなかった。丁度、第Ⅶ層の堆積により埋没した形となっている。また、この層と第Ⅶ層は南部の低湿地でのみ確認された。なお、プラントオパール分析での船戸田の第Ⅶ層がこの層に対応する。

第Ⅸ層は、第Ⅶ層と同じく下層の水田の埋土となり、洪水等の流れ込みによる堆積層と考えられ、調査区の低湿地部分でのみ認められた。また、堆積が少ないため、この面でも耕作を行っていた可能性はある。

第Ⅹ層は先に記したように水田の耕作土と考えられる層である。足跡はこの面で検出され、第Ⅸ層の土が足跡の埋土となっていた。なお、プラントオパール分析での桑ノ本の第Ⅸ層がこの層に対応する。

第Ⅺ層は、第Ⅶ・Ⅸ層と同じく下層、第Ⅻ層の埋土となっており、洪水等の流れ込みによって堆積した層と考えられる。調査区南部の低湿地のみで認められた。また、堆積が少ないためこの面でも耕作された可能性はある。

第Ⅻ層は、先に記したように水田の耕作土と考えられる層であり、調査区全域で認められた。なお、プラントオパール分析での桑ノ本の第Ⅻ層と船戸田の第Ⅺ層がこの層に対応する。

第XIII～XV層は自然堆積層である。微高地では、上層部から第XIII層と同じ黒色シルト層が検出され、水田址が自然消滅した形となっている。

以上の層序からして、低湿地では多数の堆積層が認められ、水田の耕作土とみられる層もいくつか検出されたが、微高地に行くにしたがってその堆積は少なくなり、水田面は最後には第XII層の水田面一面しか遺存していない状態となっている。これは、削平により第VIII・X層の水田面が遺存していないと考えるより、長い年月の間に水田に適する低湿地が埋って水田に適する範囲が少なくなったため、第XII層の水田面のように広範囲に水田を造成できなかったと考えた方が妥当であるとみられる。

遺物は、第VII層と第XI層から出土しているが、少量であった。それらについては次の項で述べる。

4．遺構と遺物

水田址

Loc.23・37の水田址は、先に記したように物部川の自然堤防上の後背湿地に立地し、低湿地と微高地縁辺から低湿地にかけての緩傾斜面を利用して造成されている。そして、調査区のほぼ全域でこれを検出することができた。

水田面は、低湿地部分を中心に２面、すなわち第XII層の水田面（Ⅰ期水田）と第X層の水田面（II期水田）とを検出した。これらは、セクションでみられたようにほぼ重複しており、Ⅰ期水田がすべて埋没しない間に、II期水田をⅠ期水田の畦畔に合わせて造成したことがうかがえる。そのため、平面的にはほとんど同じ状況を呈しているので、以下の記述はⅠ期水田を中心に述べていきたい。なお、先述したように断面観察によると第VIII層も水田（III期水田）と考えられ、平面的に検出できなかったが、その畦畔がⅠ・II期水田の畦畔とほぼ重複していることからして、ほぼ同じ形状や規模でなかったかと推考される。

まず、水田は、北東から南西方向に向って延びる幹線となる畦畔によって大きく区切られる。その方向はN－36°～38°－Eである。この幹線となる畦畔は、西側では標高差0.5ｍの間に16本、東側では標高差0.4ｍの間に８本それぞれ設けられていて、東西に隣接する水田面の標高差が10cm以上にならないように造成されている。この畦畔間の距離は２～５ｍで、５ｍを過ぎるとほぼ真中に新たな畦畔を造成し、傾斜した地形を十分考慮に入れていることがうかがえる。畦畔の規模は、上幅10～30cm、下幅30～80cm、水田面との比高３～10cmで、断面は台形ないしカマボコ形を呈する。この幹線となる畦畔にほぼ垂直な形で、支線となる畦畔が造成されている。この畦畔間の距離は傾斜の度合により２ｍから広いものは15ｍ以上になっていて、幹線の畦畔同様南北に隣接する水田面の標高差が10cm以上にならないように造成されている。支線となる畦畔の規模は、上幅５～20cm、下幅10～50cm、水田面との比高３～10cmで、断面は台形な

いしカマボコ形を呈する。この支線となる畦畔には水口が部分的に設けられている。

このような畦畔に区切られた水田一枚の形状は、微高地縁辺部で不整形を呈する以外はほとんど正方形ないし長方形を呈し、その面積は、3～80m²で、8～15m²のものが大半を占めている。検出された水田は244枚であった。これら水田の標高は5.90～6.90mで、北端から南端に至る90mの間での標高差は約1.0m、微高地縁辺から低湿地に至る20～30mの間での標高差は0.3～0.5mで、低湿地部分の遺存状況が良好であったのに対し、微高地縁辺では畦畔が自然消滅した部分もあった。

灌漑施設となる水路は確認されなかったが、水口を部分的に検出した。灌水は、微高地縁辺部から水を流すことにより、畦畔越しに各水田面に掛け流したとみられ、畦畔越しの掛け流しの不充分な所には水口が設けられたと考えられる。

弥生人の足跡は、先述したように、第3次の調査の際調査区南西部と北東部で確認した。この部分だけが、足跡の残存条件を備えていたとみられる。その数量は100余であり、遺存状況の非常に良好な図版204の左側上から3番目の足跡は、足跡長約22.5cm、足跡幅約8.8cm、かかと部幅約5cmを測り、高知県警察本部鑑識課によると、成人男子であれば身長150～155.2cm、成人女子であれば身長149.2～155.2cmの間と推定され、ふまず部（土ふまず）はよく発達しているとの結果を得た。これ以外のものは概して不完全な形でのみ遺存しており、また、歩行の痕跡は確認されなかった。これ以外に稲の株あとではないかと考えられるものが、遺存していたが、散在していて規則性を認めることはできなかった。

Loc.23で検出された水田址から出土した遺物は皆無であるが、Loc.37の水田址からは弥生時代から古墳時代の遺物がごく少量出土している。

Ⅰ期水田の畦畔及び水田面を形成すると考えられる第Ⅻ層の暗褐色粘質土層から出土した遺物は皆無である。しかし、Ⅰ期水田の埋土と考えられる第Ⅺ層の灰暗褐色粘性砂質土層からは、大型の壺形土器の口縁部（1）や土製円板（2、3）、磨製石鏃（6）、磨製石包丁（7）の他、10数点の弥生土器片が、出土している。

Ⅰ期水田の埋土から出土した遺物の中でも土製円板（2）と磨製石包丁（7）は、第Ⅺ層の中位付近で出土しているが、大型の壺形土器の口縁部（1）、土製円板(3）、磨製石鏃（6）は、第Ⅺ層の最下層、Ⅰ期水田の水田面直上から出土している。

大型の壺形土器の口縁部（1）は前期Ⅰの壺と考えられるし、土製円板（2、3）や柳葉型の凸基有茎式の磨製石鏃（6）も前期Ⅰの特徴的な遺物である。また、磨製の石包丁（7）も半月型の外湾刃形態であり、やはり弥生時代前期と考えられる遺物である。

以上のようなⅠ期水田の埋土からの遺物の出土状況を考えると、Ⅰ期水田は、前期Ⅰの時期に機能し、その廃絶時期は明確ではないが前期Ⅱ以降と推定される。

Ⅱ期水田の畦畔及び水田面を形成する第Ⅹ層の暗褐黄灰色砂性粘質土層から出土した遺物は、皆無である。しかし、Ⅱ期水田の埋土と考えられる第Ⅸ層の灰色砂質土層からは、丸底を呈し

た小型土器の完形（４）と台付鉢形土器の脚台部（５）が、出土している。

丸底の小型土器（４）や台付鉢形土器の脚台部（５）は、胎土が微細であり、古墳時代前期初頭頃に出現する器形である。

以上のようなII期水田の埋土からの遺物の出土状況を考えると、II期水田は、その機能した時期は不明であるが、古墳時代前期初頭には廃絶していたと考えられる。ただ、その場合Ⅰ期、II期、III期の水田が時期的に断続して水田耕作が行われたかどうかは不明瞭であるが、三期の畦畔がほぼ同じ位置に重複してつくられていることから考えると、その間に何百年もの間隔をおいて造成されたと考えるには無理があるとみられる。また、遺物の出土をみたのはⅠ及びII期水田だけであり、遺物からIII期水田がどの時時のものであるかを具体的に決定することは困難である。

５．まとめ

Loc.23・37では5,810㎡にわたって弥生時代前期前半に位置付けられる水田址が確認された。このような古い段階の水田址の検出は、唐津市菜畑遺跡、福岡市板付遺跡、岡山市津島遺跡に次ぐものである。しかし、それらの水田と異って本遺跡の水田は、水田一枚の規模が小さい極小区画水田であり、青森県垂柳遺跡等にその類例をみるものである。そして、前期前半の水田にもこのような形のものが存することが明確になったのは、注目に値する。

検出された水田址は、傾斜した地形に幹線となる畦畔と支線となる畦畔を標高に応じ設けており、効率的に平坦な水田面を確保したことが看取できる。換言すれば、このような地形でないと、技術、労働力からして、水田経営が行えなかったことを示しているのではなかろうか。また、この田村地区一帯は、物部川の自然堤防上に立地しており、現地表面から１～２ｍ掘り下げれば、砂礫層に達するのが一般であるが、この地点は約３～3.5ｍも掘り下げなければ砂礫層に達しない。そして、約２ｍの粘土層と約0.3ｍの腐植土層の上に水田が造成されている。この土層の状況からして、水田土壌がのる第XIII層は保水性に富んでいたとみられ、小区画の水田を造成する必然性は認められないが、前述の如く地形的に小区画化しなければ水田は造成できなかったと考えられる。そのことは灌水に関連するとみられ、この土層の状況からみて、一度灌水すればしばらく行わなくとも良かったのではなかろうか。また、微高地から灌水すると畦畔越し、あるいは水口を通って標高の低い方へ順次流れていくと考えられる。ただ、他の遺跡でほとんど例外なく確認されている用水路が今回の場合は全く検出されていないのは今後の重要な問題点である。

第30表　Ⅰ期水田址面積一覧表

No.	規模(m)			標高(m)	No.	規模(m)			標高(m)
	長辺	短辺	面積(m²)			長辺	短辺	面積(m²)	
1	(5.7)	1.7	(6.9)	6.715～6.740	39	6.4	4.0	25.6	6.574～6.714
2	(5.7)	1.2	(6.8)	6.702～6.762	40	(7.0)	5.2	(23.6)	6.583～6.624
3	(7.1)	(2.7)	(15.1)	6.660～6.698	41	5.4	2.4	13.0	6.780～6.809
4	2.1	(1.1)	(2.3)	6.782～6.808	42	2.7	2.3	6.2	6.729～6.779
5	4.3	2.2	9.5	6.742～6.788	43	13.5	3.5	27.0	6.529～6.709
6	2.5	2.1	5.3	6.718～6.744	44	6.3	3.0	18.9	6.779～6.834
7	2.0	0.8	1.6	6.729～6.754	45	5.3	3.1	16.4	6.654～6.734
8	3.3	2.5	8.3	6.676～6.732	46	3.4	2.8	9.5	6.623～6.678
9	4.5	(4.4)	(19.8)	6.647～6.740	47	2.8	2.7	7.6	6.574～6.612
10	(4.0)	3.7	(14.8)	6.621～6.689	48	16.2	3.3	47.0	6.504～6.569
11	9.1	(4.4)	(40.0)	6.622～6.694	49	2.3	2.1	4.8	6.674～6.685
12	6.0	1.2	4.8	6.688～6.695	50	4.4	2.1	9.2	6.570～6.598
13	(6.4)	(2.6)	(16.6)	6.672～6.693	51	2.6	2.4	6.2	6.558～6.574
14	4.5	3.6	16.2	6.623～6.687	52	6.5	2.5	16.3	6.570～6.614
15	(9.0)	(4.7)	(24.3)	6.614～6.657	53	11.5	(3.0)	(25.4)	6.475～6.483
16	(5.9)	1.7	(10.0)	6.746～6.804	54	(1.8)	1.5	(1.9)	6.892～6.908
17	(5.3)	1.4	(7.4)	6.784～6.834	55	7.7	2.2	16.9	6.774～6.839
18	3.4	3.1	10.5	6.718～6.792	56	2.7	2.4	6.5	6.728～6.767
19	3.5	2.8	9.8	6.713～6.777	57	2.9	2.0	5.8	6.674～6.722
20	4.5	2.5	11.3	6.703～6.754	58	2.6	2.3	6.0	6.594～6.681
21	4.3	2.6	11.2	6.692～6.786	59	3.3	2.6	8.6	6.563～6.593
22	3.7	2.4	8.9	6.672～6.731	60	18.5	3.1	71.8	6.494～6.554
23	6.8	2.9	19.7	6.685～6.736	61	3.9	3.0	11.7	6.519～6.559
24	(3.5)	3.4	(11.9)	6.788～6.834	62	(11.7)	2.3	(26.9)	6.738～6.753
25	13.5	2.0	10.9	6.781～6.799	63	2.4	2.3	5.5	6.683～6.729
26	(13.5)	2.0	(64.6)	6.700～6.789	64	4.1	1.8	7.4	6.654～6.705
27	(6.7)	3.4	(16.7)	6.696～6.786	65	3.2	2.2	7.0	6.593～6.639
28	18.5	2.6	47.6	6.724～6.791	66	2.7	2.4	6.5	6.559～6.591
29	9.7	3.4	33.0	6.696～6.772	67	3.0	2.3	6.9	6.517～6.564
30	4.0	3.0	16.6	6.647～6.707	68	14.0	3.3	46.2	6.454～6.533
31	4.6	3.8	17.5	6.614～6.701	69	3.4	3.3	11.2	6.479～6.532
32	(3.0)	2.3	(6.9)	6.617～6.677	70	5.8	5.5	31.4	6.432～6.544
33	2.6	(1.0)	(2.6)	6.826～6.846	71	1.9	1.0	1.9	6.392～6.490
34	2.5	2.3	5.8	6.739～6.797	72	1.4	1.2	1.7	6.445～6.468
35	29.2	3.0	58.2	6.626～6.750	73	1.6	1.4	2.2	6.453～6.498
36	2.5	2.4	3.0	6.669～6.712	74	6.2	2.0	12.4	6.413～6.498
37	5.4	2.5	13.5	6.694～6.754	75	3.5	(1.0)	(1.8)	6.475～6.491
38	29.3	4.0	69.7	6.578～6.722	76	2.4	1.2	2.9	6.093～6.178